黙阿弥全集

第五巻

黙阿弥全集

第五巻

(落合芳幾筆)

引幕を地模様とせる錦繪（落合芳幾筆）

髪結藤次（市川小團次）　おきん（尾上菊五郎）　竹門の虎（市村家橘）　幸次郎（澤村訥升）

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集　第五卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第五卷目次

挿繪目次

「鴨立澤雪の對面」は文久三年二月、四十八歳の時市村座に書卸したもので、その時の一番目狂言たる「蝶千鳥須磨組討」（一谷嫩軍記）の大詰として附加されたものであつた。大名題の中から大詰即ちこの對面のみに關する「語り」の部分を次に抄出しておく。

扨大詰は名にしおふ工藤左衞門祐經が狩場奉行に暇なく二所權現へ參詣に梛の葉御前が代參に路次の警護は宇佐美久須美なまめく女中の旅出立ちよそほひ飾る玉くしげ箱根の雪に會稽の積る恨みの兄弟がめぐり近江に八幡竹目釘しめして立ちかゝるを時節を待てと朝比奈が富士になぞらふ扇なば時にとつての杯替りハテめづらしい對面の榮え。

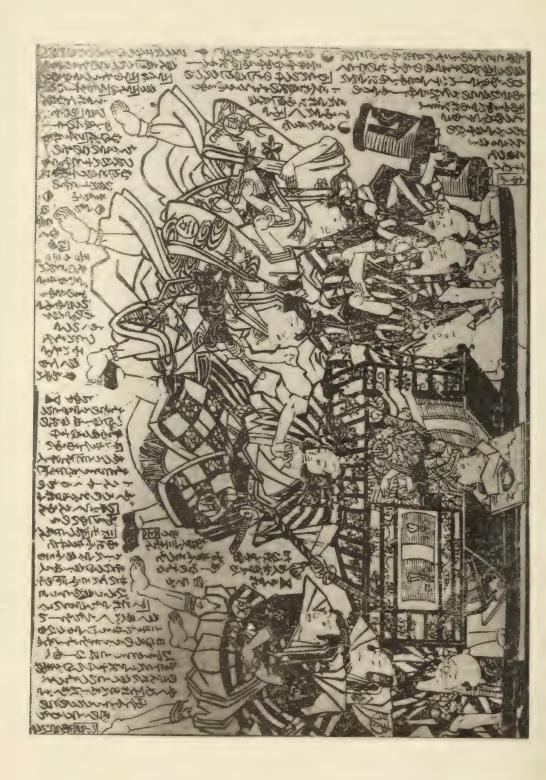
この對面が雪中であつて、饅頭笠の行列といふのが、櫻田門外の變をきかしたもので、時人の喝采を博したと傳へられてゐる。この對面を次の髪結藤次が夢に見る趣向となつてゐるから、「髪結藤次」の前へ置いたわけである。

書卸しの時の役割は市川小團次（小林の朝比奈）、尾上菊次郎（工藤の奥方梛の葉）、坂東三津五郎（工藤の腰元宇佐美）、中村歌女之丞（同久須美）、市川團藏（近江ノ小藤太成家）、市村家橘（箱王丸）、澤村訥升（一萬丸）、市川九藏（八幡ノ三郎行氏）等であつた。

挿繪にしたのは上演當時に出來た草双紙の挿畫で、扉に用ひた文字は書卸し當時に使用した正本（縦本、臺本）の表紙である。

大正十三年十一月

編者誌す

鴫立澤雪の對面（壹幕）

鴫立澤の場

〔役名――小林の朝比奈、曾我の箱王、一万、近江の小藤太成家、八幡の三郎行氏。工藤の奥方梛の葉、腰元宇佐美、久須美、其他。〕

（大磯入口の場）――本舞臺一面の淺黄幕。上下雪の積りし松並木、上の方に靑竹にて埒を結ひこの中に工藤左衞門祐經室旅館といふ札を靑竹に附け立てあり。舞臺花道共一面に雪布を敷き、總て東海道大磯入口の體。こゝに四人の奴紺看板ねぢ切り、柿の脚袢一本差し赤合羽を敷き供待をしてゐる。燗酒屋荷をおろし、酒を賣つてゐる。この見得馬士唄にて幕明く。

奴一　おい〳〵、田樂でもう一ぺいくんねえ。

燗酒　はい〳〵畏まりました、辛いのにいたしませうか。

奴一　おゝ、辛い方がいゝな。

奴二　お前の酒はめつぽうにいゝが、こりやあ地酒ぢやアあるめえの。

燗酒　私も好きでござりますから、灘酒ばかり使ひます、(ト田樂を盆へ載せて出す。)
奴二　道理で實があると思つた。
奴三　おい、田樂の外に何ぞねえか。
燗酒　はい、下馬煮の人參と牛蒡がござります。
奴三　そいつあ妙だ、二三本くんねえ。
燗酒　はい〳〵、畏まりました。
ト此の中燗酒屋盆へ人參、牛蒡を載せ出す、奴の四喰つて、
奴四　こいつあうめえ〳〵、下馬にこんな旨えのはねえ。
燗酒　元私も芝居町で海苔飯を賣りましたから、天光ばかりぢやござりませぬ、味淋で煮ますから違ひます。
奴四　こりやあ魚川岸の辨松はだしで、かう旨く喰へれば安いものだ。
燗酒　そりやあさうとお前樣方は、どなた樣の御家來でござります。
奴一　おら達は忝なくも、當時鎌倉の一﨟職工藤左衛門祐經樣の御家來だ。
燗酒　へゝえ、それぢやあ工藤樣がお國元へでもいらつしやるのでござりますか。

奴二　なに、年々御家の御家例で武運長久祈りの爲めに、箱根權現へ御參詣、
奴三　ところが今年は狩座の御用が多くて、奥方の椰の葉樣が御代參、
奴四　鎌倉から僅な道も女中ばかりに二夜泊り、箱根山まで三日路だ。
燗酒　それはお樂でござりますな。
奴一　樂だと思へば去年から降らねえ雪が一度に降り、
奴二　酒でも飲んで凌がにやあ、箱根おろしで堪りやあしねえ。
奴三　天道人を殺さずと言ふが、今日の天氣は中間殺しだ。
燗酒　(また德利を持つて出て) もし、お燗がようござりますが、もう一ぱいどうでござります。
奴四　もう〳〵いけねえ〳〵、この上飲むと足が利かねえ。
奴一　その足よりやあ御勘定のお錢がちつとむづかしい。
燗酒　なに、御勘定が不足なら、お歸りでもようござりまする。
奴二　歸りでよけりやあもう一ぺい、熱いところを飲んで行かう。
奴三　遠慮は無沙汰だ、こゝへも一ぺい。
奴四　えゝ、まんがちな、靜にしろえ。

ト皆々酒を飲む。ばた〳〵になり、下手より赤合羽を着たる中間○出で來り、

○　おい〳〵皆々こゝにゐたか、もう本陣へお先觸に近江樣と八幡樣が今お着きなされました。

奴一　そいつあ大變、かうしちやあゐられねえ。

奴二　また小頭が小言だらう。

奴三　さあ〳〵、早く行かう〳〵。

奴四　それぢやあおでんや、勘定は歸りだよ。

燗酒　よろしうござりまする。

○　いや、惡い顏だな。

四人　さあ〳〵、行かう〳〵。

ト皆々下手へ入る、跡へ赤合羽饅頭笠殘る。

燗酒　いや、下司ほどさがないものはない、僅一升振舞つたので何もかもしやべつて行つた。それに附けても奥方の梛の葉御前が參詣といふのは、もしや世を憚り用心深い祐經が忍んでゐるかも測られず、何にもせよ赤合羽に饅頭笠を中間が忘れて行つたは天の與へ、お二人樣へ、おゝさうだ。

ト赤合羽を取上げる、と以前の○の中間窺ひ寄つて、

○　怪しい商人、

ト組附くを振解き、うんと當て、合羽を抱へ荷を擔ぎ、

燗酒おでんかんざけ、（ト足にて中間を返し。）あんばいよし、

ト馬士唄にて足早に上手へ入る、これにて後の淺黃幕を切つて落す。

（鴫立澤の場）――本舞臺一面に雪の積りし土手、正面に鴫立澤西行庵、畫心に大磯の海を見たる遠見、上下振よき松並木、上手に鴫立澤といふ石の傍示杭、上下後へ下げて庵に木瓜の紋附きし紫の幕を張り、舞臺花道とも雪布を敷き、總て大磯鴫立澤雪降りの體。雪おろしにてよろしく道具納る。

ト花道の揚幕にてハイホウと聲して、行列の鳴物になり、花道より羽織、袴、股立にて赤合羽、菅の饅頭笠を冠り、庵に木瓜の紋附にて雨覆せし挾箱を擔ぎ、この後より絹羽織、袴、股立菅の一文字の笠、赤合羽の侍四人二行に列び、同じ裝の長刀持、續いて庵に木瓜の紋附の雨覆せし鋲打の乘物、これを紺看板赤合羽菅の饅頭笠を冠りし陸尺四人にて舁き、この次に腰元宇佐美、久須美振袖端折り塗下駄、蛇の目の傘をさし、次に腰元六人、續いて奧女中六人、何れも模樣物の裝、塗下駄蛇の目の傘をさし出で來る。此の後より十德裝の醫者、赤合羽饅頭笠の茶瓶擔ぎ、次に紺看板柿の脚袢、赤合羽饅頭笠の中間多勢、羽織、袴、股立菅の饅頭笠赤合羽の押へ二人、皆々順よく本舞臺へ來り、乘物を土手の上へ上げる。

宇佐　お乗物立ちませい。

陸尺　はあゝ。

　ト中央へ乗物をなほし、上手に宇佐美續いて奥女中六人、下手に久須美腰元六人居列び、行列の人數前後に並よく居列び、三味線の音樂になり、

宇佐　此度奥方梛の葉樣、二所權現へ御代參にお供頭と言はるゝも身に恥しきこの宇佐美、私ばかりか皆さんも、箱根といへど双六で見るより外は知らぬ同志、

久須　とりわけ私は初旅に、西も東も白妙の雪間に開く梅澤や、ほうほけけふのお目見得を、願ひに願ふ藪鶯、

女一　御殿と違ひ旅の空、四方の眺めも大磯に見る物ごとに珍らしく、

女二　幾驛路を小ゆるぎの急げど道のはかどらで、

女三　後におくれて一群に急ぐ小磯のむら千鳥、

女四　雪に風情も眞柴焚く、曉が庵の宿ヶ原、

女五　鴫立澤の名ところを尋ねてきつゝ旅衣、

女六　替る模樣の遠山も、皆白々と化粧坂、

腰一　高麗諸越ヶ原かけて、常磐の色の松並木、
腰二　文字に書いても荒々しい、馬といふ字の馬入川。
腰三　首尾も四つ谷に藤澤の藤に絡みし蔓一筋、
腰四　願事かなふ道中にかけし祈誓の妙見山、
腰五　ふつさりとした山影に、下を流るゝ花水橋。
腰六　雨降の山や白妙の富士の高嶺の雪景色、
腰一　その雪打のお慰みも、面白妙の一趣向。
腰二　一打うたうぢや、
六人　ござりませぬか。
宇佐　これはしたり、奥樣の御前をも憚らず。
久須　殊にあられもないことを、ちとお嗜みなされませ。
六人　はあゝ。

ト鳴物になり、上手より近江の小藤太吉例の上下、八幡三郎同じく上下大小の打扮にて出來り。

近江　雪中の御旅行に、未だ御途中と思ひのほか、梛の葉樣にはお早いお着、

八幡　宇佐美久須美御兩所にも、路次の警護御苦勞千萬、
宇佐　これは〳〵有難いそのお言葉、奥お表と替れども、役目は同じ成家樣、
久須　行氏樣にもお先のお供、御苦勞樣に存じます。
近江　して奥方には雪中のお障りとてもあらずして、
八幡　御機嫌よろしういらせらるゝか。
宇佐　思ひまうけぬこの雪に、野山も埋む銀世界、
久須　まさる眺めに殊の外御機嫌よろしう、
兩人　ゐらせられます。
近江　それは何より重疊々々、今鎌倉の一老職お覺え目出度き工藤家に、肩を並ぶるものもなく、從ひなびく大小名、
八幡　かく雪中の御旅行にも、道の警護路次の掃除、諸侯にまさる欵待は、偏に君の御仁德、
近江　誰一人我君を恨むべきものなきに、聞けば河津の祐康が遺兒の二人の兄弟、親の敵と狙ふ由、
八幡　及ばぬことゝは存ずれど燒鳥にへを、油斷はならぬ。心を附けて守護召され。
皆々　畏まつてござりまする。

近江　誰そあるか、床几持て、

トこの時奥にて、箱王、一万の聲にて『はあゝ』と返事し、ばた〳〵になり、箱王紅葉に鹿の振袖にて、赤合羽にて姿を隠し竹笠にて面を覆ひ、床几を持ちつか〳〵と出來る。後より一万垣に朝顔の振袖、同じく赤合羽、竹笠にて姿を隠し出來る、箱王立ちかゝるを一万突廻し、きつと留める。

近江　やあ、赤合羽に饅頭笠、御同勢の扮装ながら、

八幡　見れば怪しき二人の者、

宇佐　まさしく曲者、何れもには、

久須　お乗物を守護召れ。

皆々　心得ました。

近江　それ、搦めとれ。

四人　はつ。

トばた〳〵になり、奴四人つか〳〵と出て兩人にかゝると、ちよつと立廻つて赤合羽脱れ、竹笠を投げ捨て四人を一時に轉しきつとなつて、

箱王　親の敵、祐經觀念、

一万　これ、必ず急くな、早まるまいぞ。

　ト一万箱王を留める、近江、八幡きつとなる。

近江　扨こそ怪しき二人の童が、心得難き敵呼ばゝり、

八幡　誰が手引にて御同勢に隠れ忍んでをつたるぞ。

　ト此の時奥にて、小林の朝比奈の聲にて、

朝比　その手引はおれがした。

近江　やゝ、又もや曲者、

八幡　それ、者ども、

　ト四人の奴つか／＼と赤合羽の同勢の中へ行くを投げのけ、下手より朝比奈吉例の打扮にて同じく赤合羽饅頭笠にて面を隠し出て、奴のかゝるを投げのけ、赤合羽、笠を投げ捨て前へ出る。

近江　やゝ、誰かと思へば、

兩人　そこ許は、

朝比　和田が三男、小林の朝比奈だ。

宇佐　すりや、小林どのがそれなる若者、

久須　二人の手引をなされしとか。

朝比　いかにも、二人の若者が祐經どのに逢ひたいと、此の朝比奈をせがむ故、心ゆかしに同勢へ隠してこゝへ連れて來た。

近江　して、又それなる、

八幡　二人の童は、

朝比　河津の三郎祐康が夜食のかたまり、一万箱王、今では曾我の祐信が養子となりし二人の兄弟、

近江　豫て主人が敵と狙ふ、

八幡　曾我兄弟でありしよな。

ト箱王むッと息込むを一万これと留める。

腰一　何と皆さん見やしやんせ、朝比奈様の手引きせし。

腰二　身にも應ぜぬ振袖に、若衆姿の二人連れ、

腰三　お寺小姓のしくじりか、

腰四　但しは一家一門の、

腰五　手の内を乞ふお笑ひ草。

腰六　見るから形も曾我々々と、
腰一　雪に寒いか胴ぶるひ、笑止なことぢや。
六人　ないかいな、ほゝゝゝ。
女一　あ、これはしたり眞鶴どの、朝比奈樣の手前といひ、
女二　よしない人を譏なすは、私等ばかりか御家の耻。
女三　いかに吉例なればとて、
女四　女子だてらにづかづかと、
女五　憎まれ口はいらぬこと、
女六　烏が灸をするゐるぞえ。
女一　二人の衆よりお前方が、ほんに笑止で。
六人　ござんすわいな、ほゝゝゝ。
宇佐　あこれ皆さん、どうしたものぢや。奥樣の御前といひ。
久須　だいじの場所にいらぬ爭ひ、口出しせずとお控へなさんせ。
皆々　はあ。（トぢつとをさまる。）

箱王　椰の葉御前といふは僞り、駕籠の中にはまさしく祐經、

一万　卑怯未練に隱れずとも、名乘りあはして、

兩人　勝負なせ。

八幡　敵呼ばゝりいたさうより、元は一家の端なれば、

近江　やあ、尾籠なる童め、當時出頭第一の勢ひするどき祐經樣、女と僞り參詣なさうか。

近江　やせ我慢を張らずとも、三日每にお見舞ひ申し、お臺所にへちまはゞ、鹽鰹の頭ぐらゐはくれてもやらあ。立寄らば大樹の陰、長いものには巻かれろだわ。

八幡　それとも逹つてぎしやばれば、

近江　お側には近江の小藤太。

八幡　八幡の三郎附添ひをれば、

近江　どつこい、

八幡　そつこい、

兩人　やりあしねえ。

ト兩人きつとなる、箱王立ちかゝるを一万、朝比奈留める。此の時乘物の內にて椰の葉、

なぎ　兩人控へい。
兩人　はつ。（ト近江、八幡の兩人控へる。）
一万　箱王　や、あの聲は、
宇佐　工藤の奥方、
久須　梛の葉御前。
兩人　なんと、
なぎ　宇佐美、久須美、乘物明けい。
兩人　畏まりました、
　　ト對面三重になり乘物の戸を明ける。内より梛の葉御前袿衣裳にて出る、箱王又立ちかゝるを留める。侍床几をなほし、梛の葉これへかける、三重いつぱいにどつこいと留める。
箱王　やゝ、こりや祐經と思ひのほか、
一万　梛の葉御前で、
兩人　ありしよなあ。
なぎ　此度我夫祐經殿、富士の御狩の惣奉行、重きお役目蒙りて勤仕に暇なく、それ故に不束ながら

梛の葉が武運長久祈りの爲め、二所權現へ代參に宇佐美久須美を始めとして、從ふものは上﨟ばかり、近江八幡を力と頼み工藤替りのこの役目。

箱王　それとは知らず奧方の參詣なりと僞つて、まことは敵祐經が忍びの旅行と思ひし故、日頃の恨みを晴らさうと、待ちまうけたる甲斐もなく、思へば〳〵口をしい。

一萬　あこれ、立ち騷いで尾籠な弟、急いてはまことに大事の身、祐經ならぬ上からは、たゞ何事も兄に任して、

箱王　でも、

一萬　ぢつと辛抱しやいの。

箱王　いやだ〳〵、堪忍袋の緒が切れた。

ト又立ちかゝるを朝比奈留めて腰を抱へ、

朝比　やれ待て兄い、早まるな。祐經殿と思ひのほか梛の葉どのであるからは、高が女だ相手にやならねえ、汝達より此鬚が油くさへ女は嫌ひだ、惡いことは言はねえから、うんと言つて留つてくれ。一番留つてくんさるなら、有難茄子の初夢だあもさ。

ト朝比奈箱王をぢつと留める、梛の葉兩人を見て、

なぎ　近江八幡あれを見よ、朝比奈どのが手引きせし二人の者の面相は、はて誰やらに似てゞはないか。
近江　梛の葉樣の仰せの如く、親子とて爭はれぬ面相形容、聲音まで。あゝ似たわ〳〵。
朝比　似たとは誰に似ましたな。
近江　元は一家の端なりし河津の三郎祐康に、生寫しなる二人が面相、親はなくとも子は育つとは、はてよく言つたものだなあ。
八幡　いかさま二人の兄弟も、まだその時は五つか三つ、
一萬　空に月日は過せども、父が最後のその無念、
箱王　忘れもやらぬこの年月、
なぎ　親を討たれて無念なか、
箱王　さん候。
なぎ　口をしいか、
箱王　さん候。
なぎ　さもさうずさもありなん。然し河津どのを討つたるは我夫祐經どのではない、股野の五郎景久なるわ。

兩人　なんと、
なぎ　思ひぞ出るその時は、安元二年神無月十日あまりのことなりしが、伊豆相模の若殿輩赤澤山の晴角力、
近江　股野は聞ゆる力强、二十一番勝に乘り廣言吐きしをにつくしと、
八幡　祐康土俵へ飛入つて、股野を投げし河津がけ、
朝比　すでに角力もそれまでにて、あつぱれ力者の祐康と勝ち誇つたる歸り足、
宇佐　おゝ聞及ぶその時に、河津どのゝ扮裝は、
久須　秋野のすつたる狩衣に、千段藤の弓携へ、
一萬　竹笠さつと木枯しに吹きそらし、村月毛に跨りて、
箱王　絕所惡所の嫌ひなく、しんづくと歩ませたり。
なぎ　すわ祐経よごさんなれと、柏ケ峠の南尾崎、椎の木三本小楯にとり、
朝比　一のまぶし二のまぶし切つて放せばあやまたず、
近江　河津が乘つたる駿足の鞍の山形射けづッて、
八幡　行縢の着際より、前へすつぱと射通したり、

一萬　萬夫不當の父上も、だいじの痛手に堪り得ず、
箱王　馬よりどうとおちこちの、露と消えたる無念の最期。
なぎさ、河津を討ちしは股野景久、祐經どのには御存じない、疑ひ晴らして歸られよ。
箱王　いゝや、討ちしは左衞門祐經、包み隱すは卑怯未練、
一萬　何故名乘つては討たれぬぞ。
近江　假令主人が敵にせよ、皐月下旬賴朝公富士の御狩の惣奉行、
八幡　役目蒙むる上からは、討つことならぬ祐經樣、
一萬　すりや皐月下旬の狩座まで、
箱王　討つことならぬかいめえましい。
朝比　そこを一番おツ堪えろ〳〵。（ト箱王を留める。）
女一　もはや夕暮、奧樣には少しも早う、
六人　御旅館へ。
なぎ　おゝ、供觸いたしや。
六人　それ、灯の用意、

大勢　はあゝ。

朝比　扨椥の葉どの、いつもならおれが頼んで盃といふ所だが、こゝは途中、盃替りに兄弟へ何ぞやつちやあくんさるめえか。

なぎ　何がさて外ならぬ朝比奈どのゝ頼みといひ、元はといへば一家の端、今日初めての參會に夫に替つて椥の葉が、盃替りに些少の家裹、

ト袱紗包みの切手を扇に載せ遣る、一萬取つて下におき開き見て、

一萬　やゝ、こりやこれ狩場の、

箱王　二枚の切手、

近江　それをやつては（ト立ちかゝる。）

なぎ　あいや、廻り逢ひなば渡せよと、豫て夫の言附なるぞ。

一萬　さすがは左衞門祐經どの、

箱王　敵ながらも今日の賜物、

朝比　見れば扇に一首の歌、

一萬　（取上げ見て、）「まだしきに色づく山の紅葉は、その夕暮を待つて見よかし。」

近江　それと言はねど言葉の謎、色に出でたる紅葉の、
八幡　その夕暮は皐月下旬、
宇佐　扇を逆になすときは、
久須　とりもなほさず富士ヶ根に、
なぎ　果敢なく折れし親骨の、
朝比　無念をはらすは子骨の兄弟、
一萬　狙ふ要は祐經どの、
箱王　いでその時はまつこのやうに、（ト扇を引裂き捨てる）
なぎ　唯何事も、
久須宇佐　皐月下旬、
近江八幡　まづそれまでは、
一萬　祐經ならぬ、
箱王　梛の葉御前、
なぎ　一萬、箱王（ト乗物に乗る。）

朝比　はてめづらしい、

ト乗物を上げるを木の頭、

皆々　對面ぢやなあ。

ト陸尺乘物を差上げ、左右に宇佐美、久須美、上手に近江、八幡、下手に一萬、箱王、中央に朝比奈、後に女中腰元居列び、中間殘らず庵に木瓜の紋附きし箱提灯を差上げ、箱王立ちかゝるを一萬留める引張りの見得よろしく、行列三重カケリにて、

ひやうし幕

雪の對面（終り）

第二番目は御好みに隣で語る國性爺の其浄瑠璃を假宅の鴫蛤の貝殻道かよひ廓の千山を幸次郎が身請の金故和國橋から宿替の先は飴賣唐人市兵衛親の一字に堪忍の二字をまもつて三行半去つた女房が唐ぶつ屋神喜が妾と白雪に見上ぐる寮の高樓より寫すおきんは操のかがみ涙にくもる乳貰ひが金の無心も斷りに水にながるる紅染の手ぬぐひ覆ふ疱瘡子足手纒ひの惣領は義理にしがらむ血筋の繩目かゝりや繋がる喜兵衛藤次が名乘つて見れば兄弟に先非を悔いし竹門の虎は惡事にふるさとを御拂ひ箱のをはりまで時代と世話に和漢の滑稽

「髪結藤次」は文久三年二月、作者四十八歳の時市村座に書卸された作である。その時隣座の中村座で上場した國性爺の和藤内に對抗して、世話できかした和藤内——即ち和國橋の髪結藤次を主人公としたこの作を上場したもので、折柄三題噺の流行してゐた時代なのと作者の趣向の才と役者の藝と何れも卓越してゐた所から、首尾よく勝利を得たと傳へられてゐる。作者默阿彌も三題噺には異常の才能を有してゐたが、こゝに至つてその劇壇に對する發露を見たわけである。これを國性爺に比較して見るのは興味あることである。かの「魚屋の茶碗」も同じく自作の三題噺を劇化したものであるがこの方がずつと勝れてゐる。藤次の性格にせよ、唐人市兵衞の性格にせよよく描けてゐる。この時粋狂、興笑の三題噺の兩連中から作者へ引幕の贈られたのは、作者の名譽でもあり演劇史上特筆すべきことでもある。（卷頭の玻璃版は即ちその引幕に准じて出來た芳幾筆の錦繪である）。尙この作中疱瘡の子を點出し紅染の手拭を用ひたのは、當時疱瘡が流行したのを當て込んだものだとか、夜鷹蕎麥で子供に天ぷらを喰はしたのは、自分の見聞を持込んだものだとかの逸話もある。三題噺に關し、又この作に關する更に詳しい事實に就いては拙著「河竹默阿彌」を參照せられたい。

書卸しの時の役割は、市川小團次（髪結和國橋の藤次）、尾上菊次郎（藤次女房おむつ）、市川團藏（唐物屋神崎屋喜兵衞）、市村家橘（大國屋の千山、巾着切竹門ノ虎）、市川九藏（神喜の手代小助）、澤村訥升（平野屋幸次郎）、中村歌女之丞（幸次郎許嫁お民）、片岡十藏（飴賣り唐人市兵衞）、市川米五郎（下男權助）、坂東村右衞門（おかん）、坂東三八（黑打の兼）、嵐吉六（權九郎）、市川小半次（道具屋市助）、姉川源之助（下女おいれ）等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪である。

大正十三年十二月

編者誌す

三題咄高座新作（髪結藤次＝五幕）

序幕（發端）　向兩國百本杭の場

〔役名――和國橋の髪結藤次、巾着切竹門の虎、平野屋幸次郎、飴賣唐人市兵衞、下剃黒打の粂、搗米屋升目の安兵衞、酒屋樽割の權九郎、辻番親仁伴介。烏金貸し日上のおかん、藤次女房おむつ。其他。〕

（百本杭の場）――本舞臺一面常足の二重、石垣の蹴込み、舞臺前は流にて波布を敷き、上下百本杭物揚場の棒杭、上の方は辻番所の裏手、彼方は屋敷の裏長屋、横網の町を斜に見たる夜の遠見、ここに鏡臺、盥、鴫燒の行燈、種々の臺所道具を繩にて結へ天秤棒を通し、引越の荷物あり、この蔭にどてら半纏、紺の股引の世話裝にて寢てゐる者あり、中間のぐづ八、づぶ六立ちかゝりゐるを、下剃兼奴紺の腹掛股引の裝にて詫びてゐる、この傍に辻番の親仁伴助六尺棒、子持筋弓張提灯を持ち立つてゐる。この見得波の音船の流行唄の合方、通り神樂にて幕明く。

ぐづ　さあ、向う脛へ疵がついた。

づぶ　了簡ならねえ〳〵。

伴介　これさ〳〵靜にしねえか。往來中で見つともねえ、大きな聲をしねえでも、譯の分かることだらう、いつたいこりやあどうしたのだ。

ぐづ　こう父さん聞いてくんねえ、往來中にこんな荷があらうとは知らねえから、づぶ六野郎が蹶いて、向う脛へ疵ができた。

づぶ　言はゞほんの出合頭、詫りでもすりやあ了簡するが、蹶いたが惡いといふから、それで了簡ならねえのだ。

ぐづ　駒止石へ蹶きやあそりやあ此方が惡いけれど、往來中へこんな荷を置きやあがつたから、蹶いたのだ。

づぶ　それをぐづ〳〵言やあがるから、そびいて行つてしめにやあならねえ。

奈奴　もし、お腹立は御尤もでござりますが、御覽なさる通りの生醉本性はござりませぬ。どうぞ堪忍して下さりませ。

ぐづ　そりやあ疵せえ附けねえけりやあ、堪忍してやるめえものでもねえが、

づぶ　疵が附いたからはただは濟まされねえ、詫るなら詫るやうに眼を明いて詫れ。

粂奴　眼を明いて詫れとは、どうすりやあいゝのでござりまする。

伴介　これ〳〵若いの、往來中へこんな荷をおいたのがそつちが悪い、蹟いたのは粗相だが、先方に疵が附いたからは、一ぺい買つて詫るがいゝ。

粂奴　そりやあこつちも氣が附いてゐやすが、御覽なさる通りの引越だから、二人の衆に呑ませるほどお恥しいが錢がねえ。

伴介　なけりやあねえなり、二合でも氣は心だ、買はつせえ。

粂奴　そんなことでいゝことなら、飲んだ剩餘がありました、（ト腹掛の隱しより錢を三百出し。）ほんのこりやあ印ばかり、一ぺい飲んでおくんなせえ。

ぐづ　何だべらぼうめ、酒は飲みたかあねえ、たらふく飲んでゐらあ。

づぶ　この界隈の居酒屋は、こちとらの繩張だ、錢はなくつても飲みてえほど何處へ行つても飲んで來らあ。

ぐづ　二百や三百の端錢、汝等に貰ふなあお手の穢れだ。

伴介　これ〳〵いゝ加減に野暮を言へ、草鞋を作つても楊枝を削つても、三百取るにやあ大仕事だ、悪いことは言はねえから、芋酒屋で一ぺいやり、垢離場で遊んで早く歸れ。

ぐづ　外の者なら了簡ならねえが、世話になるお前の挨拶、手を拍つてまけてやらう。

づぶ　なんだ、端錢でまけるのか。

ぐづ　あゝ三百だやあ安いものだ、膝ツこぞうがぴり〳〵すらあ。

伴介　早く角力膏でも附けるがいゝ。

粂奴　それぢやあこれで了簡してくんなさるか。（ト錢を出す。）

ぐづ
づぶ　おゝ、これでまけてやらう。

粂奴　こりやあ有難うござります。もし、お前さん、大きにお世話になりました。

伴介　なにその禮にやあ及ばねえ、年を取つては間違が嫌だ〳〵。さあ〳〵手前達は早く行け。

ぐづ　あい〳〵。もしこりやあ少しばかりだが、（ト百錢を出すを）

伴介　べらぼうめ、おらあ入らねえ、二つ山に分けるがいゝ。

づぶ　それぢやあ氣の毒だな、

伴介　ぐづ〳〵せずと早く行け、

ぐづ　どれ、芋で一ぺい飲みなほさうか。（ト兩人は上手へ入る。）

伴介　やれ〳〵、とんだ目に遭つたの。

粂奴　いえもう詫れば濟むことを、喰ひよつてゐるものだから、詰らねえことを言ひまして、御厄介を
かけました。
伴介　今の奴等も喰ひ醉つて年中間違をしてゐるが、お前の同作も好だと見えるの。
粂奴　いゝ、すきのくわのと、朝から晩まで相手さへありやあ飲み續け、まあ聞いておくんなせえ。今日本所へ
引越すのに、雜物を擔いだまゝ金ぷらへ押上つて、私を相手に五銚子、やつとだまして引張り出
し、橋を渡ると直に日が暮れ、暗さア暗しよろ／＼と、轉んぢやあ起き／＼、たうとう終ひが今
の間違ひ、人が手のこつぽう擦つて詫るのも白川夜船で高鼾、所詮起しても起きやあせず、一人
でこの荷は背負ひきれず、どうしたらようござりませうか、實に生醉にやあ困ります。
伴介　おゝ困るのは尤もだ、晝と違つて日が暮れちやあこゝに待つてもゐられまい、何處ぞそこらで番
太でも頼んで來て、早く擔いで行くがいゝ。
粂奴　私もさう思ひますが、何を言ふにも生醉と雜物、こゝへ捨てゝも行かれませぬ。
伴介　なるほど、捨てゝも行かれめえ、掛り合つたがおれが不承、番をしてゐてやらうから、人を頼ん
で來さつしやい。
粂奴　そりやあ有難うござります。それぢやあちつとの中お頼み申します。

伴介　然し五つを打つと廻りに出るから、早く行つて來て下さい。

粂奴　直賴んでまゐります。もう姐御が來る時分だが、

ト上手へ入る、伴介は提灯の明りで煙草を喫みながら、

伴介　何だ、引越だと言つたがろくでもねえ道具ばかり、此の人も酒故にみんな飲んでしまつたと見える。さつきからぐづ〳〵と何か言つてゐるやうだが、こいつあ夢でも見てゐるわえ。

ト波の音端唄の合方になり、上手より藤次女房おむつ半纏前掛世話裝、鐵漿壺を提げ、伜國松抱子を背負ひ出來りて、

國松　お母あ、おらア睡くなつたよ。

むつ　あゝ、さうだらう〳〵、いつも日が暮れると直に寐るのに、今にもう五つだから睡いのは尤もだが、もうちつとだから辛抱しな。

國松　さうしてお母あ、何處へ行くのだ。

むつ　父がお酒ばかり飲んでいけないから、祖父さんのところへ一緒になるのだよ。さあ手を引いてやるから早く來な。

國松　あい〳〵。（ト二人は荷物を避けて下手へ行く、國松荷物を見て、）お母あ〳〵、こゝに家の行燈がある

よ。

むつ　なに、家の行燈があるゑ（ト立戻り見て、）おゝこりやさつき擔いで行つた荷だが、まだ本所へ行かないのか。

國松　父がこゝに寢てゐるよ。

むつ　え、ほんにまあ往來中へ、又お株で醉つたのだね。（ト呆れし思入。）

伴介　これ〳〵お前達は、この人の身寄りか。

むつ　はい、私は女房でございます。

伴介　やれ〳〵そりやあいゝ人が來てくれた、先刻から醉ひ倒れて困りきつてゐるところだ。

むつ　左樣でございましたか、つれの者がございましたが、それは何處ぞへまゐりましたか。

伴介　その男も持てあまして、おれに荷物と生醉を賴み、人を一人雇ひに行つたが、もう今に歸るだらう。

むつ　それは〳〵とんだ御厄介をかけまして、お氣の毒でございます。好き故に飲み過ぎまして、ふしだらをしてなりませぬ。

國松　父や起きねえよ〳〵（ト搖り起し、）お母あ、父は起きねえよ。

むつ　うつちやつておきな、無理に起すと怒るから。兼公が來るまで寐かしておきな。
伴介　それぢやあお上さん、お前にしつかり渡しましたよ。
むつ　はい、たしかに受取りましてござります。
作介　もうかれこれ五つだらう、ついでに一廻り廻つて來よう。
むつ　これは大きにお世話樣でござりましたわいな。
伴介　なに、生醉は相見たがひだ。火の用心々々。
ト浪の音にて伴介は呼びながら六尺棒を突き上手へ入る。おむつ介抱をしながら、
むつ　これ藤さん〳〵、何でこんなに飲んだのだえ、藤さんお起きよ〳〵。
ト抱起す、この生醉は髮結の藤次にて肩入の半纏、世話裝、酒に醉つたる思入にて、
藤次　もう飲めねえ、堪忍してくれ〳〵。
むつ　飲めないほど飲まずとものことだのに、
國松　父、起きねえよ、夜が明けたよ、夜が明けたよ。
むつ　ほんにまあ、子供にまで馬鹿にされて。藤さん、性根をおつけよ。
トおむつ藤次の背中をたゝく、これにてえゝと眞面目になり、おむつの顏を見て、

藤次　や、おむつに小僧か。それぢやあ今のは夢であつたか。(ト時代に言ふ。)

むつ　何だな、似もしねえ聲色を、誰だか知れやしねえわな。

藤次　なに、知れねえことがあるものか、和國橋の髪結藤次樣の聲色だ、小僧褒めねえか。

國松　高島屋ア。

藤次　高島屋たア有難え。

むつ　なんの、有難いことがあるものかね。

藤次　有難え〳〵、面白え夢を見た。

むつ　假宅へでも行つた夢でも見たのかえ。

藤次　なんぼ髪結の嬶だつて、假宅たアおつう言やあがる。

國松　父や、面白い夢なら、話して聞かしねえな。

藤次　おゝ、話して聞かせよう〳〵(ト思入あつて、)扨唯今これにて辯じますは、えゝ頃は、何年だか知らねえが、所は東海道の鴫立澤、工藤左衛門祐經の奥方梛の葉御前が夫に代り、箱根權現へ參詣に近江八幡を始めとして、數多の女中を供に連れ行列揃へて行く所へ、曾我兄我が現はれて親の敵と飛びかゝるを、朝比奈が抑留めた春狂言の對面を、一幕そつくり夢に見たが、なんであん

な夢を見たか。おゝ分つた／＼、嬶案じるな／＼。

むつ　誰が案じるものかね。

藤次　まあ案じるとしやな、おれが對面の夢を見たは、これだ／＼（ト鴫燒の行燈を荷の中より出し、）去年手前が小遣錢取りに鴫燒を賣つたこの行燈、鴫燒から出た鴫立澤、茄子は即ち朝比奈がありがた茄子のお仕着ぜりふ、千鳥燒か兄の十郎、（ト黑塗の膳を出し、）この蝶足が弟の五郎、これで揃ふ二人の鏡臺（兄弟）（ト又鏡臺を出し、）扨、梛の葉は鏡の裏か（ト鏡を見て、）近江八幡は髮結だけ（ト大きな藥罐を出し、）大きな藥罐でござります。イヨ、御趣向々々。

むつ　何だないゝ氣な、往來中で口上茶番でもあるまいぢやないか。御趣向でもないものだ。

藤次　これ／＼、そんなに安く言ふものぢやあねえ、今にどこぞへ見世を持つて、茶番早指南といふ看板をかけらあ。

むつ　そんな下らないことを言はないで、早くこれを擔いでおいでよ。

藤次　擔げと言つたとて、この雜物をおれ一人で擔げるものか。

むつ　ほんに又兼公も何をしてゐるのだらう。

藤次　夜鷹でもひやかしちやあゐねえか、そこらまで行つて見て來てくれ。

むつ　それぢやあ泡雪の所まで行つて見て來るが、お前又お寢でないよ。
藤次　もう大丈夫だ、寢やあしねえ。
むつ　國や、お前はこゝに待つてるな。
國松　おらあ父の所にゐるのは厭だ、お母あと一緒に行きてえ。
むつ　えゝ、寒いのに待つてゐればいゝ。
藤次　そんなことを言はねえで、連れて行つてやれ。
むつ　それぢやあ睡がらずに來なよ。（ト國松の手をとり引きかけるを、）
藤次　おい、お上さん、
むつ　なんだえ、
藤次　御苦勞樣だ。
むつ　面白くもない。
　　ト おむつ國松の手を引き上手へ入る、藤次後を見送りて、
藤次　彼女もおれにくつ附いて、年中苦勞をしてゐるが、年より若い生れ故どんな見倒しにふましても七歳になる子があるとは見えねえ。野暮を言ずに自前でも稼いでくれりやあ樂をするが、聞きや

あ彼女に惚れてゐるいゝ旦那があるさうだが、どうか旨くはめてえものだ。

ト思入。上手より烏金貸し日上のおかん、眞中の禿げた女鬘にて日掛の帳を持ち、米屋の三六股引端折りにて米袋を肩へかけ、樽割の權九郎同じく股引尻端折りにて弓張提灯を持ち出來りて、

權九　もし三六さん、何處へ逃げて行きましたらう。

三六　なんでも兩國の方へ行つたといふことでござります。

かん　もし、彼處にゐるのは、藤次ぢやあござりませぬか。

三六　（見て）ほんに藤次でござります。

權九　こりやあいゝところで見つけました。（ト三人傍へ來て提灯を上げ）

かん　さあ、駈落者め、見つけたぞ。

三人　逃がさぬぞ〳〵。（ト藤次酒に醉ひし思入にて）

藤次　これは〳〵お揃ひでようこそおいでなされました。いざ先づあれへお通りなされませう。

かん　えゝお通りなさいもないものだ、株でまた喰ひ醉つてゐるな。

三六　酒を飲む錢があるなら、何故勘定をして行かねえ。

權九　借りたものなそれなりに、駈落をするとは太え奴だ。

藤次　その御立腹は御尤もだが、何を隠さう大家の禿頭が、僅三月か四月の借を因業なことを言やあがるから、世帯をしまつて引越したのさ、借のあるお前さん方の所へは、明日お詫に行く積りさ

かん　その言譯は聞きますまい、これが江戸の中なれば假令どんな場末でも、高の知れた四里四方、尋ねて行かれもしようけれど、

三六　どこの國にか長崎から唐人の所へ行くと言へば、唐へ宿替をさつしやるのだらう。

權九　僅五兩か三兩の貸金を取りに海山越え、唐まで掛取りに行かれるものか。

藤次　誰が唐へ行くものだ、おれが行くのは本所の長崎町といふ所だ。

かん　それぢやあ遠い長崎でなく、

三六　鼻の先の本所か。

權九　それでも唐人の所へ行くと聞いたが、

藤次　唐人と言ふなあ嬶の親父、江戸中で人の知つた笛を吹いて飴を賣る、唐人市兵衛の所へ同居に行くのだ。

かん　あゝ、あの十藏に似た飴屋さんかえ、私やあ又さうとは知らずお前が年中宿酔で鉢卷ばかりしてゐる故、虎を逃がした和藤内と近所で渾名に言ふところから、こりやあ一番和藤内で唐へ宿替へし

たと思つた。

藤次（鴫蛤の行燈を取つて）鴫蛤の行燈はあるが、なんで唐へ行くものだ。

三六　やれ〳〵それで落附いた、横濱位なら仕方もないが、唐まで掛取にやあ行かれない。

權九　こいつあ貸金をパア〳〵に損をするかと思つたら、睾丸せえ縮みあがつた。

藤次　そりやあとんだ御苦勞をかけまして、お氣の毒でござります。これ、誰ぞお茶でも上げねえかと
いつたところが往來中、溝の水より外にやあなし、

かん　さあ、お氣の毒だと思ふなら、これまで貸した勘定をさらりとこゝで貰ひたい、日上の烏が二羽
三羽、今日のが明日と夜を越して泊り烏に二朱八の利息が子を生む子烏の塒に貸した損料蒲團、
決して質にはおくまいと熊野の牛王を飲まないばかり、受合つたのも直その晩質種に困つて置いた
のを、ほじくり出して聞いておいた。烏金から料錢まで三兩三分ばかり、ほんに反哺の孝よりも
田甫の紺屋で染めさせた、地織木綿の蒲團地よりよつほど太いこなた衆夫婦、馴染んだ古巣を後
になし高飛びしても捉へたら、羽根つぱたきもさせやあしねえ。憎まれ口は持前のこゝが名代の
烏貸し（ト大きな聲をして）どなたもおやかましうござります。

三六　扨その次は掛取のいつも遁れぬ春米屋、何づくしの長ぜりふも年越しからこの春かけ厄拂ひで古

いから、何にも言はず慾一方、まづ飯米は言ふに及ばず、暮に貸した糯米もそれなりけりに拂ひもせず、斷りなしに越ヶ谷とは腰より押が强過ぎる。その貸額も蕎麥餅の重ね〳〵に三兩あまり外の得意の鏡餅にもう切餅のきりきざまず、耳を揃へて貰ひたい。

權九　その餅よりは酒の代、宗旨違ひに一問答、右か左りを分けにやあならねえ。鐘をつかねえ日はあるとも、五合貸さぬ日とてはなく、微塵積つて山川の子供が飲んだ白酒まで勘定しめて二兩一分上端が三百二十四文、酢の醬油のと言譯も今日は味淋も待たないぞ。見かけはちつと甘口だがぴんとおこつて吞口をひねり出したら聞きやあしねえ、二合三合四の五の言はずとつくり思案を極めた上、樽底たゝいて勘定さつせえ。

かん　さあ、どう出なほしても掛取の、せりふのとまりはお定まり、

三人　勘定をして貰ひたい。

藤次　いや、お氣の毒だが、できませぬ。

三人　なに、できぬとは、

藤次　はて、その勘定ができる位なら和國橋にをりますが、できねえから本所へ夜逃同樣引越すのだ。なけなしの錢を一貫ばかり金ぷらで飲んでしまひ和藤内より錢がない、ばゞアだらうがもうちつ

と出來るまで待つてくんねえ。

かん　いや／＼今日ばかりは待たれない、何故とまあ言ひなさい、近所ならば朝晩に催促もできるけれど、長崎町までえつちらおつちら催促に行かれるものか。

三六　錢がなければ仕方がねえ、高の知れたがらくたながら、この引越の雜物を貸金の抵當に引き取らう。

權九　かう見たところが一兩か高々二兩の代物だが、百貫の抵當に編笠一蓋、今日取らねば取れぬ勘定。

かん　これを二人で三つ割りに分けて持つて行きませう。

兩人　それがいゝ／＼。（ト三人道具を取りにかゝるを藤次留めて）

藤次　やい／＼、こいつらあ何をしやあがるのだ。

三六　何をするものか、勘定をよこさねえから、

權九　貸金の抵當に持つて行くのだ。

藤次　おゝ、擔いで行くのも面倒だから、やつてしまふも世話がねえが、借金の抵當に雜物を取られたといつちやあ癪にさはらあ。塵つぱ一本でも持つて行きやあがると、向う脛をたゝきなぐるぞ。

かん　おゝなぐるならなぐつて見な、金を貸したりなぐられたりして、おたまりこぶしがあるものか。

藤次　うぬ、なぐらなくつてどうするものだ。（トひよろ〳〵としながら有合ふ道具を取つて打附ける。）

三六　えゝ足も利かねえくせに、ふざけやあがるな。

權九　早くたゝきしめてしまふがいゝ。

ト皆々ごつちやの立廻り、この中段々道具を取つては投げ、取つては投げ、川の中へ打込むを見て、

かん　やあ〳〵、こいや道具を川の中へ、

藤次　汝等にやるくらゐなら、川の中へ打ち込んでしまはあ。

かん　えゝ、勿體ねえことをしやあがるな。

ト藤次生醉の思入にて道具をむやみに川の中へ打込む、これを三人留める立廻り、結局おかん脇腹を打たれ畚の上へ横に倒れる、藤次はひよろ〳〵とすべつてどうと倒れる、三六、權九郎これを見て、

三六　此間に早く、

權九　合點だ。

ト畚の縄へ天秤棒を通し、おかんの乗つたまゝ花道へ擔いで行き。

三六　あゝこれ〳〵待つてくれ〳〵。肩がめりこむ〳〵。

權九　や、こりや荷だと思つたら、おかん婆さんだ。

三六　それぢやあ重い筈だつた。(ト花道へおろす、おかん起きなほりて、)
かん　横腹をひどく打たれ、筋がつまつて歩けぬから、そこらまで擔いて行つておくれ。
三六　歩けぬと言やあ仕方もねえが、貸したものを取らぬ上、
權九　道具の替りにおかんさんとは、これがほんの、
兩人　いゝばゞアだなあ。(ト重さうに擔ぐ、おかん畚より足を出し)
かん　えゝ面倒だ、

ト天秤棒を持ちずつと立つ、これにて兩人どうと倒れる。

なに、重いものか。

トおかん天秤棒を擔いだまゝ花道へ入る、兩人起上り矢張り擔いでゐる思入にて、

兩人　やれ／＼輕くなつた。

ト花道へ入る。藤次ひよろ／＼と起上りて、

藤次　やい、こいつらあ待ちやあがれ。

ト有合ふ殘りの道具の枕を取つて川へ打込む、波の音になり上手よりおむつ國松を引き出來りて、

むつ　あのまあ兼公も何處へ行つたのか、後生樂な人だの。

國松　お母あ、兼は家へ行つたのだらう。
むつ　なに、今夜ッから家はないよ。
藤次　やい、待てと言つたら待ちやあがらねえか。
　　ト一人で惡口をついてゐる、おむつ傍へ來て、
むつ　藤さん、今まで搜したが兼公は見えないよ。
藤次　見えざあ見ずに歸りやあいゝに、何をまごまごしてゐやあがるのだ。
　　ト腹の立つ思入、然しおむつは心附かず、
むつ　何をまごまごしてゐるものかね、廣小路まで行つて搜して來たのだわね。
藤次　何の搜さずといふことを、
むつ　お前が行つて來いと言ひなすつたぢやあないか。
藤次　いつおれがそんなことを言つたえ。（ト大きな聲で言ふ、おむつ思入あつて、）
むつ　おや、怖いねえ、
藤次　怖いとは何が怖いのだ。
むつ　大きな聲をしなさるから、お前が怖いよ。（ト言ひながら四邊を見て、）おや、こゝにあつた道具かな

いが、兼公が來て持つて行つたかえ。
藤次　誰が來て持つて行くものか、川の中へたゝつ込んでしまつたのだ。
むつ　えゝ（トびつくりして）そりやまあ何でそんなことをしなすつたのだね。
藤次　何でするものか、癪にさはつたから。
むつ　何が癪にさはつたか知れないが、なけなしの道具をばうつちやらずともいゝぢやあないか、世帯を仕舞ふほどの身で、もう買ふことはできやあしないよ。
藤次　えゝ吝つたれなことを言ふな、一晩おれが目と出りやあ、悉皆更新に買つてやらあ。
むつ　ついにまうけて來なすつても、何一つ買ふどころかみんな飲んでしまふくせに、
藤次　この節は物騷だといふから、腹の中へしまつておくのが盜人の用心がいゝ。
むつ　醉はない時には猫のやうだが、なぜ醉ひなさると前後の考へもなく、つまらないこんなことをしなさるだらう。
藤次　えゝ、まだぐづ／＼と言やあがるか、これから店を持つぢやあなし、親父の所へ居候だ、何の道具が入るものか。
むつ　父さんだつて一人者、餘計な道具があるものかね。何がそんなに癪にさはつて川へ投げこんでし

まつたのだねえ。

藤次 これが打ツこまれずにゐられるものか、烏金貸しのおかん婆あに米屋と酒屋の慾張めらが、おれが後を追かけて來て、貸金の抵當に諸道具を持つて行くとぬかしやあがるから、彼奴等にやあよりやあと、川の中へ打つこんだのだ。

むつ 川へ入れずとあの衆に渡してやつたら借錢が少しは輕くならうのに、今更言つても仕方がないがあの鏡臺の抽出には大事の守が入れてあつたに、とんだことをしなすつたなあ。(トちつと思入あつて。)これ藤次さん、

藤次 なんだ。

むつ なんだではない、その酒をお前止めねばならぬぞえ。

藤次 なに、ならねえとは、

むつ さあ、大恩受けし御主人の平野屋の若旦那幸次郎樣が、去年から大國屋の千山と二世をかけての深い仲、山の宿の立退から又深川の假宅へ引續いてのお遊びに、廓の金にはつまるの慣ひそこやかしこに不義理が出來、こゝぞ御恩の送り所と思ふばかりで力に及ばず、僅なお金も氣は心、どうかして上げたいと醉はない時は言ひながら、氣違ひ水に御主人を貢ぐ心もどこへやら、ほんに

日外高島屋（小團次）が天下茶屋の元右衛門をした時芝居を見に行つて、狂言とは言ひながら酒亂の者にはよい手本、もう〳〵酒は止にすると言つたも半月一月と、止められぬのが身の因果、その酒故に親子とも路頭に迷ふ今日の仕儀、夫婦夜晝稼いでも高の知れたる痩世帶、いつ御恩が送られます、生醉本性違はずと譬に言ふぢやござんせぬか、性根を附けて下さんせいなあ。

ト思入にて言ふ、此中藤次猶腹の立つ思入にて、

藤次　えゝ聞き度くもねえ意見立、死んでも酒は止めねえから、酒を飲むのが厭ならば、暇をやるから出てうせろ。御家風に合はねえから、おれが家にやあおかれねえ。

むつ　おれが家とは何處が家、こゝは往來でござんすぞえ。

藤次　そりやあ言はねえでも知れたことだ。世帶をしまやあ今日から宿無し、千住の果から品川まで、青天井はおれが住居だ。

むつ　酒の科とは言ひながら、言ひたいがいの不理窟ばかり、家風に合はずば出て行かうが、私は兎もあれ二人の子供、お前可愛いうはござんせぬか。

ト此中脊負つてゐる抱子を抱き取り、泣くのをいぶり附けながら藤次に見せる。

藤次　ちつとも可愛いことはねえ、びい〳〵泣かれて眞平だ。出て行くならばその餓鬼も、一緒に連れ

て行つてくれ。

むつ　連れて行かなくつてどうするものだ。お前のやうな邪慳な人に、可愛いゝ子がおいて行かれるものかね。

藤次　おいて行かれてたまるものか、直にどこぞへ捨てにやあならねえ。

むつ　(悔しき思入にて、)えゝまあそんな憎いことを、そりや本性でお言ひのか。

藤次　おゝ、師直ぢやあねえが本性だ。

むつ　それがお前本性なら、ほかに情人でも出來たのだね。

藤次　はゝゝゝ、さすがは嬶大明神、當てられた〱。

むつ　え、それぢやあ情人が出來たのかえ。

藤次　おゝ、おれが情人といふのはこれだ、(ト一升徳利を出し、)それ、すべ〱といゝ肌だらう、こいつを毎晩抱へ込んで口うつしに飲むのが樂しみ、はゝゝゝ(ト徳利の口から酒を飲む。)

むつ　えゝも、何がをかしいことがあるものか、(ト此時抱子頻りに泣く、おむつ焦れる思入にて、)えゝ、この子もよく泣く子だの。

國松　お母あ、睡くなつたよ。

むつ　睡くなつたとてこゝは往來、どこへ寐る所があるものかな、父の所へ行つて寐かして貰へ。
國松　父や、寐かしてくんねえ。
藤次　えゝ、おらあ餓鬼は嫌ひだ。（ト頭を打つ、これにて國松わつと泣きだす。）
むつ　えゝ可愛さうに、何科もないものを、
藤次　きり〳〵と出てうしやあがれ。
ト升煙草盆を取つておむつに喰はす、おむつ泣きながら、
むつ　こりや父あんまり、
ト、おむつ立ちかゝる、此の以前下手へ飴賣唐人市兵衛半纏、股引尻端折り、紋羽の頭巾を冠り窺ひゐて、
市兵　これ待て、娘（ト留めるを見て、）
むつ　や、お前は父さん、悔しうござんすわいな。（ト市兵衛に縋り泣く。）
市兵　嘸悔しからう、腹が立たうが去られたのは手前の仕合せ、かういふ事のある兆か、あんまり來やうがおそい故、迎ひがてらこゝまで來て樣子は後で聞いてゐた。
むつ　もし、私や何も去られるやうな、身に覺えはござんせぬに、

市兵　はて、覺えがあらうがあるめえが、來るとあるなら出てしまへ、おれが引取つてこれから金に、

藤次　いやさ、豫て終ひはかうだらうと、おらあ疾うから思つてゐた。こりやあ父さんいゝ所へ來てくれた、こんたに貰つた娘だが、おらあ厭になつたから引取つてくんねえ。

市兵　なに、娘が厭になつたから引き取つてくれ、そりやあ藤次、どの口で言ふのだ。

トこれを聞き市兵衛藤次の傍へ來て、

藤次　こゝ此の口で言ふのだ。

市兵　これ、よくそんなことが言はれたことだ、五歳の年にさる所から親知らずに貰つた娘、切ねえ中で育てたち十人並に勝れた容姿、十六七になつたなら金にしようと思ひのほか、廻り髮結の手前にさらはれ、やるめえと言やあ心中でもしさうな氣振に仕方なく、大金になる代物を無代手前にくれてやつた、その時手前が手を突いて禮を言つたを忘れたか。あの時分から旦那取りか妾にでも出して見ろ、今までおれもちやるめらを吹いて飴は賣りやあしねえ。餓鬼があつてもみづ〳〵と年より若いが一つの德、これからおれが引取つて立派な所へ嫁にやり、榮耀榮華をさせるから孫でも冠つて見物しろ。

藤次　面白い、見物せう、どこへなり共勝手にやれ、高が妾か圍ひ者、女御后になられもしめえ、おれもこれから面當に名も藤吉と改めて草履取りに住込んで、關白にまでならにやあならねえ、その時女房になりてえと詫つて來ても持ちやあしねえぞ。

むつ　誰が詫つて行くものかね、人の事よりお前こそ醉が覺めて肝をつぶし、詫つておいでゞないよ。

藤次　何の附に詫るものだ。

市兵　さあ、かうなつたらば早いがいゝ、去るなら直に三行半、去狀つけて去つてしまへ。

藤次　その去狀もこゝは往來、何ぞ替りにやるものが、おつとある〳〵、この徳利、今までおつとを持つてゐたが（ト有合ふ石でたゝく、徳利二つに割れるを取つて、）ぽんと二つに別れ〳〵、これが即ち一升の別れといふお茶番だ。さあこの片割を持つて行け。（ト徳利の割片を出す。）

市兵　むゝ、去狀替りのこの徳利、たしかにおれが受取つた。娘はおれが引取るが、二人の餓鬼は男の兒男に附くが天下の大法、こりやあ手前におッつけるぞ。

むつ　あゝもし父さん、邪慳な人の手にかゝり慘苦を見せるが不便故、私が連れて行きたうござんす。

市兵　乳飲の方は仕方もねえが、二人一緒に連れて行つたら、足手まといにならうのに、

むつ　さうでもあらうが私の手で、どうぞ育てゝやりたうござんす。

市兵　そんならそれも心任せ、

むつ　もし藤次さん、かうなる上は此後に途中さんどで出逢うても、いゝあかの他人でござんすぞえ。

藤次　そりやあ言はずと知れたこと、面を見向きもしやあしねえ。

むつ　えゝ、それほどまでに、

國松　これ、父や、

藤次　（思はず。）おゝ、なんだ。

むつ　あこれ、もう父といふではないぞ。

藤次　え、

むつ　あれは邪慳な餘所の小父さん、

國松　そんなら父は名を替へたのか。

藤次　おゝ、おつウ言やあがらあ。（トほろりと思入、おむつも手拭を喰へ、しめ泣に泣く。）

市兵　さあ、更けねえ中に早く行かう。

むつ　そんなら、もう行くのかいな。（トほろりと思入。）

市兵　これから出世になることだ。

むつ　それぢやというて、

市兵　え丶未練を殘すな。さあ、おんぶしろ。

國松　あい。（ト市兵衞におぶさる、この時抱兒頻りに泣くので）

むつ　お丶泣くな／＼、なに頑是ない子心にも、蟲が知らすか親子の別れ。

藤次　え。（ト生醉の思入にて顏を出すをおむつぢつと見て、）

むつ　あ丶困つた酒でござんすなあ。

ト唄、波の音になりおむつ抱兒を抱き泣きながら花道へかゝる、市兵衞はしめたといふ思入にて後より花道へ行き、おむつの立歸らうとするを無理に留めて花道へ入る。藤次は後を見送り、やはり生醉の思入にて、

藤次　九尺二間の家を仕舞ひ、家財かざいの古道具をみんな川へぶつこんで、足手まとひの女房子を去つてしまへばたゞ一人、あ丶さば／＼していゝ心持だ。歸らうといふ家もなけりやあ、今夜はここへ轉寐としよう、何方もまつぴら御免なせえ。

トよき所へ寐る、時の鐘になり、花道より平野屋幸次郎よき所の息子の打扮にて出來り、後より巾着切竹門ノ虎、紺の腹掛股引尻端折り、頬冠りにて窺ひながら出來る。

幸次　ふとしたことで去年から大國屋の千山と、二世をかけての夫婦約束、月には雲のさはりがち一二度來たる田舍の客が身請するとの話故、先へ手附の金を渡し此方へ身請をしようと思ひ、道ならねども千葉樣から袋の修覆に預りし、世にも稀なる胡蝶の香合、小道具屋の市助どのから伊勢治へ預けて借りたる百兩、（ト懷より財布に入れし金を出し、）明日まで待たれぬ急ぎの金、舟で行つたら四つまでに大國屋へ行かれよう、早う手附にこれを渡し此方へ身請をせねばならぬ。（ト思入あつて、）あゝ私としたことが、人にこれを聞かれたら油斷のならぬこの川端、めつたなことは言はれぬわえ。

ト思入あつて本舞臺へ來る、虎後をつけて來て下手に窺ふ、幸次郎石に躓き雪踏の鼻緒切れる、

南無三、雪踏の鼻緒が切れた。

ト此時虎忍んで來て、上手より幸次郎に突當る、幸次郎びつくりする。この途端に懷へ手を入れ金財布を引出す、幸次郎その手に縋つて、

やゝ、懷中物へ手をかけるは、

虎　後になり先になり、厩河岸からつけて來たのだ。

幸次　やや、扨はおのれは、

虎　盗人だ。(ト財布を引たくる。)

幸次　あれ、盗人だ〱。(ト虎を捉へる。)

虎　えゝやかましい、靜にしろ。石置場からこの川岸は百本杭までおれが仕事場、晝と違つて夜に入りやあ往來まれな御藏橋、時刻も丁度四つ手網白魚船の篝火で、ちらりと睨んだ懷の重味はぢつしり一ちよぼか二ちよぼまではあるめえと、思ひのほかに小判で百兩、こんな漁があらうとはほんに夢にも知らなんだ。

幸次　身請の手附の大事の金、やはかおのれに渡さうか。

虎　えゝ、しやらくせえ、放しやあがれ。

幸次　あれ、誰ぞ來て下され。盗人だ〱。

虎　うぬ、聲を立てるとたゝき殺すぞ。

ト兩人金をかせに立廻り、寐てゐる藤次に躓く。

藤次　あいたゝゝゝ。

ト藤次起上り身體の痛き思入にて此の中へ入り、邪魔になる立廻り、よきほどに以前の下剃彔奴上手より出來り、虎の持つてゐる財布へ手をかけるを振拂つて投げのける。と月隱れ、後の道具打返し

にて暗く見える書割になり、時の鐘、葛西念佛を冠せ、ダンマリ模様探り合ひの立廻り、結局兼奴財布と思ひ虎の掛守りを引出し、これを奪ひ合ひ幸次郎の手へ守袋入る、虎は財布を取つていたゞく。兼奴藤次をすかし見て、

兼　や、親方か、

トいふ、この聲に虎つか〳〵と花道へ行き、幸次郎立ちかゝるを兼奴留める、藤次ひよろ〳〵としてどうとなるを木の頭。これにて道具元へ戻り、

藤次　水を一ぺいくれ。

ト生酔の思入。虎は逸散に花道へ入る、幸次郎それを見送る、この仕組よろしく、波の音、佃にて、

ひやうし幕

二幕目

大國屋假宅の場
深川佐賀町の場

（淨瑠璃）　仇な浮名も立退の
其淺草から假宅へ　梅八重色香深川（清元連中）

〔役名——髪結藤次、巾着切竹門ノ虎、平野屋幸次郎、唐人市兵衛、幸手の惣右衛門實は神喜手代小助、小道具屋市助、夜そば賣り仁八。大國屋の千山、幸次郎許嫁お民、茶屋の下女おせん、其他。〕

（大國屋入口の場）——本舞臺三間の間船板の塀、中央に風雅なる門、これへ大國屋と記したる額をかけ、この上手に用水桶、正面少し後へ下げて二階家。この上下へ大國屋假宅といふ板札を出しあり、總て深川大國屋假宅入口の體。こゝに地廻り汐吹源次、赤貝金太の二人上らうといふた、大國屋の若い者喜介、太七留めてゐる、この傍に小道具屋の市助小さき風呂敷包を脊負ひ見てゐる、この模樣よろしく通り神樂、流行唄にて幕明く

喜介　まあどうぞ御勘辨なすつて下さりませ。

太七　御尤もさまでござりますが、今日のところは御免なされて下さりませ。

源次　こう、なにもおら達がたゞ上らうとは言はねえぜ、勤金を拂つて上らうといふのに、何で上げられねえのだ。

金太　おら達の錢金は通用しねえのかえ。

喜介　いえまつたく左樣ではござりませぬ、まだこの通り普請もでき上りませぬほどのことで、取込んでをります故、ほんのお馴染ばかりのお客でござります。

太七　此方へ參りましてはあなた方をお願ひ申さねばなりませぬ、何分お頼み申しまする、へゝゝゝ。

源次　何を笑やあがる、馴染でなけりやあ客にならざあ、初會馴染にならうぢやあねえか。
金太　さうだ〳〵、こちとらあ装が悪いから見くびりやあがるのだ、あんまり安くしやあがるな。さあ、
馴染になるのだ。
兩人　さあ、客にしろ〳〵。
喜介　決してあなた方を見くびるなぞといふ譯ではござりませぬ、どうぞ御免なされて下さりませ。
源次　見くびらざあ客にしろえ。
太七　唯今も申します通り、取込んでをります故お座敷がござりませぬ、どうぞ御勘辨なされませ。
金太　べらぼうめ、甘口なことを言やあがるな、座敷がなけりやあ廊下へでも屋根へでも上げろえ。
兩人　さあ、客にしろえ〳〵。
喜介　どうぞ御免なされませ〳〵。
ト この時市助出てこの中へ入り、
市助　もし〳〵お前さん方、まあ今日のところは堪忍しておやりなされませ、私もこゝの家へ用があつ
て人を待合せるものだが、若い衆も困るやうだ、私が仲人だ、了簡してやつて下さいまし。
源次　えゝ大きに有難うござります、あんまり此奴等が人を安くしやあがるからさ。

金太　この土地へ來やあがつて、あんまり上格を吐かしやあがるな。
市助　そこはお前方のはうがお腹立は尤もだ、然しかうやつて燒出され同樣なものだ、まあ〳〵勘辨してやつておくんなさいまし。
喜介
太七　どうぞまあよろしくお願ひ申します。
市助　まあいゝわ、おれが彼方へ御挨拶をするから、これから氣を附けるがいゝぜ。
兩人　へい〳〵有難うございます。
源次　仕方がねえ、お前さんの挨拶だから、大負に負けて上げやせう。
金太　よく面を覺えてゐろ、又晩に出なほして來るぞ。
市助　まあ〳〵野暮を言はずに、機嫌をなほして下さいまし。
源次　この土地へ來たら、ちつと兄さん達の面を覺えてゐやあがれ。
金太　こつぱ野郎め、態あ見やあがれ。
源次　これから新地の方をおし廻すべい。
兩人　覺えてゐやがれ。（ト捨ぜりふにて下手へ入る。）
喜介　いやもう、大きに有難うございます。

太七　假宅もこれで弱ります。

市助　あんな奴が多いので、お前方も骨が折れるなう。

源次　いやもう、毎日ごたつきが三四度づゝでござります。

太七　珍らしい中は兎角ぶう〳〵が多いので困りまする。

市助　ほんたうに何生業になつても樂はできねえ、骨の折れた仕事とねえ。

喜介　いや、年中人に謝つてばかり、頭の上らない、鐵槌の川流れでござりまする。

太七　それはさうと、今日は何でこちらの方へお出掛けでござります。

市助　なあに此方の家へ平野屋の幸次さんが來てゐるだらうと思つて、それを尋ねに來たのさ。

喜介　幸次郎さんでござりますか、一昨日から流連でござります。

太七　ねえもし市助さん、幸次郎さんもあゝ足を近くおいでなすつちやあ、お家のお爲になりませぬねえ。

市助　ならねえ所か。家ぢやあ皆々氣を揉んでゐなさらあ、それにこの春もお屋敷から預つてゐる香合を質において、僅半月といふ掛合で預けたが、おれが口を利いたものだから、先方からはどうする〳〵と矢の催促よ、おれ一人中間へ入つて言譯ばつかりしてゐるのだ。今日は是非とも幸次郎

さんに逢つて、とつくり話しをしにやあならねえのさ。

喜介　そりやあとんだ所へ引かゝつて、御迷惑なものでござりますねえ。

太七　それぢやあ今に機を見てお逢はせ申しますから、まあ内證でちつとお話しなさいまし。

喜介　もし市助さん、丁度今日はさるお客樣が佐久間町の太夫を連れて來て、後に淨瑠璃がありますから、一段聞いちやあどうでござります。

市助　そいつあいゝとこへ來た、そんなら定めて横山町や植木店も來るだらう。それぢやあかうしよう、今の中ちよつと山の先生(龜交山)の所へ行つて、慾張り用を達して歸りに寄つたら丁度よからう。

喜介　そんならさうなされませ、なるたけ早く行つておいでなさい。

市助　直に行つて來ます。

太七　お待ち申します。

市助　どりや、行つて來ようか。

ト上手へ入る。門の内より新造二人出來りて、

新一　もし〳〵喜介どん、ちよつとこれを見てくんなまし(ト手紙を出す。)

喜介　こりやあ何でござります、情人から來たのだね。

太七　のろけのお相伴はあやまつたね。
新二　さうぢやありません、お客の所から來た手紙が讀めないからさ。
新一　ちよつと讀んでくんなまし、急な用かもしれないから。
喜介　(手紙を取つて、)何だ、ごうぎに眞面目な手で書いてありますね、何々「淨瑠璃名題――。」
新一　おや〳〵、手紙の文句にしちやあ、をかしいぢやありませんか。
太七　(取つて、)どれ〳〵おれに見せねえ、「淨瑠璃太夫、淸元延壽太夫――。」
喜介　何だかをかしいぜ、「相勤めまする役人――。」をかしい筈だ、こりやあ今日催しのある淨瑠璃の觸書だらうぢやあねえか。
新二　おやまあ、そんならお部屋で話しをしてゐる時、間違つたのでありませう。
新一　ほんたうにそゝつかしいねえ。
兩人　こいつあ大笑ひだ。
　　ト花道より惣右衞門の下男七助羽織股引尻端折りにて出來り、
七助　こりやあどなたもお揃ひで、所珍しいのでぞめきかね。
喜介　いよ、幸手の旦那のお供さんでござりますか。

太七　旦那のお使ひでございますね。
七助　また旦那はいつものめいいれんになつてござるだらうね。
新一　惣右衛門さんはいつもながら機嫌上戸で、面白いことでござんすわいなあ。
新二　さうしてお前さんは何處へ行つておいでなんしたえ。
七助　いやもう人遣ひの悪い旦那で、女郎買に來てまでも用が多いので困りはてるのさ。
喜介　又例の三題噺の會觸かね。
七助　さうさ、有人さんの所から魯文さんの所へ廻つて、それから扇夫さんに玄魚さんと、かう廻つて來ました。
新一　それはまあお疲れでござんせうわいなあ。
太七　旦那も三題噺はよつほど好きだねえ。
新一　もし七助さん、扇夫さんの出揚はいつでござんすえ。
七助　それも日を定めて來た、明後日でござります。
新一　おやまあ、明後日でござんすかえ、ほんたうに嬉しうございますねえ。
新二　その時には後で、扇夫さんの聲色を聞くのが樂しみでありんすわいなあ。

喜介　もしおますさん、扇夫さんの出揚ぢやあ、又お前が騒々しいね。
新一　何故でござんすえ。
喜介　油で口が廻るからさ。
七助　なるほど、こりやあその通りだ、はゝゝゝ。
太七　ときに七助さん、これから旦那の次の間で一口おやんなさいまし。
新一　ほんに、それがようござんすわいなあ。
七助　なるほど一ぱい御造作になりませう。
喜介　私もお相伴をいたしませう。
新二　そんなら七助さん、
新一　さあ、ござんせいなあ。

ト皆々わや／＼言ひながら門の中へ入る。これにて二階家を上へ引上げ、前の道具を引いて取る、と假宅座敷の模様になる。

（大國屋座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、彼方打抜き廊下部屋々々の片方遠見、中庭を見せ、上手折廻して障子屋體この内茶壁床の間、よき所へ行燈を置き、下手中二階伊豫簾、總て假宅座敷の模

様、道具納ると直に中二階の伊豫簾を上げる、こゝに清元連中羽織袴にて居並び浄瑠璃になる。

〽辰巳とは浮名たつみの言の葉を、隠してそして夕化粧、戀の淺瀬も深川へうつす流れの假宅に、たそがれ告ぐるすがゝきや、

トこの文句の中廊下より千山島田鬘緋の胴抜打掛女郎の打扮にて、島田振袖世話娘の打扮の幸次郎許嫁お民の手を引き出來る、

〽その三絃に引かれ來る身は鶯のそれならで、まだ初音さへ恥かしく、蕾の梅の薄紅に包む色香の袖袂、

トお民間の悪き思入にて逃げようとするを、千山は落付いてゐるといふ思入にて、

千山　もしお民さん、そんなにそはそはしなさんすことはござんせぬ。何かのことはとつくりと又お話もしませうほどに、ゆつくりして下さんせ。

お民　はい、有難うはござりますが、お前に逢うてお話し申すも、間の悪いやら恥かしいやら、推量して下さんせいなあ。

千山　私やお前がたづねてござんして、打明けて下さんしたが嬉しうてうて、心でをがんでをりんした。今に幸次郎さんにお逢はせ申しんすから、まあ私に任せておいて下さんせいなあ。

お民　それぢやというて、始めてお目にかゝつてなれ〳〵しい、どうぞお前さんから幸次郎さんへ、よいやうに言うて下さんせ。私はもう歸りまする。

千山　あれまあよいぢやござんせぬか、私こそお前に逢つたは面目なけれど、そこを拭うて厚皮にお前に逢ふのも心の辛さ、勤めする身は蓮葉ぢやと、必ず蔑んで下さんすなえ。

お民　えゝもわつけもない、私が足らはぬ生れ故、お前にまで苦勞をかけ、幸次郎さんへ詫言を。

千山　もう〳〵ようござんす、かういふ中も人の目つま、私に任せて些しの間、この一間の中で返事を待つて下さんせ。

お民　どうでも私は（又行かうとするを無理に留めて、）

千山　窮屈でもあらうけれど、私がこゝへ來るまでは、

お民　左樣なれば御厄介に、

千山　どうぞ待つてゐて下さんせえ。（ト上手の一間へ入れて、）もし、誰が來ても必ず口を利くぢやござんせぬぞえ。

ト思入あつて立上り上手へ行く、これにて道具を廻し、
本舞臺は廊下の道具となる。千山思入あつて、

お民さんの心の中身につまされておいとしい、なんぼ可愛い男でも、別れにやならぬ今宵の仕儀
〽昨日の淵は今日の瀬と替るも義理のしがらみに、明日は別れとなりふりも亂す涙の忍び泣き、心殘して入りにける、（トこなしあつて上手廊下へ入る。）
〽色と酒とに昨夜より持越酒の口說から、流してこゝへ湯上りの顏も色ある薄霞、引くや禿が袖の梅、

ト奧より以前の幸次郎湯上り浴衣裝にて、禿たよりに手をひかれ出來り、

幸次　これたより、何でそのやうに私の手を引いて行くのぢや。
たよ　それでもお前が風呂へ行かしやんした故、又浮氣をなさんすと惡いから、迎ひに行けと言ひなんした。
幸次　いや、廻り氣なやつではある、さうして千山は、
たよ　障子の内に寢てゐなますわいなあ。
幸次　それでは私が起してやりませう。

トこのせりふの中に道具元へ戻り、
本舞臺元の部屋の道具となる。

たよ　又操ると悪いぞえ。

幸次　何でそんな悪洒落をするものだ。

たよ　もし幸さん、浴衣では風邪を引くと悪いぞえ。

幸次　おゝ親切によう心が附きました。これたより湯上りで咽が乾いてならぬ、水を一つ持つておじや。

たよ　それでも水は、

幸次　毒ぢやといふのか、花魁の仕込故かたいことを言ふ奴ぢや。早く水を持つておじや。

たよ　あい――（ト上手へ入る。これより一中節の合方になる。）

幸次　湯へ入つたら又酔が出たさうな、（ト一間の中へこなしあつて、）これ千山、なんで私を風呂へやり、
そなた一人寐てゐるとは、またそなた毎の癇癪ぢやの。

〽障子の外に幸次郎、迎へし酒の機嫌よく、

これ千山、何をその樣にひぞるのぢや、そなたをおいて誰がところへ行くものだ。私が思ふはそなたばかり、えゝこれ大がい私が心も知れてゐるではないかいなう、まだ私を客ぢやと思うてゐるのぢやの。

〽まだそのくせが大よどの、せきも出ぬのに重ね夜着、泣いて見せるを覗いて見たり唄うて

見たり、ひくばちの、（ト此中幸次郎唄に思入よろしくあつて、）
はゝゝゝ、まだ口を利かぬかいなう。はあゝ分つた、あのお民のことぢやの、あれがことなら
決して心をかけやんな。あんな眞面目な不粹な厭な女はない、それぢやによつて女房といふは名
ばかりだ、これは私が潔白ぢや。えゝもよい加減に機嫌なほしたがよいわいなう。

お民（障子の内にて、）はあゝ（ト泣落す、これにて幸次郎びつくりして飛退き、）

幸次　これ〳〵千山何で泣くのぢや、又血の道が起りはせぬか、これ氣をしつかりと持ちやいなう。

お民　はい、これが泣かずにゐられませうか。
ト障子の中より出て泣伏す。

幸次　や、さういふそちは、

お民　はい、民でござんすわいなあ。

幸次　え、
〳〵逃げんとするを引きとゞめ、縋る袂を振切つて、（ト幸次郎面目なき思入にて、）
あゝ面目ない、（ト氣を替へて、）いや面目ないことも何にもない、私が勝手で遊びに來たのぢや。
はあゝ分つた、扨はそなたは悋氣しに來たのぢやの。

お民　いえ〳〵さうぢやござりませぬ。
幸次　いや〳〵さうぢや、それに違ひはないわいなう。
お民　さう思ふも御尤もでござんすが、お氣に入らぬは私が不束、鈍に生れた私が科、何であなたを恨みませう。さりながら、
〽私も女子の端ぢやもの、悋氣とやらも知つてはゐれど、それは女子のたしなみと女庭訓習うたをちつとは記えてゐるわいな。せめてやさしいお言葉をと心で思ふ半分も口へ出ぬのも生娘の眞實見えていぢらしき、
幸次　いやもう、そなたの言ふは皆道理、必ず惡う思ふ心ではない、然しそれはさうと、どうして此處へは、
お民　今日私がまゐりましたは、あなたに是非々々申さねばならぬことがござんす故、
幸次　そりやまあ何で、
お民　さあ、その樣子といふは、かういふ譯でござんすわいな。あの千葉樣から袋の御修覆に下つた胡蝶の香合、
幸次　その香合がどうぞしたのか。

お民　さ、あなたが質物とやらにおやりなされしとのこと、

幸次　えゝ、どうしてそれを知つたのぢや。

お民　知つたといふは、あの道具屋仲間の市助さんがお前樣に賴まれて、お金を百兩貸したとのこと、聞けばその金で千山さんの身請の手附金、になされしとやら、十日この方お歸りがない故、家のことは御存じござりますまいが、お屋敷からきびしい催促、明後日までに差上げねばお役人樣のおしくじり、さうなるときには平野屋へもどんなお咎めがかゝらうかと、あの母樣は夜の目も寢ずに案じてばつかり、口へこそお出しなさらねど、男の心の替るといふも女房が惡い故と思召すであらうと思へば、お傍にゐるも面目なく、母樣へ言譯がござんせぬ故、女子の來にくいこのお家へまゐりましたはこの事を、あなたへお話し申しましてどうぞ家へ歸つてお貰ひ申したさ、母樣への御孝行と思召し、おいやでもあらうけれどこれは私がお願ひでござりまする。決して悋氣や嫉妬にてお迎ひにはまゐりませぬ、恥かしい顏おし拭うてこゝまでまゐつた心の中、もし、〽推量してと取り縋れば、言譯さへも泣く淚。

幸次　これお民、何にも言はぬ、よう知らせに來てたもつたなう。〽身の言譯ではなけれども、ついしたことの迷ひより親に苦勞をかけし上、眞實な女房まで

袖になしたるこの身の科、その天罰が報い來て、質入なせし香合の金さへ役に立たざる仕儀、

お民　え、お金が役にたゝぬとはえ、

幸次　さあ、こゝへ來る途中にて、物取りに盗まれて、

お民　えゝそんなら、百兩のお金を、

幸次　それ故に今となり、仕樣も樣もないわいなう。（ト思入）

お民　いえ〳〵もうお案じなされまするな、お金のことはどうなりとなるでござりませうわいな。然し今日始めて逢うた千山さん、あなたのお惚れなされたのも御無理ではござんせぬ。女子でさへほれぼれといたしまする。それにまあ容姿といひ粹なお姿、どこに一つと言分ない、それに引替へ私は眞面目な不粹な、女房といふは名ばかりぢやと、今おつしやつたのは御尤もでござりますわいなあ。（ト幸次郎の言つた通りにいふ、幸次郎術なき思入にて、）

幸次　あゝこれ〳〵、お民、そのやうに言はれると、穴へでも入りたい。あれはほんの遊びの座興といふものぢや。決して心にかけてたもんな。もう〳〵今となつて眼が覺めて見れば、女房に越したものはない、女郎なぞといふものは、どだい根が浮氣なものぢや、金が澤山ある中は襟元に附いて惚れたのはれたのと言ふけれど、又外に好いた客人が來れば、又直に乘替へる、どだい人を化

かすのぢや、私や狐に化かされたと思うてゐるわいの。

お民　いえ〳〵さうぢやござりませぬ、外のお方はともかくも、千山さんは眞實お賴もしいお方でござりますわいなう。

幸次　いや〳〵さう見えるのが人を化かすのぢや。はてもうそれが遊里の習ひぢやわいなう。

ト此中上手より千山出かゝりをりて、この時足音をさせて出來る。幸次郎双方へ間の惡き思入にて、

や、そなたは千山、

千山　はい、大相びつくりしなましたね。（トちよつとつんとする。お民思入あつて）

お民　千山さん、今宵のことは何とお禮を言うてよからうやら、有難うござんすわいな。

千山　何のお禮に及びんせう、段々とのお話を聞くにつけ、色や浮氣を取除けて、早うお家へお歸りなんして、お母さんのお心を安めてあげるがようござんす、又百兩のその金も、ちつとこつちに心當りがござんすゆゑ、そのことは必ず案じなますなえ。

幸次　そんなら金の心當が、してその心當りといふは、

千山　ほかでもござんせぬ、心當といふは幸手の客人、

幸次　あの人をどうしやる。

千山　そこは私が口先で、どうなとしようわいなあ。

幸次　そんならそなたの働きで、

千山　はて、よいわいなあ。

幸次　それで私も落着いた。

トちよつとお民へこなし、幸次郎間の惡き思入、この時奥にて、『さあ、ござんせいなあ』といふ皆

皆の聲する。

〽春風が呼びつぐ舟の向う越し、押しだす棹の竹屋の川岸へ、さつさ押せ／＼佃節、

〽吹けよ川風あがれよ簾、中のお客の顏見たや。

トこの淨瑠璃の間千山はお民、幸次郎へ囁く。これにて兩人は上手障子の内へ入る。と上手の惣右衛門、田舎客の打扮にて先に立ち、新造、若い者喜介、太七、茶屋の若い者佐介、茶屋の下女お仙等附きて出來る。千山煙草を喫みゐる。

惣右　さあ／＼これから大酒とやらかさう。酒肴を思いれ持つて來るがいゝ。

新一　おや花魁、こゝにござんしたかえ。

新二　もし惣さん、花魁がお待兼でありんしたぞえ。

千山　おや惣さん、大そうよい機嫌でござんすね、面白さうにお浮れでお樂しみでござんすね。

惣右　あんまり面白くもねえけれど、あんまり貴樣が思はせぶりをするから、やけ酒でも飲まねえけりやあ氣が浮かねえ。

千山　又そんなことを言ひなます、私がこんなに思つてゐるのがお前には知れないかねえ。

惣右　何を思つてゐるか知れねえが、おれにやあちつとも分らねえ。

千山　えゝも憎らしい、（ト惣右衞門をちよつとつめる。）

惣右　あいたゝゝゝ、おつウ氣を持たせるの。

千山　どうともいゝやうにしてくんなまし。（トつんとして見せる。）

喜介　もし旦那、おうらやましうござりますね。

太七　花魁に氣を持たせて口說の後が、とは、えゝ畜生め。

佐介　そのお祝ひに、もし旦那、此間からお約束の三題噺をお願ひ申しまする。

惣右　何だ、三題噺をしろ、べらぼうめ高座でもなくつちやあ出來ねえわ。酒の座敷ぢやあ氣が乘らねえ。

お仙　もし〳〵そんなら日外淺草であたりました、談志さんのお座敷でなさんす唐人詞で唄をうたふの

をやつて下さいましな。
惣右　あいつァよつほどをかしいが、おれにできればいゝが、
喜介　そりやあまだ一度も承はりませぬが、どういふのでござります。
惣右　別に難しくも何ともねえのよ、發句にしろ狂歌にしろ、都々逸でもとつちりとんでも、唐人の詞でやるのよ。
太七　なるほど、そんなら國性爺の樓門で、びんかんださつぶおん／＼といふやうな、唐人詞で都々逸をやるのでござりますね。
惣右　まあさうよ。
千山　そんならその談志さんといひなんすは、アメリカの人でありんすかえ。
惣右　なあにさうぢやあねえが、唐人の眞似をするのよ。
お仙　その發句といふのを一つお願ひ申しまする。
惣右　先づ發句はかういくのだ。「ほうらつすいつぴんだいがるせがらん、」これが發句だ。
太七　さうして、狂歌はどういきます。
惣右　狂歌ならかういくのだ。「こんしうろあせんがぱいではんごんろたくらくちうがいつぴたるまん。「

お仙　面白いぢやござんせぬか、これから何ぞ唄をうたつて下さんせいなあ。

太七　都々逸といふのを一つお願ひ申します。

皆々　どうぞお願ひ申しますわいなあ。

惣右　えゝてんほのかは、やッつけろ。（トこれより都々逸の振になる。）

〽ろんがきうれんいつかんかん、ききんがせうく\でろうもんぴ、まづこんなものだ、これから大津畫といふのをやらかさう。

皆々　どうぞお願ひ申しますわいなあ。

〽ろつぺろが、うちうかん、りくぢぜんころかいろうび、こうらいちうぎやうれんし、へけろこかんきうきんすかん、ぺんらんすがそうらんかん、ぴうまんすがふけこんろ、ほたれきかんすきん、りくれこもすまんかこもれす、ばんろきんりやこう、りやんのうるめこひちれろん、すんりころはんなんすにや、ほんれいわころのらんぺんす。パアノく\。

ト惣右衛門扇を頭へ巻き手拭にてしばり、ちよつと唐人の思入にて振あつてをさまる。

惣右　まあこんなものだが、この唐人詞でまだ聲色といふ奴があるが、談志のはよつほどをかしくていいよ。

新造　面白いことでありんしたわいなあ。
喜介　旦那、まことに有難うござります。
太七　ほんとに旦那は御器用ぢやあねえか。
惣右　こう、あんまりおだてゝ貰ふまいぜ。
　　　ト皆々捨ぜりふにてわやくいふ、
お仙　もし皆さん、これからは花魁と旦那のしつぽりした人情噺でござんすわいなあ。
喜介　すゐを通して我々は、
太七　お中入りといたしませう。(ト立ちかゝる。)
惣右　こう〳〵さう一時に行かずといゝぢやあねえか。
お仙　また参りますわいなあ。さあ皆さん、
皆々　ござんせいなあ。(ト皆々奥へ入りて、千山と惣右衛門残る。)
惣右　べらぼうに騒々しい奴だ。とうと人を浮かれさして、とんだ藝をやらせやあがつた。
千山　久しぶりでお前の踊りを見たわいなあ。
惣右　お目にかける藝當でもねえのよ。ときに千山、もういゝ加減にうんと言つてもいゝぢやねえか。

ト千山の傍へ寄る、千山も思入あつて、

千山　さあ、私もどうかお前に、

惣右　え、

千山　ちつと頼みがあるわいなあ。

惣右　いゝ、ごうぎに時代に出かけたの、そりやあ何だか知らねえが、樣子によつたら頼まれめえものでもねえが、まあ言つて見るがいゝ。

千山　外のことでもないけれど、私やお前に折入つて、

惣右　金を貸してくれろといふのか、大方もうその音が出るだらうと思つてゐたよ、澤山の工面もできねえが、五百や六百の金ならいつでも差支へのねえ惣右衞門さんだ。然し無駄にやあ遣はれねえ、

千山　え、

惣右　あの幸次郎とすつぱり緣を切つたらば、そりや金もこゝに此の通りだ。（ト懷よりどつかりと金を出して見せて、）とんだ伊左衞門ぢやあねえが、總身が金で冷えるのだ。これがほしくばうんと言ひねえ。

千山　そればつかりは、

惣右　ならざあおれもやつはり厭だ、手前がほしがるその金も幸次郎へ貢ぐのだらう。

千山　あい、幸さんに貢ぐのでござんす。金に困つてゐなさんす幸次郎さんと緣切つては、あの千山は金持の襟につき幸さんを突出したと言はれては、私ばかりかこの大國屋の耻になりんす、そんな不人情ができるものかいなあ。

惣右　それぢやあどうとも勝手にしろ、いくら意氣地や義理づくで、きれいなことをぬかしても、女郎子供は賣物だ、金で自由にして見せるわ。

千山　もし惣さん、あんまり金ぢやの賣物ぢやのと、澤山さうに言うて下さんすな、もう私も賴まぬわいなあ。世話にならねば義理はござんせぬ。私も大國屋の千山でござんす、隨分お前を振り通して見せるわいな。

惣右　これ、いくら何とぬかしても、意地になりやあ身請して、自由にするわ。

千山　そりやもう身請をなさんすりや、親方さんへ任せたこの身、身體は賣つても心まで自由になつてよいものかいなあ。

惣右　さう言やあおれも男だ、今金渡して今日直に身請をすりやあ、煮て喰はうと燒いて喰はうとおれが勝手だ、その時みじめを見やあがるな。

千山　あい、そんなことで怖がるやうな千山ぢやござんせぬ、幸手とやらのお氣質と江戸で生れた氣性とは、ちつと違うてゐるわいなあ。

惣右　うぬ、その口を、

ト立ちかゝらうとする、この時新造の二出てこれを留めて、

新二　もし惣さん、何でありますね。まあ〳〵待つて下さんせいなあ。

惣右　えゝうつちやつておけ、あんまり口が過ぎるわえ。これどうで女に嫌はれるは覺悟の前の憎まれ口、然しあんまり愛嬌をなくすが厭さにお座なりをならべてゐりやあ方圖がねえ、これから金で面を張るぞよ。

千山　どうとも好きにしなましな。

惣右　しなくつてどうするものか、（ト又立ちかゝるを）

新二　まあ、おいでなさんせいなあ。

惣右　千山、覺えてゐろよ。

〽やら腹立に惣右衛門又立寄るを新造が、留める袂を振切つて裾を蹴たつて入る後へ、始終窺ふ幸次郎お民も共に立出でゝ、

ト惣右衞門悔しき思入にて奥へ入る、上手より幸次郎、お民出來りて、

幸次　これ千山、そなたはよう思ひきつたことを言やつたなう。

お民　私やどうなることかと、氣を揉んでをりましたわいなあ。

千山　もしお民さん、蓮葉なことをお聞かせ申し、決して笑うて下さんすなえ。

お民　何のまあその樣なことを。何事もなうてお嬉しうござんすわいなあ。

ト奥より平野屋の下女お竹と平野屋の手代與助附いて出來りて、

お竹　若旦那樣、これにおいでなされましたか。

與助　今日はお民樣のお供をいたしてまゐりました。

幸次　おゝお竹に與助か、御苦勞々々。

お竹　もしお民樣、もうよほどお手間がとれました、お話も濟みましたら夜更けぬ中にもうお歸りがよろしうございますわいなあ。

お民　ほんに、母さんが嘸お案じでございませう、そんなら私はもうお暇いたしまする。

千山　さつきのことは何もかも、私が呑込んでをりますほどに、決して案じて下さんすなえ。

幸次　これお民、私も直に歸るほどに、一足先へ駕籠を雇うて歸つてたも。

お民　そんならお先へ歸りまする。

千山　左樣ならお民さん、隨分道を氣をつけて、

お民　はい、有難うござりまする。

〽後にも心奧の間の廊下傳ひに出で行く、影見送りて千山が鴛鴦のふすまのそこはかと、
四邊見まはし傍に寄り、

トお民はお竹、與助と共に奥へ入る、千山後を見送つて幸次郎の傍へ行き、

千山　もし幸さん、何故默つてゐなますえ、お民さんに心が引かされるのでありんすかえ。

幸次　どう考へてもこゝの家を、

千山　歸りたいのでござんすかえ。

幸次　どうも後に心が殘つて、

千山　さう言つてくんなますと、ほんたうに嬉しいけれど、それではどうもお民さんに、

幸次　義理が濟まぬと言やるのか。

千山　切ない義理でありんすわいなあ。

〽心底を明せば常の女子より勤めする身は猶更に、まことづくしの裏なじみ、一二度が山谷の

立退も昨日と過ぎて今日が日まで、一日逢はねば氣にかゝる、

トよろしく別れををしむことあつて、

幸次　そんならこれが、

千山　えゝも、ぢれつたいねえ。

〽心を照す行燈も消ゆれば戀の闇の梅、髮の油の香を殘すもつるゝ夢や結ぶらん。

ト千山思入あつて行燈を消し、ぢつと幸次郎の傍へ寄り手を取る。これにて清元連中を消し、この道具廻る。

（深川佐賀町の場）――本舞臺中央に木戸、彼方一面町家の遠見、上の方へ寄せて天ぷらの屋臺店、道具一式を列べ、この傍に夜鷹蕎麥の荷、下の方に葭簀を立てかけ、よきところへ床几三脚ほど出しこゝに〇の天ぷら屋揚げてをり、蕎麥屋仁八蕎麥をこしらへてゐる、仕立し△□天ぷらを立喰ひしてゐる。この模樣通り神樂にて幕明く。

△　おい、海老はまだ揚らねえか。

〇　唯今直あがります。

□　蕎麥屋さん、早くしてくんな。
仁八　大きにお待たせ申しました。（ト蕎麥を出す、□取つて、）
□　こりやあ極熱ですてきだ。
△　ほんに、胡麻ぢやあねえが、駄物でこの位に喰はせるのは少ねえぜ。
○　胡麻ぢやあないとおつしやりますが、この油の高いのに胡麻を使つて引合ひますものか。
△　おきあがれ、とんだつんぼう話だ。
仁八　いや、この天ぷら屋さんは、よつぽど耳が遠うございます。
△　はあ、ほんたうにつんぼかえ。
○　ぎんぼはございませぬが、あなごぢやあいけませぬが。
三人　こいつあ大笑ひだ、はゝゝゝ。
□　ときに、おそくならねえ中に出かけようぢやあねえか。
仁八　まあ、ゆるりとなさいまし。
△　それぢやあ、錢は一緒にこゝへ置くよ。（ト屋臺店の上へ錢をおく。）
二人　へい、有難うございます。

△口　さあ、行かう〳〵。（ト下手へ入る。仁八は丼を片附けながら）
仁八　今夜のやうに商賣のある晩もすけないものだ。天ぷら屋さんお前まだ種はありますかえ。
○　種はあるが粉の切目で困ります、一寸この間に取つて來るから見世を少し氣を附けてゐて下さい。
仁八　あい〳〵、私が番をしてゐるから早く行つてござれ。
○　そんなら少し賴みます。
　ト○は下手へ入る。と唄になり上手より幸次郎思案のこなしにて出來り、少し後より小道具屋市助風呂敷を脊負ひ出來りて、
市助　もし〳〵そこへおいでなさるは、平野屋の幸次郎さんではござりませぬか。
幸次　はい、お呼びなさるは何人でござりますな。
市助　道具屋の市助でござりますよ。
幸次　おゝ市助どのか、それはまあ思ひがけない所で逢ひましたの。
市助　いやもう私は今朝からお前さんに逢はうと尋ねてゐたところ、さつき大國屋にゐなさると聞いたから、直にお目にかゝればよかつたのに、あんまり見越し過ぎてどうせ今夜はお歸りだらうと、大御年首ながら一寸山の先生の所へ顏を出すとお茶が出たので、大きに話が長くなり、それから大

國屋へ參つて見ると、もうお前さんはお歸りなされたとのこと、それから方々心當りを搜して歩いたので、がつかりくたびれました。

幸次　それはまあ無駄足をさせまして、お氣の毒でござりましたな。

市助　そりやなにお心安い仲だからようござりますが、それに就いて外のことでもないが、此間お前さんから頼まれて伊勢治へ質においた胡蝶の香合、勿論半月限りのお約束で借りて上げた百兩、もう日が限れるからといつて此間から矢の催促、もとよりお前さんも御得心のことだから、假令流しても否やはおつしやるまいが、それでも念だと思ひますから、明日までと言延べてはおきましたが、もう明日金をお遣はしなされぬと、伊勢治の方で賣つて仕舞ふと言ひますから、ちよつとお斷り申しておきます。

幸次　なるほど半月限りの約束で借りた故、日限が切れゝば餘所外へ賣らうといふは尤もぢやが、そりやあ私の物なら構ひませぬけれど、あの香合は知つての通り千葉樣の重器にて、袋の修覆に預つた大事の品、假令どのやうなことがあればとて、きつと私が受出すほどに、必ず外へやらぬやうそこはお前の働きで言延ばしておいて下さるやう、どうぞお頼み申します。

市助　もし〳〵そりやあいけませぬ、何故とおつしやい、その言譯も此間から幾度か、さう〳〵私だつ

て先方へは申されませぬ。何でも明日までに十兩と利息を添へておよこしなされぬと、明後日は外へ賣りますから、さう思つておいでなさい。（ト言つて立上るを、幸次郎留めて、）

幸次　さ、さ、さうでもあらうが明日というてもあまり早急、せめてもう四五日のところをば、

市助　なに早急なことがありますものか、此間から幾度御催促申したか知れませぬ。

幸次　それも此方にいろ〳〵と苦勞なことがあつた故、つい延々になりましたが、今度はきつと間違はぬほどに、どうぞ先方へよいやうに、

市助　もういけませぬ〳〵、明日までは待ちますが、それから先は待てませぬ。（ト又行きかける。）

幸次　これはしたり、さう言はずとも、どうぞ情に、

市助　えゝ知りませぬ（ト留める幸次郎を手荒く突倒し、）馬鹿々々しい。

ト市助は足早に上手へ入る、幸次郎直に起上り、市助の後を追つて行きて、

幸次　あゝもしちよつと待つて下されし、もうし〳〵市助どの〳〵。あゝもう行つてしまうたか（ト本意なき思入にて思案しながら元のところへ戻り、）身の不始末とは言ひながら、斯うも難儀の重なるものかあの千山が身請の手詰、殊に今市助が言葉といひ、明日中に百兩の金こしらへぬその時は、人手に渡る大切の香合、もしも我手へ戻らねば家に拘はるのみならず、生きてゐられぬこの身體、と

あつて金の調達もだん〳〵積る遊びにて、彼處やこゝと手の届くだけは無心のその上に、百兩といふ金を所詮貸さうところもなし、こりやまあどうしたらよからうなあ。

ト思案の思入、この中葭簀の蔭より髪結の藤次窺ひ出で、この時思入あつて前へ出で、

藤次　もし若旦那、幸次郎様、お久しぶりでござりました。

幸次　さういふこなたは、

藤次　へい、髪結の藤次でござります。

幸次　おゝ藤次か、どうしやつた、聞けばそなたは和國橋を引越したといふことぢやが、そして今では何處にゐやるのぢや。

藤次　まことに申上げるのも面目次第もござりませぬが、御存じの酒故にたうとう世帯を仕舞ひまして唯今では友達のとこに同居いたし、手間をとつて歩いてをります。

幸次　やれ〳〵それは不仕合せな、さうして御内儀のおむつどのや小さいのにも替ることもないかの。

藤次　いえ、女房はちと仔細ござりまして離縁いたすに就きまして、子供イら二人も、總領はまだ頑是がござりませず、小さいのは乳呑なり、男の手一つで銜へてもをられませず、よんどころなく舅の方へ一緒に附けてやりました。

幸次　それはまあどういふ譯か知らぬけれど、子まであるおむつどの、勘辨なるなら私が挨拶、心なほして元々へ戻してやつたがよいではないか。

藤次　有難うはござりますが、唯今では元々にならうと申して家はなし、居候の悲しさは夜食の替りにこゝへ來て蕎麥を喰べてをりますと、ふつとあなたのお聲故、それでお呼び申したくらゐのことでござります。

幸次　え、そんなら、最前からの様子をば、

藤次　はい、殘らず聞いてをりましたが、何もお案じなさることはござりませぬ、金錢は世界の廻り物またよい分別もござりませう。それはさうと往來中、立ちながらお話しもできませぬ、まあそれへおかけなされませ、

ト藤次手拭にて床几の塵を拂ふ、幸次郎捨ぜりふにて會釋して床几へかけろ。

ときにあなた、御時分なら、お蕎麥は如何でござります。

幸次　いやもう私や何にもほしうはない。

藤次　駄物にしては隨分よろしうござります、だまされたと思召して一つ上つて御覽じまし。

幸次　決してもう構やるな、この頃は苦勞が多いので何にも咽喉へは通りませぬ（トちつと思入。）

藤次　もし若旦那つまらぬことを苦勞にして、物さへろくに召上らず御病氣でも出ぬやうになさいまし、このやうに申しますのも御恩になつた藤次故、今更申さずとものことでございますが、私のお袋が弟を生みまして貧乏暮しに育て兼ね、葛西の百姓へ里にやり、あなたのお家へお乳母に上りその御緣で私が長々お家の御厄介、どうぞして御恩送りと思ひます中、母もなくなりその後は誰一人叱り人のないを幸ひ、好きな酒故身を持崩し、たうとう家さへない始末、剩へ女房や二人の子供の緣を切り、ほんの木から落ちた猿、あてにするではございませぬが、葛西へやつた弟野郎も、十四の時に拔參り、それからぐれ出しこの頃は兩國邊にごろついて、今では遊び人の仲間へ入つたとやら聞きましたが、どうせ始終はお上の御苦勞、難儀こそかけ私のちつとも爲にはなりませぬ。

幸次　それも年が行かぬ故、前後見ずの不了簡、私なども今聞く通り、ひよんな事して今日明日につゞまる金にこの身の切羽、

藤次　してまあ、その香合とやらを質にお入れなされましたその金は、何にお遣ひなされました。

幸次　さあ聞いてたも、うす〳〵噂にも聞いてゐようが、大國屋の千山といふ女郎に馴染、夜晝となく通ふ中、幸手から來る田舍客が身請すると聞いた故、何でも先を越されまいとは思へども、金の

工面に手支へてよんどころなく、千葉樣から預つた香合を質入なして金こしらへ、それを持つて深川へ行く途中にて盜人にその金取られてしまうたわいの。

藤次 え、そんならその金を盜人に、そりやあまあいつ頃のことでござりました。

幸次 忘れもせぬ先月二十日の夜、丁度兩國の百本杭の所で、

藤次 何とおつしやります、そんなら先月二十日の晩、所は兩國の百本杭、（ト思入あつて）もし、そりやあ何時ごろでござりました。

幸次 まだ四つ前のことであつたが、而もその夜は朧にて、人影さへもはつきりと見えぬ二十日の宵闇に、まだ年若などろぼうに金を取られるその所へ、往來の人か同類か、出逢うた者も二人ほど、

藤次 （思入あつて）醉つて前後は存じませぬが、丁度その折私が和國橋から引越のその日も同じ二十日の晩、百本杭で醉倒れ、酒の上にて女房を去つた時刻も二十日の四つ前、

幸次 ふむ、そんならあの晩こなたもあそこに、

藤次 をりましたが例の醉人、一向に存じませんだが、そりやあまあ何にしてもとんだことでござりましたな。

ト此中幸次郎前幕にて手に入りし竹門ノ虎の守袋を出して、

幸次　何も役には立たぬけれど、その盜人が肌にかけたる守袋をば財布と心得引合ひしが、つひに私が手に入つたを證據にさがせど、今にまだこれぞこいふ手がゝりもなく、まことに困つてゐるわいの。

藤次　すりや守袋があなたのお手に、どれ、ちよつとお見せなさりませ。（ト取つて見て、）何ぞ中に證據にでもなりさうな品はござりませぬか。

幸次　何も證據になりさうなものはないが、いろ〳〵なお守りと臍の緒書が入つてゐるわいの。

藤次　そりやあもしや手がゝりになるまいものでもござりませぬ。

ト言ひながら手早く守袋の中より臍の緒書を出し、よく〳〵見て、

や、この臍の緒書は、（トびつくりする。）

幸次　よい手がゝりでもありますか。

藤次　いえなに、手がゝりはござりませぬが、これを證據に搜しましたら、知れさうなこの盜人、これからはあなたより私が詮議をいたし、どうかこれまでの御恩送りにその金の調達をいたしてお目にかけませう。

幸次　落目を見捨てぬそなたの親切、忝なうは思へども、何をいうても大まい百兩。

藤次　貧乏暮しのこの藤次、見たこともない百兩の金、所詮出來よう筈はござりませぬが、そこが今も申す通り、金は世界の湧物なれば、どうかしたならできませうから、膝とも談合、私に任せておおき下さりませ。

幸次　そんならこなた氣の毒ながら、どうか才覺してくりやるか。

藤次　きつといたす心なれど、もしもまるで出來ませずば、半分なりと出來次第、早速お宅へ持つて上りまする。

幸次　知つての通り手詰の金、出來ることならなるたけ早う。

藤次　お氣遣ひなされますな、どうかお間に合はせませう。

幸次　何分ともに賴みまする。

藤次　左樣なら、この守袋は私がお預り申しておきます。（ト守袋を懷へ仕舞ひ）然し若旦那、この節は物騷だと申しますから、あまり更けぬ中急いでお歸りなさいまし。

幸次　ほんにさうしませう、私やもうこの間で懲りたわいの。

藤次　御尤もでござります。

幸次　（身繕ひをして立上り）力と賴めど好きな酒、もし約束が違うた時は、

藤次　あゝ申しお案じなさいますな、此間からさつぱりと酒は止めてしまひました。

幸次　それでは私も安堵しました、そんなら藤次、

藤次　若旦那樣、

幸次　必ずともに、

藤次　承知しました。

幸次　待つてゐますぞよ。（ト花道へ入る。藤次後を見送り思入あつて、）

藤次　思ひがけない臍の緒書、びつくりしまいか上書は覺えのある親父の手蹟、どうぞして今までの少しは御恩を送らうと思ひのほかに若旦那の金を盜んだ盜人は、葛西へやつたおれが弟、惡い奴でも五本の指切つても切られぬ兄弟が、知らぬことゝは言ひながら恩を仇なるこの始末、濟まねえことゝ思ふから受合つたとは云ふものゝ家を仕舞つて友達の厄介になるおれが身で、百兩は扨置いて五兩の金もできるものか、然しそれができねえ時は、若旦那のお身の上、たとへ命にかけてなりとその百兩の金をこしらへ、上げねば濟まぬ身のせつぱ、あゝこりや、どうしたらよからうなあ。

ト腕を組み思案の思入。花道より前幕の唐人市兵衞抱兒に赤い手拭を冠せ、懷へ入れ出來る、後よ

り國松泣きながら附いて來る。

市兵　あゝ餓鬼はいやだ〳〵。ちつぽけな方は疱瘡でびい〳〵泣きやあがる、大きい野郎は駄々でほえる、いけやかましくてなりやあしねえ、餘所の老人は孫は可愛いといふが、おらあちつとも可愛くねえ。これが種腹分けねえだけか知らぬ。あゝ何にしてもうるせえものだ。

國松　ぢいさん、おんぶしておくれよう。

市兵　えゝやかましい、さつさと歩きやあがれ。

ト國松を先へ突きやり小言を言ひながら舞臺へ來る、藤次これを見て思入あつて葭簀の蔭へかくれる。

おい、蕎麥屋さん、極くあつくして一ぱいくんな。

仁八　はい〳〵（ト手早くこしらへ盆へ載せて出し）左樣なら極くいゝあつでござります。

ト市兵衞取つて蕎麥を食ふ、國松見て、

國松　ぢいさん、おいらも喰べたいよ。

市兵　今芋を買つてやつたに、よく喰べたがる餓鬼ぢやあねえか、意地のきたねえことをいふとなぐりつけるぞ。

國松　それでもおらあ喰べたいもの。（トべそ〳〵と喰ひたさうに泣く。）

市兵　また泣きやあがるか、喰ふものが身にも皮にもなりやあしねえ、いめえましい餓鬼ぢやあねえか。

ト言ひながら國松の頭を打つ、この拍子に抱兒の顔へ蕎麥の汁かゝりしこなしにて泣く。

仁八　もし、おちひさいのはどうぞなされましたか。

市兵　なに、今この餓鬼をなぐる拍手に蕎麥の汁が顔へかゝつたから泣くのだが、ほんとによく泣く餓鬼どもだ。

仁八　そりやもうおちひさい中は、どこのもあたりまへでござりまする。

市兵　お前がそんなことを言ふからいゝことにして、猶泣きやあがる、いけ騒々しい餓鬼だ、いゝ加減に泣きやあがれ。

ト立つて行つて國松を打たうとする、この時藤次怺へ兼ねて葭簀の蔭より出て市兵衛を縋り留め、

藤次　まあ〳〵父さん、どうぞ待つておくんなせえ。

市兵　なに、父さん（ト藤次を見て）や、こりや藤次だな、由縁かゝりもねえ者が、何で留めるのだ。

藤次　由縁かゝりがないといつて、可愛さうに頑是もないものを、さう手荒くするには及びませぬ。

市兵　打つちやつておけ、おれが孫だ、生かさうと殺さうと自由だ、うぬらが世話になるものか。

ト又打ちにかゝると、國松あわてゝ藤次に縋りつきて、

國松　父や、ぢいさんにあやまつておくれ。

藤次　おゝいゝよ／＼案じるな／＼。（ト國松を後へ圍ひ懐にゐる抱兒を見て、）見れば弟は疱瘡をしてゐますに、夜露がかゝつては惡くはござりませぬか。

市兵　べらぼうめ、貧乏人がそんなことを厭つてゐられるものか、此間から疱瘡だが乳はなしどうで今にくたばるだらう、早く死ぬのを待つてゐるのだ。

藤次　乳はないと言ひなさるが、おむつはどうしました。

市兵　どうしようと親の勝手だ。どうでおれがことだから、遊ばして喰しちやあおけねえ。今まで手前にくれておいたので年中ぴい／＼どん／＼と、唐人飴を賣つてゐた替り、これから樂をしにやあならねえ。おむつも手前の所にゐる時とは打つて替つてこの頃は、絹物ぐるみで毎日々々旨えものを喰つて樂をしてゐらあ。たゞ慘なのは餓鬼どもだ、彼女がゐぬから乳はなし、おれがことだから喰はせるものもろくに喰はせず、まさかひねり殺しやあ世間の口、こつちへそれだけ兇狀を着るのだから、飢ゑ死ぬのを待つてゐるのだ。おゝ蕎麥屋さん、大きにおやかましうござりました、錢はこゝへおきましたよ。

仁八　有難うございます、お靜においでなさいまし。

市兵　さあ、夜の更けねえ中、早く歸らう、さつさと歩べ、

ト立上る、此中藤次ぢつとうつむいて思入、國松藤次に縋りて、

國松　父や、おらあお前と一緒に行きたい、ぢいさんと行くなあいやだ〳〵。

市兵　うぬ、あんなまづいことをぬかしやがる。（ト打たうとするを藤次留めて）

藤次　あゝもし、今のはほんの子供のわやく、腹も立たうが私が詫りますから、どうぞ堪忍してやつておくんなせえ。（ト市兵衞を宥め、國松を前へ引附け思入あつて、）これ國や、聞分のねえことを言ふものぢやあねえぞ、父が家せえありやあ連れて行くがな、おれも今ぢやあ宿無同然、餘所の小父さんの所にゐるのだから、あいといつてぢいさんの所へ行つてくれ、二三日の中にはきつと父が迎ひに行くから、をとなしく待つてゐろよ。

國松　いやだ〳〵、おらあ父と一緒に行くのだ〳〵。（ト地團太を踏んで藤次に縋る。）

市兵　いめえましい、强情な餓鬼ぢやあねえか。

ト言ひながら國松の頭を打つ、國松はわつと泣き出すを藤次引寄せて、

藤次　それ見ろ、情の强いことを言ふから打たれらあ、もういゝ泣くな〳〵。（ト國松の淚を拭いてやり、

思入あつて市兵衞に向ひ、）もし父さん、どうぞ私が願ひだから、そんなひどい目に遭はせずにおくんなせえ。私もその中どうか振合さへつけば、また話し合ひにしますから、それまでのところをば、不便と思つて目をかけてやつておくんなせえ。

市兵　何の他人の手前の賴み、そんならさうかと甘くして育てるものか、これからは今までよりは輪をかけて、まだ／＼こんなことぢやあねえ、もつとひどい目に遭はしてやるわ。それとも又手前こそ不便だと思ふなら、男の兒は男へつくがあたりめえだ、汝に渡すから引取つて行け。

藤次　そりやあ家さへあることなら引取りやすが、今言ふ通り何をいふにも同居の身なれば、

市兵　ならざあいゝわ、おれが方でこれからは喰物も喰はせずに、ひだるい目をさん／＼させ、干殺しとしてやらうから、親甲斐だけにおれがとこへ骨でも拾ひに來るがいゝ（ト立上り）やい、泣蟲めら、うしやあがれ。

國松　父と一緒に行かうよウ／＼（ト泣いて厭がる。）

市兵　えゝごうつくばりめ、汝が親父は宿無だ、われもなりたけりやあしてやるから、きり／＼と歩みやあがれ。

國松　いやだよ／＼、（ト泣くを市兵衞引きづツて行かうとするを見て、藤次堪へられぬ思入にて、）

藤次　父さん、待ちなせえ。

市兵　待てとは餓鬼を引取る氣か。

藤次　明日が日親子一緒に死ぬとも、これを見逃しちやあおかれねえ。ようござります、二人ながら引取りませう。

市兵　そりやあまあ、奇特なことだ。（ト國松を連れて戻つて來て、）さあ〳〵これでおれも厄介拂ひだ。それ、受取つたり、

ト懐の抱兒を出し藤次へ渡す、赤兒頻りに泣くを藤次取り懐へ入れ、いぶりつけながら、

藤次　長々大きにお世話樣でござりました。（トむつとせし思入にてそつけなく言ふ。）

市兵　あゝ、さば〳〵とした。おゝ然し手前に言つておくことがあるが、この後どんなことがあつて引取つてくれと再び連れて來ても、もう引取られねえからさう思へよ。

藤次　そりやあ私も男だもの、假令困つて火の中へうつちやればとてこなたの所へ、どの面下げて行かれるものか。

市兵　なるほど口は立派だが、人口ほどに行かず藥能書ほど利かずと譬の通り、言つたことが間違つて乞食にでもなつたらをかしなものだ。然しなつたら來るがいゝ、噓にも親子の誼だけ、手の内ぐ

らるはくれてやるぞ。

藤次　そりやあ働きのねえ私だから、乞食になるかもしれませぬが、假令餓ゑて死ねばとて、何で再び
　こなたの家へ、

市兵　來なけりやあ倘いゝが、可愛さうだと思ふからよ。

藤次　もし、よくなつたら御禮には上りませうよ。

市兵　手前その詞を忘れるなよ。

藤次　何の忘れていゝものか。

市兵　それぢやあ藤次（ト言ひながら立上り、）長え目で見てゐるぞよ。

　トせゝら笑ひながら上手へ入る。藤次後を見送り口をしき思入にて、

藤次　あの根性ぢやあこいら二人を嘸むごくしたことだらう、僅な間でも可愛さうに、何にも知らぬ手
　前達にこんな憂目を見せるのも、みんなおれが惡いからだ。どうぞ堪忍してくれよ。（ト抱兒泣く
　をいぶりつけながら、）おゝたがよく／＼、こりやあ大方ひもじくなつたのだらう、あゝ乳に困るなあ
　（ト當惑の思入。）

國松　父や、おらもひもじいからお蕎麥を喰べようよ。

藤次　おゝ喰べろ〳〵。蕎麥屋さん、小僧に一つやつておくんなせえ。
仁八　はい〳〵、子供衆には何ぞ入つた方がようござりませうね。
藤次　さうさ、しつぽこがよからうよ。
國松　おらあ天ぷらがいゝや。
藤次　しやれたことを言やあがるな。
仁八（蕎麥をこしらへ持來りて）へい、ぼつちやん、出來ました。（ト國松取つて喰べる。）
藤次　ひもじいと見えてがつ〳〵しやあがる、こんなものゝ咽口をほすとは、あんまり非道な親父ぢやあねえか。（ト獨語のやうに言つてほろりと思入。）
仁八　もし、今のお方は舅御さんでござりますかえ。
藤次　どうだえ蕎麥屋さん、ありやあ私が去つた嬶の親父だが、邪慳な奴ぢやあござりませんか。
仁八　御尤もでござりますよ。いやも他人でさへさつきから涙がこぼれますやうでござりました。
藤次　それがお前人情だわね、（ト抱見泣く。）あゝまた乳か、男の手一つぢやあこれによわる。（トいぶり附け、思入あつて國松に向ひ小聲にて）これ國や、父がゐなくなつてから、誰か家へ來たらうな。
國松　おゝ來た〳〵。

藤次　誰が來た。
國松　豆腐屋のおばあさんが來た。
藤次　女ぢやあねえ、男が來たらう。
國松　むゝ、男も來たく。
藤次　好い男か醜い男か。
國松　何だか知らねえが男だ。
藤次　その男は泊つたか。
國松　あゝ、泊つた。
藤次　おほかたそんなことだらうと思つた、その男はどこの男だ。
國松　その男か、家のぢいさんよ。
藤次　えゝ何を言やあがる。それ見ろ汁をこぼした。（ト手拭で膝を拭いてやり。）さうしてお母あはどうした。
國松　お母あはおしろいをつけてノ、いゝ着物を着て餘所へ行つたよ。
藤次　それぎり家へ歸らねえか。

國松　あゝ、それぎり歸らねえ。
藤次　手前お母あがゐなくなつちやあ、毎晩ぢいさんと寐るか。
國松　なあに、おらあ一人で寐るよ。
藤次　なに一人で寐る、ぢいさんとは寐ねえのか。
國松　ぢいさんは叱つてばかり、赤兒もおいらも一人で寐らあ。
藤次　辻番火鉢でも入れて貰ふか。
國松　いゝや、入れやあしねえ、ぢいさんばかり入れて寐らあ。
藤次　そりやあ嘸寒からう、さうして何を着て寐る。
國松　お母あの半纒を着て寐るよ。
藤次　えゝこの寒いに、半纒ばかりで寐かすといふなアあんまりだ、いかに違つた孫だつて、よくもそんなことができたことだ、それぢやあろく〳〵に寐られやあしめえな。
國松　あい、赤兒が泣くとぢいさんがだませ〳〵と言ふから、おらあほんたうに寐やあしねえ。
藤次　えゝ可愛さうに、堪忍してくれ。僅六つか七つの者にこんな苦勞をさせるのも、元はといやあおれが酒から、どういふ譯か知らねえが、彼女もこんな子を捨てゝ、何處へ妾に行きやあがつた

か、(ト思入あつて、)これ、お母あは父のことを、何とか言つてゐたらうな。

國松　あゝ、言つたよ〳〵。

藤次　何と言つたか、言つて聞かせろ。

國松　叱られるからおらあ言はねえや。

藤次　誰が叱るものか、坊は利口ものだから直言ひます、父に言つて聞かせると、好な物を買つてやるぜ。

國松　それぢやあ言ふから、凧を買つてくんねえな。

藤次　おゝ、買つてやるから、お母あは父のことを何と言つた。

國松　あの、お前のことをの、

藤次　むゝ、おれのことを、

ト この話の中に藤次段々に前へ乘出す、國松これに押されて後へさがる。

國松　父や、そんなにおいらを押して來ると、おつこちるよ。

藤次　(心附いて後へ下がり、)さあ、お母あは父のことを何と言つた。

國松　あの、

藤次　あの、

國松　あんなよたんぼは父にするなと言つた。

藤次　いや、酷いことを言やあがる、はゝゝゝ。

　　ト この時木戸の中より番太郎五つの拍子木を打ち出來り上手へ入る。

おゝうかくしてゐたらもう五つだ、更けねえ中に出かけよう。（ト 懷より錢を出し、よんで見て、）もし蕎麥屋さん、お氣の毒だが小僧の食つたので、十六文足らねえから、明日の晩まで貸しておくんなせえ。

仁八　いつでもよろしうございます。

藤次　僅ばかりの商賣で、お氣の毒だねえ。

仁八　どういたしまして、

國松　父や、寒いから早く行かう。

藤次　おゝ行かうく、南の吹返しでめつぽうに寒い。（ト言ひながら手を引き立上り空を見て、）あしたは雪にならねえけりやあいゝが、

　　ト 國松の手を引き花道へ入る。仁八そこらを片附けて、

仁八　もう今夜はこれで商賣もやまどめだらう、だいぶ物騷だといふから更けぬ中そろ〳〵見世を片附けよう。（ト葭簀の中を見て、）おゝまだこゝに一人、宵から寐てゐる客人がある（ト傍へ寄り、）もしもしお前さん、もう五つでござりますよ、早く起きておいでなさいまし。

ト搖り起す、それにて脊延をしながら起き、頰冠りを取ると、巾着切竹門の虎にて床几へ腰をかけ、

虎　あゝ昨夜寐ねえのでぐつすりと寐た。蕎麥屋さん、お約束だが何時だえ。

仁八　今五つを打ちましたよ。

虎　夜はつまつたなあ（ト言ひながら前へ出て彼方へ思入あつて、）おい兄貴、どうぞ堪忍してくんねえ、さつきから葭簀の陰で寐た裝をして、出るにやあ出られず聞いてゐたが、知らねえことゝはいひながら、百本杭で百兩の金を取つたは、お袋が御恩になつたお主樣、言はゞおれとは乳兄弟、その金故に兄貴にまで難儀に難儀をかけるのも、元はと言やあ皆おれ故、こいつあ一番立役に返つて恩を返さにやあ、天道樣へ濟まねえわえ。

仁八　天ぷらで上げますかえ。

虎　え。むゝ、（トうなづくを木の頭、）熱くしてくんねえ。

ト虎ぢつと腕を組み思案の思入。仁八は蕎麥をこしらへてゐる。その模樣時の鐘の送りにてよろしく

と雪おろしにてつなぎ引返す。

ひやうし幕

三幕目

神喜別莊門外の場

〔役名――髮結藤次、神喜の下男權助。神喜妾おきん實は藤次妻おむつ、下女おもと、おたけ、おたき、おなべ。藤次倅國松。〕

（龜井戶神崎別莊の場）――本舞臺一面に平舞臺、中央に屋根附の門、左右屋根附の塀、この前に汐入の流れ、石橋、見越しに松梅柳の立木、上手へ寄せて二階家、正面銀張墨繪の襖、前側に塗骨障子を閉てきりあり、この道具總て雪持にて、舞臺花道とも雪布を敷き、總て龜井戶邊神崎屋別莊の體。こゝに下男の權助雪除を持ち雪をかいてゐる。門の下に下女のおなべ立つてゐる。この見得鞠唄雪おろしにて幕明く。

權助　こうおなべどん、暮の中は降らねえ雪が春になつてから降るといふは、難儀なことぢやあねえか。

なべ　それに江戶と違つてこゝらぢやあ、一度降ると半月づゝは道が惡くつて歩かれない、使に出るのにまことに困るよ。

權助　なんの、困ると言つたところか、お前達のは八百屋か豆腐屋、困りがしらはこの權助、橋本へ行つて來いの小倉庵へ行つて來いのと、雪風に吹きさらされて、どんなに寒いか知れやあしねえ。

なべ　ほんにそれは察しるよ、それに引替へおきんさんは、こちらの家へお抱へになつて、ほんとに仕合せなことだねえ。

權助　違えねえ、どんな月日の下に生れたか、さうしてあの人には子があるかえ。

なべ　さ、而も乳吞兒があつたと見えて、毎日乳をうつちやるわな。

權助　うつちやるとは勿體ない、おきんさんの乳なら飲みたいものだ。

なべ　ほんに女は氏なうて玉の輿と譬にも言ふ通り、元は髮結の女房ださうだが、のんだくれの亭主故夫婦別れをしてしまつて、親元へ歸つてゐたを、芳町の松市が旦那樣へお世話をして、お妾になつたのさ。

權助　そいつあごうぎな仕合せ者だが、親元は何者だえ。

なべ　それ、ちやるめらを吹いて來る年を取つた飴屋だが、いゝ春をしたさうだ。私もこの三月はお暇を貰つて、どうぞ支度金の澤山出るとこへでも行かうかと思ふよ。

權助　違えねえ、當時はそのことだなう。

なべ　えゝも、考へだすとほんとにぢれつたいよ。（ト權助の脊を打ち門の內へ入る。）

權助　人を馬鹿にしてゐやあがる、おのれの顏の出來の惡いのを棚へ上げておいて、えゝもぢれつたいもないものだ、面と相談をするがいゝ、

ト言ふ折おなべ後ろの塀から顏を出し、雪を打附ける。

えゝ、つめてえ、何をしやあがる。

なべ　何をしやあがるもねえものだ、面と相談しろとは何のことだえ。（ト首をすつこめる。）

權助　えゝいめえましい奴だ。

ト雪除を擔ぎ下手へ入る。時の鐘を打上げ床の淨瑠璃になる。

〽あらたまの春とはいへど降る雪に、殘る寒さの西ならい、吹雪を厭ふ破傘の紙さへ薄き身の上に、藤次も今は酒よりも浮世の夢の醒めはてゝ、子故に迷ふ夜の鶴、

ト雪おろしにて藤次懷へ紅染の手拭を冠りし抱兒を入れ、破れし番傘をさし、後より國松竹笠を冠り、兩人とも下駄にて出來り花道へ留り、

藤次　あゝ降るわ〳〵、さつきから降り通しだが、春の雪のやうではなく寒い故か少しも解けねえ、どうぞ澤山積らねえければいゝが、（ト抱兒泣くので。）おゝ泣くな〳〵、さつき一ぱい呑ましたぎり

故香みたくなつたか、泣くなく〵。

國松　父やおいらも何か喰べたくなつた。

藤次　お〻さうだらう〵、嘸飢くなつたらうが、今にお飯を喰べさせるから、もうちつと辛抱してくれ。

國松　どこで飯を喰べるのだえ。

藤次　さうよ、八百善にしようか大七にしようか、やつぱりいつもの飯屋にしよう、居候の身の上に朝は茶漬晝は居酒屋、こ〻やかしこで喰はせる故家で喰はぬものにしてゐる。嘸手前も寒からうが、赤兒を抱いてゐるからおんぶが出來ねえ、さあ、手を引いてやるからあんよをしてくれ。

國松　なあに、おらあ寒かあねえ、あんよする方がおもしえ〻（面白い）。

藤次　お〻利口者だ〵。え〻又泣くか、赤は馬鹿だなあ。

〽だましすかして來る道に躓づく下駄も緣のはし、切る〻鼻緒に立留まり、

ト藤次國松の手を引き舞臺へ來り躓き、下駄の鼻緒切れる。

あ〻しまつた、下駄の鼻緒を切つた。

國松　でえ〵を呼んで來ようか。

藤次　おゝよく氣が附いてくれたが、この雪ぢやあ直し屋は居ねえから、こゝの門の下で立てゝ行かう。

〽さしでる門の軒の下、我兒を蔭に身を寄せて、

ト國松を蔭に入れ門の下へ入る、この時抱兒泣く。

飢じくつて泣くのだらうが、さう泣かれてはたまらない、だまつてくれ〳〵、今にどこぞ乳のある番太を見つけて貰つてやらう。おゝ泣くな〳〵（ト抱兒の泣くをいぶりつける。）

國松　父や、赤兒が泣くならおんぶしてやらう。

藤次　おゝ雪が止んだらおんぶしてくれ、降る中は濡れるから父の懐へ入れておかう。

〽泣く兒いたはり取出す財布も錢も切れはてゝ、縒の戻りし錢緡を通す手さへも凍る寒さ、

折しも内より下女が立出で、

ト藤次懐より詰金の財布を出し、中より緡を出し、鼻緒を立てようとして寒い思入。この時門の内よりおいね仲働きの打扮にて乳を入れし眞鍮の耳盥を持つて出來る。

いね　おゝ今の間にたいそう積つたこと（ト藤次を見て）これ〳〵お前こゝにゐては惡いぞえ。

藤次　へい、左樣でござりますか、御覽なされます通り、この雪に鼻緒を踏み切り難儀いたします者でござります。どうぞ鼻緒を立てます中、お貸しなされて下さりませ。

いね　その位なことならようござんすわいな。おゝ見れば小さいのを連れてゐなさんすな。

藤次　お袋がござりませぬから、かうして抱いて歩きますが、乳に饑ゑますので泣きたてたれて困ります。

いね　それは嘸困りなさんせうわいな、ほんに物事といふものは自由にならないもので、私どもの家のお妾なぞは乳が澤山出るのに子供がなくて、これ見なさんせこのやうに度々しぼつて捨てますのさ。

藤次　へゝえ、すりやお家のお妾様は、澤山乳がござりまして、そのやうにお捨てなされますとか。

いね　あい、日には幾度だか知れぬわいな。

藤次　どうぞさういふ所にて一ぱいづゝお貰ひ申したいものだ。何にいたせその乳を捨てゝおしまひなされますなら、お貰ひ申したいものでござります。

いね　あゝ、どうせ捨てゝしまふ乳、呑ませるなら呑ませなさんせ。

藤次　それは有難うござりまする。

〽子を思ふ身の親心、淺黃にあらぬ手拭の端に浸して呑ますれば、血筋の乳に泣き止む幼兒

ゝよろしく呑ませて、

乳を口へ入れましたら、直に泣き止みましてすぱ〳〵と吸つてをります。
いね　それはようござんす、澤山呑ませなさんせいな。
藤次　有難うございます。（ト此の中乳を呑ませて、）もうたんのういたしましたか、口から乳を出しまする。
いね　そんならもうようござんすか、よければ後を捨てますから。
藤次　あゝ入物がございますなら、お貰ひ申しておきませうに、（ト殘りをしき思入。）
國松　赤兒は澤山お乳を呑んだが、おいらも何ぞ喰べたいもんだ。
藤次　さうだ〳〵、手前には父が又今に餅を買つてやるぞ。
いね　（思入あつて、）おゝこゝによいものがあつた。（ト袂より紙に包みし菓子を出して、）今歌がるたで取つたこのお菓子、これをお前に上げうわいな。（ト國松にやるを明けて見て、）
國松　やあ、こりやあいゝお菓子だ〳〵、父や番太のぢやあないよ。
藤次　これは〳〵結構なお菓子を有難うございます。これ、よくお禮を申して一つ喰べや。
國松　小母さん有難う。（ト辭儀をする。）
いね　ほんに、可愛い子でござんすな。

トこの中藤次四邊へ思入あつて、

藤次　いやもしお女中樣、この邊には珍らしい立派なお住居でござりますが、何御生業でござりますな。

いね　いいえ、こゝは御別莊故御生業はないけれど、御本宅は傳馬町で、今江戸一の唐物屋神崎屋と申しますわいな。

ト藤次扨はと思入あつて、

藤次　えゝそんならこちらは神崎屋の御別莊でござりますか。それではたしか近い頃お妾がまゐりましたらうな。

いね　はい、本所からおきんさんといふ、よいお妾がまゐりました。

藤次　そのおきんさんといふお妾は、こちらにおいでなさいますか。

いね　この御別莊がお住居で、旦那樣は御本宅から時折おいでなされまする。

藤次　左樣でござりますか。(ト内へ思入。)

いね　さあ、澤山積らぬその中に、早う行かしやんせいなあ。

藤次　有難うござります。

いね　あゝ、いとしいことでござんすなあ。

〽心殘して入りにける、藤次は後を打見やり、

ト　おいねは思入あつて門の內へ入る。藤次後を見送り思入あつて、

藤次　そんならおむつが妾に行つた神崎屋といふのは、こゝの家か、聞いたよりは立派な住居、下女でさへあのやうなやはらか物を着てゐるからは、まして妾のことなれば縮緬づくめで、何一つ不自由もなく暮してゐるさう。それに引替へ去年から着のみ着のまゝ家さへなく、まご／＼して步くといふなあ氣の利かねえことだなあ。これにつけても胸支へは若旦那の金のこと、譬にもいふ膝とも談合、おむつに一目逢ひたいものだ。

〽門の戶押せど閂に明かで塞がる胸の中、とやせんかくとなすところへ、立出る下男が見るよりも、

ト藤次門の戶を押しても明かぬ思入、この時下男の權助出來りて、

權助　やい／＼、汝や物貰ひか、軒下へはならねえぞ。

藤次　いえ、物貰ひぢやあござりませぬ。往來の者でござりますが、下駄の鼻緒が切れましたから、それを立てゝをりますのさ。

權助　此間もそんなことを言つて、この先の軒下へ捨兒をして行つた奴があつた。おくことはならねえ、

立つて行けく。

藤次　そんなことをするものぢやあござりませぬ。ちつとの間だ、おいてくんなせえ。

權助　えゝ、しつこい、ならねえといふに、

〽肩口取つて突出せば、

ト權助手荒く藤次の肩を突く、これにてよろくとして膝を突く、抱兒泣き出し、國松は縋りつく。

藤次　えゝ、何をしやあがる。(トきつとなる。)

國松　父やく、喧嘩をしなさんなよ。

藤次　案じるなく、喧嘩をしやあしねえ。

ト泣く抱兒をたゝきつけ、國松の顔を見て堪忍する思入。

足手纏ひの子がなけりやあ、(ト權助をきつと見る。)

權助　どうしたと、

藤次　いいえ、今行きますといふことさ。

權助　きりくと行きやあがらねえと、この雪除でたゝきくぢくぞ。

〽雪除とつて振上ぐる後へ立出る腰元が、

ト權助雪除を振上げると、この時塀の影へおいね、おなべ、下女二人半身を出して、

いね　あこれ、權助どの、

四人　待たしやんせいな。

權助　なに、待てとは、

いね　この雪降に子供を連れ、見るから難儀な樣子故、

女一　必ず手荒いことせずと、

女二　堪忍してやらしやんせと、

なべ　あの旦那樣のお氣に入り、おきんさんの、

四人　言附ぢやぞえ。

權助　いや〳〵おきんさんの言附でも、こんな奴が油斷がならぬ。それだによつて、

いね　あこれ、おきんさんの言ふことを聞かしやんせぬと、その通り旦那樣へ、

四人　告げるぞえ。

權助　それだといつて、

なべ　あこれ〳〵、おきんさんに言つけられては堪らない、又お目玉を喰はぬやう早く臺所へ行かしや

んせ。

權助 あゝ、泣く兒と地頭、仕方がねえ。

なべ 野暮を言はずと私の部屋で、

權助 どれ燗ざましでも飲まうかえ。

〽雪かきかたげ權助は、つぶやき〳〵入りにける。（ト權助は上手へ入る。）

藤次 これは〳〵有難うござりまする。憚りながらお妾樣へちよつとお禮を申したうござりますが、お目にかゝることはできますまいか。

いね 旦那樣がお留守故、男は家へ入れられませぬ。

女一 達つてお禮が言ひたくば、

女二 あの二階においでなされます故、

なべ それからお禮を言ひなさんせ。

いね さあ、奧へ行つて、今とりかけの、

女一 いゝ、ちらしを取つて、

四人 遊ばうわいな。

〽言ひ捨て奥へ入相の鐘もいつしか黄昏時、見上ぐる二階の障子を明け、立出るこの家の思ひものおきんは下を見おろして、互ひに見合はす顔と顔、

ト女中皆々塀の蔭へ入る。藤次二階を見上げる、この時灯うつり障子を明け、妾の打扮のおむつ出て藤次と顔を見合せ、

藤次　や、そなたは、

國松　母さんか。

むつ　あこれ、

〽あたり窺ひ聲ひそめ、

トおむつは奥を窺ふ、藤次上下へ思入。おむつ二階のはしへ出て、

藤次さん、よく尋ねて來て下さんしたな。

藤次　こゝにゐるとは露知らず、下駄の鼻緒が切れた故、門の下で雪を避け立つてゐたのが緣のはし、乳を捨てに出た女中に、話しを聞いて知つたのだ。

むつ　そんなら知らずにござんしたか。

藤次　知つてゐりやあ何のつけ、今まで來ずにゐるものか。

むつ　知らぬといふは合點が行かぬが、ほんとにお前知んなさんせぬか。
藤次　妾に出たといふことは、人の噂に聞いちやあゐたが、夫婦別れも酒の上、眞底手前が厭になり去つたといふ譯でもなけりやあ、何とかかとか一言ぐらゐは、言つてくれてもいゝぢやあねえか。
むつ　それは此方で言はねばならぬ、私がかういふ身になつたも、お前故でござんすぞえ。
藤次　なに、おれ故とは。
むつ　お前あの後父さんに、話した事がござんせうな。
藤次　おゝ手前を家へ呼返さうと、人を賴んでやつたれば、けんもほろゝな挨拶に妾に出たと聞いた故それぢやあおれに愛想を盡し、ほんとに切れる心だと實のこつたが恨んでゐた。
むつ　それぢやあ私がかうなつたも、お前は何にも知らぬかえ。
藤次　おらあ、何にも聞きやあしねえ。
むつ　すりや父さんの巧みであつたか。(ト思入。)
藤次　なに、父さんの巧みとは、(ト抱兒泣くので、)おゝ泣くな〳〵。
へ泣入る我子に困り入る夫の姿見るにつけ、悔し涙にくれながら、
むつ　話せば長いことながら、お前に別れて四五日經ち、忘れもせぬ暮方から小雨に雨の降つた晩、父

さんが歸つて來て、常に變りし面付故、心持でも惡いかと聞けば涙を拭ひながら、今兩國橋を通りかゝると、南無阿彌陀佛の聲もろとも身を投げようとする男、目にかゝつた故抱留めて顔を見れば別れた藤次、どういふ譯と樣子を聞けば、心がらとは言ひながら酒の上にて女房に別れ、家もなければそれからそれごろついてゐたけれど、今まで床を持つてゐて今更手間や給金取り人の下に附くのが悔しく、それ故身を投げ死にますと聞いて見れば捨てゝもおかれず、娘とてもたゞならぬ緣で夫婦になつた仲、假令その身を賣つてなりと、床主にしてやらうから必ず短氣なことをするなと、源兵衛堀の源床へ藤次を預けておいたから、厭でもあらうが夫の爲め、女郎になるより增だから、僅三月か四月の內妾に行つてくれとの賴み、厭と言はれぬお前の爲身を捨てゝこそ浮む瀨と、二人の子供も里にやる積りで、こゝへ來る時にお前に一目逢ひたいと言うたを無理に父さんが、藤次が手前に面目ないと言ふから、逢はずに行くがいゝ結局逢つたら未練がでようと、無理往生に連れて來られ、それから一度も訪れなく、今日は尋ねて來なさんすか、文でもよこして下さんすかと、明暮待つてゐたわいなあ。

藤次　そりやあ少しも知らぬこと、今もおれが言ふ通り、人を賴んでやつたれど、とつても附けぬ挨拶に、酒の上とは言ひながらこつちの誤りに、手前の胸を聞くまでと、今日まで辛抱して

ゐたのだ。

むつ　さうして見れば二人の子供を、お前が連れてゐなさんすは、どうした譯でござんすえ。

藤次　さあ、見殺しにするが不便故、乳もねえのに乳呑兒まで、困るを承知で父さんから、昨日おれが引取つた。

むつ　里にやる口までさがし、父さんに頼んでおいたが、そんなら里にやらぬのかいな。

藤次　どうして里にやるどころか、昨日思はず深川で父さんを見かけた所、これを懐へねぢこんで、國に大きな草履を穿かせ、おれがゐるとも知らずして、頭を打つたりこづいたり、なんぼ實の孫でねえとて、あんまり邪慳な仕方故、親の目ぢやあ見てゐられず、そこでおれが引取つたが、乳のねえのにこの頃はこの疱瘡、御方便に荷は輕いが何を言ふにも氣むづかしく、昨夜も夜どほし泣明し、まんじりともしやあしねえ。

むつ　それは嘸困りなさんせうが、よく引取つて下さんした。なさぬ仲とはいひながら、さういふ邪慳な父さん故、どうかかうかと案じてゐたが、血を分けたお前の手で育てゝやつて下さんすりや、私は何より嬉しいが、然し二人の子供では仕事に出るにも出られぬ譯、お氣の毒だがその中にはどうか仕様もあらうから面倒を見て下さんせ。さうしてその子の疱瘡は、幾日めでござんすえ。

藤次　それも聞かずに引取つたが、今朝店請の姐御が見て、もう水膿の末だと言つた、この四五日が峠故どうぞ首尾よくやりてえものだ。

むつ　一緒にゐたら私の手で介抱をしてやらうのに、何にしろ案じられる。どんなに出來たか赤兒の顏ちよつと見せて下さんせ。

藤次　さあ、とつくりと見てやつてくれ。

〽言ひつゝ藤次が紅染の手拭取つて顏見すれば、傍で見る目の羨しく、

ト藤次赤兒の手拭を取つておむつに見せる、國松思入あつて、

國松　お母あ、おいらの顏も見てくんねえ。

むつ　おゝ見るとも〳〵、赤兒より可愛い坊の顏、何で見ないでゐるものか。

藤次　これ、額にぱらりとあるばかり、頬なぞにやあ少しもねえ。

むつ　暗うてはつきり顏が見えぬが、どうか仕樣はないことか、

〽うちうなづいて鏡臺の操雲らぬ女子の魂、鏡取りだしうつし取る親子の顏を打眺め、百本杭で別れてから、僅一月經つや經たずに、苦勞なことでもござんすか、顏の色も常ならず、大層やつれなさんしたなあ。

藤次　包むとすれど重なる苦勞、顏の色に現はれたか、爭はれねえものだなあ。
むつ　重なる苦勞と言はしやんすは、どんなことでござんすえ。
藤次　今更言ふも愚痴ながら、酒の上で手前に別れ、それからこつちは親分の二階住ひの居候、得意場を助けたり手間に出たり、それでその日を暮してゐたが、高の知れた端錢、鳥羽を一枚出すことできず、所へ二人引取つて今日から仕事に出られねえが、丸で一月遊んでも三分か一兩ありやあ濟むが、大めえ百兩といふ金を算段しにやあならねえ事情。手前も知つてる幸次郎樣、大國屋の千山を身請の金に、千葉樣から修覆に下つた香合を預けて百兩借りた所、途中で直に盜まれて、何の役にも立たねえ上、屋敷はもとより預かつた貸主からも日々催促、その日限りさへ明日限りどうか仕樣はあるまいかと相談かけられ、段々の話を聞けば、その金を盜んだものはおれが弟、濟まねえ義理と恩返し泥坊してなりとも金を拵へて差上げねばならねえ譯ではあるけれど、どう算段がなるものか。それ故手前の行方をたづね、話して見たらもしひよつと出來めえものでもなからうかと、思ふは大家の今はお妾、うまく旦那へ言ひこんで百兩借りて貰ひたく、別れた女房にこんな事言はれた義理ではねえけれど、せつぱつまつた今日の仕儀、どうか話をしてくれめえか。

〽へだてぬ仲の夫婦さへ義理故へだつ堀越しに、頼むも邊り忍び聲、

トこの中藤次よろしく思入にて言ふ、おむつも術なき思入にて、

むつ　道理こそその窶れ、大まい百兩といふ金の今日につゞまる才覺に、足手纏ひの子供の世話、一緒にゐたらとも〳〵に二人で苦勞しようもの、その替りには今にもあれ、旦那がおいでなさんしたら、出來ぬまでもよいやうにお頼み申して見ようから、明日まで待つて下さんせいな。

藤次　そりやあ何より有難い、それぢや眞底憎いとも、おれを思つちやあゐねえのか。

むつ　何の思はう、二人まで子まである夫婦仲、今は別れてゐるけれど、やがて一緒になる氣でござんす。

藤次　然しこんなしがないおれと、何不自由のねえこの家の旦那、心變りがしにやあいゝが、

むつ　てかけ妾になつたのも、元はと言へばお前の爲め、何で變つてよいものか。

藤次　口ぎれいには言ふものゝ、長い月日のその中にはどう變るか、知れやあしねえ。

むつ　いえ、その氣遣ひはござんせぬ。今日で一月あまりになれど、やましいことはござりませぬ。

藤次　何のやましいことがないことがあるものか、えゝいめえましいことだなあ。

ト思はず國松の頭を打つ、國松びつくりして、

國松　あゝ痛え、何をするのだなあ。
藤次　おゝ痛かつたらう堪忍しろ〳〵、あんまりお母あが浮氣だから。それでうつかり打つたのだ。
むつ　さういふ父が浮氣だから、お母あの替りに打つてくれ。
國松　あい〳〵、父の浮氣め、(ト藤次を打つ。)
藤次　えゝ、おれぢやあねえお母あだ、
　　ト上手を教へるやうに、抱兒の頭を打つ、これにて泣出す。
おゝ泣くな〳〵、あゝこれそこへ手が屆くなら、一ぺい呑まして貰ひたいに、
むつ　何を言ふにも二階と下、
藤次　乳を何ぞへ入れてくれぬか。
むつ　何へ入れたらよからうか。
〽あたり見廻し小土瓶へしぼれば奔る乳口さへ、一筋三筋恩愛の絆にあらで一筋の紐に結へて繰りおろせば、そのまゝ取つて口から口、呑ませばあつとむせる幼兒、
　　トこの中おむつ傍にある南京のきれいなる土瓶へ乳をしぼり入れ、下締の細き扱帶を取り土瓶のつるを結へ下へおろす。藤次取つて土瓶の口から抱兒の口へ入れる、むせたる思入にて泣くをいぶりつけ

ながら、

藤次　おゝをしみやあしねえ、澤山呑め〳〵。

〽又も呑ますを國松が、肩へすがりてさしのぞき、

國松　赤兒はいゝなあ、お母あの乳を澤山呑んで、

藤次　手前はさつきのお菓子があらう、あれを出して喰べるがいゝ。

國松　おらあお菓子は厭だ。

藤次　それぢやあ乳が呑みてえのか。

國松　なあに、お母あに抱かりてえのだ。

〽言ふ聲さへも泣聲にて、雪より雨の降りさうに、聞く母親はたまり兼ね、

むつ　おゝ尤もだ〳〵、坊よりお母あが抱きたいが、抱くことならぬ今の身の上、

〽たとへて言はゞ金銀の籠に飼はれし鳥同然、九尺二間の裏家より數寄屋作りのこの窖にて多くの女子にかしづかれ、着類は元より頭の物、なに不自由はなけれども、これよりやつぱり住みなれし、野山の家へ放し飼ひ、

〽明日はどうしてかうしてと、その日の煙り立て兼ねても、親子一つにゐるのが樂しみ、何

の因果でこのやうな、
榮耀榮華をするやうな、
〽身にはなつたとかつぱと伏し、悔み歎けば諸共に、藤次も涙押し拭ひ、
トこの中おむつよろしく思入、藤次は抱兒に乳を呑ませながら國松の背を擦りゐて、
藤次　なるほどそりやあ言ふ通り、どんな苦勞をしやつても、一緒にゐるが身の樂しみ、
〽おれが斯うして朝夕に乳を貰ふに困つても、影で案じるそなたより目で見てゐれば苦が薄い、
別れてゐれば人の子が、泣いてもどうかしはせぬかと、
〽案じられるが親子の情愛、
あゝ子を持つて知る親の恩とは、よく言つたことだなあ。
〽互ひに愚痴になる鐘も哀れを告ぐる無常音、（ト五つの鐘鳴る。）
むつ　や、あの鐘はもう五つ、
藤次　つまらぬ愚痴で隙どつた。こんな事より大事の用、さつき頼んだ金のこと、善か惡かの返事をばどうしておれに聞かしてくれる。

〽言ふにおきんもさしつまり、暫し小首を傾けしが、

むつ　おゝ、それにこそ幸ひな、化粧部屋の前からして築山越して泉水の流れの末は汐入に、表の川へ續いてをれば、首尾がよければ白い手拭、もし又惡くば紅染の赤い手拭を流すほどに、小橋の際で合圖をば待つてゐて下さんせ。

藤次　むゝ、それぢやあ白い手拭が流れて來れば、できる金、

むつ　また紅染の手拭が流れて行けば、できぬ金、

藤次　凶事か吉事は二筋の、

むつ　その手拭の紅と白、

藤次　色は替れど變りなき、

むつ　互ひの心一筋の、

藤次　必ず合圖を、待つてゐるぞよ。

〽詞交して立上る門の戸口に國松が、降積む雪も厭はずに、居睡りゐるを搖り起し、

さあ、國よ行くのだ、起きろ〳〵。

國松　父や、どこへ行くのだ。

藤次　何處へ行くものか、家へ行くのだ。

國松　おらあ家へ行くのは厭だ、お母あの所にゐてえ。

藤次　お母あの所にゐられる位なら、こんな苦勞をしやあしねえ。さあ、手を引いてやるから來い。

國松　おらあいやだ／＼。

藤次　えゝ强情なことを言はずと、來いと言つたら來い。

（無理に手を取り引きたつれば、はつと泣きだす國松に母は留めたく見送れば、殘りをしげに見返る我子、折しも烈しき風につれ、吹雪に姿見えわかねど泣く聲胸に怺へ兼ね、トこの雪おろし烈しく雪頻りに降る。藤次國松の手を引き、片手で懷を押へ、傘を雪風に取られまいといふ思入にて花道附際へ行く、國松はお母あの所へ行きたい／＼といふ、おむつは二階の端へ出て見送り、殘りをしき思入。

むつ　あもし、待つて下さんせいな。

藤次　おゝ、何ぞ用か。（ト後へ戻る、おむつ思入あつて）

むつ　さあ、呼返したはほかでもない、この大雪に子供を連れ、道はかどらず泣立てられ、嘸や難儀と思ふにつけ、自由になるなら二人とも泊めて上げたいものなれど、男を泊めては旦那へ濟まぬ、

藤次　お前は歸つて下さんせ、二人の子供は内々で私が泊めてやりませう。

國松　えゝそんなら二人を泊めてくれるか、あゝ有難いく。心の内はさつきからどうか泊めて貰ひたく、口まで出たが言兼ねて、實はすごく歸つたのだ。これ國や、お母あが泊めてやるとよ。

藤次　やあ、そりやあ嬉しいく。

むつ　これ、この悦ぶを見てくりやれ。

いね　ほんにまあ、嬉しがることわいな。

〽言ひつゝ傍の手箱より、驛鈴取出し振たれば、

トおむつ鈴を出して鳴らす、下よりおいれ出て、

いね　はつ、御用でござりまするか。

〽立出る下女に囁けばうち領いて下へおり、門の戸あけてこなたへと、言ふもひそく忍び聲、二人の子を連れ入る途端、以前の下男が立出でゝ、

トおむつおいれに囁く、おいれ呑込み下へおり門の扉を明け、捨ぜりふにて抱見を抱き取り、國松の手を引き内へ入る、藤次捨ぜりふにて賴む、おいれ門の扉をしめる。この時上手より以前の權助出來りて、

權助　やあ、汝はまだこゝにうせたか。
藤次　へい、持病の疝にひまどりました。
權助　見りやあ二人の子供も見えず、どこへ捨てゝ來やあがつた。
藤次　さあ、二人の子供は、（ト二階を見る、この時おいれおむつへ抱兒を渡す。）
むつ　あ、これ、（ト袖にて子を隱す。）
權助　えゝきり／＼と、うしやあがれ。
〽打つてかゝるを身を躱し、そのまゝ耳をしつかと押へ、
ト權助打つてかゝるをちよつと立廻つて、權助の耳を押へて、
藤次　そんならおむつ、
むつ　藤次さん、
藤次　必ず金を、
權助　（振拂つて）なに、金とは（ト寄るを肘にてどんとあて、）
藤次　頼むぞよ。
〽頼むとばかり言ひさして、行くを見送る夫婦の別れ、後にぞ思ひ白雪の、

ト雪おろしにて藤次花道へ行き、おむつ二階の端へ出て見送る。

國松　父や。（ト呼ぶに藤次振返り見て、）

藤次　これ、おとなしくしろよ。（トこの時權助ばつたり倒れる。）

〽道を急いで、

ト藤次花道へ入る。おむつ見送る、この仕組よろしく、三重にて、

幕

四幕目

神喜寮紅流の場

〔役名――髪結藤次、唐物屋神崎屋喜兵衛、平野屋幸次郎、神喜手代小助、同下男權助、下剃兼奴。

神喜妾おきん實ハおむつ、大國屋の千山、幸次郎女房お民、神喜下女おいれ、藤次倅國松。〕

（神喜別莊座敷の場）――本舞臺三間の間中足の二重家體、正面瓦燈口更紗の暖簾、下手銀地に芭蕉を畫きし襖、上の方に中二階、丸窓、前側障子閉きりあり、窓の下網代の下見、この前舞臺先まで柵つきの流れ。下の方御影の石燈籠、四つ目垣、春の下草、梅の立木。花道の揚幕に屋根附の門、總て神喜別莊座敷の體。こゝに前幕の國松中央に住ひ、前に蝶足の膳に椀、皿などよろしく載せしを据ゑ

おいれ黒塗りのお櫃を前へ置き、下女おきく、おなか、おなべ居列び、鞠唄通り神樂にて幕明く、

いね　さあ坊ちやん、お飯をお上りなされませ。

國松　おいらあ厭だ。

きく　何故そんなことをお言ひなさいます。

なか　おいしいものが澤山ござりますに、

なべ　厭なら無理にはお止しなさい、私が喰べて上げるから、(トつまんで喰ふ。)

いね　これはしたりお鍋どん、意地きたなしをおしでない。

きく　坊ちやんへの御馳走に、橋本から取りましたに、

なか　何故お上んなさんせんね。

なべ　平目の刺身に鯛の椀盛、これで一寸お中酒に、一口吞みたいものだねえ。

いね　こんなにおいしいものばかりだのに、お上りなさらぬはお嫌ひかえ。

國松　あゝ、おいらあ嫌ひだよ。

きく　さうして坊ちやんのお好なのは、何がお好きでござりますえ。

國松　おいらの好きなのは、鰯のいゝ、ぬたに葱鮪だ。

なべ　おや〳〵まあ下司ばつたものばかり、それぢやあばか(貝)鍋なぞもよからうねえ。
國松　あゝばか鍋は好だよ、小母さん、お前も好きだらう。
なべ　あい、私も大好物さ。
國松　馬鹿がばかを喰べるのだね。
なべ　あれまあ、あんな憎いことを言つてさ。
いね　そりやお前譬にも言ふ七つ八つぢやわいな。
きく　ほんに、今お言ひのばか鍋や何かを、
なか　どんなお料理屋でお上りだえ。
國松　彌太一よウといふお酒屋だえ。
なべ　彌太一のお客ぢやあ、橋本のものは口には合はない、お前の父もお酒がお好だね。
國松　あゝおいらの父は、どんだくれだよ。
いね　ほゝゝゝ、ほんにまあ子供衆といふものは、罪のないものでござんすなあ。
きく　何にしろ坊ちやんのお好なものを上げたいものだが、
なか　お料理よりお惣菜の熬菜なぞがよからうわいな。

なべ　よいどころか大よしさ、ほんにこの子の樣子では、おきんさんのお里も知れた。
いね　あこれ、めつたなことを言はしやんすな、假令以前は何であらうと、今はこの家のお妾樣、
きく　よく言ふことだが玉の輿、お前を始め私等も皆使はれる身の上なれば、
なか　所詮及ばぬことぢやわいな。

　　トばたばたになり、下男走り出來りて、

下男　これこれ女中衆、旦那樣がいらつしやりましたよ。（ト言ひすてゝ花道へ入る。）
いね　もし皆さん、旦那樣がいらつしやるさうな。
きく　お目にかゝつては惡さうな、この子はそつと化粧の間へ、
なか　御飯と一緒に運びませう。
なべ　さあ、彌太一のお客樣、いざ先づ奥へいらせられませう。

　　トどんどん、と唐樂のやうな替つた音樂になり、おいね國松の手を引き、三人は膳部を持ち奥へ入る。
　　と花道より神崎屋喜兵衞羽織着流し一本差し、低き下駄、町人の御用達の打扮、小助手代の打扮にて
　　附添ひ後より黑鴨の供三六上下挾みを脊負ひて出來り、

神喜　これ小助、あの太鼓はどこだの。

小助　龜井戸の樂人のところで、舞樂の稽古でござります。
神喜　とんと唐人囃子のやうだ。いや唐人といへば市兵衞のところへ用があつた。
小助　御用なら參りませうか、
神喜　なに、明日歸りに寄つて行かう。
　ト本舞臺へ來る、おいね、きく、なか、なべ等出迎へて、
いね　これは〳〵旦那樣には、ようおいでなされました。
きく　昨日の雪で嶮道が惡うござりましたらう。
なか　お歩行でおいでなされましたか。
神喜　天神橋まで船で來たが、何といつても春の雪、思ひのほか道がよかつた。
　ト言ひながら上へあがる、おいね座布團を敷きこの上に住ふ、小助供の風呂敷包を取り、
小助　こう三六どん、お前は直にお臺所へ行きねえ。
三六　かしこまりました。(ト下手へ入る。)
なべ　小助さん、今日はお供でござりましたか。
小助　お屋敷へ御一緒に出て、それから直にこつちへお供をしてまゐりました。

なべ　今夜は旦那様と一緒にお泊りなさいよ。

小助　いいえ、私はお家へ歸らねばなりませぬ。

なべ　えゝも人の心も知らないで、

　　ト小助の脊をたゝく。皆々煙草盆、茶などを持來りよろしくあつて。

いね　これはしたりおなべどの、旦那様のいらしやるにどうしたものでござんすざいな。

　　トこれにてお鍋しよげろ、合方になり奥よりおむつ、町家の妾の打扮にて出來り、神喜の下手へ住ひて、

むつ　旦那様、よういらつしやりましたわいな。

神喜　昨日丁度雪見ながら此方へ來ようと思つたところ、お屋敷からお客が來て、つい出そこなつてしまつた。

むつ　左様でござりましたか、是非暮合にはいらつしやいませうとお待ち申してをりましたわいな。

小助　へい、おきんさん、この間は、

むつ　これは小助さん、旦那様と御一緒でござりましたか。

小助　お供いたしてまゐりました。

神喜　おきん悦んでくれ、今日お屋敷へ出たところ、殊のほかのお首尾でお上下を頂戴なし、お出入頭に仰せつかつた。
むつ　なに、お出入頭におなりなされました、それは結構なことでござりました。
皆々　お目出度うござりまする。
小助　まだその上にお下金を下され、今日のやうなことはない、その代り又三百兩下駄がけで腰へ附けよつほど持重りがいたしました。
神喜　嘸重かつたらう。
むつ　そのやうに重いものでござんすかいな。
神喜　持重りのするものだ、まあ持つて見やれ。
　ト出す、おむつ手に取り、ほしき思入。
むつ　あ、ある所にはこのやうに、
神喜　え、（ト思入。おむつ氣を替へて、）
むつ　いや、重いものでござんすわいなあ。（ト神喜の前へおく。）
神喜　何にしろ、湯の支度と酒の支度をしてくりやれ。

いね　へい、お湯はもう沸いてをります、又御酒の支度は橋本へ申附けまして、疾うにお肴がまゐつてをりますわいな。

神喜　それは氣の利いたことだ。小助どうだ、お稻を女房に持つ氣はないか。

小助　へい、それは有難うござります。

神喜　二人とも持つ心なら、おれが媒人をしてやらうが、お稻手前はどうだ。

いね　はい、私は、(トうつむき、恥しき思入。)

神喜　えゝ初心な奴だ、あかくならずともよいことを、

いね　それだと申して(ト小助の顏を見て恥しき思入にて、)どれ、お燗を見てまゐりませうわいな。

ト思入あつて奧へ入る。神喜心附きたるこなしにて、

神喜　おゝほんに氣が附かなんだ、小助は晝飯前だつたさうだ。(下女等に、)これ手前達、何ぞ見てやりやれ。

きく　畏まりましてござりまする。何ぞおいしいものを見つくろひまして、

なか　唯今持つてまゐりまする。

小助　いや、こゝへ持つて來るには及ばぬ、お臺所でゆつくりと、澤山頂戴いたしませう。

神喜　いかさま、それもさうか。
小助　左様なら旦那樣、おきん樣、
神喜　後に逢ひませう。
きく
なか　さあござんせいなあ。
　　ト小助先に皆々奥へ入る。
神喜　あゝどうでも若い者は若い者同志、小助に附いて皆々行つてしまつた。
むつ　丁度幸ひ、人目もなければ、
神喜　えゝ、（トおむつの顏を見る、おむつ傍へ寄つて）
むつ　もし、旦那樣、
神喜　何だ、
むつ　ちと私はお願ひがござりまする。
神喜　なに、改まつて願ひとは、
むつ　お馴染薄い身の上で斯樣なことを申しますのは、さりとは押の強いものぢやと、お蔑みもござりませうが、よんどころない譯故に、お願ひ申し上げまする。

神喜　如何なる譯か知らねども、外ならぬおぬしの願ひ、身に適うたことならば、

むつ　おかなへなされて下さりますか。

神喜　いかにも、してその願ひといふは、

むつ　さあ、そのお願ひと申しまするは、昨日父さんがまゐりまして私へ申しまするに、扨おれも段々と年を重ねて、商賣も一日ましに太儀故、どうか樂なことをして活したいと思ふところ、よい家主の明がある故それを買うて飴屋を止め、一人口のことなれば一年の上り高で樂に活して行かるれば、申し兼ねた事ながら旦那様へお願ひ申し、百兩お借り申してくれと餘儀ない頼みも親のこと、どうか樂がいたさせ度く、お叱りをも顧ませず、無理なお願ひいたします。お聞濟み下さらば一生涯親子とも御恩は忘れず命かけ、一兩年のその中にどうか都合をいたしまして、お返し申上げますほどに、年寄りし父さんをお助けなされて下さるやう、お願ひ申し上げますわいな。

神喜　すりや市兵衛が身に就いて、金子百兩入る故に、貸してくれと申すのか。

むつ　さあ、御迷惑でもござりませうが、明日は外へ譲るとやら、どうか今宵その金をお貸しなされて下さりませ。

トこの時奥より權助國松の手を引き、おなべ抱兒を抱き出來りて、

権助　いや、旦那様、その金は、

なべ　お貸しなされますな。

神喜　なに、貸すなとは、

権助　お留め申すは外でもない、今おきんさんが言つたのは、ありや僞りでござりまする。唐人飴の市兵衛が家主などになりませうか。

なべ　その頼み手は以前の亭主、和國橋の藤次といふ髪結でござります、昨日其奴が頼みに來ました。

権助　嘘でない證據といふは、泊めておいた二人の子供、

兩人　これが證據でござりまする。

ト國松と抱兒を見せる。おむつハッと思入。神喜子供を見て、

神喜　豫て二人の子があると聞いてはゐたが、見るは初めて、そんならこれがおきんの子か。

むつ　いゝえ、その子は、

國松　お母あ、お飯を喰べたよ。

なべ　それ、お母あといふのが證據、

権助　まだそればかりぢやあござりませぬ。この巾着の迷子札に和國橋の髪結藤次倅國松と、彫つてあ

るのがたしかな證據、

神喜　藤次の女房といふことはおれも知つて抱へしおきん、扨は藤次が頼みにて、親といふは僞りなるか。

權助　へい、まつかな僞りでござります。

むつ　あゝこれ、めつそうなそのやうなことを、

なべ　嘘でないと言ひなされば、こゝから近い長崎町、市兵衛どのを呼んで來て、白い黒いを分けませうか。

むつ　さあ、それは、

權助　呼ばれて來たら、面目なからう。

トこれにておむつはつと思入、神喜も扨はといふ思入。

なべ　ほんに人といふものは慾に限りのないものだ、この美しい顔故にその日活しの裏家住、味噌漉を提げたお上さんが旦那様のお世話になり、玉の輿のお妾様、なに不足もない身の上から、榮耀に餅の皮とやら、以前の亭主を引きずり込むとは呆れたものだ。

權助　まだそれで飽き足らず、親父を土臺に大それた百兩といふ金の無心、旦那がお貸しなされたらそ

れを路銀にその男と駈落でもする氣だらうが、天道樣がなくば知らず、さううまくは行きませぬ。

なべ　さあ、言譯があるならば、旦那の前でおつしやいまし、よもや言譯はござんすまい。

トこれにておむつ思入あつて、

むつ　さうぢや。(ト神喜の脇差へ手をかけるを、神喜留めて)

神喜　こりやおきん、早まるな。何故あつて自殺なすぞ。

むつ　さあ、命を捨てねば旦那樣へ、申譯なきこの身の僞り、

神喜　はて、生は得難く死は易し、仔細を言うたその上で死なでかなはぬことならば、決して留めはせぬほどに、急かずと仔細を言うて聞かしやれ。

ト脇差を取上げる、この時抱兒泣く故おむつ是非なく抱きとり、アヽと泣く。國松脊を撫りゐる。

さゝ、仔細はどうぢや。

むつ　何をお隱し申しませう、二人の衆の言ふ如く、昨日別れし藤次どの、これなる子供を連れまして雪に下駄の鼻緒を切り、賴む小影の軒の下、計らず逢うて話を聞けば、御恩になつた御主人の平野屋の若旦那、幸次郎樣がお屋敷から、修覆に下りし香合を、よんどころない譯あつて質入なせし百兩を直にその夜盜み取られ、日限りの切羽に命にもかゝはる仕儀のその金を盜みし者は血筋

の弟、それ故金を差上げねばお主を弟が殺すも同然、もしものことのある時は、おれも生きてはゐられぬ仕儀、心がゝりは二人の子供、明日から路頭に迷はにやならぬ。去つた女房にこのやうな無心を言ふも命づく、二人の子供を不便と思はゞ、どうか金の才覺を賴むと言はれ恩愛に、否と言はれず勿體ない、旦那樣を僞りし金の入場は幸次郎樣、別れし夫に賴まれましたが、あなたのお目を掠めまして忍び合ひしといふことは、更々覺えはござりませぬ。雪に凍えて泣く故に、これなる子供を泊めまして疑ひ受けし身の言譯、死なねばどうも濟みませぬ。さあ、お手にかけて下さりませ。（ト覺悟の思入。）

なべ　あれまあ、あんな不手勝手、旦那樣のお目を掠め、お顏へ泥を塗りながら、

權助　思つてござるを附込んで、殺し得ぬと見くびつてか、まことしやかな身の言譯。

むつ　あれ、あのやうに口の端にかゝりやつながるあなたの恥、又私も身の潔白、この場であなたのお手にかゝり、早う死にたうござりまする。

ト國松おむつに縋りついて、

國松　これお母あ、お前が死ぬと赤兒が乳を呑まれないから、おいらが替りに死んでやらう。

むつ　おゝ、可愛いことをよく言つてくれた、坊は生先長い身體、父と一緒に大きくなり、訪ひ弔をし

てくりやれ。

國松　いや／＼おいらが死ぬから、お前は生きてゐておくれ。

ト國松神喜の前へ身體を向けるを、おむつかきのけて、

むつ　いえ／＼、私を手にかけて下さりませ。

國松　いや／＼、おいらぢや／＼。

むつ　いえ／＼私ぢや／＼。

トおむつ國松爭ふを神喜見て感心の思入あつて、

神喜　あこれ、二人とも死ぬに及ばぬ、疑ひ晴れた。

むつ　えゝすりや、お疑ひは晴れましたか。

神喜　親は子を庇ひ子は親を庇ふ、親子の情愛切にして、命をしまぬ身の潔白、まことは面に現はれしぞ。

むつ　えゝ有難うござりまする。これ、そちも共々お禮を申しや。

國松　小父さん有難う。

ト兩人辭儀をなす、權助、おなべ顔を見合せて、

權助　それでは旦那の疑ひ晴れ、御祕藏のお妾故、
なべ　百兩お貸しなされますか。
神喜　さあ、疑ひ晴れた上からは、あたつて碎けるこの場のをさまり、命に拘はる百兩の金も手許にあり合はせば、貸してやらねばならねども、どうもこれは貸されぬわい。
むつ　えゝ、そりや又何故、
權助　どういふ譯で、
神喜　さあ、その百兩の金故に大切なる香合を、質入なせし平野屋の息子といふは吉原の大國屋の千山に、現をぬかす放埓者、外の者なら貸してもやらうが、幸次郎殿故貸されぬといふその譯は、我本店丹波屋の娘お民どの嫁に行つたはその平野屋、夫婦となりし甲斐もなう一夜の枕も交さずに引續いての夜泊り日泊り、舅は我子の悪いと知らず、嫁の機嫌の取りやうが悪いなどゝ思ふよしそれ故に又本店でも、さほど心に叶はずば嫁にはやらぬ歸してくれと、このほどより離縁の催促、何とやら釣方の別家の身にて放埓の幸次郎殿に金は貸されぬ。ましてや妾のそちが頼み、隱すことほど現はるゝと、これが本店へ知れた時は、あゝいゝ年をして喜兵衛まで女に心奪はれて、娘を袖になせしなどゝ言はれんことは必定なれば、氣の毒ながらこの義理故、どうも金は貸され

ぬわい。

トよろしく思入にて言ふ、これを聞きおむつ是非なき思入にて、

むつ　さういふ譯では遂てとも、言ふに言はれぬ義理なれば、たゞ何事もこれまでに、どうぞなされて下さりませ。

神喜　いふまでもないこの座ぎり、濟むも濟まぬも遣水へ、流してしまへば後はない。

むつ　その遣水の流れの末は、（ト流れへ思入。）

神喜　え（ト心得ぬ思入、おむつ氣を替へて、）

むつ　いえ、水になされて下さりますとは、えゝ有難うござりまする。

權助　やれ〳〵これで私共も、旦那樣に御損をさせず、

なべ　世間の人の口の端に、かゝらぬやうにいたしましたは、

權助　大きな忠義でござりまする。

神喜　おゝ大きな忠義をいたした故、そち達には褒美を遣はす。

權助　へゝえ、すりや私共に御褒美とな。

なべ　こりや、かうなうてはかなひませぬ。

神喜　忠義な者故そち達へは、褒美に暇を遣はすぞ。

兩人　それは有難うござりまする。(ト言つてしまつて氣が附き、)

權助　えゝお辭儀どころか、お暇を私共へ、

兩人　御褒美とは、

神喜　豫て主人の目を盗み、密通なせしそち達兩人、これまで掠めし引負は暇と共に遣はすほどに、請人方へ出てうせう。

權助　でもこのやうな忠義をして、

なべ　お拂ひ箱とはあんまりな、

神喜　やあ、言葉返すか、不屆き者めが、

兩人　恐入りましてござりまする。

神喜　きり／＼と立つてうせう。

兩人　へゝい。

ト兩人顏見合せ、思入あつて下手へ入る。奥よりおきく出て、

きく　旦那様、お湯がよろしうござりまする。

神喜　おゝさうか。おきん湯がよいといふが、一緒に入らぬか。
むつ　私はちと風氣故、今日は見合せませうわいな。
神喜　それでは一風呂入つてから、ゆつくりと酒にせう。
きく　へえ、もうお酒も召上りますばかり、支度をしておきましたわいな。
神喜　それは御苦勞々々。（ト以前の金の入りし胴卷を取つて、）おきん、手箱の中へ仕舞つておいてくれ。
むつ　すりや、このお金を（ト受取り思入あつて、）畏まりましたわいな。
神喜　どれ、一風呂入らうか。
ト唄になり、神喜先におきく附いて奧へ入る。おむつ殘り、國松道中双六を出して、
國松　お母あ、さつき貰つた双六をして遊ぶよ。
むつ　誰も相手がないではないか。
國松　お母あ、お前入んねえな。
むつ　えゝ母さんはそれどころではない、一人で振つて遊びやいの。
國松　あいあい。
ト一人で賽を振り双六をして遊ぶ、おむつぢつと思入あつて、

むつ　旦那様がこのお金を私へお預けなされしは、たゞ何事も水にして常に變らぬお心故、自由にならばこのお金を藤次どのへ渡してやり、御恩返しをさせたいが、さうした日には旦那様が、御本店へ濟まぬ義理、妾となれば召仕、お主へ難儀をかけては濟まぬ。こりやどうあつても藤次どのへ斷り言はねばならぬ仕儀、とはいへ頼みに思ふとこへ出來ぬ報せが流れて行たら、嘸や本意ないことであらう。幸次郎様は言ふに及ばず、藤次どのも生きてはゐまい。かういふ奉公してゐるも、末は元の夫婦となり、今の苦勞を昔語りと思うてゐたも水の泡（ト思入あつて抱兒の顔を見て、）親の苦勞も知らずして、乳さへ吞めばすや／＼と餘念のないこの寐顔、えゝ佛様ぢやなあ。

ト　よろしく思入、この中國松一人で賽を振り双六をしてゐて、

國松　あゝもう五つで上りだ／＼（ト賽を振つて、）えゝ六つを振つて一つあまつた。

むつ　一つあまれば大津まで、その双六は返れども、行つて歸らぬ六道の三の裏目の死出の旅、

ト　おむつは死なうといふ思入、國松は賽を振つて、

國松　あゝ嬉しい、上つた／＼。

むつ　あ、今日が名殘となつたかいなあ。

ト　唄、時の鐘にておむつ二人の子を見て愁ひの思入よろしく、この道具廻る。

（神喜の寮裏手の場）——本舞臺左右高き土手、中央に土橋、上手に柳の立木、朧月かゝる。下手に風除の掛稻、後方上の方に塀、汐入の泉水、これより土橋の下上手へかけて一面に水の心にて浪布を敷き、塀より下手一面在體夜の遠見、總て神喜寮裏手の體。端唄の合方、波の音、通り神樂にて道具留ろ。と花道より下剃の粂酒に醉つたる思入にて一升樽を手拭で結へ肩へかけ、髪結名倉の石やはり下剃にて出來りて、

石　こう粂や、もう酒はあるめえな。

粂　梅屋敷で注がしたから、まだ五合ばかりあらあ。

石　何しろ、べらぼうにおそくなつたぢやあねえか。

粂　どうで明日は仕事はできねえ、假宅とぶッくらはせよう。

石　おらあ今日で二日明けたから、是非今夜に歸らにやあならねえ。

粂　二日明けようが三日明けようが、そこが春だ。正月眞面目に仕事をするやうなしみつたれな職人が役に立つものかえ、まあおれに附合つて、今夜ァ行かつし。

石　今夜行くと脱がにやあならねえから、又二三日歸られねえ。

粂　歸られざあ流連としようぢやあねえか、親方がやかましくいふなら、あんな所を出てしまやな、

石　手前だつておれだつて腕で錢を取るのだ。何でもいゝから、今夜は歸らつし。

象　いやだ、是非今夜は行かにやあならねえ。

石　行くなら行くから、まあ來さつし。

ト石は鉄を引張り上手へ入る。時の鐘鳴る、と下手掛稲を割つて中より幸次郎頬冠り着流しにて、千山同じく手拭を冠り裾模様の部屋着を端折り、手を引き合つて窺ひながら出で、ほつと思入あつて、

幸次　嬉しや今の二人は、追人の者ではなかつたさうな。

千山　私はたしかに追人と思ひ、どんなにびつくりいたしんしたらう。

幸次　もうこれからは在郷道、人に逢ふのもたまさか故、案じることはないわいの。

千山　いえ、それよりか私やまた案じられるは貴方の身の上、今宵中に百兩の金ができぬその時は、どうしなます氣でありんすえ。

幸次　どうと言うて仕方がない、あの香合が手に入らねば所詮家へは歸られず、死なうと覺悟極めし故、よそながら暇乞におぬしのとこへ行つたれば、幸手の客が身請なし逢はれぬ首尾になつた所から日暮の騷ぎに裏から逃げたが、後より追人の來るは必定、どうでも死なねばならぬわいの。

千山　ぬしがさういふ心なら、私も一緒に死にたうざます。追人の者に捕へられよしない恥をかゝうより、死ぬのがはるかに優ざます、又長らへてゐたとこが身請の濟んだ私の身體、就いてはお家のお民さんに義理があつて添はれねば、死ぬよりほかはありんせん。

幸次　いや、私は大切なお屋敷の寶をなくせし科あれば、生きてをられぬ身の上なれど、おぬしは何も死ぬほどの事もなければ長らへて、我亡き後の回向を頼む。

千山　そりや水くさい幸次郎さん、添はれぬ時は一緒に死なうと言交したぢやありんせんか。なんでそんな邪慳なことをぬしはまあ言ひなんす。(ト幸次郎に縋つて言ふ。)

幸次　さうではなけれど科もないおぬしを殺すがいとしい故、それも覺悟を定めたなら、二人一緒に死なうわいの。

千山　あゝよく言つておくんなんした、それでこそ二世の約束、かうなる上は少しも早く、

幸次　追人の者の來ぬ中に、とは言へ、死ぬに刄物はなし、幸ひなこの川へ手に手を取つて身を投げん。

千山　ほんにそれがようざます、私も石を拾ふからお前も石を拾ひなんし。

幸次　浮かぬやうに袂へ入れよう。

ト兩人石を拾ひ袂へ入れ、橋の上より川の中を見て、

あゝ、こゝは所も十間川、深い契りも淺瀨となり、

千山　消えて行く身は水の泡、

幸次　丁度時刻も引汐に、

千山　引かれて明日は大川へ。

幸次　浮名を流す二人が亡骸、

千山　これがこの世の、

幸次　顏の見納め、（ト兩人手を取交し）

千山　幸次郎さん、

幸次　千山、

千山　名殘をしうざますねえ。

トよろしく名殘をなしむ、とこゝへ花道より藤次出來り、花道にて。

藤次　神喜の獵の泉水から續く流れの十間川、昨日賴んだ百兩の最早返事の刻限なれば、小橋へ行つて待ち合はさん。

トこれにて兩人を見ろ、兩人も藤次を見てびつくりなし、

幸次 人の來ぬ間に、

千山 少しも早く、

兩人 南無阿彌陀佛、

ト手を取り川へ飛込まうとする、この時藤次つか〳〵と行き兩人を留めて。

藤次 あゝこれ待つた、早まつたことしなさんな。

幸次 いえ〳〵死なねばならぬもの、

千山 どうぞ放してくんなんし、

藤次 いゝや眼にかゝつたら放しやあしねえ。

ト飛込まうとする兩人を留めて一寸立廻る中、幸次郎の顏を見て。

や、若旦那ぢやあござりませぬか。

幸次 えゝ、そなたは藤次か。

藤次 こりやめつぽうけえなことをなさりますな。

幸次 これも知つての譯故に、

千山 どうぞ見ぬ顏をしてくんなんし。

藤次　どう見ぬ顏がなるものか。まあ〳〵お待ちなされませ。

兩人　いや〳〵、こゝを放して下され。

ト兩人川へ飛込まうとするを、藤次あちこちと留める立廻りよろしくあつて、千山の裾を押へ、幸次郎の帶を捉へ思入あつて、

藤次　これはしたり、聞分のねえ、どうまあこれが放されませう。まあ〳〵待つて下さりませ。

幸次　聞分けぬではなけれども、一昨日話した金が出來ねば、生きてゐられぬ幸次郎、

千山　又私とても同じこと、心に染まぬ身請され、生きてゐられぬ譯あつて、

幸次　死ぬる覺悟の、

千山　私等二人、

藤次　いや若旦那も花魁もそりやあ惡い了簡だ。生きてえたつて生きられませぬが、死ぬのはいつでも死なれます。その金だつても今宵中まだ手に入るか入らざるか知れぬに死ぬは若い了簡、及ばずながら私も御恩送りに他所へ賴み、今も今とてその金の返事を聞きに行くところ、急かずに待つて下さりませ。（トちつと留める、これにて兩人も思入あつて）

幸次　そんならそなたが外へ賴み、才覺なしてくれるとか。

千山　さういふことなら親切を、水になすのも濟まぬ譯、
藤次　どうぞ今宵の九つまで、死ぬる覺悟のお命を私に預けて下さりませ。
幸次　折角さほどに思ふ親切、
千山　死ぬる命を、
兩人　預けませう。
藤次　えゝよく預けて下さりました、有難うござります。然しそれまでお二人を、
幸次　それは幸ひこの先の見越の松の植木屋が、年來家へ出入なれば、そこへ行つて待ちませう。
藤次　見越の松の植木屋なら、私も知つてをります。
千山　そんならそこに身を匿し、
幸次　そなたの返事を待つてゐよう。
藤次　どうぞさうして下さりませ。
幸次　してまたそなたは、
千山　これから何處へ、
藤次　この後は神喜の寮、女房が縁で昨日から賴み込んでおきましたれば、是非とも借りて參ります。

幸次　あ、何にも言はぬ、忝ない。

藤次　左樣なればお二人樣、

千山　必ず便りを、

幸次　待つてゐるぞや。

ト唄になり兩人手を引合うて下手へ入る。藤次後を見送りて、

藤次　やれまあ危ねえことであつた。もう一足おれがおそいと二人ともに殺すところ、折よくこゝへ來合せたは、神や佛の導きならん。鶍にならぬ上からは女房に賴んだ百兩も、たしかに出來るに違ひない。どれ、手拭の返事を待たうか。

ト橋の際にて水中へ思入、この時上手より以前の兼樽をかつぎ出來りて、

兼　えゝ附合のねえ野郎だ、厭ならよしやあがれ。(ト言ひながら藤次に突當り)やい、何でおれにつッかゝりやあがつた、眼を明いて步きあがれ。

ト藤次の胸倉を取るを見て、

藤次　や、こりや兼ぢやあねえか。

兼　や親方か、まつぴら御免なせえ。

藤次　だいぶ醉つたが何處へ行つたのだ。
粂　今日は梅屋敷から向島をぶらついて、初剃をすつかり耗つてしまつた。
藤次　なけなしの錢を遣はずとものことに、
粂　なに、まだありやすよ、親方橋本へ行つて一ぺいやりませうか。
藤次　よしてくれ、おらあもう酒はさつぱり止めた。
粂　そんな附合のねえことを言ひなさんな、お前に厄介はかけねえから、さあ一緒に歩びなせえ。
藤次　こゝにちつと待合す人があるから、一緒に行きてえが行けねえ。もう今に五つだから、早く歸るがいゝ。
粂　なに、五つが四つだつてかまふものか。(ト引張る。)
藤次　えゝしつこい、行けねえといふに、
粂　行けざあこゝでやらう、まだ五合ばかりある筈だ、(ト袂より筒茶碗を出し。)さあ、一ぺいやんねえ。
藤次　やるなら手前一人でやれ、おらあそんなどころぢあねえ。
粂　折角人が親切に言ふに、厭なら止しねえ、呑めたあ言はねえ。醉つて言ふのぢやあねえが、お前に籠められる覺えはねえ、和國橋にゐた時分月に三分の給金を二月お前に貸があらあ、床にゐり

藤次　やあ親方だが、出てしまやあ五分と五分、さあ酒を呑まざあ一兩二分貸を返して貰ひてえ。

藤次　え丶べらぼうめ、床をしまふほどのおれだ、一兩の一兩二分のと金があるものか、眼を明いて物を言へ。

兼　眼を明いて物を言へたァ何といふ文句だえ。あんまり人を愚にするなえ、上總からぽつと出の一分二朱のてつぺん剃たあ譯の違つた職人だ。年中下馬一枚で手間宿にごろついてゐても、損料蒲團をひつかぶつて德利を枕に寢たことはねえ、憚りながら黑打の兼だ、剃刀はやはらけえが氣が荒え。さあ、呑まねえと言やあ口を割つても呑ませにやあおかねえぞ。

藤次　え丶、だまつてゐりやあい丶かと思つて、大概にしねえかえ。こつちやあ死ぬか生きるかといふ大難を控へてゐるのだ。

兼　さあ、死んぢやあ呑めねえから、生きてゐる中呑むがい丶。

ト兼茶碗へ酒を注いで突附ける。

藤次　え丶しつこい、止しやあがれ。

ト兼を突倒す。この時ごんと五つの鐘を打込む。藤次きつとなつて川を見込み、

ありやもう五つ、合圖の刻限。

粂　何でおれを突倒しやあがつた。（トこの時月出る。）

藤次　折よく晴れた朧月、善か惡かは樋の口より、

粂　この呑口の口うつし、

藤次　流るゝ合圖は紅と白、

粂　濁酒ぢやあねえ砂ごしだ。

ト藤次は流れを見込みゐる。波の音烈しく、紅染の手拭仕掛にて流れ來るを藤次見て、

藤次　南無三、紅染が流れて來た。

粂　なに、辨慶はまだ流れやあしねえ。

藤次　扨は、金はできねえか。

粂　金ができたら返してくれ。

ト粂藤次に取りつくを、

藤次　えゝうつとうしい、放しやあがれ。

ト粂を突倒す、と粂はそのまゝ倒れてゐる。藤次きつとなつて、

おきんが手にて出來ねえからは、所詮百兩といふ金が外で出來よう當はなし、金ができねば幸次

郎様千山もろ共命の瀬戸、こいつあ一番願酒を破り神喜に逢つて一かばち、押借をしても金を借りにやあならねえわえ。むゝ幸ひ酒の力を借りて、

ト一升樽を取り、樽の口より酒を飲みほつと思入あつて、

粂　えゝ、まだこれぢやあ足らねえが、足らざあおれと一緒に歩べ、

ト粂起上り、藤次の手を取り引張るを、

藤次　えゝ、まだ愚圖々々とぬかしやあがるか。(ト樽で粂の頭をくらはす。)

粂　やあ、こりやあ打ちやあがつたな。

藤次　もう破れかぶれだ。

ト粂を川へ投込み、藤次鉢卷をなし、

むゝ、さうだ。

ト尻を端折りきつと見得。曲撥にてこの道具廻ると、元の道具へ戻る。

(元の座敷の場)――こゝに神喜樽の上に住ひ、廣蓋に三つ物を列べ、おいれ酌をなし酒を呑んでゐ

る。この傍に國松肴を喰つてゐる。おなかは抱兒を抱き、おきくは肴を小皿へ取つてゐる。菊燈臺を灯しあり、端唄にて道具留る。

神喜　これ、坊は何がいゝ、好きなものを喰べさせるぞ。

國松　あい、おいらはお刺身がいゝ。

神喜　此奴なか〳〵洒落た奴だ、それ、刺身を取つてやりやれ。

きく　畏まりました。

神喜　おゝ小さいのも泣き止んだな。

なか　はい、やうやくおだまりなさいました。

神喜　さうしておきんはどうしたな。

いね　たしかお化粧部屋においでなさいました。

神喜　扨はきれいにして見せる積りだな。

きく　お化粧をなさいませんでも、お美しうございまする。

なか　それに引替へ私なぞは、お化粧をいたしますと尚穢なくなりますわいな。

神喜　いや〳〵さうでない、おなかもなか〳〵様子がよくなつたぞ。

いね　そのやうなことを仰しやいますと、おきんさんへさう申しますぜ。

神喜　いや言はれては大變、左樣なことは船中で申さぬことぢや。

　　ト花道の揚幕にて、

權助　やあ、あばれ者がまゐりました〳〵。

神喜　やゝ、あの物音は、

皆々　たしかに喧嘩でござりませう。

　　トばた〳〵になり、花道より以前の藤次向う鉢卷にて門の戸を打ちこはし出來る、これを權助、おなべ支へながら出で、花道にてちよつと立廻り、

權助　やあ、なんで汝は案内もなく、

なべ　お庭内へ入るのだ。

藤次　案内もへちまも入るものか。

權助　さつき旦那をしくじつた、

なべ　その埋めくさに、

兩人　おのれはやらぬ。

ト留めるを振拂ひ、つかつかと舞臺へ來る、權助又かゝるを投退け、

藤次　やあ汝等にやあ用はねえ、神喜に用があつて來た。

ト國松藤次を見てつかつかと傍へ來て、

國松　やあ父や、來たか。

藤次　おゝ小倅か、赤兒は何處にゐる。

國松　あそこにをるよ。

藤次　餓鬼をこつちへ返しやあがれ。

ト おなかの抱いてゐる兒を引取り抱く、これにて泣くをたゝきながら、

お ゝ泣くなく。さあ、この家の主人神喜に逢ひてえ。

神喜　何の用でござつたか、神喜といふは私でござる。

ト藤次神喜を見て、

藤次　むゝ今唐物屋で指折の、神喜といふなあお前かえ。

神喜　いかにも、私が神崎屋喜兵衞といふ唐物屋、肩名を呼んで神喜と言ひます。して又こなたは何人なるぞ。

藤次　おらあ元和國橋で藤次といつた髮結だが、年中錢のねえとこから、仲間の奴の惡口に和藤内とい
　ふなあおれだ。
神喜　むゝ、すりや、和國橋で名代の髮結、藤次どのとはこなたであつたか。
藤次　互ひにその名は聞きながら、
神喜　緣がなけりやあ今日までも、
藤次　知らねえ家へ押しかけて、
神喜　思ひがけねえ、
兩人　この出會。
　　　ト兩人氣味合の思入、抱兒泣く。
藤次　えゝ又泣くか。
國松　泣くならおいらが抱しようか。
藤次　おゝちつと抱いてくれ。
　　　ト抱兒を國松に抱かせろ。神喜思入あつて、
神喜　して藤次どのにはこの寮へ、何用あつてござつたな。

藤次　わつちが來たは外でもねえ、手切金を貰ひにまゐりました。

皆々　やあ。

神喜　なに、手切とは。

藤次　お前が妾におきなすつたおきんは私が女房だ。亭主のある女をば、誰に斷つておきなすつた。

神喜　誰でもないおきんが親、市兵衞からおきました。妾といへど奉公人、さしかまひ一札の請狀取つておいたからは、假令亭主があらうとも、何も言はるゝ覺えはない。

藤次　そりやあ言はねえでも知れたこと、請狀取つておいたらうが、二兩二分か三兩の飯焚でせえ手を附けりやあ五兩か七兩取られる仕事、亭主ばかりか餓鬼まである女を承知でおくからあ、手切は覺悟でゐなさるだらう。まだ去狀も出さねえ女、言はゞ間男、もう五年私も年が若けりやあ疵でもつけて腹を癒るが、そんな野暮なことはしねえ、落ちるところはどうで金、人の厄介になるよりやあと、昨日おきんに賴んだが出來ねえけりやあもうそれまで、面とむかつて强談に手切の金を貰ひに來たのだ。

神喜　「外より違變申す者無御座候」と請狀に記してあるが、根が亭主。まさか素手でも返されまい、二兩か三兩のことならば合力をして進ぜませう。

藤次　思召しは有難いが、一兩や三兩のめくされ金は、私あ貰ひには來ませんよ。
神喜　して、何程ほしいといふのだ。
藤次　まづ間男を拵へりやあ、お定りが七兩二分、こりやあ昔からの定値段、ところでこの節諸式の値
　上、間男の相場もぐつと上り、まづ百兩貰ひてえ。
皆々　や、(トびつくりする。)
權助　扨は夫婦なれあひで、
なべ　うぬはゆすりに來せたのだな。
藤次　ゆすりたア何がゆすりだ、貰ふ譯があつて貰ひに來たのだ。
兩人　何の譯があるものか。(ト藤次にかゝるを、)
藤次　えゝ、何をしやあがる、(トなぐりつける、兩人頭を押へて、)
權助　あいた〳〵、こいつはかなはぬ。
なべ　逃げろ〳〵。
　ト權助、おなべは下手へ逃げて入る。神喜はおいれに囁く、これにておきく　おなかと共に酒肴の道
　具を持ち奥へ入る。國松案じる思入にて、

國松　父や、又喧嘩か。
藤次　なあに喧嘩ぢやあない、案じるな〳〵。
　　　ト此時奥より小助出來りて、
小助　もし旦那、太え奴でござりますな。
神喜　うつちやつておけ、殘貰ひだ。
小助　いえ、うつちやつておけませぬ。（ト前へ出て、）これ藤次さんとやら、樣子は奥で聞きました。お前が亭主か知らないがこつちは親と掛合つて、而も私が請狀に市兵衞殿の所へ行き、取極めて來た奉公人、三文判でも人主の判まですわつてゐるからは、五分でも言はれる所はない、それを手切の足切のと、町と違つて百姓地でも地頭もあれば名主もある、下手なことを言ひなすつて後で後悔しなさるな。
藤次　何の後悔するものだ、親父が判を捺さうとも去狀出さにやあおれが女房、妾にするならするやうに手切を出して妾にしろ。
小助　そりやあさうでもあらうけれど、こつちは亭主があるやらないやら知らずにおいた奉公人、置いて惡くば請人の親父の所へ言はつせえ。

藤次　いや言つた所が始まらねえ、高の知れた唐人飴、ピイ〳〵ドン〳〵相手にならねえ、三間張りか五間張り、十間間口のこの寮を目當に手切を貰ひに來たのだ。

小助　それぢやあ大家をつけこんで、女房のことを言ひがゝり金をゆすりに來たのだな。

藤次　やい、ゆすりたア誰がことだ。一夜分限の唐物屋異國贔屓の汝等たあ一つにならねえ江戸つ兒だ。身にやあ襤褸衣を着てゐても、由緒正しい御身分で家業は御免の一錢職、呑むと打つので宵越しの錢は持たねえ男だが、しら几帳面の髮結だ。昨日今日まで和國橋で九尺床でも床主に、親方とか馬方とか仲間の者にも立てられて、日本橋から神田をかけ油氣なしの水髮ぢやあ引を取らねえこの藤次、假結なしのぶッつけ元結、言ひ出すからは後へは引かねえ。さあ、ゆすりならゆすりのやうに、地頭からでも名主からでも繩をかけておれを突出せ。

小助　おゝ、突出さねえでどうするものだ。(ト立ちかゝるを神喜留めて、)

神喜　あゝこれ小助、靜にしやれ。高の知れた髮結風情、立騷ぐには及ばない。

小助　でもあんまりな言ひたいがい故、

神喜　はて、何と言はうと泉水で蛙が鳴くと思へば濟む。

小助　それぢやと申して、

神喜　えゝ、捨てゝおきやれといふに、
小助　ちえゝ、
　　ト小助は悔しき思入、藤次は二重へ腰をかけ、
藤次　さあ、江戸つ兒は氣が短い、突出すなら早く突出せ。
神喜　これ藤次どの、その強面は止さつせえ、物柔らかに下から出て頼むことならそこは人情、五兩のものは七兩に色を附けてやりもせうが、横に車の押借では二分でも金はやられない。そんなおどしを怖がつて、蝦夷長崎の旅をかけ異人を相手に賣買のこの生業がなるものか、手前も自慢の水髮でならぶものなくこの江戸で、無双と言はるゝ髮結なら、おれも唐物仲間では一といつて二と下らぬ鑑定にかけては稀代の神喜、取らるゝものなら取つて見ろ、百兩の金は扨おいて百錢一枚出しやあしねえぞ。
　　トきつと思入、藤次もきつとなつて、
藤次　むゝ面白い、出さざあ出すな、金を出さにやあ密夫だ、うぬが首をもらはにやあならねえ。
神喜　おれが首より汝が首、落ちねえやうに用心しろ。
藤次　どうでこつちは命がけ、

神喜　何と、

藤次　死にもの狂ひだ、覺悟なせ。

ト立ちかゝろ、國松抱兒を突附け、

國松　これ父や、赤兒が泣くよ。

藤次　おゝ泣くな〳〵、（ト赤兒の頭を撫で、心の引かれる思入あつて氣を替へ）可愛い餓鬼ももうこれまで

ト上へ上らうとするを小助留めて、

小助　うぬ、手向ひなさば、たゞはおかぬぞ。

藤次　えゝ、やかましいやい。

ト小助を引退け神喜へかゝるを留める立廻り、この中國松うろ〳〵して、

國松　父や、あぶねえよ〳〵。

ト藤次はこれへ始終心の引かれる思入、この時上手の屋體よりおむつ出來りて双方を留め、

むつ　まあ〳〵待つて下さんせいな。

藤次　えゝうぬが知つたことぢやあねえ。

小助　あぶないから、退いた〳〵。

むつ　いえ退かれぬ、退かれぬわいな。

　　トおむつ留める、藤次思入あつて、

藤次　えゝこれ、うぬア何で留めるのだ、おれが邪魔をするからあ、神喜が肩を持つのだな。

むつ　そりや情ない藤次さん、知らぬことゝはいひながらお前の爲めに子ばかりかこの身を捨てゝ妾奉公、飽きも飽かれもせぬけれど一旦去られた私の身體、親の判にて來たものを兎やかういふはお前が無理、短氣なことをしなさんしたら、その身を仕舞はにやならぬぞえ。そりやもう男の言ひがゝり、お前はそれでよからうが、後に殘つた二人の子供、誰が背丈を延ばします。

藤次　それだといつて、今宵につゞまる、

むつ　さあ、それも事と品によつたら出來まいものでもないほどに、急かずと待つて下さんせいなあ。

　　トおむつ苦痛を隱す思入にて藤次をぢつと留める、神喜おむつに眼を附け思入あつて、

神喜　はて心得ぬおきんが樣子、眼中どみて色替り、語音の調子違ひしは、もしや深傷を負うてはゐぬか。（トこれにておむつぎつくり思入あつて）

むつ　え、さすがはお目の高いこと、御推量の上からは何をかお隱し申しませう、今流したる手拭のその紅染はこれでござんす。

ト左りの肌を脱ぐ、と襦袢の乳の下血汐にじみゐる、皆々びつくりして、

藤次　やゝ、こりやおきんには何故に、

小助　かゝる覺悟をなされしぞ。

神喜　早まつたこと、

三人　いたしたなあ。

ト小助おむつの介抱をする、國松つか〳〵と傍へ行き、

國松　これ父や、お母あはどうしたのだ。

藤次　いや、どうもしやあしねえから案じるな〳〵。(ト國松の脊を撫でながら)かういふ足手纏ひを殘し何で手前は自害をしたのだ。

むつ　私が命捨てたるは、神喜樣へ濟まぬ故、

神喜　なに、この神喜に濟まぬとは、

ト傍へ詰寄る。竹笛入りの合方になり、おむつ苦しき思入にて、

むつ　さあ、妾といふは名のみにて、ついに一度一つ寐なされず、なに不自由なく目をかけてお遣ひ下さる旦那樣、その御恩をも顧みず百兩といふ大まいの金の御無心申せしは、別れし夫と馴合でか

かる巧計をいたせしかと、お疑ひもござりませうが、さら〳〵さういふ譯ではない。假令夫の頼みでも、道に缺けたることならば、何しにお願ひ申しませう。御恩になりし幸次郎樣の命に拘はる大事故、餘儀なくお願ひ申せしかど、お民樣の御緣により御本家への義理立にお斷りは無理ならず、是非なく夫へ紅染の手拭流し斷りしが、最前あなたのお言葉に、妾へ心引かされて貸したとあつては御本家へ猶更濟まぬとおしやつた、その義理合も私が命を捨つればもうそれまで、又夫が今の惡口も、お主の難儀を助けたい心ばかりに言ひがゝり、巧み事か僞りでないといふ言譯に命を捨てしこの自害、不便なものと思召さば、なくてかなはぬ百兩の金子をお貸し下さるやう命捨てゝのこのお願ひ、おかなへなされて下さりませ。

藤次　そんならおきんが命を捨てしは、神喜どのへの義理立と、おれが難儀を思つてか。

小助　死なずとしやうもあらうのに、早まつたことなされたなあ。

神喜　かゝる死をばさせまい爲め、本家へ對して貸されぬ金を、わざと最前預けしは盜めと言はぬばかりの謎、解き得で自害なしたるか。

むつ　さあ、もしやさうかと思ひしかど、盜みをなしては濟まざる故、命捨てゝのこのお願ひ、

神喜　あ、さほど迄に夫を思ひ、主を大事になす願ひ、かなへてやりたいものなれど、本家へ義理が濟

まざれば、不便ながらもこの儀ばかりは、

むつ　おかなへなされて下さりませぬか。

神喜　されば願ひは聞かれねど、假令半月一月でも妾となした上からは、跡懇に弔ひ得させん。こりや小助、手箱をこれへ、

小助　はつ、

　　ト小助奥へ入り手箱を持つて來る、神喜中より百兩包みを出し、

神喜　七日々々の追善供養、即ち亭主の藤次どのへ後世を弔ふ回向料、金子百兩遣はさん。

むつ　そんなら私が願ひをかなへて、

神喜　いや、願ひは聞かぬ神喜が意地、遣はす金子は回向料（ト百兩包を差出す。）

むつ　えゝ有難うござります。

小助　お情深い旦那樣がお心こめし回向料、いざ受取られよ藤次どの。

　　ト小助取つて藤次の前へ出す、藤次取つていたゞき、面目なき思入にて、

藤次　思ひがけねえこの金の我手に入つて、御主人の難儀を救ふも女房と神喜殿の情故、今となつては面目ねえ、最前からの惡口雜言、まつぴら御免下さりませ。

神喜　あこれに附けても殘念なは、浮世の義理を立てすぎてあたら命を捨てさせし、おきんが不便でござるわい。（トおむつを見て愁ひの思入。）

藤次　合點行かぬはあのおきんを、さほどまでに思召すのは如何なる譯、仔細をお聞かせ下さりませ。

神喜　あゝ、今まで包み隱せしが、明して言はゞこれなるおきんは、別れ程經し妹なるわ。

むつ　えゝ。

藤次　そんなら女房は神喜殿の、

小助　妹御にてあつたるか。

神喜　算へて見れば二十歳以前、而も五歳の暮なりしが、勾引されて行衞知れず、その折腰に提げたる巾着、守の中に入れおきしは清水寺の觀世音、扉表具のその布は世にも稀なる蝶鳥布　それを證據に尋ねしが、このほど計らず兩國で梅見歸りの屋根船へ流れ寄つたる鏡臺を、船頭どもが引上げしが、その抽出に入れありし蝶鳥布の扉表具、いかなる者の所持なるか證據はなきかと鏡臺の裏を返せば、和國橋髮結藤次と記せし名書、扨は藤次の女房が妹なりと知つたる後、妾の目見得に來た女見れば覺えの幼顏、素性を聞けば髮結の元は藤次が女房に、扨は妹と知つたれど、わざと今日まで名乘らぬは、今江戸の大小名過半出入の神崎屋、唐人飴の市兵衞が娘を妹と言

はれぬ身の上、いつかは名乘る時節もあらんと今日まで包み隱せしが、仇となつたるこの場の仕儀、疾にも名乘り合ひたらば斯る最期はさせまいもの、悔しいことをいたしましたわい。

藤次　すりや、それ故に枕も交さず、お情かけて下されし、

小助　旦那樣が現在の、

むつ　アノ、兄さんでござんしたか。

神喜　おゝ、妹であつたるぞ。

むつ　えゝおなつかしうござんすわいな。

ト神喜おむつ手を取交しよろしく思入。

神喜　あゝ名乘らぬ故に妹にかゝる最期をさせし代り、二人の子供は我引取り、乳母をおいて守り育て、成人の後一人はこの喜兵衛が養子となし家督を讓り與へんほどに、これを冥土の土産となし心殘さず成佛なせ。

むつ　黄泉の障りの二人の子供、お前がさうして下さらば、それで迷はず行く所へ、私や行かれますわいな。

藤次　重々厚き情のお言葉、お禮は言葉に盡されませぬ。

神喜　名乘らぬ前は兎も角も、斯なる上は兄弟仲、その禮儀には及ばぬわい。

藤次　えゝ有難うござります。

國松　(傍へ來て)これ父や、お母あは死ぬのか。

藤次　おゝ(ト國松を見て不便だといふ思入)お母あは死んで行くから此世の名殘、こゝへ來て暇乞に抱いて貰へ。(ト抱兒を抱き取る。)

國松　あい(トおむつの傍へ來て)お母あ、お前は死ぬかえ。

むつ　(國松を引寄せ、顏を見て)おゝ、生きてゐられぬ譯あつて、死んでは行くが國松や千太が人となるまでは、影身に附添ひ放れはせぬぞ。

國松　死んでもいゝから今日からして、父と一緒にゐてくんねえ。

むつ　あゝ子心にも別れたを、案じてゐたか可愛やなあ。(ト國松の顏へ顏を當て、段々苦痛の思入にて)あこれ、藤次どの、千太を一目(ト眼の眩みし思入にて顏を出す。)

藤次　おゝ、この世の見納め、とつくり見やれ。

　トおむつの顏の所へ抱兒を出す、おむつ見えぬ思入にて、

むつ　あゝもう見えぬわいな。

ト此中神喜愁ひの思入あつて、

神喜　眼が見えぬといふからは、最早臨終、末期の水を、

小助　心得ました。（ト手水鉢の柄杓へ水を汲み、持來る、）

神喜　さあ藤次どの、呑ましてやらつしやれ。

藤次　へい。

ト抱兒を國松に渡し、うつとりとするおむつを抱起し、柄杓の水を口へ入れる。本釣鐘、これにておむつうつとりとなる、藤次耳へ口を寄せて、

これ、おきんや〳〵。

國松　お母あや〳〵。

トこの時おむつがつくりと落入る。

藤次　あゝもういけませぬ。

神喜　南無阿彌陀佛〳〵

ト神喜合掌する、藤次、小助は兩人しておむつの死骸を後へやり、有合ふ二枚屏風を立廻す。

小助　あゝ、はかないことでござりました。

神喜　香花の仕度をしてくりやれ。

小助　畏まりました。

ト小助は奥へ入る、神喜涙を拭ひて、

神喜　あゝ今更悔んで返らぬこと、藤次殿には片時も早くその金子を持參なし、主人の難儀を救はれよ。

ト藤次も氣を替へて、

藤次　いかにも今宵につゞまる切羽、歎きを外に（ト件の金を取上げ立ちかゝりて、）とはいへこれを見捨てゝは、

神喜　はて、此の場は兄が引受くれば、後氣遣はずと、

藤次　左樣なれば、これより直に、

ト平舞臺へ下りる、この時下手にて幸次郎の聲にて、

幸次　あいや行くに及ばぬ、幸次郎疾よりこれに忍んでゐました。

ト下手垣の蔭より以前の幸次郎千山を連れて出來る、藤次見て、

藤次　や、こりや若旦那にはどうしてこゝへ、

幸次　最前これへと聞いた故。そなたが受合ふ百兩の金調はぬその時は、夜明けぬ中に死なうと思ひ、

――　千山もろとも裏手より小蔭に忍んで、最前からの樣子は殘らず聞きました。

藤次　いや御存じとあるからは委しいお話いたしませぬが、神喜どのゝ情にて計らず手に入るこの百兩、最早死ぬには及びませぬ。（ト百兩の金を見せる。）

幸次　何にも言はぬ忝ない。

千山　（思入あつて、）段々との事情を聞けば聞くほど添はれぬ義理、幸次郎樣を始めとして皆さん方に御苦勞をかけしも元は私故、濟まぬ事ぢやと氣が附いては、思ひきらねばならぬほどに、お前も思ひ切らしやんせ。それでなければ百兩の金をお惠み下されし、神喜樣へ濟みませぬ。ただ何事もこれまでと思ひ流して明日からは、お民さんと睦じうお添ひなされて下さんせいな。

ト此時奥にてお民の聲にて、

お民　あもし、その義理立には及ばぬわいな。

ト奥より二幕目の幸次郎女房お民出來る。

神喜　や、思ひがけないお民樣、

幸次　こゝへはどうして、

千山　ござんしたぞいな。

お民　さあ、嫁といふのは名ばかりにて、ついに一度の添臥せず幸次郎樣に嫌はれし故、私や離縁なする積りで喜兵衞どのへ相談かけに、さつきにこゝへ來たけれど、出るにも出られず一間へ入り、私や隱れてゐたわいな。

幸次　すりや、最前からの一部始終を、

お民　殘らず聞いてゐましたが、千山さんの志し無にするやうではあるけれど、元よりお氣に入らぬ私、喜兵衞どのゝ金故に飽きも飽かれもせぬ仲を二つに割いて添はれませうか、私や離縁をする覺悟、よしない義理を立てずとも、行末長く幸次郎樣と仲よう添うて下さんせいなあ。

千山　いえ／＼私やどうあつても添はれぬといふその譯は、幸手から來る田舍客に身請をされし上からは、最早身まゝにならぬ身體、生長らへても何樂しみ、死ぬる覺悟でござんすわいなあ。

神喜　いや死ぬに及ばぬ、身請の客は幸手にあらぬこの神喜ぢや。

幸次　え、すりや千山が身請の客は、

千山　神喜さんでござんしたか。

小助　その前立は卽ち小助、

ト奥より以前の小助小机に香花を載せ持つて出來り、屛風の傍へおく。

幸次　や、こなたは幸手の、

千山　惣右衛門さん、

小助　惣右衛門とはほんの假の名、まことは此家の手代小助、生れが幸手を幸ひに田舍客と僞つて身請なしたは千山どのと幸次郎様の仲を割き、睦じうお添はせ申さん主人の計らひ、

神喜　その身請の相談より幸次郎殿も手附の金に、大切なる香合を質入なしてこの騷動、元の起りは神喜が仕業、その言譯には年季證文幸次郎殿へ我土産、お民どのを本妻に千山どのを妾となし、行末長く添うて下され。

ト懷より年季證文を出して藤次へ渡す。

藤次　神喜殿のお裁きにて、今日につゞまる金も出來、千山どのゝ身請まで殘る所なきこの場の納り、えゝ有難うござりまする。

ト此中お民は懷より剃刀を出し、千山は落散りあるおむつの剃刀を取り、兩人一時に髷を切る、小助見て、

小助　やあ、こりや何故にお二人とも髮をお切りなされしぞ。

千山　さあ、この千山は黑髮と共に妹脊の道をきり、今より尼と姿を替へ、お民様へ幸次郎様をお讓り

中す心故、

お民　そりや私とても同じこと、嫌はれし身に尼となり、千山どのへ幸次郎様を讓る心で切つたる黒髪、

神喜　ほゝお、言ひ合はさねど二人とも、夫を讓る義理と義理、その義理故にはかなくも、

藤次　昨日の雪と消え行きし女房おきんが貞女にも、

小助　まさりおとらぬお二人樣、

幸次　花は散りても根に返れど、

お民　返らぬ姿墨染に、

千山　色を捨てたる尼法師、

神喜　あ、思ひ廻せば廻すほど、

藤次　義理は切ない、

皆々　ものぢやなあ。（と皆々よろしく思入。本釣鐘を打込む。）

藤次　やゝ、最早九つ、若旦那には、

小助　今宵に限る香合を、

幸次　この金子にて取戻さん。

ト この時權助、おなべ窺ひ出で、

兩人 その金を、

ト かゝるを突遣し、藤次は權助、小助はおなべを引きすゑる、國松藤次の傍へ來て、

國松 父や、怖いよ。

ト これにて藤次抱兒を取上げる、權助行きかゝるを片手で押へ、

藤次 然しこれより行く道は、

神喜 往來稀な割下水、

小助 金を持つては物騒故、

お民 陸を行かずに、

千山 舟路が丈夫、

幸次 そんなら船にて、

神喜 ちつとも早く、

權助 汝をやつては、

なべ

ト 振解いてかゝるを小助おなべを捻ぢ上げ、藤次權助を張倒す、これにてばんと轉るを木の頭。抱兒

泣く故、

藤次 おゝ、たがよく〳〵。

ト幸次郎金を持ち立上るを、千山、お民双方より縋る。神喜は屏風の内の死骸を見て愁ひの思入。小助は、おこつくおなべを押へつける。藤次は抱兒をいぶりつけながら双方へ思入、この見得引張りよろしく、本釣鐘の送りにて、

ひやうし幕

幕引附けると屋臺囃子にてつなぎ、直に引返す。

五幕目、大切　稲荷祭虎狩の場

〔役名━市脊切竹門ノ虎、平野屋幸次郎、唐人飴の市兵衛、鳶ノ者脊龜ノ竹、掛橋木曾兵衛、小道具屋市助、若い者等。〕

四幕目の幕引附けると屋臺囃子になり、花道より若い者の四、竹の模樣にて脊に朱で虎といふ字の半纒三尺帶にて、大竹へ一萬度の御祓を附けしを持ち、後より若い者の五、六、七、八、九何れも同じ裝にて附添ひ出で、直に舞臺幕外へ居列びて、

若四　こう松や、どこの稲荷樣でも獅子頭ばかりだが、竹川岸といふ所から豹虎の頭をこしらへたのは思ひ附ぢやあねえか。
若五　そこで半纏も竹の模樣に、毎も牡丹の萬燈だが、今年は虎といふ所で、御祓を附けて竹の萬燈だ。
若六　獅子より虎は強いさうだから、どこの町内にも負けないやうに、威勢よく擔がうぜ。
若七　なんでもずつと渡りを附け、千里の竹といふ地口で、千住から竹ノ塚までやッつけよう。
若八　そんな遠くへ行かねえで、藪の内から竹門位でしまつたはうがいゝぢやあねえか。
若九　何にしろ獅子と違つて虎を擔ぐ鳴物に、屋臺囃子もをかしいぢやあねえか。
若四　そりやあ町内の家主衆も、屋臺囃子より唐人囃子がよからうと、毎もお祭りに雇はれて出る唐人市兵衛を頼んであらあ。
若五　いや市兵衛なら大丈夫、唐人囃子と太え事ぢやあ引を取らねえ親仁だ。
若六　もう皆々が集つたらうから、これから行つて擔ぎ出さうぢやあねえか。
若七　然し、唐人囃子で木遣でもねえな。
若八　さうよ、かん〳〵のうでもやッつけようか。
若九　えゝ無駄を言はずと宮本で一ぺいやつて、擔ぎ出さうか。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト皆々幕の引附（下の方）へ入る。とよきほどに鳴物を直し幕明く。

（祭禮の場）――本舞臺正面上下に太き竹を立て、注連を張り、またぎの大提灯稲荷大明神と記しあり、上の方に蒸籠の積物、進上のビラ、下の方町木戸、彼方は奥深に地口行燈の附し町家の遠見、上手よき所に稲荷道といふ石の行燈灯入りの傍示杭、總て初午祭りの體。上手に掛橋木曾兵衞打割羽織、縞の袴、股立大小にて立つてゐる、下手に平野屋幸次郎羽織着流しにて控へゐる、この見得聖天にて幕明く、

幸次　これは〳〵木曾兵衞樣には、よい所でお目にかゝりましたが、私方へおいでゞござりましたか。

木曾　いかにも唯今參りし所、その方が他出故委細は申しおきたれど、こゝで逢ひしは丁度幸ひ、改め申すに及ばねど主人六浦主水、殿樣よりお預りの御家の重寶胡蝶の香合、袋の修覆にその方へ先達預けしところ、今以て納めざる故數度催促に及べども、今日の明日のと延々に上へ對して申譯なく、主人の心配いかばかり、もしや紛失でもいたしはせぬかその方參つて幸次郎に確と樣子を承はれと、仰せを受けて參りし木曾兵衞、未だ出來いたさぬか、但しは紛失いたせしか、包みかくさず有體に、事の仔細を申されよ。

幸次　主水様に左程まで御心配をかけまして、申譯もございませぬが、まつたく職人方にて出來致さずそれ故段々延引なし、紛失でもいたせしかと御疑ひございますも御尤もではございますが、大切なる茶入故迂濶に人手へも渡しませねば、必ずお案じ下さりますな、最早出來いたしましたれば今晩か明朝までには、きつと持參いたしますやうにござります。

木曾　それ承はつて安堵いたした。もしも紛失なすに於ては、主人は上へ申譯に御切腹なされねばならぬ。

幸次　左樣なことがござりましては、私とても共々に命を捨てねばなりませねど、遲くも明朝未明までには持參いたしますほどに、必ずお案じ下さりますな。

木曾　案じるより產むが易いと、未明までに持參とあれば、主人は元より使者に參りし拙者までも、何程か悅ばしうござる。

幸次　遲なはりしは手前の粗相、それをお褒めに與かつて、面目次第もござりませぬ。

ト花道より伜籠の竹蔦ノ者の打扮にて、二幕目の小道具屋市助を引張り出來る。

市助　これ竹兄い、どこまで私を引張つて行きなさるのだ。

竹　何處でもいゝから、おれと一緒に來ねえ。

市助　行かねえとは言はねえから、まあこの手を放してくんなせえ。

竹　えゝ、よく放せ〳〵と、三題噺ぢやあるめえし、まあ來ねえといつたら來ねえよ。

　　ト舞臺へ來り、幸次郎を見て、

もし若旦那、市助さんを引張つて來ましたぜ。

幸次　おゝ竹公か、御苦勞々々、さつきから待つてゐた。

竹　嘸お待兼でございましたらう。（ト市助を放す、市助思入あつて、）

市助　もし幸次郎樣、私へ御用とは、茶入のことぢやあござりますまいね。

幸次　おゝ、その茶入のことぢやわいの。

市助　茶入のことなら聞かれませぬ、昨日までのお約束故、

　　ト言ひかけるを幸次郎は木曾兵衞へはゞかりて、

幸次　ほんに昨日までの約束ではあつたれど、今まで待つた待ちついで、

市助　いえ〳〵もう〳〵待たれませぬ、地藏の顏も三度が四度、もう待たれぬと申したのも五日後から
でござりますぜ。

幸次　おゝ職人の方へさう言うて下さつたか。

市助　いゝえさ、お前にあれほど申したに、
幸次　さあ〳〵私も聞いてはゐたけれど、職人といふものは扨々ずるいものぢやわいの。
市助　人の事よりお前こそ、千葉様から預かつた茶入を私が口入で、
幸次　あこれ、そのことなら言はいでもよいことを、
市助　いえ、言はずにはをられませぬ。（ト此の中木曾兵衛思入あつて）
木曾　こりや幸次郎、あの者は何者なるぞ。
幸次　へい、これは袋を頼みし職人でござります。
木曾　扨は袋を頼みしは、あの者なるか。
幸次　左様にござります。
市助　これさ〳〵、お袋さんに頼まれやあしねえ、お前が千山を身請の金に質においた胡蝶の茶入、
木曾　やゝ（ト思入）
幸次　あゝこれはしたり市助どの、七の八のと何をいふのだ、頼んだのは九月ぢやぞえ、今まで引張るといふがあるものかいの。
市助　そりやあ此方で言ふせりふだが、書抜が違やあしませんか。

幸次　なんの違つてよいものか、餘計なことを言はずとも、また出直して來て下され。

市助　いえ〱もう〱參られませぬ。外に望む人があつてそこへ持つて行くところ、竹兄いの頼みだから仕方なく來ましたのだ、もう出なほして參られませぬよ。

竹　もし若旦那、納めにやあ濟まねえと仰しやるから、市助さんを無理に引張つて來ましたが、後と言はずと今こゝで、話しあつておしまひなせえな。

幸次　いや〱、どうも今こゝでは、（ト木曾兵衞へ思入。）

竹　それぢやあ引張つて來にやあよかつた。

幸次　誰も引張つて來いと言ひもせぬに、

竹　お前さんがさう仰しやつたではござりませぬか。

幸次　何の、そんなことをいふものか。

ト木曾兵衞へ思入あつて呑込ませる。

市助　これだから來ないと言つたのだ。

竹　もし若旦那、それぢやあ千葉樣へ濟みますまいぜ、早く金をお渡しなさいな。

幸次　それだといつて今こゝでは、

市助　大方そんなことだらうと思つた、金が出來ずば仕方がない、いよ〳〵外へ賣りますよ。
幸次　あゝこれ、外へやられてはならぬ。
竹　そんなら金をおくんなせえな。
幸次　さあ、それは、
木曾　いやなに幸次郎、最早身共は立歸るが、いよ〳〵明朝未明までに相違なく持參いたすな。
幸次　きつと持參いたしまする。
木曾　それに相違もあるまいが、最前からの樣子にてあらかた知れし茶入の行方、
幸次　や、
木曾　もしも人手へ渡る時は、最前も申す通り、主人の命に拘はる仕儀、
幸次　それも心得をりますれば、
木曾　汚名も晴るゝ明方までに、
幸次　きつと持參いたしまする。
木曾　とは言へ今宵の樣子では、
幸次　え、

木曾　又もや雨とならねばよいが、

ト唄になり木曾兵衛思入あつて花道へ入る、幸次郎ほつと思入あつて、

幸次　やれ〳〵びつしより汗になつた。

竹　まだ春だつて雪の降るのに、なんでそんなに汗が出ました。

幸次　さあ、あんまり貴樣達が氣が利かぬからぢや。

竹　氣が利かぬとは何が利かねえのでござります。外の者ぢやあ來ねえから、手前行つて譯を話し連れて來てくれと仰しやるから、來ねえといふのを無理やりにやつと市助さんを連れて來たのだ。

市助　ほんにさうだ、幸次郎さんならどんなことでも來ることではないけれど、竹兄いが來てくれと言ひなさるから、こゝまで來たのだ、實は昨日が日限故今日は他所へ賣る積りで、茶入を持つて出かけたとこだ。

竹　急ぎの用で行かれねえといふのを無理に引張つて來て、氣が利かねえと言はれちやあ塡らねえ。

市助　さあ、竹兄い、行きませう。（ト行きかけるを幸次郎留めて）

幸次　あこれ〳〵待つて下され、今のやうに言うたのは私が惡いが、何を隱さう今ござつたは、ありやお屋敷からその茶入を催促にござつたお方、質入なしたことが知れては、向後お出入がならぬ故

どうせうかと思うたので、つい今のやうに言うたのぢやわいの。

竹　えゝそんなら今のお侍様が、茶入の催促にござりましたのか。

市助　さういふ譯なら譯のやうに、ちよつとおつしやつて下さればいゝに、だまつておいでなさるから、こつちにやあ分からねえ。

幸次　何を言ふにも三金輪、實は途方に暮れた故、

竹　何にしろさういふことならちつとも早く、金を渡して茶入を請けておしまひなさい。

幸次　おゝさうしませう。(ト懷より金包を出し、)さあ市助殿、元金が百兩に、利息は二十五兩一歩で二月故に二兩なれど、おそなはつた故お禮旁ゝ五兩添へてあげますぞ。

市助　あもし／＼幸次郎さん、そりやあ通常の貸借のことだ。こんな代物を預つて二兩や三兩の利息を取つて割にも評定にも合ひますものか、昨日までの約束なれば今日からは新規故五分の禮金に五分の利息、先づ今日一日が十兩さ、所で今までのが五分の禮に利息が十兩、二口しめて二十五兩、切餅(二十五兩包み)が一つなけりやあ、あの茶入は渡されぬ。

幸次　おそなはつた故二兩をば五兩にして上げるのに、まだその上に五兩の禮に五兩の利息をよこせとは、そりやあんまりでござるぞえ。

市助　あんまりならお止しなせえ、外へ賣れば五十と七十、きつと利を見る代物だ、實は二十五兩取つても面白くねえ譯さ、これが昨日請けなさりやあ餘計に貰はうとは言ひませぬが、一日でも日が延びれば、一月ぶりの利を取るのは、こりやあ金貸しの附目だ。

幸次　そりやあさうでもあらうけれど、今初めての仲ではなし、年來附合ふ懇意づく、さうあこぎに言はずとも、

市助　はて、懇意づくだから昨日ぎり、日の切れた代物をわざ〳〵こゝまで持つて來ました、知らねえ仲なら外へ賣つて五十と七十儲けます。

幸次　さういふことなら是非がない、明日揃へて上げようから、まづこの金でその茶入を、どうぞ私に返して下され。

市助　いや明日と言つては取り難い、今揃へて下すつたら、直にお渡し申しませう。

幸次　それぢやと言つて持合せが、

市助　なくばどうも仕方がねえ、流れてしまつたとあきらめなせえ。

竹　もし〳〵市助さん、そりやアあんまり因業だ、何もやらねえといふ譯ぢやあなし、明日やらうと言ひなさるのだから、それで渡してしまひなせえな。

市助　その明日といふのが險難だから、

竹　それぢやあおれが請合ふから、若旦那へ渡しなせえ。

市助　いや、お氣の毒だが兄いでも、

竹　渡されねえと言ひなさるのかえ。

市助　まあ、さうさね。

竹　これ、餓鬼だと思つて見くびりやあがるな、すつぺがしやあ一人前、親の老舗で大町の場所を預る頭分、百と二百出やあしめえし、高が十か二十の金、何處の店へさういつてもまさか出來ねえおれでもねえ。それとも達つて貸されざあ長丁半は手に持つが、お先まつくら向う見ず、腕づくなりとも借りにやあならねえ。（ト市助を引附ける。）

市助　これさ、貸さねえとは言ひませぬ。

竹　そんなら早く茶入を渡せ。

市助　渡さなくつてどうするものだ。

ト　これにて竹市助を突放す、市助茶入の箱を出す。

竹　若旦那、その金をお渡しなせえ。

幸次　それ、百兩に利が五兩、
　　　ト幸次郎金を渡す、市助とつて、
市助　左樣なら胡蝶の茶入、お改め下さりませ。
　　　ト茶入の箱を出す、幸次郎見て、
幸次　おゝ相違ない、たしかに受取つた。
竹　さあ、茶入がお手に入るならば、（ト竹市助を喰はす。）
市助　あいたゝゝゝゝ、これ竹兄い、何をするのだ。
竹　大事な茶入を持つてゐるから、今まで我慢をしてゐたのだ、おれをへこましたその替り、汝が頭をへこまさにやあ腹が癒ねえ。
市助　これさ、頭、堪忍しておくんなせえ（ト逃げにかゝるを引つ捉へて、）
竹　うぬ逃げるとて逃すものか、
　　　ト兩人立廻り、結局市助逃げて花道へ入る、竹後を追ひかけて入る。この中幸次郎捨ぜりふにて留めることあつて、
幸次　あゝこれ竹や、よい加減にせぬかいの。

ト後を見送り案じる思入、この時後へ唐人飴の市兵衛頬冠り尻端折りにて窺ひ出で、幸次郎の持つてゐる茶入の箱をひつたくり逃げるを捉へて、

うぬ、盗人め、

市兵　えゝやかましい放しやあがれ。

幸次　いや／＼放さぬ、盗人ぢや／＼。（ト言ふを振切り市兵衛上手へ逃げて入る。）あゝその盗人を捕へて下され／＼。

ト屋臺囃子にて幸次郎追ひかけ入る。と花道より竹門ノ虎二幕目の巾着切の打扮にて出來り、直に舞臺へ來り思入あつて、

虎　一昨日兄貴に出つくはし、出るにも出られず様子を聞いてこれまでの、惡事も濟まねえことをしたと、我と我てに氣が附いて河童が陸へ上つたやうに、白浪とかいふ盗人の水心を忘れてしまひ眼前に取れる金があつても、もう手を出して取る氣がねえ、十年早くかうなつたら、死んだ親父やお袋に黄泉の苦勞をかけめえものを、（ト言ひながら地口行燈の狂句を見て、）何だ、この行燈は地口だと思つたら川柳か、孝行のしたい時分に親はなし、違えねえ、この通りだ。

ト思入あつて上手へ入る。唐人囃子ばた／＼になり、下手より以前の市兵衛出來り、うろ／＼なし大

竹に附いてゐろ一萬度の上を明け、茶入を箱より出してこの中へ入れ、箱をあたりへ捨てゝ、

市兵　十人並なら手の屆かねえ、一萬度のこの中へ隱しておけば大丈夫、着物を着りやあ四尺丈、三寸ばかり切りてえと思つた脊丈が役に立つた、あゝ災も三年だなあ。

トばたくになり幸次郎出來るに、市兵礑びつくりして行きかけるを捉へて、

幸次　うぬ盜人め、茶入を返せ。

市兵　なに盜人とは誰がことだ、おらあ盜んだ覺えはねえぞ。

幸次　覺えがあらうがあるまいが、汝が取つたに違ひない。

市兵　違ひねえといふからには、おれが盜んだをしつかり見たか。

幸次　おゝしつかりと私が見た。

市兵　見たなら何處でも改めて見ろ、持つてゐたなら茶入ばかりか、命も添へて汝にやらうが、その替り又ねえ日にやあ、その分にやあしておかねえぞ。

幸次　えゝ盜人たけぐしいと、現在懷に隱してゐながら、

市兵　さあ、隱してゐるか隱してゐねえか、どこでも彼處でも改めて見ろ。

ト三尺帶を解き着物をふるつて見せろ、幸次郎改めて見て、

幸次　やゝ、こりや懐と思ひのほか、
市兵　やい、野郎め、(ト幸次郎を引きずる。)よく盗人にしやあがつたな。
幸次　さあ、取つたに違ひない故に、
市兵　まだそんなことを言やあがるか、これ、長崎町で隠れのねえ唐人飴の市兵衛だ。
　　ト手拭を取る、幸次郎見て、
幸次　扨は藤次が舅と聞きし、
市兵　おゝいかにもおきんがおらあ親、ぎよろつく眼の面が看板、盗みどろばうするくらゐなら、一本四文の飴は賣らねえ。一日歩いて三百の上を越しても四十か五十、六十近く取る年に腰はちつと曲つたが、心は直な正直者、何れも様が御存じだのに、よく惡名附けやあがつたな。
幸次　藤次が縁に女房が命を捨てゝ百兩の金が手に入り、質入せし茶入を取り得て嬉しやと思ふ間もなく又盗まれ、その盗人は捉へながら、證據なければ土足にまでかゝる憂目に逢ふといふも、色に迷ひし親の罰、最早生きてはゐられぬ身體、死ぬると覺悟したからは、盗んだ茶入を出させにやおかぬ。(ト市兵衛にむしやぶりつくを、突倒して。)
市兵　まだそんなことを言やあがるか、どれ、息の根を留めてくれう。

ト立ちかゝろ、この以前より後へ虎出で窺ひゐて、茶入の箱を拾ひ思入あつてこの時中へ入り、市兵衞を留めて、

虎　おい、父さん、待ちねえ〳〵

市兵　えゝ、手前達の知つたことぢやあねえ。（ト振放すを又捉へて、）

虎　これさ、氣の短けえ、待ちねえといつたら待ちねえな。

市兵　邪魔な留立しやあがるな、手前は何だ。

虎　何でもねえ、おらあ巾着切だ。

市兵　や、何で又巾着切が、いらぬおせゝに留めるのだ。

虎　留めに入つたは外でもねえ、この若旦那にやあ譯あつて、御恩を返さにやあならねえお方だ。

幸次　え、私に恩を返さねばならぬといふ、こなさんは、

虎　神ならぬ身の露知らず、身請の金の百兩を、

幸次　や、

虎　いやさ、百本杭でその金故御難儀かけた巾着切、御恩を返さにやならぬといふは、私あ藤次が弟で、お前さんとは乳兄弟、

幸次　おゝ、そんなら葛西へ里に行つた、
虎　へい、虎吉でござります。
市兵　それぢやあ汝あ噂に聞いた、竹門ノ虎といふ晝挊ぎだな。
虎　袂錢から取りならひ、腰の巾着煙草入着てゐる羽織をそのまゝに、脫がせるほどに功を積み、惡事千里に竹門の虎といつちやあ盛り場で、額の疵が目印に面を知られた巾着切、兄貴の縁で脫れねえお前も同じ晝挊ぎ、盜んだ茶入は仲間づくおれに返してくんなせえ。
市兵　うぬが心に引きくらべ、誰も盜みをするものと思つてゐるか知らねえが、おらあ盜みどろばうはしねえわ。
虎　そりやあ素人にいふことだ、お前が取つたか取らねえか、一目見ても知れるが生業、たしかな證據はこの箱だ。（ト茶入の箱を出す。）
市兵　や、（トぎつくり思入。）
虎　さあ、茶入は何處へこかしたか、おれに返してくんなせえ。
市兵　盜んだものなら返しもしようが、盜まぬものが返されるものか。
虎　それぢやあどうでも盜まねえといふのか。

市兵　知れたことだ、よしんば又盗んだにしろ、手前達のやうな小僧ッ兒に、文句を言はれて出すやうな、まだ老耄はしねえわえ。

虎　むゝ、出さゞあ出すな、唐人飴に相應な象や駱駝の足長め、脊丈較べぢやかなはねえが、假令形は小粒でも生れだちから蹴爪が利き、まだ一歳か二歳だが、風を起しやあ百獸の司と言はるゝ虎吉だ、毛唐人め覺悟しろ。

市兵　えゝ、まだ乳ッくせへ餓鬼のくせに、しやらつくせえことをぬかしやあがるな。

ト唐人囃子になり兩人立廻る、幸次郎うろ〳〵しながら、

幸次　あゝこれあぶない、怪我をして下さるな。

虎　えゝ、わつちよりお前があぶねえ、

市兵　邪魔をすると、そばづゑだぞ。

ト地口行燈の棒にて打つてかゝる、虎は上に附いてゐる傘を取つて立廻り、幸次郎は行燈を持つてうろ〳〵と邪魔になる立廻りよろしくあつて、以前の若い者大勢にて虎頭あほり附のを擔ぎ出來り、この中へ入る。

あゝこれ、助けてくれ〳〵。

若一　や、誰かと思やあ唐人市兵衞、
皆々　相手は誰だ〳〵。
虎　誰でもねえ、おれだ。
若二　や、うぬは巾着切の竹門の虎、
若一　今日の祭りに雇つた市兵衞、
若二　こいつあ見ちやあ、
皆々　ゐられねえわえ。
市兵　どうぞ虎をしめて下せえ。
皆々　おゝ、合點だ。
虎　こりやあうぬらは加勢をするのか。
皆々　知れたことだ。
市兵　この間にこゝを、
幸次　おのれは逃がさぬ、
若一　それ、たゝんでしまへ。

皆々　合點だ。

ト屋臺囃子になり、皆々地口の上の花傘にて打つてかゝる、虎は一萬度を取り大竹にて打合ふ、市兵衞逃げるを幸次郎追ひかけ、立廻りながら上手へ入る。よき見得より皆肌脱になり、殘らず脊に彫物ある、これにて賑やかな鳴物になり、皆々を相手に立廻りよろしくあつて、結局皆々花道へ逃げて入ろ、こゝへ市兵衞逃げて出て來るを虎捉へて、

虎　おいゝ所へ市兵衞親仁、どこへこかした、それをぬかせ。

市兵　いゝや言はねえ、うぬらに言つてつまるものか。

虎　言はにやあ生かして置かねえぞ。

ト大竹にて頭を打割り血汐額へ流れる。

市兵　おゝ殺さば殺せ、死んでも在所は言はねえぞ。

虎　うぬさうぬかしやあ。

ト虎市兵衞を大竹にて打殺す。この時ばたばたになり上手より幸次郎先に竹長提灯を持ち出來り

竹　もし若旦那、それぢやあ折角手に入りし、胡蝶とやらの茶入をば、

幸次　おゝ又ぞろ人に盜まれたわいの。

竹　さういふそりやあ何者に、

幸次　唐人飴の市兵衞に、（トこの時下手へ木曾兵衞出かゝりゐて、）

木曾　すりや再び茶入を盗まれしとか、して〳〵其奴は何れにをるぞ。

幸次　即ちこれに、（ト市兵衞を見てびつくりなし、）やゝこりや市兵衞か。

虎　茶入の在所をぬかさぬ故、つい手が廻り殺しました。

幸次　詮議の種を失うては所詮茶入の出やうはない。

木曾　さすれば旦那は御切腹、

竹　若旦那も生きちやゐられぬ。

ト當惑の思入、虎もぢつとなつて、

虎　かゝる御難儀かけるのも、元の起りは皆私故、命を取つて若旦那、恨を晴らして下さりませ。

幸次　こなたの命を取つたとて、再び寶の出るではなし、

木曾　主人を始め人々も、前生からの皆因縁、

虎　（一萬度を取つて、）現在こゝにお祓の、

幸次　尊き神はありながら、

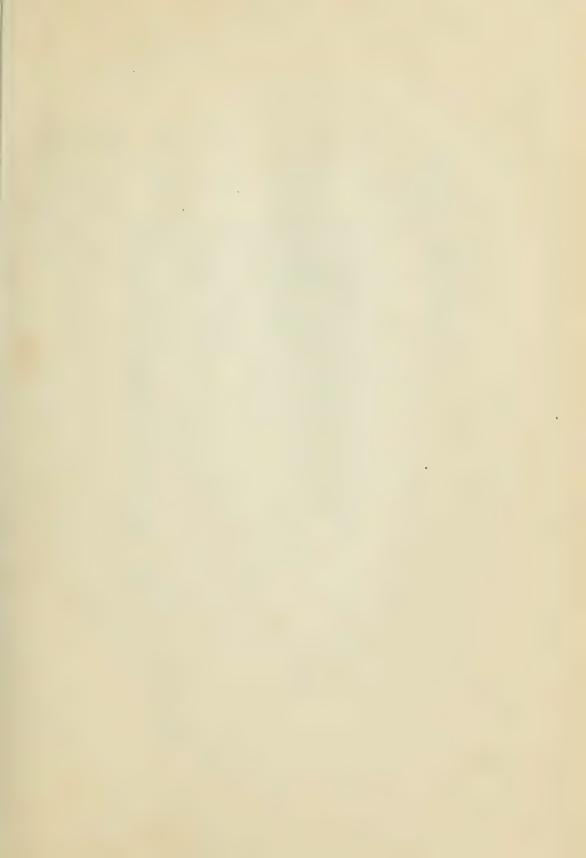
木曾　お助けなきはよく〳〵に
竹　見放されたる因果同志、
幸次　思へば〳〵、
虎　えゝいめえましい、
ト一萬度を打附ける、これにて中より茶入出るを見て、
竹　やゝ、このお祓より出でたる包は、
木曾　それぞ正しく御家の重寶、
ト幸次郎手早く取上げ開き見て、
幸次　如何にも尋ぬる胡蝶の茶入、
ト以前の若い者四人出て、
若者　野郎め、覺悟、
トかゝるを虎、竹立廻つて、
虎　何にもせよ、茶入が手に入り、
木曾　主人の安堵、

幸次　この身の榮え、

若者　何を、（ト振解くを投げのけ、）

四人　目出度い〳〵。

ト引張りよろしく、この樂屋頭取出て、『先づ、今日はこれぎり』と、

目出度く打出し。

髪結藤次（終り）

新春吉例　富士對狂言山淺間嶽面影草紙

世界都五條坂一藺別當初買對面

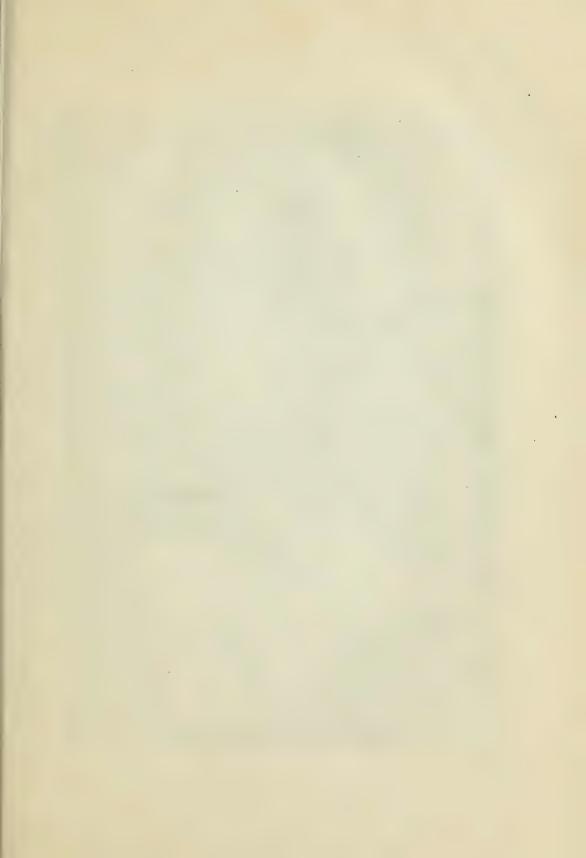
はてめづらしい仲之街梅林廓來御見物榮

隣は名におふ全盛の顔の揃ひし大籬軒を並べて及ばれど廓すがゝきも引ケの唯お馴染を後立に蹴だし歩みの八文字其道中に巴之丞が不思議に廻り逢州の素性を問へば一齋が元は娘の忘れ貝わすれ兼たる執着に我夫琴とかきならす色音に引かれ時鳥が名乘りかけたる姉妹の鏡に寫す筒井筒深き契りも淺澤の水の哀れや後室が邪險の刃に恨みの怪異小織が報せ菊が谷殿の閑居に遊里の揚代せつぱ詰りて五郎藏が金故書きし退狀とさすが白刃に人違ひ心おぼろに星影も消ゆる奇術の暗まぎれ皐月も共に身の覺悟浮世忘れの一節を今は名殘と尺八に合す胡弓の門口へ三筋の絲や四つ竹に憂をかさぬる袖乞は木の瀬が娘寄居蟲とお杉が懺悔に解ほどきつじつま合し讀本をゆきたけそろはぬ一座の春着にしたて榮せし柳亭の作

對小袖鎌倉紋盡

曽我綉侠御所染

「時鳥殺し」と「御所五郎藏」とから成る此の作は、元治元(文久四)年二月、四十九歳の時市村座に書卸され、種彦の「淺間嶽面影双紙」に據つたものである。が原作にない百合の方を點出してあるのを始めとし、甲屋の活寫等、小説を如何樣に取扱つて脚色したかを知るのに都合のいゝ作である。小團次の五郎藏と共に家橘の時鳥が評判であつたことは、廣く世に知られてゐる。又最後の幕で、切腹した五郎藏は尺八を吹き、自害してゐるさつきは胡弓を彈くといふしんみりした寂しい場面は、兩優の苦心によつて好評であつたといふが後明治二十年に五世菊五郎が演じた際には、不自然で無理なことであるといふので、見物の失笑を招いたといふことが傳へられてある。

書卸しの時の役割は、市川小團次(獵人名古平、百合の方、男達御所の五郎藏)、尾上菊次郎(名古平女房お柵、花形屋のさつき)、關三十郎(星影土右衛門、五郎藏母お杉)、市村家橘(巴之丞妾時鳥、雪枝小織之助、一齋下部切平)、坂東三津五郎(一齋娘忘貝、花形屋の逢州)、中村福助(淺間巴之丞、甲屋息子與五郎)、尾上榮三郎(逢州妹やどかり、巴之丞室撫子)、市川米十郎(團の一齋、雪枝彌惣太)、坂東又太郎(修行者鈍平太、醫者鈍玄)、市川米五郎(與女中横笛、新貝の荒藏)、坂東佳女三(時鳥召使信夫)等であつた。

挿繪にしたのは、龜戸豐國筆時鳥殺しの錦繪である。

大正十三年十一月　　編者誌す

七十九

會我綉俠御所染（時鳥と五郎藏——六幕）

序幕

奥州眞野明神の場
蚫田村地藏堂の場
名取川下河原の場

〔役名——淺間巴之丞、園の一齋、花垣志摩之助、淺間の下部阿曾平、大沼伴右衞門、岩倉茂九八。順禮娘おすて後に巴之丞妾時鳥、一齋娘忘貝、同寄居蟲、同下女お露其他。〕

（眞野明神の場）——本舞臺三間の間上下眞中へ折廻して石の玉垣。奥深に鳥居、石燈籠、正面に本社の廻廊、梅の立木、總て奥州眞野の里明神鳥居先の體。こゝに○△□◎の四人の中間茶碗と水桶とを置き立つてゐる。この模樣三味線入り大拍子にて幕明く。

○ときに、世の中におら達ぐらゐ詰らねえ者はねえぜ、この天氣都合のいゝので、世間の奴は、やれ松島へ見物に行くの、忍ぶ山へ摘草に行くのといふ中で、春が來ても看板一枚、酒でも呑まにやあうまらねえぢやあねえか。

△ 手前のやうなことを言つちやあ、折助になり手がねえわ。これも世界の道具だ、なんぼ大名方でも立派な御家老やお小姓ばかりぢやあ、合羽籠の擔ぎ手がねえといふものだ。

□ おらあ、何より羨しいのは大名の殿様だ。おらが殿樣なんぞを見ねえ、小鳥狩の催しでこの近郷を御遊興だ、何といふ慰みぢやあねえか。

◎ その上に、まだかういふ贅澤仕事があらあ、お小休みの場所でお茶を上るといふので、鮑田村から隣の一齋といふ茶人を、お供につれて茶の湯をやらかすといふ仕事だ、なんといふ目が出るぢやねえか。

○ 茶の湯なんざあちつとも羨しいことはねえが、おいらは又唐茶を一服立てさせて、矢大臣の會席で正客になりてえものだ。

△ よく酒を呑みたがる奴だぜ、何にしろもうお先が見える時分だ、別當所へ行つて辨當でも使はうぢやあねえか。

□ それがよからう。

◎ そんなら、お神輿を上げるとしよう。

ト水桶を持ち上手へはひろ。風の音になり雁一羽現はれる。とばた〳〵になり花道より、大沼作右衛門

岩倉茂九八、角野運六、青森新吉等侍裝草鞋にて出來りて、

作右　誰かある、殿の御意なるぞ、空飛ぶ雁を射留めるものはなきや。

茂九　弓矢を持參の者あらば、射落して手柄にめされい。

運六　御近習の衆は何れにある。

新吉　急ぎ獲物をめされぬか。

四人　早く〱。

ト花道より花垣志摩之助弓矢を持ち出來り、東の假花道より猿島彌九郎同じく弓矢を持ち出來りて、

志摩　御意に從ひ、花垣志摩之助、空飛ぶ鳥を一矢を以て。

彌九　日頃手練の射術にて、この彌九郎が矢先を以て。

志摩　唯今これにて射落して、

兩人　御覽に入れん。（ト双方一時に矢を放つ。これにて雁矢に縫はれたまゝばつたり落ちる。）

四人　御兩所ともに、お手柄々々。

トこれにて志摩之助、彌九郎舞臺へ來り、彌九郎手早く雁を手に取りて前へ出で、

彌九　何といづれも御覽じたか、日頃の手練はこゝでござる。今志摩之助殿と兩人にて射て留めしが、

身共が放つた矢先にて眞ツたゞ中をこの如く、的なら星を射た同然。いやなに志摩之助殿御覽なせえ、貴殿のこの矢はまぐれ當り、僅羽交を射拔いたばかり、まだ／＼そんな手の內で飛鳥を射るのなんぞとは、傍痛い儀でござる、むゝはゝゝゝゝ。何れも、左樣ぢやござらぬか。

作右　いつに替らぬ、猿島氏のお手の內。

茂九　感心の仕ツて、

四人　ござりまする。

彌九　何さ、これしきは些細な儀でござる。志摩之助殿、泰平とは言ひながら、武藝をたしなむは侍の道、ちと出精めされたがよくござる。（ト横柄にいふ。志摩之助思入あつて、）

志摩　いやも、いつに替らぬ貴殿の御手練、なか／＼以て若年の某、及ばうやうはござりませぬ。然しながら、武藝に長けたる猿島殿、飛鳥を射留める射術の法は、定めし御存じでござりませうな。

彌九　なんと。

志摩　さればでござる。すべて飛鳥を射留めるには弓を半月に引絞り、ひようと放つ絃音にこれ陰なり、飛空ぶ鳥を陽にかたどり、羽交を覘つて命をとらず、貴殿の如く胴骨かけて射通すは、獸を狙ふ狩人同然、まこと武藝をたしなむものに、故實を質すが弓矢の第一、これにも御批判ござりまする

か。

彌九　さあ、それは。

志摩　それでも手柄と仰せらるゝか。

彌九　さ、それは。

志摩　但しは拙者が誤りなるか。

彌九　さあ、

志摩　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

志摩　批判があらば打つてお見やれ、何とでござる。

彌九　むゝ、

ト口をしき思入にて、彌九郎刀を拔きかけるを、志摩之助きつと留める。此時花道の揚幕にて淺間巳之丞の聲にて「兩人鎭まれ」と制する。

伴右　御兩所、我君のお聲でござる。

茂九　おしづまり、

四人　なされい。

兩人　はあゝ。

ト左右へ分かれる、花道より淺間巴之丞狩座の裝にて後より近習三人、下部阿曾平附添ひ出來る、近習の内一人は鷹をすゑてゐる。

巴之　春風春水一時に來ると、四方に棚引く紅の霞を分けて陸奧の、眞野萱原遠近の群れ來る諸鳥を狩くらの、獲物をせんと來かゝる幸先、飛鳥を射留めし鳥居の許、鳥射るといふ吉左右ならん、予も悦ばしう思ふぞよ。

彌九　御目に留まり何如ほどか、

志摩　祝着至極に、

兩人　存じ奉りまする。

阿曾　御前樣にも路次のお勞れ、あれにて暫時御休息、

近一　然るべう、

三人　存じまする。

巴之　何さま、左樣いたすであらう。

近一　我君には、先づ、

皆々　いらせられませう。(ト皆々本舞臺へ來り、巴之丞は眞中へ床几にかゝる。)

志摩　今日は日柄もよろしく、君にも麗しくお渡り遊ばされ、我々どもに至るまで、

彌九　恐れながら、大慶至極に、

皆々　存じまする。

巴之　今日遊獵を催せしも、此度管領細川公のお眼識を以て、都在番を仰せつけられ、遠からず上京なせば全く遊興ばかりにあらず、武藝に怠りはなけれども猶も射術を試さん爲め、思ひまうけし狩座の催し、然るに唯今飛鳥の獲物。それ阿曾平、射留めし雁をこれへ持て。

阿曾　はッ、畏つてござりまする。(ト雁を持ち前へ出て、)なるほどなあ、お二人樣の御手練のほど、驚き入りましてござりまする。(ト二本の矢を見て、)何も存ぜぬ下郎めでござりまするが、一筋の矢はこの雁金の眞たゞ中、又一筋は羽交を貫き射留めてあるは天晴な御手練、憚りながらこの下郎め、感心の仕ッてござりする。

近一　唯今あれにて見受けしところ、胴を射しは猿島殿。

近二　また、羽交を貫きしは、

近三　花垣氏で、
四人　ござりまする。
巴之　これ阿曾平、これへ持て。
阿曾　はツ。（ト雁を見せる。）
巴之　何さま栴檀の双葉、幼き時より武術の巧者、勝に誇らぬ子腕の働き末頼もしく存ぜしが、羽交を縫ひし射術の手際感ずるにあまりあり、未だ若年の其方なれば猶此の上とも上達なさん。その方ばかりの譽れにあらず、且は家の譽れとなる、猶も出精いたしたがよい。
阿曾　私などもお館のお馬場の稽古を見る度に、大弓は申すに及ばず、蹴鞠や騎射のお稽古を平生見てをりまするが、花垣樣に勝をとるお方といふてはござりませぬ。なか〳〵見事なお手際でござりまする。

ト志摩之助を褒める、志摩之助は面目なき思入にて、辭儀をなしゐて、此時面を上げ、

志摩　さしてもなき拙者が射術を、各方のお褒めのお言葉、面目次第もござりませぬ。
彌九　まことに感心な儀でござる。いやなに花垣氏、射術は御手練なされても、射術ばかりではまさかの時の役には相たゝぬ。武藝と申せば劍術が先づ第一、いづれも左樣ぢやござらぬか。

伴右　いかさま、まさかの時は劍術が勝れねば、勝利は得ぬと申すもの。
茂九　劍術ならば我々でも、志摩之助殿に負けは仕らぬ。
運六　弓一種が上手でも、木劍持つた腕先では、その手にはまるらぬて。
新吾　いざ立合ひといふならば、直に鼻をひしがれませう。
彌九　はツ、我君へ申上げまする。花垣氏の射術のほど恐れ入つてはござれども、未だ劍術の腕前は知らず、此のところにて試合を仰せつけられませうなれば、有難う存じまする。
巴之　なるほど、これも時の一興、望みとあらば心任せ。
彌九　(志摩之助の傍へ來て)いやなに花垣氏、これにて試合を致せとある我君の御意だ、心靜かに支度をさつせえ。
志摩　なか〳〵持ちまして未熟の拙者、貴殿と立合ひなんどゝは、及びもないことでござりまする。
彌九　いや〳〵拙者は立合ひませぬ、これにござる各方は皆拙者が門弟同然、何もおそるゝことはないほどに、御前の御意だ、立合はつせえ。(ト四人の侍へ思入。)
伴右　すりや我々に、試合を仰せつけられしとな、それははや有難い儀でござりまする。
茂九　志摩之助殿、急いてはならぬぞ、心靜かに支度をめされたがよい。

運六　これ〳〵遠慮には及ばぬから、存分に打込んでまゐるがよい。

新吾　あまりおぢ〳〵いたすと、太刀先の定まらぬものでござる、さあ〳〵、ずつと出たり〳〵。

ト四人は支度をする、此中阿曾平は今に見ろといふ思入、志摩之助思入あつて、

志摩　すりや、どうござつても、拙者めに。

巴之　こりや志摩之助、許すほどにそこへ存分、いやさ、心を附けて立合ひいたせ。

志摩　はツ、畏まつてござりまする。

巴之　誰かある、奉納の木太刀をこれへ。

中間　はあゝ。

ト中間鳥居の内より額に附けたる木太刀を持ち出來り、よき所へ差置く。これより阿曾平志摩之助の支度をしてやり、前後より見て勇ましいといふ思入。此中伴右衛門前へ出で、志摩之助も前へいでゝ、巴之丞へ辞儀をなし、思入あつて、

伴右　さあ、志摩之助殿、よくござるなら、これへおいでなされい。

志摩　お手合せを願ひまする。

ト双方よろしく構へよろしく立廻り、伴右衛門敵はず木太刀を落される。と茂九八、運六一時にかゝる

を志摩之助よろしく立廻る。この内阿曾平氣を揉む思入、と突然に彌九郎志摩之助に打つてかゝるを志摩之助よろしく立廻つて竹刀にて當てる、彌九郎うんと倒れる。これを見て四人の侍一時に打つてかかるを見て、巴之丞思入あつて、

巴之　双方控へい。

皆々　はあゝ。

ト志摩之助平伏し、四人の侍は彌九郎を介抱して後ろへ控へる、巴之丞思入あつて、

巴之　勝負はこれにて相分かつた。志摩之助近うまゐれ。

志摩　はゝ、はあ。(ト前へ出る。)

巴之　あつぱれなる其方が手練、射術と申し劍術まで、これにて萬事はたづぬるに及ばず、若年者には稀なる働き、かゝる家來を持ちながらこれまで手の内知らざるは、予が無念と申すもの、今日の手練に愛で加增申し附けるぞ。

志摩　すりや、某へ御加增とな、はゝ有難う存じまする。

巴之　それがし近々上京なせば、そちを供にしてまゐりたし、在番の供申附けたぞ。

志摩　はゝ武士の譽れ此の身の面目、委細畏つてござりまする。

伴右　すりや花垣殿へ御加增とな、

四人　むゝ。（ト皆々口惜しき思入、阿曾平前へ出て、）

阿曾　花垣樣御手柄なことでござりまする。唯今の立合を拜見いたしてをりましたが、竹刀の使ひ按排といひ、隙のないところといひ天晴なことでござりまする。御加增を遊ばされたその上上京のお供を仰せ附けられまして、あなた樣には嘸お嬉しいことでござりませう。それに引替へ何れも樣は、なるほど御高言ほどあつて、天晴なお手の内でござりました。ちと、お痛み所がござりますなら、揉んで差上げませうか。

ト思入あつていふ、此時下手より女小姓かつみ先に立ちて菓子折を持ち、後に二人の女小姓を從へて出來り、

かつ　御前樣へ申上げまする。

巴之　おゝ、誰かと思へば母上の側の者、何用ぢや。

かつ　（菓子折を巴之丞の前へおきて、）後室遠山尼樣、今日の御遊獵長日のことなれば、お氣欝のお慰みに差上げまゐれとの、仰せ附けにござりまする。

小一　猶又お日柄もよろしく御歸館あらば、終日のお物語り。

小一　樂しみにお待受け遊ばすとの、
小二　御口上で、
三人　ござりまする。
巴之　それは近頃御丁寧なる下され物、殊更今日は近習の者の働きにて、獲物も多く射留めたれば、やがて歸館をいたし、種々のお話しも仕ると、母君へ傳へてくりやれ。
かつ　委細畏まりましてござります。
巴之　母上よりの下され物幸ひのことぢや、此所にて薄茶一服所望致さん。それ志摩之助、呼寄せおいたる、一齋をこれへと申せ。
志摩　はツ、それに控へし一齋殿、御前のお召し急いでこれへ。

ト下手にて「はゝあ」と返事して、一齋撫附鬘一本差、茶人の打扮にて出來り下手へ控へ、

一齋　今日は御機嫌よろしく、御狩座の御催し、恐悦申上げまする。
巴之　おゝ一齋大儀であつた、これにて一服所望いたしたい。阿曾平茶事の調度をとゝのへい。
阿曾　畏まつてござりまする。

ト阿曾平は毛氈を敷き茶瓶をなほす、この時一齋かつみを見て、

一齋　これは〳〵かつみどの、今日はお供でござつたか。
かつ　いえ〳〵、後室様よりのお使ひに、まゐりましてござりまする。
一齋　それは御苦勞にござりました。（ト巴之丞に、）御前様、かつみどのも當節は、よほど上達でござりまする。
巴之　なるほど、かつみは一齋が門弟であつた。然らば斯様いたさう、かつみの手前にて一服所望いたさうわえ。
一齋　それは一段のお慰みでござりませう、さゝ御前の御意ぢや、それにて一服お立てなされ、さゝ早く早く。
かつ　なか〳〵持ちまして未熟の私、どうぞ御免なされて下さりませ。
巴之　いや〳〵何も時の一興ぢや、遠慮に及ばぬ、早う立てい。
一齋　この一齋心得をれば、辭退めさるは却て失禮、心靜かにその席へ。
かつ　左様なれば、御免なされて下さりませ。

トかつみ毛氈の上に住ひ、茶道具をよろしくならべ、本行に薄茶を立てろことあつて、かつみ茶碗を巴之丞の前へなほす、巴之丞取つて呑み、

巴之　いや、なか／＼服加減と申しあつぱれなる手前、さすがは團の一齋が仕込ほどあつて、帛紗さばき手順のおだやか、巴之丞感心のいたしたわえ。

一齋　我君の御意にかなひ有難うござりまする、かつみどの御苦勞にござりまする。

かつ　未熟の手前も先生のお蔭、有難うござりまする。

トかつみは下手へ下ろ、阿曾平茶道具を片附ける。一齋思入あつて、

一齋　思ひ出るまゝ申上げまするが、君豫々御懇望ありし東山義政公の御寵愛ありし折杵の茶杓、ふといたしたる所に所持いたしをる由、早速鑑定いたしたるところ、正眞の品に相違ござりませぬ。

巴之　すりや、豫々懇望せし折杵の茶杓が見當りしとか、その方目利とあれば相違はあるまじ、早速求めてくれまいか。

一齋　それは何より易いこと、高料にはござりますれど、價は百金と申すことにござりまする。

巴之　なに、百金と申すか、それ志摩之助手箱を持て。

志摩　はツ（ト手箱を持來り、百兩包を出して、）一齋殿に渡しまするでござりまするか。（一齋に渡す。）

一齋　たしかにお預り申しまする。

巴之　最早夕陽におもむけば、其方には暇をとらする間、明日茶杓を持參なし、茶杓開きの夜會を催

さん、必ずともに相待ちをるぞ。

一齋　委細承知仕る、左樣ござれば御前樣。（ト立上ろ、阿曾平出て、）

阿曾　蚫田村までは一里あまり、可內どの、一齋どのを送つて下され。

中間　畏まりました。先生、お送り申しませう。

一齋　それは御苦勞にござりまする。然らば明日、お目見得の仕るでござりませう。（ト中間附て花道へ入る。）

巴之　終日の遊興、皆の者も嘸かし勞れつらん、これより別當方にて休息致し歸館のいたさん。供ぶれの用意いたせ。

阿曾　はッ、畏つてござりまする。お供の用意。（ト後ろにて大勢の聲にて「はゝあ」と返事ある。）

巴之　腰元どもゝ同道いたせ。

かつ　お供いたしまするで、

皆々　ござりまする。

志摩　我君には、先づ、

皆々　いらせられませう。

ト大拍子になり巴之丞先に志摩之助、阿曾平供廻り附いて鳥居の中へはひろ。後侍、彌九郎等殘りた

り、伴右衛門彌九郎に活を入れ、他の三人呼び生ける。

三人 彌九郎殿々々。

伴右 お心が、

四人 附きましたか。

トこれにて彌九郎心附き立上り、皆々を見て、

彌九 いやも、面目もなき今日のしだら、然し殿巴之丞には、

茂九 今別當所にて暫時の休息。

運六 豫て牒し合せたる大望の一義、

新吾 事成就なすお手がゝりがござりましたか。

四人 彌九郎殿。(ト大きく言ふ)。

彌九 あ、これ(ト押へ)ひそかに〳〵、豫て當淺間家を押領せんと、企てたりしは星影土右衛門、各方も知つたる通り、いつぞや袖の渡りにて後室遠山尼に牡鵑花へ戀慕の一通を拾はれ、そのまゝその座で御追放、まつた密通なせし須崎角彌腰元牡鵑花兩人も長のお暇、土右衛門殿も未だ當地に足を留め、書面の以て某と内談は通じをれど、何かに附けて邪魔になる雪枝親子、若年なれど

も志摩之助、先づ事を謀らんには、彼奴等を先へ、仕舞うて取る魂膽が肝要でござるて。

伴右　何さまそれが先づ第一、然し彌惣太小織之助どれほどの業やあらん。

茂九　我々心を一致なし、隙を見すまし親子諸共、

運六　討つて捨てんに何の手間暇、まつた花垣志摩之助は今日の遺恨といひ、

新吾　どうで生けてはおかれぬ奴。

伴右　上京お供の折こそ幸ひ。

茂九　城下外れの松原にて、

運六　不意をつけ込み、

四人　たつた一討。（ト大きくいふ。）

彌九　あこれ〳〵（と四人を制して）隱密々々。

トこの模樣よろしく夜神樂、時の鐘にて道具廻る。

（蛇田村地藏堂の場）——本舞臺眞中萱葺にて苔むしたる地藏堂、正面は狐格子にて地藏尊といふ額をかけ、この前に苔むしたる因果車、下手玉椿の生垣、上手堂の傍に榎の大樹、上手へ畫心に土橋、

總て鮑田村地藏堂の體。道具留ると、花道より箱提灯を持てる中間先に立ちて一齋出來り、

一齋　扨々今日は終日御厄介になり申した。最早この地藏堂を過ぎれば宅へ間もなければ、これにてもうよろしうござる、早く歸つて休息めされたがよい。

中間　いえ〱お宅までお送り申しませう。

一齋　いや〱、もうこれからは宿へ歸つたも同然なれば、歸つて下され。

中間　左樣なれば、これでお暇申しまする。

一齋　大きに御苦勞でござりました。

ト中間は提灯を持ち引返して花道へはひる。一齋くたびれたる思入にて、地藏堂の緣へ腰をかけ、

やれ〱今日は殿樣のお供にて、氣あつかひをしたせゐか、ほとんと氣くたびれがいたしたわえ。然しもう何時であらう、今打つたが五つかしらん。あ、お大名といふものは格別なものぢやなあ、ちよつと茶杓の話しをすれば、直にそれがほしいといつて、百兩といふ大金をぽつかりとお渡しなさる、我々が身に較ぶればまことに石か瓦の如く。とはいふものゝ、大金を持つて夜道するは石を懷にして薄氷を踏む樣なもの、畢竟人がなければこそよけれ、惡漢にでも聞かれたら此方の身の上、あゝ怖やの〱。どれ、そろ〱と行きませうか。

ト立上ろ、この時地藏堂の狐格子の間より白刄出て、一齋の肩先を切下げる、これにて一齋アツと苦しみ倒れながら、

やあ何者なれば、この狼藉、につくい奴の。

ト一齋も一刀を引拔き立上りきつとなる。この時地藏堂の中より深編笠にて三階松の紋附いたる着流し、大小を差したる浪人の打扮の者、刀を提げ出て印を結ぶ、これにて薄ドロ／＼になり一齋の金財布浪人の手に舞ひ入る、浪人はそれを思入あつて頂き懷へ入れる。

やゝ、自然と所持なす我が財布が拔け出しは、むゝ、扨は烏呼の曲者よな。さあ尋常に勝負なせ。

ト又立上り切つてかゝる、又ドロ／＼にて一齋足の竦む思入、浪人前へ出て一齋の後ろより切下げる。一齋ヲツと苦しむ、浪人は悠々と刀を拭ひ鞘へをさめ、につたり思入あつて印を結ぶ、ドロ／＼にて上手の榎へ浪人の姿消える。この時一齋起上り、四邊を見て不思議の思入。

やゝ、今までありし曲者が、俄に姿の消え失せしは合點行かず、何にもせよ不意を打たれて、この深手、えゝ無念口をしやなあ。

ト苦しき思入にてそこへそのまゝ倒れる。水の音になり、上手の土橋を渡りて、一齋の下女おつゆ小田原提灯を持ちて先に立ち、その後より一齋の娘忘貝、寄居蟲、島田、振袖在所娘の打扮にて、足

早に出來り、

つゆ　もし／＼、そのやうにお急ぎ遊ばして、石高道でござります故躓いてお怪我をなされますなえ。

忘貝　それぢやというて最前からの胸騷ぎ、そして烏が夜啼きをした故氣にかゝつてならぬわいなう。

やど　お父様のお歸りがあんまりおそいによつて、どうも落着いてはゐられぬわいなう。

つゆ　何もお案じなさることはござりませぬ、もうそこらへ參りましたら、きつとお目にかゝるでござりませうわいなあ。（ト下手へ來て、一齋に躓きびつくりして、）これは御免なされませ、つい道を急ぎまして、とんだ粗相をいたしました、御免なされて下さりませ。（ト提灯にて一齋の着類を見て、）やゝ、こりやこれ、旦那様が。

兩人　やあ。（ト提灯にて、見て、兩人すがりつき、）

忘貝　こりやまあ父さんをむごたらしい、何者がこのやうにしをつたぞいなあ。

やど　お氣をたしかに持つて下さりませ。

兩人　父様いなう。

つゆ　旦那様いなう。

兩人　父様いなう。（ト三人にて呼び生ける。これにて一齋心附き、起上つて刀を持ち、）

一齋　おのれ、曲者。（ト立たうとするを三人すがりて、）
忘貝　もし父様、氣をしつかり持つて下さりませ、忘貝でござりまする。
やど　寄居蟲もをりますぞえ。
つゆ　旦那様、つゆでござりまする。
忘貝　お氣をしづめて、
三人　下さりませ。（トこれにて一齋心附き、きつと思入あつて、）
一齋　おゝ、娘か。
一齋　よう來てくれた、悔しいわえ、口をしいわえ。
兩人　はい〳〵。
忘貝　お道理でござりまする、どういふわけでこの痛手、意趣遺恨をお受けなさらうやうはなし、盗賊の業ならん。
やど　いかなることでござりまするか、必ず死んで下さりますな、心細うてなりませぬわいなう。
一齋　様子といふは、そち達も知つての通り淺間家へお招きにあづかり、歸宅なさんその折に、巴之丞様御懇望の折杵の茶杓求め持参致せよと金子百兩を請取り、日暮れて歸る途次、送りし小者を先

に返し、この辻堂にて測らずも、右の金子を持參の事を問はず語り、何方よりか曲者に物をも言はず一刀に切りこまれ、殿より預かる百兩は財布と共に奪ひとられ、年老いたれど一太刀なりと、又向はんと思ひしに、不思議や、今までありし曲者は、かき消す如く消え失せたり。それ故にこそ曲者を、やみ〳〵と取逃したわやい。

忘貝　かういふこともあるはしか、寄居蟲と諸共に胸騒ぎがしてならぬ故、心がゝりとおつゆを連れ、

やど　道を急いで來たところ、父樣のこの有樣、姉上樣、

忘貝　妹、

兩人　こりやどうしたらよからうなあ。（ト兩人泣伏す、おつゆ思入あつて、）

つゆ　お道理でござりまする、切平殿がをりましたら直にも敵を尋ねんもの、折あしく國へ歸つて留守といひ、ほんに思へば女子ほど、腑甲斐ないものはござりませぬ。（ト泣伏す。一齋思入あつて、）

一齋　その歎きは道理ながら、この痛手にては所詮存命思ひもよらず、父が今際に二人の娘へ言聞かす事こそあれ、おつゆもとも〴〵聞いてたも。忘貝も寄居蟲も幼心に覺えつらん、先つ頃都へ赴き淀の夜船へ乘りし時、同船の中に惡漢ありて喧嘩をし出し右往左往、我は二人の娘を連れ、やうやうその場を逃れいで、陸へ上つてよく〳〵見れば一人は我娘、今一人は娘にあらず、あわてふ

ためき尋ぬれども今の騷ぎに皆散々、宿所を問へど片言のみにて分かりはせず、是非もなく〳〵この奧州へ連歸り、忘貝が名にかたどり、暫時この家を寄居蟲と名を附けて、育てあげたはそなたぞや。その時そちの守袋は世にも稀なる笹鶴錦、貞治三年二月三日誕生の娘卯の葉と記せし臍の緒書、又一寸八分の觀音の立像、この二品はそちへ渡しおく間、證據となして眞實の父母に廻り逢ひ、この一齋の身の成行を語りし上は、取違へたる我娘無事であるならとも〳〵に、忘貝とも對面させ、兄弟三人おとなしく行末長く成人して、この一齋が亡き跡の訪弔を賴むぞや。

やど　勿體ないことおつしやりませ。假令實の父母が無事でこの世にあればとて、生の親より大恩あるあなたに別れてをられませうか。申し姉さん、父樣の助かる仕樣はないかいなあ、私は父さんが死ぬならば、一緒に死にたうござんすわいなあ。

忘貝　さうとも〳〵、天にも地にもかけ替のない、たつた一人の父上樣にお別れ申して何樂しみ、わしも死にたいわいの。

一齋　さゝ、心細う思ふは道理ぢや、尤もぢや。（トホロリとしたが氣を替へ、）なにめろ〳〵とその哭面、生ある者は死すべきもの、そちも一齋が娘浪々なせど武士の種、未練者めが、そち達二人もこの場にて相果てなば、誰が父の敵を討つぞ、そこへ心の附かぬといふ狼狽者めが、我亡き後は猶の

事、心を鬼に持たねばならぬ。さゝ、兩人とも泣き止め、泣くな。

兩人 あい。

一齋 泣きやるな。

兩人 あい。

一齋 えゝ泣くなと申すに。こりや忘貝、そちにも言ひおく一義あり、今日測らずも百兩の金子故に此の災ひ、我が薄命は悔んで歸らず、たゞ口をしきは良治君の、懇望なされたる茶器をばお手に入れざるが、これ一つの黄泉の障り、その申譯には巴之丞様茶事に心を寄せたまへど、未だ奥儀を傳へ申さず、この一卷は茶事の傳書、(ト懷中より紫の袱紗に入れし一卷を出し、)これをそちに渡しおけば、よき折あらば巴之丞様へ差上げて、我薄命を傳へてたべ、これにて思ひおくことなし。

ト一卷を忘貝に渡す。

忘貝 殿様へは折を見て、きつとお渡し申しまするほどに、どうぞ死なずにいつまでも、生延はつて下さりませ。

一齋 さあ、おれも何で死にたからう、二人の娘を成人させ、よい聟取つて初孫の顔を見んと思ひしも、命數盡きてこの世の名殘り。(トおつゆを招いて、)これおつゆ、そちにも申しおく事あり、豫て家

來切平と、わりなき仲といふこともよく存じて罷りある。どうぞ二人は夫婦になり、便り少い兄弟の行末をば頼むぞや。

つゆ　有難いそのお言葉、お目立まする上からは切平殿と心を合せ、お二人樣はどこまでも、お身の行末守りまする、必ずお案じ遊ばしまするな。

一齋　最早近づく我が知死期、娘さらばぢや。

ト言ひさして次第に落入る、忘貝、寄居蟲、おつゆ三人して抱起し、

忘貝　もし、父上樣。

やど　父樣いなう。

つゆ　旦那樣。

忘貝　こりやもう事は、

三人　切れたかいなあ。

ト一齋がつくり俯向く、三人はハア丶と泣く、これにて道具廻る。

（名取川の場）——本舞臺一面の浪打際、向うに干網見え、上手に松の木、下手は蘆原、この前に奧州名

取川と記したる傍示杭。こゝに五人の雲介焚火をしてゐる。

雲一　こう、今夜はもう何時だらう。

雲二　さうよ、この月の按排ぢやあ、よつぽど夜が更けてゐるぜ。

雲三　何にしろ酒の氣がなくなつたら、すてきに寒くなつたぜ。

雲四　べらぼうに寒いぢやあねえか、雲介が酒に放れたのは、座頭が杖に放れたのも同じことだ。

雲五　いくら寒いといつて、もうちつとの辛抱だ、今に直におら達の世にならあ。

雲一　そんなに寒けりやあ、おもいれ焚火をするがいゝ、雲介に焚火は附物だ。

雲二　そりやあさうと、ちつと懷でもあつためる仕事がありさうなものだなあ。

ト馬士唄になり、花道よりおすて見すぼらしき巡禮裝にて出來り、その後より駕籠舁黑塚の松、龜割の六、四つ手駕籠を片棒にて擔ぎ附き出來りて、

松　おい〱姐さん、さつきから口が酸ツぱくなるほど口を利くのに、お前の耳にや入らねえのか。

六　夜は更けちやあゐるし、とんだ五段目のせりふぢやあねえがこの行先は物騷だ、安く駕籠に乘せようといふのだ。聞えねえ裝をせずに乘つて行きなせえ。

すて　もう御親切は有難うござりますが、御覽の通り巡禮をいたして通ります者、夜更もさのみ怖いと

松　は思ひませぬわいなあ。

松　おつウ落附いたことをいふぜ、その美しい御面相で巡禮姿と來てゐるからにやあ、ちつとは因緣のある仕事だ。惡いことは言はねえから、おら達二人のいふ事を聞くがいゝわな。

すて　ちつと私は道を急ぎますれば、御免なされませ。（ト足早に來るを二人倚附いて來て、）

六　おい〳〵姐さん、何もそんなに逃げるにやあ及ばねえぢやあねえか。

松　厭なら厭で事が分からあ、あんまり分からねえ女ぢやあねえか。（ト大きくいふ。）

五人　何だ〳〵、何をごて〳〵いつてゐるのだ。

松　こう聞いてくれ、おら達二人が松ヶ崎の畷から駕籠を勸めて來たのだが、ちつとも譯が分からねえ。

六　よつぽど强情な女だぜ。（トこの時雲介の一、二前へ出て、）

雲一　おい〳〵、そんなに强情を言はずと駕籠に乘つて行きなせえ。

雲二　お前達の錢だから、たんと取らうとは言やあしねえ。

皆々　乘つて行きねえ〳〵。

すて　はい〳〵、有難うはござりまするが、唯今もあのお方に申します通り、巡禮いたして歩くものが

どうまあ駕籠に乘られませう、どうぞ許して下さりませ。

雲三　そんなことを言はずと、

皆々　おら達のいふことを、聞くがいゝぢやあねえか。

松　こう〳〵もう打捨つておくがいゝや、こんなやつに口を利くのは、無駄なことだ。

六　今までおら達にしやべらせたその替りに、念佛講とやらかすがいゝぜ。

松　さうだ〳〵、その後で引擔いて殺らしてしまやあ、ちつとは割に當る仕事だ。さあ〳〵やらかせやらかせ。

ト雲介皆々わや〳〵言ひながら、おすてを擔ぎにかゝる。おすて皆々を掻き除けて、

すて　そんならどうでも私を。

皆々　知れたことだわ。

すて　えゝ。

松　それ、やッつけろ。

皆々　合點だ。

ト涙の音になり、松、六、おすての兩手を取るを振拂ひ見事に投げる。五人の雲介有合ふ棒を取つて打つ

つてかゝるを、おすて仕込杖を拔きて烈しき立廻りあつて、トヾ皆々を切倒し、ホツと思入。こゝへ下手より淺間巴之丞狩座の裝にて、箱提灯を持ちし近習、中間を大勢從へて出來る。おすてはこれを見ておどろき仕込杖を納め平伏する。巴之丞おすてをぢつと見て、

巴之　最前より物蔭にて、始終はとくと見屆けしが、女に稀な今の手の內。してその方は何國の者、如何なることにて廻國いたすぞ。

すて　姫御前の身にあるまじき拙いことがお目に留り、お恥しう存じまする。私事は丹波の國の者でござりまするが、實の親は如何なる者か存じませぬが、繼しき母に疎まれまして、この陸奧に知邊と申すではござりませねど、尋ねまする者がござりまして、はる〴〵の所をば、巡禮いたす者でござりまする。

巴之　左樣か、身は當國眞野の庄淺間巴之丞と申す者ぢやが、何處を宿りと定めずば、見所あるそちなれば、予が抱へて得させんが、得心なるか但しは辭むや、どうぢや〳〵。

すて　賤しき此の身を顧みず、お受け申すは何とも以て。

巴之　遠慮に及ばぬ、どうぢや〳〵。

すて　身の置所なき私故、御意に從ひ、何分よろしう。

巴之 然らば、承知ぢやな。
すて はい。(ト恥しき思入。)
巴之 こりや皆の者、今日は測らずもよい獲物をいたしたわい。
志摩 いかさま、殿にも今日は、一段お手柄な儀に存じまする。
巴之 こりや、その方の名は何と申す。
すて 幼き時より繼母に育てられたる私故、たゞ繼兒よ捨兒よと言はれましたが、異名のやうになりまして、定まる名とてはございませぬ。
巴之 何と申す、名はないと申すか。
すて はい。
巴之 海士の子なれば宿も定めずといふ詠歌は聞きつるが、名のなき女はハテ珍らしい。(ト此の時鶯の鳴く聲する。)ハテしほらしい藪鶯、鶯のかひこの中の時鳥、おゝよい名があるわえ、時鳥と呼名をいたせ。
すて 有難うございまする。(トこの時以前の雲介の五窺ひ出て、)
雲五 女め、覺悟。

ト　おすてへかゝるを突廻して見事に投げ、巴之丞と顔を見合せ、につこりと思入あつて袖にて顔を隠す。巴之丞おすてに見惚れしこなしにて、

巴之　はて、あでやかな。（ト思入。）

ト　此時供廻り「お立ち」と聲をかける。巴之丞は扇を開き顔に當てるを木の頭、供廻り皆々提灯を持ち前へ出る、この模様よろしく

ひやうし幕

二幕目　奥州岩手山の場

〔役名――狩人名古平、一齋の下男切平、修行者鈍平太、盗賊黒塚の鬼藏、雪枝小織之助。一齋娘忘貝寄居蟲、名古平女房お袖。〕

（岩手山麓の場）――本舞臺一面の雪幕にて、雪の積りし杉の木立、奥州岩手山麓の體。雪おろしにて幕明く。と、花道より北叟頭巾を冠り、手綱達附、山刀といふ扮装の惡漢四人出來る。先の一人松明を持ち、次の二人は神樂装束入とした白木の長持を擔ぎ出來りて、

惡一　あゝ寒い〳〵、去年から降らねえ雪が一時に降つたので、山だか崖だかさつぱり知れねえ。
惡二　よく氣をつけて行くがいゝ。おらあ去年落つこちて、上がるにや上がられず、三日飯を喰はずにゐた。
惡三　飯なら三日が五日でも、食はずに我慢もしてゐられるが、酒の日にやあ一日も、我慢しちやあゐられねえ。
惡四　何にしろ、大雪で寒くつてこてえられねえ、何處ぞで一ぺいやらうぢやあねえか。
惡一　そのこと〳〵、足も手も覺えがねえ、酒でなくつちやあ凌げねえ。
惡二　呑まねえ先からぐび〳〵と、もう喉が鳴つてゐらあ。
惡三　えゝしみツたれなことをいふな、今夜の仕事を首尾よくやりやあ、鏡を抜いて呑ませるわ。
惡四　そいつあ何より有難えが、さうして今夜の仕事とはこれからどこへ仕掛けるのだ。
惡二　手前それを忘れたか、ぼんやりした奴だな。
惡三　それだといつて後から來たから、何にも話を聞きやあしねえ。
惡一　ほんに手前は知らなんだか、鮑田村の茶の師匠、團の一齋が家へ行くのだ。
惡二　おゝその一齋は殺されて、娘二人殘つてゐるが、そこへ今夜仕掛けるのか。

惡一　大した金もあるめえが、衣類道具がしつかりあるから、それを仕事に行く積りだ。

惡三　そいつあまぶな仕事だが、娘が顔を知つてゐようぜ。

惡二　そこに如在があるものか、その顔を見せねえ爲めに、この長持を擔いで來たのだ。

惡一　今も手前がいふ通り、平生顔を知られてゐるから、神樂の面で顔を隱し、又裝束で姿を替へ、お化を見せる思ひ附で、山神の宮にしまつてある、神樂の道具を持つて來たのだ。

惡三　なるほど、こいつア娘だけに、びつくりするに違えねえ。

惡四　ところを直にふんじばり、衣類道具を持出す積りだ。

惡二　何とうまい狂言だらう。

惡三　手前達にしちやあ感心だ。

惡一　なに、感心するにやあ及ばねえ、おら達の趣向ぢやねえ、こりやあ名古平が思ひ附だ。

惡三　大方そんなことだらうと思つた。名古平ぐらゐ惡い事に、拔目のねえ奴はねえ。

惡一　然し、あんまり仕事が邪慳だ、現在伯父でありながら一齋の死んでから、何だのかだのと文句をつけ、おのが田へ水を引き、

惡二　今夜衣類と道具を卷上げ、それから二人の身賣だ。

惡三　いや、目のよる所へは玉が寄ると、あの又下歯のお杣が肚胸、美人局やら強請やら、仲仙道の喰詰者。

惡四　あれが、鬼の女神に鬼神といふのだ。

惡一　何にしろ寒くつていかねえ、庚申塚へ行つて一ぺいやらう。

惡二　よく呑みたがる奴だな。

惡三　どうで女にやあ可愛がられず、呑むより外に樂しみあねえ。

惡四　さう思ひきつたものでもねえ、手前に惚れてる女がある。

惡三　なに、おれに惚れてるとは、そりやあ誰だ。

惡四　胡麻斑のめいた犬よ。

惡三　えゝ、わんとでも言へ〳〵。

惡二　えゝ畜生め。

トわや〳〵言ひながら皆々上手へはひろ。これにて雪幕を切つて落す。

（同　麓　路の場）――本舞臺正面六尺ほどの雪の積りし岩山、これに登り路あり、上下に杉の木立、一面に雪積りあり、總て岩手山麓　道の體、と、時の鐘、唄淨瑠璃になる。

〽時ならぬ樹々の梢に花咲きて、一目千本の吉野路も斯くやと言はん岩手山、吹雪の花のばらばらと峰より落す夕嵐。

ト雪頻りに降る、花道より忘貝振袖にて裾を端折り、肩蓑、木太刀を差し竹笠をかざし出來る。

〽木樵の道も白妙に行きなやみたる姉妹が、

ト忘貝道に迷ふ思入、この內花道より寄居蟲同じ裝にて出來る。

〽人目を厭ふ蓑笠も、情なき風にとられじと、持つ手も凍る鐘の聲、

ト兩人よろしくこなしあつて花道へ留り、暖め合ひ思入あつて、

忘貝　今鳴る鐘は暮六か、常は小暗き山道も、今朝より雪の降り積みて、見渡す限り白妙に暮れるも知れぬ銀世界、

やど　父上ましますその折は、歌に詠み句に作り樂しみて見し雪景色、雪は去年にも替らねど、替り果てたる二人が身の上、

忘貝　力と賴む知邊さへ泣の涙に七七日、四十九日も早過ぎて、

やど　百ケ日にも近づけど、尋ねる父の仇敵、手がゝりとても知れざれば、

忘貝　夜每々々におとゞひが、人目を忍びこの山の、

やど　木立を相手に試合の稽古。
忘貝　今宵は雪に山人の、
やど　往來のないはこれ幸ひ。
忘貝　吹雪を避ける木の間にて、
やど　雪を明りに夜もすがら、
忘貝　木太刀の稽古を、
兩人　しようわいな。

〽寒さましらの啼く聲も、岩にせかるゝ谷川の、水にしられて哀れなり、

ト兩人花道の切穴へはひり。舞臺下手より登り行く、と此時上手に鉦の音する。

やど　あれ姉樣聞かしやんせ、今宵は雪に山人の往來もないと思ひしに、鉦鼓の音の聞ゆるは、旅を修行の御僧なるか。
忘貝　ほんに私等二人は、父の敵が討ちたさ故雪の寒さも厭はねど、此山道を夜に入りて修行なすとは殊勝なこと。
やど　月は替れど母樣の、丁度今日は御命日。

忘貝　一夜の宿りか手の內を、進ぜたいにもこの山中。
やど　雪の積らぬ木の下へ、寒さ凌ぎに焚火をなし、
忘貝　それを報謝にまゐらせん。
やど　次第に近づく鉦の音は、
忘貝　最早おいでに間もあるまい。
やど　このところにて、
兩人　お待ち申さん。

ト兩人して枯枝を集め火を焚附ける。此內上手より修行者鈍平太六部の打扮にて笈を脊負ひ錫杖を突き出來りて、

鈍平　扨々降るは〳〵、かほどの雪にはなるまいと思ひの外なこの大雪、深山とは言ひながら僅一時經たぬ間に、往來もできぬほどぢや。（と兩人を見て、）や、見れば年端も行かぬ娘御、近所の衆か知らねども、この大雪に草鞋も穿かず、どこを指してござるのぢやな。
忘貝　はい、私共は麓の者にて、心願あつてこのお山の、山神樣へ二人して、
兩人　跣足參りをいたしまする。

鈍平　いやそれは〳〵奇特なことぢや、いかなる願ひか知らねども、雪も厭はず跣足參り、神も感應ましまさう。いや、御無心ながら、火を一つ借りまする。(ト笠をおろす。)

やど　この焚火はお前樣へ、手の內替りでござりまする。

忘貝　御遠慮なしに、おあたりなされませいな。

鈍平　それは何よりの御報謝、忝うござりまする。(ト岩へ腰をかけ、あたりながら。)今承れば跣足參りをさつしやるとのことだが、もしや親御の御病氣といふやうなことでござるかな。

忘貝　はい、先づ左樣なことでござりますわいな。

鈍平　一樹の蔭一河の流れ、袖振り合ふも他生の緣、愚僧も御祈念申すであらう。

やど　それは有難うござりまする。

忘貝　して、御修行者樣には、どれからどれへお通りなされまする。

鈍平　いや、愚僧は元都の者なるが、不幸にして妻子に別れ、菩提の爲めの六十六部、はる〴〵湯殿月山より羽黑山へ參りしところ、聞きしに勝る靈場ながら、いかなることか先達より、隱行の術を行ふ者、かの山中に隱れ住み、麓へ出ては盜みをなす故、參詣なすも氣味惡く、早く下山いたしました。

忘貝　すりや羽黒山に隱行の、術を行ふ曲者が、隱れ忍んでをりますとか。
やど　して、その者は何處の者やら、御存じはござりませぬか。
鈍平　詳しいことも聞かざりしが、元は奧州生れにて、由緒ある人の果ぢやとやら。
ト鈍平太思入にていふ、兩人は扨は敵といふ思入にて、寄居蟲きつとなり、
やど　それぞまさしく父の敵。
忘貝　あ、これ、めつたな事を。
鈍平　いや、その氣遣ひには及びませぬ、一所不住の沙門の身、愚僧は若き時よりして人相を見ることを學び、最前より見るところ親に放れし二人の相貌、殊に殺氣の氣色あるは、まさしく親は非業に死し、敵を狙ふ身の上と、疾より推察いたしてござる。
忘貝　御推量の上からは何をかお隱し申しませう、いかにも親は人手にかゝり非業の最期遂げられし故、
やど　敵を討ちたく思へどもかよわき女の果敢なさに、神を祈り佛に誓ひ、敵の行方を尋ねますれど、
兩人　いまに在所が知れませぬ。
鈍平　して尋ねらるゝその敵は。
忘貝　何處の誰やら知らねども、討ちたる者は隱行の、

やど　術を行ふ曲者と、父が末期の物語り。

鈍平　扨は羽黒の山中に忍びをる盜人こそ、まさしく敵に相違ござらぬ、今宵測らずお目にかゝりお知らせ申すも神佛の、導きたまふに相違ござらぬ。この雪中も厭はずに信心めさる二人の衆、天の惠みで敵に出逢ひ、本望遂ぐるは疑ひなし、證據は即ち天帝へ吉瑞の相が見えまする、急ぎ羽黒へ立越えて敵の在所を尋ねられよ。

忘貝　有難いそのお詞、善は急げと申しますれば、明日は旅の用意をなし、羽黒山へ參詣の體にもてなし討取らん。

やど　とは言へ敵は隱行の、術を行ふものなれば、かよわき女子の手の内では。

鈍平　はてそこは女の身こそ幸ひ、敵に出逢はゞ色仕掛け、心ゆるさせ討たんには、假令如何なる鬼神なりとも、本望遂ぐるに疑ひない。

やど　思ひがけないお前様に、お目にかゝりて敵の手がゝり、たしかに知るゝ佛のをしへ。

忘貝　して、御修行者にはこれより何れへ。

鈍平　この雪故に二三日は當所に足を留める心。

忘貝　左樣なれば明日の夜は、私共へお宿を申し、

やど　勝手知れざる羽黒の御山、道の栞りをお教へ下され。
鈍平　お尋ね申して地理案内、詳しくお話し申すでござらう。して、娘御のお宅は何處、
忘貝　蛇田村の藥師前、以前は茶の湯の師範せし、
やど　一齋が宅とおたづね下され。
鈍平　承知いたしました。（ト笈を脊負ひ）左樣なれば娘御達、
兩人　お修行者樣、
鈍平　明日お目にかゝりませう。
　　ト鈍平太は下手より花道へいて、後を振返り舌を出しにつたりと笑ひ花道へはひる。兩人は後を伏拜みて、
やど　思ひがけない修行者より敵の手がゝり知れたるも、亡き父上のお報せなるか、これにつけても切平が鄕里から戻つて來ればよいが。
　　ト向うへ思入、この内忘貝は腰にさしたる木太刀をとり、唐突に、
忘貝　妹、覺悟、（ト打つてかゝるを、寄生蟲身を躱し直に木太刀を拔き受留めて、）
やど　めつたに油斷はいたしませぬ。

忘貝　おゝよい心掛ぢや、尋ぬる敵の手がゝりが、知れたる上は稽古が肝腎。

やど　今宵は夜と共この場にて、

忘貝　雪を明りに、

やど　勝負をしませう。

ト兩人立上る。この內上手岩の上へ盜賊黑塚ノ鬼藏出で、兩人を見ていゝ娘だとの思入あつて、兩人の間へ割つて入り、忘貝の手を取らうとするを振拂はれ、寄生蟲の手を取るを突倒す、鬼藏又立ちかゝらうとするを、木太刀を差しつけ、

忘貝　やあ、見れば怪しき裝容、

やど　邪魔だていたす、

兩人　おのれは何者。

鬼藏　何者でもねえ、盜人だ。

兩人　え。

鬼藏　この界隈に徘徊なす、黑塚の鬼藏といふ旅を挊ぎの盜人だ、二人ともに美しい娘盛りのぼつとり者、存分思ひを晴らした上で、女郎に賣つて金にする、さあおれと一緒に歩びやあがれ。

忘貝　やあ、けがらはしいその一言、
やど　女と思うて不覺を取るな。
鬼藏　何をこしやくな。

トちよつと立廻り、鬼藏懷中より錦の袱紗に包みし鏡を落すを、忘貝手早くとり上げて、

忘貝　やゝ、この鏡は。
鬼藏　それは淺間の家の重寶、朝日の鏡と名附けし名鏡、さる人から頼まれて、寶藏から盜んで來たのだ。
忘貝　そりや、この鏡は良治樣の、
やど　お家の寶と聞くからは、
鬼藏　めつたに取られてなるものか。

ト鬼藏鏡をとりにかゝるを、やるまいといふ立廻りあつて、鬼藏の手へ鏡はひろが、兩人に烈しく木太刀にて打立てられ、鬼藏は谷間へ飛込む。

やど　やゝ、鏡を奪ひし盜人を、
兩人　取り逃がせしか。

ト此時以前の悪漢四人異形の面を冠り出で、兩人を捉へる。

忘貝　やゝ、怪しき姿の、

兩人　おのれらは。

四人　盗人仲間だ、覺悟しろ。

兩人　何をこしやくな。

ト兩人は木太刀にて四人を相手に立廻り存分にあつて、二人は谷へ落ち、あと一人は忘貝の爲めに腕を捻ぢあげられ、一人は寄居蟲に捻ぢ伏せられる。この見得にて岩と共に迫上げ、霞幕にて消す。

（牛腹山神社の場）＝＝本舞臺上の方に古宮、正面狐格子、軒口に山神の社といふ額。上手は一面の岩山下手は杉の大樹。總て岩手山の牛腹山神の社の體。と下座の謠になる。

ウタヒ〽行方何處と白妙の〳〵、陸奥なる山路かな。

ト鳴物になり舞臺眞中へ若衆鬘、棒茶筌上下、大小、下駄がけの雪枝小織之助、以前の鏡を捧ちし鬼藏を踏まへ、蛇の目の傘を擔ぎ背後向にて迫上がる。雪頻りに降り、ちよつと立廻つてトヾ正面を向き、きつと見得、

小織　實に白妙の銀世界、黄金の花と陸奥花の詠めに思はずも、深入りなせし岩手山、夜目にも光る綾

錦、袋に入りしは御家の重寶、朝日と名づくるまさしく名鏡。（ト鬼藏跳れ返さうするを立廻つて傘にて抑へ、）所持なすおのれは夜働き、峰を越路の白浪ならん。今雪枝小織之助が目にかゝりしは運の盡、二月もまたで消ゆる雪、御鏡渡して覺悟なせ。（ト又立廻つて、）はて、小ざかしき振舞ぢやなあ。

ト小織之助鏡を取り懷へ入れる。鬼藏それを取らうとして寄るを傘にて突く、鬼藏たぢ／＼と後へ下り、古宮の戸へどんとあたる。これにて扉ばら／＼と壞れ、鬼藏見事に轉る。此時古宮の壞れより獵人名古平白頭に金の面を冠り、神樂の裝束をつけ鉾を持ち出る。それと同時に下手の杉の大空洞より、名古平の女房お袖、白錦の着附黑の袈裟頭巾にて長刀を持ち出て、三方きつと見得。ダンマリの鳴物になり、小織之助は傘にて立廻りあつて、傘にてお袖の長刀を打落す、お袖つか／＼と行き、小織之助の懷より鏡を引出すを小織之助振拂ふ。名古平窺ひ寄つて鏡を取る。これをかせに立廻りあつて、小織之助過つて上手の谷間へ落ちる。名古平鏡を手に持ち面をとり、谷底をきつと見込む。鬼藏それをやつてはとかゝるを突きやり、お袖鬼藏を引附ける。この立廻りの巾、後の山の間より一齋の下部切平頰冠り、竹笠、赤合羽、一本差の下部裝にて窺ひ出て、後より名古平に組附き、鬼藏はお袖に組附く、これにて兩人引拔きになり、名古平は褞袍、三尺帶の打扮、お袖は洗ひ髮の草束れ、廣袖裝の惡婆の打扮になる

鬼藏はお柚が着物を持つたまゝぽんと轉る。名古平、お柚すかし見て、

お柚　名古平さんか。

名古　お柚か。

や、切平か。

ト此の中へ切平ぬつと出るを、名古平竹笠へ手をかけ、笠を取ると同時に合羽も脫げて、切平は肩入の世話裝になる、これを名古平見て、

トびつくりして逃げようとするを、切平襟上をとつてきつと見得、お柚窺ひ寄り切平の足を取り引倒す名古平起上り、蹴倒さうとするを切平身を躱し、名古平はいゝすかを喰つて雪に辷らうとして三方へ別れきつと見得。これより世話ダンマリの鳴物になり、三人雪に寒き世話の立廻り。此内名古平鏡を落すを切平取上げる。これをいゝかせに面白き立廻りよろしくあつて、トヾ切平袋より鏡を出す、これにて舞臺を明るくし、鬼藏かゝるを名古平引附ける。この途端雪崩れの模樣にて、上より雪の塊りどんと落ち散る。これにて名古平は鬼藏を締殺し、切平は鏡を持つて片足踏出し、お柚は有合ふ傘にて顏を隱す木の頭切平は鏡をかざし見る、名古平は鬼藏を投げつけ、お柚は傘を投げ、双方より見込む。この模樣よろしく、雪おろし、鳴物にて、　ひやうし幕

三幕目

奥州北上川の場
同淺間家館の場
同奥庭殺しの場

【役名──雪枝小織之助、雪枝彌惣太、醫者武隈鈍玄、猿島彌九郎。巴之丞妾時鳥、後室百合の方、巴之丞奥方撫子、時鳥召使信夫、腰元、中間等。】

（北上川袖の渡りの場）──本舞臺三間の間草土手、後方一面遠山に北上川を見たる遠見、所々に松、楓葉櫻の立木、下手に葉櫻の大樹、上手へ寄せて棚矢來、假門、これへ浪の丸の紋附きたる幕を張り總て北上川袖の渡りの模樣。こゝに菖蒲革の羽織袴股立にて六尺棒を持てる侍中間二人立つてをり、○△口の中間三人竹箒を持つて掃除をしてゐる見得、浪の音にて幕明く。

侍一　我君巴之丞樣御在京とは申せども、後室遠山尼樣一周忌の御追福とあつて、撫子姫樣竝に御母公百合の方樣松島御遊覽に附き、此度都よりの御下向、

侍二　姫君御母公御兩所にも、牧の島長福寺へ御參詣の路次なれば、掃除萬端行屆いたであらうな。

○　へい〳〵夜の引明から御山内は申すに及ばず、御通行の道々は念を入れて掃除をいたしました。

△　また私なぞはきれい好きでござりますれば、枯枝枯草は申すに及ばず、芝の間の埃まで小楊枝で

ほじり出しましてござりまする。

私はちつと無精者で箒を持つがきつい嫌ひ、その替りお髭の塵をとりますが得手でござりまする。

◎侍一　何を下らぬことを申すのだ、最早刻限に間もなければ、早く掃除をいたしたがよい。

三人　畏りましてござりまする。

ト中間皆々掃除にかゝる。と、花道より醫者武隈鈍玄慈姑頭、いいいなろ醫者の打扮にていできたりて、

鈍玄　いやも今日のやうに無駄足をしたことはない、息せいきつて屋敷へ行つて聞いたところ、後室様は長福寺へ今朝早くおいでがあつて、猿島殿も先供で牧の島へ行つたといふ、何でも今日は彌九郎に逢つて、話し合をつけてえものだ。

ト上手へ行きにかゝる、侍二人鈍玄を留めて、

侍一　やいやい、何れへ通るのだ。

侍二　今日は淺間家の姫君御佛參の路次、

侍一　無用のものは通すこと相ならぬ。

鈍玄　へいへい、その御佛參と承りまして、參つたものでござりまする。

○姫君樣のお入りなれば、通ることは、

皆々　ならぬわえ。

鈍玄　もし〱、そんなに叱るものではござりませぬ。その姫君樣の御母公樣に、お目にかゝりたいのでござりまする。

侍一　此奴とんだことを申す奴だ、薄ぎたない裝をして、御母公樣に逢ひたいなぞと、ちと亂心と相見えるわえ。

侍二　譯も分からぬ胡散な奴、尙以て通すこと相ならぬ。

○　さあ〱歸れ〱。

鈍玄　さうおつしやらずと、どうぞ通して下さいまし。

侍一　えゝしつこい奴だ、ならぬと申すに。

鈍玄　そこをどうぞ、

皆々　えゝならぬ〱、歸れ〱。

ト皆々爭ひゐる。上手門の内より彌九郎出來り、

彌九　こりや〱、皆の者控へろ〱。

鈍玄（彌九郎を見て）あなたは彌九郎樣。

彌九（抑へて）こりや。役にもたゝぬ爭ひごと、この者は苦しうない者だ、その方どもは長福寺へ參り休息いたしたがよい。

皆々　畏りました。

侍一　左樣なれば彌九郎樣。

彌九　さゝ、早くまゐれ〳〵。（ト皆々上手へはひり、後兩人思入あつて）

鈍玄　もし彌九郎樣、あなたをいつぺんと尋ねてをりました。

彌九　尋ねて居つたとは、何か急用でもあつてのことか。

鈍玄　もし、急用の何のといつて、いつぞやお前の賴み故、後室樣へ差上げた愚老が祕法のかの一藥、なみ〳〵ならぬ藥法故、容易なことぢやあ調合はいたさぬが、そなたが達てと賴む故、そこが慾と二人連れ、たんまり禮をしめようと、待てど暮せどそれなりけり、今日は是非〳〵彌九郎樣、話を附けて下さいまし。

彌九　これさ鈍玄老、何もそのやうに四角四面に申さずともよいわさ、幸ひ今日御佛參にて、御母公樣も長福寺へ參つてをれば、折を見合せ、今日は是非〳〵話しをつけて進ぜるほどに安心してをる

がよい。

鈍玄　今まで延びたお禮だもの、あんまり安心もできませぬよ。

彌九　さう何も愛敬のないことを申すものではない、今日はきつと埒を明けて遣はすわえ。

鈍玄　そりやあ今日埒が、明きさへすればよろしうござりますが、もし又今日が間違へば、表向いちやあ言へねえ品、野暮なことをいふやうだが、出るところへ出て譯道をつけますぜ。

彌九　はて、身共がこれほど受合ふからよいではないか、いゝやなせりふは止したがよい。

鈍玄　なあに言ひたいことはござりませぬ、御同然に尻尾のでることだもの、なんで好んでするものかね。

彌九　それで安心いたした。最早姫君のおいでに間もなければ、暫くどこぞで待つてゐやれ。

鈍玄　それでは愚老はそこらへ行つて、おいでのあるまで片足あけて、

彌九　よい吉左右を待つてゐやれ。

鈍玄　もし間違つたらこゝから直に、承知だね。

彌九　はて、よいと申すに。

鈍玄　どりや、前祝ひに、お造酒でも上げようか。

ト唄になり、鈍玄思入あつて下手へはひる、彌九郎見送りて、

彌九　なるほど根強い藪醫だわえ、あの樣子ではなか〱甘口では行かぬ奴、兎も角も後室樣に密談なした上の事。然し、藥もあればあるもの、あの藥を用ひた日から稀な難病、生かすも殺すも匙先次第、醫者もなければならぬものだなあ。

ト花道にて「御參詣」と呼ぶ聲し、花道より女小姓二人定家文庫、守袋を持ち、次に淺間巴之丞の奥方撫子腰元に手をひかれ出て、後より腰元三人從ひ、この後へ同じく奥女中四人、醫者四人つゞき、二人の中間覆のかゝりし挾箱を擔ぎ、茶瓶持一人附きて出來る、總て下供を落したる行列の模樣、彌九郎は舞臺に控へゐて此の時前へ出て、

彌九　これは〱姫君樣には、長途のお歩ひ、嘸々御足勞にござりませう。

撫子　いつに替らぬ猿島彌九郎、大儀であつたわいなう。

彌九　何はしかれ姫君には、此所にて暫時の間、御休息の遊ばされませう。

撫子　そんなら皆の者。

腰元　まづ、

皆々　いらせられませう。(ト舞臺へ來る。)

彌九　それ、お床几。

ト上手より中間出て床几をなほす、撫子姫住ひ、小姓腰元その他よろしく居並ぶ、彌九郎思入あつて、

中間　はあゝ、

彌九　最早御菩提所長福寺へお先觸の仕り、御法會の調度萬端、相とゝのひましてござりまする。

撫子　して、母上樣には、御菩提所へ最早御入りありしか。

彌九　はツ、御母公百合の方樣には、先刻長福寺へおいで遊ばされ、唯今御休息にござりまする。

撫子　嘸母上にもお勞れであらう、都より千松島を御見物においで遊ばしても、お年寄りといふものは別に何のお慰みもなう、定めて御退屈であらうなう、今日とても佛詣でまめな事ではあるわいなう。

彌九　左樣でござりまする、然しながらあなた樣のお側においで遊ばすが、何よりお樂しみでござりませう。

撫子　自とてもこの陸奥へ嫁してより、久々にての母上樣へお目通り、こんな嬉しいことはない。今日測らずも亡き魂の佛詣でに北上川、かの歌人が詠ぜしにも、陸奥の袖の渡りのなみだ川、心の內にながれてぞ仕む、昔を慕ふ眺めぢやわいなう。

女一　ほんに左樣でござりまする、彌生の花より葉櫻も、何とよいではござんせぬか。
女二　葉櫻よりは淺倉山椒、ひりゝやく／＼とようござると、袖の渡りといふ名から、私や思ひ出すわいなあ。
女三　ほんに、いつしか花も若楓、松の常磐の色替へぬ水に影おく遠山の、
女四　心も晴るゝ青空に、たれ白川の關越えて、
腰一　松が浦島千代ならで千賀の鹽竈煙り添ふ、
腰二　野島の崎の濱風に、我紐結ぶ山の井の、
腰三　緑りも深き青葉山、
女一　言はれぬ眺めぢや、
皆々　ないかいなあ。
彌九　姫君樣にも御機嫌の體、かやうな悦ばしい儀はござりませぬ。風流といふものは歌も發句も川柳も聞いても分からぬむくつけなれど、お屋敷内とは事替り、かう一目に見たところは、忍ぶ山に金華山、とんと築山のやうに見えまする、北上川はお庭の泉水、どうも言はれぬこの景色。
撫子　この陸奥にありながら外めづらしい自ら故、よい慰みであつたわいなう。母上とてもその通り、

見る物毎に珍らしく、都へお戻り遊ばしてもよいお土産であらうわいの。皆も今日は奧底なう、保養をしたがよいわいなう。

皆々　有難うございまする。

ト此時ばた〳〵になり、花道より○△の中間、端下女の打扮の時鳥が召仕信夫を引きずりて出來る、信夫は小さき包を手に持つてゐる。

信夫　どうぞ御了簡なされて下さりませ、この頃こちらへまゐりまして、一向勝手を存じませぬ故、唯今の粗相、どうぞ御免なされて下さりませ。

○　いゝや了簡ならねえ、供先を切つたからにやあ、

△　姫君樣の御前へ引いて行かにやあならねえのだ。

兩人　さあ來やあがれ〳〵。（ト無理に舞臺へ連來るを彌九郎見て）

彌九　こりや〳〵下郎ども、姫君の御前、立騒いで尾籠千萬、して〳〵其奴は何者だ。

○　はツ、唯今お下供が供待まで引下るところ、これなる女がお供を切り、

△　挨拶もなく行きまする故、引捉へてこの所へ連れ參つたので、

兩人　ござりまする。

信夫　まことに申譯もござりませぬ、主人の用事に心が急きまして、思はず無禮をいたしましてござりまする。どうぞ御勘辨のほどを何れも樣、お願ひ申し上げまする。
彌九　こりや／＼女、面を上げろ。（トこれにて中間信夫を前へ出す）、其方はどうか見たやうな女だが。
女一　申し彌九郎樣、お見なされた筈でござりますわいなあ、お妾の時鳥が召仕でござりまする。
彌九　なに、時鳥が召仕とな。
女一　はい、左樣でござりまする。
女二　殿樣をたらしこみ、お覺え目出度い主人をば、嵩に着ての今日の無禮。
女三　主が主なら家來までつん／＼澄まして歩く故、こんな粗相をいたしまする。
女四　お妾ぶりが過ぎて、姫君樣をば蔑にする故に、こんなことができまする。
女一　彌九郎樣、以後の見せしめ、この者をお咎めなさらずば、
四人　なりますまい。
彌九　やい／＼女それへ出ろ、いやさ、ずつとこれへ引ずり出せ。そんならわりや時鳥が召仕だな。
信夫　はい／＼、左樣でござりまする。
彌九　さすれば今日姫君が、この所を御通行は存じてをる筈、それを知つて無禮を働く不屆者、その分

では許さぬぞ。

女二　大方時鳥どのが、言ひつけたのでござりませう。

女三　なるほど、それに違ひはあるまい。

女四　おてかけが言ひつけたであらう、さうであらう〳〵。

女一　それに違ひは、

皆々　あるまいなう。（ト口々にいふ、信夫思入あつて、）

信夫　なか〳〵もちまして、左樣なことではござりませぬ、何しに主人が勿體ない、姬君樣がお通りを存じて無禮ができませうか。御存じの通り私主人ふと發しましたるあの病氣、どうぞ全快させましたいとて、部屋の用事もそこ〳〵に御飯のこしらへしまひますると、取るものも取りあへず千賀の明神樣にお百度まゐり、今日で丁度七日の滿願、常より遲くなりました故道を急いで歸り道、心急いての不調法、御免なされて下されませ。

彌九　えゝ口がしこく申しても、さうぬけ〳〵とはぬけさせぬ、主人は病氣と言ひぬけて、このまゝここを脫れうとは、いよ〳〵もつて不屆き奴、その分では許されぬわえ。（ト立ちかゝらうとするを）

撫子　これ彌九郎、あの者ぢやとて望んで粗相はいたすまい。心急いてをるとのこと、縱令さう無うて

も佛參の路次、罪ある者も許してやるが佛の追善、もう了簡して取らしやいなう。

彌九　いえ〳〵左樣ではござりませぬ、時鳥が部屋方と聞いては了簡なりませぬ。

女一　ほんに左樣でござりまする。彌九郎樣、時鳥が言附ぢやと白狀さしておしまひなされませ。

女二　あまい言葉をおかけ遊ばすと、却てのさばりますわいなあ。

彌九　さあ女め、時鳥が言附だと、きり〳〵白狀いたしてしまへ。

信夫　ぢやと申しまして左樣なことを。

女一　顏に似合はぬふて〴〵しい、お端下女の身を以て、僞りひろぐ慮外者。

女二　申し彌九郎樣、なか〳〵今の樣子では、甘口なことでは白狀はいたしますまい。

女三　左樣でござりまする、女子のことならさう手荒くもなるまいから、何ぞよい工風はあるまいかいなあ。

女四　お待ち遊ばせ、よい事がござりまする。此の者に手拭でめんない千鳥をさせておいて、手荒うせずに責めてやらうぢやござりませぬか。

女一　なるほど、これはよい思ひ附、さあ〳〵早く手拭をお出し遊ばせ。

ト奧女中の三手拭を出し、寄りたかりて逃げようとする信夫を捉へ、奧女中の四手拭にて目隱しをさせ

ろ、彌九郎前へ出て刀の鞘にて信夫の脊をつき、

彌九　さあ、時鳥が言附だと、白狀をしてしまへ。

女一　早く言はぬと、こんな痛いめをするぞえ。(ト信夫の頬をつねる。)

信夫　あいたゝゝゝゝ。こりやあんまりでござりまする。いかに下々の者ぢやとて、さうひどうはせぬものぢやわいなあ。

女二　そんなら、きり／＼おぬかしよ。(ト又足をつねる、信夫足を押へる。奥女中の三出て、)

女一　これでも言はぬか、お言ひでないか。(ト又手をつねる。)

信夫　それぢやといふて、知らぬことは。

女四　えゝしぶとい奴の、そんならこれでもか。(ト兩方の頬をつねる。)

信夫　あいたゝゝゝゝ。

彌九　きり／＼白狀いたしてしまへ。

トきつとなつて彌九郎信夫を蹴倒す、信夫は口をしき思入にて、

信夫　はあ。(ト泣伏す、撫子思入あつて、)

撫子　彌九郎、控へや。

彌九　ぢやと申しまして、しぶとい女め。（ト又立ちかゝるを、）

撫子　待てと言はゞ待ちやいなう。

彌九　姫君樣、こりやどうも控へられませぬ。

撫子　何といふ、主人の言葉が用ひられぬと言やるのか。

彌九　いや、左樣ではござりませねど、御母公百合の方樣が朝夕お氣を揉まるゝも、あの時鳥故でござりまする。あなたが左樣なお心故、修羅ばかりを燃やしておいでなされまする、なりや御母公への忠義の爲め、この彌九郎がなり替り責めさいなまにや相なりませぬ。

撫子　いや〳〵それでは道が違ふ、假令母上の仰せでも、外の者なら兎も角も、あの時鳥は我君のお情を受けしものなれば、妾が悋氣嫉妬にて責めさいなみしと、多くの者に思はれんも心苦しい。又二つには時鳥に、どうも妾が濟まぬ義理、唯わが君を大切に思ふは我人同じこと、今日の所は自らが言葉を用ひて、皆の者許してやつてたもひなう。

彌九　お情ない姫君樣、そのお心に附込んで、あの時鳥にせばめられ、奥樣とおつしやるは名ばかりにて、ほんのあなたは飾り物。

女一　あの殿樣を時鳥が、ある事ない事口先で、言ひくろめての仕度い三昧。

女二　それぢやによつて後室様が、修羅をお燃しなされまする、殿様が御在國である時も奥へというて
はまことのたまさか。

女三　時鳥が部屋へといふと、毎夜のやうにお通ひ遊ばす、それをあなたは知りながら、悔しうは思召
しませぬか。

女四　親御が思ふ半分も悋氣なさるお心に、おなり遊ばしませいなあ。（ト皆々撫子を焚きつけるやうに言ふ。）

撫子　それも此身が足らはぬ故、母上様にも御苦勞かける、どうも妾が心では。

彌九　あゝ齒がゆいわえ〳〵、それぢやによつて後室様が、あなた様になり替り豫て頼みし鈍玄老。

撫子　や。

彌九　いやさどんけん、いやどんけんではない、けんどんなお心にも、たまさかにはならねばならぬ。
そこが人間の意地と申すものでござります。

女一　もう〳〵姫君が何とおつしやらうとも、腹が立つて〳〵なりませぬ、せめて此女を存分に、
（ト奥女中四人寄つて信夫を酷く打つ、信夫打たれながら、

三人　それでせめての腹癒せを。

信夫　御免なされませ〳〵。（ト詫びる、撫子きつと思入あつて、）

撫子　又しても女に似げない手荒なこと、控へてゐぬか。さ、そなもの、其方には用事はない、早く歸りや。

女二　あまりと言へば憎い女め。

ト又立ちかゝるを腰元の一留めて、

腰一　もう御了簡なされて遣はされませ。（ト信夫に、）早う立つたがよいわいなう。

信夫　有難う存じまする、おおそれながら姫君樣、何れも樣。

ト辭儀をする。以前責めし奥女中共は知らぬ顏をしてゐる。信夫行かうとするを撫子留めて、

撫　これ、待ちや。

信夫　はい。（ト下にゐる）

撫子　今日のことは時鳥に、必ず言はぬがよいぞや。又病氣にさはらうほどに、たゞ何事も水に流して。

信夫　何から何まで、えゝ有難う存じまする。

ト立上り會釋をして花道へはひろ、彌九郎不興げの思入にて

彌九　やれ〳〵、とんだ奴が舞込んで思はぬ暇取り、最早御法會の時刻でござりませう。

腰一　姫君樣には、これより直に長福寺へ、

腰二　後室様にもお待兼ね、
腰三　いざ御參詣を、
皆々　遊ばされませう。
撫子　そんなら。皆の者、
彌九　姫君のお立ち。

ト撫子姫先に女小姓腰元附いて皆々上手へはひる。後彌九郎及び四人の奥女中殘り思入、

いやはや、姫君のお心好しにも困つたものだ。然し後室様が鈍玄に言附けて、調合させた蝦蟇の一藥、首尾よく時鳥に呑ませた故、惡瘡發して今のあの狀、やがて御前がお歸り次第時鳥めはお拂ひ箱、さすれば手段も十が九つ出世が甲子年の春、こりや面白鼠となつて來たわえ。

ト以前の鈍玄下手より少し酒に醉つたる體にて出來りて、

鈍玄　その本店は卽ち鈍玄、お役に立つてお目出度うござる。
彌九　えゝびつくりさせるわ鈍玄老、然し大骨折でござつたの。
鈍玄　その骨折も慾得づくさ、さつきの話はもうよからうね。
彌九　そこに如在はあるものかな、後室様は今長福寺で御休息なれば、お目にかゝりせえすれば、直に

譯をつけてやるわさ。

鈍玄　もし彌九郎さん、大概にしておくんなせえ、おら生れついて氣が短い、一寸脫れなら眞平御免だ

彌九　これさ、そんなに氣の短いことを言ふには及ばぬわ、今直に話の分かることだわの。

鈍玄　そんなら早く譯道をつけておくんなせえ。

彌九　それだといつて、おれが手にはの。

鈍玄　なけりやあそれまで、これから直に。

彌九　これさ、もうちつとの間だといふに。

鈍玄　えゝ面倒な。

ト行きにかゝると、上手門の内にて「參るに及ばぬ、自がそれへ行て逢ひませうわいの。」といふ百合の方の聲し、後室裝の百合の方、腰元に手箱を持たせて出來る、皆々見て、

彌九　思ひがけなき、

皆々　後室さま。（ト百合の方眞中へ來る。）

鈍玄　これは〳〵後室樣、今日はよう御參詣でござりました。

百合　鈍玄殿、段々といかい御苦勞。これ彌九郎、腰元共へ手箱と申せ。

彌九　はツ、畏つてござりまする。それ腰元衆、後室樣のお手箱これへ。

腰一　畏りました。（ト手箱を彌九郎の前へ出す。）

百合　彌九郎、そこへよいやうに取らせてたも。

彌九　はゝ畏りました。（ト手箱の中より百兩包みを取出し、ほしいものだといふ思入。）

百合　それ〱やつてたもいなう。

彌九　これ鈍玄殿、お骨折の御褒美でござるぞ。な、それ、歩一は豫て御承知でござらうな。

ト百兩包を渡す。

鈍玄　へい〱〱、これは有難うござりまする。彌九郎殿お骨折御苦勞々〱、何もかも愚老が胸にござる。いやなに後室樣、愚老が祕法の一藥、たゞ惡瘡の發するばかりではござりませぬ、又その難病も元の如くに癒ゆるといふ、こゝが祕中の祕でござりまする、と申すは右の一藥で惡瘡いかほど昂ぶるとも、清い水を以て、（ト藥包みを出して、）この一藥を用ふれば元の如くに平癒なす、これが一子相傳でござりまする。

百合　なるほど、藥もあればあるもの。然し時鳥が惡瘡はたゞ死を待つより他事ないこと、平癒なすまで良藥は。

彌九　無益の品、そちへ納めておくがよからう。

鈍玄　左樣ござらばこの一藥は、愚老が納めておきまする。もし御入用がござりましたら、いつでも仰せつけられませ。いや左右申す中最早夕景、恐れながら愚老めはお暇を願ひまする。

百合　おゝ大儀であつた。然し黃金を所持なせば、最早たそがれ、路次に心を。

鈍玄　そこに如在はござりませぬ、これから直に裏道傳ひ、わるい事ならこつちが本店、やつたものではござりませぬ。

百合　いや〳〵それはあざとい事。これ彌九郞、其方の差添を鈍玄老に。

鈍玄　いや〳〵それには及びませぬ、木刀なれどこの通り腰に差してをりまする。

彌九　後室樣のお心添へだ。さゝ、然らば身共の差添を。（ト百合の方に渡す。）

百合　さゝ、これを差せば妾も安堵。

鈍玄　左樣なれば御意に任せて。

ト差添を取りにかゝるを、百合の方突廻して見事に切下げる。鈍玄苦しむ、腰元皆々びつくりする。

皆々　こりや、鈍玄どのを。（ト大きくいふを。）

百合　あ、これ。

ト押へ、刀を彌九郎の前へ突出す。彌九郎慄へながら紙にて糊紅を拭ふ。この時時鳥啼く。

皆々　あれ、時鳥が。

彌九　啼きました。(ト百合の方の顏を見る、百合の方につたりと思入あつて、)

百合　やがてぞ死出の、(ト刀を鞘へをさめるを木のかしら)、田長ぢやなあ。

ト脇差を彌九郎に渡し、打掛をさばく、時鳥の啼音にて、

ひやうし幕

ト直に引返す。

(淺間家時鳥部屋の場)——本舞臺少しく下手寄りに中足の二重屋體、本緣附、上手へ橋がゝりの廊下、向うは奥庭の遠見、屋體の上手に瓦燈の佛檀、この下白蓮を描きし袋戸棚、床の間に袱紗に包みし笛、三方に伊豫簾を下しあり。舞臺前の方は花道へかけて池の體にて八橋掛り、杜若の盛りなること。下手に柴垣、春日燈籠、手水鉢、楓の立木、總て綺麗に飾り、時鳥の部屋別間の體、時の鐘、蛙の音にて幕明く、と花道より作內火の番にて提灯を持ち出來り、

作內　火の用心々々。

ト舞臺へ來る、上手より吾助、親仁の打扮にて、雪輪の紋の附いた弓張提灯を持ち出來る。

おい〳〵、雪枝様の吾助どのぢやあねえかっ

吾助　おゝ作内どの、お廻りかの、御苦勞でござるの。

作内　今夜は旦那御番かの。

吾助　若旦那も大旦那もお二人ながらお夜詰だから、寐道具を御殿へ運ぶのよ。

作内　然し達者なことだの、なか〳〵若い者ははにだしだ、さうしてお前は幾歳になるえ。

吾助　はい、七十に手が屆いてをりまする。(トよろ〳〵する。)

作内　あゝあぶねえ〳〵、ちつとおれが擔いでやらうか。

吾助　何の〳〵、この位な荷物は、朝ツぱらの茶漬だよ。

作内　いや〳〵さうもいへねえぜ、お前の歩きやうを狂言師に見せたら、亂れなどゝいふて傳授物にな
りさうだぜ。

吾助　何だ亂れだ、腐つた玉子ぢやアあるめえし。(トよろ〳〵として轉ぶを作内起して、)

作内　それ見ねえ、おれが言はねえことぢやねえ、今夜はちつと、お酒が廻つたの。

吾助　どうして、酒氣はちつともねえのよ。

作内　そんならやつぱりのまづだといふのか。

吾助　えゝ洒落どころではねえ。(ト荷を擔ぎ、)ヤツトマカセの八兵衛とな、はゝゝゝやつぱり平作になるやつよ。
作内　おれもこれから部屋へ行つて、一服やらうか。
吾助　一服よりごふくやで、十兵衛とやらかすがいゝ。
作内　はゝゝゝ。火の用心々々。
　ト兩人よろしく上手へはひる。と、伊豫簾の内にて、
胡蝶　もうし、時鳥様、うたゝねをなさんすと、
舞振　お風邪を召しますぞえ。
　ト琴入りの兩吟になり、三方の伊豫簾を捲上げる。と内に褥の上に時鳥惡瘡の發したる體にてよろしく居り、前の經机へ經文を載せ、香盆に香を炷き、短檠を灯し脇息にもたれ居睡りをしてゐる。この傍に女小姓胡蝶、舞振侍りゐる、時鳥眼の覺めし思入にて、
時鳥　おゝ、胡蝶、舞振、まだこゝにゐやつたかいの。
胡蝶　はい、お前様がうたゝねをなさんす故、
舞振　お風邪を召すと惡いによつて、お起し申し、

兩人　ましたわいなあ。
時鳥　あゝ、よく起してたもつたなう、年端も行かぬそなた衆二人、私を主ぢやと思へばこそ心をつけて大事にかける志し、嬉しう思ふわいなう。あ、思ひまはせばこの身ほど因果な者が世にあらうか。をさない時に別れたる眞實の親のお顏も知らず、繼しき母にうとまれて家出なせしを計らずも、蘆田川原の邊りにて此の身の危急を我君に助けられ、まだその上に勿體ないお情受けし此の身の冥加、昔の襤褸にひきかへて蘭麝を衣にくゆらし、錦を纏ふも恥しき、滿つれば虧くる諺に去年の秋よりこの難病、髮の飾りも裝ひも冥土の土に益なしと、この世からなる呵責の責、せめて彼の世の苦患をば、遁れんものと經陀羅尼、世に捨てられし身の上ぢやなあ。
ト愁ひの思入にてホロリと泣く。兩人傍へ寄りて、
胡蝶　そのやうなことおつしやつて、お前が泣いて言はしやんすと、
舞振　どうやら私も悲しいやうで、涙が出て、
兩人　なりませぬわいなあ。(ト泣く。時鳥氣を替へ思入あつて、)
時鳥　あゝさうであつた、私としたことが、つまらぬことを言ひだして、そなたまでに苦勞をさせる。もう〳〵何も言はぬほどに、機嫌よう何ぞして遊んでたも。ほんに女子といふものは、涙脆うてな

らぬわいなう、ほゝゝゝ。（ト笑ひにまぎらし）これ胡蝶や、まだ信夫は戻らぬかいなう。

胡蝶　まだ戻りませぬわいな。

時鳥　今日はだいぶ遲いことぢやなう。

舞振　お廣敷へ行て見てまゐりませうかえ。

時鳥　いや〳〵、もう今に戻るであらうわいの。

ト花道より以前の信夫物思ひの體にて出來り、直に二重屋體へ上りて、

信夫　もうし、旦那樣、悔しうござりまする〳〵。（ト泣伏す。）

時鳥　おゝ、信夫としたことが、何にも言はずにそのやうに泣きやるのは、部屋方衆と口爭ひでもしやつたか、何としたのぢや、早う樣子を聞かしやいなう。

信夫（やう〳〵面を上げて、）あなた樣の御病氣の御全快をなさるやう明神樣へお百度あげ、例よりはおそい故急いで戻る出合ひ頭、袖の渡りで奧方のお供の衆に行當り、いくら詑びても聞かれず私を打つたりたゝいたり、後室樣も同じやうに口ぎたなう責めさいなみ、髮までこのやうにしましたわいなあ。（ト口をしき思入にて泣く、時鳥も思入あつて、）

時鳥　何ぼこの身が憎いとて、年端も行かぬそなたまで、遺恨があらば私には言はいで、召使までその

やうに憎まずとものこと。悪い主人に使はるゝそなたの因果、これ信夫堪忍してたもいなう。

ト又泣伏して咳き入る、女小性二人背中を擦り、

胡蝶　又そのやうに泣かしやんすと、

舞振　お咳がでますぞえ。（ト兩人介抱する。）

時鳥　あゝもうよい〳〵、これ信夫、そなたももう泣きやんなや。

信夫　はい。

時鳥　私が病氣もやがてのことに本復して、御前樣にも御歸國あれば、またその時はとも〴〵に今の思ひを昔語り、機嫌なほしたがよいわいなう。

信夫　はい有難うござりまする。ひよんな事を申上げまして、あなた樣へ御心配をかけましてござりまする。假令この身はどうなりませうと、厭ひはいたしませぬ。あなた樣の御病氣を早う本復させたうござりまする。

時鳥　そなたや二人のあの子まで、大事にかけてたもるもの、本復せいで何とせうぞいなう。

信夫　ちとお肩でも擦りませうか。

時鳥　いや〳〵今日はだいぶ快いが、あの合藥の延命散がないほどに、大儀ながら養全樣のところへ行

つて、お貰ひ申して來てたも。
信夫　はい、養全様のところへ參るのでござりまするか。（ト行兼ねる思入。）
時鳥　くたびれたであらうけれど、つい一走り行て來てたも。
信夫　はい、參ることは參りますが。
時鳥　この胸の悶ゆるには、あのお藥でなければ開かぬほどに、早う行てたもや。
信夫　はい。（トもぢ／＼しながら立上り、）胡蝶様、舞振様お頼み申しますぞえ。
兩人　早う行てござんせえ。
信夫　はい、行て參りまする。（ト思入あつて花道へはひる。）
時鳥　私は信夫が歸るまで、讀みさした普門品を今一巻上げるほどに、そなた二人は次間へ行て、休息
したがよいわいの。
兩人　はい有難うござりまする。
時鳥　早う行て休みやいなう。

トこれにて兩人は奥へはひる。時鳥は卷物を開き經を讀む。この時薄くドロ／＼になり、屋體のスツポンより犬出で時鳥の傍へ來り、引抜くと以前の鈍玄にて醫者の亡靈にて住ふ。この時時鳥も經文を讀ん

てしまひ、鈍玄を見てびつくりする。

鈍玄　あいやその驚きは御尤も、君に仇なすものではござりませぬ。

時鳥　して／＼そなたは、何者なるぞ。（トきつといふ。鈍玄思入あつて、）

鈍玄　はゝ、拙者ことは鈍玄と申す醫者にて候が、我家に祕するところの一藥あり、酒に混じて服する時は忽ち惡瘡發する奇藥、後室百合の方この事を風說に聞及び、調合なせと仰せを受け、我貪慾に藥を調へ差上ぐれば御邊に服させ、今の惡瘡。この事外へ洩れんかと、非道にもそれがしを刄にかけて無念の最期、死して形を現はせしも、百合の方が奸惡を君へ告げんが爲めばかり、また二つにはこの紙に記したるは、その惡瘡を治する妙藥、又百合の方が毒藥調合頼みの手紙、この事告ぐる上からは思ひおく事更になし、我罪これにて許したまへ、早おさらば。

ト又ドロ／＼になり、鈍玄そのまゝに消える。時鳥心得ぬ思入にて、

時鳥　はて心得ぬ、今形を現はして百合の方が惡事の段々、夢幻と聞きつるが、こゝに殘せしこの一品、（ト書物を取上げ見て、）こりやこれまさしく百合の方が、毒藥調合頼みの書面。（ト又藥包みと一通を取上げ見て、）この一藥に添へし書物、（ト一通を開き、）何々「この一藥を清い水を以て服する時は、直ちに元の姿となる、まさに疑ふこと勿れ」（ト讀んで、）すりやこの藥を服する時は、惡瘡治すると記

せし文面、假令彼れが惡計にて、この一藥が毒にもせよ、さまでこの世に存ふべき心にあらず、幸ひ佛前へ供へたる。淸き水にて試し見ん、さうぢや／＼。

ト早めたる合方になり、佛前へ供へたる茶碗の水にて藥を飮む。薄くドロ／＼になり悶絶する。此内仕掛の面取れて元の顏になり、直に心附きし思入にて起上り、ホット思入。

この一藥を服すと等しく、五體も俄に涼しくなりしは、もしや顏の惡瘡も、ト鏡を取上げ見てびつくりして、)や〻顏に發せし惡瘡まで、忽ち癒えて元の姿、はあ〻有難や忝けなや、これもまさしく神佛の擁護にて、鈍玄といふ醫者の告、斯く難病の治したる上は、おのれが嫉妬の心より毒を與へしこの恨み、今にぞ思ひ知らせてくれん。

ト口をしき思入あつて、又琴入りの雨吟になり、佛壇に向ひ伏しながむ。薄く風の音になり、蝶一羽飛び來りて短檠の明りを消す。時の鐘になり奥女中橫笛、立浪の二人上手と下手より、黑裝束にて窺ひいて、屋體へ上り、時鳥の後ろより唐突に切りつける。時鳥アツと苦しみ、有合ふ鏡脇息などを投げ、

何奴なればこの狼藉、だまし討とは卑怯な奴め、手は負うたれど時鳥が、病氣本復なす上は、このま〻汝の手に合はうや、覺悟極めてそれへ出よ。

ト懷劍にてめつた切りに切りかける、兩人これをあしらひ暗黑の模樣よろしく、この内立浪時鳥の後よ

り又一刀切下げる。これにて切られながら、懷劍にて切つて行くを、横笛時鳥を蹴倒す、これにて時鳥庭へ轉げ落ちる。兩人も平舞臺へ下り、横笛時鳥の襟上を持ちて引附け、立浪は刀を振上げ、時鳥は懷劍をさしつけ、きつと見得。この時月出て双方顏を見合せ、

やゝ、その方は撫子どのゝ召仕ぢやな。

横笛　いかにも、姫君樣のお側の者。

立浪　そなたに遺恨がある故に、この世の暇を取らすのぢや。

時鳥　なんと。

横笛　これ、よう聞けよ、御前樣が姫君を奧といふのは名ばかりで、そなたの色香にひかされて、姫君樣はあるかなし。

立浪　それといふのも、時鳥といふ狐がついてゐる故に、姫君樣のお氣障り、邪魔になる故私等が。

横笛　そなたを殺して姫君に、安心させる、

兩人　積りぢやわいなう。

時鳥　すりや撫子が悋氣にて、科なきこの身を殺さうとか、言はうやうない人面獸心、人に恨みのあるものかないものか、今にぞ思ひ知らせてくれん。(トきつとなつて向うを見込む。)

横笛　え〻、こまごと聞くほど面倒な。

立浪　息の根留めてあげるぞえ。

時鳥　なにを、こしやくな。

トまた時鳥切りかけるを、兩人にてよろしく立廻りながら、時鳥よろぼひながら兩人に追はれ、上手へ來る、この前方より、上手の廊下より後室百合の方窺ひ出でゐて、追ひつめられた時鳥の肩先を切りさげる。これにて時鳥どうと倒れる、兩人の女中百合の方を見て、

兩人　後室樣。

百合　二人の者、大儀々々。

時鳥　や〻、さういふ聲は。（ト百合の方の聲を聞き起上る。）

横笛　後室百合の方、

兩人　樣ぢやわいなう。

時鳥　え〻〻〻。（トびつくりする、百合の方も思入あつて、）

百合　お〻びつくりしやる筈、そなたを生けておく時は、姫が障りになる故に母が娘になり替り、そちを殺して煩惱の、胸の炎を晴らすのぢやわいなう。

時鳥　恨めしい撫子どの、その身の嫉妬にひき較べ、たゞ我君を寐取らうかと、あさはかな心より、此の身に毒を服させて、惡瘡發しさせたるも、汝が業であらうがな。

百合　いかにも私が呑ませたのぢや、まだ〳〵そんなことでは腹が癒ぬ、娘と私が二人前存分にせにやならぬわいの。(ト庭下駄を穿き、時鳥の傍へ來て、)これからは自が、手をおろして嬲り殺し。これ二人の者、其奴をそこへ引き出だしや。

兩人　畏りました。

ト兩人にて時鳥を引出さうとする、時鳥きつとなり兩人を突廻し、百合の方に切りかけるを又兩人にて引倒す。爰に以前鈍玄の持て來りし一通落ちてあるを百合の方目をつけ、思入あつて取上げ、

百合　こりやこれ昨日鈍玄が、妾に見せし秘法の一書、惡瘡のなほりしも合點行かぬと思ひしに、何者が傳へしか。これ、時鳥じたいそなたの、容姿美しう生れたが却てそちが身の禍ひ、この美しいその顏で、巴之丞をそゝのかしたか、いやさ、この面で姫が殿御を奪つたか。

時鳥　後室樣のお言葉なれど、賤しいこの身を我君の御愛あるその上に、お情深きお言葉が身にあまつたる有難さ、お寐間を汚さで何とせう。(トきつといふ。)

百合　引かれ者の小唄とやら、富婁那の辯で良治を、何というてそゝのかした。ても、あつかましい、

この腕で。(ト時鳥の右の手を切りおとす。)

時鳥　えゝ情ない何れも樣、殺さばいつそ一思ひに、何故殺しては下さりませぬ。一人の手にも足らぬものを、嬲り殺しはえゝ恨めしい。

ト左の手にて立浪へ摑みかゝるを、横笛花道の方へ引きづツて行く。百合の方見て、

百合　それ、その手もついでに切つてしまや。

立浪　え。

百合　何をうぢ／＼、切りやといふに。

立浪　はあい。(ト氣持惡さうに時鳥の左の手を切りおとす。)

百合　ほんにそなたは仕合せ者、下ざま育ちのおのれでも、妾が刄でさいなめば、よい往生をするであらう。經よみ鳥か鶯の棄兒なら啼け時鳥、冥土の鳥と死出の旅、啼音血をはく煩惱の炎を晴らす一聲は、(ト刄をぐつと時鳥の身體へ突き込み、)ほんに初音であつたわいなう、どれ／＼、息の根止めてやらうか。(ト止めを刺す。これにて時鳥苦しみ落入る。)

横笛　手ごはい奴でござりましたな。

立浪　して此の死骸は。

百合　言ふまでもない、池の深みへ。（ト杜若の咲いてゐる池へ思入。）

兩人　心得ました。

ト腰元兩人にて死骸を池へ打込む。と、この時以前の胡蝶、舞振の二人の女小姓奥より窺ひ出て、この有樣を見て、そつと上手へ行きかゝるを見つけて、

橫笛　これ〳〵、待ちや。

胡蝶　はあい。

橫笛　そなたはどこへ。

舞振　いえ、私は。

百合　時鳥が女の童か。

橫笛　左樣にござりまする。

百合　こゝへ呼びや。

立浪　はッ、後室樣のお言葉ぢや。

橫笛　こゝへおじや。

兩人　來やといふに。

二人　はあい。
百合　これ、二人は何ぞ見やつたか。
二人　はい。
百合　や。
二人　いゝえ。
百合　見たであらう。大事は小事。それ。
　ト思入にて切つてしまへと腰元兩人にいふ。兩人心得二人の襟上を取る。
二人　あれえ。（トいふを腰元一人づゝを捉へて切殺す。本釣鐘。月出る。）
百合（思入あつて、）名殘りあり、今幾返り春の月、
橫笛　いるさの山は、
立浪　名さへ恨めし。
百合　そやつも池へ。
兩人　心得ました。
　ト女小姓二人の死骸をも池へ打込む。百合の方池を見て、

百合　これ、あれを見や、蟲の息があるかしてまだ動いてゐる、蝦蟇の藥を呑ませた故、やつぱり蛙にあやかつたか、はゝゝゝ。

ト笑ふ。この時床の間の笛突然に音を發して飛去る。同時に三つの人魂池より立上り空へ消える。腰元兩人びつくりして、

横笛　後室樣。

立浪　今のは何で、

兩人　ござりまする。

百合　何のおどろくことがある、ありや人魂ぢやわいなう。

ト此時ばた／＼と人音する、百合の方腰元に囁き下手へ小隱れする。と花道より雪枝小織之助庭下駄を穿き、手丸の弓張提灯を持ち出來りて、

小織　今お夜詰に上らんと來かゝる途中、心ならざる胸さわぎ、何にもせよ、御病中なる時鳥の方の、御容體をお見舞ひ申さん。(ト屋體の傍近く來りて、)お部屋には御寢なりしか、時鳥殿々々、信夫殿はをらざるか。(ト四邊を見て、血潮の滴りの跡を慕ひ行き、泉水の中を見て、)やゝゝゝ、こりや時鳥どのが無慚の最期、何者が仕業なるか、餘所より人の來るべきところにあらず。こりや、日頃より

時鳥どのを妬む心の邪曲より、もしや後室百合の方が。

　トこの以前より腰元兩人窺ひ出て、

兩人　覺悟。

　ト左右より切つてかゝるをよろしくちよつと立廻つて引附ける。この內百合の方は下手より出で、拔足にて花道へ行くを、小織之助すかし見て、

小織　怪しい人影。

　トこれにて百合の方簪を手裏劍に打つ、小織之助心得、手にて受留め、

こりやこれ、覺えの。

　トすかし見る、橫笛跳れ返し、それを渡せとかゝるを見事に投げる。百合の方はぎつくりする。双方見合つて木の頭。小織之助は簪を銜へ立浪を捩ぢ伏せる。百合の方は花道へはひる。時の鐘にてよろしく、

　ト後ツナギにて直に引返す。

ひやうし幕

（撫子姫居間の場）――本舞臺四間通しの二重屋體、上手塗骨障子屋體、燭臺を照しあり。下手網代塀、柴垣、總て撫子姫居間の體。眞中に撫子姫、姫の打扮にて褥を敷き脇息にもたれ本を見てゐる、この後御簾屏風を立廻しある。平舞臺に腰元四人歌がるたをしてゐる、この見得よろしく琴唄にて幕明く。

女一　わが庵は都の辰巳しかぞ住む。

女二　こゝにござんしたわいなあ。

女三　もろともに哀れと思へ山櫻、

女四　花より外に。それ。花でござんすぞえ。

女二　今度は私が讀みますぞえ。

女一　いえ〳〵、私が讀み手でござんすわいなあ。（トわや〳〵言つて爭ふ。）

撫子　あゝこれ、まそつと靜にしやいなう、耳にさはつて本が讀めぬわいなう。

女三　これは〳〵、お耳障りになりまして、

皆々　御免なされて下さりませ。（ト下手より百合の方附きの腰元四人出來りて、）

腰一　もうし姫君樣、耳寄りなことがござりまするぞえ。

撫子　耳寄りとは嬉しいこと、何ぢやぞいなう。

腰二　あの時鳥どのが、

四人　死にましたわいなあ。(トこれにて撫子姫びつくりして、)

撫子　え丶何といやる、あの時鳥が、そりやまあほんのことかいなう。

腰一　眞實どころではござりませぬ、而も私等が、いえ、あの、私が信夫に逢つたところ、今泣いたり笑つたり、こんなよい氣味なことはござりませぬわいなあ。

腰三　これが世にいふ譬の通り、人を呪はゞ穴二つと、殿樣をたらしこんだ罰あたり、よい心持では、

腰四　ござりませぬか。

撫子　又してもざわ／＼と、人の歎きは共に悲しむが世界の人情、そのやうな戲言は言はぬものぢやわいなう。

腰一　あれ又そのやうな弱いこと、こんな悦びはござりませぬ。お祝ひなされても、よろしうござりますわいなあ。

撫子　これが何で嬉しいもの、不便なことをしたわいなう。

トいろ／＼に撫子姫に焚きつける。此時下手柴垣の内にて木琴の音する、腰元皆々耳にして、

腰三　おや／＼、まあどこやらで木琴のやうな音がいたしまする、どこであらうぞいなあ。

腰四　左樣、どこであらうぞいなあ。

女一　さうおつしやれば、段々近く聞えますわいなあ。

女二　氣味がわるいぢやござんせぬか。

腰一　あの氣味の惡いこと、何でもこちらの方でござりますぞえ。（ト下手柴垣の傍へ行く、）

腰二　どれ〳〵私も聞いて見ようわいなあ。こゝへ來て聞いて見ると、

腰一　何事も、

腰二　ござんせぬわいなあ。（トいふ、この時兩人の着附へ女の腕附く、皆々これを見て、）

腰三　あれ〳〵、お二人さんの、

皆々　召物へ。

兩人　え、やあ。（トびつくりする。撫子姬思入あつて、）

撫子　ても、仰山な人達ではあるわいなう。（トこの時ドロ〳〵になる。）

皆々　あれえ。

ト皆々上手へ逃げてはひると、下手より彌九郎出來り、

彌九　これは〳〵姬君樣、腰元衆は如何いたしましたか。姬君お一人、嘸お淋しうござりませう。

撫子　おゝ誰かと思へば猿島彌九郎、なんぞ自らに、母様の御用でも。

彌九　いえ後室様ではございませねど、なか〳〵な用事がございまする。（ト思入あつて、）お姫様、斯様申せば、どうか恐れ多い儀でございまするが、殿巴之丞様にはお留守と云ひ、嘸お寂しいことゝ存じ、豫て思ひ入りたる次第もあれば、斯くは夜更に推參仕りました。

ト なまめいたるこなしにて傍へ寄る。

撫子　これ彌九郎、そなたは狂氣はしやつたか。主に向つてみだりがはしき戲言、今一言言うて見や、そのまゝには許さぬぞ。

ト守り刀へ手をかけてきつといふ、これにて彌九郎撫子姫をきつと見て薄ドロ〳〵になり、

彌九　殺さば殺せ、おのれ撫子、殿樣には添はさぬぞ。

ト恨めしげにいふ、この時ドロ〳〵にて彌九郎居所にて消える。撫子姫不審げにきつとなると凄き鳴物になり、彌九郎の居たる所へ時鳥薄色の着附にて、髮を振亂して現はれ、撫子姫を見て、

時鳥　そなたの悋氣嫉妬故、百合の方の手に掛り、非道の刄に死を遂げし恨みを晴らさでおくべきか。

ト恨めしげにいふ、撫子思入あつて、

撫子　何と言やる、母上がそなたをば、えゝゝゝゝ。いかに女子の常ぢやとて悋氣に人を害せんや、自

らは知らぬこと、母上様のなす業も身に引受くるが孝行なれど、これ許してたも、堪忍してたも
いなう。

時鳥　外面女菩薩内心如夜叉、おのれおめ〳〵添はさうか。

ト時鳥撫子姫を引寄せるやうにすると、撫子姫苦しみて、アレエと聲をたてる。とこの聲を聞き下手よ
り雪枝彌惣太家老の打扮にて出來りて、

彌惣　はて心得ぬ館の鳴動、障礙を拂ふ不動國行、きり〳〵この場を立ちさるまいか。

ト刀を拔き、時鳥の姿の見える心にて切拂ふ、これにて大ドロ〳〵になり、時鳥元の所へ消え、替りに
彌九郎肩先きを切られて現はれる。

彌九　やあ、雪枝彌惣太、何故あつて彌九郎を、わりや手にかけて殺すのだ。(トきつとなつていふ。)

彌惣　やゝ其方は猿島彌九郎、障礙を拂ひし我が切先、今までこれに見えざる彌九郎、手を負ひたるは、
はて心得ぬ。(ト不思議の思入、彌九郎苦しき思入にて、)

彌九　もうかうなつたらやぶれかぶれ、後室百合の方と心を合せ、この淺間家を横領せんと企みし一々、
言つて聞かせる。(ト此内始終薄ドロ〳〵、彌惣太思入あつて、)

彌惣　なゝ、何と。

彌九　あの時鳥が惡瘡の發したるも、百合の方が計らひにて、鈍玄といふ醫者と語らひ、毒藥をば調合させ、相好變つて巴之丞に愛想を盡かさせ、追拂はんと思ひしに、不思議に惡瘡癒えたる故、百合の方が殺したのだ。まつた星影土右衛門と心を合せ當家を奪はん企らみも、皆百合の方がなす業だ。それへ一味のこの彌九郎、深手を負うたる上からは、撫子姫も冥土の道連れ、觀念なせ。

ト撫子姫に切つてかゝるを、彌惣太一刀に切倒す、撫子思入あつて、

撫子　さうぢや。（ト守り刀にて自害なしにかゝるを彌惣太留めて、）

彌惣　こりや姫君には、何となされますする。

撫子　いや〳〵留めずに死なしてたも、母上樣の邪曲から、親子の緣に自らまで、同腹中と思はれんも恥しい、それぢやによつて、どうも生きてはゝ（ト又死なうとするを留めて、）

彌惣　お心逸るは道理ながら、今彌九郎が測らずも己と惡事の白狀なせしも、皆時鳥が障礙ならん、事あらだてなばお家の大事、これより直に在京の我君へ、時鳥が死去の趣き、書面の以て通達なし、又二つには姫君の御實家へ、內々事を申し計ひ、後室百合の方をお迎ひの使者を乞ひ、諸事穩便に百合の方を上京なさしむれば、自然と事の納まる道理、萬事は拙者にお任せあつて、唯時鳥が亡き魂の、御回向なされ遣はされませう。

撫子　何から何までそちが計らひ、よいやうに賴むぞや。
彌惣　お心おきなう彌惣太めに、お任せなされて下さりませ。
撫子　よろしく賴み入るわいの。

ト手を合せてながむ。此時また大ドロ〳〵になり、正面の御簾屛風を引裂き、時鳥の亡靈現はれ、

時鳥　おのれ、撫子思ひ知れ。

ト撫子の方へつッと寄る、撫子苦しみてアレエと逃げにかゝるを引戻す思入、これにて撫子の髮の毛仕掛にて逆立つ、彌惣太きつとなつて、

彌惣　一念凝つたる女が振舞、きり〳〵この場を立ちさるまいか。怨敵退散々々。

ト又刀を拔き切拂ふ、これにて時鳥段々に上へ上りながら、撫子を引廻す思入、撫子苦しみ俯伏になる、彌惣太時鳥を見上げて、

はて、恐ろしい。

ト撫子を圍ひ、刀を下におくを木の頭、

執念ぢやなあ。

ト大ドロ〳〵にてよろしく、

幕

四幕目

五條坂仲の町の場
同逢州座敷の場

〔役名──淺間巴之丞、花垣志摩之助、雪枝彌惣太、蟹塚素兵太、淺間の下部阿曾平。花形屋の傾城さつき、同逢州、時鳥の靈、其他。〕

(仲の町の場)──本舞臺上の方に板屋根の門。眞中に常足の屋體、正面は暖簾口、瓦燈口の緣起棚、その下戸棚。店先上の方三尺の落間、立花屋と白ぬきにせし柿色の長暖簾をかけ、下の方へ寄せて埒のある梅林、所々へ雪洞を灯し、よき所へ毛氈をかけし床几二脚ほど、總て五條坂仲の町の體。こゝに素見客の仕出し○□△◎の四人立つてゐて、通り神樂にて幕明く、

○　こう、いくら廻つても達引きさうな所もねえが、すご〳〵歸るのも癪に障るから、何處ぞへ上らうと思ふが、みんな懷中はどうかね。

△　べらぼうめ、見くびつたことを言ふな。誰しも春だ、錢のねえ奴があるものか、何だぽゝつゝぽゝなぞと、鳩ぢやァあるめえし。

□　さう腹を立つなえ、みんな鳩と緣のねえこともあるめえぜ。

◎　うめえことを言やあがるぜ、その口前だから、いゝつゝけんの女がぷんと來たのだな。

○ ぷんと來たと言やあ、めつぽふ梅が匂ふぢやあねえか、何だかおらあそのせゐか、逆上せて來たやうだ。

△ さう逆上せてぽつとさせる思ひ附で、この廓へ今年から梅を植ゑたのかも知れねえ。

□ 何にしろ誰が思ひ附か知らねえが、この廓へ梅を植ゑるといふのは、七草や菊と違つて、こりやあ近年にねえ大當りだ。

◎ 手前大層梅へ肩を入れて褒めるが、おらあ又梅の木より、櫻の木の大福が大きくていゝの。

○ えゝ見ッともねえことを言ふな、吞めぬ奴はこれだから話せねえ。

□ それにつけても、引まで播磨屋へでも行つて、一口やらうぢやあねえか。

△ そいつあいゝ、皆と附合はうぢやあねえか。

◎ おらあ飯の方だから、割前は半分だよ。

○ しみつたれなことを言はずに、默つて行きやな。

◎ それでも言つておかねえと、割を喰ふからよ。

三人 まあいゝから、一緒に歩べ〳〵。

ト四人下手へ、はひる。花道より蟹塚染兵太、穴生多九六男達の打扮にて、後より地廻りの打扮の者四人

出來りて、

地一　もし素兵太樣、さうして私等にお賴みとは、

四人　どんなことでござります。

素兵　いや、その賴みといふは外でもない、奧州からこの都へ在番に上つて來た淺間巴之丞といふ奴、仔細あつて生けておかれず、先達この廓へ忍びの供で來た折に、これ幸ひと喧嘩をしかけ片附けようと思ひのほか、御所ノ五郎藏が故主故巴之丞の肩を持ち、返りくじにおいら達がひどい目に逢はされた。

多九　いつぞは意趣を返さうと附狙つてをつたところ、又候今宵巴之丞が忍びの供でこの廓へうせるは意趣の返しどころ、息の根止めてくれようと、思つてはゐるけれど、一旦顏を知られた兩人、そこで手前達に喧嘩をさせ、助鐵砲に後からばつさりとやる了簡、何と巴之丞にふつかけて喧嘩をしちやあくれめえか。

地一　そりやあほかの者ぢやあなし、不斷酒の一ぺいも振舞つて貰ふお前方、これが難しいことならば、私等にやあいかねえが、喧嘩をするのは譯はねえ。

地二　とんだのろけたせりふだが、年中廓の地廻りに色と喧嘩は半生業、突ツかけ草履の鼻緒ぢやあね

えが、五分でも後へはひかねえのだ。

地三　然し相手がさんぴんなら、何の造作もねえけれど、何と言つても知行取り、先が立派な侍だけ、一つ間違やあ命づく、

地四　こりやあ命の切り賣りだ、なんぼ不斷心安いお前方の頼みでも、安金ぢやあ請合へねえ。

地一　默つてゐろえ、旦那に御如在があるものか。

素兵　いやにいふ奴等だ。

地一　いや常談ぢやあござりませぬ、外の人から頼まれりやあ、前金に貰ふ仕事だが、知つた顏故渡りでやりますが、後で惡い顏をしちやあいけやせぬぜ。

素兵　なに惡い顏をするものだ、これが首尾よく行く口にやあ、おら達が頭と頼む、星影殿が本地へ歸り。淺間の家を横領するのだ。

多九　その時こそは一足飛、おいら二人も家老用人、立身出世になることだ。何で骨を盜むものか、褒美の金は望み次第だ。

地三　さういふことなら大丈夫、命限りにやッつけやせう。

地四　然し物は祝ひから、前祝ひに軍鶏で一ぺい。

素兵　飮み度くば飮ませもせうが、もう今に來る時分、後でゆつくりやるとして飮まずに辛抱してゐてくれ。

多九　（東の假花道の方を見て、）あれ〳〵、噂をすれば影とやら、向うへ來るのは巴之丞。

四人　そんならあれが、

素兵　賴みの相手だ。

四人　こゝへうせたら、

多九　必ずぬかるな。

四人　合點だ。

ト尻を端折り下手へ忍ぶ。と花道より禿兩人、箱提灯を提げし若い者を先にして、花形屋の傾城逢州道中の打扮にて、後より若い者長柄の傘をさしかけ、八文字にて出來る。續いて振袖新造逢井、逢野の二人、番頭新造逢人その後より若い者附添ひて出來る。と同時に東の假花道より巴之丞、花垣志摩之助下部阿曾平を從へて出來る、阿曾平は巴之丞の笠を持つて出來る。

逢州　年毎に咲く梅ケ枝も新玉の、春を迎へてやう〳〵と、來啼く鶯それならぬ、身は川竹の籠の鳥、まだ笹啼の突出しに、ほうほけきやうの揚屋入り。

巴之　實に不夜城と名に呼びし花の廓の賑ひは、夜も晝なる別世界、かの唐土に言ひ傳ふ秦の始皇が好事にて、善美盡して建てしとある、阿房宮に異ならず。

逢井　梢の梅の紅白も、色香較ぶるしなしぶり。

逢野　思ひの竹の埒さへも、結ぶは嬉し色の里。

志摩　進まぬ運び思はずも、心浮きたつ春風に誘ひくるわに香も高く、詠めもよしや梅の下。

逢人　夜は殊更白梅の星と見まがふ朧夜に、ほんに吉野も及びなき、櫻にまさる仲の町。

阿曾　今日のお供に思はずも、目に正月のやつこらさ、鼻をつらぬく梅ケ香より、刹身のぬたの芥子酢で、梅の花ほど引かけたい。

逢州　思ふ心の八重一重、花は籬にへだつれど、

巴之　へだてぬ梅の香り慕うて。

皆々　少しも早う、

禿　あれなる茶屋へ。

巴之　そちも一緒に。

逢州　子供來や。

禿　あい――。

ト双方舞臺へ來り行き逢ひ、巴之丞逢州顔見合せ互ひに見惚れる思入。この時下手より以前の地廻り四人出來りて巴之丞に突當る。巴之丞構はず逢州に見惚れてゐる、四人立ちかゝりて、

地一　やい〳〵何で人に突ツかゝつて挨拶をしねえのだ、御免なせえと詫りやあ了簡もしてやらうが、

地二　何だ大きな面をしやあがつて、啞か聾か知らねえが、かう見たところがきよろ〳〵と、盲目ぢやあねえやうだ。

地三　明盲目かは知らねえが、何でこちとらに突當つた、裝は下馬一枚だが、廓の中ぢやあ引は取らねえ。

地四　無賴漢同士なら知らねえこと、汝等に廓で力まれちやあ、地廻りの面が立たねえ。

地一　大道中へ兩手を突き、御免なせえと、

四人　挨拶をしろえ。

ト巴之丞へ立ちかゝるを阿曾平四人を突退け、巴之丞を圍ふ。この內逢州等皆々は上手茶屋の緣へ腰をかけ、案じる思入。

阿曾　やい〳〵此奴等は途方もねえ、理不盡な奴等だ。往來と申しながら遊里のこと故、此方で避けて

通るに突つかゝり、大地へ手を突きあやまれとは、そりやあ誰に言ふことだ。お忍びとは言ひながら、彼方は陸奥の、いやさ、道の邪魔するうじ蟲めら、察するところおのれ等は、喧嘩をしかけて物取りなすのか。

地一　なに、物取りとは誰がことだ、身にやあぼろツこを着てゐても、しら几帳面の無頼漢だ。

地二　盗人と言はれちやあ、了簡ならねえ。

阿曾　了簡ならざあどうともしろ、相手はおれだ、此奴等片ツ端から張りなげるぞ。

志摩　これはしたり阿曾平、いかゞ致したものぢや、何事もお忍びのおいで故、神妙にいたさねば相ならぬぞ。

阿曾　それだと申して、あんまりな奴等故

志摩　はて、堪忍の二字を守り、控へいと申さば控へをらぬか。

阿曾　へゝい。（ト是非なく控へる。）

地一　なんだ〳〵、鐵砲玉を見るやうに、ぼん〳〵言つたが、後は煙だ。

地二　見りやあ木刀をひねくつて、おいら達を汝は切る氣か。

地三　切れるなら切つて見ろ、五島鮪で骨が太い。

地四　あんまり古風なせりふだが、腕から切るか足から切るか。
地一　さあ／＼、きり／＼と、
四人　切りやあがれ。（ト阿曾平へ身體を突きつける。）
阿曾　むゝ、望みなら切つてやらう。（ト柄へ手をかける。）
地一　それ、奴からたゝんでしまへ。
三人　合點だ。
ト四人は垣根の竹を拔き打つてかゝる、阿曾平四人を相手に立廻り、巴之丞は後へ下りこれを見てゐる。
志摩之助巴之丞を守つてゐて、阿曾平の手にあまる思入を見てとり、
巴之　それ、志摩之助加勢いたせ。
志摩　はツ。
ト志摩之助此中へ入り左右へ投退け立廻り、二人にて四人を相手に立廻りて、トヾ上手へ志摩之助地廻りの一、二と立廻りながら入り、下手へ阿曾平地廻りの三、四と立廻りながら入る。巴之丞前へ出て見て、
巴之　これ、長追いたすな。

ト此時後方へ素兵太、多九六の二人頬冠り尻端折りにて一刀を拔き窺ひ出て。

兩人　觀念。

ト切つてかゝろ、巴之丞身を躱し扇にて二人をあしらひて立廻り、逢州はおぶ〳〵する。これを逢州圍ひて、皆々屋體へ上り、氣を揉むこなし、巴之丞兩人の顏を見て、

巴之　や、そちはこのほど當所にて、我へ狼藉なしたる曲者。

素兵　おゝ、その時御所ノ五郎藏が通りかゝつてわれを助け、

多九　筋骨拔かれた意趣返し、こゝで恨みを晴らすのだ。

巴之　扨は御所ノ五郎藏に、打擲されしを遺恨に思ひ。

兩人　知れたことだ。

ト切つてかゝるを立廻り、巴之丞は扇にて素平太の眉間を打ち、多九六を刀の鐺にて突く。これにて兩人花道へ逃げてはひる。巴之丞は扇にて塵を拂ふ、女形皆々嬉しき思入にて、

逢州　もうしあなた様、お怪我をなされはいたしませぬかいな。

ト恥しさうに言ふ、巴之丞逢州を見て思入あつて、

巴之　いや、どこも怪我はいたさぬわいの。

逢州　それはよろしうござんしたなあ。
逢人　何はともあれ、これへお掛け掛ばしませいな。
巴之　然らば許しやれ。
　ト巴之丞床几へ腰をかける、逢人逢州に側へ行けといふ、逢州恥しき思入をしてゐるを逢人突きやる、これにてよろ〳〵として巴之丞の側へ腰をかけ、
逢州　お許しなさんせいな。
　ト巴之丞逢州に見惚れたる思入。奥より茶屋の女房おやま、茶碗を盆に載せ持ち出で、
やま　憚りながら、お湯を一つ召しあがりませ。
巴之　おゝ、これは忝い。(ト茶碗を取る。)
やま　唯今はあぶないことでござりましたな。もうし皆さん、今の衆は此間も、五郎藏さんに打たれたる出來星の男達で、惡い人達でござんすな。
逢井　いつも店の格子へ立ち、惡口を言ふあぶれ者。
逢野　口ほどでもなく打ちたゝかれて逃歸り、よい氣味でござんしたな。
逢人　さうして後のお二人さんは、どうなさんしたことやら。

巴之　何處まで追駈け行きしか、早う戻つて來ればよいに。
やま　今にお歸りなさいませうから、これでお待ち遊ばしませいなア。
巴之　暫時世話になるであらう。

ト此内逢人煙管に煙草をつぎ、逢州に巴之丞へ上げろといふ思入、逢州恥かしさうに煙管を出し、

逢州　憚りながら、
巴之、これは〳〵忝い。（ト煙管を取り煙草を喫む。）
逢井　もうし花魁、今のお方がいつまでも、お歸りなさんせぬとようござんすな。
逢州　そりや何故に。
逢井　さあ、今のお方がござんせねば、あなたがお歸りなさんせぬ故。
逢州　おゝさうぢや〳〵。明日までも歸りなさんせねばよいが。
巴之　いや、あの者共に歸られねば、身共一人で難儀いたすわ。
逢人　はて、お歸りなさんせずと丁度幸ひ、お供して行かうではござんせぬか。

ト此時上下より、志摩之助、阿曾平出來りて、

志摩　はツ、御前、これにおわたり、

兩人　遊ばしましたか。
巴之　おゝ、兩人の者歸りしか。
皆々　えゝ、歸つてござんせいでもよいことを。
兩人　なに、歸らいでもよいとは。
逢人　いえ、ようお歸りなさんしたと、
皆々　言ふたのぢやわいな。
巴之　して、今の者はいかゞいたした。
志摩　お忍びのお歩ひ故後日を憚り、そのまゝに峰打に打ち懲らし、命は助け遣はしました。
阿曾　それに御前お一人故、後々が氣遣はしく、直樣とつて返しましたが、
志摩　先は御機嫌よろしう。
兩人　恐悅至極に存じまする。
巴之　おゝそれはよういたした。命を取るは無益の殺生。
志摩　然し御前、唯今の惡漢どもが打たれしを遺恨に思ひ、荷擔人を伴ひて又候や取つて返し、御前へ狼藉なさんも知れず、

阿曾　打ち懲らしてはやつたれど、あぶれ者のことなれば、あのまゝにはいたしますまい。

志摩　卑怯には似たれども、お供というては吾々二人、彼等が來ぬ内片時も早く、

阿曾　御歸館あつて然るべう存じまする。

巴之　高の知れたる者共なれども、譬にもいふ油斷大敵、そち達が詞に任せ、いかにも歸館いたすであらう。

逢州　そんならもう、お歸りなさんすか。(ト本意なき思入。)

皆々　まあ、よろしいではございませぬか。

志摩　いや〳〵御大切の御身なれば、かゝる遊所へお忍びにて、おいであるはよからぬこと、もし過ちのある時は、お供なしたる吾々が越度。

阿曾　命は捨てる覺悟なれど、何を言ふにも多勢に無勢、手にあまることあらば、腹を切つても骨を斷つても、追付くことではござりませぬ。

志摩　最早初更に近ければ、片時も早く御館へ、

阿曾　お歸り遊ばされませう。

巴之　おゝ歸館いたすは、いたすけれど、(ト逢州へ心の殘る思入。逢州煙草を附けて、)

逢州　もう一服召上つて。

巴之　左樣いたさう。（ト煙管を取つて喫む。）

志摩　あいや、それでは時刻が延びます。

巴之　ぢやと申して、折角彼女が。

志摩　はて、深夜に及ばゞ、

兩人　路次の物騷。

ト これにて逢州は鬱ぐ思入にて俯向くを、巴之丞その顏を見て、手の煙管を落す。

阿曾　あもし、お煙管が。

ト阿曾平取つて出す。これにて巴之丞心附き煙管を取つて差出す、逢州これを持ち兩人顏を見合せ思入、志摩之助巴之丞に詰寄る、巴之丞志摩之助を見て氣を替へ、煙管を放し立上りて、

巴之　どりや、歸館いたさうか。

ト逢州は本意なき思入。この時花道の揚幕の内にて「あ、申し殿樣、お待ちなされて下さんせいな。」と言ふ杜鵑花の聲する。

なに、待てとは。

阿曾　何者なるぞ。

ト花道より禿二人、扇菊の紋附の箱提灯を持ちし若い者を先にして、傾城姿の杜鵑花出來る、後より新造松島、つくし、番頭新造花咲、若い者附添ひ出來るを、皆々見て、

逢州　今殿様の御歸館を、おとゞめ申せしその主は。

逢人　誰かと思へば杜鵑花さん、

皆々　ようおいでなさんしたなあ。

さつ　お前と一緒に歸らうと、松屋の見世を出たれども、今を盛りと咲き揃ふ梅の薫りに袖引かれ、ついうか／＼と道草に、思はずおそうなつたわいな。

松島　ほんに毎日見る花も、昨日の蕾は今日咲いて、

つく　日毎に變る枝振に、盡きぬ詠めの梅林。

花咲　それ故今年はいつもより、八重にお客の重なるも、偏に梅の色香故、

さつ　また花咲さんの口合ばかり。

逢州　何はともあれ杜鵑花さん。

さつ　憚りながら、おゆるし受け、

逢人　早うこゝへ、

皆々　ござんせいなア。

さつ　そんならそこへ。(ト禿二人に、)子供來や。

禿　あい――。

ト皆々舞臺へ來り、杜鵑花は下手にて巴之丞に辭儀をする。巴之丞心得ぬ思入にて、

巴之　歸館なすを押し留め、我を敬ふその方は、何者なるぞ。

さつ　お見忘れ遊ばしましたか。

巴之　つひに相見ぬその方は、はて、誰やらであつたるぞ。

さつ　後室樣に御恩を受けし、腰元杜鵑花にござりまする。

巴之　おゝ、母上に仕へたる、杜鵑花にてあつたるか。

さつ　夫がお目見得なせしと聞き、どうかお面拜し度く、かゝる姿も顧みずお留め申せし失禮は、お許しなされて下さりませ。

巴之　このほど五郎藏に逢ひし時、そちがことを尋ねしが、たゞ無事なりとばかりにて、かゝる苦界の勤めをなすと、打明けざる故知らざりしが、扨は長々の浪々中、活計に迫りて身を賣りしか。

さつ　夫の病氣に是非なくも、流れの里へ身を沈め、はかない勤めをいたしまする。
志摩　さては豫々聞及ぶ、以前御家に勤められ、今五郎藏と變名せし角彌殿ともろ共に、御國表を立退かれし杜鵑花どのであつたるか、花形主膳の悴、同苗志摩之助と申す者。
阿曾　また下郎めは阿曾平とて、いつもお供をいたす者、以後入魂にお賴み申す。
さつ　あなた方より私こそ、お心安うお願ひ申します。
巴之　何にいたせ計らずも、今宵そちに對面なし、悅ばしう思ふぞよ。
さつ　御勘氣受けて七年越し、いつお目見得のなることゝ、思ひがけないこの御目見得、何から申上げませうやら。(ト四邊へ思入あつて、)あまりのことの嬉しさに、申すことさへ後や前、つい口へ出ませぬわいな。
花咲　もし花魁、伊勢屋のお客が待つて故、私が替りみんなを連れ、先へ行つてゐるほどに、後からゆつくり。(ト杜鵑花へ思入あつて、)ござんせいな。
さつ　おゝ、よう氣が附いて下さんした、どうぞさうして下さんせいな。
松島　そんなら花魁、お先へ參りますぞえ。
つく　さあ、みどりもゆかりも一緒にぢやぞよ。

禿　あい／＼。

やま　ほんにお客といへば、二階のお客がお待兼ね、逢州さんの名代に、お前方行つて下さんせ。

逢井　え、二階のお客とは。

やま（思入あつて、）それ、呑込みの悪い、かのお客ぢやわな。

逢井　おゝ、さうでござんしたな、さつぱりと氣が附かなんだ、さあみんなも一緒に來なさんせ。

禿　あい／＼、合點ぢやわいな。

花咲　そんなら、花魁、

皆々　又後に。

さつ　迎ひに來て下さんせ。

やま　さあ／＼早う、

皆々　どれ行かうわいな。

ト騒ぎ唄になり、皆々奥と下手へはひろ。後巴之丞、志摩之助、阿曽平、杜鵑花、逢州殘りて、

巴之　こりや杜鵑花久々にて面會いたせば、盡きぬ以前の物語承はるも一興ならん。さゝ許す、近う近う。

さつ　左樣なれば、御免なされて下さりませ。（ト會釋しながら二重へ上り、下手にゐる。）

巴之　實に光陰は矢の如く、昨日今日のやうなりしが、そち達が國違なし、早七年に相成るとは、月日の經つは早いものぢや。

さつ　今更申すも面目ない私共の身の放埒、若氣の至りと言ひながら後室樣のお目をかすめ、角彌殿と言交し、すでにお手討にもなるべきところ、お慈悲深い仰せにて二人が命助かりて、涙にしぼる袖の渡り、梢の櫻ならずして戀風故に散果つる、身は春ながら花もなく、白川の關打越して遠き都へ知邊を求め、夫婦となりし甲斐もなく、後室樣より賜はりし多くのお金も渡世なく、暮せし故に散果てゝ、その日の活計に迫りし折柄夫が長の煩ひに、髮の飾りも手道具も賣代なして詮方なく、苦界の里へ身を沈め、落せし眉毛を又附けて、心にもない綾錦、纏ふその身の苦しさは笑うて過す夜はたまさか、切ない中に紋日の物入り、かゝ、いゝあけしい間とては露いさゝか、なく程辛いその時は、お主樣を思ひ出し、御恩を仇に不義徒ら、お日を掠めし皆御罰と、我身を悔んでをりまする。（ト涙を拭ひ氣を替へて、）これはしたり私としたことが、よしないことを申上げ、お許しなされて下さりませ。

巴之　いや〳〵、こりや尤もなことぢや、君傾城の勤めほど、切なきものは無きとやら、そち達夫婦が

艱難辛苦は、巴之丞推量なせば、やがて本國陸奥へ歸國いたさば早速に、根引とやらをいたしくれう、必ずともに氣遣ひいたすな。

さつ　はゝ、冥加にあまるそのお詞、何とお禮を申上げませうやら、有難う存じまする。

巴之　それにつけても合點行かぬは、そちが夫五郎藏こと、浮世を忍ぶ身の上に名を改めしは尤もなれど、御所といへるは如何なる譯ぢや。

さつ　お尋ねにあづかりまして、申上ぐるも面目なけれど、これは斯樣でござりまする。而も三年後のこと、月は五月二十五日黑白も分かぬ闇の夜に、これなる廓で鞘當の言葉咎めを言募り、酒興の上か白刄を拔き、目指す敵を逃がさじとて、大童にて駈廻り、誰彼の別ちなくめつた無性に往來の客に手疵を負はせし故、夫五郎藏見るに忍びず、その者を組留めて、廓の騷ぎを鎭めしより、富士の裾野で時致を、五郎丸が抱き留めしにその狀が似たりとて、誰言ふとなく異名となり、御所ノ五郎藏と申しまする。又五郎丸の因みにより、梶原の秩父のと子分の者に名を附けて、つひに今では御所組の男達の頭となり、多くの子分もござりますれば、廓なぞへお入りの節は、お供にお連れ遊ばしませ。

巴之　おゝその話にて巴之丞、御所の異名を會得いたした。この後廓へ參る節は、彼等を供に召連れん。

さつ　路の防ぎになりますれば、それがよろしうござります。

トこの内逢州思入あつて杜鵑花に向ひ、

逢州　もし、杜鵑花さん、今承れば彼方様は、御本國が陸奥にて、巴之丞様とおつしやりまするが、もしや、淺間の殿様ではござんせぬか。

さつ　あい、何を隱さう、私が勤めし、彼方は淺間巴之丞様。

逢州　えゝ(トおどろく。)

志摩　あこれ、めつたにお名を。

さつ　はッ、心附かず申しましたが、この逢州どのは同胞同様、必ずお案じなされまするな。

巴之　して逢州が我名を聞き、打驚きしは審しゝ、何ぞ仔細のあつての事か。

逢州　はッ、私事もお目見得を、年來願ひをりましたは、この身の素性を申上げ、差上げたい品がござりまする。

巴之　なに、我にその身の素性を話し、渡すべき品ありとは、猶々以て合點が行かぬ。

さつ　如何なることか知らねども、憚る人のあらざれば、包み隱さず逢州さん、申上げたがよいわいな。

逢州　先づ差當りこの品を、憚りながらあなた様へ、御覽に入れて下さんせ。

ト懐より袱紗包みの一巻を出し、杜鵑花の前へおく、杜鵑花取つて、

さつ　唯今お聞き遊ばす通り、この一巻をあなた様へ。(ト巴之丞に渡す。)

巴之　すりやこの品を逢州が、良治に送らんとな。(ト一巻を開き見て、)や、この一巻は我多年懇望なせし茶道の傳書、これを所持なしをつたるは、鮑田村に住居せし團ノ一齋と言ひし者我茶道の師範たりしが、如何してこの品を、逢州そちが所持なしをつたぞ。

逢州　(恥しき思入にて、)何をお隠し申しませう、私事は仰せありし、一齋が娘忘貝と申しますものでござりまする。

巴之　すりや、この方が、師と頼みし、

志摩　一齋殿の娘御とな。

さつ　思ひがけない、あの、お前が。

逢州　さあ、今まで隠せし身の素性申し上げねばならぬ仕儀、憚りながら一通りお聞き下さりませ。思ひ出せばその以前鮑田村に住ひし折、父一齋が我君より茶杓を求むる値の金子を、お預り申して宿へ歸る途次、地藏堂のこなたにて盗人に、その金を奪ひ取られしのみならず、身には數ケ所の傷を負ひ、はかなく死ぬる今際の遺言、この茶道の傳書をばかねぐ我君御懇望故、これを差上

け、身の罪の、お詫をせよと言はれしかど、まだその頃は私も年端も行かずお館へ、如何いたして差上げんと、今日は明日はと思ふのみ、徒に月日を送る内心良からぬ名古平が、巧みに同胞憂き目に遭ひ、つひには廓へ身を賣られ賴りに思ふ妹さへ、何れへ行きしか行方知れず、誰を賴んでその傳書お渡し申さん傳手もなく、肌身放さず所持なせしが、計らず今宵お目にかゝりお渡し申せば嘸や嘸、草葉の蔭でも父上が悦びますでござりませう。思へば藝の德故に、御恩になりし一齋が身の不仕合せを我君樣、御推量なされて下さりませ。(ト涙ながらに言ふ。)

巴之　あ、聞けば聞くほど親子の不運、尤もその節一齋が、最期の由は聞きつれど、かゝることゝは知らざりしが、そちが國を立退かざる、その折斯くと聞くならば致し方もあるべきに、申して返らぬそちが身の上、不便なことであつたなア。

さつ　初めて聞きしお前の身の上、互ひに賤しい勤めにて、親の恥故隱せども、外の者とは事替り、姉に妹と言合うてへだてぬ仲であつたれど、一齋殿の娘御とは今の今まで知らなんだ。かゝる苦界へ沈むのもお主樣の御罰なりと私なぞは思へども、それに引替へお前なぞは、親孝行な身の上で、何の因果でこのやうな、辛い勤めをしなさんすか、思へばいとしうござんすわいな。

志摩　某いまだ若年の折、茶道にかけては名人と、父が話に聞きたりし一齋殿の娘御が、かゝる遊里に

あらうとは、思ひ設けぬことであつた。

阿曾　私などはお使ひに參りしことのあつたれど、以前に替る姿故とんと心附かなんだが、今々思へばその折に、飯事をして遊んでゐたが、逢州どのであつたかしらぬ。

逢州　あゝ申し、その後はもう言うて下さんすな、昔の事が思ひ出され、一倍悲しうござんすわいな。

さつ　何は兎もあれあの一卷、御前樣へ差上げれば、これで親御の言葉も立ち、お前の役も濟んだれば、嘸嬉しうござんせう。

逢州　これで心も晴れたれど、一つかなへば又一つ。

さつ　え。(ト逢州巳之丞へ思入あつて、)

逢州　さあ、又と世になきあの傳書、父の形見と思召し、お納めなされて下さりませ。

巳之　おゝ、我師と賴みし一齋が、心づくしのこの一卷、たしかに受納いたせしぞ。

逢州　えゝ、有難う存じまする。(ト巳之丞一卷を懷中する。時の鐘鳴る。)

志摩　や、あの鐘は何時なるぞ。

さつ　ありや四つでござんす。

志摩　南無三、四つとあるからは、これから館へお歸りあらば、

阿曾　どう急いでも九つ過ぎ、深夜になつては路が氣遣ひ。

巴之　いや、兩人とも氣遣ひいたすな、今宵は當所に宿りを求め、夜明けて館に立歸らん。

志摩　すりや、御前樣には、

阿曾　今宵は廓に。

巴之　はて、君子危ふきに近寄らずぢや。

さつ　それがよろしうござります。大事の御身で夜道は物騷、殊には夫五郎藏が御前のお目にかゝりたいと、申してゞござりますれば、今宵は幸ひ御緣のある、逢州さんをお伽となし、廓へお泊り遊ばしませ。

巴之　おゝ、その五郎藏にも逢ひたければ、杜鵑花そちが言葉に任せ、逢州が許へ赴かん。

逢州　え、すりや、御前樣が私のところへ。

さつ　逢州さん、嘸嬉しうござんせう。

逢州　これが嬉しうなうて、何とせうぞいな。（ト此の時奥より松島、つきじ、禿等出來りて、）

松島　花魁、樣子は奥で聞きました。

さつ　これから直に殿樣を、お送り申して、

皆々　參りますわいな。
巴之　勝手存ぜぬ廓内、よきに賴むぞ。
皆々　合點ぢやわいな。
巴之　どりや、まゐらうか。
志摩　あいや御前、暫くお待ち下さりませ、御在番の徒然に御見物ばかり故、御供いたしてまゐりますれど、大切なる御身にて遊里へ御宿りありし事、お國表へ聞えなば、お供いたせし拙者が越度、この儀ばかりはおとゞめ申す、御無用に遊ばされませう。
巴之　はてさて、そちも若いに似合はず頑固のことを申すが、氣鬱を晴らさん爲めなるわ。それを達て留むるは、氣欝を晴らさず良治が、病氣になつても苦しうないか。
志摩　まつたくもちまして、
巴之　さなくばそちも同道なし、共々氣鬱を晴らすがよい。
志摩　有難き御意ながら、お供なしてはお國へ濟まぬ。拙者これにて相待ち申す。
さつ　さあ、御尤もではござりますが、どこがどこまで我君の、お供をなすが家來の役、こゝにお一人ござんして、もしや御前に凶事あらば、その時お國へ濟みますか。

志摩　さあ、それは、
さつ　お供なすのが忠義かと、憚りながら存じまする。
志摩　はツ。
さつ　さあ、こゝの道理を思召し、阿曾平殿もとも〴〵に、
阿曾　お供いたすでござりまする。
巴之　堅藏どもが得心なさば、このほどよりの鬱散に、姿ばかりか聲音まで、國に殘せし時鳥に。
逢州　え、時鳥とは。
巴之　いやさ、時鳥ではない鶯の、廓の梅に初音の宿り、萬事の指圖、杜鵑花も共に。
さつ　はツ、私ことは五郎藏を、これに待受けとも〴〵に、後ほど御機嫌伺ひませう。
逢州　そんなら私は、殿樣と。
さつ　さあ、一緒に内へ行かしやんして、過來しかたの物語り、君のお伽をしなさんせいな。
逢州　心の願ひがかなひしも、杜鵑花さんの皆お蔭、
松島　さあ、善は急げといふからは、
つき　又もや御意の變らぬ内、

逢井　少しも早う殿様を。
やま　どれ、お送り申しませう。（ト皆々立上りて、）
巴之　然らば、杜鵑花。
さつ　御機嫌よろしう。
逢人　さあ、あなたも一緒に。（ト志摩之助の手を取る。）
志摩　どうも拙者は。（ト後へ下らうとするを、巴之丞見て、）
巴之　はて、野暮を申さず、（ト前へ突出し、）参れといふに。（トきつと言ふ。）
志摩　へゝい。
皆々　さあ、ござんせいな。
ト唄入りの鳴物になり、禿二人先に立ち若い者箱提灯を持ち、逢州巴之丞の手を取り、志摩之助附添ひつゞいて杜鵑花の外皆々花道へはひる。杜鵑花見送り思入あつて、
さつ　最前からの様子を見るに、御前様に逢州さんも心ありげに見ける故、夜更に道も物騒なれば、無理にお留め申したが、今宵の事を五郎藏殿に、ちつとも早う知らしたいが、何處を廻つてゐやしやんすか。いつも宵にござんすに、今日に限つて見えぬのは、ほんに誰やらが歌にある、思ふま

まにはならぬ世の中、あゝぢれつたいことぢやなあ。(ト思入下手より花咲出來りて、)

花咲　もし花魁、五郎藏さんならもう今夜は、廓へおいでなさんせぬぞえ。

さつ　すりや又どうして。

花咲　お袋さんが御病氣故、今夜は逢はずに歸るから花魁にさう言へと、五郎藏さんの言傳を梶原さんから聞きましたわいな。

さつ　そんならもう歸りなさんしたか、殿樣がいらつしやつたに、ちよつと廻つてござんすりやよいに、今宵に限つて歸るとは、何のことでござんすぞいな。

花咲　ほんにさうでござんしたな、そこらに誰か子分の衆が、ひやかして居やんせう、言傳言うてやりませうわいな。

さつ　梶原さんか秩父さんがゐたなら譯をよう言うて、お歸りまでにござんすやうに、よう言うて下さんせ。

花咲　あい〳〵合點ぢやわいな。

さつ　五郎藏どのが來ぬばつかり、今宵は淋しいことぢやわいな。(トこの時奧より以前の素平太出て、)

素兵　淋しければ、一緒に行つてやらう。(ト杜鵑花の傍へ寄る。)

さつ　えゝ、傍へ寄るときかぬわいな。(ト突きやり、又寄らうとするを當てる。花咲びつくりして、)
花咲　こりや花魁には、
さつ　小太刀の一手も習つたる、屋敷勤めをしたお蔭。
花咲　して、この人は。
さつ　さうしておいても氣は附けど、とてものことにその顏を。(ト撫でる眞似をする。)
花咲　あい、かうするのでござんすかえ。(ト素兵太の顏を逆撫でにすると、素兵太立上りて、)
素兵　はつくしよ(ト嚔をする)。
さつ　もし、流行風でも。(ト素兵太の肩をたゝくを道具替りの知せ)、お引きでないよ。
ト仕掛をひらりと羽織る、これにて素兵太ばんと轉る、この見得よろしく道具廻る。

(逢州座敷庭前の場)――本舞臺眞中に三間高足の二重屋體。正面に茶立口、上手に床の間違ひ棚、下手に文車、蒔繪の鏡臺、ほかに四季の花を入れし花車、この中に百合と撫子あること。屋體の前側は一面に障子を閉てきり、上下に柴垣、よきところに石の手水鉢、春日燈籠に灯ともしあり、上の方に梅の立木、いつもの所に風雅なる枝折門、この外に柳の立木、總て逢州座敷庭前の模樣。こ

こゝに以前の逢井、逢里、阿曾平の手を引張つてゐる。

阿曾　これさ〳〵、厭だといつたら止さねえか〳〵。

逢井　お前もまあ、あんまり野暮なお方でありんすわいなあ。

阿曾　ありんすかふらんすか知らねえが、おらあそんな船に乗り度くねえ〳〵。

逢井　あれさお聞きなさいよ、御前がお前にも、相方を出してくれろとおつしやる故、

逢里　さつきからお床も廻つて、お相方も待つてゐなますわいなあ。

阿曾　いゝやおらあ女に待たれる覺えはねえ、おれを待つ女なら、大方國の女房だらう。

逢井　お前さんもあんまり、分からないぢやありませんか。

逢里　それぢやあ、わちきが困りますわね。

阿曾　お前達の困るのは勝手だ、それをおれが知つたことかえ。

逢里　さあ、さうでもあらうけれど、おそくなるとぬしの花魁へ惡いから、

逢井　どうぞ言ふことを聞いて、一緒に來てくんなましよ。

阿曾　なんでも厭だ、ぢてえおらあ二合半だけ飯盛が分相應、それに廓の花魁は勿體ねえ。

逢里　それだから丁度よいやうに、以前宿場に勤めてゐた、お相方でありんすわいなあ。

逢井　名も〻〻こつ山さんといふ花魁でありますぞえ。
阿曾　はて、聞いたやうな名だなあ。
逢井　まあ、よいから一緒に、
兩人　ござんせいなあ。

ト時の鐘になり、阿曾平を無理に引張り上手へはひる。と琴唄の獨吟になり、よきほどに前側の障子を引抜く、內に逢州琴を調べたり、これを聞きながら巴之丞褥の上に住ひ脇息に靠れ、前の靑貝入りしつぼく臺の上に種々の器を載せ、巴之丞杯を持ち、この側に兩人の禿控へ、一人は酌をしてゐる。巴之丞思入あつて、

巴之　はて、心地よき前栽の朧の眺め、殊にそちが妙なる爪音、覺えず春眠を催すばかり、まゝ琴の音留めて一つ過ごしやれ。（ト杯を逢州へさす、逢州琴を止め杯をとり）
逢州　お聞きに入れるもお恥かしき私の手わざ、もうどうぞお許しなされて下さりませ。
巴之　いやく、感じ入つたるそちがわざ、一つ過して今一曲。

ト禿に酌をしろと差圖する。禿逢州に酌をする、逢州これを飲みて鼻紙にて杯を拭き、

逢州　憚りながら御返杯を。

ト巴之丞杯を取上げながら、逢州の顔をつく〴〵見て、

巴之　あゝ見れば見るほど、よう似たそちが面相恰好、我年頃不便をかけて召使ふ、時鳥と申す侍女あれど、その者と汝が面、似たとはおろか鏡に面を寫すが如し、してその方に妹あるや。

逢州　仰せの通り、一人の妹はござりますれど、ちと仔細あつて父母變りござりますれば、私には似もやらず、そしてまあ、その時鳥の方とやらおつしやるは、どなた樣の姫君でござりまする。

巴之　いや、その者はさいふ身元の女にあらず、生國は丹波にて、木ノ瀬と申す鏡師の娘なれど、かれ四歳の年淀の夜舟の暗まぎれに、取違へたる繼子にて眞實の親は何處の者か知らざれど、その昔母の煩ふその折に、姉と寢伏を共にせしを、子心に覺えありと申すを聞及べり。

逢州　さう御意遊ばせば思ひ出す、唯今申上げましたる繼しき仲の妹は、淀の夜舟の取換子、今の仰せに露違はず、また實の妹には證據となるべき品なけれど、取違へたる妹の方には笹鶴錦の守り袋。

ト言ひかけるを巴之丞さへぎるやうにして、

巴之　あゝいや、その中に入れありしは、一寸八分の觀世音ならずや。

逢州　どうしてそれを、御前樣には。

巴之　されば、その時鳥が物語り、それを所持する女子こそ、木ノ瀨とやらんが娘なりと、時鳥が申せしが扨は時鳥こそ、實の妹でありしか。

逢州　ま、思ひがけないと申しませうか、ほんにこれまで朝夕に、まことの妹は何處にと、思はぬ日とてはなかりしに、計らず知れず妹の行方、どうぞあなたが御歸國のその折は私を召連れられ、その實の妹に、お逢はせなされて下さりませ、お慈悲、お情でござりまする。

巴之　尤もなる願ひなれど、こゝに一つの難儀と申すは、我妻撫子の母なるもの生得心よからずして、過ぎし年陸奥遊覽に下向なし我方に長逗留、然る所に予が時鳥を愛するを、如何なることにや深く憎み、元彼女が田舍に育ち、花車風流を知らざるを聞出し、歌詠め琴を調べよと飽まで恥を與へしことあり。そちとてもその如く、召連れ歸るは易けれど、いかなる憂き目に逢はんも知れず、時鳥も亦その儀をば、氣病になして唯今は重き病ひの其上に、このほど承はれば面上に惡瘡發し、最早命も旦夕とあれば、如何なりしことならん、あゝ思へば不便なことぢやわい。

ト落涙の思入。逢州ハアツと泣伏し、やう／＼顏を上げて、

逢州　ほんに、思へば思ひまはすほど、私ほど淺ましいものはござりますまい。後の妹寄居蟲の行方も知れず、實の妹の行方はそれと知れたれど、生死のほども分からぬ難病、それにつけても怨めし

いはこの爪琴、姉が調べるは賤しい勤の活計となり、妹が琴を調べぬは重きその身の病ひとなる。調べるも恥調べぬも恥、同胞二人このやうに、憂き目を見るは前の世の、如何なる報いであらうぞいなあ。

ト泣伏す、禿二人介抱する。

巴之　その歎きは道理ながら、必定死せしといふにもあらねば、やがて某歸國なし、全快いたさば其方を國元へ呼迎へ、目出度う對面さすほどに、歎かずともこりや逢州、今の後をもう一曲。

逢州　もうどうぞ、お許しなされて下さりませ。

巴之　はて、調べいと申すに。（トきつと言ふ。）

逢州　はゝい。

ト是非なく涙を拭ひながら琴にかゝる。また獨吟になり。よきほどに薄ドロ〳〵笛の音して花道のスッポンより掛招硝ぱつと立ち、文金島田振袖の時鳥紅絹緒の草履を穿き、立つて横笛を吹き、左右に切り禿振袖の女の童胡蝶、舞振居り、一人は定家文庫を持ち、また一人は香盆へ香爐を載せて持ち、三人一緒に迫り上る。舞臺には逢州琴を調べゐる、この内時鳥は笛を吹きながら、女の童と共に舞臺へ來り、枝折門の外に佇み、琴に笛を合せる心、此内に獨吟切れて、琴と笛の音のみする。巴之丞思入あつて、

巴之　はて心憎き笛のすさみ、殊に音色は覺えある、我常に祕藏せし男浪と名づけし、笛の音によく似たり。何人なるか、はて心得ぬ。

ト言ひつゝ雪洞を灯し下へおり、庭下駄を穿き、そろ〳〵と來て、戸をそつと明けて見てびつくりし、

や、そちや、時鳥ではないか。

ト時鳥笛を止め巴之丞を見て、

時鳥　おゝさうおつしやるは我君樣か。ト枝折の内へ走り入り、おなつかしうござりましたわいなあ。

ト取縋つて泣く。

巴之　こりや〳〵時鳥、其方は如何いたしてこの所へまゐりしぞ。

時鳥　その御不審も御尤もながら、あなたが御上京遊ばしてより、明暮君の御事を思ひ暮せし甲斐ありて、やう〳〵病ひも本復なせば、おなつかしさのその餘り、奥樣へお願ひ申しお暇貰うて都へ上り、先程お館へあがりしところ、この廓へとのこと故に、お後を慕ひまゐる途、常に御祕藏遊ばせしこの笛故、我君樣と心で思ひ、すさみながらまゐりしに、折よくこれにてお目もじいたし、このやうな有難い、嬉しいことはござりませぬわいなあ。

巴之　おゝ、それはよくこそこれまで參りしぞ。よもその方が病氣全快はあるまじと思ひのほか、不思

議に命助かりしは、盲龜の浮木優曇華の花、悦びの其上に、まだ悦ばすことあれば、暫くあれへ
予ともろとも。

時鳥　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

ト巴之丞先に、時鳥會釋し小腰を屈めながら、女の童と共に二重へ上る。逢州は時鳥を見て合點の行か
ぬ思入、巴之丞女の童に向つて、

巴之　こりや、そち達はこの子供等と、次へまゐつて休息いたせ。

兩人　畏りました。

禿　さあ、ござんせいなあ。

ト禿、女の童等四人奥へはひる。巴之丞思入あつて、

巴之　これ時鳥、これなる逢州と申す傾城は、元我が茶道の師、團ノ一齋が娘忘貝といふものにて、淀
の夜船に別れたる、そちが眞の姉なるぞ。

時鳥　え、そんならお前が。

逢州　あの、こなたが。

ト互ひに寄らうとして、双方合點の行かぬ思入にて控へ、

いえ〳〵、これは私をおなぶりでござりませう。先程あなたの仰せありし、時鳥の方とやらは、最早死にもやしつらんと、のたまひしには引替へて、この女中のお顔を見るに少しも窶れし狀もなく、こりや大方私に妹のあることを、最前杜鵑花さんに聞きたまひ、君は知らぬお顏にてお腰元の内の、美しき女中さんをこの所へお呼び寄せ遊ばして、不束な私故、これ見よがしに同胞の名乘りをさせたその後にて、お笑ひ遊ばすお戯れでござりませうが、そりやあなた、お胴慾でござりますわいなあ。

ト巴之丞を恨めしさうに見て、落涙の思入、巴之丞も思入あつて、

巴之　その疑ひは尤も至極、某さへも時鳥が病氣全快なしたるは、訝しと思ひをればそちが疑ひはさることながら、まつたく左樣な戯れならねば、猶得心のまゐるやう、委細共に申し聞けん。

時鳥　(巴之丞の袖を控へて)あゝ申し御前樣、必ずお留まり遊ばしませ、すべて傾城などが唯今のやうに申すのを、手練とやら手管とやら承はりますれば、ありや皆殿御の心を奪はん爲め。斯樣な賤しい浮れ女と、お添臥は御身の穢れ、早う御歸館遊ばしませいなあ。

ト少し悋氣の思入にていふ、逢州これを聞きむつとせしこなしにて、

逢州　これ女中さん、賤しい勤の浮かれ女は、お前が言はずと知れてはあれど、私に限りよそ外の女郎

さんを見るやうに、お客を騙すふんぞといふ、なんなきたない逢州ぢやござんせぬ。あんまり見下げて下さんすないなあ。（ト脇を向き、つんとする。）

巴之　あゝこりや〳〵兩人とも、その爭ひ無用、互ひの疑念晴れるやう、某これにて計らひ得させん。

トあたりを見廻し、頷いて立上り、文車をよき所へ出し、鏡臺の鏡を取りてこの上へ載せ、

兩人ともに、我がいふことをよく聞くべし。そりや早測らざる對面故、互ひに眞と思はざるも道理ながら、この鏡にそち達が、面を寫さば同胞とて爭はれず、その顏の似たるを見ば、互ひの疑晴れるべし、さゝ、双方ともに鏡のもとへ。

ト兩人の手を取り鏡の傍へ連來る、時鳥、逢州鏡の傍へ來り、兩人顏を見合せ、氣味合の思入あつて鏡の上へ顏を出し、互ひによく〳〵見くらべることあつてびつくりなし、

逢州　ほんに我君樣の仰せの如く、

時鳥　似たとはおろか、花菖蒲、

逢州　私がお前か、

時鳥　お前が私か、

兩人　そんなら、眞の、

ト兩人顏を見合はす機に時鳥の櫛鏡の上へばつたり落ちる、時鳥これを見てうなづき、

時鳥　おゝ、ほんにそれ〳〵、今この櫛を落せしにて思ひ出す。いかに逢州どのとやら、お前が眞の姉様なら私が三歳の秋の頃、この鏡を見るやうに井戸を覗いて遊びし時、芥子坊主へさした塗櫛を落したことがござんしたが、それを覺えてゐやんすか。

トこれを聞き、逢州ちよつと考へる思入あつて頷き、

逢州　さう言はるれば思ひ出す、井戸は背戸の小高き丘、團栗の生る大きな木の下、而もそなたの落した櫛は、蚫田村の地藏尊の二十四日の市の時、父さんと連立つて、おまへが買うて貰うたを私もさゝねばならぬとて、やんちや言つてひつたくり、形に似合はぬ大きな櫛を芥子坊主にさした故落した井戸の水の上浮いては見ゆれど取る術なく、私も共に泣いてゐたを切平めにすかされて、その代りとて鬼灯を七つ貰うて姉がひに、私に四つそなたは三つ、むいて見たればこの姉のは、皆蟲喰でありし故、どうぞそなたの貰うたを一つたもれたもらねば、明日からはいつものやうに、負うて遊びに出やせぬと脅しても聞入れず、逃げる拍子に庭潦、片足泥に踏込んで、紅絹の鼻緒の草履をよごし、また泣きやつたを覺えてゐるか。

トこの内時鳥始終落涙の思入にて、

時鳥　その春お前は寺入りして、淺香山の手本を貰ひ、手習ひなさるが羨しく、まだいはけなき禿筆にて、わけもないこと書きちらし、手本を墨で汚したをお前か腹を立てしやんして、私は打たれて額に瘤、泣いてゐたれば母さんが妹の惡いは知れてはゐれど、幼なうても女子は女子、何故言葉では叱らぬぞ、それは姉もおとなしうないと、お前がいかう叱られたを嬉しう思ひし勿體なさ。それのみならず今もまた、幾年月のその間戀し〳〵と思ひたる、その姉樣に逢ひながら、僞りなりと思ふより賤しい勤めの浮かれ女よ、手練手管の空言と思ふさまに言うたのも、世間知らずの内鼠、心の狹き故なりと思ひなほして腹立てず、この上ともに時鳥それはかうせよさうせよと、足らはぬことのあるなれば、どうぞ敎へて下さりませ。

逢州　なんのまあこの姉こそ、最前は腹立つまゝよしないことを言うたれど、今となりては面目ない。それにつけても幼い時そなたと私と二人して、飯事をして遊びし折都土產に貰うたる、おやま人形がよい衣裳來て、美しう髮結うたが羨ましいと思ふより、私やお前になりたいと譯も知らずに言ひけるが、つひに廓の浮き勤め、賤しい姉には引替へてそなたは腰元にかしづかれ、御大身のおてかけ、こちらは高が傾城と、何で一つになるものぞ、そなたこそこの姉に、どうぞ禮儀を敎へてたもいなう。

時鳥　あゝもう何にも言うて下さんすな、思へばほんにあさましい。
逢州　替れば替る姉妹、
時鳥　高位のお方のお身近う、
逢州　勤める身には引きかへて、
時鳥　夜毎に替る枕の數、
逢州　一つよければ又一つ、
時鳥　思はぬ人にねたまるゝは、
逢州　何の因果で、
兩人　あらうぞいなあ。
　　　　ト互ひに手を取交し泣く、巴之丞始終思入あつて、
巴之　そち達の歎きは尤もなれど、みなこれ言うて返らぬこと、また互ひに申し度き事聞き度き事も多かるべければ、双方暫く涙を留めよ。〈ト是れにて逢州顏を上げて、〉
逢州　これはまあ御前をも憚らず、御免なされて下さりませ、ほんに女子と申しまするものは、涙もろきが常なれば、久しぶりの對面を悦ぶことは餘所になり、お恥かしい此のしだら、〈ト涙を流し居住

ひなほし、時鳥に向ひ、〽これ妹、淀の夜舟のその譯は、常に父さんのお話しに聞及べば、それを問ふには及ばねど、その後そなたは何處にゐやつたぞいの。

巴之　その儀はかれに問ふまでもなく、最前も申せし如く、その折時鳥を連れ行きしは、丹波國柏原の住人、木ノ瀬といふ鏡師にて、その者は時鳥を我子のやうに愛すれど、妻は木ノ瀬に似もやらず心よからぬ生れにて、憂き艱難のその中に、父の木ノ瀬は程もなく重き病に死別れ、邪險の母のみ一人となり、以前にまさる責苦故、怺へ兼ねて家出なし、所々方々とさまよふ内、仔細あつて某が侍女となせし彼女が身の上。

時鳥　それ故測らず今日こゝで、年月慕ひし姉様に廻り逢うたる身の悦び、どうぞこの上のお願ひには、父様や母様に早う逢はせて下さんせ。今は何處においで遊ばすぞいなあ。

ト逢州へ縋つて言ふ、逢州術なき思入にて、

逢州　今更語るも涙の種、そなた子心にも覺えてゐやらうが、母様は元病ひ勝、またその上こなたの行方の知れぬのを、明暮に思ひ煩ひ、それが元にて母上は重き病に御臨終、また父様は在年以前お館よりの歸るさに、人手にかゝつてお果てなされたわいの。〽ト泣伏す、時鳥逢州に取り附いて〽

時鳥　もし姉様、そんなら何と言ひなさんす。母様は御病死、父様は、あの、人手にかゝつてお果て遊

ばせしとな。して、その敵は何處の何者、何故敵をお討ちなされぬぞいなあ。

逢州　さあ、その敵を知るほどなら、何の討たいでおくべきぞ、命も身をも惜しまねど、在所は更なり名前も知らねば、詮方なくも無念の月日を送るわいなう。

ト泣入る、これより時鳥きつとなつて立上り、薄ドロ〳〵凄き合方になる。これにて巴之丞と逢州は少しうつとりとなりし思入にて俯向く。

時鳥　えゝ口惜しきその上に、また口をしき父の非命、假令この身に奈落の底に、沈まば沈め我一念は惡鬼となり、父の敵我身の仇、思ひを晴らさでおくべきか。(と向ふをきつと見て、花車を恨めしさうに見返りて、)心憎きはこの花籠、咲揃うたる四季の花の色香を嫉む撫子、鬼百合、飽くまで罪を造り花、えゝ恨めしい。

トきつと思入、大ドロ〳〵になり、掛焔硝ぱつと立ち時鳥消え、その後に白木の位牌殘る。巴之丞、逢州心附き、顏を見合せ思入あつて、

巴之　はて、合點の行かぬ、夢見し如き唯今の心地。

逢州　やゝ、今までありし妹の姿、この所に見えざるは。

巴之　殊に彼女がをりし後に殘りある白木の位牌(ト位牌を取上げ見て、)なに、葦實結枯信女、むゝ、扨

は彼女黃泉の客と相成ると雖も、再び娑婆に姿を現はし、逢州は我姉なりと我に知らせしものなるか、あゝ不便な彼女が身の果ぢやなあ。

ト下手より阿曾平出來り、枝折戸の内へはひり、巴之丞の前へ手を突き、

阿曾　はッ申上げまする、お國元より雪枝彌惣太樣、何か火急の御樣子にておいでゞござりまする。

巴之　なに、彌惣太がまゐりしとな、むゝ心得難きこの場の樣子、國元よりの使ひと申し、こりや何か仔細のあること。こりや〳〵其方まゐり、彌惣太に急ぎ我目通りへ出いと申せ。

阿曾　畏りましてござりまする。（ト下手へはひる。）

巴之　國元よりはる〴〵彌惣太が、自身にまゐるとは何事なるか。あゝ、心がかりな儀ぢや。

ト下手より彌惣太小さき箱を小脇にかい込み出來り、枝折戸の内へはひり、巴之丞を見て、

彌惣　はゝ、我君これにおわたり遊ばしましたか。

巴之　其方は彌惣太、許す、近う〳〵。

彌惣　眞平御免下さりませう。（ト言ひながら二重へ住ふ。）

巴之　先づ何はさしおき、斯くあわたゞしく參りしは、必定これには仔細のあらん、早う申せ。どうぢや、どうぢや。

彌惣　されば、拙者上京なせしは餘の儀に候はず、御愛妾時鳥の方次第に病重らせたまひしかば、御介抱は殘る方なくいたせしところ、ある夜何者とも知れず忍び入り、おいたはしや無慙にも、殺害なして行方知れず、草を分かつて詮議なす內、御家臣猿島彌九郎が惡事よりして露顯なし、一味の本人百合の方樣には先非を悔いてお居間にて、終に御自害なされしが、この事お知らせ申さんと、夜を日につぎて到着なし、お館へ上りしかど君この廓にまします由、お後を慕ひやう／＼と君の御在所を聞出し、これまで參上仕つてござりまする。

巴之　遠路の使大儀に存ずる、予が國を出る時より時鳥が有樣、なき命とは思ひながら左樣の最期を遂げんとは、心附かざりし、して、時鳥が法名は、葦實結枯信女とは申さずや。

彌惣　こは思ひがけなきその仰せ、我君樣にはその法名、如何いたして御存じありしか、御意の通りその法名は、卽ちこれに（ト持來りし箱を見てびつくりし）。やゝ國元出立の砌より片時も身を放さず、封もそのまゝありながら、御位牌の見えざるは心得難し。

巴之　こりや、その位牌これであらうがな。（ト見せる。彌惣太見ておどろき、）

彌惣　まことに我持參せしはその御位牌、いかゞいたしてあなたのお手へは。

巴之　その不審尤も至極、汝のこれへ參らぬ先早時鳥このところに來り、これなる逢州と申す傾城は、

かの時鳥が姉故に、絶えて久しき面會のその折から、國元より其方が參りしに、そのまゝ消えて行き方は亡き魂の後に殘りしこの位牌。

彌惣　扨はこなたが、時鳥の方の姉上とな。

逢州　お目もじ致すもお恥かしいこの身の上、時鳥の方こそ私の實の妹、測らずも名乘り合うた甲斐もなく、淺ましい妹の成行き、かういふことであるならば、逢はぬ昔が增ならんに、なまなか顏を見た故に、思ひは以前に百倍して、私や術なうござんすわいな。(ト泣伏す、巴之丞も淚を拭ひ。)

巴之　あゝ歎くは愚痴のなすところ、生あれば必ず死す、おそかれ早かれあだし野の露となる身は皆同じ宿世の約束、因果の道理、凡慮を以て解くべからず、たゞこの上の營みは追福こそ肝要ならん。

彌惣　仰せの通り、淚は佛の爲めならねば、逢州どのにも共に菩提を。

ト彌惣太立上り、文車を出し、香爐をなほす。巴之丞この上へ件の位牌をいたゞいて置く、この内逢州立上つて手水を使ひこちらへ來り、

逢州　あの世の苦患助くる爲め、姉が手向の妹へ回向。

ト三人位牌に向ひ、各自香を盛ることあつて、

巴之　葦實結枯信女頓證菩提。

三人　南無阿彌陀佛々々。

ト回向の思入、ドロ〳〵になり、花車火の車になり、兩輪くる〳〵と廻る。三人きつと見て、

巴之　はて心得ぬ、四季の造花にえん〳〵と焰盛んに立上るは、焦熱地獄を目のあたり、

彌惣　牛頭は牡丹の異名にして、風も無常に吹き誘ふ、散花はまさに大紅蓮。

逢州　手向にあらぬこの花の、見る目いぶせき有樣は、罪の重荷の花車。

巴之　廻る因果は兩輪の如く、

彌惣　百合撫子の散亂なすは、

逢州　色香を妬む煩惱の、

巴之　とりもなほさず犬櫻、

彌惣　心の鬼が身を責めて、

逢州　この世からなる呵責の責苦。

巴之　奇異なことを、

と巴之丞ずつと立上る、彌惣太はゐながら刀の鐺をとんと突く、双方見あつて木の頭。

三人　見るものぢやなあ。

と花車次第に燃え上へ舞ひあがる、三人これを見上げて引張りの見得、大ドロ〱にてよろしく、

ひやうし幕

五幕目

五條坂甲屋の場
同逢州殺しの場

「役名──男達御所の五郎藏、星影土右衛門、甲屋與五郎、五郎藏子分、土右衛門子分。傾城さつき、同逢州、其他。」

(五條坂廓の場)──本舞臺正面に江戸町の門、向うへ斜に大格子、遊女屋の片側遠見、門の上手に常足の二重屋體、その正面に甲屋といふ柿色の長暖簾、軒口に同じ掛行燈、下手は同じく茶屋の前側、青簾をかけ軒々に柳屋といふ掛行燈、平舞臺には毛氈をかけし長床几を二脚列べあり、總て五條坂廓の體、こゝに按摩ひよろ市杖を振上げ、臺の物を頭へ載せ、提灯を持つてゐる臺屋の若い者、佐郎八を打たうとしてゐるを、甲屋の若い者喜助留めてゐる、この見得吉原雀の唄にて幕明く、

佐郎　やい〱、何でおれに突當りやあがつた。

ひよ　馬鹿なことを言はつせえ、こつちは盲目で目が見えねえぜ、何故突當つたもねえものだ。

喜助　これさ〳〵、ほんのそりやあ出合頭だ、二人とも了簡しなせえ。

佐郎　いゝや了簡ならねえ、目が見えねえと言やあこつちもまた、頭へ臺を載せて歩きやあ、向うは見えやあしねえわえ。

ひよ　臺を載せて向うが見えざあ、手引を連れて歩くがいゝ。

佐郎　べらぼうめ、臺屋の持出しが、手引を連れて歩かれるものか。

喜助　これさ、人が留めるのにいゝ加減にしねえのか。向うばかり悪いといふわけでもねえ、何をいふにも相手は盲人だ、こつちでよけてやりあいゝのに、擔ぎつけねえから起つたことだ。又按しうも強情をいひなさんな、中へはひりやあ中の者に任せにやあならねえが、そこが生業だ、さあさあ了簡して行きなせえ。

ひよ　なに、私アどうでもようございますが、どこの國にかあの臺を、人の頭へぶッつけておいて言草を附ける奴があるものか、こんな瘤までこしらへやあがつた。（ト額の瘤を見せる。）

喜助　なに、額へ瘤ができた、どれ見せなせえ、こりやお前先からぢやあねえか。

ひよ　それぢやあ、お前この瘤を知つてゐなさるか。

喜助　知らなくつてどうするものだ。

ひよ　え、膏藥代にでもしようと思つたに、知つてゐられては三文にもならねえ。

喜助　慾張つたことを言ひなさんな。

佐郎　そつちやあそれでよからうが、こつちやあ手前に突かゝられ、鍋の汁をすつかりこぼした、これなりぢやあ持つて行けねえ、

喜助　それも按じうが突かゝつて、それでこぼしたといふ譯ぢやあねえ。全體擔ぎつけねえからだ、いつでもお前の持つて來るのは、汁のこぼれねえことはねえ。

佐郎　ほい、こいつもへこんだ。

ひよ　そのへこんだ所へ、この瘤を上げようか。

佐郎　やかましい、手前の知つたことぢやあねえ。

喜助　何にしろ、あたつてこぼれると言ふのは縁起がいゝ、こゝは目出度く笑つてくんなせえ。

佐郎　笑はねえでどうするものだ。

ひよ　男は當つて碎けろだ。

喜助　それぢやあ一ばん〆やせう。

三人　よい〳〵〳〵。（ト三人手を拍ち、）
佐郎　こりやあ大きに、
兩人　お世話になりました。
喜助　さあ〳〵、早く行きなせえ〳〵。
ひよ　ときに、仲なほりのお酒はえ。
喜助　後に來ねえ、一ぺい吞ませよう。
ひよ　それは有難うござりまする。（ト言ひながら手を延ばして、臺の物の慈姑をつまんで喰ふ。）
佐郎　これさ、何をするのだ。
ひよ　ちよつと手が障つたのだ。（ト口へ入れ、）この慈姑はめつぽふに、
佐郎　何だと、
ひよ　あんまあほり。
喜助　いや、意地のきたねえ奴だ。
　トひよ六市は上手、佐郎八は下手へはひる。雨車になり、喜助思入あつて、
おや、いつのまにかばら〳〵降つて來た、きついこともあるめえが、中庭へふつかけるだらう、

どれ、雨障子をかけて來ようか。

ト上手の屋體へはひる。本釣鐘、雨吟の唄にて、花道より星影土右衛門大小下駄にて蛇の目傘をさし、あとより素兵太、多九六、五平次、喜六太等對の衣裳一本差し下駄にて、紋盡しの番傘をさし出來る。これと同時に東の假花道より御所ノ五郎藏着流し一本差し、下駄にて蛇の目傘をさし、あとより梶原平太、荒藏、秩父の重介、太郎次等對の衣裳一本差し下駄にて、紋盡しの番傘をさして出來り、双方花道へ留り思入あつて、

土右 筑波ならひを吹きかへす風肌寒き富士南、上野の鐘の音も曇る雨の蓑輪の里越えて、田の面に落つる雁の聲、

五郎 空も朧に薄墨の畫に描く狀の待乳山、花を慕ふか夕汐に、上手へ登る白魚や二挺櫓立てし障子船、

土右 三枚肩の垂駕籠も足並揃ふ衣紋坂、横に田中を見返りの柳の巷花の里。

五郎 名に大門を潜りては、闇も月夜の五丁町、浮れ鳥のかしましく、塒に迷ふ格子先。

素兵 見世すがゝきにひきつれて、

梶原 内證の鈴か六法を、

多九 ふつてふり出す星影組、

荒蔵　横に車の御所紐も、
五平　牛は牛づれ、馬は馬、
秩父　手綱とりんぼ地廻りに、
喜六　貸編笠の燒印も、
太郎　丸くは行かぬ男達、
土右　角だつ心も色酒に、和らぐ廓の春景色、
五郎　梅も櫻に植ゑかへて、まさる眺めの仲の町、
土右　誰待合の辻かけて、やがて由縁の花菖蒲。
五郎　軒の燈籠八朔に、白きが目立つ菊花壇、
土右 子分　四季にたえせぬ花の中、(ト土右衞門の子分等。)
五郎 子分　物言ふ花の全盛に、(ト五郎藏の子分等。)
土右　引かれて廓の色遊び。
五郎　はて、面白き、
兩人　眺めだなあ。

ト唄になり、双方本舞臺へ來りて行逢ひ思入あつて、入替り、土右衞門の子分上の方へ行き、五郎藏等は下手へ來る。

土右　あいや、ちよつと待つて貰ひたい。

五郎　待てといふのは、私がことかえ。

土右　いかにも、その方だ。

五郎　して呼び留めたは、何ぞ用かえ。

素兵　おゝ用があるから呼んだのだ。

多九　何も恐れることはねえ。

五平　手荒いことはしねえから、

喜六　ぶる／＼せずと、

四人　こゝへ來やれ。

梶原　何の用か知らねえが、

荒藏　そつちへ行く足はねえ。

秩父　用があるなら三拜して、

太郎　こつちへ出て來て、
四人　用を言やれ。
素兵　やあ、素町人の分際で、武士に向つて來いとは失禮。
梶原　失禮とは何が失禮、用があるなら來るが禮儀だ。
多九　ところを呼ぶがこつちの意地づく、
荒藏　そこを行かぬがこつちの意地づく、
土右
子分　さう言やいつそ、
五郎
子分　何をこしやくな。（ト双方の子分立ちかゝるな、土右衛門思入あつて、）
土右　こりや騷がしい、控へぬか。
五郎　これ、手前達も靜にしろ。（トこれにて子分等控へる。）
土右　いや、來いといふのも失禮だが、とあつてそこへ行かれもせぬ。
五郎　そんならこりやあ、五分々々に、
土右　双方一緒に、
兩人　でかけようか。（ト兩人前へ出て顏を見合せ、）

五郎　や、こなたに。

土右　姿形は替れども、替らぬ面相、須崎角彌。

五郎　昔を捨てた大小に、姿替らぬ星影土右衛門。

土右　以前は互ひに淺間家で、

五郎　同席なせし古朋輩、

土右　袖の渡りの花見の時、

五郎　別れたまゝで七年越し、

土右　再び廻り逢ふ場所も、

五郎　花の頃なる五條坂、

土右　思ひ廻せば二人とも、

五郎　花に縁ある、

兩人　出逢ひぢやなあ。

五郎　して又、星影殿には何用あつて、私を呼留めさつしやつた。

土右　いや呼留めたのは外でもねえ、久しぶりにて逢つたこなたに。出逢ひ早々角だつて憎まれ口も利

きたくねえが、言はねばならぬはこれになる身共の子分が先達、この廓にて出逢ひし時、こなたの手篭に逢つたとやら。

素兵　よくもその時おいら達を、蹴たり踏んだり、踏んだり蹴たり、

多九　蒟蒻玉を見るやうに、よく酷い目に逢はしたなア

五平　それもこつちが弱い故、今日まで默つてゐたけれど、

喜六　今日は頭が一緒故、一番言はにやあ、

四人　ならねえわ。

五郎　むゝ、そんならいつぞや殿樣へ、無禮をしたはこなたの子分か。

土右　如何にも身共へ從ふ者共。

五郎　すりや打たれたを遺恨に思ひ、

梶原　その仕返しなら頭より、おいら達が丁度幸ひ、

荒藏　此間からどこぞでは、喧嘩をしようと思つた奴等、

秩父　こゝで逢つたは丁度幸ひ、そつちも頭が後立なら、

太郎　こつちも頭を後立、命をかけて、

四人　勝負をしようか。

五郎　えゝ又しても入らぬ口出し、手前達の力は借りねえ。

四人　それだと言つて、

五郎　えゝ、すつこんでゐろといふに。

四人　えゝい。（ト後へ下る。）

五郎　いや土右衛門殿、こなたの子分と知らなんだが、おうさきるさも避け合うて、通るが色にやはらぐ里、直な道をば横に行く、心の曲つたもくざう蟹、泡を吹かしてやつたのを、それを遺恨に一つ穴、蟹大將が出て來たら、後へは引けぬ御所の五郎藏、七年此方恨みがあらう、こゝで存分晴らしなせえ。

土右　いや、それは大きな了簡違ひ、今こなたを呼留めたは、恨みどころか禮を言ふのだ。

五郎　なんと。

土右　人の入込む遊所にて喧嘩口論いたすなと、堅く言ひつけおくけれど、今もこなたの言ふ通り直には行かぬもくざう蟹、持つて生れた夾剪故、やゝともすると亂暴狼藉、よくもその時足手をば、もがれぬのが彼等の仕合せ、仕返しどころか禮を言ふのだ。

五郎　むゝ、禮を言ふとは皮肉な言葉・現在子分が打たれたを、頭と言はるゝこなたがおれに、禮を言ふと言ひなさるのか。

土右　この上ともに又候や、惡いことがあつたらば、以後の見せしめ懲らして下され。

五郎　曲つたことでも子分なりや、肩を持つのが當然、そこを言はずに眞直な、いゝせいふは何か心があらう。

土右　さすがは五郎識よく察した、人思ひ内にあれば色外に現はるゝと、いかにも土右衛門心あつてしたこと。

五郎　して、その心は。

土右　以前は淺間の奥勤め、こなたと竊に通じ合ひ、不義の科にて暇の出た杜鵑花も今は流れの勤め、その身を飾る花形屋で、やはり杜鵑花といふとのこと。

五郎　なんと。

土右　まだ腰元のその時分、心をかけしもそなた故、情なくされし遺恨により、袖の渡りで不義を露はし、首尾よく科には落したが、つひにこの身も共に追放、それより二人夫婦となり、主ある花に打過ぎしが、今傾城となる上は夜毎に替る枕の數、誰に遠慮もなき身の上、然し廓の方言に惡足ともいふそなた故、一應念を突いておき、今日から身共が相方に、いたすからさう思へ。

五郎　むゝ、貧に迫つて千人の客を取るのも合點で、賣つた女房杜鵑花だから、呼ぶなら勝手に呼びなせえ、それもその身に差合のある客には出ぬが廓の習ひ、お氣の毒だが座敷ばかり、名代買つて遊びなせえ。

土右　その名代は百も承知、二百三百まだなこと、千兩積んでも身請をなし、連れて行つたら仕方があるまい。

五郎　そりやあ賣物買物だから、身請されりやあ仕方もねえが、杜鵑花が判方亭主の五郎藏、私がうんと一言言はにやあ、身請をしても女房にさせねえ。

土右　それだによつて遺恨も言はず、五郎藏そちへ土右衛門が、渡りをつけて貰ひたい。

五郎　そりやあおれが芋掘りか、穴掘りならば遣りもせう、惡事千里の虎か雨、捨身のふつたその晩は、而も四月二十八日、曾我兄弟が討入りに似た喧嘩から名を賣つて、渾名に呼ばれる御所の五郎藏、人に達師と立てられた、面を賣るだけ遣られねえ。

土右　むゝ、望みかゝつた杜鵑花をば達師故にくれぬとは。

五郎　されば、こなたの子分をこの間おれが存分打つた故、仕返しされるを恐れてか女房をやつたと言はれては、この五郎藏の男が立たぬ。遣つてほしくば仕返しから、まづ先へして貰ひませう。

土右　杜鵑花の縁に連る故、情をもつてそのまゝにいたしくれるをそつちから、仕返しせねばくれぬとは。

五郎　杜鵑花をやるもやらねえも、結納替りの命のやりとり、それから先へしようかい。

土右　いや面白いその言葉、望みとあらばこの場にて、

五郎　扇の骨のばら／＼に、

土右　互ひにその身を引破るか。

五郎　又は素直に柳樽。

土右　丸くをさめて別るゝか。

五郎　善悪二つは、

土右　女蝶男蝶、

土右子分　相手に負けぬ勝男節、

五郎子分　錫の足腰へしをつて。（ト兩方の子分又立ちかゝる。）

五郎　これ／＼又してもく、この仕返しは相手と相手、

土右　手前達は後に控へ、それから見物、

兩人　してゐやれ。

皆々　それだと言つて、

兩人　えゝ、控へてゐやれ。

皆々　むゝ。(ト控へる。)

五郎　さあ、邪魔は拂つた、

土右　遺恨の仕返し、

兩人　いざ〳〵〳〵。

ト兩人立ちかゝる、この時後ろへ甲屋與五郎、茶屋の亭主の打扮にて出て、

與五　あもし、暫く〳〵、暫くお待ち下されませ。

土右　やあ、留だていたすその方は、

五郎　この甲屋の息子どの。

與五　へい、いかにも甲屋の與五郎でござります、様子は殘らず承はりました。

土右　聞いてもゐようが、入らぬ留立て、

五郎　怪我せぬ内に退いて下せえ。

與五　そこをどうぞ私に、暫くお預け下さりませ。

兩人　むゝ(ト又意氣ごむを、與五郎留めて、)

與五　お待ちなされて下さいませ。

土右　待てといふなら待ちもせうが、

五郎　何故、留立て、

兩人　しやるのだ。

與五　何故とはお二人さん、それはちと無理なお言葉、どうまあこれを私が、見て見ぬ振りにをられませう。以前は一つお屋敷に魚と水との御朋輩、それも戀路の不義の科、その身にかゝる網の目を脱れて程も七ケ年、水の流れの五條坂廻り廓の出逢さへ、初會といへど根が馴染、指や髮なら知らぬこと、人を切つたら人殺し、喧嘩に勝つても御法には勝たれぬ掟も御存じなれど、大方そこらは高島屋(小團次)の高をくゝつてなされうが、それでは命の尾張屋(三十郎)故、飛んではひりし扱ひもまだ小雀の私が、出過ぎたことゝお叱りも返り三升に三階松、頼りに思ふお二人故、どうか事なくをさめ度く、さしづめこゝらは音羽屋の、太夫(菊次郎)が留めねばならぬのを、名代新造新米の、私ではない御贔屓の何れも樣へこの仕返し、どうぞ預けて下さりませ。

トよろしく思入、兩人もこなしあつて、

土右　むゝ、事をわけたるそちが言葉、もとより事は好まねど、賣る喧嘩なら買はねばならぬ。

五郎　そのいきさつは同じこと、なるたけ避けて通れども、買ふ喧嘩なら賣らねばならぬ。

與五　その賣買も裏約束、再びお出逢ひなさるまで、

土右　そつちが預ける心なら、

五郎　こつちも否やは言はぬ心、

與五　そんなら、この場を私へ、

土右　どうで遺恨は殘れども、

五郎　春の始めの出逢ひ故、

與五　お預けなされて下さりますか。

土右　今日始めての其方故、

五郎　花を持たして、

兩人　預けてやらう。

與五　えゝ有難うござりまする。

素兵　喧嘩になつたら彌次馬に、

多九　仕返しせうと思ひのほか、

梶原　甲屋故に生死も、

荒藏　なくて命の拾ひもの。

與五　そのお目出度にあつさりと、一つ上つて下さりませ。

土右　むゝ、躓く石も緣の端、其方が二階で一ぱい汲まうか。

與五　それは有難うございまする。さあ、御所親方もとも〴〵に、

五郎　お志しは忝ないが、ちつと脫れぬ用事があれば、

與五　ではございませうが、ちよつと一つ。

五郎　今日はお前に預けませう。

土右　飮まぬとあらば、えい。(ト扇を打ちつける、五郎藏受留めて、)

五郎　これは。

土右　末廣といふ名をめでゝ、時にあふぎの杯代り、

五郎　むゝ、逆さにすれば富士見酒、この杯は御返杯、(ト土右衛門へ打ちつける、土右衛門受留めて、)

土右　返杯たしかに受取つた。

與五　これでこの場の仲なほり。

五郎　そんなら土右衛門、

土右　御所ノ五郎藏。

兩人　その内逢はう。

ト双方又立かゝるを與五郎中央へはひり留める。子分皆々紋盡しの傘をかつぎ前へ列ぶ、この見得唄にて、よろしく道具廻る。

（甲屋奥座敷の場）――本舞臺常足の二重屋體、正面床の間袋戸棚、違ひ棚、上手一間障子屋體、いつもの所枝折戸、下手建仁寺垣、總て甲屋奥座敷庭口の體。こゝに仲居おなか、おます下女の打扮にて吸物膳を拭いてゐる、傍に喜助立つてゐる。

喜助　おなかどん、とんだお客が舞込んだの。

なか　さうさ、やかましさうなお顏だね。

ます　あの頭々といふ人は、つひに見ない顏だけれど、彌次馬の四人はよく仲ノ町で見る顏だね。

喜助　あの四人は此間も、良治様へ喧嘩を吹つかけ、五郎藏さんに毆られた星影組とかいふ奴だ。
なか　どうで終ひはぶう〳〵だから、喜助どん覺悟をおしよ。
喜助　どうして〳〵、おいら達の手にやあいかねえ、あゝいふ人は女のことだ。
ます　そんなことはまつぴらだよ。（トこの時奥で手を打つ。）
なか　それ、お手がなるよ。
喜助　こいつァやかましいお屋敷だわえ。（ト奥へはひる。）
ます　おなかどん、逢州さんがおいでなさんしたぢやないかえ。
なか　あい、殿様のおいでのないので、久しく引込んでゐなさんしたが、今日は心持がよいと言うて、先刻おいでなさんしたわいな。
ます　杜鵑花さんはおいでなさんせぬかえ。
なか　今に杜鵑花さんもおいでなさんして、家の親方を相手にして、合せ物をしてお遊びだとさ。嬉しいぢやないかえ。
ます　他の客がおいでゞないといゝねえ。
なか　そんなことをいふと、親指に叱られるよ。（ト又奥にて手をたゝく。）

兩人　あい〳〵。

ト言ひながら膳を持ち奥へはひる。引違へて奥より杜鵑花、後より喜助出來りて、

さつ　これ喜助どん、私に逢ひたいと言はしやんすは、馴染のお客でござんすかえ。

喜助　いえ、お初會でござりますが、是非御目にかゝりたいとおつしやつてござりました。

さつ　さうしてそれは、何處のお方でござんす。

喜助　何處でござりますか、私共へも今日初めてゞござりまする。

さつ　そんな知らぬお方なら、斷つて下さんせいな。

喜助　如在なく斷りましたが、どうしてもお聞きなされませぬ。

さつ　さうしてそのお方は、町人衆かえ。

喜助　いえ、お屋敷樣でござりまする。

さつ　今日は折角逢州さんと、遊ぶ約束でござんすから、親方によいやうに斷つて下さんせと、さうい うて下さんせ。

喜助　畏りました、まづさう申して見ませう。(ト奥へはひる、後を見送りて、)

さつ　これ喜助どん、五郎藏さんは來なんだかえ。これさ、五郎藏さんは來なんだかといふに、耳の遠

いゝ人だの。それはさうと、お武家さんで、私を名指しで逢ひたいとは、何處のお方でござんすか。

ト思入、奥より土右衛門出來り、この時前へ出て、

土右　誰でもない、身共だ。

さつ　え、さうおつしやるは。（ト土右衛門の顔を見る。）

土右　見忘れたるか。

さつ　はて、誰さんでござんしたか。

土右　おぬし故に浪々せし、身共は星影土右衛門だ。

さつ　えゝ、（トびつくりなし、よく〳〵見て、）ほんにお前は土右衛門さん、思ひがけない、どうしてこゝで。

土右　いや、どうしてとは情ない、おぬしに逢ひたいばつかりに。

さつ　むゝ。（ト思入あつて行かうとするを、土右衛門裾を捉へて、）

土右　まあ下にゐやれ。

さつ　私や、ちつと。

土右　はて、用もあらうが久しぶり、まあ下にゐてくりやれといふに。（トきつといふ、杜鵑花是非なく下に

ゐろ、（土右衛門思入あつて、）これ、杜鵑花、忘れもしまい七年後袖の渡りの花見の時、おぬしと角彌が密通を、見顯はしたはこの土右衛門、嘸や無念であつたらうが、それも深き心あつて角彌をその場で切腹させ、おぬしは女のことなれば遠山尼公へ命を乞ひ、我手活に手折らんと思ひし花も落花微塵、深山おろしの風もろとも皆散々になつたれど、長の年月一日でもおぬしを思はぬ日とてはなく、廻り逢ふべき時がなと思ふ心が屆いてか、このほど歌の中山より清水越で計らずも、花の木蔭でおぬしを見かけ、以前に替る姿故合點行かずと思ひしに、あれこそ廓で名の高き花形屋の杜鵑花なりと、供に連れたる素兵太が話に聞いて飛立つ思ひ、人の譏りも顧ず、こゝへ名指で呼んだのは、七年此方土右衛門が胸の思ひを晴らしたさ。かほど切なる心根を不便と思うてこれ杜鵑花、やさしき返事を聞かしてくりやれ。（ト思入あつて言ふ、杜鵑花ぢつと思入あつて、）

さつ　嘘僞りか知らねども、足らはぬ私をさほどまで、思うて下さるお志し、身にあまりたることながら、館にありしその時に、そのお心を知らぬ先、須崎角彌どのと言交し二世の約束せし故に、兎やかう言うて下さんしたも、主あるこの身に是非なくも、お前に情なくあたりし故、嘸や憎うござんしたらうが、たゞ何事も水にして、堪忍して下さんせいな。

土右　何しに憎う思はうぞ、情なくされゝばされるほど、思ひの増すが戀の情、以前は兎もあれ今にて

は、引手になびく勤めの身、今もおぬしが言ふ通り、過ぎたることは水にして、今日から改め土右衞門を、おぬしが客にしてくりやれ。

さつ　浮き川竹の勤めの身、夜毎に替る客の數、誰のかれのはなけれども、お前は客にならぬわいな。

土右　なに、身共が客にならぬとは。

さつ　さあ、昔引かれし袖を拂ひ、今勤めの身となればとて、又その人に隨うては私ばかりかお前の恥。

土右　なんと。

さつ　情なくされしも金故に、自由にしたと言はれては、お名の穢れとなりませう、廣い世界に私ばかり女といふでもござんすまい。軒を列ぶる全盛の遊女を呼んで遊ばしやんせ、それが却て通り者、粹とやらでござんすぞえ。

土右　いや、その異見聞きには來ぬ。假令楊貴妃小町の再來、いかなる美女でも心はかけぬ。一旦がうと思ひし杜鵑花、人に笑はれ譏られても、恥は厭はぬ厭ひはせぬ。色よい返事を聞かしてくりやれ。

さつ　くどうお前が言はしやんしても、こればつかりはならぬわいな。

土右　ならぬといふは聞えぬぞよ。これが五郎藏を突出して縁を切れといふならば、そりやお厭といふ

もいゝが、たゞ一夜の契りなら、得心してもいゝではないか。

ト此内杜鵑花ぎつくり思入あつて、

さつ　その五郎藏といはしやんすは。

土右　隱すに及ばぬ、最前も仲の町にて出逢つたは、須崎角彌が變名して今男達の頭となり、御所ノ五郎藏といふことは、疾うに聞いておいたるわ。以前は亭主があるにもせよ、夜毎に替る枕の數、操を捨てし上からは誰と契るも同じこと、女房になれといふではない、假の契りの一夜妻、是非とも客にいたしてくりやれ。(ト思入、杜鵑花腹の立つ思入あつて、)

さつ　そりやお前でもござんせぬ、以前は淺間の御近習故、青表紙の端ぐらゐは御覽のこともあらうのに、露聞きわけて下さんせぬは、さりとは聞えぬ土右衞門さん、堅いことを言ふやうなれど、女は道を歩くにも人に顏を見らるれば、袖をかざして恥づるが習ひ、それに引替へ川竹の流れに沈む身の上は、思ふ思はぬへだてなく馴々しく物語り、身は千人に指ざゝれ、あれこそ何處の何といふ遊び女なりと言はれるを、それを却て悅んで、仇し仇波仇めきし浮名の末に殘るのを、それを譽れとするはかなさ、こゝをよく聞分けて下さんせ。斯くまで罪の深みどり、松の位と云はるる身も、女は同じ女にて操を捨てゝ操がござんす、上邊は浮いた心でも外の夫を重ねぬが、それ

土右　此が勤めの習ひにて、館にゐたるその時より、言交したる五郎藏どの、長の病ひに活計に迫り、の身を苦界に沈めしかど、つひに一度帯紐を解いたことなきこの杜鵑花、まして恨みのあるお前、何で枕が交されう。よう考へて見やしやんせいな。（トずつけり言ふ、土右衞門むつとなし。）
土右　以前に替る勤めの身に、手練手管の功を積み、口がしこくもその言譯、斯なる上は男の意地、否でも應でも從はせるわ。
さつ　そりや又どうして。
土右　はて、いふまでもない、高が遊び女、金を積んだら何とする。
さつ　え。
土右　假令千金萬金でも、金にあかして身請をしたら、よもや厭とは言はれまい。
さつ　そりや言はいでも知れたこと、金で買はれる勤めの身、請出されたら仕方もないが、お前の自由にやならぬぞえ。
土右　なに、ならぬとは。
さつ　私や生きてはゐぬ覺悟、その氣で身請しなさんせ。
土右　すりやそれまでに。

さつ　色と情を賣る身故、腹の立つのも笑ひにまぎらし、事譯言ふを聞入れず、身請するならしなさんせ、お氣の毒だが早桶で、

土右　なんと。

さつ　お前のところへ行かうわいな。

トずつと立つて行かうとするを、土右衛門裾を押へる。さつき鼻紙で土右衛門の顔をぴつしやり打ち、土右衛門どうとなる。これをきつかけに唄になり、杜鵑花振拂つて奥へはひる。土右衛門後を見送り、無念の思入、奥より以前の素兵太、多九六、五平次、喜六太出來りて、

素兵　頭、様子は奥で聞きました。いかに廓の意氣地とて、さりとはしぶとい杜鵑花が言葉、所詮あれでは五郎藏に心中を立つて、おいそれと從ふ心はござりませぬ。

多九　とあつて無理に身請をなし、杜鵑花に命を捨てられたら死人を引取り厄介物、どうか手段はあるまいか。

五平　その手段は手短かに、五郎藏をば殺してしまひ、言交した男がなくば、去る者日々に疎しの譬、

喜六　金になびくが女郎の習ひ、うつて替つてお頭に、從ふ心にならうも知れぬ。

素兵　兎に角邪魔なは五郎藏だが、彼奴は名うての腕利なれば、我々共が手際では、所詮討取ることは

できぬ。

多九　地獄落しの鼠のやうに、手間暇いらずばつさりと、いはせる思案はないことか。

土右　いや、その思案には及ばぬわ。意地づくならば死人でも身請をせまいものでもないが、身請するには何百兩、唯取る金でもこれも無駄、思案しかへてこれからは、何と言はうと打捨てゝ、一度が二度と度重なり、情と義理をわけたなら、なんぼ情ない杜鵑花でも、そこが浮世の人情になびく心にならうも知れぬ。

素兵　そんなら頭は氣を長く、情なくされるも合點で、

多九　それを厭はずこれからは、足をば近く通ひつめ、

五平　義理と情のしがらみに、

喜六　口説きおとすお心か。

土右　一旦かうと深草の深くも思ふ上からは、九十九夜はおろかなこと千萬日振られても、それを厭はず通つたら、義理にも厭とはいふまいかい。

素兵　それでも、達つて意氣地を張り、

多九　頭の心に從はずば、

土右　はて、その時は金を積み、死人を承知で身請なし、我一分を立つるのみ。先づそれまでは氣を長く、

四人　それより、いつそ手短に、

土右　はて、きをりで行かぬが、(ト刀を突くを道具替りの知らせ、)戀の道ぢやわ。

ト唄になり、よろしく、この道具廻る。

(元の店頭の場)――本舞臺元の店頭の道具にもどる。こゝに杜鵑花煙管を杖に物思ひの思入、五郎藏腰をかけ煙草を喫みゐる。

五郎　これ、杜鵑花、今日はとんだ奴に出ッくはした。

さつ　とんだ奴とは、それや誰に。

五郎　袖の渡りで別れたる、星影土右衛門に出逢つたが、今は彼奴も達師となり、子分の喧嘩を言ひがかり、おぬしをくれとおれへの頼み、やるやらないの爭ひから、ゝゝすでに命も捨てるところ、こつちの主人が扱ひで、その場はそのまゝ別れたが、大方おぬしを呼んだらうな。

さつ　あい、今日はこゝで逢州さんと遊ぶ積りで來たところ、思ひがけなく奥座敷で、先刻逢うたら私を捉へ、以前のことから列べたて達つて心に從へと、どう言ひ拔けても聞入れず、面の憎さに言ひたいがい、恥ぢしめてやつたわいな。
五郎　彼奴も心の惡い奴、おぬしがとこへ來る上は、閾を跨げば七人の、敵のあるその上に又一人敵のふえたこの五郎藏。
さつ　常から氣早なお前故、腹も立たうがなるたけは、蟲を悕へて下さんせ。案じゐせゐかこの頃は、顏の色が惡いぞえ。
五郎　顏の色も惡からうか、命を捨てゝも追附かねえ、今日につゞまる難儀がある。
さつ　え、そりやまあ何でござんすか、左樣の事があるならば、何故に言うては下さりませぬ。
五郎　おぬしに言ふのも知つてゐるが、苦勞に苦勞をかけるが不便、それで今日まで言はなんだ。
さつ　どんな事かは知らねども、とも〳〵苦勞をするのが女房、譯を聞かして下さんせいな。
五郎　譯といふのは外でもねえ、先達より殿樣の揚代金の滯りが、花形屋に丁度白兩、何をいふにもお大名、どれほど金の入るものやら御存じない故そのまゝに、撫子姬の狂死より菊ケ谷へ引籠り、廓へおいでなされぬ殿樣、日々催促に困れども、役人衆へ言はれもせず、こゝが御恩のおくりど

こと花形屋を受合つたが、五日延び七日延びこの間から延び〳〵に、その日限も今日限り、今朝から才覺してゐれど、力づくにも腕づくにも出來ぬものは金ばかり、今夜中に返さねば明日から廓へ顏出しのならねえのみかお屋敷へ、花形屋から催促でもされた日には不忠の不忠、どうしたものと思案にあまり、實はおぬしへこの事を相談かけに來たけれど、おれ故廓へ身を沈め、辛い勤めに輪をかけて、苦勞かけるが氣の毒に、口まで出たが言はずにゐたのだ。

さつ　さういふ事なら何故早く、私に言うて下さんせぬ、どうか仕様もあらうのに、言うて返らぬことながら、外の者ならお客から無心を言うても百兩や、二百兩出來ぬ事はなけれども、夜每に替る勤めさへ心の帶紐解かざれば、とりとめて來る客もなく、無心を言はう當もなし、年でもあらば親方へ、話しもなれどこれも又、度々年季を增したれば、又その上は言はれもせず。

五郎　その算段の出來ぬのも、元はと云へば皆おれ故、餘計な苦勞はかけまいと思つたけれどこの金が、出來ねえ日にはお主へ濟まず、生きても死んでもゐられぬ身體、いつそのくされ切取りを（ト思入あつて、）惡い心を出しても見たが、誰が難儀も同じこと、我身に我身で異見をなし、思ひとまれどいゝ、ぢみちでは、所詮出來ない今宵の切羽、實におらあぼんやりした。

さつ　おゝ尤もでござんす、男を立てるお前故金が出來ねば人の口、お前の名折となることなれば、當

はなければ今宵中に、朋輩衆に賴んでも、どうか仕樣があらうから、短氣を出して下さんすな。

五郎　なに、十九や二十のものぢやあなし、つまらぬことをするものか、おれもこれから夜通しに、出來ねえながらも算段するから、それぢやあどうかおぬしの方でも、百ができずば半分でも、都合ができればしてくりやれ。

さつ　今宵といふても暮れたばかり、一寸延びれば尋とやら、どうか都合ができようから、必ずきなきな思はずに、一廻り廻つて來なさんせ。

五郎　それぢやあ後に廻つて來るから、いなやの返事を聞かしてくりやれ。

さつ　吉左右待つてゐなさんせ。

五郎　あゝ、嚊大明神だ。

さつ　えゝも、よい氣な、それどころかいな。

五郎　實におらあをがんでゐるよ。トこの時素兵太、多九六窺ひ出て、

兩人　うぬ、五郎藏め、

ト切つてかゝるを身を躱し、ちよつと立廻つて引附けろ、杜鵑花これを見て、

さつ　そりや土右衛門が、

五郎 子分の奴等。

素兵 おゝ、いつぞや打たれた。

多九 仕返しするのだ。（ト振拂つてかゝるを引附け、）

五郎 なに、ちよこざいな。（ト兩人を捻ぢあげ、）そんなら、杜鵑花、

さつ 五郎藏さん。

五郎 （兩人を投退け、）後に來るぞよ。

ト兩人又立ちかゝるを五郎藏きつと見る。これにてへたる、この見得にて道具廻る。

（元の奥座敷の場）――本舞臺元の奥座敷へ戻る。と、琴唄になり、杜鵑花出來り、思入あつて、

さつ あの琴唄は逢州さん、良治樣のおいでがなさに、久しくぶら／＼煩うて、見世を退いてるやしやんしたが、今日はこゝで鬱晴らしに私も遊ぶ積りにて、來ごとは來てもこの苦勞、私ばかりか五郎藏どの、いとしや附添ふ女房にまで言ひ兼ねてのあの苦勞、顏の色も常ならず、どうやら影も薄いやう、日頃短氣な生れ故突詰めたことなさんせうかと、受合つては上げたれど、今宵中にど

うしてまあ、百兩といふ金が出來よう。とはいへ御恩を蒙むりしお主のお爲め夫の賴み、此の身は如何な憂き目に逢ひ命を捨つることありとも、露厭ふ氣はなけれども、操を守る心から心の下紐打ちとけて、語らうこともあらざれば、うきふししげき川竹の流れに沈むは名のみにて、誰に賴まう客もなく、餘所は時めく春ながら、花も咲かざる憂き身ぢやなあ。

ト ぢつと思入、この內上手障子を明け、以前の土右衞門窺ひゐて、

土右　その金身共が、貸してやらう。（ト前へ出る。）

さつ　や、さう言はしやんすは土右衞門さん。そんなら今の樣子をば、

土右　一間の內で聞いてゐた。

さつ　それで私にその金を、

土右　後とも言はず、貸してやらう。

ト 懷より袱紗包みの百兩を出し、杜鵑花の前へおく、杜鵑花これを見て、

さつ　最前とてもあのやうに、愛想盡しを言うた私、恨みこそあれ誼もない夫婦の者へこの金を、お前が貸して下さんすとは、どうも合點が行かぬわいな。

土右　女の淺い心からさう思ふのは尤もだが、思はず來る一間の內障子へだてゝ立聞けば、その身は憂

き日に逢ふとても、夫の爲めには厭はじとおぬしが言ひし今の一言、見上げたことゝ感心なし、切なる心を聞くに忍びず、持合せたるこの百兩、おぬしに貸してやるほどに、これで夫五郎藏が今宵の難儀を救うてやりやれ。

さつ　そんなら私が難儀を見兼ね、眞實お前がこの金を、お貸しなされて下さんすか。

土右　身共も武士だ、二言はない。

さつ　そのお言葉が眞なら、

ト杜鵑花嬉しき思入にて金を取らうとする。土右衞門その手を押へて、

土右　いかに杜鵑花、袖の渡りの花見の時、遠山尼公がそなたに言ひしを、よもや忘れはいたすまい。落花心あれば流水に情あり、おぬしに落花の心あらば我れに流水の情あり、この百兩の金がほしくば、つい一筆さら〳〵と、おぬしが自筆で書いてくりやれ。

さつ　私に書けと言はしやんすは、手形とやらでござんすかえ。

土右　おぬしに貸すは遣る心、なんの手形に及ばうぞ。

さつ　手形でなうて、何を私に。

土右　望みは夫五郎藏へ、離狀書いて貰ひたい。

さつ　えゝ。(トびつくりなす。)

土右　さ、こゝが今いふ譬にて、おぬしに落花の心がなくば、我に流水の情があらうか、金がほしくば切れたといふ、離状書いて貰ひたい。

さつ　むう。(トぢつと思入あつて、これまでといふ思入にて、ずつと立つて行かうとするを、)

土右　杜鵑花、待ちやれ、何の一言返事もなく、疊蹴立つて行くからは、この百兩が入らぬのか。

さつ　むゝ。(トぎつくり思入。)

土右　いやなら止しやれ達つてとは、身共も言はぬが今宵の內、所詮外では出來ぬ金、不便やこれが手に入らずば五郎藏始めおぬしまで、高恩受けし淺間家へ、恩を報ふ時節があるまい。

さつ　え。

土右　さあ、男を立てる五郎藏が、金ができずばのめ〳〵と、よもや生きては居られまい。生かすも殺すもおぬしが心たつた一つだ、これ、杜鵑花、性根を据ゑて返事をしやれ。

ト此內杜鵑花いろ〳〵當惑の思入あつて氣を替へ、土右衞門の傍へ來りて、

さつ　土右衞門さん。(ト寄添ふ。)

土右　何だ。

さつ　さあ、その離狀を書かうわいな。（ト言つて顏を背け、忍び泣きに泣く。）

土右　むゝ、離狀書くといふからは、そんなら緣を切る心か。

ト杜鵑花淚を拭ひ、土右衞門にもたれかゝりて、

さつ　今更そんなことを言はずと、心の知れた女かとお蔑みなさんせうが、實は疾うから五郎藏に、私や愛想が盡きたわいな。

土右　何と言やる。

さつ　愛想の盡きたその譯は、かうした苦界の勤めをするも皆あの人が甲斐なさ故、それもかうなる惡緣とあきらめてはゐるけれど、五年の年季も年々に、二年三年年季を増され、額に波の寄るまでは女郎をせねばならぬ私、一生連添ふ夫故末頼もしいお人があらば、のりかへようと思うたれど、今日の今までこれといふ、お客の無さに過去りしが、最前からのお前の親切、そのお心にほだされて、乘替る氣になつたわいな。

土右　すりや五郎藏に愛想を盡かし、この土右衞門に從ふとか。

さつ　さあ、この百兩を手切にやり、お主へ御恩を送らせて、それを切にさつはりと、緣を切つてしまふほどに、どうぞその金下さんせいな。

土右　おゝ、離狀書いて五郎藏と、緣を切るとあるからは、おぬしにやらいで何とせう。

ト金を杜鵑花の前へ出す、杜鵑花取上げ押しいたゞきて、

さつ　えゝ嬉しうござんす、これでこの身の。

土右　や。

さつ　さあ、お前が好みの離狀を、書くのが切れる證據でござんす。

ト杜鵑花床の間にある硯箱卷紙を持つて來て離狀を書く、此内奧より四人の子分出來りて、

素兵　頭、お目出度う、

四人　ござります。

土右　おゝ皆の者悅んでくれ、七年この方こがれたる、戀がやう〳〵かなうたわ。

四人　こりやしつかりと飮めるわえ。

土右　それ、女どもにさう言やれ。

五平　これ女ども、酒肴を持つて來やれ。

ト奧にて「畏りました」とおなか、おますの聲して酒肴を載せし廣蓋を持來り、

土右　さあ、奧の琴を肴にして、祝ひ酒に一ぱいやらうか。

ト琴唄になり酒宴になる。杜鵑花この内書きかけては、書き損ひしこなしにて引裂き又書く。

土右　杜鵑花、まだか。

さつ　さあ、どう書いてよいものやら、勝手は知れず書きそこなひ、やう〳〵のことで書きましたが、こんなことでようござんすかえ。（ト離狀を土右衛門に渡す、土右衛門受取り開き見て、）

土右　むゝよし〳〵、これでおれが心も晴れた。これ、手前達はこの狀を、五郎藏がとこへ持つて行きやれ。（ト出す。四人思入あつて、）

素兵　そんなら、これを五郎藏のとこへ、持つて行くのでござりますか。

多九　こいつはうつかり行かれぬわえ、彼奴がこれを見る時は、腹を立つは知れたこと。

五平　その意趣返しは使ひの者が、痛い目に逢ふといふのが落だ。

喜六　こりやあ鬮取りでなくちやあいけねえ。

素兵　おれは至つて鬮弱いから、誰彼と言はうより、四人一緒に行かうではないか。

三人　いや、それがいゝ〳〵。

土右　えゝ、意氣地のねえ奴等だなあ。

多九　（向うを見て、）いや、行くに及ばぬ向うから、五郎藏が出かけて來た。

さつ　なに、五郎藏さんが。(ト立ちかゝらうとするを、)

土右　これ、こゝへ來るのは丁度幸ひ、我見る前で五郎藏と、さつぱり緣を切つてしまやれ。

さつ　え、そんなら、こゝで。

土右　それがおれへの心中だ。

さつ　はあ。(ト泣かうとしてぢつと思入、土右衞門杯を取上げ、)

土右　こりや面白く、

四人　なつて來たわえ。

ト皆々酒を飮みゐる。流行唄になり花道より五郎藏出來り、後より花形屋の若い者與助、掛金廻りの帳を持ち、附添ひ出來り、花道にて、

與助　これ五郎藏さん、この間から今日の明日のと幾日になると思ひなさる。お前の方でできないなら、淺間樣の御旅館へ、殿樣に貸したと言つて、表向で行きますぜ。

五郎　此方も分からねえ男ぢやあねえか、それを屋敷へ言はれる位なら、おれがこんなに手を下げてお前達に賴みやあしねえ。

與助　お前の方ぢやあさう言ひなさるが、今日までこつちで待つてるたのは、男を賣るお前だからだ。

外の者なら、なに、待つものか。

五郎　そんなら、明日まで待つて下せえな。

與助　どうして／＼、今夜まで待つたのは極く達引だ、一日のことなおいて半時も待たれない。

五郎　半時も待たれねえとは何のことだ、今夜中と言やあ夜明までだ。

與助　いえ、九つから先は明日の分だ。

五郎　え〻、勘定高いことを言ひなさんな。

ト兩人平舞臺へ來る、杜鵑花これを見て上の方へ泣伏す、五郎藏何氣なく內へ入ると四人立掛り、

素兵　お〻五郎藏か、い〻とこへ來た、今おぬしの所へ、

四人　行くところであつた。

五郎　そりやあ何ぞ用でもあつてか。

多九　用も用、大事の用だ。

五郎　すりや、土右衞門から五郎藏へ、

五平　いや、頭ではねえ、御新造からだ。

五郎　なに、御新造とはゞ

素兵　これを見りやお分かることだ。

ト離狀を五郎藏へ突附る。五郎藏取つて、

五郎　なに、この文で分かるとは。(ト讀下してびつくりし、)やゝ、こりや、杜鵑花からおれへの離狀。

ト合點の行かぬ思入。

素兵　以前はこなたの女房だが、貧乏野郎に愛想が盡き、

多九　牛を馬に乘替へて、今日から頭の情人になり、

五平　身請が濟めば御新造樣。

喜六　そこで、こなたへ離狀だ。

五郎　見れば見るほど違ひなき、杜鵑花が自筆のこの離狀、そんならおれに愛想が盡き、緣を切る氣になつたとか。

素兵　これ五郎藏、牛を馬に乘替へて、緣を切る氣になつたのは、こなたと一生連添へばうだつの上ることがねえ、稼ぎも知らずのそく／＼と、男達の達師のと、面は賣つてもひつてんてれつく。

多九　年中質屋のあげさげに、米は百買ひ酒は一合、玉の輿にも乘られる身で、味噌漉提げて歩いたる擧句の果が荒神松、糊賣婆アが身の終り。

五平　それに引替へお頭の、女房になれば活計歡樂、着物が着たいそれ越後屋、芝居が見たいそれ二丁目(市村座)と、なんでもかでも言ふ日が出るわ。

喜六　こりやあ百人が九十九人、慾を知らねえ者はねえ、乘替へるのが當世だ、腹も立たうが我慢しろ、金が敵の世の中だ。

五郎　(思入あつて、)最前逢つたその時まで、氣振もなかつたあの杜鵑花が、俄に心の替つたは。

素兵　おぬしの意氣地が、

四人　ねえからだ。

五郎　すりや、それ故に。(ト心得ぬ思入、與助前へ出て、)

與助　なるほどこりやあ杜鵑花さんが見限つたのは上分別、まだも少しは算段が出來ようかと思つてた、玉がかへればもうそれまで、金はできぬに極まつた、こりや手短にお屋敷へ。

五郎　これさ、それを言はれてなるものか。

與助　そんなら勘定さつしやるか。

五郎　それだといつて、今直に、

與助　出來ずば屋敷へ行かにやあならぬ。

ト行かうとするを五郎藏留める、杜鵑花こちらへ向いて、

さつ　あ、もし、その金私が上げようわいな。

五郎　や、そちや杜鵑花、そこにゐたのか。

さつ　さあ、お前が頼みの、いやさ、今日から他人となる私、これはお前へ手切でござんす。（ト百兩を出す。）

五郎　なに、その百兩を、手切とは。

さつ　何にも言はずその金を、手切に取つて下さんせ。（ト思入にて言ひ、）私やお前の貧苦に迫り、かひしよのないに愛想が盡き、切れる心になつたわいな。

五郎　そんなら、わりあ眞實おれに。

さつ　さあ、切れる心の證據は離狀、たゞ、何事も、（ト百兩へ思入、）これまでの、縁と思うて下さんせいなあ。

五郎　なんと、（トきつとなり、思入あつて、）どういふ譯か知らねえが、勤めの上の色戀と、譯の違つた二人が仲、假初ながら七年越し、あるのねえのも知り合つて、夫婦になつた仲ぢやあねえか、それぢやあわりあ濟むめえぜ。

さつ　濟むも濟まぬもござんせぬ、お前に一生連添へば樂のできぬ私の身體、苦勞するのは壽命の毒、

襟か裾かは知らねども、行丈揃うた星影さんに、この身を任して一生涯、樂に暮すがこの身の得、脇目で見たら道知らず、義理知らずとも思はんせうが、そこが思案の外とやら、たゞ何事もこの金故。これを手切にさつぱりと、切れる心になつたれば、この末お前の顏見るも、今日を限りと飛鳥川、淵瀬と替るが世の慣ひ、あい、勤めの慣ひでござんすわいな。

なかます　そんなら、ほんまに花魁は、

五郎　おれに愛想が、盡きたといふのか。

さつ　あい、うそに愛想が盡かされうかいな。

五郎　むゝ。(ト口をしき思入。)

土右　なんと、皆見たか、餅さへ喰へば正月と、うから〳〵鼻毛を延ばし、心の替つた女と知らず、やさしい言葉をかけられるを、眞實と思つてゐる中に、突出されるとは間抜な奴、あゝ、見りやあ見るほど馬鹿な面だ。

皆々　むゝはゝゝゝゝ。(ト笑ふ。)

五郎　よもや〳〵と思つたも、そんなら眞實性根まで廓の水が染みこんで、おれを今更突出すのか。さうした心と露知らず、こつちは女房と思つてゐるに、現在おれが恨みある、あの土右衛門に從ふ

とは、言はうやうなき人でなしめが。（トきつとなるを、四人へだてゝ、）

素兵　これさ〳〵、いくら背腹揉んだとて、言交した肝腎の、女が疾うに寐返りだ。

多九　玉がそれたら仕方がねえ、手切の金の百兩を、有難いと押しいたゞき、

五平　三拜九拜辭儀をなし、

喜六　手切を貰つて歸るがいゝ。

五郎　いゝや入らねえほしくねえ、なくてならねえこの金も、手切と聞いちやあ入らねえわ。

トこれにて與助立ちかゝりて、

與助　これさ〳〵、そんな我慢を言はねえで、その百兩の手切を貰ひ、こつちへ勘定したがいゝ。

五郎　いゝや手切と名が附いちやあ、唾の出るほどほしい金でも、この五郎藏が女房から、手切を取つたと言はれちやあ、明日から世間へ面が出せねえ。

さつ　あゝもし、それではお前の。

五郎　いや、借りたものを返さうと浮世の義理を思へばこそ、苦勞苦患もするものゝ、うぬが心で發明した一方ならねえその仲も、一文凧の切れたやうに、思つてゐりやあ苦勞はねえ、おれは今日から心を入替へ、義理を捨てりやあ御主人へ、受けた御恩も返さにやあ、借りたものも返さねえ、

與助　それぢやあ、借をおぬしやあ踏む氣か。
五郎　踏むも踏まねえもあるものか。
與助　うぬ、さうぬかしやあ。（ト五郎藏の胸ぐらを取るを投げのけ。）
五郎　義理を捨てるが、今の流行だ。
　　　ト與助腰を擦りながら起上り、
與助　あいたゝゝゝ。いや、とんだことが流行つて來た。
五郎　もうこの上は片ッ端、義理を捨てたら覺悟しろ。（トきつとなる。）
四人　やあ。
　　　トびつくりなす。五郎藏立ちかゝる。此の時奧より逢州傾城裝にて出來り、五郎藏を留め、
逢州　五郎藏さん、待つて下さんせいな。
五郎　や、逢州さんか、うつちやつておいてくんなせえ。
逢州　さあ、その腹の立つは尤もぢやが、これには何か樣子のあること、急くところではござんせぬ。
　　　まあ〳〵待つて下さんせいな。（ト五郎藏に縋り留める。）
五郎　なに、人間なら知らねえこと、犬や猫にも劣つたる、恩を知らねえ畜生に、譯も絲瓜もあるもの

か、留めずにおいてくんなせえ。

逢州　いえ／＼何と言はしやんしても、こゝであらはにかう／＼と、さあ、言はれぬ譯もござんせう、留める甲斐なき逢州ながら、お前の爲めには御主人の、良治樣につながる私、不承ぢやあらうが五郎藏さん、後で樣子が分からうから、どうぞ堪へて下さんせいな。（トこれにて五郎藏思入あつて）

五郎　むゝ、外の者なら留まらねど、良治樣の御寵愛、言はゞ主人も同然な、お前の言葉を反故にもなるまい、堪へ難いところだが、今日は何にも言ひますまい。

逢州　そんなら、私の言葉を立つて、

五郎　持つて生れた癇癪の、蟲を殺して堪へませう。

逢州　それで私も、落着いたわいな。

さつ　なんにも言はぬ。（ト嬉しき思入にて、逢州へ禮を言ふ思入。）

逢州　あゝもし、世話になるもならるゝも、互ひのことでござんすわいな。

五郎　（氣を替へて、）いやなに土右衞門、まだ陸奥の淺間家に奥勤めせしその頃より、心をかけたこの杜鵑花、やるのやらぬを爭つたも、心が腐つた上からは、おれも男だ未練は言はねえ、こなたへきれいにくれてやらう。

さつ　あゝもし、それでは。
土右　なに、それではとは。
さつ　いえ、それでさつぱり私の心も。
土右　この土右衛門が心も晴れた。然し口ではいふものゝ、七年この方言交せし、女に愛想を盡かされて、滿座の中で突出され、心の內は悔しからう、腹が立つなら何日何時でも、遺恨を晴らしに尋ねて來やれ。
五郎　おゝ、何れ其內ゆつくりと、樽でも提げて御祝儀に、お禮を兼ねて行きませう。（ト思入あつて立上る。）
さつ　あゝもし、五郎藏さん、腹の立つのは尤もだが、これには深い、さあ、深い仲も今日限り、切れる心の手切の金、この百兩をお前に上げねば、さあ、切れた證據にならぬ故、厭でも持つて行て下さんせ。（ト金包を出す、逢州取つて。）
逢州　心づくしのこの百兩、受けてあげて下さんせいな。（ト出すを五郎藏取つて投げ。）
五郎　いゝえこの金は入りませぬ。緣を切つたらあかの他人。鐚三文でも貰ふものか。
素兵　これさ五郎藏、そりやあ大きな野暮ぢやあねえか、これが一兩か三兩なら、入らねえといふもいいが、大まい小判で百兩だ。

多九　土の金なら知らねえこと、極印うつた山吹色、生涯手には取れねえ金だ。
五平　痩我慢を言はねえで、貰つた方が當世だぜ。
喜六　それも厭なら止すがいゝが、まあ拜んでゝもおくがいゝ。
（ト金包を取つて、五郎藏の頭の上へ載せようとするを捉へて、）
五郎　えゝやかましいがらくためら、うぬらが心に引較べ、けちなことを言やあがるな、百兩はさておいて、千兩萬兩金を積んでも、手切の金を取るものか。ほしかあ今に延鐵を。
四人　やあ。
五郎　片ッぱしからくれてやるぞ。
（ト金包を取つて、土右衞門を目がけ打附ける、土右衞門身を躱し金包杜鵑花に當る、杜鵑花これを取上げ、思入。）
與助　それぢやあ、こつちの百兩は、
五郎　もう未來だから覺悟しろ。
與助　うぬ、さうぬかしやあ、（ト五郎藏に武者振りつくを、引附け）
五郎　これ土右衞門、晦日に月の出る廓も、闇があるから、

土右　や。(ト五郎藏與助を投げのけて、)

五郎　覺えてゐろ。

ト唄になり、五郎藏きつと見返り、逸散に花道へはひろ。與助起上りて、

與助　闇があるから、(トほんと轉り、)覺えてゐろ。

ト逸散に花道へ走りはひろ。杜鵑花金を持つたまゝワッと泣伏す。逢州介抱して、

逢州　おゝ尤もでござんす、飽きも飽かれもせぬ仲を、さあ、飽きた仲でも七年越し、

なか　言交したる五郎藏さん。

ます　よく別れなさんしたぞいな。

四人　これで頭も、さつぱりと、

土右　日本晴がしたやうだ、これから直に花形屋へ、杜鵑花と共に行かうかい。

素兵　少しも早いがお徳用、宵だ〳〵と思ふ中、いつの間にかもう引過ぎ。

土右　さあ、更けぬ中に杜鵑花行かうか。(ト此の時杜鵑花癪のさし込む思入にて、)

さつ　今後からまゐりますから、先へ行て下さんせいな。

土右　なぜ一緒に行かれぬのだ。

さつ　さあ、折惡くも持病の癪故。

土右　さうでもあらうが五郎藏と、縁を切らした上からは、一緒に行かねば顔が立たぬ。

さつ　でも、このやうにさしこんでは。

土右　今まで何の氣振りもなく、俄に癪の起つたは、この場を脱れん心でか。

さつ　なんの、さうでござんせう。

土右　そんなら身共と一緒に行くか。

さつ　さあ、それは。

土右　但し、心が殘つてか。

さつ　さあ、

土右　さあ、

兩人　さあ〱〱。

土右　四の五の言はずと、一緒に來やれ。（ト手を取り、引立てようとするを逢州留めて、）

逢州　あゝもし、星影さんとやら、御尤もではござんすが、私も覺えがござんすが、このさし込みでは行かれますまい、落着きさへしたことなら、直に後から行かしやんすから、先へ行て上げて下さ

んせいな。
なか　ほんに、少しもよろしくば、私共がとも〴〵に。
ます　お送り申してまゐりませう。
土右　でも、とも〴〵に連れ行かねば、情人になつたる甲斐がない。
逢州　そんならかうして下さんせ、銀の替りに鉛ながら、私が替つて二階まで、一緒にまゐりませうわいな。
土右　折角の挨拶ながら、それではやはり心が濟まぬ。
逢州　それで濟まずば裲襠を、杜鵑花さんのを私が着て、扇菊の提灯を點けさせて行たならば、ちよつと人目に杜鵑花さんと、見えませうではござんせぬか。初めて逢うた私のお頼み、どうぞかなへて下さんせいな。

トこれにて土右衛門思入、杜鵑花癪を怺へながら顔を上げて、

さつ　逢州さん、よう言うて下さんした、少しもよくば肩に縋り、直に後から行きますから、ぬしと一緒にお前は先へ。
逢州　あれ、あのやうに言はしやんすから、私と一緒に行て下さんせいな。

土右　廓に名高き逢州どの、おぬしに恥もかゝされまい。

逢州　そんなら私の頼みを聞いて、

土右　花形屋へ同道しよう。

逢州　えゝ、嬉しうござんす。

四人　どれ、お送り申さうか。

ト逢州杜鵑花と裲襠を取替へて着る。この時杜鵑花袂より書置を出し、五郎蔵に渡してくれといふ思入、逢州呑込み裲襠を着て、

逢州　さあ、これで私が杜鵑花さん。

土右　然らばおぬしと、とも〴〵に。

素兵　これから直に。

四人　花形屋へ。

さつ　逢州さん。

逢州　杜鵑花さん。少しもよくば、

さつ　今に後から。

土右　むゝ、待つてゐるぞよ。

ト唄になり、土右衞門先に逢州、四人の子分、おなか、おます附いて出る。若い衆杜鵑花の提灯を持ち、花道へはひる。杜鵑花後を見送りヮアと泣伏し、起上つて涙を拭ひ、

さつ　これ五郎藏さん、嘸腹が立つたでござんせう、堪忍して下さんせ。譯を言ふにも言はれぬ仕儀、お前の男を立てたさに、敵と思ふ土右衞門に從ふやうに言うたのも、この百兩がほしいばつかり、あれほど私が言葉のあや、目顏で知らすに悟りもせず、腹を立てずとこの金を、御用に立てゝは下さんせぬ。假令お前がどのやうな貧苦に迫りこの末に、今の錦に引替へて身には襤褸を纏ふとも、愛想を盡かすか盡かさぬは、常から知れてあらうのに、たゞの女子と思うてか、そりや情ない、情ないわいな。私やこの金手に入れて、お前の役に立てたれば、後で命を捨てる覺悟、生きてをる氣はござんせぬのに、それがお前に知れぬかいな。先刻も離狀書く折に、書損ひし體に見せ書いておいた言譯を、逢州さんに言傳たれば、あれを見た上疑ひを、どうぞ晴らして下さんせ。それにつけてもこの百兩、五郎藏さんに渡したいが、私の手からは取らしやんすまい、これもやつぱり逢州さんから、屆けて貰ふが上分別、後から行つてこつそりと。

ト立上る。この時烏頻りに啼く、杜鵑花心にかゝる思入にて、

月も出ぬのに啼く烏、心ならねば胸騷ぎ。あゝ苦勞の絕えぬことぢやなあ。

ト金を持ちぢつと思入、時の鐘、『火の用心さつしやりませう』といふ火の廻りの聲にて、この道具廻る。

（廓內夜更の場）――本舞臺正面大格子、簾をおろし、入口に大戶を閉め、上の方に番手桶を積みし用水桶、この脇に誰哉行燈、總て夜更の體。と、ばた〱にて。花道より五郎藏頰冠り尻端折り一本差にて出來り、直に舞臺へ來て振返り、向うをきつと見て、

五郎　今土右衞門めと連立つて、こゝへうせるは女房杜鵑花、朧夜ながら提灯の紋に覺えの扇菊、流れに菊の裲襠もあの世へ飾る死裝束、まだ春ながら愛想が盡き、心に秋の來たからは今日ぞこの世の別れ霜、露の命の消え際も、六道ならぬ待合の、辻に屍を晒してくれん。

トきつと思入あつて、一刀の目釘をしめし、辻行燈の蔭へ小隱れする。ト花道より若い者扇菊の紋附きし提灯を持ち、後より逢州、土右衞門、男達四人、おなか、おます喜助附いて出來り、

逢州　もし、星影さん、宵と違つて引過ぎは、靜でよいぢやござんせぬか。

土右　その靜よりおぬしの足が、あまり靜で步き惡い、もそつと早く步いてくりやれ。

逢州　嘸御迷惑でござんせうが、私や久しう煩らうて、まだ髪さへも取上げねば、外を歩くも今日が始めて、それ故おそうござんすが、早く行ても肝腎の、杜鵑花さんがござんせねば、お座敷に花がない、急かずと靜にござんせいなあ。

素兵　靜もいゝがあんまり靜で、股がすくんで歩き悪い。

多九　笙篳篥の鳴物で、お練をするよりまだおそい。

五平　これでぶら〳〵行つたらば、花形屋まで行く内に、

喜六　東が白んで烏が啼かう。

逢州　えゝも憎い、悪口ばかり。

なか　こりや皆さんのおつしやる通り、

ます　宵と逢うて引過ぎなれば、

喜助　急いでおいで。

三人　なされませ。

逢州　えゝお前方まで同じやうに、忙しない人ぢやわいな。

ト本舞臺へ來る、五郎藏つか〳〵と出て提灯を切落す、これにて皆々びつくりする、

土右　それ、狼藉者だ。

四人　合點だ。

ト四人拔きつれてかゝり、五郎藏と烈しく立廻り、四人は敵はず上手へ逃げてはひろ。五郎藏は土右衞門を目がけて切つてかゝり、兩人立廻ろ、この中へ逢州はひりよろしくあつて、トヾ土右衞門危ふくなりてたぢ〳〵と後へ下り、ドロ〳〵にて土右衞門は大格子の邊へ消える、この內逢州は花道へ逃げて行く。五郎藏は土右衞門が見えぬ故四邊をすかし、花道へ行き、逢州を見てつか〳〵と行き裲襠の裾を踏まへろ、逢州びつくりするを一刀あびせる。逢州アッと言つて逃げるを追ひかけ、立廻りながら舞臺へ戻り、逢州を切倒し、ほつと思入、この時花道揚幕の內にて、大勢の聲にて『人殺しだ、人殺しだ』と呼ばはろ、これにて五郎藏心の急く思入にて、逢州の首を打落し片袖を切つてこれへ包み、腰へ結附け、離狀を落せし思入にて、

五郎　えゝ、離狀を落したか。(ト四邊を搜し、離狀と心得、逢州が落せし杜鵑花の書置を拾ひ、袂へ入れ四邊を見て)えゝ殘念な、土右衞門めを討ち洩らしたか。

トこの時舞臺にて、

土右　こりや五郎藏、土右衞門はこゝにをるが、うぬが眼には見えぬのか。

五郎　やゝ、聲あつて形なきは。

ト刀を構へきつと見得、うすドロ〳〵掛焔硝にて、土右衛門現はれる、五郎藏見て、

遺恨に遺恨重なる土右衛門、命は貰つた、覺悟なせ。

土右　はて、小ざかしき覺悟呼ばはり、この土右衛門に刄向ふは、虎の鬚を算ふるが如し、及ばぬことだ、止しにしやれ。

五郎　虎の髭はまだなこと、龍の鰓の玉をも取る、おのれが命を取らいでおかうか。

土右　見事取るかよ。

五郎　おんでもないこと。

土右　何を小しやくな。

ト鳴物になり兩人拔合せて立廻る。この内月隱れ、ばた〳〵になり下手より杜鵑花出來り、この中へはひりあちこちと邪魔になり、五郎藏の落した離狀を拾ふ。五郎藏は土右衛門をすかし見て見事に切込むと、ドロ〳〵にて土右衛門スッポンへ消える、五郎藏は手答へなく姿の消えし故びつくりして、一足に立つな、木の頭。花道の方及び上下にて『人殺し〳〵』と呼ばゝる。五郎藏思入あつて刀の糊紅を振ふ、杜鵑花はびつくりなし、震へながら離狀をすかし見る。この模樣よろしく、番拍子木の音にて、

ひやうし幕

と幕引附けると、ドロ〳〵にて、花道のスッポンより土右衛門迫り上がり、幕の外へ月をおろす、土右衛門これを見てにつたりと笑ひ、悠々と花道へはひる。跡シヤギリ。

六幕目

五郎藏內の場

［役名――御所ノ五郎藏、子分梶原平平、新貝荒藏、秩父ノ重介、五郎藏母お杉、杜鵑花等。］

（五郎藏內の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面五の字を附けし暖簾口、三尺の佛檀、その內に經机を据ゑ、花立、香爐、蠟燭立などの佛具を飾りあり、次に床の間、下手の茶壁に胡弓、三絃をかけあり、上の方は折廻しの障子屋體、いつもの所門口、下の方黑塀、中切に竹格子を打附け、見越しに櫻の立木、塀の前に石を載せし用水桶。總て五郎藏內の體。こゝに子分新貝の荒藏箱火鉢へ藥鍋をかけ、藥を煎じてゐる。傍に同じく子分の梶原平平、秩父ノ重介立つてゐる、端唄の合方、屋臺囃子にて幕明く。

梶原　コウ荒藏、親分は留守か。

荒藏　なに、家にゐなさるが、昨夜おそかつたから、まだ寐てだ。

梶原　まだ寐てだもねえものだ、もう今に日が暮れらあ、いゝ加減に起しやあいゝに。
荒藏　おれも起さうとは思つたが、なんだか機嫌が悪いから、うつちやつて起さねえのよ。
秩父　それぢやあ、昨夜おそく歸りなすつたか。
荒藏　あ、丁度八つの鐘の鳴る時だ。どつこい吹きこぼれた。（ト藥罐の蓋を明ける。）
梶原　藥のこぼれるのは緣起がいゝ、おつかあの病氣はどうだえ。
荒藏　別に替つたこともねえが、まあ日増にいゝ方だ、何と言つても年の上だに、苦勞をした身體だから、長い内の勞れがでたのだ。
秩父　どうぞ早く、よくなんなさりやあいゝが。
荒藏　これから段々一日増しに、暖かになるのだから、大丈夫だ。
梶原　親分があの氣に似合はず、よく世話をしなさるが、ありやあ實のお袋かえ。
荒藏　詳しい譯も知らねえが、元は奥州の淺間家で、須崎何某といふ人の御新造で、親分を生んだ後身持が悪さに家出をして、それから方々經めぐりあるき、二度目の亭主を持つたところ、その亭主に死別れ、流れ〳〵て五條坂の花形屋へ遣手にはひり、姉御が勤めに行つてから、ふとしたことで親子と知れ親分と名乘り合ひ、それから家へ引取つて切ねえ中で親分が、あれのこれのと親孝

行、おいら達にやあ眞似もできねえ。

梶原　それぢやあ、おつかあも苦勞人だな。

荒藏　どうで遣手にまでなる人だから、元はたゞの人ぢやあねえが、今ぢやあ後生いつ三昧に、打つて變つて佛のやうだ。

秩父　なるほど今ぢやあいゝ人だが、元は身性が惡かつたらう、一癖ある顏付だ。

梶原　何にしろ、親分にちよつと逢つて行きたいものだ。

秩父　もう起してもいゝぢやあねえか。

荒藏　無理に起すと機嫌が惡く、あとでおれが困らにやならねえ。

梶原　それぢやあ、駄々ッ兒、

兩人　同然だ。

ト此時上手屋臺の内にて「えゝ耳の端てがやくと、やかましくつて寐られやしれえ」と五郎藏の聲して、上手障子を明け、背延をしながら出て來る。

梶原　親分、いつまで寐なさるのだ。

五郎　とろくとやつたやうだが、もう日が暮れたか。

秩父　日が暮れたどころか、もう今に五つでござりますよ。

五郎　そんなにやあ寐ねえ氣だが、

荒藏　親分、お飯をお上んなさらねえか。

五郎　いや、喰ひたくねえ、止しにしよう。

荒藏　今朝ッから、何にも喰ひなさらねえが、

五郎　又いつもの溜飲で、胸が惡くつていかねえ。

秩父　それぢやあ、親分昨夜やッつけなすつたね。

五郎　え。（トぎつくり思入。）

梶原　どこでかしつかり呑みなすつて、それで今日は宿醉だね。

荒藏　熱くして一ぺいやんなさりやあいゝに、

五郎　いや、好な酒も飲みたくねえ。

梶原　昨夜親分五條坂に、いつ時分までゐなすつたえ。

五郎　むゝ、昨夜は廻るところがあつて、五條坂は宵に歸つた。

秩父　それぢやあ、人殺しを知んなさらねえかえ。

五郎　なに、人殺しとは。
秩父　なんの遺恨だか知らねえが、逢州さんが切殺されて、五條坂は亂騷ぎだ。
荒藏　親分、お前昨夜おそく歸りなすつたが、知んなさらぬのかえ。
五郎　いや、人殺しの噂は聞いたが、そりやあ逢州さんぢやァあるめえ。
梶原　なに、私やあ親分に別れて、廓に遊んでゐやしたらその騷ぎさ。おゝそれに就いて思ひ出した、逢州さんの禿から、この文を親分へ、屆けてくれろと頼まれました。(ト文を出す、五郎藏取つて、)
五郎　なに、逢州どのから、おれが所へ。(ト思入あつて、)あ、おれと杜鵑花が昨日の事を、案じてよこした文だらう。(トそのまゝ投捨て置く。)
荒藏　何にしろ逢州さんは、可愛さうなことをしたが、ほんとに切られたに違えねえか。
梶原　眞の嘘のと大評判で、すばやい奴がその事を、瓦版でもうこしらへ、四つ竹節を賣つて歩く。
秩父　今もこゝへ來る途で、十六七ないゝ娘と四十を越した男と二人、三味と四つ竹を打合せてやつて來た。
荒藏　そいつあ聞きてえものだつたが、手前文句を知つてゐるか。
梶原　先刻讀賣が賣つて來たのを、一冊買つて持つてゐる。(ト懷から本を出す。)

荒藏　どんなことが書いてあるか、ちよつと讀んで聞かしてくれ。
梶原　おれにや節ができねえから、文句だけ讀んで聞かせよう。（ト本を見て、）「こゝに哀れな話がござる、花の都の廓の名取り、時に逢州我人毎に、愛でつ見惚れつ心を寄せて、君を阿古屋の待つ甲斐もなく、忍び逢ふ瀨のそのもつれにや、哀れきらめく劍の霜に、散つて行く身は血汐の紅葉」、
五郎　えゝ聞き度くもねえ四つ竹節、いゝ加減にしねえのか。
梶原　これから先がくどきだが、讀んで惡けりや止しませう。
荒藏　末まで聞いたら面白からうに、
梶原　本を貸すから後で見ねえ。（ト本を傍へおく。）
荒藏　この位な大騷ぎを、おそく歸つた親分が、知んなさらねえのは、不思議な話だ。
梶原　而も大手の夜明しで、大引時分に親分を、見かけたと言ひましたぜ。
五郎　おらあ昨夜早く歸つた、大方そりやあ人間違ひだらう。
荒藏　そんなこともあるめえが、昨夜親分が着て歸つた、着物の裾に（ト言ひかけるを、）
五郎　これ、無駄口を利かねえで、茶を一ぺいくれ。
荒藏　あい。（ト茶を汲んで來る。梶原盤へ眼を附けて、）

梶原　や、この疊に汐が附いてゐわ。
五郎　え、(トわざと茶碗を取落し、)えゝ、氣を附けねえか。
　　ト手拭で茶を拭く思入にて血汐を拭ふ、荒藏むつとして、
荒藏　氣を附けるもねえものだ。お前がこぼしなすつたのだ。
五郎　なに、おれがこぼした、いつおれがこぼしたえ。(ト荒藏の横ぞつぽうを張りつける、荒藏頭を押へて、)
荒藏　あいたゝゝゝゝ、何でわつちを打ちなさるのだ。
五郎　おれに言ひかけをしやあがつたから、打たねえでどうするものだ。
荒藏　何時わつちが言ひかけをしやした。
五郎　しねえことがあるものか。(ト立ちかゝらうとするを梶原、秩父止めて、)
梶原　これさ、親分、そりやあお前が無理といふものだ。
秩父　わつち等も見てゐたが、お前が落しなすつたのだ。
五郎　まだ、そんなことを言やあがるか。
　　ト五郎藏立ちかゝる、これにてびつくりなし三人門口へ逃出し、外から戸を閉め押へながら、
梶原　これ親分、年中世話になるこちとら、どんなことを言ひなすつても、口答へはしねえ氣だが、可

愛さうに今日のばかりァ、荒藏が粗相ぢやあねえ。それをあれがしたやうに、横ぞつぽうを張り附けて、あんまり無理といふものだ。

荒藏 好な酒さえ飲まねえほど、苦勞のある樣子だから、癇に障るも無理ぢやあねえが、そこが親分子分の仲、無理をいふ其の口で、かう〳〵いふ事があるが、どうしたものとわつちらに、相談かけてくんなさらねえ。

秩父 言つたところが無駄だと思つて、それで言ひなさらねえか知らねえが、役に立たねえ子分でも、もし親分の身の上に、間違ひでもあつた日には、命を限りに背負ひ込む氣だ。

梶原 先刻からの樣子といひ、不斷と違つた顏の色、何でも譯のあることだ。

荒藏 譯を聞かしてくんなせえ。

五郎 譯もへちまもあるものか、好きな酒でも生身だから、飲み度くねえこともあらあ。無駄な口をたたかずと、きり〳〵と歸りやあがれ。

梶原 そりやあ歸れと言ひなさりやあ、歸るより仕方はねえが、

荒藏 そんなことを言はねえで、譬にもいふ膝とも談合。

秩父 どうぞお前の胸の内を、

五郎　まだ、ぐづ〳〵とぬかしやあがるか。
荒藏　それもお前を案じるからだ。
五郎　えゝやかましい、歸りやあがらねえか。（ト門口を明ける、三人は花道へ逃出し、）
三人　いや、分からねえ親分だ。
ト花道へはひろ、五郎藏後を見送り、思入あつて門口を閉め、
五郎　今彼奴等の言葉では、五條坂の人殺しも、疵持つ足か知らねえが、おれが仕業と悟つた樣子、ー
いつアうつかりされねえわい。
ト思入。この時暖簾口より母親のお杉病人の體にて出來る、五郎藏お杉と顏を見合せびつくりして、
五郎　や、こりやお袋には、何しにこれへ。
お杉　さあ、夢か現か聲高な、そなたの聲が耳へ入り、案じられてならぬ故、樣子を見に來ましたわいの。
五郎　子分の奴がぐづ〳〵と、分からねえことを言ひやすので、つい大きな聲をしました。
お杉　さういふことならよいけれど、もしやそなたの身の上に、拘はることでもありはせまいかと、明暮それが心がゝり、愚痴な事をいふやうなれど、實の子とはいひながら、五歳の年に別れたまゝ

親といふのも面目ない、身性の悪いこの母を、親と思うてこのやうに、そなたを始め又嫁の杜鵑花も共に勤めの身で、素人も及ばぬ私への孝行、その親切に過ぎ去りしそでない事を後悔なし、珠數を放さず日課を繰り、後世よりこの世の罪亡し、どうせ功力でこなた衆の、先へ死にたい身の願ひ、後へ殘りて逆さまな憂き目を見たうないわいの。

五郎　又お袋のつまらぬ愚痴、まだ私だとて女房とて老い朽ちたといふ身ではなし、お前を殘して死ぬやうな、そんなことはあるまいから、餘計なことを案じずと、奥へ行つて寐てござりませ。

お杉　いや〳〵、おくれ先立つ世の習ひ、誰が先やら知れぬわいの。病のせるか心細く、今にもそなたや嫁の杜鵑花に別れでもするやうな心持でならぬわいの。(ト涙を拭ふ、五郎藏思入あつて)

五郎　待てば長いやうなれど、杜鵑花が年ももう僅四五年にはなつたれど、百年たつても、

お杉　え。

五郎　いやさ、百萬年も連添ふ氣で、言ひ交したも打つて替り、

お杉　なんぞ變つたことでもあつてか。

五郎　え、いえ、何も替つたことはござりませぬ。

お杉　昨日廓へ行つたとあれば、杜鵑花に逢うて來たであらうの。

五郎　はい、ちよつと店で逢ひましたが、あれも達者でをりまする。
お杉　變つたことがないとは嬉しい、年寄つては寐られぬものか勞れのせゐかうつ〳〵と、枕に着くと寐てばかり、過ぎ越し方を思ふにつけ、胸に苦勞が絶えぬ故、惡い夢見に今朝からの軒をはなれぬ烏啼き。
五郎　え。
お杉　あゝ、苦勞の絶えぬ浮世ぢやなあ。
ト唄になりお杉思入あつて奧へはひる、五郎藏ほつと思入、寺鐘を打込み、床の淨瑠璃になる。
〽入相の鐘の音さへも五郎藏は、胸に響きて兎に角と、思案に暮るゝ灯ともし頃、奧口見廻し、吐息をつき、
ト五郎藏思入あつて奧を見て、よき所へ住ひ、
五郎　四百四病の病より貧ほど辛いものはないと、曾我狂言の鬼王がせりふも今は身にあたり、金の切羽に現在の連添ふ女房に見限られ、一途に逸つて殺したが、あれを廓へ賣つたのもおれが病氣にその日に迫り、辛い苦界に沈めたからは亭主といふも面目ない。我物顏に殺したが憎い奴だが我が誤り。罪を憎んでその人を、憎まぬといふ敎へもあれば、今宵の中に人知れず寺へ賴んで葬ら

ん。

〽さすが恩愛捨て難く、門口閉めて佛檀の、下より取出す死顔を、見るに忍びず調度に載せ、燈明かゝげ鉦打ちならし、

ト佛檀の下より袖に包みし切首を出し、經机の上へ載せ、佛檀の灯をかゝげ鉦を打ち、

南無幽靈頓證菩提。

〽南無阿彌陀佛と唱へつゝ、つく〴〵ながめ逢州が、恨めし氣なる死顔を一目見るより打ちおどろき、

はて、合點の行かぬ。引きちぎつた片袖は覺えある杜鵑花が裲襠、また提灯の紋といひ、それと思ひ極めしに、杜鵑花にあらで、逢州どのであつたるか、やゝゝゝ。

〽こは〳〵いかに、狐狸の仕業か但しまた、心の迷ひか、何にもせよ。

〽そばに落ち散る一通を、取上げ見れば逢州が、文にはあらで女房の、行亂れし假名書に、

ト以前の手紙を取つて、行燈の灯によく〳〵見て、

「書置のこと」むゝ、(ト文を開き見て、)なに〳〵、「御前様よりお話しなくとも、殿様の揚代金花形屋

の借りは我身償ひ申さんと、さまぐ\に心を碎き候へども、風をも待たで散る花の取りとまり候客もなければ、井出の玉川言ひ出す便とてもなく候へば、いつ山吹の花の黄金求めん事の難ければ、いかゞはせんと思ふ折柄、心よからぬ星影づらが、御前樣へ離狀書いて送らば、百兩の金を我身に與へんと拔きさしならぬ言の葉に、思ひ亂るゝ垣の花、手折る人待つ勤めの身の淺ましさを顧みて、風に柳の吹くまゝに此の身を任せんと、道ならぬことながら僞りの離狀を書き、百兩の金を手に入れ花形屋へ償ひて、我身はゝ後に自害なし死果て候覺悟にて、あの世とやらへ參り一つ蓮の半ばを分け相待ち候まゝ、幾百年の御壽命を過ぎ、この世に替らぬ妹背の契りを樂みをり候し

〽讀みも終らず氣も半亂、かゝる杜鵑花が心とも神ならぬ身の露知らず、日頃の短氣にこらへ兼ね、殺さうとせし我がおろか、どの面提げて女房に、二度と再び逢はれよう、それのみならず情なや、人違ひとは言ひながら良治公の御寵愛。

〽逢州どのを殺害なし、惡事千里とこの事が、世上へぱつとする時は、あれ良治こそ逢州が色香に迷ひ淫酒に耽り、日夜廓に明かす故、止むこと

を得ず五郎藏が彼女を殺害なせしなどゝ、蛇足を添へて言はんは必定、撫子の方狂死より思ひ絕えて、廓へは至りたまはぬ我君に、

〽我短慮から無き名をば、負はせ奉る勿體なさ、かゝることを仕出せしは、犬や猫にも劣りし此の身、朝夕かゝさず手を合はせど、神や佛に見離されしか、ちえゝ、口惜しやなあ。

〽袖を喰ひ裂き疊にひれ伏し、悲歎の淚に暮れ果てゝ、軒洩る月に門口へ由ありげなる袖乞の娘と共に連立ちし男は聲を張りあげて、

ト五郎藏口なしき思入、この內花道より寄居蟲袖乞の打扮にて編笠を冠り、三味線を持ち、切平同じく袖乞の打扮手拭を冠り、四つ竹を持ちて出來り、門口へ來て思入あつて、

切平　さあ〳〵、これは流行の新くどき、ヽヽヽ、四つ竹の打合せにて、昨夜のことを今日直に唄ふ所がお慰み、

〽しはぶきなせば心得て、娘が彈出す三味線に、男は四つ竹打合せ、

ト是より切平、寄居蟲四つ竹に合せて唄ふ。

〽こゝに哀れな話がござる、花の都の廓の名とり、時に逢州我人每に、愛でつ見惚れつ錦木よりも、門に立つ人身もくづをれて、

やど〽男たやしよ緒絶の橋の、君を阿古屋のまつ甲斐もなく、忍び逢ふ瀬のそのもつれにや、
切平〽松の葉越しの月ならなくに、あはやひらめく劒の霜に、散りて行く身は血潮の紅葉、
ト五郎藏これを聞き、切なき思入にて
五郎　あゝ、時も時とて袖乞が、唄ふ小唄は逢州どのゝ、はかなく消えし身の上を、何れの誰が作りしか。
〽不審たつれば表には、あやしの本を繰りひろげ、
ト五郎藏は逢州の首を見て愁ひの思入、切平寄居蟲になしあつて、
切平　さあ〳〵、これから、肝腎の逢州の最期の物語り、一段と哀れなところ、詞〽逢州苦しき聲をあげ、これなう暫時待ちたまへ、妾に何の科ありて、かゝる憂目を見せたまふ、〽言へどさけべど露聞分けず、我とわが身は二世をばかけて、共に浮世を諸白髮まで、渡りくらべんものとし誓ひ、阿波の鳴戸の相見ぬひまに、よそに波風なみかぜ立ちて、
やど〽人の眺めと散り行く花を、こゝに散らして此の身も共に、死んで浮いたる名を流すのは、
切平詞〽まだもこの世の思ひ出と、言ひつゝ胸をつらぬけば、あつと苦しむ有樣に、さすが命の惜しまれて、詞〽返す刄に首かき落し、行方知れずに落失せければ、
やど〽未練者とて皆口々に、人の笑ひとなるのも因果、

切平 〽實に逢州が無慙の最期、哀れなりともなか〳〵に、申すばかりはなかりける。

五郎 あゝ、聞きたくもないその小唄。手がふさがつてゐる、通らつしやい。

切平 御面倒ではございませうが、お情で助かります者、

やど 御報謝なされて下さりませ。

五郎 さあ、手の内を進ぜるから、早く外へ行つて下せえ。

〽言ふに五郎藏面倒なと、つぶやきながら佛檀の、母の巾著幸ひに唐錢三文取出し、

やど 有難うござりまする。

〽娘は深く恥ぢらひて、編笠かたげ顔かくし、手の内受けて押しいたゞき、立歸らんとなしけるが、何か心に悟りけん、かの男に囁きて路地の小影へ身を忍び、内の樣子を窺ふとも、こなたは知らず座に戻り、

ト五郎藏手の内をやる。寄居蟲これを取り思入あつて切平に囁き、頷き合うて路地口へはひる。五郎藏は門口を閉め、思入あつて元の所へ來り、

五郎 心正しき逢州どのも、君傾城の悲しさは、斯もあらんと推量して、忍び男に殺されしと跡方もなきつくりごと、現在殺せしその人の門口とも知らず、あまつさへ未練者と言はるゝも、此身のな

せし罪なれど、情なきは逢州どの、非業な最期を遂げたまひ、死しての後までもあのやうな、なき名を負うて嘸や嘸、無念に思ひたまはんが、こなたばかり殺しはせぬ、この五郎藏が腹切つて、冥土で言譯しますぞや〔ト奥へ思入あつて、〕何にも知らずすや／＼と、病苦の勞れに母親の、眼の覺めぬこそこれ幸ひ、身の言譯を書殘し、少しも早くさうだ／＼。

〽覺悟極めて取出す硯の海も干上りて、涙を受けて磨りながす墨さへ薄き縁の端、筆の命毛切がせに、妻戀ふ鹿の妻も亦、迷ひ廓を忍びいで、

ト此の内五郎藏硯箱を出し墨を磨りかける。時の鐘を打込み、花道より杜鵑花手拭を吹流しに冠り、上草履にて駈け出來り、花道にて後へ思入あつてつか／＼と舞臺へ來り直に内へはひり、門口をぴつしやり閉める、五郎藏びつくりして、

五郎　あゝ、びつくりした、誰だ。

さつ　あい、私でござんす。

五郎　さういふ聲は、杜鵑花ぢやあねえか。

さつ　五郎藏どの〔トつか／＼と傍へ來て、〕堪忍して下さんせいな。

〽わつとばかりに詫び涙、

今更言うて返らねど、譯を言ふ間もあらざれば、後で言譯しようと思ひ、昨日お前が賴ましやんした金調へようばつかりに、心にもない愛想づかし、それを眞と心得て日頃の短氣に昨夜のしだら、情ない逢州さん、この身の難儀を買ひ取つて死ぬる時節か提灯から、裲襠までも取換へて私の代りに土右衛門を、送つて行つて下さんしたを、同じ模樣にはかなくも非業な最期を遂げられしも、元はと言へば皆私が足らはぬ心に起りしこと。切るなりと、突くなりと、存分にして五郎藏どの、思ひを晴らして下さんせいなあ。

〽命惜しまぬ女房が言譯聞けば五郎藏が、我身の粗忽に面目なく、返す言葉もあらざるに、あらけなくも突退けて、（ト五郎藏取縋るさつきを突倒して、）

五郎　えゝやかましい、だまりやあがれ、そりやあみんなそつちの言拔け、以前に替るおれが身に愛想を盡かしのめ〳〵と、金びらを切る土右衛門が、襟に附いて身を任す、畜生同然なうぬを殺すはこつちの身の穢れになる。さあ、命は取らねえ、何處へでも、勝手な方へ身を任せ、行末長く榮耀をしやれ。面を見るのも蟲唾がはしらあ。

〽愛想盡かしも深い譯、有磯海ともしら波の、岩に碎くる思ひにて、

さつ　そりや聞えぬわいな五郎藏どの、お前と夫婦になつたのも、堅いお家の掟を破り言交せしがあら

はれて、縛り首にもなるところ、後室樣のお情でお暇のみかお金まで、貰うて二人お國を立退き、知邊を求めて世帶を持ち、仲睦じう暮す內、花に嵐のお前の病氣、その日の煙りも立て兼ねて廓へこの身を賣つたれど、帶紐解かぬ貞節は三月と馴染んで來る客の、ないのがたしかな證據でござんす。譬にもいふ氏なうて玉の輿にも乘るのが女、この身を任したことならば、綾や錦を身に纏ひ、榮耀が出來まいものでもないが、襤褸を着ても末始終、お前と添ひたい私が心、昨日や今日の仲ではなし、推量して下さんせいな。

五郎　朱に交はれば赤くなると、屋敷育ちもいつの間に、手練手管の女郎じみ、まことしやかにその僞り、おれに言ふのは無駄だから、行末爲にならぬさゝな、客に言つて金にしろ。御新造樣か奧樣になるのを長い眼で見よう。離狀取れば緣はねえ。さあ、きりきりと出て行きやあがれ。

〽言ふ顏つくづく打ちながめ、

さつ　金がほしさに離狀書き、その場の切羽に是非なくも、倦きたというたを眞にして、緣を切る氣でござんすか。これほど思ふ眞實も嘘なら嘘にしなさんせ、心のまことはこの百兩、お役に立てゝ下さんせいな。（ト懷より百兩を出して五郎藏の前へ出す。）

五郎　いゝや入らねえ、持つて行け。切羽つまつたその金を、死ぬと覺悟を、いやさ、死んでも手前の

その金は、お役に立てる心はねえ。これも入らねえ、持つて行け。

さつ　これほど事を分けて言ふに、あまりと言へば情ない。

五郎　それもわれが心がら。

さつ　それぢやによつて（ト金を出す）

五郎　けがれた金は、入らねえわえ。

ヘ足蹴に金を蹴返せば、杜鵑花はハッと打伏して、忍び兼ねたる泣聲の洩れてや母が一間より病苦を怺へ立ちいでゝ、

ト文句の通りあつて、杜鵑花ワッと泣く、奥よりお杉出來りて二人の間へ割つて入り、

お杉　これ、五郎藏、まあ下にゐやいの。

五郎　なんでお前出て來たのだ。煩らつてゐる其上へ風邪でも引けばおれが難儀、奥へ行つて寐てゐなせえ。

お杉　さあ、寐てゐたくも二人の爭論、耳へ入つては寐てゐられぬ。

五郎　そんなら、今の、

兩人　樣子をば。

お杉　あらまし奥で聞きました。これ五郎藏、折角杜鵑花が調へた何故あの金を受取らぬ。それでは人の親切を無足にするといふものぢやぞ。

五郎　さあ、なければならぬ金にせよ、離狀附けた女房から百兩の金は扨おいて、二朱でも貰ふ謂れがない。

お杉　さゝ、それも金を取り得ん爲め、苦界の嘘は世の方便、私もたゞの婆ではない、若い時から苦勞して遣手にまでなつたれば、苦界の譯も知つてゐる。夜毎に變る客の數嘘僞りは勤めの習ひ、眞の心に變りがなく金故書いた離狀なら、何本書いてもよいではないか。

五郎　そりやあお前が言はねえでも、眞の心に變りがなけりやあ、何も言ひはしませぬが、變りきつたあれが性根、私から愛想が盡きました。そつちも厭になつたらうが、こつちもふつ〳〵厭になつた、言葉交すも今日限り。とつとゝこゝを出て行きやれ。

〽けんもほろゝの挨拶に、母も呆れて言葉なく、杜鵑花は夫を恨めしげに、

さつ　何が心にかなはぬか、昨日までは變りなく、金の才覺してくれと私に賴みなさんしたも、かういふことから言ひがゝり緣を切る氣でござんしたか。疾うから愛想が盡きたとはあまりのことで情ない、さういふ心と知らざれば、お前の望みをかなへた上死ぬる覺悟でござんすのに、愛想が盡

きたと言はれては、それが黄泉の障りとなり、私や死ぬにも死なれぬわいな。この世の緣は兎も角も、あの世は變らぬ夫婦ぢやと、たつた一言五郎藏どの、情ぢや言うて下さんせいな。

〽これなう申しと伏し拜む、杜鵑花が心いぢらしく、母は病苦も打忘れ五郎藏に縋りつき、

お杉　これ〳〵五郎藏、今の言葉が耳に入つたか、死ぬる覺悟でそなたの賴み、かなへた杜鵑花を何科あつて愛想が盡きた。辛い苦界の勤めをするも、みんなそなたの爲めではないか、女房といへど恩のある、大事の〳〵この杜鵑花、それも思はず言ひたいがい、そなたは兎もあれ、義理のある母が見てはゐられぬわいの。

五郎　おゝ、見てゐられずば、お前もとも〴〵、女房と一緒に出て行きなせえ。

お杉　なに、おれにまで出て行けとな。

五郎　おゝ、親とはいへど五歳の年、身性が惡さに家出をして、いはゞ他人も同然だが、腹を借りたが身の不承、厄介ながら引取つて喰はしてやるもありやうは、犬か猫を飼つた氣だ。親顏されるが胸が惡い。疾うから出さうと思つたところ、ゐられねえとは幸ひだ、遠慮は入らねえ、出て行きねえ。

お杉　おゝ、さういふおぬしの心なら、出て行かないでどうするものだ。

さつ　これはしたり五郎藏どの、私は兎もあれ母さんはたゞでもあるかお煩ひ、起居も自由ならぬのに、出て行けとはどの口で、それではお前濟まぬわいな。

五郎　濟むも濟まぬも浮世の義理、斯ういふからは義理を捨て、主人へ忠義親へ孝行、ふッつり止めて今日からは、氣隨氣儘に樂をするわえ。

お杉　親とは言へど親甲斐の、ないとはいへどあんまりな、言ひたいがいの憎まれ口、今更思へば先達親子の名乘りせなんだら、今この歎きはあるまいに。

五郎　お前よりはこつちが殘念、名乘りをせずばこのやうに、トお杉を見て愁ひの思入あつて、厄介者を背負ひ込まぬに、親女房とも一時に、縁を切つてたゝき出せば、これで心もさば／＼と、歎く者がなくつていゝ。さあ、きり／＼と出て行きなせえ。

〽情容赦もあらけなく、母女房を門口へ、突出す拍子に轉ぶ母、これはと杜鵑花が抱起し、

ト五郎藏思入あつてお杉、杜鵑花を門口へ突出す、お杉ひよろ／＼としてばつたり倒れる、五郎藏ハッとして、寄らうとして顏を背ける。杜鵑花お杉を介抱して、

さつ　おゝどこぞお怪我はなされませぬか、病ひ勞れてござんすのに、こゝで冷えては身體の毒、家へおはひりなされませ。

お杉　いや／＼、見下げ果てたる不孝者、假令こゝで死ねばとて、何の家へ歸らうぞ。

さつ　御尤もではござりますが、それではどうも濟みませぬ。これ五郎藏どの、お前は氣でも違つてか。

五郎　おゝ、氣も違はいで、いや、氣も違はねば迷ひもせぬ、うぬらが厭になつたのだ。

兩人　そんなら、どうでもっ（ト寄るを五郎藏突きのけて、）

五郎　をとゝひうせう。

〽門の戸閉めて掛金かけ、心にもなき惡口に、ふさがる胸へ突かける涙呑み込む苦しさを、知らぬ母は戸口にすがり、（ト文句の通りよろしくあつて、）

お杉　これ五郎藏、親とはいへど恩もなき我身とは言ひながら、あまりと言へば邪險な仕方、これには何ぞ仔細があらう、非業な最期と噂に聞く逢州どのゝ身の上に、拘はることでもあつてのことか。これ三年でも五年でも、親子となりしこの母に、何故打明けてはくれぬぞいの。

〽言へど答へも亡骸へ身の言譯に五郎藏が、双肌拔いで死支度、言ひ合はさねど表には杜鵑花が用意の刄を取出し、肌くつろげて乳の下へ、ぐつと突込みたまぎる聲、母は見るより打ちおどろき、

ト此內五郎藏は屏風を取除け、逢州の首へ向ひ思入あつて肌をぬぎ、一刀を拔き手拭へ卷き、表の兩人

へ許してくれと詫びる思入。又杜鵑花も下手にて上着の肌を脱ぎ、懐劍を拔き、これもお杉に許してくれといふ思入あつて、双方一時に突込む。お杉杜鵑花を見てびつくりしてどうと倒れ、這ひ寄つて介抱なし、

お杉　これ、杜鵑花、そなたは何で死ぬるのだ。五郎藏への面當なら死なずと仕樣もあらうのに、早まつたことしてくれたなあ。（ト門口へ來り、）これ五郎藏、そなたが邪險なばつかりに、杜鵑花が自害したわいの。

〽病苦を忘れ母親が、破れるばかりに門の戸を、たゝく内にも五郎藏が、一腰腹へ突立てゝ苦しき息をほつとつき、

五郎　なに、杜鵑花が自害しましたとか。

〽言ふ聲常に變りしかば、

お杉　やゝ、そなたもどうかした樣子、これ、こゝ明けてくりやいの／＼。

〽押しつたゝきつ身を悶え、よろめく足に思はずも、その身をうちつけ戸はばら／＼、はづみに内へまろび入り、

ト門の戸こはれ、お杉内へばつたり倒れ、起上り五郎藏を見てびつくりし、

やゝゝゝ、こりや五郎藏も腹切つてか。

さつ　なに、五郎藏どのも腹切つたとや。

　〽苦痛も忘れ、言ひよれば、母は手負に打向ひ、

お杉　これ、何故そなたは腹切つたのだ。

五郎　この五郎藏が腹切つたは、ほかでもない、この首故。

お杉　やゝ、こりやこれ逢州どのゝ首、そんならこれ故腹切つたのか。して〳〵杜鵑花、そなたは何故

さつ　私が自害もその首故。

お杉　何と言やる。

五郎　日頃の短慮と言ひながら、金故書きし離狀も一途に眞實と思ひ込み、殺す心になつたが因果、此の身の運も月隱れ、四邊も暗き引過ぎに、先に立つたる提灯の紋は覺えの扇菊、物好したる裲襠を目當に切りしその主は、杜鵑花にあらぬ逢州どの。

さつ　その間違ひも土右衞門から金を受取り空癪に、當座脫れも聞入れず、無理に茶屋から伴うて行くといふのを買ひ取つて、餘所目にそれと見えるやう、私の紋の提灯に、裲襠までも脫ぎ替へて、難儀を救うて下さんした、朋輩思ひの逢州さん、情が却て仇となり人間違ひで敢ない最期。

五郎　斯ういふことゝは露知らず、最前子分が屆けたる逢州どのからおれへの手紙、思案にくれて讀みもせず打捨て置きしが今の先、この首を見て初めて知り合點行かずとよく見れば、其の人ならぬ杜鵑花が書置、濟まないことゝ思ふにつけ、暗まぎれとは言ひながら、主人の寵愛淺からぬ逢州どのを殺せしは、取りもなほさず主殺し。

さつ　その人殺しを身に引受け、戀の遺恨で殺せしとお前に替つて死ぬ覺悟、賴みの金を渡した上この世の別れに餘所ながら、暇乞をと廓をぬけ、褒められに來た甲斐もなう、常に替りし愛想盡し、

五郎　心にもない惡口は、子分の者を追返し、死なうと覺悟せしとこへ、おぬしが來たは最期の邪魔、わざと情なく言ひなしたも、時刻おくれて露顯なし、繩目に逢はゞ死後の恥、又二つには母親に歎きをかけまいその爲めに、不孝と知りつゝ邪曲非道。

さつ　私とても七右衞門から、この金取りし上からは、生きてゐられぬ憂き身の上。

五郎　いかなる過去の惡緣にや、月日も一つに非業の最期。

さつ　心がゝりは母樣へ、

五郎　歎きをかける不行跡、

さつ　お許しなされて、

兩人　下さりませ。

へお許しあれと合す手も、くるふ手負にいやまして、見る母親が心の苦しさ、

ト兩人手を合せよろしく思入。お杉も涙を拭ひて、

お杉　おゝ、先立つ身にて後へ殘り、かゝる憂目を見ることもみんなこの身の罪障故、今日まで隱せし身の懺悔、この世の別れに聞いて下され。もとはこの身も淺間家の須崎角之進殿の妻にて、これなる角彌を生んで後、身性が惡さに家出をなし、夫の罰にて艱難辛苦、所々方々と廻る中、縁でがな丹波の國柏原といふ所の、木ノ瀨と言ひし鏡師の妻となつて女子を儲け、卯の葉と名附け育てしが、四歲になるその年に夫木ノ瀨卯の葉を連れ、都へ行つて歸りがけ、淀の夜船で喧嘩に出逢ひ、餘所の娘を連歸り、何處の誰が子と知れねば後の卯の葉と名を呼び、繼子々々と憎しみて、夫が死んで女郎に賣り、金にしようと思ひの外家出をなして行方知れず、それより一家親類も疎遠となつて都へ出で、花形屋の遣手となり、逢州どのゝ話しにて計らず知つた娘の行方、我子の卯の葉を連行きしは、團の一齋どのといふ逢州どのゝ父御にて、我がゆがんだる心に引替へ、名も寄居蟲と呼びかへて可愛がつて下されたも、一齋どのゝ最期の後行方も今は知れずとて、言出しては泣きたまふ逢州どのゝ眞實に惚れ、惡念發起して善心になると間もなく、そなたと親子と

いふことが盡きぬ緣とて知れたる嬉しさ。それより廓の暇をとり、母子一つにゐるにつけ、繼子よく／＼と疎みし上、行方知れずになつたりと逢州どのにも言ひ兼ねて、心の内で詫びなし知らぬ體にもてなせしが、折がなあらば逢州どのへ、この身の始終打明けて詫せんものと明暮に、思ふ甲斐なき此の有樣、我が惡事とは言ひながら、心の内の苦しさを推量してたもいなう。

〽身を悔みたるかこち泣き、杜鵑花は苦しき顏を上げ、

さつ　さうして見れば逢州どのは、私の爲めには遠緣ながら義理ある妹、それをこの身の身替りに非業な最期遂げさせしは、なほ／＼濟まぬこの杜鵑花。して、母さんが時鳥どのを、逢州さんの妹と知らしやんしたは、如何なる譯で。

お杉　さあ、それはこのほど計らずも花形屋で、後の卯の葉が良治公の側女となりて、逢州どのと名乘り合ひしその時に、廊下の外で樣子を聞けば我身の上の物語り、これこの胸へ焙鐵を當てらるゝより苦しきに、いつそ卯の葉に對面なし、身の詫せんと思ふ內、姿は消えて行方知れず、後にて聞けば非業な死を遂げ、迷つて來たと聞く本意なさ、それが病ひの元となり、三月越しのこの病、必ず先へ死ぬべき身を以て、後へ殘りてこの樣な、悲しみ見るも惡事の報い、天道樣の御罰故、歎いて下さるな。

〽過ぎ来し方の物語り、聞くも語るも涙にて、しぼり兼ねたる袖袂、始終の様子門口に窺ひゐたる袖乞が、笠脱ぎすてゝ内へ入り、

ト此の内お杉よろしく思入にて言ふ、この以前より下手へ團ノ一齋の下部切平、逢州妹寄居蟲實は木ノ瀬の娘卯の葉出て窺ひゐて、この時寄居蟲笠を取りて内へ入り、

やど　はッ、お許しなされて下さりませ。（ト兩人下の方へ住ふを、お杉見て）

お杉　見ればこなたは袖乞どの、何故あつてこの所へ。

切平　お取込みのその中へ、心なきことながら、唯今あなたのお話を垣の外にて承はり、

やど　いやしい身をも顧みませず、これを御覽に入れたさ故。

〽襟にかけたる守袋、娘は手早く取出し、お杉が前へさし出せば、審しげに打見やり、

お杉　古金襴の笹龍錦、覺えあるこの守袋、もしや中には一寸八分の正觀世音の尊像が入れてありはせなんだか。

やど　はい、おつしやる通りこの中に、觀音樣がござりまする。

ト守袋の中より觀音の像を出し見せる、お杉思入あつて、

お杉　扨はそなたは一齋どのゝ養育にて、

やど　成長なしたる、寄居蟲と申す者でござりまする。

お杉　笹鶴錦の守袋といひ、見覺えのある幼顏。

やど　そんなら、お前が四歳の時、

お杉　淀の夜船で失ひし、實の卯の葉であつたるか。

やど　母さまでござりましたか。

お杉　おゝ、よう尋ねて來てくれたなあ。

〽幾年別れ程經ても、眞身の親子に抱き寄せ、嬉し涙にくれにける。扨は血筋の妹かと手負二人も頷けば、連の男はさし寄りて、

ト寄居蟲お杉に縋りつく、五郎藏杜鵑花も扨はといふ思入、切平思入あつて、

切平　すりや、お前樣が寄居蟲樣の實の母御でござりまするか。私事は切平とて則ち團ノ一齋が下部。名古平といふ惡漢の企みによつて姉上の忘れ貝樣のお行方知れず、寄居蟲樣を伴うて敵の在所姉上の、お行方尋ね歩く中、貯へ盡きてせん術なく、袖乞とまでなりましたが、命あればで母樣にお逢ひなされて寄居蟲樣、嘸お嬉しうござりませう。

やど　これが嬉しうなうて何とせうぞいの。

お杉　そんならお前が切平どのとか、人に勝れし親切は逢州どのゝ話しにて、詳しう聞いてをりました。してまあ、こゝへはどういふ譯で。

切平　最前門へ立つた時、五郎藏どのが手の內を下されし巾着は、世にも稀なる笹蟹錦、寄居蟲樣が目早くも御覽なされてもしもやと、小影に忍んでをりました。

お杉　むゝ、その巾着は私の巾着、それが緣で小影に忍び、樣子を聞いたとあるからは、そなたの姉の忘貝どの、今逢州と名を替へて昨夜果敢ない死を遂げしも、定めて聞いたでござらうの。

やど　あい、お二人樣のお話しで、詳しい譯を知りました。

切平　せめてこの世のお別れに、お首に逢はして下さりませ。

お杉　おい、逢はさいで何とせう、逢州どのゝおの屍へ、絕えて久しき同胞の、よう對面なしやいの。

〽涙ながらに立上り、首級を出して逢はすれば、一目見るより泣きくづをれ。

ト　お杉切首を經机のまゝ持來り、寄居蟲に見せる。

やど　あい見覺えのある姉上樣、かゝるお首に逢はうとは、今日の今まで思はずも、淺ましいこの有樣、詳しい樣子を聞く上は、誰を恨まうやうもなし、前の世からの約束事、

〽とはいへ昨日逢ふならば、笑うて三人このやうに、顏と顏とを合さんに、一日おくれてあ

おきなや、これなう姉様寄居蟲が、遙々たづねて來ましたに、
お〻妹か、よう來たと、たつた一言いうて下され。
〽逢州といふ傾城が、昨夜人に殺されしと、道行く人の噂に聞き、小唄に作りて切平と、人の軒端にた〻ずみて、
知らぬこと〻は言ひながら、
〽姉の浮名を世に唄ふ、不孝者が世にあるかと、歎くを聞いて母親が、
お杉　思ひ廻せば廻すほど、如何なる過去の惡緣やら、
やど　お主のお爲めになされたる、忠義が却て仇となり、
切平　生先長いお二人が、身の言譯にこの有樣。
五郎　約束事とは言ひながら、名のつて見れば脫れざる、
やど　今日まで知らぬ、お前は兄さん。
さつ　緣につながる私は姉。
五郎　妹といふも面目なき、
お杉　討つたる兄は胤變り、

さつ　腹は一つの義理ある仲。
やど　討たれし姉は養育の、
切平　これも義理ある兄弟仲。
五郎　しがらむ縁の、
皆々　敵同志。
〽又も涙に暮れけるが、寄居蟲は泣く眼を拭ひ、
やど　年頃慕ひし母様やまた姉様に此のやうに、廻り逢ひは逢ひながら、見るも果敢なきこのお姿、
〽後言ひさして母親の、袂にすがり歎くにぞ、切平傍へさしよつて、
切平　そのお歎きは御尤もながら、忘貝様といふことを、御存じなければせん方なし、その小唄が仲介して、思ひがけなき母上に廻り逢ひたまひしは、姉上のお導き、かゝる上は父上の最期の様子をお話しあつて、敵討こそ肝要なり。
〽言むなくさむれば母は引取り、
お杉　一斎どのゝ最期の様子は、良治様へ逢州どのが物語られしを聞きし故、そのことは聞いてゐれど、討ちたる仇は何者なるや。

やど　さあ、敵は誰とも知れざれど、隱形の術とかいうて、形を隱す曲者こそ、まさしく討つたる敵ぞと、父の今際の物語り。

五郎　はて、似たることもあるものかな、昨夜土右衛門を討洩らせしも、かの隱形の術ある故、

やど　おゝ、それぞ敵のよき手がゝり、

切平　心を附けて詮議なさん。

さつ　その土右衛門より取り得し百兩、（ト金を出し）廓といへど情ある親方故に揚代も、命を捨てたら先づそれまで、さし當りてこの金は、寄居蟲どのへ身貧の貢ぎ。

やど　すりや、大まいのこの金を、

さつ　せめては、それが身の言譯、

五郎　おゝ出來した女房、これにて思ひ置く事なし、少しも早く冥土へ行かん。

さつ　あゝこれ待つて下され五郎藏どの、かりにも離狀上げたれば、それがあの世の心がゝり、

＼後言ひ兼ねし心の内、母は敏くも汲み取りて、銚子にうつす水杯、

お杉　未來は一つ蓮葉に、二人寐よとの固めの杯、

切平　この世の迷ひを、

兩人　晴らす爲め。

〽杯を手にうつせど、身もわなゝきてゆりこぼす、水の哀れや消えて行く浮世は夢の蝶花形。

お杉　島臺ならで鶴龜を、法の燈に明日は見る、

五郎　經帷子の白無垢も、

さつ　血汐に染める色直し、

やど　三々九度や九品の蓮臺、

切平　靈棚ならでいつかさて、

お杉　里歸りせん冥土の嫁入り。

〽目出度き祝に杯も哀れ重ぬる鐘の音に、籬を洩れて散る櫻、手負はきつと打ち見やり、

五郎　いかに、今この櫻の散るにつけ、思ひ出すはその昔、忍び合ひしもあらはれて、縛り首にもなるべきを、お慈悲に命助かりしは、而も二月半ばにして、袖の渡りの櫻時。

さつ　おゝ忘れもせぬその時は、長福寺より歸り道、遠山尼公の仰せを受け、浮世忘れの今樣を、

五郎　そなたの琴に我胡弓、

さつ　手ごと合はせし緣の絲、

五郎　かの今樣を、

兩人　この場にて、

お杉　そんなら二人は陸奥の、

やど　袖の渡りで唄うたる、

切平　浮世忘れの一節を、

五郎　この世の名殘り、二つには、

さつ　逢州どのへ、

兩人　手向草。

〽言ふに傍の胡弓を取り、渡せば杜鵑花は居直りて、ふるへながらも膝に置き、絃の調子を調ぶれば、おくれはせじと五郎藏も側なる尺八取上げて、吹合はすれど息洩れて、傳ふ涙は露霧にきれど繋がる妹と背や、

ト此內寄居蟲壁にかけたる胡弓を取つて出す、杜鵑花これを取り調子を合はせる。切平は尺八を取つて五郎藏に渡す、五郎藏取上げ歌口をしめす、お杉は逢州の首へ線香を手向ける。寄居蟲は杜鵑花を、切

平は五郎藏の介抱な始終なし、浮世忘れの獨吟になる。

〽まづ春は花の下、夏は涼しき川添に、夜よし月よし秋たちて、雪の朝旦の弱竹に、とまる雀の千代と啼く、浮世忘れのおもしろや、浮世忘れのおもしろや。

ト兩人苦痛の思入にて、胡弓、尺八の打合せよろしくあつて、

〽戀慕流しの仇しなも、胡弓呼吸の絃絶えて、

ト五郎藏、杜鵑花刄を拔き、がつくりとなる。

お杉　あづさの巫女にあらねども、

やど　胡弓の弓の音にぞ寄る。

五郎　一世の親子、

さつ　二世の夫、

切平　三世の主の、

皆々　三つの弦。

ト本釣鐘鳴る。

〽哀れはかなや、

時鳥と五郎藏

ト五郎藏、杜鵑花咽喉をかき切り落入る。皆々愁ひの思入、引張りよろしく、本釣鐘三重にて、

幕

時鳥と五郎藏（終り）

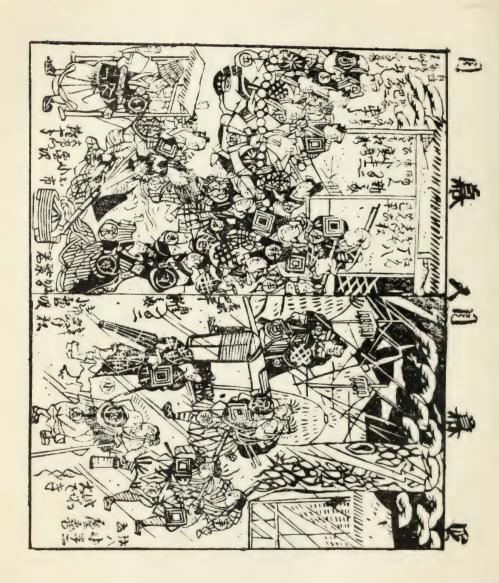
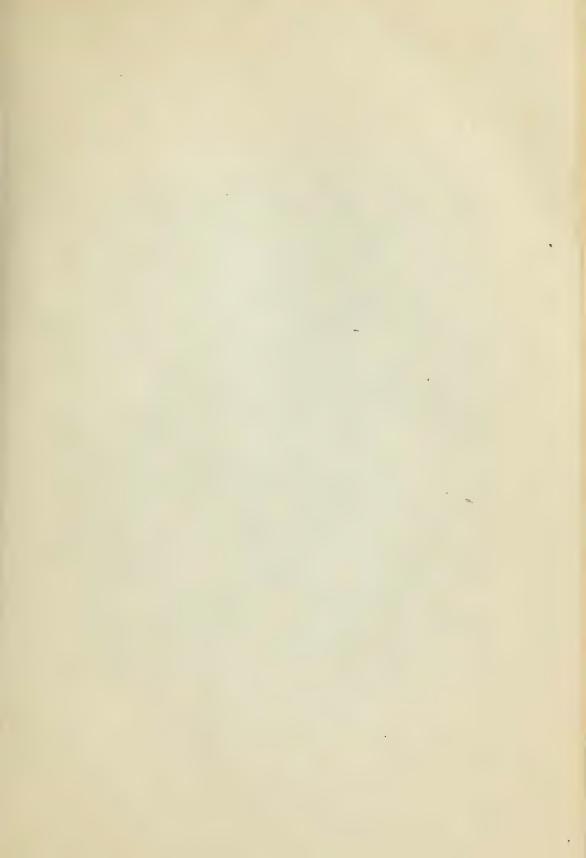
『女定九郎』は慶應元年五月、五十歳の時中村座に於て書卸された。『忠臣藏後日建前』といふ名題の下に、義士の討入りや兩國橋の引上げや、小山田の一條などを取入れた、銘々傳めいた忠臣藏物の中へ、正風の「假名手本忠臣藏」の四段目、五段目の趣向を利かしたもの。原材を鶴屋南北の草双紙『女扇忠臣要』（文政九年版）に仰いだもの。「小團次の女定九郎上方狂言なれど目新しきとて評判よかりし」と續々歌舞伎年代記に記載されてゐる。小團次の演出した毒婦物の一つで、同じ毒婦型でも『正直清兵衛』のお瀧とは、行き方は少し異つてゐるが、そこに幕末の毒婦に就いて多少暗示する所のものがあらう。

書卸しの時の役割は、市川小團次（まむしのお市）、河原崎權十郎（小山田庄左衛門）、市川米十郎（原郷右衛門）、市川米五郎（女衒の善六）、岩井粲若（勘平女房おかる）、市川新之助（獅子舞角兵衛實は奴覺平）、中村雁八（紅勘にじ八）、市川小半次（種ヶ島の六）、市川廣藏（めつぽふ彌八）、岩井しげ松（母おかや）、中村相藏（屋嗅お友）等であつた。

挿繪にしたのは、稿下當時の繪草紙の畫面である。

大正十三年十一月

編者誌す

忠臣藏後日建前（女定九郎 ―― 一幕）

上の巻　　伏見街道雨宿の場

【役名 ―― まむしのお市、獅子舞角兵衞實は山田剛平、種ヶ島の六、めつぽふ彌八、判人善六、子獅子音松、お輕母おかや。】

（伏見街道の場）―― 本舞臺一面の淺葱幕、所々に松の立木、上下に岩組の張物、山崎淀伏見街道としるせし傍示杭、總て伏見街道の體、雨車雷の音にて幕明く。

〽鷹は死しても穗はつまずと、譬に洩れず入月や日數も積る山崎や、渡船場近き侘住居、種ヶ島の六めつぽふ彌八夜山稼ぎの暮六つ過ぎ、空は俄の夕立の晴間をこゝに松の蔭、

ト此の文句の内下の方より種ヶ島の六、めつぽう彌八蓑笠にて鐵砲をかたげ、獵人の打扮にて出來り、

六　めつぽふや、少し靜になつたの。

彌八　おゝ雨も小降りになつたの。

六　然し今まで強く降つたのは、獵人の夕立だから、ほんの鐵砲雨だの。

彌八　さうぢやの。

六　ときに、おらアの、生れ附いて雷とけんのみは、どういふものか蟲が好かぬわ。

彌八　そりやあこなさんが言ふまでもねえわ、十人が九人、あんまり好きなものはないわえ。

六　いや、好きなといへばおぬしの馴染の狸の角兵衞、いつも山籠りの飲仲間ぢやが、去年の暮にころり往生、後へ殘つたはお友後家、

彌八　いやも、厭みたつぷり黑あぶらで、小鬢さきの禿ツちよを隱し、京都へ便りのある每に三條の白粉の、祇園の梳油買うてくれいと賴むとは、おしやらくな衒妻ぢやあないか。

六　めつほふや、そんないに惡く言やるな、あれでもそれ相應な主ができるわ。

彌八　これ種ケ島何ぢや、ほん〳〵と褒めくさるな、はあ、汝ひよつと入聟にでもなる氣ぢやな、破鍋にもとぢ蓋ぢやな。

六　何言やるぞ、そないなことを聞くとな、嚊が又河豚のやうにふくれるわ。

彌八　その筈ぢや。

六　何故にな。

彌八　はて、獵人の嚊ぢやもの、鐵砲河豚のやうになるわ。

兩人　はゝゝゝ。

六　それはえゝが、さつきの大雨に火繩は消され、火口は濕つてつかぬが困つたものぢやな。

彌八（花道の方を見て、こなしあつて、）あれ〳〵向うから灯が見える、地獄で佛ぢや。

六　おゝ幸ひ、そんならこゝに待つてゐて、

兩人　どれ、火の無心せうかえ。（ト腰をかける。）

〽こぞりよつたる折柄に向うより來る小提灯、桐油をかけし四つ手駕籠、近所目慣れぬ祇園町、一文字屋が夕立に逢うて濡れたゐ濡れつばめ、抱のお輕を親里へ送り來りし夜の道、

トこの文句の内花道より判人善六菅笠を冠り跣足にて出來り、後より桐油をかけし四つ手駕籠を擔ぎ出來る。

〽それと見るより二人の獵人、

六　もうし〳〵、御無心ながら火を一つお貸しなされて下さりませ。

彌八　この夕立にほくちを濕らかし、大きに難儀いたします。

兩人　お貸しなされて下さりませ。（トこれを聞き、善六氣味惡き思入にて、）

善六　この街道は物騷と知つて合點の大勢連れ、得こそは貸さじ出なほせ〳〵、びくとでも動いて見よ、許すことぢやあないぞ。

〽反打ちかけて力みゐる。（ト善六刀の柄に手をかけきつとなる、兩人もおどろきて、）

六　もうし〳〵、わしらは盜人ぢやござらん．火繩を消した獵人でごんす。

彌八　胡亂なものぢやないほどに、

兩人　どうぞ貸して下さりませ。

善六　そんなら主達は盜人ではないか、あの獵人に違ひないか。

六　あいの、獵人に違ひござりませぬ。

善六　やれ〳〵、嬉しや〳〵。

〽言ふに双方心解け、

そんならまあ氣遣ひはないといふものだ。さあ〳〵點けてござらつしやれ。

六　はい〳〵、これは有難うござります。（ト駕籠の棒端に括りし提灯の火を火繩へ移す。）

彌八　さうしてお前方は、どつちへ行かつしやります。

善六　いや、わしは京都の祇園町から、山崎の與市兵衛といふ百姓の家をたづねて行くものだが、この眞暗がりのこと、皆目道が知れないが、どうぞ敎へて下され。

六　えゝ與市兵衛が所かな、それはこの山崎の渡し場を左りへとり、百姓與市兵衛後家とたづねさつ

しやれ、直に知れます。

彌八　もし又泊り屋が聞き度くば、船場の甚左衞門といふが宿をします、賴んで泊めて貰はつしやれ。

善六　それは大きに忝ない。

ト この時雷の音烈しく鳴る、皆々びつくりしながら耳を塞ぎ、

皆々　そりや光つた〳〵。

〽そりや光つたといふ立の駕籠を早めて急ぎ行く。

ト 善六先に駕籠の人數桑原々々と上手へ走りはひる。兩人こなしあつて、

六　彌八聞いたか、あの衆はてつきり京都の一文字屋の人達だぜ、駕籠に乘つたはお輕であらう。一周忌の墓參りと見えるわい。

彌八　いかさま、もう年忌ぢや、月日に關守なく、光陰鐵砲の如しぢや。

六　鐵砲よりはめつぽふや、そろ〳〵行かうか。

彌八　ほんに、こんな晩は長居も無駄な種ケ島、こなたの名の通りで、ろくな物はないわえ。

兩人　はゝゝゝ。

〽話しながらに獵人ども、火繩の灯影に山路を、たどり〳〵て行過ぎる。

ト六先に彈八鐵砲をかたげ下の方へはひろ、これにて淺葱幕を切つて落す。と長畷の場となる。

(鳥羽畷の場)——本舞臺後ろ黑幕、眞中に松の大樹、下手へ續きの掛稻、上手へ寄せて藁葺の狩小屋を見せ、この軒より下の方へ三筋ほど鳴子を引張り、よき所に石地藏、所々へ稻叢をあしらひあり。雷の音雨車にて、窓蓋を下し暗くする。と直に床の竹本になる。

〽又も降り來る雨の脚、與市兵衛の後家おかや、短き夏の夜の道、人を待つ身の長畷。

トこの文句にておかや在所婆アの打扮にて菰を冠り、竹の子笠、杖を突いて花道より出來り、

かや　やれ〳〵怖いあらし交り、待ちこがれた娘の戻り、途中まで迎ひに出たれどこのやうな雷樣では一足も前へは行かれず、家へ歸るもこの大降り、おゝ幸ひこゝは地藏堂、さうぢや〳〵。

〽杖を力に歩み寄り、(ト舞臺へ來り、)

もしお地藏樣、ちつとの間、緣側へこの婆をおいて下さりませ。

〽屈む腰も緣側へ、これも一樹の雨宿り、

トこの時花道揚幕の内にて、

お市　おゝい〳〵、

〽と後より灯影をあてに土手傳ひ、
トまむしのお市、結び髪、仇なる女の打扮にて日傘をさし出來りて、

もし、ちよつと待つておくんなせえな。

〽やう〳〵こゝであるさびの帷子の裾高からげ、おかやはそれとすかし見て、

かや　今呼びかけさんしたは、お前でござつたかいの。

お市　あい、わたしだよ、大そう早い足だねえ、お前に追ひ附かうと思つて、着物の裾をはいはねだらけにしたァね。

かや　見れば近所のお方でもなし、どこからござつて夜夜半、お前はどこへ行かつしやります。

お市　あい、わつちやあ京都の者だがり、この山崎に一周忌の佛があつて墓參りに來たが、無緣の佛で墓が知れず、やう〳〵尋ねて暇どる中、づツぷり暮れてこの夕立、後前遠いこの畷、後生だ、どうぞお婆さん、道連になつておくんなさいな。

かや　あゝ、そんならお前も寺まゐりかえ、わたしも一周忌の佛があつて、祇園町に居りまする娘が、今日歸るとてこの中文をよこしました故、午から迎ひに出かけましたが、この吹降りで行かれはせず、すご〳〵家へ歸るところ、どうやらお前も勸めをばなさんしたお方さうなが、わしが娘を

御存じか。

お市　さればさ、知つたお子かも知れません、さうしてその娘御のお名はえ。

かや　名はお輕と申しまして、以前は武家にも御奉公、手蹟はたしか御家流、この手紙をば見て下されの。

ト何心なくさし出し、

いよ〳〵今日歸りますか、どうぞ讀んで見て下さりませ。

お市　ぶしつけながら、ちよつとお見せなさんせ。

トこつちは一物件の文、提灯の火にかざし見て、

「一文して申上げ候、いまだ暑中と申し暑さ強う候へども、御前樣御事御さはりなういらせられ候御事、しみ〴〵御嬉しく存じ候、左樣に御座候へば、我身事近々に家方へ歸り候樣親方樣御申し候へば、何卒ともじ樣つき候へば勘平殿の一周忌も引續き七月朔日に候へば、それまでには是非々々まゐり候て墓參りもいたし度く、殊には兄平右衞門殿の御恩に相成り候、大石樣始め各々樣の佛事供養もいたし度く、それのみ願ひをり候、分けて申上候は、いつぞや親方より御請取りなされ候わたしが身の代金、今もつて御所持とのこと、不用心にも候へば、庄屋樣方へなりとも御預け置可被成候、いづれにも法事前にはきつと參じ、その節ゆる〳〵積る御物語りも

いたし度く、それのみ御目もじのほど樂しみ暮し候、めでたくかしく、御かもじ樣まゐる、かるより」あゝ、そんならお前の娘御さんは、祇園町でお屋敷さんに請出された、噂の高い一力のお輕さんだね。

かや　はい、左樣でござります、請出されたは去年の秋頃、親方樣の隱居所へ、何不足なく預けられ、時節を待つた今年の追福。

お市　さうかえ、それは何よりいゝ子を持つて仕合せだねえ。

〽話の中、またも眼をさす稻光り、

そりや光つた。

ト雷の音烈しく、手紙と提灯とを取落す、お市思入あつて、

これはしたりお婆さん、光つて間のある雷樣は、めつたに落ちやあしないやね。

かや　何ぢや知らぬが、雷と聞いても身體が震へますわい。

お市　おや／＼、おゝ、お前提灯を消してしまひだね。

かや　はい、提灯ばかりか今の文も何處へやら、そこらへ落しましたわいな。

お市　きついびつくりの仕樣だねえ。

ト言ひながら手紙を探り取つて懐へ入れ、守袋とすり替る。

〽暗き心の行潦、手にさはつたる件の文。

お婆さん、あつたよ〳〵。

かや　ござりましたかえ。

お市　あいよ。

〽しすましたりと懐より、後の嘆きと三つ折の紙取りいだし何氣なく、

お婆さん、それだらうね。

かや　はい〳〵、これは有難うござります。

〽内に守袋のあるぞとも知らず受取るその所へ、車軸の中を息せき子供を背に背負ひ獅子、

ト雷の音烈しく、ばた〳〵にて花道より獅子舞角兵衛實は奴覺平、腰に笛太鼓を附け、獅子を冠りたる音松を背負ひて走り出來り、

角兵　桑原々々。

音松　怖いわいなう。

ト舞臺へ走り來り、お市に行當る、お市びつくりして飛退く、この時雨止む。

お市　おやびつくりした、誰だえ、どこの人だえ。

角兵　まつぴら御免下さいまし、わしは八幡の在町に宿をとつてをる角兵衛獅子、小僧を負つてこの夕立、外の手合にははぐれましたが、どつかこゝらに泊る所はござりますまいかな。

お市　そりやあ嘸お困りだらう、こゝらに宿屋はないかねえ、お婆さん。

かや　この近所に宿はなけれど、もうこゝから一里行けばわしが家、幸ひ今日は年忌の佛事。

角兵　そんなら、わしとこの小僧を、

かや　後生の爲めに、泊めて進ぜませうわいの。

角兵　それは有難う存じまする。（トお市こなしあつて）

お市　お婆さん御覽なさい、拔けるやうに降つたと思へば、もう雲ぎれがして來ましたよ。

角兵　又も日和の替らぬ中、

かや　さあ、連立つて行きませう。

お市　そんなら、お前もうおいでか。

かや　お前さんも御一緒に、

お市　わつちやあ京都へ歸る者、日和になつたから歸りませうよ。

かや　泊つて明日今井船に飛乘つてござればよいに。
お市　これでも家を案じるから、さうしてお前の家の名は、
かや　この山崎の渡し場を左りへとり、右へ廻り、榎の本、百姓與市兵衛。
お市　御緣があつたらたづねませうよ。
角兵　そんなら、これで京都のお女中、
お市　おしづかにおいでなさいましよ。
〽旅は道連世は情、打ちつれてこそ立歸る。
トおかや、角兵衛は音松を背負ひて、よろしくこなしあつて上手へはひる。
〽お市は後に獨り言、（ト思入、蟲笛、蛙の聲になり、文を出し思入あつて、）
そんなら今のお袋はお輕が母、腹を切つたる勘平は、いはゞ亭主の仇敵、この手に彫つたは二世の約束、（ト腕を捲りつくん＼見て、）惡黨ながらも轉び合ひ、この彫物の定九郎が女房お市、この文にある百兩の、金を騙るがせめての腹癒せ。
トこの途端に鳴子鳴りて本鐵砲の音する。
えゝ、びつくりした、雷樣だと思つたら鐵砲だよ。（ト本釣鐘。思入あつて、）月日も替らず、去年

の今夜だ、おゝ、（ト時鳥笛、身震ひするを木の頭。）一周忌はまつぴらだ。
ト幽めて雷の音雨車にて、上り夜船の唄にてよろしく

ひやうし幕

下の巻

與市兵衛内の場

【役名――まむしのお市、小山田庄左衛門、獅子舞角兵衛實は奴角平、お軽の母おかや、判人善六、雇婆お友、種ヶ島の六、めつぽふ彌八、旅僧頓念、金毘羅參り竹藏、紅勘にじ八。勘平女房お軽、其他。】

（與市兵衛内の場）――本舞臺四間通し前へ突出したる藁葺の平舞臺、上の方鼠壁にて内四尺小高き佛壇、名號の掛軸の前に冷光院殿の位牌、俗名與市兵衛、勘平、平右衛門と記せる小振なる位牌を飾り、眞中に縞の財布、花立、燈明を上げ、この前の机へ忠臣藏五段目の鐵砲、蓑笠、玉藥の道具を列べあり、眞中は暖簾口、下手の壁に古びたる獸の皮を吊し、例の所門口、この外藪疊、榎の大樹へ一枚板に、六月二十九日、七月朔日施行宿いたし候と筆太に記して結びつけあり、傍に草井戸、捨石、總て與市兵衛内の體よろしく、こゝに金毘羅參り竹藏、旅僧頓念、紅勘にじ八いづれも旅裝になり、村の百姓四人

居並び茶を飲んでゐる。下に獅子舞角兵衛連木にて牡丹餅をついてゐる、雇婆お友桶を押へてゐ、獅子舞の子供音松は遊んでゐる、この見得みさき踊りの唄にて幕明く。

角兵　やあ、ぼつたり〳〵。
お友　ハアスウ〳〵。
頓念　いや、所替れば品替ると、こゝらあたりで餅をつく掛聲は、また違ひますの。
竹藏　もつと身にしみてついたり〳〵。
角兵　やあ、ぼつたり〳〵。
お友　ハアスウ〳〵。
皆々　いや、こりやあ奇態だ。

トこの時分より百姓の一佛檀に飾りある鐵砲を取り、狙つて見たりいろ〳〵こなしあつて、トゞこの鐵砲へ玉を籠め口藥をさすこと、これに人々は心附かず、紅かんにじ八件の牡丹餅をつく掛聲を聞いて、

にじ　いや〳〵、こりやこゝらばかりではござりません、たしか山科の方へ行きましたら、かの評判の大星樣の隱れ家、まづわたくしにはひれと言つて下さりまするから上りましたら、お臺所で美しい娘御がこねどりで堺からござつた義平さんとかいふお人が、餅をついてゐさつしやりましたが、

とんと此の通り、義平樣が、やあほつたり〳〵、小浪樣とやらがスウ〳〵言つてゐられました故、
これは奇妙、何と申す囃子でござりまするとと聞きましたら、

皆々　何と言つた〳〵。

にじ　小浪が餅つく義兵（きれ）の音ぢやと言はつしやりました。

角兵　はゝあ、兎が餅つく杵の音をしやれたのぢやな。

皆々　やう〳〵分かつた、あはゝゝゝ。

　　トお友　百姓　の一が鐵砲を持出しなるを見附けて、

お友　これ〳〵佛檀の前のお道具をいぢるのはお止しよ、さうして鐵砲を持出し、何にするのだえ。

百一　今日は與市兵衞どんの一周忌ぢやによつて、この鐵砲を持つて山へ行き、兎でも取つて來て佛樣へ供へようと思つてさ。

お友　そりやあ惡いいたづらだ、佛樣のものをいぢりツこなし。

百一　えゝ、やかましいおつかあだなあ。（ト元の所へ鐵砲をおく。）

百二　これ〳〵、こゝの家の親仁どのは、生きてゐる内は陽氣な人ぢやによつて、

百三　これから何でも賑かに、

百四　百萬遍でもやらかさうぢやないか。
にじ　そんならわしも、生業の藝盡しでもやりませう。
角兵　わしも小僧と一緒にやりませう。
頓念　それは何より與市兵衛どのに功德ぢや、さうして珠數はあるかな。
お友　珠數はござらぬが、こゝにある細引で間に合はして貰ひませう。
百一　珠數はそれでも間に合はうが、さうして鉦はあるか。
皆々　さあ〳〵、鉦だ〳〵。
お友　なに、かい、かね、金は女房賣つた金、その金故去年の今日こゝの家のおかやさんを泣かせをつたのだ。
頓念　鉦はこゝにあるから、これからわしが音頭を取りませう。
皆々　さあ〳〵、お賴み申します〳〵。
頓念　よし〳〵、わしが美音でやりませう。南無阿彌だん佛。
皆々　南無阿彌だん佛、（ト細引を靜かに引き廻す。）
角兵　ヤア、まだ〳〵、イヤ。（ト角兵衛獅子の太鼓をたゝく。）
にじ　平家の方には名高き强弓、（ト三味線を彈く、頓念は鉦をたゝきて、）

頓念　南無阿彌だん佛、

皆々　南無阿彌だん佛、

角兵　まだ〱、イヤア、

にじ　能登守教經、

頓念　南無阿彌だん佛、

皆々　南無阿彌だん佛、

ト皆々立つて踊りだす。頓念は鉦をたゝき、紅勘は三味線を彈き、角兵衞獅子踊り出す、よき時分にチンツ、になり、花道より判人善六先に駕籠を擔がせて出來り、門口へ出て、

善六　おい駕籠屋さん、大きに御苦勞だつた。(ト祝儀をやる。)

駕舁　へい、有難うございます。

ト受取りて辭儀をする、善六思入あつて、

善六　はい、御免なさいまし、おかやさんは家かね。

ト皆々はこれに構はず南無阿彌だん佛と言ひながら踊りゐる、お友思入あつて、

お友　これ〱皆の衆、少し靜にして下さい、門口にお客があるやうだが、さつぱり譯が分からぬ。

角兵　それぢやお皆の衆、奥へ行つてやりませうかな。
皆々　さうしませう〳〵。（トわや〳〵言ひながら奥へはひる、お友門口へ來て）
お友　はい、どちらからおいでなされました。
善六　わつちは京都の祇園町の一文字屋からまゐりましたが、おかやさんは家においでかね。
お友　はあ、それぢやあお前が祇園町の一文字屋さんかえ。
善六　どうか、おかやさんをちよつと呼んでおくんなさいまし。
お友　はい〳〵、もしおかやさん、お人がござります。（ト奥へ向つて言ふ、と暖簾口にて、）
かや　はい〳〵、唯今まゐります。（ト奥より出來る、この内善六はお輕を出しやる。）これは〳〵善六さん、いろ〳〵お世話樣でござりました。
かる　母さん、逢ひたかつたわいなあ。（ト内へはひる、善六もはひる。）
かや　おゝ娘か、よう來てたもつたなう。
善六　（下手に住つて、）おゝお母ア、ぜんてえ昨日はお輕さんを連れて來るところ、途中でのあの大雨でおそくなりましたが、親方の言ひなさるのには、まだ荷物が預かつてあるが、男の傳手もあること故、その時送らうから、よくさう言つてくれと言ひなさいました。

かや　何から何までお前のお世話、いづれお禮におかゝります故、親方樣へもよろしくおつしやつて下さいませ。これ〳〵娘、善六さんにお禮を申しや。（ト言つてもおかるはつんとしてゐる。）

善六　いや、お母ア、今日の佛の與市兵衞どんはいゝ人だつた故、かうして佛事供養をさつしやれたら、嘸悦ぶことであらうわいなう。

かや　いやもう、ほんの佛事といふ形ばかりでござります。

善六　（榎の下の建札を見て、）六月二十九日、七月朔日施行宿と札を建てておかつしやるのは、一周忌の佛の爲めに施行宿をさつしやるのか、これは大きな功德ぢやなう。

かる　もし善六さん、わたしの年季證文はえ。

善六　おゝ違えねえ、すつかり忘れてゐた。（ト懷中より年季證文を出し、）昨日の雨で濡らすまいと思つてしつかり懷へ入れておいた。さあ、お渡し申しませう。

ト證文を渡す、お輕受取りおかやに渡す。

かや　おゝほんによう氣が附いた、わしもこの事を親方さんに言はう〳〵と思つてゐたが、つい忘れて歸りました。それはさうとこれ娘、何はなくとも善六さんに一口上げぬか。

善六　いや決して構はつしやるな。今がた支度をしたばかりだ。それはさうと、もうお暇にしませう。

かや　まあ、よいではござりませぬか。
善六　久しぶりにお輕さんにも、澤山お話もあらうし。（ト言ひながら立ちかゝる。）
かや　大きに御苦勞樣でござりました、どうか旦那樣へよろしくお賴み申します。おゝ、まだ西日でお暑うござりませう。
善六（門口へ出て、）なあに、どうでこの駕籠へ乘つて行きますから、さのみのこともありますまいのさ。おい駕籠屋、今度はおれが旦那樣だぜ。
駕昇　さあ、お乘んなせえ。（ト善六駕籠へ乘る。）
かや　左樣なれば善六さん、
善六　またその中に來ますよ。
ト在鄉唄になり、駕籠昇花道へはひる。お輕思入あつて、
かる　母さん、わたしや逢ひたうて〳〵ならなんだわいなあ。
かや　わがみよりわたしは又、昨夜の中には來るであらうと思つて、夜一夜待つてゐたが、何ぞ又さし合ひでもあつたのか。
かる　いゝえいな、聞いて下さんせ、親方さんが親切に母さんの顏が早う見たからうと急きたてゝさしや

んす故駕籠に乘つたれど、折惡い雷樣、あの人の言はれるには今宵は何處ぞへ泊り、明日にしたらと言はしやんしたれど、殊更逮夜が大切と聞いた故、何でも夜の中に行きたいと言うたれば、思ひ出したやうに、大事の年季證文を忘れて來た、先づ第一にあれを佛へ供へねば手向にならぬ、何でもこゝらに宿を取り駕籠の者を祇園町まで走らせ、取りにやらうと言うて、厭ぢやといふ者を途次へ泊つたのぢやわいなあ。

かや　ふむ、してその宿を取つたところは、

かる　何ぢややら穢い家でござんしたわいなあ。

かや　おゝ、そりや難儀であつたらうなう。

かる　さあ穢いはよいが、あの善六、醉うた裝してさま〴〵な厭らしい、それから物もろく〳〵言はぬわいなあ。

かや　えゝ判人の分際で憎い奴ぢやなう、然しわがみの家へ戾れば、もう氣兼もなし、親父樣や聟殿の弔ひ料は、わがみの身の代と鄕右衞門樣より下されたお金でありあまり、これから田地を殖して親子樂々と人を使うて暮さるゝほどに、長々の艱難を取返したがよいわいなう。

かる　その樂々も父さんやこちの人と、一緒に暮したらよからうに、思へば本意ない、親夫の死目にさ

へ、逢はぬわたしが身の因果、推量して下さんせいなあ。
かや　さゝもう言やんな、老少不定は世の習ひ、機嫌ようわがみが回向して上げるが何より、もう〳〵泣きやんな〳〵や。
かる　もう泣きやしませぬ、わたしの家へ戻つたが嬉しいで、お前の煩ひにでもなつてはならぬ。そんなら母さん、此方の浴衣着替へてから、御回向しませうわいな。
かや　おゝ、さうせい〳〵。あゝいや待つてたも。浪人してゐる中は兎も角も、聟も悴も一廉の武士に立返り、本意を遂げた位牌の前、遊女の姿で回向をするのも異なもの故、取つておいた屋敷の小袖、せめてそれと着替へてから。
かる　そんなら、さうしませうか。
かや　あの小座敷で着せ替へてやりませう。
かる　そんなら母さん。
かや　一緒におじや。
〽娘をともなひ一間の內、打連れてこそ入りにけれ。〽竹のすがゝき垣の外、色音ゆかしき尺八の、心耳をすまし梵論字は此家の軒にたゝずみて、建板の文字讀下す。

トこの文句の内、小山田庄左衛門旅虚無僧の打扮にて、尺八を持ち花道より出來り、門の建札を讀み尺入にかゝる。

お友 御無用。

〽お友は奥よりおわたゞしく、（ト奥よりお友重箱の牡丹餅を食ひながら出來り、）

あゝ、うまい〳〵。今日は旅行宿で奥はいつぱいぢや、つめ込む所もござらぬぞや。

〽愛想氣もなく言放すに、母と娘は立出でゝ、

トおかやとお輕は好みの衣裳に着替へ出來りて、

かや あゝこれお友さん、今日は佛の命日、わざ〳〵も頼んで回向して貰ひたいところ、

お友 回向ばかりなら、そりやどうでもなさんせ。

〽様子は何か白妙の、元來し道へと修行者は、

ト庄左衛門の虚無僧は、こなしあつて花道の方へ行きかけるを、おかる門口を明けて、

かる あゝもうし御修行者様、今日は志しの佛の忌日、見苦しうはござりますれど、お厭ひなくばお通りあつて、御回向なされては下さりませぬか。

庄左 回向は梵論字の望むところ、殊には施行の宿とあれば、今宵は夜とともに佛事の勤めを。

かる　さあ／＼これへ。

庄左　然らば御免、

〽然らば御免と挨拶し、靜々と座に通れば、

ト庄左衞門門口を入り、草鞋を脱ぎ上手へ通り、天蓋を取る、お友これを見て、

お友　おや／＼薄穢ない旅虛無僧と思つたら、てもまあ立派な、なに、あのりつぱ一からげには言へないものだねえ。

かや　お友どの、何を言はつしやる。

かる　もし母さん、わたしが祇園町にゐた時分、宇治のお客から貰うたお茶が、今の包みの中にござんすほどに、あれを入れて上げませうわいな。

庄左　いや／＼、決して御斟酌には及び申さぬ。何はしかれ、斯くお宿にあづかる上は、どりや御回向仕らう。

〽回向なさんと持佛に向ひ、讀誦の中に眼に附く位牌、

なに、冷光院殿貴山大居士、俗名寺岡平右衞門、俗名早野勘平、こりやこれ、鹽谷家忠義の武士、扨は老母は勘平殿の姑御でござつたよな。

かや　お察しの通り平右衞門の母、勘平が姑でござります。
かる　勘平殿や兄さんを、御存じ遊ばすあなた樣には、もしや鹽谷の、
庄左　いや、拙者は他家に勤めし者、一所不住の修行の者、思ひがけない、
兩人　えゝ。
庄左　どりや、御造作にあづかりませう。
トこの仕組よろしく、道具廻る。
（奥の間の場）――本舞臺上へ寄せて三間の障子屋體、下二間平舞臺、例の所枝折戸、こゝに紅勘にじ八、竹藏、頓念、角兵衞、音松、百姓四人にて丼、皿など取散し、お友徳利を持つて酌をしてゐる見得、紅勘の辻打にて道具留まる。
頓念　さ、こりやせ。
竹藏　おもしれえ〳〵。坊主の踊りはしまりがねえ。
お友　もうかうなつちやあ、神道佛道の差別はないよ。
にじ　金毘羅まゐりと坊さんの道行が見てえ〳〵。
女定九郎

百一　さあ〳〵、やつてくれ〳〵。
頓念　東西々々、東西とは默れといふこと。何ぞやりてえにも、もう〳〵かう醉つては無茶だ。
にじ　おれも三味線を彈いてがつかりした、もうぐる〳〵まはしにしてをさめようぢやあねえか。
竹藏　その事福袍で二分一朱。
百二　安い質だなあ、おれに受けさせてくれ。
百一　白い行衣一點だ、何があるものか。
竹藏　安くしねえ、連れて行つて受けさせてやらう。
百一　はあ、その質屋はどこだ〳〵。
竹藏　山の宿の伊勢田だ〳〵。
百三　こゝからどの位ある。
角兵　はゝゝゝゝ、たつた百二十里あります。
四人　えゝ、何を馬鹿な。
百一　時に皆の衆、もうあと一ぱい馳走になつたら、暇乞ひをして歸らうではござらぬか。
百二　いや〳〵、暇乞ひをすると、婆樣がもつと馳走せうといふから、裏手から直に歸らう。

百三　それにしても、穿物があつちにあるから。
お友　そこらにぬかりがあるものか、疾にわたしが廻しておいたよ。
百四　いや、五分もすかねえ、お友大明神様々々。
晋松　兄様川端へ行つて見たい。
角兵　あゝあぶない、止しにしや〳〵。
お友　ほんに可愛い兒だねえ、もし角兵衛さんわたしの亭主も同じ名の狸の角兵衛と言うたが、去年の暮に何ともなくいつまでも寐てるから、狸寐入りかと起して見たら、とうに往生。
百一　ほんに角兵衛獅子どのも、鰥なら、
百二　その子を連れて後家入りにはひつて、
百三　今度はむじいの角兵衛とでもしたらよからうに。
百四　似合ひさうなに、よい夫婦が出來るぞや。
角兵　それは千萬忝ない、早速御籤でもとつて挨拶しませう。
にじ　と言はにやあ又の御挨拶、
角兵　いえ〳〵、お互ひに一生の固めでござります。

お友　さ、坊や、おいらが餌をつけて、手長海老を釣らせてやらう。
頓念　愚僧も殺生は大好物、
竹藏　おれはこゝで、一寐入りやらかさう。
四人　どれ、お暇いたしませう。
　　ト百姓四人お友音松を連れて下の方へはひる。角兵衛後を見送る。
竹藏　やい虹八日を覺せ、これさ眼を明け、おれだわえ、これ、姐御から頼まれた一件はどうだ。
にじ　そりやあ先刻種ケ島とめつぽふへ、こゝの家のお輕をひつぱらはせる約束にしてある。
竹藏　そいつは妙々。ときにあの姐御が不斷大事に持つてゐる、あの卷物は何だらう。
にじ　おれも何だか金になる代物らしいから、ちよろまかさうと思ふが、なか〳〵大事にして放さねえわ。
竹藏　まあ〳〵、そりやあ後でもいゝことだ。
にじ　然し、何にしても腹が北山だ。おゝ、こゝに牡丹餅があらあ。
　　ト取つて喰べ、咽喉へつまらせたるこなし、
竹藏　えゝ意地穢なしめ、咽喉へつまらせやがつた。えい。（ト背中をたゝく。）

にじ　いや、すんでのこと心中しようとした、もう牡丹餅は御免だ。
竹藏　これから奥で、いつぺえ飲みなほさう。
にじ　そんなら、おれも、
竹藏　さ、來ねえ〳〵。
ト暖簾口へはひる。と入替つて奥より角兵衛出來り、
角兵　小倅めはまだ歸つて來ねえ、みんな生醉だから、どれ、ちよつと行つて見て來てやらう。
〽裾端折つて駈けいだすを、(ト奥より小山田庄左衛門出來りて、)
庄左　あゝいや、覺平待て。(トこれにて角兵衛こなしあつて又下の方へ行きかける。)いやさ、山田覺平、待てと申さば、まづ〳〵待ちやれ。
〽呼びかけられて、
角兵　やあ、あなたは若旦那、ではねえ、(トつか〳〵と戻り、)これ、小山田庄左衛門殿、
〽思ひがけなき覺平は、せきくる無念につめよつて、
庄左　しッ、しッ。(ト大きな聲をするなといふ思入。)
角兵　いや、こなた樣はなあ。今更言つてもせんなき事だが、四十餘人の方々は日本の侍の鑑と言は

れ、お前樣は何だ、討入りの其の夜は遊女賣女に心奪はれ、お頭より用金までも頂戴なし、命惜しさに鎌倉を駈落なし、居所立所に迷はつしやらうが、貯があるからその姿、大旦那樣は高輪のお家にてその事を聞くとそのまゝ御切腹、それ故わしはお前樣の行方をたづね、出逢つた所勝負に腹を切らせ、せめては侍らしく人に言はせたいと、思つてゐた念が屆いて、今日といふ今日い廻り逢ひました。さ、切らつしやい、切らぬか、言はうやうない腰拔どのめ

〽言葉飾らぬ正直いつぺん、庄左衞門威儀をたゞし、

庄左　幼少より我性質存ぜしその方すら、左樣思ふからは、餘人が不忠不義者とさま〴〵に評して嘲けるは尤も、口でまだ〳〵申さうより、この書物を披見いたしやれ。

〽懷中より取出したる袱紗包み、うや〳〵しく差出せば、

角兵　なに、この書物、あゝ言譯なさのこしらへ事であらう。

〽と心どぎまぎ押開き、讀下し〳〵。

やゝゝゝ、こりやお頭内藏之助樣の御手蹟、そんならあなたは。

庄左　世に情なき身の境界、伯州離散のその時より有志の面々心を碎き、既に復讐の期に及び、義雄殿竊に某を招ぎ、その方も知る如く、淺野代々の系圖紛失なして行方知れず、今にもあれ縫之助

様を以て御家再興の時到つて、右の一卷無き時は御家は埋木、この內藏之助が推量には、たしかに佞臣斧親子が所業ならんと心を附くるその中に、天罰廻つて非業の最期、おことは今より不義士となり、同志の者へ配當なす、金子を持ちて逐電なせしと流布なさば、世の人口を塞ぐの計策、殊に其許豫てより許嫁の間瀨金太夫が娘のおよし、定九郎と密通なし駈落せしはよき手がゝり、その手筋より探り求め、系圖の一卷取戻し、廣島家にまします縫之助殿に手渡しなし、潔よく泉岳寺にて追腹致さば一味の人より、拔群の忠義なりと餘儀なき頼み、これといふのも彼の者と赤繩結びしこの身の不覺、

〽我身を悔みすご〳〵と都へ登りこゝかしこ、尋ねさがせど今以て廻り逢はざる口をしさ、まだその上に親人には、我心腹を明かさねば、まことの不義士と憤り、泉岳寺にて御生害、手を下さねど我手にかけしも同じこと、心の內を苦しさを推量いたしてくりやれ。

〽無念淚に暮れければ、

角兵　扨はお頭のお頼みにて、わざと不義士の名を取らつしやつたのでござりまするか、えゝ知らぬこととゝて、もし若旦那、許嫁を嫌ひ定九郎と出奔いたせしおよしどのなら、このほど八坂前の局見世で見かけましたが、最早あなたに緣なき奴と、そのまゝに過行きましたが、それからそれと尋

ぬれば、何處へ行つても知れぬことはござりませぬ。

庄左　なに、すりやおよしが在所知るゝとや、ちえゝ忝ない。

角兵（こなしあつて、）あなたはこゝに止宿して、

庄左　これより直樣汝は彼の地へ、

角兵　女が在所を尋ね出し、

庄左　必ずともにぬからぬやう、

角兵　萬事は明日、

庄左　ちつとも早く、

角兵　はツ。（トばた／＼にて行くを、）

庄左　これ、ひそかに／＼。（ト角兵衞立歸るにちよつと囁き、）

〽しめし合して、

ト角兵衞は花道へはひる、後庄左衞門こなし、これにてこの道具廻る。

（元の場）＝＝本舞臺元の道具に戻る、とおかやお輕の髪をかきあげてゐる。

へ一間の内には母親が女夫はなれし雌無鳥、待つ人もなき娘の髪、誰にかつげの水ゝゝに髪の色澤梳きかへし、品よくしやんと結立てしは後家には惜しき姿なり、

かや　これでやう〳〵着る物に似合うたわいなう。

かる　母さん、お前のもわたしが撫附けて上げるわいなあ。

かや　えゝこのやうな白髪頭を、嫁にほしいといふものもあるまい。

かる　はて、あるまいものでもないわいなう。

かや　ほんに今度は極樂へ、嫁入をしませうわいなう、ほゝゝゝ。

かる　それはさうと、この着る物は、ようまあ仕舞つておきなさんしたなあ。

かや　さればいなう、わがみにはまだしみ〴〵と話しもせぬが、わしは元此の家の娘、父さんは由緒ある侍、仔細あつてお暇賜はり此の山崎へ引移り、その日を過す土民の交り、草深い所で生れしもの、せめては武家方へ奉公させ少しは行儀を覺えさせせんと、傳手を求めて淺野家の御家中、間瀬久太夫樣へ腰元奉公。

かる　あもし〳〵母さん、そんならお前の若い時も、やつぱりあの淺野家の御家中へ、御奉公さしやんしたのかえ。

かや　おいの、首尾よう勤むるその中に、こりやそなたの前では言難けれど、ふとしたことで旦那様のお情受け、たゞならぬ身にわたしの氣苦勞、つひには御新造樣のお耳に入り、一間の中へお呼びなされ、此のほどよりのそちが振舞、心附いてはゐるなれども、手かけ妾は殿御の常と知らぬふりして過せしが、どうかそなたは身重の樣子、それに引替へわたしには女夫のなかに子とてはなし、どうか此家で安産させたう思へども、家中の手前人の口の端、それ故是非なう暇やるほどに宿へ下りて産落さば、表向は養ひ子と披露なし、守り育てよと情のお言葉、まだその上に金子まで下されて産落したは女の兒、直に旦那樣へお渡し申すその時に、それそなたの今着てゐやる着物の端布で、守袋を縫うてやつたりしが、その後御家の騷動にて御家中はちり〳〵ばら〳〵、音信せぬも二昔、蟲が知らせて取つておいたこの小袖が、かういふ役に立たうとは思ひませぬわいなう。

かる　賴り少ないこの身故、どうぞその姉さんに廻り合ひ、力になつて貰ひたいわいなあ。

かや　おゝそなたばかりか此のわしも、お種を宿せし我子ぢやもの、忘るゝ日とてはなけれども、今は何處にゐることやら、思ひ出されてならぬわいなう。

かる　ほんに、それはさうと、お友さん一人では嘸困るでござんせう。

かや　おゝ、よう氣が附きました。それ、わしが手傳つてやりませう。

かる　いえ／＼、母さんは昨日の遠道、嘸くたびれたでござんせう、わたしが行つてお給仕をしませう
わいなあ。

かや　そんならわかみ大儀ながら、

かる　どれ、手傳うてやりませう。

〽廓に慣れたるとりなしは、鄙には稀なかきつばた。（トお輕は奥へはひる。）

かや　髮の道具を片附けませうか。

〽鏡の曇り拭き取りて、なほす向うへめつぼふ彌八、種ケ島の六打連れて、

ト彌八、六獵人の裝にて出來り、百姓四人お市を戸板の上へ載せ出來りて、

彌八　さあ／＼婆さま／＼、こちら二人がそろ／＼と、夜山仕事に出かけたところ、

六　一筋道の田の畔に、行倒れの御病人、何處の人ぢやと問うたれば、

彌八　與市兵衛といふ百姓の家へ、連れて行てくれとのこと、

百一　こちらは馳走の歸りがけ、

百二　こゝの家のことぢやによつて、

彌八　おいら達打寄つて、

六　だいじにかけて、

皆々　連れて來た。さあ〳〵〳〵、受取らつしやれ〳〵。

ト呼ばゝり、戸板のまゝ舞臺よき所へ擔ぎ込む。この時奥よりお友出來りて、

お友　これ〳〵まあお前方は何ぢやぞいの、いかに供養の施行宿でも、こんなものを持込んで、又おかや樣を泣かすのか、去年ので懲り〳〵ぢや。なあおかや樣、あゝ鶴龜々々。

かや　これ〳〵皆さん方も知つての通り、一週忌の佛事故、今日は家も取込んでゐます。

とも　その中へこんなものを、おき去りにして行かれてはこゝの家でも困ります、とつとゝ持つて行かつしやれ。

彌八　でも足腰の立たぬ人、こゝへ來れば分かるといふ故。

六　與市兵衞の家へといへば、此方とが連れて來ぬとても、

兩人　どのみち誰ぞが連れて來るわい。

お友　えゝぐづ〳〵と面倒くさい、村名主を呼んで來るぞや。

皆々　やあ、その儀はまつぴら、御免々々〳〵。

〽御免々々と足早に、皆々我家へ逃げ歸る。

ト彌八、六等皆々門口へ逃げて出る、お友送りながら狐拳になる。

かや　あゝこれ／＼お友どの、もうたいがいにさつしやれいなう。

お友　いま／＼しい、拍子に浮かれてたうとう逃がしてしまつたが、もし、庄屋様へ届けませうか。

かや　さあ、さうでもせねばなるまいが、人の難儀を見捨てゝは今日の佛事も皆徒事、

お友　左様々々、百日の說法、何とやら、

かや　こりやどうしたらよからうな。

ト此の時お市簑を上げ顔を出して、

お市　お婆さん、昨夜はすてきな降りであつたねえ。

かや　お前は昨日鳥羽畷で、測らず出逢うた京都のお女中、

お友　そんなら、お前はあの女中を、

かや　いや近附ではなけれども、京都までわしが行く途中、

お市　篠突くやうな夕立に、身も濡鷺のぬれほとけ、躓く石も緣の端、

かや　それで、お前は、

お友　こゝの家へ。

お市　來にやあならねえ譯があつて、あの衆達に連れられて天氣のいゝのに蓑と笠、案山子のやうで見つともないと、お笑ひならば脫ぎませうよ。

トお市蓑笠を脫ぎ捨てきつとなる、おかや思入あつて、

かや　さうしてお前は、

お友　いづれのお人。

お市　わつちア京の者だがね、南無地藏で切を稼いだ苦界の上り、亭主約束した男が去年の六月二十九日鐵砲玉に打拔かれ、死骸は山崎淨巖寺へ投げこんだと聞いた故、一週忌の寺まゐりも無緣佛に墓は知れず、あつちこつちとする中にあぶれ者やら四五人づれ、わたしが命と釣替への身を切賣りの五十兩、懷に持つてゐたのを取つた上、ぶつやら踏むやらたゝくやら、中にも一人の女の聲、金はわたしが預つたと言つた語音の大年增、惡い事は出來ないもので、因果とわたしの傍に落してあつたこの手紙、名宛は山崎おかもじ樣、かるよりと書いたはたしか女の手蹟、これが何よりたしかな證據、昨夜の金を返しておくれ。

ト聞いて二人は顏見合せ、不思議立つるも道理なり、

かや　なるほど、手紙は覺えがあるが、金を取つたの何のとは、夢にも知らぬ其の難題。
お友　そりやさうでござんせう、もしそこなお人、こゝの家は昔から村一番の正直者、それを嘘だと思ふなら、この山崎は言ふに及ばず、伏見街道鳥羽殿、淀の夜船の噂にも隨分聞いて見やしやんせ、贋や擬ひぢやござんせぬ。まぎれのない正直者、それにまあ大それた、金を取つたの、たゝいたのと大がい見ても知れそなもの、その證人はこのお友。（トきつと言ふ。）
お市　おい／＼よくしやべる上さんだね、お前の出る幕ぢやねえ。おい、水を一杯おくれ。
お友　はあい。（ト立上り大きな器へ水を持來り、立つたまゝで、）はい、水。（トつんとして出す。）
お市　人に物を出すに、立つてゐて出す奴があるものか、坐つてお出し。
トお友不承々々に坐つて出す、これをお市飲んでゐる、これをお友覗いて顏を見てゐる、お市飲み殘りの水をお友の顏へかける、お友びつくりして、
お友　おゝ、ひどい人だ。（ト後へ下る、おかや思入あつて、）
かや　そんならお前は、昨夜わたしが落した娘の所から來た文に、五十兩の金の事、それを讀んで此處へ騙りにござつたのぢやな。
お市　おゝお婆さん、騙りに來たとはわつちのことかえ、止してもおくれ面白くもねえ、今でこそこの

やうな後家といつても犬の後家、姐御々々とおひやらかされ、無理算段の日濟貸、元はわつちも宮川町五條橋下八坂前、二條新地や御靈裏で、おはもじながらこれまでに泣かせ勤の螢茶屋、撞木町ぢやあとやにつき、南無地藏にやあ滿二年、それから宿場をおてあんで五十三次宰領無し、京大阪を蹄にかけ、達引事も達引くが、癪にさはりやあ手傷猪、鐵砲店のおてんばも、種せえありやあ喰ひ附く、まむしのお市と名を聞いても、見てくれもねえでいゝふくだが、盗人騙りをしねえのが、そこが水道の水の恩、びく〳〵せずと五十兩耳を揃へて出しなせえな。

〽辛い女房の言葉の山椒、小粒にあらぬ横柄なり、

かや　假令何と言はうとも、こちらに覺えのないことなれば、知らぬと言ふよりほかはない。

お市　何だ知らねえ、うまく言ふぜ。おゝさうかと言つて歸る女と見えるかい、御如在のねえお婆さんだが、盗人たけ〴〵しいとはよく言つたもんだ。

かや　なに、わたしを盗人とは。

お市　言はねえでどうするものか、いゝいゝいゝいゝしろむくでつかの大泥坊だ。

かや　これ、今日は大事の佛の命日、村の衆も來てござる、位牌の手前も面目ない、あまりといへば情ない。

お市　なに、情ねえ、金を取つたお前が情なけりやあ、取られたわたしはどうすりやあいゝのだ。ふざけたことを言ひなさんな。

〽とに自暴煙管、煙脂は其の身にかゝるとも白髪ににじむ血筋の緣、こは何事と納戸よりお輕はあわて走りいで、（トお市おかやを煙管にて打つ、奥よりお輕出て來て、）

かる　こりや何故に母さんを。

お市　なんだ、お前もお相伴か。

お友　いや、お相伴より、お庄屋様へちよつと。（ト行きかゝる。）

かや　あゝこれ、蟻の穴より堤のくづれ。

かる　それでも、ちよつと。

かや　屆けるには及ばぬわいなあ。（トよろしく留めて、）こなたはなう、これ女中、こなたが昨夜暗まぎれに文ぢやというて渡したは、三つ折にしたこの小菊紙、中にあつたはこの守袋、こなさん覺えがあらうがな。

お市　その守袋はわたしのさ、それがどうぞしたのかえ。

かや　さ、此の中の書物は、弘長元年庚申の誕生、間瀬久太夫娘およし。

かる　どうやら、これはお前の手蹟に、
かや　似ても似つかぬ御家流、親御はさうも育てまい、緣もゆかりもなけれども、
かる　親にもしさうな母さんを、
かや　ようも手籠にさつしやつたなう。
お市　それもお前の心がらだ。
お友　なんにしても濕氣な時分、殊に頭の疵といひ、
かる　幸ひわたしの文庫の内に、大德寺の油藥、
〽附けて上げんと案じる娘、
かや　争はれぬは人の生立ち、弘長元年庚申に生れし子は、
お友　たしか泥坊。
お市　なんだとえ。
かる　もし。
かや　あこれ、わしも思案をするほどに、こなたも守の中を讀んで、とつくり思案するがよい。
〽淚かくして入りにけり、後にお市は不審顏、

トおかやに附いて、お輕お友附いて奥へはひる。

お市　手強く言へば言ふものゝ、鹽谷の家に由緣の親子、殊に守の臍の緒を、知つたはもしや、噂に聞き及ぶ藁の上から別れたる、母さんではあるまいか。但しはそこらへ持込んで、おれをいつぺい喰はせる氣か、日串に迷つて分からねえ。どうか樣子が。

〽聞きたいと思案にくれし其折から、お輕は蚊遣携へいで、

かる　もしえ、こゝらあたりは在所故、藪蚊が多うござりますれば、蚊遣をこゝへおきまする。

お市　蚊いぶしかえ、團扇もどうぞ貸しておくれな。

かる　さあ、これをお使ひなされませ。（ト團扇を出し、いおツつけ御膳を上げますが、田舍料理の精進物、供養ぢや喰べて下さんせ。

〽言ひ捨て立つを、

お市　あゝこれ〳〵、姐さん、ちよつと待つておくれ。

かる　それでもお前、時分でござんす。

お市　さあ、お飯よりやあお前にちつと、わつちが聞きてえことがあらあ。ちよつとこゝへ來ておくれ。

かる　はい。

お市　はてまあ、こゝへ來なといふに。

かる　さうしてわたしに、御用とはえ。

お市　つかねえことを聞くやうだが、むかしお前のお母あは、屋敷奉公してゐやあしねえか。

かる　若い時には鹽谷樣の、御家中へ御奉公なさんしたが、旦那樣のお名は申されぬが、それも疾うの昔のこと、わたしの生れぬ前方。

お市　さうしてお前にやあ、まだ外に同胞衆でもあんなさるか。

かる　はい、兄さんがござんしたが、鹽谷樣へ足輕奉公、去年の師走十四日殿樣の敵討のお供に加はり、その後は武士の譽れと切腹して、あの佛檀の左りの位牌。

お市　してその外に同胞は。

かる　まだ姉さんが一人ござんしたが、それは母さんが屋敷にゐた時、旦那樣のお手が附き、產落したる女の兒、胤は替れどわたしの姉さん。

お市　え。（ト扨はといふ思入。）

かる　今も今とて母さんが言はしやんしたが　わたしが着てゐるこの着物の出切で縫うた守袋、その中に母さんの手で、臍の緒書を入れてあるのが、後日の證據となつたれど、それから後は音信不通

でござんすわいなあ。

お市　それぢやあ、お前の姉さんといふのは、そのお前の着てゐる着物の切で縫つた、守を持つてゐるのかえ。

かる　あい、さうぢやわいなあ。

〽話のはしと小袖のはし、守の切と引合せば、寸分違はぬ御殿染、扨は産の母様か、さうとは知らず勿體なや、品もあらうに煙管の手籠。

トお市よろしく先非を悔む思入、それを蚊遣の煙にまぎらして、

お市　あんまりいぶりすぎるね。

〽涙かくして、

然し、亭主や親同胞に、縁の薄いも何ぞの約束、その約束で思ひ出した、金の返事はどうするのだ。お前ちよつくり聞いておくれな。

かる　でも母さんはあのやうに、お前が疵をつけた故。

お市　それで返事ができねえとかえ、さあ、また打たなくつてどうするものかえ、お前もやつぱり一つ穴、疵の附いたを種にして、わつちを籠める心かえ。

かる　どうしてまあ、そのやうな。
お市　その美しい顏をして、こゝらあたりの大盡子、親子二人なれあつて、うまく喰はして美人局、なるほどお前も獸つくだな。
かる　あれまた無體なことばかり、何故わたしをそのやうに。
お市　言ふ筋があるからさ、これを見ねえ。（ト腕を捲り、）定九郎命と彫つた入墨は、わつちが二世と言交せた大事の男、その男をば二つ玉で打拔いて殺した敵は、お前の亭主の勘平、その女房のお輕、お前とおれとも敵同志だ。
かる　えゝゝゝゝ。（トびつくりする。）
お市　さうして見りやあお前の親御、與市兵衞を殺したは、わしが亭主の定九郎、武家奉公をした上に僅な内でも侍の、女房となつたお輕さん、親の敵は討たざあなるめえ。
〽見廻すこなたに、有合ふ鐵砲山刀、（トお市佛檀の前の鐵砲と山刀とを取上げ見て思入あつて、）丁度玉も込めてある、この鐵砲で打ち拔くとも、この山刀で抉るとも、どの道一度は死ぬ身體、うんぷてんぷの勝負をしなせえ。
〽さあ〳〵勝負とせりたてられ、お輕は始終立つ居つ、途方に暮れし折柄に、後へぬつくり

以前の曲者、尻ひつからげ身ごしらへ。（ト彌八、六窺ひ出て、）

彌八　これ妲御、お前の氣にも似合はねえ、金の替りにその女を、

六　二度の勤めに年いつぱい、おいらがさらつて行きやせう。

〽お輕を引立て立ちかゝるを、始終の樣子小山田が早速の早業眼つぶし、お市が襟上きつと引附け、鐵扇取つてちやう〳〵〳〵。

ト奥より小山田庄左衞門野袴打割に着替へ、後よりおかやも出來りて、

庄左　あの、こゝな人外めが。

かる　や、あなたは先刻の梵論字樣。

庄左　樣子はあれにて承はる、國鎌倉とへだゞりて、互ひに面體知らねども、契約なせし間瀨久太夫が娘のおよし、かくいふ我こそ同家中、小山田重兵衞が忰にして、同苗庄左衞門則淸なるわ。

お市　すりや親々の約束せし、あなたが許嫁の。面目なうござります。

かる　そんならお前は、あの、お話しの姉さんでござんしたか。

かや　昨夜手に入る守といひ、まさしく娘と思へども、持崩したるその身の仕業、樣子あらんと納戸で聞けば、

かる　緣は切れても產の親。

庄左　その面體へ疵を附け、ありとあらゆる惡事の段々。

かや　まだその上に父御樣は、殿樣の御無念晴らし、末代まで武士の鑑と世上の人に尊まれるに、

庄左　それに引替へ斧親子、本國離散のその砌、御寶奪ひ逐電なせしとお頭の眼力、

かる　そんならもしや姉さんが、連添ふ人の仕業にて、

かや　今々思へばなまじひにお胤を宿せしこの母が、子故に主人の家名を汚し、草葉の蔭の旦那樣へ何と言譯するぞいやい。

庄左　こりややい、渴しても盜泉の水をくらはずとは義者のいましめ、假令男女と替れども武家に育ちしその方なれば、辨へなきことはあるまい。それに何ぞや御家の爲めには國賊たる、定九郎と密通なし、親人始めこの則淸までよくも生耻かゝしたな。言葉交すも穢らはしけれど、無くてかなはぬ御家の系圖、汝が知らざることはあるまい、眞直に申してしまへ。

お市　さあ、それは。

かや　さあ、有りてえに言つてしまや。

庄左　但しこの場で拷問なさうか。

お市　さあ、それは。

庄左　白狀するか。

お市　さあ、

庄左　さあ、

兩人　さあ〳〵。

庄左　これ、畜生ですら恩を知るに、三代相恩の主家の御爲め、お跡目相續に無くてかなはぬ御家の系圖、存ぜぬことはあるまい、あのこゝな人でなしめが。

〽身を八裂に裂かるゝ思ひ、五臟をしぼる血の淚、惣身の汗と一時に、疊へしみ込むばかりなり。（トお市よろしく思入。おかや思入あつて、）

かや　こりや娘うつむいてばかりゐて、それで濟まうと思ひをるか。

かる　もうし姉さん、大事の所、同胞とてもお前ばかり、どうぞ言譯して下さんせいなあ。

〽さすが親身の姉妹、道理せめて哀れなり、

庄左　この期に及び何言譯、いざ某が、刀の銹にいたしてくれん。

〽此の世の暇と拔き放せば、これまあ待つてと母妹、留めるを引退け小山田が、手練の太刀

風肩先より、肋へかけて切下ぐれば、

ト庄左衞門拔打にかゝるをおかや、お輕圍ひちよつと立廻りあつて、とゞお市を一かせ切る。

お市　まあ〳〵待つて下さりませ。

庄左　待てとは、卑怯未練な事を。

お市　死ぬる命は厭はねど、人の皮着た人畜が罪も報いももうこれまで、止めを待つて下さりませ。（トこれより竹笛入りの合方になり）恥かしいのはわたしの身の上、元は鹽谷の藩中で間瀬久太夫といふ槍一筋の親は侍、義理ある娘と母樣に蝶よ花よと育てられた、その愛みが仇となり、許嫁ある身を以て親の許さぬ不義徒ら、つひには屋敷を駈落して、朱に交はれば赤前垂、仲居奉公してなりと望みを遂げたいばかりに、惡所場といふ惡所場も丁度去年の今日のこと、祇園町の一力へ目見得に行つたその日のこと、與市兵衞といふ人が娘を賣つた身の代を縞の財布へ五十兩、入れて歸るをとつくりと見たのが因果惡戯に、彫つた肱の入墨、その定九郎へ知らせし故、與市兵衞どのには敢ない最期、舌三寸で三人まで手は下さねど殺したは、みんなわたしがなした業、それのみならずこれまでに、育てられたる母親の、命日忌日も何日ぢややら、

〽知らぬことゝて勿體なや。

生のあなたへ强請を言ひかけ、我身ながらも不孝の罪、今はこの身に愛想が盡き、

〽紅蓮の呵責阿鼻焦熱、八寒地獄の苦しみも、逃れはせじとふしまろぶ、おかやは涙にむせ兼ね、

かや　その心根が狭くより出れば、今の歎きはあるまいもの。

かる　それもやつぱり若氣のあやまり、親と夫の二道に迷ふも淺い心の外、御恩も深き御主人の、

庄左　その仇討の連判に我も加はりあつたれども、殿御切腹のその砌り、龍虎の御判御家の系圖紛失なして行方知れず、もし時到つて御先代の舊功を上にも思召され、縫之助樣にて御家再興あらば、無くてかなはぬ右二品、汝は後に存へて忍び〳〵に詮議の役目、親にも口外いたすなと大石殿の内意を受け、不義士と見せしもお家の爲め、とは知らずして親人には義を重んじて御生害、

かや
かる　すりや御親父重景樣にも、

庄左　親子不義士と言はるゝも、元はお家の系圖故、

お市　そのお家の系圖こそ定九郎どのゝ仕業にて、盗み出して隱しおき、折がなあらば吉良どのへ差上げ、身のありつきと思ふ中、天の御罰か非業の最期、今ぞ悪念發起のしるし。

〽苦痛をこらへ取出す一卷、小山田取つておしいたゞき、開き見れば覺えある紛ふ方なき御

家の系圖、
庄左　ほゝお、惡に強きは善にも強しと、汝が所持せし系圖にて、鹽谷の御家を再興なさば、不忠も却て君への忠義、
かや　末期になつて娘が發心、冥土にござる旦那樣も嘸や嬉しうござりませう。
かる　それに附けてもわたしほど、因果なものが世にあらうか、三人四人の憂き別れ、
庄左　これも宿世の皆業因。あ、とは言ひながら母御の胸中。
かや　逢ふが別れの初めとなり、
お市　妹背といふも名のみにて、
かや　親子主從、
かる　姉妹、
庄左　四鳥の別れ、
かや　會者定離、
庄左　有爲轉變の、
三人　世の中ぢやなあ。

〽互ひに顏を見合せて、定めなき世の有樣と、胸にあまつてせき落す、涙々は淀川に水嵩ますが如くなり。

ト皆々よろしくある。こゝへ奥より以前の紅勘虹八、金毘羅參りの竹藏出て、

兩人 扨こそ鹽谷の浪人、小山田覺悟。

〽小山田目がけて組附くを、振解いてしつかとおさへ、

庄左 此奴も惡事に荷擔の曲者。

お市 もはや、これがこの世の別れ。

〽また組附くを事ともせず、お市は今を一世の瀬戸、件の筒口脇腹へ、

ト庄左衞門は虹八をそのまゝ切倒し、竹藏うろたへてお市の後より組附くを、立廻りながら鐵砲を蚊遣火鉢へ突込み、足にて引金を引く、これにて本鐵砲の音して焔硝の煙出で、お市背中を打抜き、竹藏も撃たれし體。お市立身にて苦しみ手をもがき、よろ〳〵として口より血を吐く、この時竹藏組附き、白の行衣へ紅くしみ込む事、お市立身にて凄き思入よろしくある。

かや あ、此の世からなる紅蓮の地獄、

かる もう姉さん、末期のきは、

庄左　唱名なして往生得脱、佛果を得よや。
皆々　南無阿彌陀佛。（ト皆々手を合せる。）
〽哀れはかなく、
ト本釣鐘、三重にてお市よろしく息斷ゆる事、皆々よろしく、

幕

女定九郎（終り）

世界は花の春の錦に
昔乍の作意を替て
江口里忠度
契情　　姿

範頼公の嚴命にて笹づる媛の首
うてとなさけしらがの行親は不
忠の名をば烏目の上使明けて言
はざゐ首桶の底と二人の姉妹が

烈女千壽扇一指

嫩軍記
艶色和　岡部六彌太琴唄物語

仕組は梔の秋の錦に
花や今宵の趣向を替て
神崎廓田五平
大　臣　容

其身替りの爭もこゝろあふぎの
縮合せに仕方なく〳〵小太郎が
介錯なすに琴の音と共にみだる
る母親が嘆をよそに一世の別路

そてうのおぞちゆうぞのおわせ

「鳥目の上使」は元治元年八月、市村座に於て書卸し、四十九歳の作である。契情忠度の後へ補足し、院本「いろは歌義臣鑑」の趣向に據りて脚色したもので、最初の名題は「一谷凱歌小謠」であつた。其の後「意中謎忠義畫合」といふ獨立した名題の與へられたことは、附錄の興行年表に出してある通りである。尙興行年表中役割の部に括弧してあるのは、明治六年竝に明治十年の二回だけであつて、新宮館の代りに小原館として演じた際のことである。

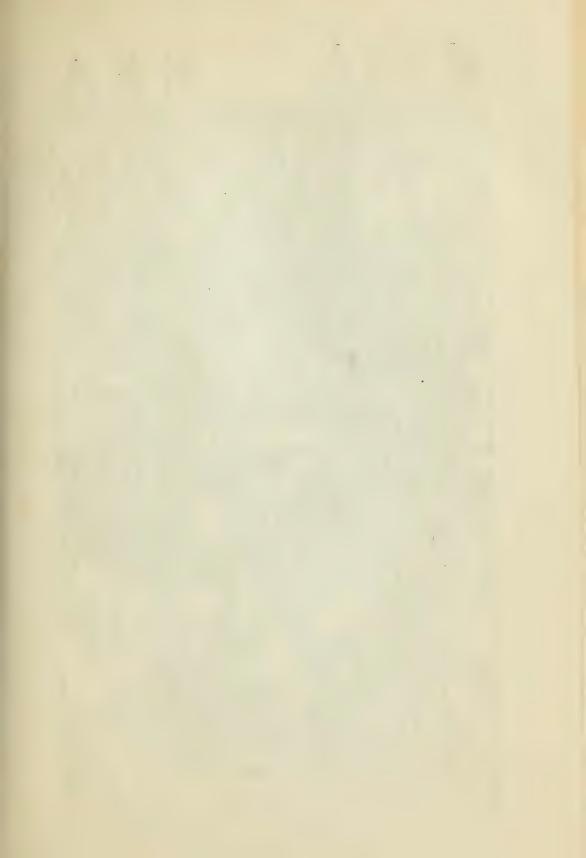
書卸しの時の役割は、市川小團次(根の非の左衞門行親)、尾上菊次郎(新宮の後室千壽)、尾上榮三郎(新宮娘松ケ枝)、坂東三津五郎(新宮の娘紅梅)、中村福助(新宮小太郎光家)等であつた。

挿繪にしたのは、書卸しの當時に出來た繪草紙から採つたものである。

大正十三年十一月

編者誌す

小太夫
福助

意中謎忠義畫合（鳥目の上使——壹幕）

〔役名　根ノ井左衛門行親、新宮後室千壽、新宮小太郎。笹鶴姫、新宮娘紅梅、同松ヶ枝、中間、腰元等。〕

（新宮後室館の場）——本舞臺三間の間中足の二重、正面銀襖、上の方一間塗骨障子屋體。下の方後へ下げて網代塀、梅の立木。總て新宮の後室館の體。爰に△○□の中間三人紺看板一本差しにて。箒水打手桶を持ち掃除をして居る。此の見得。白囃子にて幕明く、と水を打つ調べになり。

□さあ〳〵可内、一服やれ〳〵。

○いやあ、今朝ッから立續けでがつかりした。

△早く仕舞つて一杯やりたいものだ。

□これ新參、手前は此頃奉公に來たが、ぜんたい產れは何處の者だ。

△おらか、おらあ、遙か遠い所だ。

□さうだらう、詞の樣子ぢやあ關東だな。

△よく當てた、おらあ武藏の國豐島郡竹の塚在の產れで、これでも江戶ッ子だ。

○なんで又關東から、此の京都まで流れて來た。

△伊勢參宮から京大阪、廻り步いて路用をなくし、國へ歸るにも歸られず、そこで中間奉公に入つたのだ。

□何處で暮らすも一生だ、辛抱して奉公するがいゝ。

△おらも京の水を飲附けたら、國へ歸る氣がなくなつた。そりやあさうと、此のお屋敷は義仲樣の御親類だといふが、さうかな。

○ほんに手前は、新參だから詳いことは知るめえが、此のお屋敷は新宮の藏人樣といつて、義仲樣の伯父御樣で、元は信州にござつたが、義仲樣と御一緒に去年から都へござつて、此の梅津川へお屋敷が出來たが、喜びあれば憂ひありと、藏人樣がお逝れに、義仲樣が粟津で御最期。

□既のこと御當家も共に沒收されるのを、賴朝樣にも伯父御樣ゆゑ、其の儘に御子息の小太郎樣に領地を下され、以前に替らず立派な御住居。

△それぢやあ、小太郎樣を始め、あの松ヶ枝樣や紅梅樣は、その藏人樣のお子樣だな。

○さうよ、皆後室樣のお腹だ。

△　さうして、あの笹鶴姫様といふは、
○　ありやあ、高くは言へねえが義仲様のお姫様で、今鎌倉に御在になる義高様のお姉え様だ。
□　あのお姫様にやあ、範頼様が首ッたけださうだ。
△　それで様子が、がらりと知れた。
ト調べにて奥より腰元一出来り。
腰一　これ〳〵下部衆、お庭先でお上のお噂、今此のお座敷へ笹鶴姫様のお入りなれば、お耳に入らば其方衆の身の上、早うお次へ立ちやいの。
○　へい〳〵、畏つてござります。
△　はあゝ、それぢやあ今妄へ笹鶴姫様がおいでになるとか、どうぞ一目拝みたいものだ。
□　なんの、拝んだところがお庭の桜だ。
○　それよりやあ早く仕舞つて、晩に引張女でも買ひに行くがいゝ。
△　違えねえ。
腰一　さあ〳〵掃除を仕舞うたら、早う行きやいの。
三人　へい〳〵、畏つてござりまする。

ト調べにて四人の中間は下手へ入る。腰元の一上手に向ひ。

腰一　いざ、姫君様にはこれへお越し遊ばされませう。

ト辭儀をなす。琴唄になり、上手障子屋體より腰元の二褥を持ち出で、舞臺中央へ敷く、笹鶴姫振袖、姫の打扮にて出で、褥の上へ住ふ。後より腰元の三四、鼻紙臺、蒔繪の手箱を持ち出で、宜しく住ふ。

姫君様には、此の程より御父君の御追福にて、

腰二　七日の間の御讀經、嘸御窮屈に居らせられませう。

同三　冬枯れながら庭面を御覽遊ばし、御氣鬱を、

同四　少しはお晴し、

四人　遊ばされませう。

笹鶴　(鶯笛になり、思入あつて、)父上此の世を去り給ひ、歎きの餘り一間に籠り御經讀誦の外なき身に、月日の經つも知らざりしが、睦月も過ぎて如月に殘んの雪も消え果て丶香りも高き梅の花、四時の時を違へずに經讀鳥のしほらしさ、テモ一入の眺めぢやなあ。

腰一　左樣にござりまする、櫻を王と申しますれど、其の花よりも亦一際、

同二　諸木の花に魁けて、色香勝りし梅の花、

同三　それに引替へ、四季共に何時も常磐の色替らず、
同四　操も堅きあの松は、見飽きませぬおやござりませぬか。
笹鶴　其の四季共に色替へぬ松の操も家の爲、和子の命を助けんと操を捨てし常磐樣、それに准うて妾にも、範頼殿に隨へと、此の程より數度の上使、聞くもうるさくいつそのこと、髮おろして尼となり身を墨染に染めたさも、千壽殿の勸めゆゑ今日までは過せしが、早う此世がのがれたいわいなう。
腰一　其の仰せは御尤もながら、後室樣より鎌倉へはよしなにお執成し遊ばせば、必ずきなく〳〵思召さず、後室樣に何事もお任せあるが宜しうござらうかと、憚りながら、
四人　存じますわいな。
笹鶴　おゝ、千壽どのを始め其方達まで世に便りなき自らに、力を添へてたもる親切、忘れはせぬ嬉しいわいなう。
腰一　これは〳〵、數なりませぬ私共に、勿體ない其の仰せ、
四人　有難う存じまする。
笹鶴　今日はまだ一間に籠り、千壽殿にお目にかゝらぬが、お變りはないかいなう。

腰二　後室樣には、奧の間に範頼樣へおいでありし、

同三　小太郎樣のお歸りを、お待ちなされてゞござりまする。

同四　御用ならば此所へ。（トこの時奧にて、後室千壽の聲にて。）

千壽　いや、迎ひに及ばぬ、只今それへ。

腰一　あのお聲は、

四人　後室樣。

千壽　どれ、御機嫌を伺ひませう。

　　卜唄になり、奧より千壽切髮、打掛、後室の打扮にて出來り、二重下手に住ひ、

　これは〳〵姫君樣には、これにおいで遊ばしましたか、御機嫌の好い御樣子お嬉しう存じまする。

笹鶴　又しても千壽殿の改まりし其のお詞、正しく御伯母に當る御身、妾に罰が當りますわいなう。

千壽　いえ〳〵、假令伯母に當るとも、一度征夷將軍の位に登る義仲樣、その姫君にござりますれば、千壽あゝせい、かうせいと譜代の御家來同樣に、わたくし始め子供等をお使ひなされて下さりませ。

笹鶴　此程より幾度か心苦しと申せども、お聞入れなく主あしらひ、ても、物堅き事ぢやわいなう。

千壽　いえ、物堅いばかりでなく、敬ひ申すはまことの道。して、最前より此所にお出で遊ばしましたか。

笹鶴　皆の者に勸められ、今を盛りと咲く梅の花の眺めに、いつにない好い慰みをしましたわいの。

千壽　左樣でござりましたか。皆の者、ようお勸め申し上げた、何御不自由はさせ申さぬ心なれども、お館と違うて何かと御不自由勝ち、嘸御氣欝にござりませう。お慰みとて外にはなく、娘が拙き琴の調べに、昔覺えしわらはが舞振、それ迚も毎夜のこと、今宵は何ぞ珍らしい扇の一手を御覽に入れうと、扇もかゝつて置きましたわいな。

笹鶴　それは何より好い樂しみ、幾度見ても見あかざる指手引手の面白さ、殊には又、紅梅が一際勝れし琴の調べ。

腰一　お姬樣の御相伴に、お側勤めのわたくし共まで、

同二　好い樂しみを、

四人　致しますわいな。

千壽　いやなに腰元衆、大事の御身の姬君樣、お風召してはならぬほどに、奧へお伴ひ申しやいの。

四人　畏りましてござりまする。

千壽　いざ、姫君様には奥の間へ、
笹鶴　そんなら千壽、
千壽　又後程、
笹鶴　さ、皆もおぢや。
四人　先づ入らせられませう。
ト笹鶴姫先きに腰元四人附いて奥へ入ると、床の淨瑠璃になる。
〽入りにける後に千壽は蒲殿の、便り如何と案じたまひ、
千壽　世の盛衰とは言ひながら、時めく源家の勢ひに、範頼公が姫君を戀わびたまひ、此の程より是非上げよとの仰せをば、お斷り申しても御承引なく數度の御上使、今日も倅小太郎が蒲殿へ召されしは必定姫の御身の上、凶事か吉事か何にもせよ、早う便りが聞きたいわいなう、
〽待間程なく廣庭へ館の嫡子小太郎が、常に變りし面色にて、靜々と立歸り、
ト中の舞を冠せ花道より小太郎、上下大小、思案の思入れにて出來り、花道にて舞臺を見て思入あつて舞臺へ來る。
小太　これは〳〵、母上には、これにお出でなされましたか。

千壽　おゝ、待兼し小太郎、さゝ、これへ〳〵。

小太　はッ。

〽刀携さへ座に直れば、（ト小太郎二重へ上り、下手へ住ふ、合方になり、）

千壽　最前より其方が立ち歸るをば待兼し、して、蒲殿の樣子は如何に、

小太　はッ、（トうつむき言兼れる思入。）

千壽　凶事か吉事か包まずと、仔細を早う聞かしやいなう。

小太　（思入あつて、）母上、口惜うござりまする。

〽拳を握り小太郎が、無念面に顯るれば、後室未前を察し、

ト小太郎無念の思入、千壽思入あつて、

千壽　むゝ、扨は範頼公の御心に笹鶴姫が隨はずば、首打て渡せよとの上意にはあらざるか。

小太　はゝ、驚き入りし御推察、仰せの如く姫君御首級を、今宵亥の上刻までに打つて渡せよと範頼公の嚴しき仰せ、則ち檢使は不忠者、主君の大事を餘所に見て降參なせし根の井の行親、今範頼公に媚び諂らひ、現在故主の息女たる笹鶴姫の御首級受取りに來る人で無し。噂を聞けば此の程より鳥目とやらにて、夜に入ると皆目見えぬ目を以て、見ゆる顏にて某に上使を嵩に、ヤイ小太郎、

今宵亥の刻限りに笹鶴姫が首渡せよ、若し遅刻致すに於ては、どいつ、こいつの用捨はない、片ツ端から首にすると、横柄權威も檢使の役目、麁忽あつては家の破滅と、ぢつと無念を怺へし切なさ、御推量下されい。

〽無念涙に暮れければ、後室千壽は吐息をつき、

千壽　おゝ、よくぞ無念を怺へて歸つた、斯く成り行くも皆時世、同じ源氏でありながら、今は敵の蒲殿に慕はれたまふ姫君は、義仲公と諸共に氏を守りの正八幡、弓矢神の冥加にも盡きたることか是非もなや。

〽歎息なせば小太郎が、

小太　して母上には、姫君の御身の上は、如何なされる御所存でござりまする。

千壽　今平家追討に空飛ぶ鳥も落る程の範頼公の嚴命なれば、亥の刻までに御生害をお勸め申す所存ぢやわいの。

小太　え、すりや、あの笹鶴姫様を、

千壽　あいや、御生害をさせまするその姫君は二人まで、天の惠みであるわいの。

小太　むゝ、すりや、兩人の妹の中を、

千壽 何れ一人を身替りに立てねばならぬといふ譯は、夫行綱殿平家の勢に打負けて既に危ふき其の場をば、義仲樣に救はれて命助かるのみなるか、斯く都に住居なすも元はと言へば皆お陰、内證は近しき伯父甥でも武士の表の主家來、大恩受けし恩返しに姫君を助けねば、草葉の蔭の義仲樣へ夫の義理が立たぬわいの。

小太 御尤もなる其の仰せ、女であらばわたくしが、此の身替りに立つべきに、思へば不便な妹が身の上、

千壽 はて、女ながらも武士の胤、忠義に死ぬるは身の冥加、願うてもない事ぢやわいの。

〽立派に言へど目に浮む、涙に胸もさし詰る親子が仲も、けふの間に隔ての襖押明けて、姉妹互ひに覺悟の體、

ト此の中千壽小太郎よろしく思入、奥より松ケ枝、紅梅、着流し姉妹の姫の打扮にて出來り、下手へ住ひ、

紅梅 母上樣、樣子は奥で承はりました、姫君樣の御身替りに此の紅梅を、お立てなされて下さりませいな。

〽言ふを松ケ枝引き取つて、

松枝　あゝこれ、妹待ちや、姉を差し措き姫君樣の御身替りとは我儘な、御身替りには此の松ヶ枝、我が亡き跡で母樣へ孝行しやるが妹の役、

紅梅　いえ〳〵、お前は姉なれば、御身替りは此の妹。

松枝　いえ〳〵、是非とも妾をば。

紅梅　いゝえ、自らを、

松枝　いえ〳〵、さうはさせぬわいの。

〽命惜まぬ互ひの競合ひ、母は健氣を悦びてこぼるゝ涙押し隱し、

ト松ヶ枝、紅梅爭ふ。千壽、小太郎思入れあつて、

千壽　あゝこれ、姉妹待ちや。

紅梅　でも、姉樣が、

松枝　いえ、妹が、

千壽　はて、待てと言はゞ、まあ〳〵待ちやいの。

兩人　はゝい。（トこれにて兩人控へる。）

千壽　ても、勇ましい二人が爭ひ、親の身に取り嬉しいぞよ。さはさりながら姉妹は鳥の羽翼に異なら

ず、姉も可愛し妹も不便、どちらを生けてどちらを死ねと母が指圖がならうぞいの、

〽差しうつむいて居たりしが、おゝ、それ〳〵と打ち頷き、以前の扇を手に取りて、

ト千壽思入あつて、以前の舞扇を出し、

こりや姉妹、此の扇は先し方要阿彌より折立つて持參なしたる舞扇、舞は元より神樂の餘風、時に取つての神の御鬮、然も畫面は春の花にて則ち色は紅白なり、二人ともに考へて、何の花にて何の色と、扇の畫面を指して見よ、言ひ勝ちたるを勝と定め、御身替りに立てるであらう。

松枝 すりや、其の扇の中なる畫をば、

紅梅 何の花にて何の色と、

松枝 當てたる者が姫君樣の、

紅梅 御身替りに、

兩人 なりますのか。

千壽 おいなう。

〽疊みし扇差し出せば、松ヶ枝姫はやゝ暫時小首傾け思案の中、紅梅姫は言ひたげに片唾を呑んで控へ居る、松ヶ枝母に打ち向ひ、

ト此の中千壽扇を出し見せろ。松ヶ枝、紅梅思入れあつて、

松枝 色は紅、春の花は大方梅でござりませう。

〽聞くより妹の紅梅姫、

紅梅 いえ〳〵、色は白にて花は椿、さあ〳〵開けて、

兩人 御覧じませいな。

〽開くを待ちし扇の畫、姉は見るより口惜しく、

ト千壽扇を開き、兩人に見せる、金地に白き椿の畫描いてある。

松枝 えゝ、こりやまあ、梅と思ひの外、

紅梅 嬉しや椿であつたわいな。

小太 そんなら、其方が、

紅梅 御身替りになりますわいな。

〽さして悦ぶ畫合せのえやは言はれぬ物思ひ、千壽は扇手に取りあげ、

千壽 假令、畫面は椿でも、此の御身替りは矢ツ張り松ヶ枝。

紅梅 そりや、母樣の御詞とも存じませぬ、上から見えぬ此の扇、椿と中をさしたわたくし、なぜ御身

替りになりませぬ。

千壽　さあ、當てよというた扇の畫は、花を當てよといふではない、花の心の謎々を解いて開きし扇の畫面。

松枝　その謎々とおつしやるは、

千壽　さあ　椿とさした妹は、玉椿の八千代まで身を存命へて姫君の行末守る花の謎、又姉の松ヶ枝が梅と言うたは花の兄、此のお身替りの魁けして死して忠義を盡せといふ知らせの謎。さ、死ぬるも忠義生るも忠義、いづれ劣らぬ二人の姉妹、母がいくせの心の扇、何とさうではないかいなう。

〽解けても解けぬ花の謎、何と詞も泣入る姉妹、小太郎母に打向ひ、

小太　拙者とても二人の妹、何れがそれと依怙はなけれど、矯めれば曲る花のお詞、死を爭ひし兩人な宥めて妹の紅梅を、お助けあらん今の謎々、是れには深き御思慮あつてか、母人樣承はりたう存じまする。

〽詞の文を咎むる小太郎、千壽は涙おし拭ひ、

千壽　流石は惣領程あつて、今此の母が詞の端、嘸聞きにくい事であらう、子の可愛さは誰れ彼れと勝り劣りはなけれども、今當物の扇の畫、どうぞ姉に當てさせたい、妹にどうぞ當てさすまいと、

心で念じをつたれど、やつぱり妹が當てたる椿、あゝ、しなしたりと思うたゆゑ、理を非に曲て松ヶ枝を、御身替りと言うたのは、あの妹の紅梅は、實は娘ぢやないわいなう。

三人 えゝ、なんと仰しやりまする。

紅梅 そんなら妾は、あなたのお子ではござりませぬかいなあ。

千壽 さゝ、その驚きは尤もぢやが、話せば長い事ながら、一通り聞いてたも。思ひ出せば十七年の昔語り、我が夫藏人行綱殿、更けて御所より歸館の折柄、綾の小路へ掛りし時、頻りに泣きゐる産兒の聲、合點行かずと近習の者に吩咐けて、よく〳〵見れば賤しからざる産兒ゆゑ、直ぐに近習に取りあげさせ、館へ戻りよく〳〵見れば玉のやうなる女の兒、肌に添へしは大内切の守り袋、今一品は、割笄、何か模様に手掛りもと見れば優しきこぼれ梅、其の笄の模様より名を紅梅と呼びなして、松ヶ枝姫が末始終話し相手と守り育て、實の姉より妹を蝶よ花よと育つれば、やつぱり實の母樣と慕はるゝ程可愛さ勝り、藁の上より育てたゆゑ、その恩愛に變りなう、人並々に漸うと成人させた紅梅が、どう身替りに立てられう。浮世の義理に絡まりし、母が心を三人とも推量してたもいなう。

〽と初めて明かす物語り、聞くに三人は顔見合せ、親子の義理と世の義理に思ひ遣る瀬も紅

梅姫、母の前へ縋り寄り、

ト千壽思入あつて泣伏す、紅梅千壽に縋り、

紅梅　初めて聞きし妾が身の上、産の親より御恩のある其の母様とも露知らず、甘へ過ぎたる無理我儘、不孝な此の身をそれ程迄に、お庇ひなさるゝ勿體なさ、それにつけても今御物語りの其の中に、こぼれ梅の割笄、妾に添へてありしとの事、そんなら去年の花見の時、嵐山にて群集の中へ取り落したる笄を、

千壽　其方の頭に挿させしも、若し知る人の目印にもと心盡くしのあの笄、模樣の梅の芳しう此の美しい其方をば、どうまあ首が討たれうぞいなう。

ト千壽愁ひの思ひ入、松ヶ枝も思ひ入あつて、

松枝　あの妹の紅梅が、義理ある子おやと仰しやれば、自らとても義理ある妹、どうまあ、妾が存命へて紅梅姫を殺されませう、まゝし、母様わたくしをお切りなされて下さりませ。

紅梅　あの姉さんの勿體ない、知らぬ先きは兎も角も、養ひ子と聞くからは、わたしが死なねば浮世の義理が濟みませぬ。

ト兩人爭ふ。小太郎思入あつて、

小太　妹二人がお身替りを爭ふも皆恩愛を思ふゆゑ、義理ほど辛きものなしと世の諺に申せども、忠義を立つる武士は、其の恩愛も捨てねばならぬ場所もあれば、たゞ母人の御存意次第。

千壽　成程、母の所存もあれば暫時妾に從うて。あ、不便な者とは思へども何れ一人はお身替り、又兄の小太郎は二人の妹が一世の別れ、介錯してやりやいなう。

小太　委細承つてござりまする。

千壽　兄は元より妹二人、何れを何れと分け難き忠義な子をば持ちし身の、妾の心の悦びはどのやうにあらうぞいの。

〽歎きを餘所に悦べど十分が一分、心では悲しき方が九分九りん、一りん滿る月代に日は入りがてや寺々の、鐘さへ胸に響くらん。

ト皆々愁ひの思入れ。時の鐘。

小太　あの鐘は早入相、檢使の參るに間もあるまじ、心得ぬは彼奴が鳥目、逢うた上にて臨機應變、何にもせよ行親參らば饗應に事寄せ、暫時時刻を引き延ばさん。

千壽　おゝ、妾は奥で姫君へ何かの樣子を申上げん、若し其の中に來りなば、よしなに其方挨拶なし時刻を延ばして置きやいの。

小太　畏つてござりまする。
千壽　又其方達にも此の間に言含め置く事あれば、一先づ奥へ來やいの。
二人　畏りました。
小太　左樣なれば、檢使設けの何かの支度、
千壽　必ず粗相のないやうに、さあ、二人は奥へ。
二人　はあゝ。

〽打連れ奥へ親と子が、暫し隔てゝ入りにける。

ト千壽、松ヶ枝、紅梅上手の屋臺へ入り、小太郎正面へ入る。

〽早や夕暮に人顏の見えぬを幸ひ、柴垣よりぬつと出でたる下部の可內、以前に替る黑打扮四邊窺ひ獨り語。

ト時の鐘凄き合方、柴垣を押し分け以前の中間△（可內實は軍八）𥿻連附黑四天素網一本差し、忍び裝にて窺ひ出で、思入れあつて、

可內　範賴公の仰せを受け、步中間と姿を替へ間者に入つた山上軍八、今日我が君の御前にて笹鶴姫の首打てと仰せを受けし小太郎光家、紅梅姫の身替りで其の場を濟さん後室が女の猿智慧あさとき

企み、檢使の役目は木曾の郎黨、主を見限り降參なせし名におふ根の井の行親ゆゑ、よもや迂濶に身替りを喰ふ氣遣ひはなけれども、弘法にも筆の過まり、若し身替りを喰つた時は範賴公へ注進なし、當家の所領を召上げさせ身共が褒美にせしめる所存、何にもせよ庭傳ひ、忍んで樣子を窺はん。

ト此の時幕明きの中間○後へ出で。

○　怪しい可内。（ト掛るをちよつと立廻つて）

可内　大事を聞いた二合半、物相飯の喰ひ納めだぞ。

○　何をこしやくな。

ト早鉾になり、中間○切つてかゝる、可内も拔いて立廻り宜しくあつて○を切倒し、血糊を拭ひ鞘へ納めて、

可内　人目に掛らぬ其の内に奥へ忍んで。おゝ、さうだ。

ト大膽不敵に軍八は奥庭さして、

ト時の鐘三重、ばた〳〵にて可内上手へ入る。これにて此の道具廻る。

(奥殿の場)——本舞臺三間の間中足の二重、正面銀襖、上段の蹴込み、上下銀襖出入り、雪洞附の燭臺を所々に並べ、總て奥殿の體。調べにて道具留る。と、花道の揚幕にて、

呼び　御上使のお入り——。(ト呼ぶ。)

〽知らせの聲と諸共に奥の襖も荒らかに、検使を嵩に緩怠面、見るから憎さ根の井の左衞門行親。

ト中の舞を冠せ、花道より一本差しの小姓雪洞を持ちて先に立ち、後より根の井の左衞門行親白髮鬘長上下、大小にて出來り、同じ打扮の小姓附添ひ出來る。此の時六ツの時計鳴る。

行親　小姓共、今の時計は、

小姓　はッ、酉の上刻にござりまする。

行親　なに、酉の刻とな、

小姓　はあゝ。

〽躊躇ふ中に一間より、検使設けに小太郎は靜々と出で迎へば、

ト小太郎奥より出來り出迎ふ。

小姓　はッ、貴所樣をお出迎ひとて、當館新宮の、

行親　後室千壽殿か、

小太　いえ、伜小太郎にござりまする。

行親　むゝ、千壽殿の伜かといふことさ。して千壽殿には、

小太　はッ、母人には笹鶴姫が自殺の用意に、只今奥に。なには兎もあれ根の井殿には、先づ〳〵これへ。

行親　役目なれば罷り通る。

〽聲を知邊に探り足、設けの席にどつかと坐し、

ト行親足にて探りながら二重へ上り、上の方へ住ふ、小姓二人は辭儀をして下の方へ入ろ。

やあ、女ながらも館の主、千壽殿にはなぜ出迎はぬ、範頼公の嚴命受け上使に立ちし根の井の左衞門、以前は木曾の家來にもせよ、今は鎌倉の恩澤受けお覺え目出度き某を、出迎はぬは緩怠至極、

〽人を見下す傍若無人、さも憎ていなる詞の中、奥より靜々後室千壽、禮儀をたゞし座に着いて、

トこの中奥より後室千壽打掛衣裳にて出て、よろしく住ひ、

千壽　これは〳〵、根の井殿にはよくこその御入來でござりまする、檢使のお役目御苦勞に存じまする
お出迎ひの遲なはりしは御免なされて下さりませ。
〽兩手をついて敬へば、怒りし肩肱和らげて、
行親　むゝ、千壽殿か、久々にて面會致すが、替りもなうて重疊でござる。
千壽　根の井殿には此の程より御眼病とやら申す噂、お目は如何にござりまする。
行親　むゝ、目でござるか。いや、何ともござらぬ。年罷り寄つたれど目も齒も若い時同然、未だに眼鏡を掛け申さぬ。
千壽　すりや、お替りは、
千壽
小太　ござりませぬか。（ト兩人顏見合せ思入れ。）
行親　いやも、ずんと健かでござる。
千壽　それは結構でござりまするな。
行親　いや、何は兎もあれ、今日ツた斯くいふ某上使に立ちし範頼公の嚴命、先刻子息小太郎殿へ申し聞け置いたれば、定めて承知でござらうな。
千壽　はツ、御上意の趣きは承知致して居りまする。

〽いふに行親打ち頷き、

行親 むゝ、上意の趣き承知とは、さりとは若い了簡、義仲滅後は日蔭の身不自由勝ちの笹鶴姫、範頼公に隨へば數多の侍女に侍かれ、活計歡樂心の儘、義理立てなすは其の身の損、此の根の井行親なども今安樂に暮すのは、忘れもせぬ壽永三年、しかも三月中旬にして、宇治、瀬田の戰ひ破れ鬼と呼ばれし木曾義仲、見るかげもない非業の最期、我れも殉死と思ひしが心入替へ降參なし範頼公に取り入つて、今では榮耀榮華な身の上、不忠不義とも言はゞ言へ名を取るより得の世の中、慾を知らぬは馬鹿の內、むゝはゝゝゝゝ、こりやほんの話でござる、必ず腹にさへられな。

〽上使をかさに言ひたいがい、聞く小太郎は若氣の一徹、顏に無念の顯るれば、母の千壽がかい取つて、

ト小太郎無念の思入れ、千壽こなしあつて、

千壽 いや、これはしたり、御上使樣へ、ついお話にお茶さへも、(ト奧へ向ひ)こりや〳〵、誰そ御上使樣へお茶を早う。

松枝 紅梅 (奧にて)畏まりました。

〽はつと答へて立ち出るは、莟の花の姉妹が紅ならぬ白小袖、手に持つ茶碗高坏を携へ出づ

る二人の姉、しとやかに座に直り、

ト此の内上手より紅梅、白の振袖淺黃の帶にて、紫の袱紗へ樂燒の茶碗を載せ持ち出る、下手より松ヶ枝、同じく白の振袖にて高坏へ菓子を積みたるを持ち出で來り、兩人とも行親の前へ置き、

紅梅　不束な手前ながら、お茶一つ、

松枝　粗菓にはござりますれど、

紅梅　召し上られて、

兩人　下さりませ。

行親　(思入あって、)澁茶でござるか、忝ない。

ト行親目の見えぬ思入れにて、外方へ手を出し探る思入れ。

紅梅　あもし、これにござりますわいな。

行親　えゝ、存じて居るわえ、(ト茶碗を探り取る思入あって、)いやなに後室、此の女は。

千壽　妾が娘にござりまする。

行親　むゝ、左樣でござるか、ても好い器量でござるな。

〽始終窺ひ、後室は鳥目を試す詞の文、

千壽　いや申し根の井殿、笹鶴姫の御生害、その御座敷へ列なるは侍の身の晴れの場所、それゆゑ二人の娘にも物好したる縫小袖、見てやつて下さりませ。

〽言へば四邊を眤め廻し、

行親　流石は後室の物好だけ、摺箔の縫模樣、いや見事々々。

〽襃めるすまたの當推に、扨は眞實の鳥目かと寬ぐ胸の奥の間より、御傷しや笹鶴姫腰元に誘はれ、打ち悄れて座したまひ。

ト此の中奥より笹鶴姫、松ケ枝に誘はれ悄々として出來り二重中央に住ひ、行親に向ひ、

笹鶴　おゝ珍らしや根の井の行親、其の以前は父上に仕へ妾とも主從なりしが、時世とて鎌倉へ今は仕ふる其方が、未だ緣の盡きざるか、此の笹鶴が生害に檢使の役目太儀ぞよ。

〽挨拶あれど馬の耳、餘所に聞き捨て根の井の左衞門、（ト行親わざと素知らぬ思入にて、）

行親　さあ、亥の上刻を限りの生害、少しでも刻限違へば君の上意を背くも同然。さあ、きり／＼と用意さつせい。

小太　あいや、其の儀は申す迄もなく、刻限違へば上への恐れ、然しやう／＼只今暮れ六ツ、亥の刻までは未だ二時、暫時の猶豫を、

行親　まだ待たせるか、苦々しい。

笹鶴　いやなう千壽、これ迄夜毎白らを慰めんとて今様亂舞、最前言ひし扇の手も明日よりしては見る事ならず、今宵限りの身の上ゆゑ、せめて此世の思ひ出にそなたが舞の一指に、二人の娘の絲竹を冥土の土産に所望ぞよ。

〽（仰せに、はッと母娘）

千壽　はッ、有難き御意なれども、妾を始め二人の姉妹、

松枝　拙き業にござりますれば、

紅梅　御上使様の御前といひ、

三人　此の儀ばかりは、

笹鶴　あ、いや〱、此の期に及んで辭退は無用、是非とも所望しますわいの。

千壽　左程までの御意なれば、

三人　畏りましてござります。

千壽　（行親に向ひ、）いや〱根の井殿、只今お聞きある通り笹鶴樣の、此世のお名残り、暫時の御猶豫下さらば有難う存じまする。

行親 〽言ふに上使はえせ笑ひ、
むゝはゝゝゝ、如何に女ばかりとてさりとては馬鹿々々しい、範頼公の上意にて、首打ち落す笹鶴姫、泣きの涙の其の中で琴の調べの今様のと、酒興の上か血迷うたか、餘りたはけた事ながら、醫者の見放した病人に好な物を喰す心、こりや故主だけ身共が寸志だ、さあ、舞ふなりと何なりと勝手次第にほたえさつしやれ。

〽飽くまで憎き雜言に、聞き捨ておかぬと小太郎が鍔元くつろげ立ち掛るを、これと千壽は押し止め、

ト此の中小太郎口惜しき思入にて立ち掛るを、千壽急いては惡いと押し止め、

千壽 誰そあるか、爪琴持ちや。

腰一 （奥にて）畏りました。

〽はつと返事も長廊下、腰元どもが爪琴に胡弓携へ立ち出づる。

ト奥より腰元の一琴を持ち、腰元の二枕爪箱を持ち出來り、平舞臺よき所下手へ控へ居る。

行親 やあ、べん／＼と何をぐづ／＼、きり／＼と始めぬかい。
〽焦立つ聲に笹鶴姫。

笹鶴　さあ、時刻移さず、早う〳〵。

〽のたまふ中に、後室が目配せなせば腰元共、笹鶴姫の御手を取り一間の内へ忍び行く、後見送りて吐息をつき、

ト千壽、腰元の一、二へ思入あると、兩人は心得笹鶴姫の手を取り奥へ入る。

千壽　（思入あつて、）さあ、用意はよきや。

兩人　はつ。

行親　用意がよくば早くさつせえ。

〽母の指圖に松ヶ枝姫、調子しらぶる爪琴も血筋に絡む親と子が、指す手引く手の扇さへ隙に疊みし言ひ合せ、檢使はそれと白布に三方直す花の兄、紅梅姫と松ヶ枝が互ひに劣らぬ覺悟をば見る母親が忍び泣き、濕り勝ちなる聲張揚げ。

トこの中、奥より腰元四人白布を掛けし疊を持出で、平舞臺よき所へ敷き奥へ入る。松ヶ枝下手にて琴の調子を合せる、紅梅千壽に辭儀をなし疊の上に住ふ、小太郎三方へ九寸五分を載せ紅梅の前へ直し、潔よく死ねといふ思入、千壽中央にこれを見て愁ひの思入。この中根の井の左衛門、鳥目を隠し見える思入にて、ムヽと息込む、千壽思入あつて。

千壽　二人の姫が絲竹も、

小太　身に故事を今爰に、

紅梅　調べの絲の血筋の緣、

松枝　胡弓の弓の、

三人　弦切れて、

千壽　冥土の旅へ行く鳥の、（ト下座の唄になりて）

唄〽娑婆に殘れる親鳥の涙に絞る袖の露、消えし昔の物語り、

竹〽古へ多田の滿仲が、夢幻の世を觀じ、

唄〽墨の衣に染めて染まらぬ御怒り、美女が首討て仲光と、

竹〽主命隳るゝ方もなし、

唄〽無慘なるかな仲光は、切れとあるのもお主なり、

竹〽切り奉るもお主なり。

ト此の中紅梅は琴、松ヶ枝は胡弓、千壽は扇を持ちて振りになる。小太郎肩衣を刎退け、刀を持ちきつと思入れ、紅梅琴を止め前へ出て手を合せ、切れといふこなし、是れを見て松ヶ枝、胡弓を持つた儘、

小太郎に摺寄り、私を切つてくれといふ思入れ、小太郎は刀に手を掛け、何方を切るも不便だといふ思入れ。

唄〽兎角我が子の幸壽丸、御身替りと思ひ込む。

ト千壽お主の爲には替へられぬといふ思入れにて、松ヶ枝を身替りに切れといふ思入れ。

竹〽親の心を子は知らず、

ト愁ひの思入れにて、小太郎松ヶ枝の後へ廻るを、又紅梅支へる事よろしくあつて、千壽扇にてコレと制す。

唄〽手振り袖振り踊振り、〽見るも消え〳〵、

ト此の中兩人死を爭ふ。小太郎は持ち扱ひ紅梅の後へ廻り、刀を抜きかける。

これにて唄になり、

唄〽弱る心を取直し、竹〽切つて替へたる末世の手本。

トこれにて兩人一時に白布の上へあがり、

兩人 今が思ひの、

竹〽切り所、唄〽思ひな切り所。

ト唄の中兩人覺悟の思入れにて、切つて〳〵と云ふこなし、小太郎は是非に及ばぬといふ思入れに

て刀を拔き、立ち掛る、これにて千壽の振しどろになる、小太郎、松ヶ枝の後へ廻り刀を振り上げる此の時根の井の左衞門つか〳〵と出て、小太郎を突廻し、拔打ちに紅梅の首を打ち落す、皆々惘りする。小太郎、千壽きつとなり、

千壽　行親殿には何故あつて、紅梅姫の首打ちしぞ。

小太　所存あつてか、血迷うてか、さゝ返答は、

兩人　何と〳〵。

〽何と〳〵と摺り詰れば、左衞門騷ぐ氣色もなく。

ト行親鼻紙で刀の血糊を拭ひ、鞘へ納め、中央へ居直り、

行親　此の左衞門行親血迷ひもせぬ、叉老耄も仕らぬ、篤と見極め首討ち申した。

千壽　はて、心得ぬ、此方は鳥目と思ひしが、

小太　扨は兩眼明らかなるか。

行親　おゝ鳥目といふは眞赤な僞り、蟻の這ふまで見えすくわ。

小太　其の叉見ゆる眼にて、紅梅姫の首討ちしは、

行親　御身替りに立てる所存。

兩人　やゝ、何と、

行親　（紅梅姫の切首を取り上げ、）これ娘、よう成人してくれたなあ。

　　ト首を抱きしめ愁ひの思入れ。皆々心得ぬ思入れ。

千壽　この紅梅を娘とは仔細ぞあらん、

兩人　行親殿。

〽尋ねに行親身をへりくだり、兩腰投げ出し涙を浮め、

行親　斯くいふ根の井を不忠不義、放逸無慚と思はるゝか。

兩人　なんと。

行親　今更語るも情なや、平家の惡逆追討せし義仲公の勳功も、消え行く水の粟津が原、御運の末か張り詰めし田の面の氷凍解けて駒を深田へ乘込みたまひ、焦せる折しも流れ矢來り、

〽鬼と呼ばれし御主君も、終に果敢なく御落命、

最早味方も是れまでと楯、望月、今井を始め殉死なせしと聞きしゆゑ、我れも共にと差添へ手は掛けたれど、いや〳〵〳〵、未だ樋口が存命と聞くを賴みに會稽の、恥辱を雪ぐ時がなと、

〽不忠不義の汚名を取り、鎌倉方へ媚び諂らひ。

當の敵の範頼義經討たんずものと附狙へど、降參の身に油斷せず、近寄ることのかなはぬ悔しさ、
〽一ツの功を立てよとある、範頼公の仰せにより、
我れより願ひし此の檢使、忠義に凝たる千壽殿ゆゑ、身替り立つるは知れた事、なれども二人の娘の内一人は義理ある娘ゆゑ、實子を討つか但し又紅梅姫を討たるゝか、若し又義理に絡まれて妹を助ける御所存あらば、身共が首討つ豫ての存念、
〽鳥目と言ひしも身替りに、心遣ひをさせまい爲め、
我が捨し子は何れかと、見て見ぬ振りの作り病、我が心勞は届きしかど、
〽是まで養育下されし千壽殿へ一言の、詞の禮も言はずして、
首討ち落す行親が心の中を千壽殿、御推量下されい。
〽こぼす涙の村時雨晴間もなげに見えにける。千壽も涙押し拭ひ、
千壽　して又娘紅梅を、行親殿の胤なりと、
小太　御存じありし、
二人　その仔細は、
行親　（思入れあつて、）御不審は御尤も、某當地に彷徨ふ中水兒を置いて母は病死、浪々の身の悲しさに

男の手しほに育て難く、後の證據とこぼれ梅の割笄を水兒に添へ綾の小路へ窃に捨て、我れはそれより鎌倉にて、長の年月送るうち、

〽忘れ難きに恩愛の捨てし娘は如何ぞと、案じ煩ふ折も折、盡きぬ縁かさいつ頃、嵐山の麓にて不圖拾うたる割笄、模樣は覺えのこぼれ梅、この主こそは我が娘と佇むうちに一人の腰元、その品こそは私が主人の娘が落せし笄、何卒お戻し下されといふ尼に附いて、主家を聞けば新宮殿の妹姫紅梅殿と聞くよりも、扨は娘は存命にて、斯く成人をなしつるかと、心で悦び蔭ながら御身に一禮謝せんものと、思ふに幸ひ今日の檢使、親の不忠を娘めが、笹鶴姫が御身替りに立ちしも親へ一つの孝行。

〽燒野の雉子夜の鶴、子を哀れまぬはなきと聞く、あたら莟を胴慾に首討ち落せし手柄顏。慘い親ぢやと冥土から、恨みん事も可愛やなあ。

〽日頃の我慢も恩愛に我れを忘れし男泣き、娘が無くば、何時の世に斯かる忠義も立てられまいに、千壽殿、子供は寶でござるなあ。

〽笑ふは武士の誠なり、(ト行親よろしく思入れ。)

小太　斯程忠義の根の井殿、冥土へ行かばこれ妹、義仲公へ申し上げよ。

〽あへなき首級を打ち見遣り、　〽こぼす涙に後室は氣の張弓も弦切れて、わつとばかりに泣き沈む。

ト小太郎、紅梅の切首へ思入れ、此の中千壽思入れあつてどうとなる。

千壽　えゝ、姫若樣のお爲といひ、根の井殿の檢使ゆゑ、我が張合に悲しさもぢつと怺へて居たものを誠忠義のお心を聞いて不便の親心、我も張弓も折れ果てゝ死んだとは思はれませぬ。

〽矢つ張り儘でにこ／＼と、笑ふ顏を見るやうな、思ひ儲けは不便やな、持つて生れた其の身の壽命、是れを思へば拾うた時、添へてあつたる筓に梅の模樣の散る花は、此の子の命を散らすといふ知らせにてあつたるか、可愛やなあ。

〽不便のものや可愛やと、悲歎の涙に暮れければ、松ヶ枝姫も泣く眼を拭ひ、

ト千壽よろしく思入れ。

松枝　その御歎きは御尤も、さら／＼無理とは思はねど、昨日までも今日までも姉よ妹と睦まじく、花咲く春を待ち侘びし其の甲斐もなく蕾のまゝ、散り行く花の妹は御身替りの手柄もの、必ずお歎きなされずと褒めておやりなされませ。

〽流石は年の功者にも、親を勵ます利發者。

千壽　おゝ出來した。妹が忠義の生害に、根の井殿が義心の檢使、申し上げなば姫君樣にも嘸かしのお悦び。

小太　この趣きを姫君樣へ、少しも早く申し上げよ。

松枝　心得ました。

〽涙拭うて立ち上る、時しも奥に聲あつて、（ト奥にて、）

笹鶴　知らせに及ばぬ、一間にて始終の樣子は聞いたわいの。

〽襖左右に押し開かせ立ち出でたまふ笹鶴姫、行親見るより頭を下げ、

ト管絃を打ち込み正面の襖を左右に引拔く。彼方奥深に灯入り、漏斗にて奥殿の遠見、笹鶴姫中央に、左右に腰元四人手雪洞を持ち出で、二重に住ふ。

行親　はゝ、僞りとは申しながら三代相恩の姫君樣へ最前の無禮過言、眞平御免下さりませう。

〽疊にひれ伏し詫びければ、

笹鶴　以前に替らぬ根の井が忠義、便り少なき妾の身の上、力となつてたもいの。

行親　はゝ、仰せまでも候はず、範頼公に仕ゆれど心は矢張木曾の忠臣、樋口次郎と謀し合せ、一度誓ひに鎌倉へ遣はされたる御公達、義高公を盗み出し、北國勢を狩り集め、年寄つたれど此の行親

が忠義の働き御覽に入れん。

笹鶴　それに附けても自らに替りて死せし紅梅姫、思へば不便な事ぢやわいの。

〽姫君始め侍女も共に涙に暮れければ、後室わざと勇みを附け、

ト笹鶴姫、腰元等愁ひの思入れ、千壽こなしあつて、

千壽　不便とは申すものゝ、死したる姫は君への忠義、行親殿の本心を承はりし上からは何をか包まん

津の國に浮世を忍ぶ樋口殿、一度朝日と輝きし君の御名を出さんと、窃に集むる木曾の餘類。

小太　まつた鎌倉表にも、嵯峨の局の計ひにて義高公を落し參らせ、金剛禪師が御供なし、先づ兼光が

隱家にて昇殿なすべき時節をはかり、再び開く源家の旗上げ、

〽聞くに根の井はぞく〳〵悦び、

行親　其の時こそは此の根の井、（トのりになる、）

假令孔明韓信が計略あるとも、逐一に味方の者に告げ知らせば、必定勝利に疑ひなし、

〽勇み悦ぶ後より、

ト行親よろしく思入れ、此の時以前の中間可内窺ひ出て、

可内　扨こそ根の井は二心、觀念なせ。

〽切つて掛るを身を躱し、襟上とつてずでんどう。

ト可内切つて掛るを行親ちよつと立廻つて投げ退ける、此の時千壽二重へ上り、笹鶴姫を圍ふ。

行親　して其の折は光家殿にも、一番乘りでござらうな。

小太　おゝ、云ふにや及ぶ、我のみか、

松枝　女ながらも妾も共に、

〽義高公に隨うて、時めく花の鎌倉方夜半の嵐に打ち破り、
敵はちり來る木の葉武者。

〽追詰め〳〵切り立つれば、

小太　目ざす敵は兵衞の佐。

〽和田北條を始めとして、きらめく星の大小名人波打つて寄するとも、名におふ平家を惱せし倶利加羅峠の例しに倣ひ、數百の牛の兩角に篝を負はせ放しなば、なん條敵の堪るべき、その虚に乘つて谷川へ落す雪解のばら〳〵〳〵。必定勝利に疑ひなし。
御悦びあれ、姫君樣。

トこの中小太郎は可内を相手に立廻りよろしく、これへ松ヶ枝ちよつと掛り、トヾ可内を當てきつと

見得、

〽勇み立つたる其の有樣。

行親　ほゝ、勇ましゝ勇ましゝ、先づそれ迄は何事も他聞を憚り。穩密々々。

ト此の時四ツの鐘を打ち込む。

最早亥の刻、役目の限り。

〽言ふに小太郎、首桶に首級を載せて差し出せば。

ト小太郎首桶へ切首を乘せて出す、皆々これを見て、

千壽　そんなら是れが、

松枝　此世の別れ、

笹鶴　思へば果敢ない、

腰元　紅梅樣。

千壽　あゝこれ、大儀を企つ目出度き門出、

小太　歎きを餘所に、

ト行親この中衣服を改め、

行親　祝うて立たうか。

〽扇を取つて立ち上れば、千壽は鼓おつ取つて、

ト行親扇を持つて立ち上る、千壽以前の鼓を取つて打つ。

ウタに　〽一張の弓の勢ひ足り、東南西北の敵を易く亡ぼせり、

ト行親扇を指して舞ふ、千壽鼓を打ちよろしくあつて、

あゝ、目出度い。

ト首を抱へて立ち上る。

小太
松枝　悲しい。

ト愁ひの思入れ。

千壽　あゝこれ。御上使御苦勞。

ト小太郎ムヽと息込む。

行親　さらば。

皆々　おさらば。

〽互ひに心で辭儀をなし、上部は解けぬ敵味方、引き別れてぞ。

ト行親首桶を抱へ花道へ行く、舞臺皆々見送り宜しく、よき程に可內出で、いぬと立ち掛るを行親きつとにらむ。これに恐れてたぢ〳〵となり、ぽんと轉り起き上るを小太郎引附け、笹鶴姬は立身、腰元みな〳〵雪洞をさし上げて千壽松ヶ枝見送り、引張りよろしく、段切にて、

幕

ト幕外、行親きつと見得誂への鳴物になり、行親花道へはひる。知せに附き後シャギリ。

鳥目の上使（終り）

初芝居祝筵
立役色姿
先向惠方開
第一番目の
大名題
拙作も顧ず
著述は新編の
曾我物語

翠時めく柳營の連歌の席に賴朝へ工藤も讒を由井ヶ濱あはれ一萬箱王が危ふき死刑の時政も命乞ひの訴へを結城も共に千葉佐々木君に批點を宇都宮屈かぬ無念も兄弟が忘るゝ間なき不倶載天二人が憂を祐信も親子の別れに滿江御前爰ぞ心を鬼王團三忠義は曇らぬ十六夜も戀の涙に思ひ入る月も傾く西の空これや命の浪打際に助命の赦免は佛や神の景季は上使の役目なさけもこもる再生の恩義はふかき重忠が智略の諫言ハテめづらしき對面の趣向

時代閲本朝通紀

富士三升扇曾我

「生立曾我」は又「曾我の敷革」とも呼ばれてゐる。慶應二年二月、五十一歳の折守田座に於て書卸されたもので、作者が時代物らしい時代物の中極めて初期に屬するものと言つてよい。曾我物語に據つたものである。時代物を演ずるには適してゐない柄の小團次が演じた、多少活歴風でもある此の作の畠山重忠は、同じく彼れの扮役なる鬼王新左衛門よりも、勝れた出來榮えではなかつたが、兎に角相當にやつてのけたことは話柄として殘されてある。又作者も小團次の柄に適合するやうに、諫言の長ゼリフの中で、世話に砕けて世間話のやうにして諷諫せしめるやう書いて與へたことも傳へられてある。「鑄掛松」は「生立曾我」の二番目として、同時に新作され、一日狂言に組立てられてあつたものであるが、こゝでは便宜上別にしておいた。從つてその「語り」も分離せしめたものであることをお斷りしておく。

書卸しの時の役割は、市川小團次(鬼王、重忠)、尾上菊次郎(祐信妻滿江)、關三十郎(曾我太郎祐信)、坂東三津五郎(十内妹十六夜)、澤村訥升(仁田四郎)、中村福助(六浦主水、千葉常胤)、市川左團次(團三郎、佐々木盛綱)、大谷友右衛門(梶原景季、江間小四郎義時)、坂東玉三郎(中老宇佐美)、尾上梅幸(結城朝光)、關山右衛門(伊豆次郎祐兼)、坂東吉彌(犬坊丸)等であつた。

挿繪にしたのは、大正八年一月帝國劇場上演の時の舞臺寫眞(大詰由比ケ濱)である。

大正十三年十一月

編者誌す

富士三升扇曾我（曾我の敷革・生立曾我―四幕）

序幕

鎌倉鶴ヶ岡の場
同　小袋坂の場

（役名――狩野の家臣六浦主水、曾我の團三郎、伊豆ノ次郎祐兼、神職左司馬、中間權平、工藤の嫡子犬坊丸。曾我の十六夜、工藤の奥女中宇佐美、同久須美。其他。）

（鶴ヶ岡八幡の場）――本舞臺三間の間中足の二重の石垣、石段、彼方朱塗りの廻廊、石燈籠、梅の立木、上手に庵に木瓜の紋附し幕張、番小屋あり。こゝに○△□◎の仕丁四人竹箒を持ち、掃除をしてゐる見得、總て鎌倉八幡社内の體。大拍子にて幕明く。

○今日はめつぱふ忙しい、朝飯前から働きつゞけ、こんな忙しいことはねえ。

△又そんな動き泣をするか、今年は給金を増してやるから、骨を惜しまず精を出せ。

□今年は何でも相場がいゝから、人の相場も上つたらう、しつかり増して貰はにやならぬ。

◎かういふ折助同様な奉公するにも大社が得、犬になつても大所だ。

○いや犬といへば今日此處へ、工藤祐經樣の御子息、犬坊樣の御參詣、

△毎年御家の吉例で撃劍會を見るやうに、御家來衆が武藝の試合、

□上下貴賤のへだてなく、假令町人百姓でも望みの者は勝手次第、遣はせるといふことだ。

○どうかおれも弱さうなひよろ〳〵する侍と、一本まゐつて勝ちたいものだ。

○何でそんなに勝ちたがるのだ。

○勝つた者には御褒美を下さるといふことだから、

△そりやあ手前が勝つたとて、犬坊樣が下さるものか、

○なに、下さらねえとは、

△犬坊樣だから、褒美はぶちだ。

○おきあがれ。

四人　はゝゝゝ。

ト大拍子にて上手より神職左司馬神主の打扮にて出來り、

左司　こりや〳〵その方どもは何をいたしてをる、今日は一﨟職工藤祐經樣の御嫡子犬坊樣の御參詣、粗相があつては相濟まぬぞ。

四人　へい〳〵畏まりました。

左司　最早お先觸もあつたれば、其方共は少しも早く部屋へまゐつて休息いたせ。

四人　へい〳〵有難うござります。

○　やう〳〵のことで年が明けた。（ト四人は下手へ入る。）

左司　扨々下賤といふものは世話のやけてならぬものだ。最早御入りに間もあるまい、萬事の用意をいたさにやならぬ。

ト此時大拍子になり、花道より曾我の團三郎、着流し一本差にて出來りて、

團三　鎌倉山の繁榮も世にある時に引替へて、今日は日蔭の曾我殿輩、一萬樣や箱王樣の御武運祈りのその爲めに、八幡宮へ御代參、今この先で樣子を聞けば一臈職の祐經殿が參詣とやらいふことだが、敵と狙ふその人の顏をとつくり見たいものだ。何は兎もあれ參詣しようか。（ト舞臺へ來り左司馬を見て）もし〳〵、あなたは神主樣ではござりませぬか。

左司　いかにも我等は當社の神主左司馬と申す者なるが、何か用事でござるかな。

團三　ちと物が尋ねたうござりまする。

左司　尋ねたいとはお札かな、お札なら別當所へござれ。

園三　いえ〳〵、お札ではございませぬ。
左司　お札でなくば、御寶物の案内を頼むのか。
園三　いえ左樣なことではござりませぬ。私がお尋ね申しまするは、今日御當社へ一﨟職の工藤左衞門祐經樣が御參詣と承はりましたが、まことのことでござりまするか。
左司　いや、祐經樣は御不快故、今日は御嫡子の犬坊樣が御名代、最早御入りに間もないから、早く參詣さつしやるがよい。
園三　へえ、左樣なら祐經樣には御不快でござりまするか、（ト思入あつて、）當時名高い工藤樣の若殿樣とあるからは、どうかお顏を拜みたいが、拜見はできますすまいか。
左司　おゝ出來るとも〳〵、今日工藤家の御家例で、當社の前で武藝の試合、貴賤上下のへだてなく假令町人百姓でも志しのある者は勝手次第に試合の御免、若殿樣が見たいなら一試合して行かつしやれし。
園三　それは有難いことでござります、武藝は少しも存じませぬから、試合なぞは出來ませぬが、たゞ拜見をいたしたうござります。
左司　勝手に見物するがいゝ、勝つた方へは工藤家から御褒美を下さるので、何のことはない花角力だ。

團三　さすがは一臈職だけあつて、今太平の世の中に治にゐて亂を忘れぬ爲め、八幡宮の社前にて武藝の試合があるといふは、武備盛んなる鎌倉山、腕に覺えはなけれども、一勝負してどうぞ敵の、

左司　なに、敵とは、

團三　いやさ、片瀬村まで、どの位こゝから道がござりまするな。

左司　濱傳ひに行かつしやれば、半里足らずでござりまする。

團三　これは有難うござります、先八幡樣へ參詣なし、後にゆるりと拜見しませう。

ト團三郎思入あつて上手へ入る。この時花道の揚幕にて『犬坊丸參詣』と呼ばゝる。

左司　最早これへ御入りとな、どりやお出迎ひいたしませう。

トまた『參詣』と聲して、三味線入り大拍子になり、花道より犬坊丸上下大小、治郎祐兼附添ひ、後より奥女中宇佐美、久須美、裲襠裝にて、續いて腰元四人、家臣六人、その後より中間一人菖蒲革、袴、股立にて、木太刀を附けたる額を持ち出來り、皆々花道へ留り、

犬坊　見渡せば松の梢もとこしへに、枝葉茂りて年經れど、千代も替らぬ鶴ケ岡、

祐兼　武門の榮え弓矢守る神へ誓ひをかけまくも、かしこき君の御惠み、

宇佐　仰げば高き初空に、日影まばゆき神垣や、

久須 源清き御手洗の流れにうつる星月夜、
腰一 鎌倉山の繁榮に、
腰二 去年に今年は色增して、
腰三 替らぬ松の常磐木も、
腰四 枝をならさぬ時津風、
臣一 四海に浪もおだやかに、太平謳ふ大小名、
臣二 萬民鼓腹の樂しみは、賴朝公の御武德故、
臣三 和田北條は故老といへど、當時お覺え目出度きは、
臣四 二となき一﨟別當たる、主人左衞門祐經公、
臣五 年々家例に今日は、社前に於て武藝の試合、
臣六 治世に亂を忘れざるその眞心を納受ありてか、
犬坊 霞棚引きうらゝかに、勝色見する梅の花、
祐兼 いさめの神樂勇ましく、
宇佐 常見し神の庭もせに、

久須　今日新玉にあたらしく、

犬坊　はて、風情ある眺めぢやなあ。

左司　當社の神職千代田左司馬、御先觸に先刻より御出迎へ仕ツてござりまする。

犬坊　出迎へ太儀。

左司　何はしかれ、先づ〳〵これへ、

臣一　若殿初め祐兼殿にも、先づ、

皆々　お越しあられませう。

ト鳴物にて皆々本舞臺へ來り、よろしく居並ぶ。

犬坊　父左衞門所勞とあつて、名代として嫡子犬坊丸、

祐兼　まつた幼年故後見に祐經が弟、伊豆ノ祐兼、

宇佐　私事は奥方梛の葉御前の名代、中老宇佐美。

久須　介添役として同く久須美、

祐兼　先觸を以て申入れしが、祈念の用意めされしか。

左司　年々御家例によつて、寶前に於て武術の試合、萬端用意いたしてござりまする。

祐兼　それに就けても、狩野ノ介義持の使者は見えざるか。
左司　未だ參詣はござりませぬが、追附御入りと存じられます。
祐兼　狩野家の重寶赤木の短刀、左衞門祐經媒介にて賴朝公へ差上ぐべき旨、豫て契約いたしおき、今日當社の神前で祈念の上にて受取る筈、これ又用意めされしか。
左司　その儀も承知仕つてござりまする。
祐兼　短刀祈念の前方に、家例に任せ武術の立合、何れも支度めされてよからう。
家臣　はつ、畏つてござりまする。
祐兼　女中方もその心得あるものは、遠慮いたさず一手づゝ立合ひめされ。
宇佐　治世に亂を忘れぬやう、梛の葉樣の仰せにて、私共も未熟ながら、
久須　長刀小太刀の遣ひやう、御指南受けてをりますれど、
腰一　各々樣のお手の內、
腰二　そのお流儀の奧の手を、
腰三　及ばずながら後學に、
腰四　拜見いたしたう。

六人　存じまする。
犬坊　家例によつて今日は、當所に於て武術の試合、貴賤上下のへだてなく、誰彼にても立合いたせ。
臣一　さあ、犬坊樣のお許し出れば遠慮に及ばぬ、女中方我々どもと立合めされ。
臣二　見るから水のたれさうな、ほつちやり者が相手では、是非々々一本まゐりたい。
臣三　さあ女中方、我々は相手は嫌はぬ、
臣四　どなたもこれで、
六人　仕合ひめされ。
腰一　どういたしまして、
四人　私共が、
犬坊　時刻うつれば片時も早く、この場に於て試合を始めい。
皆々　はあゝ。
臣一　左樣なれば仰せに任せ、
祐兼　支度いたせ。
六人　はあゝ、

ト白囃子になり六人支度をなし、二人宛三組に分かれ、木太刀を持ち竹刀打になる。ばた／＼になり、
幕張の蔭より以前の團三郎を中間二人にて引立て出來り、

[illegible]　うしやあがれ／＼。

祐兼　こりや／＼中間ども、かしましい何事なるぞ。

中一　へい／＼斯樣でござります、この下郎がぶしつけにもあなた方のお立合を、御幕張の外から覗き、

中二　あれは筋がい丶これは惡いなぞと、蒲鉾屋の見世へまゐつたやうに、兎や角と申します故、

中一　見るに忍びず吾々が、

中二　引立てましてござります る。

祐兼　こりややい下郎、こ丶を何處と心得をる、忝なくも弓矢の祖神正八幡の廣前で、武術を磨く此の試合、卽ちあれに檢分なすは、當時鎌倉のお覺え目出度き一﨟職の、工藤左衛門祐經が嫡男犬坊丸、まつた某は祐經が舍弟伊豆ノ次郎祐兼、無禮があると許さぬぞ。何故あつて劍道の試合を汝は蔑した。

團三　なか／＼もつてあなた方が勝れし手練のお立合を、批判なぞをいたしませうや。

中一　やい／＼、まざ／＼しいことぬかしをるな。たつた今言つたではないか。

團三　どういたして、私が、

中二　言はぬと言へば痛い目見せ。

中一　この場でうぬに言はしてくれう。

ト兩人立ちかゝるを團三郎突廻して見事に投げる。兩人起上りて、

中一　やい〳〵、なんでおのれは、

兩人　投げたのだ。

團三　どういたして私がお前方を投げられませう、おゝそれ〳〵、その石に躓いて投げられたのでございませう。

ト此の時家臣の一團三郎を見て、

臣一　口がしこき下郎だが、どうか此奴は見たやうだ。おゝ見たとも〳〵、汝は曾我の家來だな。

祐兼　なに、曾我の家來とな。

臣一　いかにも、彼は一萬や箱王丸が學問の供をして行きます、下郎めでござりまする。

臣二　道理で見るからそが〳〵と、貧乏じみた、

六人　奴でござる。

團三 曾我の家來團三郎と申す者でございまする。

ト團三郎思入あつて、

團三 斯くお目立ちまする上からは、何をお隱し申しませう、

臣一 いや下郎、手前も曾我の家來なれば、武士の祿を喰つた奴、少しは腕に覺えがあらう。

臣二 どうして〳〵祿どころか、喰ふや喰はずの貧乏屋敷、

臣三 曾我の家來とあるからは、ろく〳〵なものは喰やあしねえ、

臣四 豚か牛を見るやうに、芋の尻尾か小豆殼、

臣五 奢つたところが稗か麥、米の飯の味は知るめえ。

臣六 なんだ、見ればぶる〳〵と齒の根も合はず顫へてゐるが、

臣一 肌薄故に寒いのか、

臣二 喰ふや喰はずでひだるいか、

臣三 齒がたゝぬ故悔しいか。

臣一 見れば見るほどみじめな態だ。

六人 はゝゝゝゝ。

ト家臣口々に惡口して笑ふ、團三郎口惜しき思入。

祐兼　こりや〳〵何れも控へめされ、假令貧苦に迫ればとて、曾我の家來とあるからは、瘦せても枯れても武士の片割、武のたしなみがあるであらう、これへ參つて立合ひいたせ。

團三　なか〳〵以て下部の私、武のたしなみはござりませねば、御免なされて下さりませ。

臣一　それでは武士の家來にて、汝は武術を知らねえとか。

臣二　やれ〳〵不便な奴だな、これが世にいふ祿盜人。

團三　むう、（ト口惜しき思入。）

臣三　おゝ、盜人だ〳〵。

六人　盜人だわ。

トきつといふ、これにて犬坊丸思入あつて、

犬坊　こりや團三郎とやら、知らぬといへどその方が下部を投げし今の手の內、曾我と工藤は元より一家、誰に遠慮もないほどに、これへまゐつて手合せいたせ。

臣二　さあ、若殿のお許しなれば、このところにて勝負いたせ。

團三　其の儀は御容赦下さりませ。

臣三　それではいよ〳〵其方は、
臣四　武藝を知らぬと申すのか。
園三　なか〳〵以てお歷々のあなた方のお相手に、何で私がなられませうぞ。
　　ト此の時宇佐美思入あつて、
宇佐　いやなにそこな園三郎とやら、辭退いたすは殊勝ながら、若殿樣のお許しなれば、誰に遠慮もないほどに怯めず臆せず耻らはず、あなた方のお相手に、な、よし負くるとも此の場にて試合をしたがよからうぞいの。
久須　ほんに左樣でござります、他流試合は一入に若殿樣の御慰み、
腰一　貴賤上下のへだてなく、勝負をなすが御家の古例。
腰二　直きを守る神の庭、心丈夫にこの場にて、
宇佐　早う試合をしたがよい。
園三　左樣なれば仰せに從ひ、
六人　すりや、我々が、
園三　いかにもお相手になりませう。

祐兼 双方ともに支度いたせ。

双方 はあゝ。

ト白囃子になり、六人下緒にて襷をかけ、團三郎はそのまゝ木太刀を持ち、

六人 いざ、

團三 いざ、

皆々 いざ〳〵〳〵。

トこれより團三郎六人を相手に立廻りよろしくあつて、トゞ六人を打ちすゑる。祐兼悔しき思入。

犬坊丸女中皆々は感心のこなし、

犬坊 ほゝお天晴なる今の太刀筋、陪臣者には感心なるぞ。

團三 はゝ、お褒のお言葉蒙むりまして、有難う存じ奉ります。

宇佐 いざこの上は祐兼様、あなた様と一勝負、立合うておやりなされませ。

祐兼 なんといたして某が、いやさ、下郎風情が及ばぬことだ。

宇佐 ではござりませうが日頃からあなたが御自慢なされまする、神影流の奥義とやら、いつぞは拝見いたしたいと存じましたがよい折柄、御不足でもござりませうがあの者をお相手に、御手練のほ

ど私共に拜見させて下さりませ。あなたがお立合なされねば御家の恥辱になりまする、是非と
もお立合ひ下さりませ。

祐兼 それぢやと申して、祐兼が下郎を相手に輕々しく、

宇佐 假令身分は輕くとも、貴賤の差別のないのが御家例、猶豫なされずお手合せを、なされまして下
さりませ。

祐兼 むゝ、達てとあれば是非に及ばぬ、この場で仕合をいたしてくれう。(ト思入あつて園三郎に向ひ)
こりや園三郎、この祐兼と立合ふのは此上もないそちが仕合せ、あしらうて遣はすから、必ずと
もに案じるな。

宇佐 心落附け、支度をしや。

園三 はつ。

ト又白囃子になり、祐兼は肩衣を脱ぎかけ、双方前へ出て木太刀を取り。

祐兼 いざ、

園三 いざ、

兩人 いざ〳〵、

ト三味線入り白囃子になり、兩人立廻りよろしくあつて、團三郎は祐兼の手を打つ、これにて木太刀を落し手の痺るゝこなし、團三郎は木太刀をおき下手へ來る、と祐兼だしぬけに木太刀を取上げ團三郎をしたゝかに打つ、團三郎その手を取り、きつとなつて、

團三　こりや、祐兼樣には御卑怯千萬、勝を取つたは拙者でござる。

祐兼　やあ言ふな團三、おのれが藝の未熟からおくれを取りしを無念に思ひ、卑怯なりとは何のことだ達てと申さば筋骨の拔けるほどに打ちすゑるぞ。

團三　そりや御無理と申すもの、凡そ劍術の立合に後打なすは卑怯至極、何流何派にその樣な形がござるか承はりたい。

祐兼　まだ／＼申すか無禮者めが、以後の見せしめ息の根を今一打に止めてくれん。（トきつとなる。）

團三　さうおつしやれば拙者めも、

ト團三も詰寄る、この時ばた／＼になり、下手より狩野の家來六浦圭水、衣裳大小にて短刀の箱を持ち出來り、

圭水　こりや／＼團三控へぬか。

團三　や、あなたは、

主水　無禮の振舞、控へてをらうぞ。（ト思入あつて團三郎を留め、犬坊丸、祐兼に會釋して、）犬坊樣を初め祐兼樣何れも方、今日のお役目御苦勞に存じまする。

トこの中團三郎思入あつて下手へ來り控へる。

祐兼　然言ふ御身は狩野家の家臣、六浦主水殿なるか。

主水　遲刻の段は幾重にも御容赦なされて下さりませ。

犬坊　今日の役目太儀に存ずる。

主水　御言葉下しおかれまして有難う存じ奉りまする。こりや團三、一﨟職の御舍弟たる、伊豆の次郎祐兼樣へ、陪臣の身で失敬千萬、以後をきつとつゝしみをらう。

團三　はつ、恐入りましてござりまする。

祐兼　主水殿の詫がなくば、生けて返さぬ奴なれど、命冥加な下郎でござる。

主水　すりやこのまゝに團三をば、お助けなされて下さりまするか。はゝ、有難う存じまする。

左司　どうなることかと存じましたが、無事にこの場もをさまりまして、まことに安心いたしました。

祐兼　それは格別、主水殿には賴朝公へ獻上の短刀、持參めされしか。

主水　卽ちこれへ赤木の短刀、持參仕つてござりまする。して、御請取の祐經樣には、

犬坊　父左衛門は所勞によつて、請取役の名代は、即ち嫡子犬坊丸、

祐兼　差添役として伯父祐兼、これへ同道いたしてござる。

主水　御念の入つたるそのお言葉、承知仕つてござりまする。即ち今日神前にて武運長久祈念の上、後刻お渡し申すでござる。

祐兼　然らば後刻御意得申さん。

宇佐　御祈念終るそれまでは、若殿樣には別當方へ、

犬坊　皆も一緒に、

久須　先づ御入り、

皆々　遊ばされませう。

ト唄になり、犬坊丸先に祐兼、宇佐美皆々附添ひ上手へ入る。後に主水、團三郎殘りて、

團三　主水樣、えゝ殘念にござりまする。

主水　おゝ殘念なは尤もぢやが、何を申すも鎌倉どのゝお覺え目出度き工藤の舍弟、心よからぬ祐兼殿、無禮粗相がある時は必ず曾我へ祟りを受け、後日の憂となるは必定、この後ともに粗相のないやう、篤と心を附けたがよい。

園三　あゝ有難き御意見ながら、殘念なのは現在の敵工藤が弟に、手出しもならぬのみなるか、勝を取つたを打たゝかれ、口をしき故三度に一度は拳を出したうござりまするか、何を申すも日蔭の主人、お察しなされて下さりませ。

主水　麒麟も老いぬれば駑馬とやら、萬夫不當の祐康樣も赤澤山の露と消え、滿江樣や御兄弟の千辛萬苦はいかばかり、さりながら祐信殿の一方ならぬ親切に頼もしき志し、それを一つの頼みとして必ずきな／＼思はずに、花咲く春を相待たれよ。兎かういふ中寶前にて最早祈念の時刻ならん、拙者はこれにてお別れ申す。

園三　左樣ござらば主水樣、

主水　園三、重ねて逢ひませう。

ト唄になり主水は上手へ入る、後園三こなしあつて、

園三　今日ももう何時だか、春になつて日は延びたが、先刻からよほどの暇入り。あゝ思ふまい／＼、思ふまいとは思へども口をしいのは曾我の成行、どうぞ元の御主人に取立てたいと、我兄の鬼王諸共千辛萬苦、あ、いくらおれが兎や角と悔んだとこが仕樣もなし、頼みにするは神の力、御兄弟の御武運を、ドリヤお願ひ申さうか。

ト大拍子になり團三郎上手へ行かうとする、この時下手より曾我の十六夜振袖裝にて出來りて、

十六　團三さん、待ちなさんせ。

團三　おゝ十六夜か、どうしてこゝへ。

十六　さあ、知つての通り奧樣の御用があつて、一昨日から二ノ宮樣のお屋敷に逗留をしてをりましたが、もう中村へ歸らねばならぬ故に、八幡樣へお願ひ申すことがあつて、お參り申しに來ましたわいな。

團三　思ひがけない、今日こゝで汝に逢はうとは思はなんだ。

十六　ほんにこゝで逢つたのは八幡樣のお引合せ、不斷から何かの話が山ほど溜つてゐるけれど、御小身でもお屋敷故奧表とへだゝれば、しみ〴〵逢うて話もならず、殊に物堅い鬼王樣、ひよつと此の事が知れたならお屋敷にはおかしやんすまい、もしさうなつたら其時は私や生きてはゐぬわいな。

團三　そんなに苦勞にするには及ばぬ、假令兄貴の目にかゝり屋敷へ置けぬと言はうとも、そなたの親御も河津の御譜代、幼い時からお側勤め、お慈悲深い滿江樣惡いやうにはなさるまいから、そんなに案じることはない。

十六　まだそれよりも十六夜が案じられるは、もしひよつとお前が外の女中さんと言交しでもなされうかと、それが案じられてならぬわいな。
團三　そなたを措いて他所外の女になんで言交さう、そんな苦勞はせぬがよい。
十六　いえ〳〵男といふものは、油斷も隙もならぬもの、
團三　それは人にもよつたもの、團三に限つて他所外の女に心をかけるものか。
十六　それがまことでござんすなら、私の心もとつくりと、こゝで聞いて下さんせいな。
團三　聞けとあるなら聞きもせうが、人目の多い此處は往來、
十六　幸ひあれなる幕の小蔭で、
　　ト此時ばた〳〵といふ人の足音する。
團三　や、誰やらこゝへ來る樣子、
十六　人の目つまにかゝらぬ中、
團三　十六夜おじや。
十六　あい。
　　ト早き大拍子になり、團三郎は十六夜の手を取り上手幕張の內へ入る。と少し間をおきて上手より以

前の祐兼、中間權平赤木の短刀を持ち出來りて、

權平　祐兼樣、

祐兼　これ（ト押へ四邊へ思入。）

權平　豫て仰せつけられし通り、人目を憚り神前へまんまと首尾よく忍び込み、すりかへましてござりまする。

ト短刀を出す、祐兼これを受取り見て、

祐兼　おゝ疑ひもなき赤木の短刀、出來した〳〵、（ト懷中より金包を出し、）當座の褒美受取りおけ。

權平　それは有難うござりまする。（ト改め見て、）や、こりやこれ、十兩、

祐兼　口數利かずと早く行け。

權平　はつ（ト辭儀をなす、これにて祐兼上手へ入る、その後を見送りて、）今年は春から間がいゝわえ、元手は僅十二文、おひねりを上げちよん〳〵と柏手を打つそのひまに、ちよろまかした短刀の當座の褒美が直に十兩、こいつあしつかり呑めるわえ。

ト金を改め行かうとする、此の時小家の中より團三郎出で權平を引戻し、立廻つて投退ける。後より十六夜帶を締めながら出て、

十六　この間に早う、

ト十六夜の手を取る、權平起上りかゝるを立廻つて當てる、これにてどうと倒れるを十六夜の腰帶で縛るを道具替りの知せ、權平心附くを引すゑる。この見得大拍子にて道具廻る。

國三　むゝ、

（別當所の場）═本舞臺三間の間常足の二重屋體、正面に襖、上下杉戸、總て鶴ケ岡別當所の體。二重中央に以前の犬坊丸、左右に宇佐美、久須美、腰元居列び、平舞臺上手に祐兼、下手に主水短刀の箱を三方へ載せ前へ置き、左司馬及び侍二人控へゐる、この見得調べにて道具留る。

祐兼　最早祈念相濟む上は、赤木の短刀お渡しあれ、鎌倉御所へ持參いたさん。

主水　いかにも、主人狩野ノ介より預り來りし赤木の短刀、いざ御請取り下さりませ。

祐兼　失禮ながら念の爲め、中改めて請取り申さん。（ト主水の差出す箱を明け、短刀を改め見て）いやなに主水殿、これが鎌倉殿へ獻上の赤木の短刀でござるかな。

主水　いかにも、左樣でござりまする。

祐兼　篤と中を改めめされ。

主水　はつ（ト改め見てびつくりなし）やゝ似ても似つかぬ、こりや僞物、

犬坊　なに、短刀は僞物とな。

女達　えゝゝゝ。

祐兼　斯樣な品を鎌倉殿へ獻上なして濟まうと思ふか。狩野家は兎もあれ兄祐經、御前へこれが差上げられうか。察するところ今となり、その短刀がをしくなり、斯樣な僞物を拵へたか。

主水　全くもつて左樣なことは、

祐兼　左樣でないと申しても、箱の中には眞赤な贋物、

左司　祈念の中に神前へ參りし者は誰もないが、合點の行かぬことでござる。

祐兼　いや、容易ならざる一大事、こりやこの儘には相濟まぬ。

ト此の時ばた〱になり、以前の家臣六人にて十六夜を引立て出來りて、

臣一　神前間近くうそ〱と、

臣二　怪しい姿のこの女、

臣三　何れいづくの者なるか、

臣四　住所を言へと申しても、

臣五　前後分からぬことのみ故、

臣六　引立てまゐつて、

六人　ござりまする。

　　　ト主水十六夜を見て、

主水　や、そちは曾我の十六夜か、

十六　あなたは、六浦主水樣、

祐兼　扨は曾我の腰元なるか。

臣一　曾我に由緣とあるからは、飾りおいたる赤木の短刀、

臣二　貧に迫つて忍び寄り、盜みとつたに違ひない。

祐兼　どうで唯では言ふまいから、その女をも打ちすゑい。

六人　心得ました。（ト立ちかゝるを宇佐美留めて、）

宇佐　あゝもし皆さん、お待ちなされて下さりませ。

臣一　胡散な奴故詮議なすを、

臣二　何故とゞめ、

六人　めさるのだ。

宇佐　さあ、おとゞめ申すは外ならず、盗まぬ先なら知らぬこと、盗みし上はうか〳〵と、何で此處らにをりませう、女の仕業でないことは初手から知れてをりまする。殊に合點の行かぬのは、今この處で箱を明け初めて知れた紛失を、怪しい女と表からお連れなされし皆さんは、赤木の短刀紛失を疾から知つてござりましたか。

六人　や、(トぎつくり思入。)

宇佐　この盗人は大方外に、(ト祐雜へ目を附ける。)

祐雜　え、(ト思入。)

宇佐　この御詮議はよい加減に、なされましたがようござりませう。

祐雜　然らば、どうなと勝手にしやれ。

團三　(この時上手にて、)その短刀の盗賊を召捕りましてござりまする。(ト縛りたる權平を連れ出來る。)

祐雜　や、その方は、(トびつくりなす。)

權平　旦那樣、

祐雜　あゝこれ知らぬ〳〵、何事も身共は知らぬぞ。

團三　さあ、盗んでくれと頼まれて、汝が褒美の金を貰つた、その頼手を白狀いたせ。

權平　いゝや頼まれた覺えはねえ。

園三　覺えないとはしぶとい奴、言はねばおのれかうして言はすぞ。

ト脇差でこち上げる、權平苦しみながら、

權平　あゝ、言ひます〳〵。

園三　さあ、早く言へ。

權平　さあ言ひますから、ゆるめて下せえ。その頼手は彼處にござる。

ト言ひかけるを祐兼抜打に權平の首を打落す。

主水　こりや何故に祐兼殿には、詮議のかゝりし彼が首を、

祐兼　短刀奪ひし荷擔人故、首を討つたが何とした、赤木作りは狩野家の重寶、頼朝公へ差上ぐるを汝が惜しんで盗み取らせ、それを越度に家國を横領なさん下企み、何と相違はあるまいが。

主水　全くもつて左樣なことは、

祐兼　知らぬでことが濟まうと思ふか、鎌倉殿の嚴命を背いたからは狩野家ばかりか、緣に繫がる曾我家へも必ず祟りの來るは必定、これ皆汝が科故に、眞實の武士なら切腹して、何故言譯をしねえのだ。

主水　さあ、それは、
祐兼　命がをしいか、
主水　さあ、それは、
祐兼　切腹なすか。
主水　さあ、
祐兼　さあ、
兩人　さあ〳〵。
主水　是非に及ばぬ。（ト差添に手をかけるを宇佐美留めて）
宇佐　あゝ申し主水樣、御切腹には及びますまい。
主水　それぢやと申して、言譯立たねば、
宇佐　急くところではござりませぬ、まあ〳〵お待ちなされませ。
祐兼　やあ、又しても〳〵宇佐美どのには、いらざる留だて、
宇佐　いえ、いらざる事はいたしませぬ、今主水殿が言譯に此の場で切腹なしたとて、その短刀が出るでもなし、無益に人の一命を失はするは祐兼樣、ちと御政道が違ひますかと、この宇佐美は存じ

ますゐ。

宇佐　存ぜぬことでもござりませうが、御幼年でも君の御名代たる犬坊様、それを差置き横合から、切腹さするは自儘の計らひ。

祐兼　紛失させし科ある故、主水に切腹いたさすは鎌倉殿への申譯、お手前達の存ぜぬことだ。

祐兼　えゝ入らざる女の差出口、留だてせずとすつこんでゐやれ。

宇佐　いえ、すつこんではをりますまい。

祐兼　なんと、

宇佐　憚りながら今日は、梛の葉様の御名代、御連枝なれど祐兼様は御舍弟なれば、姉上の梛の葉様へすつこめとは、ちとお言葉が過ぎませう。

祐兼　むゝ。

宇佐　御父上の御名代犬坊様へ伺ひまするが、如何この場はいたしませう。

犬坊　宇佐美は母の名代故、その方よきに計ひくれよ。

宇佐　その仰せを蒙むるからは、この場はよきに私が計ひますでござりまする。

祐兼　假令、犬坊様の申附でも、鎌倉殿へ言譯が、

宇佐　いや、お氣遣ひなされますな、一旦館へ立歸り、大殿樣へ申上げ、詮議の日延をお願ひ申さば、よもお聞入のないことはござりますまいと存じまする。そのお許しの御沙汰があらば、主水殿には草を分け詮議仕出して鎌倉御所へ、再び獻上なされませ。

主水　宇佐美どのゝ情の計ひ、禮は言葉に盡し難し、御免の御沙汰蒙らば日ならず短刀詮議し出し、目出度く御意得申すでござる。

宇佐　その短刀故思はざる疑ひかゝりし十六夜は、團三郎へ預け遣はす、早々曾我へ伴なやれ。

團三　何から何まで宇佐美樣、お情深きこの場のお裁き、

十六　何とお禮を申さうやら、

兩人　えゝ有難う存じまする。

　（トこの時七つの時計鳴る。）

宇佐　最早申の上刻なれば、犬坊樣にはお館へ、

犬坊　おゝ、歸館いたさん。

久須　どれ、お供揃ひ。（ト後にて『はあゝ』と大勢の聲する。）

祐兼　えゝ、いらざる事を。（ト立ちかゝるを宇佐美へだてゝ）

宇佐　先づ、

皆々　いらせられませう。

ト長き唄になり、犬坊丸を始め女達残らず奥へ入り、主水は下手、團三郎・十六夜は花道へ入る。後祐兼始め家臣等六人残り、思入あつて、

臣一　祐兼様、してあなたの、

六人　御所存は、

祐兼　最前試合の不覺といひ、遺恨重なる曾我殿輩、豫て我兄祐經を敵と狙ふ一萬箱王、双葉の中に苅らざれば、必ず後の憂故頼朝公へ讒言なし、二人を死刑に行つて一家の奴等に憂目を見せ、今日の腹癒せする心、

臣二　さすがは御舍弟祐兼様、

臣三　いつに替らぬ、

六人　天晴妙計、

トこの時仕丁一人出て、

仕丁　様子は聞いた。(ト行かうとするを引附け)

祐兼　蛙は口故、（ト拔打に切倒すを、道具替りの知せ）

むゝはゝゝゝゝ。

ト鼻紙で刀の血を拭ふ、皆々引張りよろしく、時の鐘にてこの道具廻る。

（小袋坂の場）――本舞臺高き草土手、上下藪疊、正面に松並木、後黒幕。總て小袋坂夜の體。月を下しあり、風の音、時の鐘にて道具留る。と、土手の上手より以前の宇佐美、庵に木瓜の紋附きし提灯を持ちし中間を先に立てゝ出來り、下手より主水出來りて行き逢ひ、顔を見合せ、

主水　宇佐美どのか。

宇佐　主水樣。

主水　先刻は何かと御厚志、お禮は言葉に盡し難し、

宇佐　何のお禮に及びませう、赤木の短刀紛失は降りかゝりたる御身の災難、一先づ當所を立退いて、詮議なさるが何より肝要、

主水　仰せまでも候はず、身を粉に碎き詮議爲出し、狩野家の汚名を雪ぐ所存、

宇佐　正しく盜みしその者は、大概それと推量なせど、確となしたる證據なければ、

主水　迂濶に事を爲出しなば、却つてこの身に如何樣な難儀を受けんも測られず、
宇佐　事穩便に氣を長う、寶の詮議をなされませ。
主水　重ね〳〵のお心添へ、忝なうござりまする。
宇佐　私事はお供先故、心急きにござりますれば、又御目もじのその節まで、
主水　隨分ともに御機嫌よろしう、
宇佐　あなたも御身をお大事に、くどうはござれど御油斷なきやう、
主水　親身も及ばぬ御芳志故、寶の便宜相知れなば、
宇佐　その時こそは必ずともに、
主水　よい吉左右をお知らせ申さん。
宇佐　左樣なれば主水樣、
主水　宇佐美どの、
宇佐　これにてお別れ、
兩人　申しまする。
ト時の鐘にて宇佐美思入あつて中間と共に花道へ入る。主水後を見送りて、

主水　いつの間にやら日は暮れて、月は出れど春の夜の朧にかすむ雨催ひ、寶失ひ今日よりは、浮浪となりしこの主水、影さへ暗き身の上ぢやなあ。

トこゝへ頬冠り尻端折りの侍一人窺ひ出で、

侍　主水め、觀念、

ト切つてかゝるを一寸立廻りぐつと引附けて、

主水　此奴もまさしく惡事の荷擔人、

侍　何を、（ト振解いて又かゝるを立廻つて、とんとあて、）

主水　詮議の手蔓に、（ト侍を轉すを木の頭、）ありついたわえ。

ト刀の下緒を取つて繩さばきをする、この見得よろしく時の鐘にて、

ひやうし幕

二幕目

祐信屋敷の場

滿江部屋の場

〔役名――鬼王新左衛門、曾我ノ太郎祐信、梶原源太景季、鬼王弟團三郎、曾我一滿、箱王、斧賣り岩吉、青物賣り八百八。祐信妻滿江、十内妹十六夜等。〕

（祐信屋敷表門の場）――本舞臺中央に屋根附の門、潜門の出入り、魚鳥留といふ札、この上門番所、白壁、腰羽目、曰く窓に草鞋つるしあり、下の方黑塀、總て古びたる道具にて祐信屋敷表門の體。ここに魚賣り岩吉鰯を入れし盤臺の荷を下しゐる、傍に八百屋八百八野菜賣りの打扮にて荷を擔ぎ立ちかゝりゐる、鞠唄通り神樂にて幕明く。

岩吉　どうだえ八百屋さん、儲かるかえ。

八百　儲かるどころか前栽は元ばかり高くつて、得意場ぢやあひどく値切られ、惡くすると行拔さ、竹の子が出にやあ息はつけねえ。

岩吉　おいらなぞも去年の暮からからつしけを喰つたので、すつかり種を耗つてしまひ、二三日後から鰯が來たのでやう／＼商賣に出かけたのだ。

八百　その替りお前なざあ、出せえすりやあ一日でも荒つぽい錢を取んなさるからいゝ。

岩吉　どうして／＼荒つぽいどころか、こんな細え鰯を賣つちやあ、米の錢がやう／＼だ。

八百　高く賣りやあ商賣はなし、貧乏人殺しといふ世界だ。

岩吉　貧乏と言やあこゝの屋敷は、大名の貧乏人ださうだな。

八百　曾我様といつちやあ名代の貧乏、この屋敷へ商賣をするもので貸金のねえものはねえから、誰でもこゝを通るにやあ呼ばれねえやうに急いで行きやす。

岩吉　仕合せとつひに一度、おらあ呼ばれたことがねえ。

八百　そりやあお前呼ばれねえ筈だ、元日から大晦日まで、年中こゝは魚鳥留だ。

岩吉　さう言やあいつ通つても、門に札が出てゐるな。

八百　今時のお寺より曾我様の方が、魚を喰はねえ。

岩吉　それぢやあお前達は借りられる筈だ。

八百　どれ、呼ばれねえ中早く行かう。

ト八百八荷を擔ぎ行きかけると、門の内にて團三郎の聲にて、

團三　これ〳〵八百屋々々（ト呼びながら、門の潜りより肴流し一本差しにて出來る。）

八百　いえ八百屋ではございませぬ、魚屋でございます。

團三　嘘をつけ、菜や大根を擔いで行く魚屋があるものか。今日は現金で買つてやるから、さう逃げるには及ばぬわ。

八百　それぢやあ現金に下さりますか。（ト荷を下す。）

團三　おゝ、やらないでどうするものだ。して青物は何がある。
八百　いろ〳〵持つてをりまする、先づ芹に三葉、蓮に慈姑、大和芋に里芋、小松菜が安うございまする。
團三　安いと言つていくらだ。
八百　一把五十でございまする。
團三　もう花の咲く時分だのに、五十といふがあるものか。
岩吉　もし、鰯が安うございまするが、二三十買つておくんなせえな。
團三　いくら安くつても魚鳥留だ、魚屋に用はねえ。
岩吉　そんなことを言はねえで、大きいのを上げますから、惣菜に買つておくんなせえな。
　　トこの中潜りより十六夜振袖裝にて出來り、
十六　これ團三さん、お葉を一把とつて下さんせ。
團三　おい〳〵、今値をつけてゐるとこだ。
十六　もうお晝飯に間がないから早くとつて下さんせ、熬菜にせねばならぬわいな。
團三　また油揚の熬菜か、去年の暮から喰ひ飽きたな。何にしろもつと負けやれ。

八百　それぢやあ四文引いておきませう。
團三　四文と言はず八文負けやれ。
八百　どうして、さうは負けられませぬ。
岩吉　このお屋敷に不釣合な美しい姐さんの顏を見ちやあ、八百屋さん八文ぢやあ安いものだ。
八百　ようござります、負けませう。
團三　負けるとあらば束のよいのを、（ト菜を選り取る。）
八百　これ〳〵さうひつくり返されちやあ後で困る、どれでもそんなに違やあしませぬ。
十六　團三さん、それがようござんす。（ト一把とる。）
團三　それぢやあそれを取んなさい。八百屋剩錢はあるか。
八百　百錢でござりますか、その位はありませう。
ト團三郎窓につるしてある草鞋を一足取つて、
團三　それ五十賣だ、八文よこせ。
八百　剩錢といふのは草鞋かえ。
團三　小判形をしてゐるから、百錢も同じことだ。

岩吉　即ちおあしに緣もござります。とんだ口上茶番だ。
八百　どうで每日買ふものだ、それ八文上げますよ。（ト四文錢を一つ出す。）
園三　もう四文よこさぬか。
八百　そりやあ疾から八文通用だ。
園三　ほんに、さうであつたな。
十六　もし園三さん、若樣にあのお魚をとつて上げてはどうでござんす。
園三　おれもさうは思ふけれど、魚鳥留だから買はないのだ。
岩吉　いつも札が出てゐますが、お精進日でない日は何日でござります。
園三　されば、正月が三ケ日に、後は五節句に年越だ。
岩吉　それぢやあ僅一年に十日ばかりでござりますね。
八百　なんと、貧乏なお屋敷だらうね。
園三　なに、貧乏だと、
八百　いえさ、辛抱のいゝお屋敷だといふことサ。
岩吉
八百　はゝゝゝゝ。

ト笑ふ。と花道より鬼王新左衞門羽織大小の打扮、不動尊の供物の折板折を持ち出來り、花道にて、

鬼王　いつの間にか梅も咲き、柳も葉が出て青々と大層世界は春めいたが、曾我の御家は去年のまゝ、破れ障子に古疊、春になつても暮のやうだが、然し替らぬところが目出度いのだ。

ト思入あつて舞臺へ來る。

團三　兄者人、今お歸りでござりましたか。

十六　だいぶ遲うござりましたな。

鬼王　されば、和子樣方の御武運を祈念の爲めに、不動院へ護摩を上げにまゐつたところ、お別當に話しつけられ、思ひのほか手間どつたが、まだ晝飯には間があらうな。

十六　今八百屋がまゐりましたから、四つ半でござりませうわいな。

鬼王　これはよい鰯だが、魚屋何ほどぢや。

岩吉　はい、十尾で六十四文でござります。

鬼王　六十四文とは値が高いな、三十二文にならぬか。

岩吉　半分値にやあなりませぬが、腹の切れてゐるのなら負けておきませう。

鬼王　いや、そのやうな忌はしいのはいやだ。

岩吉　それぢやあ頭の落ちたのは、どうでござります。
八百　どうで腹も切らにやあならず、頭も落さにやあならないものだから、安い方がようござりますぜ。
岩吉　頭の落ちたのになせえまし、三十二文でまけませう。
圓三　あゝこれ〳〵魚屋、いくら値が安くつても、腹が切れてゐるの頭が落ちてゐるのと、そりやあ武家に禁物だ。
岩吉　なるほど、こりやあ粗相を申しました、それぢやあ滿足なのを、いゝわらぢで負けて上げませう。
鬼王　草鞋と申すは何ほどぢや。
岩吉　はい、五十文でござります。
鬼王　はて、つひに聞かぬ符牒ぢやな。
岩吉　今出來た符牒でござります、はゝゝゝ。
鬼王　それでは五十で買ふから、腹の切れぬ頭の丈夫な、なるたけ大きいのを選つてくりやれ。
岩吉　畏まりました、いくつ上げます。
鬼王　おゝ十尾くりやれ。
岩吉　え、たつた十尾でござりますか。

鬼王　お上ばかり故澤山だ。

ト此中十六夜門番所から砂鉢を取出し。

十六　これへ入れて下さんせ。

岩吉　はい〳〵、（ト皿を取り、）一ウ〳〵二ア〳〵。

ト鰯を算へて皿に入れる、團三郎は草鞋を一足出しある。

團三　それ符牒の五十だ。（ト岩吉に渡す。）

岩吉　有難うございります。

八百　もし魚屋さん、お前はこれからどつちの方へ行きなさる。

岩吉　雪の下の方へ行きやすのだ。

八百　それぢやあそこまで一緒に行かう。

鬼王　又よいのがあつたら、持つて來てくりやれ。

岩吉　畏まりました。

兩人　こりやあ大きに有難うございりました。

ト通り神樂にて草鞋を穿くやうに拵へながら、兩人下手へ入る。

鬼王　これ十六夜どの、その鰯はそのまゝに鹽にして、燒いて上げやれ。
十六　畏まつてござりまする。
鬼王　必ず頭を落さぬやうに、
十六　心得てをりますわいな。
　　　ト鞠唄にて、十六夜は砂鉢を持ち門の内へ入る。鬼王あたりへ思入あつて、
鬼王　これ團三郎、そちは御上使の噂を聞かぬか。
團三　一向に承はりませぬが、何の御上使でござります。
鬼王　今この宿の問屋場へ先觸がまゐつたとて、宿役人の話を聞けば、鎌倉からこの屋敷へ御上使がまゐるとのこと、不意の御入りは心得ず、風聞にいたせこの事を殿樣へ申上げ、玄關から書院をばきれいに掃除をしてくりやれ。
團三　所詮きれいには行きませぬが、埃だけ掃いておきませう、何にしろ困るのは疊が切れてをりますが、薄縁でも敷いておかう。
鬼王　もし薄縁で見ともなくば、お居間の疊を敷き替へてもよい。
團三　どうかいたしておきませう。

鬼王　おゝ、まだある〳〵、このお供物を持つて行つてくりやれ。
團三　違ひ棚へ入れておきませうか。
鬼王　いや〳〵、一萬樣はよいけれど、箱王樣が御覽なさると直にこはしておしまひなさるから、袋戸棚へしまつておいてくりやれ。
團三　畏りました。(ト供物を受取り)どれ、お掃除にかゝらうか。

ト團三郎門の内へ入る、跡に鬼王殘り思入あつて、

鬼王　今日和子樣の御武運を祈念の爲めに不動院へ、御名代にまゐりしところ、護摩の煙に殺氣ありと御別當のお告故、心ならず歸る途中問屋場にての上使の噂、不意の御入りは常事ならず、殺氣のあるは和子樣方の御身の上に凶事でもと思ふ矢先へ魚屋が、腹が切れたの頭がないのと、何心なく言ふことも、もし前表ではあるまいかと取越苦勞に、常に啼く鳥の音までが氣にかゝり、四百四病の病より辛い貧苦に身を責める、その苦しみに增りし鬼王、凶事か吉事か辻占も　壽祝ふ萬歲扇(ト前に差したる萬歲扇を出して開く拍子に親骨放れる)明くる拍子に思はずもこの親骨の放れしは、返す〴〵も、

ト思入あつて扇をたゝむを、道具替りの知せ。

あゝ、鶴龜〳〵。

ト思入、唄にてこの道具廻る。

（書院の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面　所々破れたる大形の襖、上の方折廻して襖、下の方杉戸の出入、總て書院の體。こゝに團三郎棕梠箒を持ち、十六夜塵取りを持ち立つてゐる、この見得唄にて道具留まる。

十六　團三さん、私がちつと掃かうわいな。

團三　御上使の御入り前に早く掃除をしてしまはぬと、又兄貴に叱られねばならぬ。

十六　それぢやによつて私が、ちつと替らうといふのぢやわいな、

團三　いや〳〵お前が箒を持つた日には、晩までかゝつても掃除はできぬ、掃くのは私が一人で掃くから、早く髮でも撫附けたがよい。

十六　（髮をいぢり見て、）そんなにこはれたかいな。

團三　こはれたどころか鬢も髱もだいなしになつてゐるが、昨日結つた髮ぢやないか。

十六　而も昨日お晝過ぎに結うた髮故、奥樣も今朝御覽遊ばして、何でそんなにこはしたとおつしやい

ましたわいな。

團三　むゝ、奥樣がさうおつしやる筈だ、いかに寐相が惡いといつて、あんまりなこはしやうだ。

十六　いえ〳〵、この髮のこはれたのは寐相ばかりぢやござんせぬ、こりやお前故ぢやわいな。

團三　なに、おれ故とは、

十六（團三郎の顏を見て）あのまあ、眞面目な顏わいなあ、

ト恥かしさうにし、につこりと笑ひ俯向く、團三も思入。と奥より鬼王麻上下大小にて腕組をなし出來り兩人を見てこなしあつて咳拂ひをするに兩人びつくりし、團三郎箒をとつて鬼王を掃き出さうとする。

鬼王　あゝこれ、何をするのぢや。

團三　掃除をしますのだ。（ト無性にそこらを掃く。）

鬼王　えゝ靜にせぬか、埃りが立つてならぬわい。

ト十六夜間の惡き思入にて、

十六　おゝ、私や鰯を出しておいたが、猫が引きはせぬかしらん。

團三　そりやあ何より險難だ、早く臺所へ行つたがよい。

十六　あい〳〵。（ト下手杉戸の内へ入る。鬼王あたりを見て）

鬼王　まだ薄縁も敷かぬのか。

團三　掃除をしてから敷きます積りだ。

鬼王　何を今までしてをつたのぢや。

團三　つい、きれいに致さうと、思はず暇を取りました。

鬼王　最早御入りに間もあるまい、早う敷いておいたがよい。

團三　畏りました。

ト下手より薄縁を出し上手へ敷く、鬼王思入あつて、

鬼王　鎌倉よりの御上使は、凶事か吉事か知れざる故兄は心も心ならぬに、あらう事か不義いたづら、

團三　え、

鬼王　いやさ、不意の御入りは常事ならず、和子樣の御身の上でなければよいが、

ト彼方へ思入、この時花道の揚幕にて『鎌倉よりの上使』と呼ばゝる。

最早御上使御入りなるぞ、この趣を奥へ申せ。

團三　畏りました。

ト この時奥にて曾我ノ太郎祐信の聲にて、

祐信　いや、知らせに及ばぬ、太郎祐信お出迎へいたすであらう。

ト正面の襖を明けて、祐信細き棒茶筅御家上下にて刀を提げ出來ると、兩人辭儀をする。

鬼王　殊にはどなたのお入りなるか。

いかなることか鎌倉より、不意の上使は心得ず、

祐信　饗應の仕度いたせ。

團三　畏つてござりまする。

ト團三郎は下手杉戸の内へ入る、と、又花道の揚幕にて『上使』と呼び、中の舞になり梶原源太景季棒茶筅、上下大小にて出來る。祐信、鬼王は舞臺へ控へる。

景季　鎌倉よりの上使として梶原源太景季、これまで參着いたしてござる。

祐信　これは〳〵梶原源太景季殿には、御上使の御役目御苦勞千萬、卽ち曾我太郎祐信、

鬼王　家老鬼王新左衞門、これまでお出迎へ、

兩人　仕つてござりまする。

景季　出迎へ太儀、

祐信　御上使には、見苦しくとも、
鬼王　設けの席へ、
景季　役目なれば、上座御免、
　　ト ちよつと辭儀をなし、景季舞臺へ來り、上の方の床几へかける。
祐信　測らざる不意の御上使、如何なる儀にて候か、當家の主人太郎祐信、
鬼王　家臣鬼王新左衞門、
祐信　何卒、我々兩人へ、
鬼王　仰せ聞けられ、
兩人　下さりませう。
景季　（思入あつて、）鎌倉殿より上使の趣、謹しんで承はられよ。
兩人　はゝはつ、
　　ト兩人平伏なす、序の舞になりて、
景季　上使の趣餘の儀にあらず、曾我ノ太郎祐信養子河津ノ三郎祐康の男、一萬箱王の兩人は先年伊豆の伊藤にて我君を失ひ奉らんと、謀逆の企てありし伊藤祐親が孫たるによつて、其の罪科免

れ難く、今度由井ヶ濱に於て死刑申附くる間、即刻一滿箱王の兩人上使に立ちし景季へ相渡され
よ。異議に及ばゞ踏込んで搦めとれよと我君の嚴命、上使の趣、豫て斯くの通り。

トこれを聞き、祐信主從顏を見合せ思入あつて、

祐信 すりや某が養子たる一滿箱王兩人は、伊東入道祐親が血統の孫たるによつて、その罪科免れ難く、
由井ヶ濱にて死刑の御沙汰、祐信承知仕る。

景季 流石は老臣太郎殿、速なる御返答、源太景季祝着に存じ申す。

鬼王 扨は護摩の殺氣といひ、最前よりの前表は、果して和子の御身の上、神の知せであつたるか、
むゝ。

祐信 景季殿へお願ひは、上意の趣母滿江一滿箱王兩人へ申聞かすその間、暫時御猶豫下されい。

景季 尤もなるその願ひ、景季承知仕る。心靜かに申されよ。

祐信 御猶豫の段、お聞濟み下され、

兩人 有難う存じまする。

トこれにて景季床几を下り、上手へ住ひ思入あつて、

景季 扨祐信殿、これまでは嚴命受けし上使の表面、これからは日頃の懇意打寛いで其許へ、お心得を

申すであらう。

祐信　それはいかなる事なるか、景季殿の御懇志忝なうござる。

鬼王　御上使の表向き相濟む上は、梶原樣へお茶お煙草盆、差上げぬか。

ト下手にて團三郎と十六夜との「畏まりました」といふ返事ありて、十六夜は腰高の茶臺へ茶碗を載せて持出で景季へ出す。團三郎は古き書院煙草盆を持ち出で景季の前へおく。十六夜入替つて高坏へ落雁を積みしを持出でゝ出す。

祐信　粗菓ながら、お取り下され。

景季　賞味いたすでござらう。

ト茶を取つて喫む。團三郎、十六夜は下手に控へゐる、鬼王思入あつて、

鬼王　憚りながら梶原樣へお伺ひ申上げまする、和子兩人が祐親殿の孫たることは、當曾我家へ養子となりし砌より誰知らぬ者もなきに、九ヶ年が間御沙汰もなく唯今になり、程過ぎし祐親殿の罪科により何科もなき和子兩人を、死刑の御沙汰は如何なる譯か、拙者は合點がまゐりませぬ。

景季　おゝその不審尤も至極、元より科なき一滿箱王、假令祐親の孫たりとも、天下の政事にかゝる御沙汰のあらうやうはなけれども、年限たつて今となり君より直の嚴命は、まさしく讒者の仕業故、

祐信　なに、讒者の仕業とは、

鬼王　してその人は、何者でござりますな、

景季　讒言なせしは別人ならず、今を去ること九ヶ年以前、安元二年神無月奥野の狩の歸るさを、赤澤山に待ち受けて、河津ノ三郎祐康を遠矢を以て射落したる、工藤左衞門祐經なるわ。

祐信　むう、すりや工藤左衞門祐經殿の、お覺えよきまゝに、

鬼王　鎌倉殿へ讒言せしとな。

十六　何故あつて和子樣を、

團三　死刑にせうと計りしか。

景季　されば河津を討つたるは、角力の遺恨に股野なりと世上へこの事流布さすれど、まことはおのれが討ちし故、一萬箱王成長なし人とならば父の敵と、附狙ふは必定と末を思うて我君へ、己が憂を除かんと、伊東祐親の孫故に當の敵と君を狙ひ、小弓に小矢を番ひては障子襖を射通すは、まさしく恨みを晴す所存、助けおかば成人なし、いかなることをなさんも知れず、急ぎ死刑に行ひたまへと、竊に讒言なしたること誰言ふとなく風說なすは、隱すことほど現はるゝと、これ天の言はしむる所なり。

ト これを聞き、鬼王口惜しき思入にて、

鬼王 扨は主人の敵故、行末おのれが討たれんかと、慮つて讒言なし、生先長い御兄弟を頼朝公の權威にて死刑になさん企みよな。

團三 今鎌倉の大小名、文武を兼ぬるは、畠山工藤なりと言はれながら、さりとては臆病至極、

兩人 言はうやうなき人でなしめが、

景季 いかにも、鬼王が申す如く、文武を兼ねし祐經故、名を惜しみて讒言なぞは致すまじき事なるがこれ全く舍弟祐兼が己か遺恨を晴らさん爲め、兄を勸めて我君へともぐ讒言なしたる樣子、

祐信 兄祐經は兎も角も、曾我兄弟に祐兼が遺恨ありとは心得ず、

團三 もしやこのほど祐兼に、鶴ヶ岡にて私が出逢ひしことがござりましたが、それを遺恨に思つてか。

景季 いかにも、嫡子犬坊丸鶴ヶ岡へ參詣せし折柄、汝が試合をなし祐兼を打負かし、彼に恥辱を與へし故、それを遺恨に我君へ讒言せしと申すこと。

團三 扨はいよく試合に負けしを遺恨に思ひ讒言なし、何科もなき和子樣のお身の上となつたるか。

ト 後悔せし思入。

十六　そりやまあ、ひよんなことになりましたなあ。

景季　忠臣孝子も佞人の舌頭故に身を滅す、例は世々にまゝあること、聰明叡智の我君ながら佞辯に惑はされ、既に一滿箱王を死刑になせよと不仁の御沙汰、然るに大小名これを歎き、和田北條を初めとして我強き我父平三なども、御諫言を申し上げ命乞ひをなす所存、唯殘念なは鎌倉の賢者と呼ばるゝ重忠殿、所勞によつて引籠り出仕なきを歎くのみ、然し大小名一同に御歎願申したらお聞濟みのないことは、必ずともにござるまい。

祐信　何れも方の歎願にて、死刑の御沙汰はこのまゝに、助命とならば倅が仕合せ。

鬼王　三老方を始めとして、御一同からお願ひあらば、元より科なき和子達故、多分御免になりませう。

團三　御免にならぬその時は、一命捨てゝも濟まざる團三、

十六　こりやどうしたらようござりませう。

景季　氣遣ひいたすな、十が九つ御免にならんと思へども、お聞濟なきその時は、是非に及ばず兩人を謙倉表へ伴うて、敷革の上へすゑねばならぬ。されば御沙汰のあるまでは、兎にも角にもこの世の別れ、ゆる〳〵名殘を惜しまれよ。

祐信　御仁情の御計ひ、祐信身に取り忝なうござる。

鬼王　憚りながら御諚の趣和子兩人に申し傳へ、仕度の間御上使樣には、むさくろしくとも別間にて、おくつろぎ下さりませ。

景季　いかにも、長途の勞れもあれば、ゆる〳〵休息いたすであらう。

祐信　それ十六夜、御案内申せ。

十六　畏まりました。

景季　左樣ござらば祐信殿、

祐信　景季殿、

景季　後刻、

ト唄になり景季先に十六夜附いて奥へ入る。祐信はつと思入、鬼王つか〳〵と行き團三郎を引附ける。

團三　こりや兄者人には、何となされまする。

鬼王　何とするとは、あの、こゝな不忠者めが、（ト團三郎をすり附け、）これ、景季樣へ失禮故御休息まで怺へてゐたが、おのれが入らぬ腕立に、鶴ケ岡にて祐兼と試合をなして勝つたるが、遺恨となつてこの讒言。豫々何と言ひおいたるぞ、假令恨みはあるにもせよ、和子樣方が人となり、御成長

なさるまではその色目の見えぬやう、工藤家の小者にたりと手出しをするなと申置きしに、譬にもいふ生兵法大疵の元となり、和子樣方の御身の上となりしも汝がなした業、いかに若年とはいひながら前後の考もなく。言はうやうなきうつけ者めが。

ト破扇にてさん〲に打ちて突放す。團三郎思入あつて、

團三　かゝることにならうとは神ならぬ身の夢にも知らず、常日頃から權威を揮ひ、憎しと思ふ工藤一家なれども、こなたの教訓にぢつと怺へてゐたけれど、引くに引かれず若氣の過り、敵の片割祐兼へ鶴ヶ岡にて與へたる恥辱が遺恨の根となつて、賴朝公へ讒言なし、斯ることになつたるか。申譯にはこの場にて、

ト一腰へ手をかけるを鬼王留めてその手を捉へ、

鬼王　こりや〲切腹なすはまことの武士の致すこと、汝がやうな人でなしは、我手にかけて殺してくれん。（ト刀を拔きかけるを、祐信留めて、）

祐信　こりや〲、鬼王待て、

鬼王　いえ〲、お止め下さりますな。

祐信　はて、急くところでない、祐信に所存あればまあ〲待て。

鬼王　えゝ、殿の御意がなくばなあ。

團三　この上は御免を蒙むり、(ト又死なうとするを、)

祐信　こりや〱團三、その方も待て、(ト團三郎をも留める。)

團三　でも、このまゝには、

祐信　えゝ、うろたへて犬死なすか。

團三　さあ、それは、

祐信　待てと申さば兩人とも、急くところぢやない、まあ〱待ちやれ。

兩人　はあ。(ト控へる、と合方になり、)

祐信　こりや兩人ともよつく聞け、假令祐兼何ほどに佞辯を以て讒言をなすとも、今六十餘州の惣追輔使たる頼朝公が讒を用ひて、かゝる御沙汰に及ばうぞ。まつたく以て我君を恨み奉るにはあらざれど、父祐經の敵を討たんと、小弓に小矢を番ひては、おのれ敵めまつこのやうにと障子襖、射抜きたる、年にませたる振舞が我君の御耳に入り、工藤を狙ふを知りたまはず、お叔父伊東の敵なぞと鎌倉どのへ弓引くやうに、思召しての御沙汰ならん、團三郎が事からして二人の伜が死刑に遭ふ御沙汰のあらうやうはなし、假令又それにせしところが、斯くなり行くは過去の宿業、

今その方が命を捨て、身の言譯は立つにもせよ、我子が助命の爲めにはならぬ、頼みに思ふ一滿箱王、二人の倅を先だてゝ誰を頼みにいたさうぞ。この祐信が力と頼むは鬼王團三、そち達二人命を捨てゝ先立つは、此上もなき不忠ならずや。

鬼王　ではございませうが、このまゝに、

團三　生きてをつてはお二人樣へ、

祐信　濟まぬと思はゞ行末の、忠義を立てる思案をせよ。

鬼王　して、行末の忠義とは、

祐信　一滿箱王兩人が死刑になりしその後は、滿江とて女のこと、河津の三郎祐康が修羅の無念は誰が晴らすぞ。

兩人　え、

祐信　二人の倅が落命も工藤が讒とあるからは、恨みに恨み重なる敵、犬死いたす命延ばゝり、忠義を立つる所存はなきか。

鬼王　はゝ、有難き御意ながら、彼がなくとも新左衞門一人にて敵を討ち、修羅の御無念晴らさせ申さん。

團三　やはり拙者はこの場にて、(ト又死なうとするを祐信留めて、)

祐信　かほどに身共が事を分け申し聞かすを聞入れず、切腹なさば切腹いたせ、七生までの勘當なるぞ

　　トきつと言ふ。

團三　ちえゝ、すりや死ぬるにも死なれぬか。

　　ト一腰を投げ捨てぢつと思入、鬼王思入あつて、

鬼王　こりや團三郎、おのれのやうな人でなし命助けておいたとて、害にこそなれ利得にはならぬが、お慈悲深い殿樣の仰せ故に新左衞門殺すことのならざるは、命冥加なことゝ思ひ御恩を忘れず忠義を盡せ。

團三　はつ。(トうつぶきゐる。)

鬼王　何の役にも立たざるものを、斯ほどまでに御惠み下さる御仁情は、新左衞門骨身に徹へまして、有難うござりまする。

祐信　これといふも幼年より召仕うたる團三郎、家來のやうには思はぬわい。

鬼王　重々御懇の御意、

團三　有難う存じまする。

祐信　何は兎もあれ上意の趣、滿江始め兄弟へ申し聞せて支度をさせん。

鬼王　とは申しながらこれまでの、御成長を明暮に御悅びある滿江樣、かゝることゝ仰せあらば、そのお歎きはいかばかり、

祐信　申し聞かすは苦しけれど、猶豫なしさる上使の由來、

鬼王　少しも早う、お三人へ、

祐信　申し聞して覺悟させん。

團三　こりや、どうあつても、（ト思入。）

祐信　こりや、命はそちに預けたぞ。

團三　はつ。

祐信　さあ、鬼王來やれ。

ト唄、時の鐘となり、祐信しほ〳〵と奧へ入る。鬼王團三郎へ思入あつて續いて奧へ入る。團三郎は祐信の後を伏しをがみて、

團三　御仁情のお言葉に暫時の猶豫いたすものゝ、鶴ケ岡にて祐兼に恥辱を取らせしが遺恨となり、御兄弟の御身の上になりしと聞いては、生きてはゐられぬ。どう考へても命を捨てねば、滿江樣や

和子樣へ申譯なきこの身の疎忽、お言葉もどくは濟まざれど、死ぬより外に思案はないわい。

ト死なうといふ思入にて肌を脱ぎ支度をなし、一腰へ手をかける。これを後に十六夜窺ひゐて、つかつかと行き團三郎を留めて、

十六　あゝこれ團三どの、早まらしやんすな。

團三　えゝ死なねばならぬ、留めだてするな。

十六　樣子は一間で聞いてゐました、死なうといふのは尤もながら、あれほどまでに殿樣が事情を分けておつしやつたのに、死ぬのは不忠でござんすぞえ。

團三　假令後で殿樣のお叱りを受くればとて、のめ／＼生きてはゐられぬわい。

十六　逢つてお前が死なしやんすれば、私も後に生きてはゐぬ、共々命を捨てまする。さうしたならば明日から殿樣や滿江樣のお世話をするのは、兄さん一人。たゞさへ困るこのお屋敷、歎きに歎きをおかけ申すは、この上もないお上へ不忠、惡いことは言はぬほどに、殿樣の御意に從ひ、思ひとまつて下さんせいな。

團三　さあ、思ひとまつてゐられぬ故、御仁情のお言葉を背いて死なうといふ覺悟、そちは後に存らへて、お二方樣のお世話を申せ。

十六　いえ〳〵二世をかけたる團三どの、お前を先立て何でまあ、後に殘つてゐられうぞいな。

團三　（困りし思入にて、）そんならどうでも、死ぬといふのか。

十六　あいなあ。

團三　此の身ばかりか十六夜まで死んだ日には、お主樣へ不忠に不忠を重ぬる道理、

十六　そこへ心が附かしやんしたら、思ひとまつて下さんせいな。

團三　それぢやと言うて、（ト叉手をかけるを、留めて、）

十六　えゝ聞分のない團三どの、少しは私の言ふことも、

團三　むゝ。（ト十六夜一腰を引取りて、）

十六　聞いてくれたがよいわいな。

ト一腰を小脇に抱へ團三郎の手を取りぢつと顏を見る。團三郎は是非なき思入。唄にて此の道具廻る。

（滿江居間の場）――本舞臺四間通し中足の二重屋體、一面伊豫簾をおろし、上の方後へ下げて廊下の通ひ口、下の方網代塀、この前四つ目垣、春草の下草、梅の立木、總て曾我の屋敷滿江居間の體。

床の三重にて道具留る、と直に床の淨瑠璃になる。

上るり 〽玉くしげ箱根の山にまだ雪は、殘る寒さに去年のまゝ、春とはいへど冬枯れし曾我の太郎が荒れ屋敷。

トこれにて下座へ取り、獨吟の唄になる。

うた 〽すぐれし香に軒端もる梅の薫りを青柳の、髪にうつしてすき上る櫛の齒さへも通り兼ね、

トこの唄の中正面の伊豫簾を卷上げる と内に一滿、箱王振袖袴一本差し、滿江襠裲裝下げ髪にて、箱王は鏡臺へ對ひ、その髪を結ひゐる體。

上 〽雨もつ空の東風に、

唄 〽むかふ鏡もくもり勝ち、

上 〽涙にあらぬ鬢水の、

唄 〽膝にはら／＼散る梅や、

上 〽世を鶯の啼く聲も、

唄 〽後の世照らす法の導き、

トこの中滿江鬢を撫附けて結上げし思入、

箱王　母樣、もうよろしうござりまする。

滿江　おゝよいとも〳〵、いつもより美しう出來ました、こはさぬやうに大事にしや。

箱王　あい〳〵。

一滿　（襟を撫でゝ見、）もうし母樣、こゝに後毛がござりまする。

滿江　おゝ、どうしてか一筋殘つた、切るのはをしいものなれど、（ト思入あつて、）結直すも手間どれば、

一滿　どうぞ切つて下さりませ。

上〽襟さしむくれば滿江は、たゞ一筋の後毛さへをしやと思ふ親心、同じ思ひの祐信が鬼王もろとも一間を立出で、

ト滿江思入あつて一滿の後毛を切る、この中奥より以前の祐信、鬼王出來り、

祐信　おゝ滿江、これにをつたか。

鬼王　和子樣方のお髮上げでござりますか。

滿江　見苦しう存じた故、結ひなほしてやりました。

祐信　それは幸ひ、見事にできた。

鬼王　よく箱王樣の後毛が届きましてござりますな。

滿江　さあ一滿は延びたれど箱王は後を立て、後毛が多い故太刀取の邪魔にならぬやう、

鬼王
祐信　や、

滿江　油でとめておいたわいの。

　　ト言ふに祐信扨はと思ひ、

祐信　すりや滿江には上使の趣き、

鬼王　最早お聞き遊ばしましたか。

滿江　おゝ襖越しに承はり、脱れぬ事故二人にも申し聞かせて覺悟させ、後毛の下らぬやう髮を結う
　てやりました。

祐信　扨は一滿箱王も、仔細を聞いて覺悟せしとか。

一滿　はい、お祖父樣の科により死なねばならぬといふこと故、覺悟いたしてござりまする。

鬼王　おゝ、お出來しなされました〳〵、よくお覺悟なされました。あの、箱王樣にも、

箱王　おいやい、兄上と一緒故、おれも死ぬ氣でゐるわいやい。

鬼王　あゝ僅十歳か十一歳の箱王樣まで立派なお覺悟、

　　ト祐信も感心の思入にて、

祐信　さすがは萬夫不當と呼ばれし、河津の三郎祐康が妻子とて、健氣な覺悟、

鬼王　あまりのことで新左衞門、返す言葉もござりませぬ。

ヘ主從暫時感に絶え、言葉なければ滿江はしとやかに手を支へ、

ト祐信と鬼王は顏見合せ感心の思入、滿江思入あつて、

滿江　祐康橫死のその砌り死刑の御沙汰があるならば、祐信樣に今日の御苦勞はかけまじきに、既に一滿箱王もろとも赤澤山の露霜と、自殺なして死なんとせしをこれなる新左衞門に留められ、生先長い和子達の命を斷つは本意にあらず、兎にも角にもながらへて成長させよと諫められ、一滿箱王伴ひて、親しき仲に祐信樣へ再緣なせしこの滿江、五歲や三歲の兄弟が背丈延びしも誰が蔭、皆祐信樣のお蔭なるに、その御恩さへ送りもせず、又もやかゝる御苦勞かけるは心苦しうござりますが、これも宿世の約束とお許しなされて下さりませ。

祐信　あゝいや〳〵其の御斟酌には及ばぬ事、元より一家の曾我河津、幸ひ我に子なき故養子となせし一滿箱王、何科もなく死刑に逢ふは伊東が孫に生れし不運、歎かはしきことなる故落してもやりたけれど、鎌倉殿の嚴命なれば逃隱れても隱れ難し、凡そ百歲の壽を保つも亦當歲で死するのも皆これ定業なれば、これまでの壽とあきらめられよ。

滿江　有難いその御教諭、必ず徒には思ひませぬ。鬼王そなたもこの年月二人の者の成長を樂しみに致しをつたが、是非もないことになつたわいな。

鬼王　まことに申し上げやうもなき次第、そも安元二年より和子樣方のお供なし御當家へ參つてより、及ばずながら精いつぱい御奉公いたしまするも、此身に年の寄るをも知らず和子樣方の御成長をたゞ明暮に樂しみをり、もう何年にて御元服、御前髮をおとりなされたら御父上に生寫し、そのお顏を見たいものと、

〽指折り算へし甲斐もなく、このまゝ御最期なさるゝかと思ひますれば鬼王が兩の腕をもがれし心地、

〽御殘念にござりませう。

嘸や冥土で祐康樣も、

その御無念は鬼王が受けつぎまして、遠からず恨み重なる祐經を、

ト鬼王拳を握り悔しき思入にていふを、

祐信　あゝこれ、ひそかに〳〵、間はへだてゝも上使の入來、めつたな事は申されぬぞ。

鬼王　つい口をしさに思はず知らず、まつぴら御免下さりませ。

〽面目なげに控ゆれば、滿江外さず二人に向ひ、

滿江　これ二人の者、祐康どの御最期より算ふれば早九歳、死ぬることまで合點なすほど成人なせしも父上の厚きお惠み御恩なれば、今母が申せし通り、ようお禮を申しやいの。

兩人　かしこまりました。

〽行儀正しく兄弟は父の前へ手を支へ、

一滿　母上もろともこの年月、産の親にもまさりし御惠み、

箱王　可愛がつて下さりました、その御恩も送りませず、

一滿　先立ちまする、

兩人　不孝の罪。

〽お許しなされて下されませと、言ふ聲さへも兄弟が涙にうるめば祐信も、眼をしばたゝき洟打ちかみ、

祐信　祐康殿最期より養子となせしが河津と違ひ、領地も少なく窮する故そち達にも不自由させ、親甲斐もない此祐信、禮を言はれて面目ない。何一つ心任せにさせざりしが今での殘念、いや事長く申しなば却つて歎きを增す故に、言はぬ心を推量いたせ。

ト一滿、箱王の兩人は俯向き聞いてゐる。

滿江　あゝ勿體ないことおつしやりませ、當家へ養子に參らずば家國沒收に母もろとも、路頭に迷ふ子供等二人、雨露にも打たれずして九年がその間、妻とはいへど名のみにて同一臥所へお臥りもせず、二人の子供を血を分けし子も同然にお愛しみ、この上もない身の仕合せ、何で不自由なことがござりませう。

鬼王　そりや奧樣の仰せの通り、これまで長のその間、あなたの御貞女立つやうに御仁情の御計ひ、又和子樣方もこのやうにお二人ともに馬にも踏まれず御成長遊ばしましたは、實に御恩でござりまする。

一滿　鬼王そちにも今までは長々世話になつたれど、

箱王　もう明日から逢はれぬ二人、

一滿　名殘をしうて、

兩人　悲しいわいの。

鬼王　いえもうお前樣方より私がどのやうでござりませう。勿體ないが子がなき故我子の如く存じましたお二人樣も、九年あと伊豆からこれへまゐりし時分は五歳と三歳のいわやく盛り、每朝抱いたり

背負つたりおむつがるのをおだまし申し唄うて歩いた子守唄は、いまだに忘れはいたしませぬ。悲しい中にもまだかうしておいでなさる中はよけれど、明日から嘸や何かにつけお二人様が思ひ出され、臥してもおち〳〵寐られますまい。

一満　これ鬼王、何でそなたは泣きやるのだ、侍といふものは死ぬ時でも泣かぬものぢやと、母様のおつしやりつけ、

〽忠義一途と恩愛に迫りて泣くを二人は見て、

箱王　これ見よ、兄上も箱王もそなたより年下なれど、悲しけれども泣きはせぬぞよ。

〽母の教へに泣きたさを泣かぬ健氣な兄弟に、いとゞせきくる鬼王が涙呑込み〳〵て、

鬼王　あゝ恐入りました〳〵、あまり立派なお覺悟故感心いたして涙が出ました。もう鬼王も泣きませぬぞ。（トぢつと思入れ）

箱王　おゝ強い〳〵、よく泣き止んだぞ、それ褒美をやるぞよ。

〽側に有合ふ小弓をとり、さし出せば鬼王が、

ト箱王持遊びの弓を取つて出す。

鬼王　すりやこれを下さりますとか、こりや御祕藏の弓ではござりませぬか。

箱王　おれが大事の弓なれど、もう明日死ねば入らぬわいやい。

一滿　おゝ箱王がやりやつたら、おれもこれをやりませう。(ト矢を取つて出す。)

鬼王　むゝ、これにて揃うたが、お二人さまの御筐、

〽褒美というて下されし弓矢は敵祐經を、これにて射よとの知らせかと、思へば又も出る涙、

ト鬼王小弓に小矢を持つてよろしく思入、箱王顏をさしのぞいて、

箱王　鬼王泣くのか。

鬼王　いえ〳〵、決して泣きはいたしませぬ。

箱王　それでも涙が出てゐるわいの。

鬼王　いえ、こりや涙ではござせりまぬ、眼から雨が降つたのでござりまする。

〽言ひまぎらせば滿江も、泣き度き胸をおししづめ、

滿江　鬼王、そちが言ふ通り、産の我子が末期の別れ、悲しいのは山々なれど私が泣いたら二人の者も嘸や悲しく泣かうと思ひ、さすれば鎌倉表より上使に來られし梶原殿に未練な者と思はるゝが、武士たる身にて耻かしく、せき來る涙を怺ゆる苦しさ、推量なしてたもいの。

ト滿江よろしく思入。

祐信 〽最早時刻と祐信は、威儀を正して二人に向ひ、（ト祐信思入あつて、）斯くまで立派な覺悟故、いふまではなけれども上使に立ちし梶原殿が、鎌倉へ伴はれし後由井ヶ濱へ引出され、死刑に逢ふその時に、必ず未練な最期をいたすな、人は一代名は末代、この祐信は兎も角も、亡父祐康の耻辱なるぞ。

〽言ひ聞かすればおとなしく、

一滿 それは最前母樣のおつしやりつけ故二人とも、由井ヶ濱へ引かれし時は、

箱王 あつぱれ曾我の子供等と、見てゐる人に褒められるやう、

一滿 檢使へ禮儀の挨拶なし、

箱王 脇眼もふらずちやんとして、

一滿 これ、この首をかう延ばし、

箱王 立派に笑うて、

兩人 死にまする。

滿江 おゝよう言うたく、死ぬる末期に未練を起し、卑怯な最期いたしなば、七生までの勘當ぢやとよう申附けておいたれば、卑怯な最期はいたしますまい。

祐信　返す〴〵も健氣なことだ、嘸や冥土で祐康殿が二人の來るのを待つてゞあらう。
一滿　思へば父上母上にお別れ申すは悲しいけれど、亡き父上のお目にかゝるが樂しみでござりまする。
箱王　兄上は知つてなれどわしはお顏を知らぬ故、鬼王そちも一緒に行き、父上を敎へてくりや。
鬼王　おゝお前樣は御存じない筈、これが行かれることならば御供いたして死出三途、御案內をいたしまするに、
滿江　こりや〳〵二人の者、祐康殿は鬼王によう面相か似てをれば、忘れぬやうに覺えて行きや。
一滿　すりや鬼王の面相が、父上に似てをりますとか。
箱王　鬼王、顏を見せやいの。
鬼王　はつ、
〽顏さし出せばおとゞいが、右と左に手を執つて、
ト一滿と箱王鬼王の左右より取り附き、ぢつと顏を見て、
一滿　そんなら、これが、
箱王　父上さま、
〽おなつかしやと取縋れば、我子の如く鬼王が思ふ心にいとゞ尙淚さし來る汐頭、胸に波う

つ憂き思ひ、

祐信　あゝ冥土で二人にこの如く取縋られたら祐康殿は、嘸や嬉しきことであらう。それに引替へ今ここで二人に別るゝ我本意なさ、滿江そなたも嘸かしならん。

ト後言ひさして祐信が涙を咳にまぎらせば、顏をそむけて滿江が泣かじと怺ゆる切なさを、見る鬼王はたまり兼ね、二人を突きのけ打伏せば、兄弟顏を見合せて物も得言はずしほるゝ折柄、一間の中に咳いたし、しづ〳〵出る梶原源太、

トこの中皆々愁ひの思入よろしくあつて、奧より梶原出來る。これにて皆々びつくりなし立別れて住ふ、梶原上手へ住ひて、

梶原　最前からの一部始終、一間の中で承はりしが、僅十一と十三の幼き二人が立派な覺悟、親も親なり子も子なりと、感心いたして景季も思はず落涙いたしてござる。

ト言ふに滿江座を下り、威儀を正して手を支へ、

滿江　これは〳〵梶原樣には、嚴命とは申しながら、遠路のところ上使のお役目、御苦勞千萬に存じ上げます。

梶原　上意故是非なけれど、滿江どのにも嘸かし愁傷、御心中お察し申す。

滿江　御懇のお言葉有難う存じまする。就きましては鎌倉までよほどの道程にござりますれば、幼き者故途次御面倒にござりませうが、よろしうお願ひ申します。

梶原　途中は某同道なせば必ずともにお案じあるな、面倒を見て伴ひ申す。又先刻も申す通り、北條殿を始めとして在鎌倉の大小名、一同死刑を打歎き命乞ひの御諫言申上ぐる筈なれば、鎌倉表へ召連れまゐり、御免になりて又再び、某伴ひ歸るも知れず、再度の上使を相待たれよ。

祐信　何分ともに、御前よろしう、

滿江　おとりなしをば、

三人　お願ひ申し上げまする。

〽折柄告ぐる鐘の音も、屠所の歩みの未の刻、（ト時の鐘鳴る。）

梶原　唯今打ちしは何時でござるな。

祐信　最早未の上刻にござりまする。

滿江　遲刻いたさば上への恐れ、名殘りをしくも二人は梶原樣と共々に、

一滿箱王　畏りましてござりまする。

祐信　何さまかゝる立派な覺悟、卑怯未練にひまどりしと思はるゝも殘念至極、

梶原　いや、その儀は某鎌倉へ參らば、二人が健氣さを武士の手本に大小名へ、逐一披露いたすであらう。

祐信　御仁情忝なうござる。

滿江　申さばこれが兄弟の一世一度の曠なれば、二人が衣服を改めまして、差上げまするでござりませう。鬼王、その服臺をこれへ、

鬼王　畏りました。

〽はつと答へて取出す袱紗覆ひし服臺も昔床しき紋散し、剝げぬ堅地の滿江が、

ト下手にある淺黃袱紗のかゝりし小袖を載せし服臺を鬼王取つて滿江の前へ出す。滿江袱紗を取て、

滿江　この彌生は一滿が誕生故に產神の二所權現へ參詣させんと、貧苦の中で故鄕へ飾る錦の染小袖、仕立てしまゝにしまひ置き、まだ仕付苧もとらざりしが、

〽今日着初めの着納めにならうとは知らざりし、

御上使樣へ失禮ながら、暫く御猶豫下さりませ。

梶原　遠慮に及ばぬ、ゆる〳〵と着せ替へて遣はされい。

滿江　有難うござりまする。

〽鬼王とも〴〵兩人に着する小袖は滿江が、物好なせし兒模樣、垣に朝顏紅葉に鹿、その摺箔の光りさへ彌陀の御國の曠にして、くゝり袴の紫もあの世へ導く雲の色、美しきほど猶哀れなり、

ト この中滿江は一滿に、鬼王は箱王に着せ替へさせることよろしくあつて、

滿江　母のあまき心より拵へおきし此の小袖、着せてやりたく御上使樣へ思はぬ失禮、お許しなされて下さりませ。（ト辭儀をなす。）

梶原　あゝこれは見事々々、垣に朝顏紅葉に鹿、物好ありしこの小袖、

祐信　實に朝顏は朝な〳〵日毎に花の咲きかへて、いと美しきものなれど、

滿江　盛り短かく未明に咲き、日影に萎む果敢なさは、とりもなほさず二人が身の上、

梶原　今日鎌倉へ根越して行けど再び花咲き赦免に逢ひ、槿花のはえとならんも知れず、

鬼王　然ある時には故鄕へ飾る錦の照紅葉、その夕映に色まさり、

祐信　妻戀ふ鹿の親と子が、袖に涙の時雨や霽れん。

滿江　それも御免しなき時は、夢野の鹿の夢となり、

梶原　風に紅葉の散るとても、亦來る春に芽をふきて、

鬼王　しぼみし垣の朝顔も、

祐信　共に開くは雨露霜雪、

鬼王　願ふは天の、

三人　御恵み、

〽主從顔を見合せて、打ちしほるれば滿江が、（ト皆々よろしく思入あつて）

滿江　いざ、景季どの、お連れ下され。

〽言ふに源太は打うなづき、

梶原　唯今打ちしは八つなれば、いまだ暫しは苦しからじ、せめて別の盃めされ。

祐信　重々の御仁情、

滿江　何とお禮を申さうやら、

兩人　有難うござりまする。

鬼王　こりや團三郎次にをるか、銚子盃持參いたせ。（ト下手にて）

團三　畏つてござりまする。

〽言葉に次の杉戶より團三郎は目八分、破三方に盃銚子携へ出れば十六夜は、門出を祝ふ

鰯の燒物、尾頭附とてさし出せば、

トこの中下手の杉戸より團三郎古き三方に盃を載せ、銚子を持ち出來る、後より十六夜古き黑塗りの八寸皿へ鰯を入れしを持ち出來り、よき所へおき控へる、祐信滿江これを見て恥しき思入。

祐信　あゝ景季殿の面前へ、見るかげもなきこの調度、

滿江　昔蒔繪の三つ組も、はげたるまゝの缺け盃、

鬼王　錆びし銚子に破れ三方、

團三　尾頭附きとて持參せし、

十六　祝ひ魚は鹽鰯、

祐信　見苦しくとも一世の別れ、

梶原　これにて親子の盃めされ。

皆々　はツ。

ト對面三重になり祐信盃を取上げる、十六夜酌をなす。祐信飲んで。

祐信　兄上なれば、一滿へさし申さう。

一滿　はツ。

ト盃を取る。滿江盃を取上げ十六夜酌をなし、滿江飲んで、

滿江　妾は弟箱王へ。

箱王　はツ。（ト兩人よろしく飲む。）

鬼王　そのお流れは、

三人　わたくし共へ、

梶原　諸侯助命の歎願にて、目出度く再び歸るやう、祝うて景季肴せん。

ト扇を取つて祝言の謠をうたふ、この中よろしく盃のやりとりありて、謠の切にて、

祐信　門出をお祝し下されて、

皆々　有難うございまする。

〽禮儀終つて團三郎兄の前へ小膝をすゝめ、

團三　これより直に鎌倉へおいでなさるゝ和子樣方、御身に凶事のないやうに最前こなたが持參せし不動尊のお供物を、

鬼王　おゝさつぱりと忘れてしまうた、こればかりは團三出來した、少しも早く差上げん。十六夜どの供物の折を。

十六　かしこまりました。

〽言ふに心得十六夜が取出す護摩の供物の折、

ト十六夜袋戸棚より以前の供物の折を出す、鬼王取つて、

鬼王　いざ、一つ宛召上りませ。

〽蓋取り除けて打見やり、（ト折の蓋を明けて見て、）

やゝ供物の菓子は鎌倉の大小名の紋盡し、（ト蓋の上へ菓子を明けるを、皆々見て、）

祐信　何さまこれは珍らし、北條殿の鱗を始め、

滿江　三つ引模樣は和田一統、

一滿　秩父どのは五七の桐、

箱王　矢筈は名だいのげぢ〳〵どの、

鬼王　あゝもし、千葉の月星日の惠み。

十六　開き扇は御運も開き、

團三　大一大萬大吉とは、

梶原　大小名の助命の願ひに、

祐信　さいさきのよき紋盡し。

満江　中に一際勝れたる、

十六　色よき紋は誰なるか、

團三　しかも庵に木瓜は、（ト菓子を取つて出す。）

鬼王　これぞ工藤左衛門祐經、

一満　そんなら、これが、

箱王　祐經とや。（ト兩人きつと見得。）

〽敵と聞いて箱王が供物の折を思はずも、めり〳〵と打ちひしげば。

ト箱王悔しき思入あつて供物の折をひしぐ。皆々見てぎよつと思入。

梶原　ほゝお、蛇は寸にしてその兆あり、末頼もしきこの振舞、祐信殿、

祐信　はつ。

梶原　これ皆貴所のお育てがら、憚りながら、

ト扇をとんと突くを道具替りの知せ。

感心仕ッた。

〽感じ入りてぞ、
ト梶原感心の思入、皆々よろしく、三重の送りにてこの道具廻る。

（玄關前の場）――本舞臺中央に玄關式臺よろしく、上手簾のかゝりし小窓、總て同家玄關前の體。竹本の三重にて道具なさまる。

〽送り行く日足も西へかたぶきし不破の關屋のそれならで、庇も破れし玄關口、早御上使のお歸りとて、團三郎はひと間を立ちいで、
ト下手より團三郎出で、梶原及び兄弟の草履をなほし、花道揚幕の方へ向って、

團三　御上使のお立でござりますぞ。

大勢（揚幕の内にて、）はあゝ。

〽はつと答ゆる折柄に、景季二人の兄弟を右と左りに伴うて玄關口へ立出づれば、上使を敬ひ式臺まで見送る祐信新左衞門、
トこの中奥より梶原、一﨟箱王を連れ、後より祐信、鬼王見送り出來り、三人は草履を穿き下手へ行きて。

梶原　いやなに祐信殿、最早お見送りには及びませぬぞ。
祐信　いや、鎌倉よりの御上使なれば、
鬼王　大磯の境木まで、
團三　お見送り、
三人　いたすでござりませう。
梶原　あ、いや／＼その儀は決して御無用に下され。景季却て迷惑にござる。
祐信　左樣ござれば仰せに任せ、御免を蒙りますでござりまする。
梶原　（あたりを見て、）滿江どのが見えざるが、如何めされしぞ。
祐信　淚一滴こぼさねど、さすが名殘りのをしまれて、
鬼王　殊には和子樣お二人に後へお心殘らぬやう、
團三　それ故これへおいでなく、一間においでなされまする。
梶原　はて、感心なことでござる。
兄弟　左樣なれば父上樣、
祐信　おゝおとなしういたせ。

一満　鬼王、
箱王　團三、
兄弟　さらば、
鬼王
團三　はあゝ。（トうつむき名殘をしき思入。）
梶原　然らば、祐信殿、
祐信　御上使御苦勞、
梶原　お別れ申す。

〽一満箱王先に立て、景季後に附添ふを隙見なしたる滿江が、簾かゝげて見送るを、ふり返りたるおとゞいが、

トこの中兄弟先に梶原花道よき所まで行く、祐信鬼王は式臺、團三郎は下手に控へ見送る。この時上手窓の簾を十六夜捲上げる、と内に以前の滿江兩人を見送りゐる。兄弟花道にて振返り、これを見つけて、

箱王　あれ、母さまが、（ト立ち返らうとするを、）
一満　あゝこれ、未練なことを、（ト對面の見得にて留める。）

梶原　いや、未練にあらぬこの世の別れ、
祐信　景季殿のお許しあれば、
鬼王　お心置きなく、
團三　とつくりお顔を、
十六　御覧遊ばせ。
　ト満江兄弟と顔を見合せ、
兄弟　母さま、御無事で、
満江　おゝ、二人よ、さらば、
　〽簾おろして満江が初めてはつと泣く聲に、人々實もと見返れば、心弱くてかなはじと、中をへだてゝ、
　ト満江はよろしく思入あつて簾をはらりとおろし、ハアと泣く。これにて皆々愁ひの思入、兄弟は後へ歸らうとするを梶原へだてる。
皆々　さらば、
　〽別れ行く、

ト皆々引張りよろしく、段切にて、
ト幕外、梶原と兄弟殘り、

梶原　さあ、急いで行きやれ。

兄弟　はあゝ、

ト時の太鼓、鳴物にて兄弟兩人しづ〱と行くを、梶原不便なといふ思入にて花道へ入る。後シャギリ。

幕

三幕目　鎌倉營中の場

〔役名――畠山庄司重忠、右幕下賴朝、千葉之介常胤、佐々木三郞盛綱、宇都宮彌三郞朝忠、結城七郞朝光、梶原平三景時、北條相模守時政、大名多勢。〕

（營中の場）――本舞臺正面一面大廊下の張物、こゝに○△の茶道二人、□◎の侍士二人立並びゐる、この見得五つの時の太鼓にて幕明く。

□　唯今打ちしお太鼓は、最早辰の上刻でござるな。

○　いかにも五つのお太鼓なれば、祈念祭りの式も終り、禰宜神主の面々は退出いたすに間もあるま

じ、

○引續いてその後は、御祝儀として御能の催し、四座の猿樂相詰めたれば、

△卽ち御能拜見に在鎌倉の諸侯の方々、早朝よりの總出仕、

□それ故何かと御用繁多、

◎詰所で湯さへ飮む間がござらぬ。

○わたくし共も御同然、御苦勞千萬に、

△存じまする。（ト茶道兩人辭儀をなし、花道の方を見て、）

□兎かう申すその中に、最早あれへ誰殿か出仕めされてござりまする。

◎これへござらば、それ〳〵へ御案内を、

□◎申すでござらう。

○いかにも左樣、

△○仕りませう。

ト花道より大名四人烏帽子、大紋、小さ刀、中啓を持ち出來り、直に本舞臺へ來る、皆々これを見て、

○これは〳〵相澤侯を始めとして、新年祭り御祝儀の御出仕、

△　御苦勞千萬に。
四人　存じまする。
大一　各々方にも今日の役目。
四人　大儀にござる。
○　諸侯方のお言葉、痛み入つてござりまする。
　　ト辭儀をなし思入あつて、
いや、かやうな席で伺ひますも近頃恐れ入りまするが、夫の諺に申す聞くは一時の耻聞かぬは末代の耻と申せば、耻を忍んで伺ひまする。
△　外の儀でもござりませぬが、祈年祭りと申すのはいかゞな古禮でござりまするか、我々一向辨へませねば、どういふことかその仔細を承りたうござりまする。
大一　各々方が尋ねらるゝ祈年祭りの原因は、我々深く學ばねば詳しきことは存ぜぬが、聞及んだることだけは、いかにもお話し申すでござる。
大二　相澤氏の仰せの通り、博識ならねばおほよそながら祈年祭りと申すのは、年乞の神事と申すことでござる。

○　その神事の故實をば、

△　承りたう存じまする。

大三　即ち人皇三十八代天武天皇の御時白鳳四年二月初め、

大四　恐れ多くも天照大神を始めとして、八百萬の神々を祭り、

大一　その年の災厄を免るゝ爲め祈られし古例により、營中に於て執行はるゝ。

大二　まつた神事の嘉儀として、今日御能の御催し、それ故我々出仕なしたり、

○　神事の故實を承はり、

△　何のことやら辨へなき、

□　私どもまで發明いたし、

◎　大慶至極に、

四人　存じまする。（下辭儀をなす。）

大一　いや、兎角申すその間に、最早御能の刻限なれば、

大二　在鎌倉の諸侯にも、とくより出仕めされつらん。

大三　猶豫いたさず、拜見所へ、

大四 御同道仕らん。

○ 御休息のお席も用意いたしてござりますれば。

△ これより直にお通りあつて、然るべう。

兩人 存じまする。

大一 然らば、罷り、

四人 通るでござる。

□ それ、御案内、

○△ はあ。

ト茶道案内して、大名四人に侍二人附添ひ上手へ入る。と、正面の廊下を疊み引上げる。と、本舞臺黑塗り襷の大欄間にて、一面に翠簾をおろし、よろしく道具をさまる。と直に下座にて、

唄 〽天下を守り治まる〳〵、萬歲樂で目出度き〳〵。

ト難波の謠の切一節あつて切れると、御簾を捲上げ欄間をよき所まで引上げる。と、本舞臺塗りがまちの上段。黑塗り竹の節の欄間、一面に翠簾をおろし、上下は杉戸、この前に金張り極彩色胄の豫讓を描きし大衝立を置き、上段の上下に鎌倉の大名十二人住ひ、總て右幕下大廣間

の體になりゝ管絃にて道具をさまる。

大一　今日ッた吉例によつて、年乞の神事、ことなく相濟み、

大二　殊には父御能拜見、お流れまで下しおかれ。

大三　卽ち天下泰平の慶賀に、

大四　在鎌倉は申すに及ばず、

大五　六十餘州の大小名、

大六　官位家格の別をたゞし、

大七　島臺その外上り太刀、

大八　在國幼少は使者をさし越し、

大九　陪臣者に至るまで、

六十　御通りがゝりのお目見得、

大〇　殘る方なく相濟む上は、

大一　一同恐悅、

大二　申上げ、

皆々　奉りまする。

ト これにて正面御簾の内に制止聲あつて御簾を捲上げる。と正面金地笹龍膽の紋散し大廣間の遠見。上段の正面に右幕下頼朝金烏帽子、直垂、指貫にて褥の上に住ひ、後に小姓兩人太刀を持ち、上手に北條相模守時政烏帽子大紋、下手に梶原平三景時中啓を持ち控へゐる。

時政　諸侯の面々出仕の上、御機嫌伺ひ奉り、

景時　恐悦至極に存じ奉りまする。

頼朝　例格によつて方々出仕の儀過分、

大一　御懇の上意を蒙むりまして、

大二　一同有難き仕合せに、

皆々　存じ奉りまする。

ト 皆辭儀をなす。時政思入あつて

時政　見受けしところこの席に、千葉佐々木結城宇都宮未だこれに見えざるが、遲參いたせしことなるか。

景時　いや、最前詰所で面會なせしが、如何いたして出仕なさぬか、はて心得ぬことでござる。

ト この時花道の揚幕にて、

常胤 千葉の介常胤、

朝光 結城七郎朝光。(ト東の假花道の揚幕にて)

盛綱 佐々木三郎盛綱、

朝忠 宇都宮彌三郎朝忠、

常胤 疾より伺候、

四人 仕ツてござりまする。

ト中の舞になり、千葉ノ介烏帽子大紋にて花籠に梅と梨の花の造花を入れたるを白木の臺に載せて持ち次に結城七郎同じ装にて三方に短冊を結び附し松の枝を載せたるを持ち、東の假花道より佐々木盛綱同じ装籠に雉子の雛鳥を入れたるを載せし臺を持ち、次に宇都宮朝忠同じ装にて櫻の石臺を持ち出來り、双方花道へ控へる。

大一 千葉殿を初め、方々には、

大二 唯今伺候、

皆々 めされしか。

常胤　いかにも、御能相濟みて詰所に控へ罷りありしが、

盛綱　君の御機嫌伺はん爲め、

四人　伺候仕ッてござりまする。

賴朝　在鎌倉の諸侯には、殘る方なく今日の出仕、予に於ても滿足なるぞ。

皆々　はあゝ。（ト辭儀をなす。）

時政　亂れし世をも我君が四海を治めたまひしより、荒き波なくおだやかに萬民鼓腹の時到りしは、この上もなき事にござる。

景時　なにさま北條殿の仰せの通り、斯靜謐に及びしも君の御武運目出度き故、したが列侯始め某なども戰場の苦を思ひ出すと、ふつ〳〵大名は厭になれど、斯く泰平の御代となれば、まことに安樂世界でござる。

時政　これと申すも天下一統偏に君の御威勢に服し、その德風になびく故、とは言へ國家の主たる君は下をあはれむ仁慈がなければ、萬代不朽の礎を保たんこと成難し、君不仁にましまさば一國亂を起すの基、申すまでもござらねど猶此上とも下を憫れみ、ひたすら仁慈の御沙汰をば願はしう存じ奉ります。（ト思入にて言ふ、賴朝こなしあつて、）

頼朝　こは時政には異なことを申すが、今その方が言葉では、この頼朝は不仁にして仁慈の心あらぬと申すか。

時政　いかにも、

頼朝　そは何等のことを以て、不仁なりと予を申すや。

時政　いや、この儀明らさまに申さずとも、御思慮深くわたらせたまへば、この時政が不仁なりと申す心を恐れながら御心に問ひたまはゞ、御心にて答へたまはん。仁慈を下したまはらば、臣が悦びいかばかり、有難く存じ奉りまする。

頼朝　すりや予が不仁を言はずして、予に悟れと申すのぢやな。

時政　御意の通りにござりまする。

頼朝　ふむ。（ト思入。常胤こなしあつて。）

常胤　唯今北條時政が、君へ對せし一言に就き、心を籠めし捧げ物、

盛綱　今日新年の神事を祝し、持參いたせし獻上の品、

朝光　御直覽下しおかれますやう、

朝忠　偏に願ひ上げ、

四人　奉りまする。

ト四人辭儀をなす、頼朝思入あつて、

頼朝　ふむ、(トよろしく見わたして)、見れば家格の島臺に事替りたるその品々。誰そあるか、これへ持て。

侍　はあゝ。

ト下手より侍立出で件の品々をよろしく二重の上へ並べる、頼朝思入あつて前なる梅の籠を見て、

頼朝　むう、いかなる心か白梅の匂ひをこめし一枝に、同じ色なる梨の花、仔細ぞあらん疾く申せ。

常胤　はゝはツ(ト前へ進みて)申上ぐるも恐れあれど、これなる梅のおくれ咲き、即ち花の五片はこれ五行に象りて霜雪の中に寒苦を凌ぎ、一陽の時到れば自づと開く花の兄、梨は夜陰に花瓣を閉ぢ、風を厭ふ情あつて、これを花の弟といふ。梅と梨とは兄弟にして世の人花のやさしきを愛づる。然るにいまだ蕾の中枝を折取るその時は、花も開かで元木も弱り、つひには枯るゝことに至らん、何卒二木の若枝をそのまゝ、偏に君の御仁慈を願はしう存じ奉ります。

盛綱　(前へ出て)はツ、また某が捧げ物は、これなる雉子の雛鳥にして、雉子は雌雄の情深く妻を哀れみ夫を慕ひ、鳥舍にをること二十日にして卵子を孵す、その中の餌飼の恩に巣を放れ夫を養ひ返すとある、されば心ある獵人は必ず雉子を撃たぬとやら。山家に育つ者さへも慈愛あるは人の

常、ましてや君は天下の主人、今天下武威になびき四海靜謐に治まるといへども、猶ほ仁慈を施したまはゞ、源家重代の基る故、この儀御賢慮のほど願はしう存じ奉ります。

頼朝　こりや盛綱、

盛綱　はツ。（ト前へ進む、頼朝むつとして、）

頼朝　予に仁心があらざる故、山家に育つ獵人にも劣ると申したな。

盛綱　いや、まつたく以て、

頼朝　えゝ、二言と申すな。

盛綱　はッ（ト平伏する）。

頼朝　こりや結城朝光、その方持參の短册持て、

朝光　はあゝ（ト頼朝の前へ差出す、これを見て、）

頼朝　「高き屋に上りて見れば烟りたつ民の竈は賑ひにけり」、こりや人も知つたる仁徳天皇の御製。

朝光　恐れながら御製の心を、御賢察願ひ上げ奉ります。

頼朝　（思入あつて）、この頼朝は幼少より平家の爲めに囚れとなり、伊豆の孤島に世を忍び、源家再興の義兵を擧げ、日夜軍慮に暇なければ風雅の義を心得ず、仁徳帝の御製の心、篤と申聞かせい。

朝光　はッ、聰明叡智の我君へ、なま若輩の某が申上ぐるも烏呼なれど、お尋もどくも無禮の至り、恐れ多くも仁徳天皇下民の困苦を哀れみたまひ、三歳が間貢を發したまひし御仁政、もとより松は常磐にして四時ともに色替へぬ操正しき相生の、まだ若緑のこの二木、斧を免して育てなば、あつぱれ勝れし名樹とならん。これ世の教へにも申す如く、卽ち君は民の父母なれば、民を愛すること我子の如く、君を慕ふこと兩親の如く、恐れながら御仁惠のほど偏に願ひ上げ奉りまする。

時政　ほゝ、あつぱれなるその一言、若輩なれどもさすがは家柄、なか〳〵以て感心いたした。して、宇都宮の獻上は、

朝忠　はゝ。拙者が捧げしは櫻の一木、凡そ樹木多き中に櫻は花の王にして唐土にはその種なく、我日の本より贈ること三度に及べど苗木枯れて地に合はず、仁義を守る名木にて聖徳なき君出れば必ず花を開かず、されば朝廷にてもこれを愛で、内裡の庭へ植ゑさせたまふ、まつた大師の御法櫻も、挿したる人の節義により根附て育ち恩を報ず、有情にあらぬ草木にもかゝる心のあるなれば何卒御仁愛の御政敎願ひ上げ奉りまする。

ト四人平伏する。時政思入あつて、

時政　いかに我君、これに並居る人々が眞意を籠めし捧げ物の謎、お解き下されたでござりませうな。

賴朝　なんと。

時政　曾我祐信が養子たる一萬箱王が命乞ひ、我人ともに御仁情の御沙汰を願ふも、忠義を思ふの赤心、君にはそれが御氣にさはり、御氣色替らせたまひし故、常胤、盛綱、朝光、朝忠同じ思ひに御諫言の種を蒔きたる心の謎、この捧げ物の功を賞して御宥免こそ然るべし。斯く申す時政は、そもそも我君豆州に於て義兵の旗上げありしより、源家へ隨ひ奉り、今外戚の身となれば、憚り多きことながら我子とも存じ奉れば、道に缺けたる行ひあつて天下の人に我君を不仁なりと言はせんことと口をしく存ずる故、面を冒してお諫め申す。このほど梶原景季を上使として、祐信方より幼き一萬箱王を鎌倉へ召寄せられ、遺恨ある伊東入道祐親が孫なりとて死刑の御沙汰に景季が、ひたすら助命を願ひしかど御免の仰せあらざる故、これに連なる諸侯の面々この儀を哀れみ訴訟申すは、これ忍びざるが故にして、君に其の仁なき時は不仁不義と申すべし、何卒枉げて我君にも御心を飜され、御宥免の御沙汰願はしう存じ奉ります。

ト よろしく思入あつて言ふ、賴朝こなしあつて、

賴朝　あいや時政、又してもその諫言、假令列座の面々が言葉を盡し、又その方が何樣に申すとも、そ

の意見用うべき。重ねて申すに似たれども、伊東入道祐親不仁にも妻を奪ひ、三歳になる我胤を情なくも刺殺し、執念く恥辱を與へし上、我を討たんとなせし條憎みてもあまりあり。今祐親が血統たる一萬箱王兩人を死刑の沙汰に及ぶのは、非道の刄にかゝりたる我子の敵を報ずる道理、人我に辛ければ我又人に辛しの譬、何とてこれを不仁と言はん、その儀遮つて申しなば舅の因み あるにもせよ、向後目通りかなはぬぞ。

時政　假令この後我君の御目通りを遠ざけらるゝとも、なに申さいでおくべきや。

頼朝　いや聞かぬ〳〵、聞かぬぞよ。

トきつとなる、時政ぢつとこなし、以前の四人こなしあつて、

常胤　老臣方も斯くまでに、君に不仁の御沙汰なきやう、

盛綱　言葉を盡し理をせめて、御訴訟申せどかつもつて、

朝光　君にはお心解けたまはず、

朝忠　御聞入れなき助命の儀、

大一　各ゝ方さへ斯くの仕合せ、

大二　再三再四願つても、

大三　御勘辨なき上からは、
大四　我々どもが申すのは、
大五　譬の通り蟷螂が斧、
大六　龍車に向ふやうなもの、
大七　兎やかう申すは毛を吹いて、
大八　疵を求むる道理故、
大九　及ばぬことゝあきらめて、
大十　時節を待つて申上げなば、
大〇　又お聞き濟みのあらうほどに、
大△　その時又ぞろ、
皆々　一同御訴訟、

ト皆々思入。この中景時こなしあつて前へ進み、

景時　あいや我君、その御怒りはさることながら、北條殿の訴へも非分にあらぬ尤も至極、又君の御意もお道理と、あつちへべつたりこつちへべつたり、お髭の塵を取るのが當世、それを世上の人口

に梶原だと申すとやら、又その上に景時を蚰蜒だといふさうだが、一年増しに取る年に憎まれるにも及ばぬ故、ちつと可愛がられて見ようと思つて、いつもと違つて景時も今日は立役の仲間入り、いかにも北條殿の言はるゝ通り、祐親が孫の幼兒どもを殺すは蟲を殺すも同然、何の邪魔にもなりますまい、もし又祖父の祐親同樣君へ對して野心があらば、その時こそは二人ともひねり殺すに何の手間ひま、北條殿も面々も君のお爲を思ふ故、この梶原も人樣に憎まれぬ爲めともどもに、幼兒どもが命乞ひ、君にも昔を思召され、石橋山の合戰に平家に負けて唯だ七騎伏木の中に隱れたまふを、我見脫したばつかりで、天下の武將と仰がれたまふも、この梶原が計らひ故、その時の功に愛で、曾我の子供の助命の儀、諸侯と共に景時も偏に願ひ上げ奉ります。

賴朝（きつとなつて、）返す〴〵も奇怪至極、時刻をうつさず一萬箱王卽刻死刑に行はん、朝光再度の檢使にまゐれ。

朝光　はッ。

時政　すりや、どうあつても兩人の、助命の御沙汰はござりませぬか。

皆々　はて、是非に及ばぬ、

ト皆々顏を見合せ當惑の思入、賴朝疳にさはりし動作にてすつと立ち、

頼朝　やあ、猶豫いたさず、とく〳〵來るれし。

朝光　はゝはツ。

ト是非なく立ちかゝる。この時バタ〳〵になり、花道より畠山重忠烏帽子大紋小さ刀、中啓を持ちつか〳〵と出來り、

重忠　我君しばらく、しばらくお待ち下さりませう。（ト言ひながら花道よき所へ住ふ。）

盛綱　やあ、誰かと思へば重忠殿、唯今出仕、

皆々　めされしか。

ト皆々よい人が來たとの思入、重忠辭儀をして、

重忠　はツ、所勞によつて先達より引籠り罷りありしが、今日ツた年乞の御祝儀を申上げんと、おして出仕つかまつりしに、君には御座をお立の樣子、殿中をも顧みず無禮の高聲、幾重にも御高免下さりませう。

時政　これは〳〵重忠殿、久々の所勞と承はりしが、よくぞ出仕めされしぞ。

頼朝　おゝ今日の祝儀に洩れず病後の出仕、過分なるぞ、苦しうない、進め〳〵。

重忠　こは有難き御仰せ。然らば御免下さりませう。

ト太鼓、謠になり會釋して本舞臺へ來り中央より少しく下寄りに住ふ。

常胤　よき折柄我君の御意に入りの重忠殿、御出仕あつて我々ども、

皆々　一同安堵いたしてござる。

重忠　各々方にも日々の御出仕、御勤勞さこそと存じまする。

頼朝　（こなしあつて、）所勞も厭はず重忠が、わざ〳〵出仕なしたるは、予に諫言を申さん爲めか。

重忠　まつたくもつて然にあらず　今日の御祝儀を申上げ度出仕なし、唯今あれにて承はれば、伊東が孫の一﨟箱王彼等を死刑の御沙汰に就き、北條殿を始めとして諸侯の方々助命の歎願、君には赦免の御意もなく、いとも御氣色荒々しく御座を立たせたまふ故、久々にて出仕なし、尊顏を拜し奉らぬが殘念さに、失禮ながらお止め申してござりまする。

頼朝　然らば趣意は承知ならん、首打てといふ予が非なるか、助命を願ふ諸士が是なるか、重忠所存はいかゞなるぞ。

重忠　一﨟箱王兩人は、君へ敵たひ申したる伊東入道祐親が孫なれば、死刑の御沙汰は非にあらず、御尤もに存じまする。

ト頼朝これを聞き嬉しき思入、皆々は合點の行かぬこなし。

頼朝　予が非ではあるまいな。

重忠　はッ。

頼朝　北條始め列座の者、今鎌倉の賢者と呼び理非明白なる重忠が、今の言葉を聞いたであらうな。

皆々　はッ。

頼朝　予が非ではないと申すぞ。

ト皆々思入、重忠こなしあつて、

重忠　舊怨伊東が子孫故死刑にせよとの御上意は、亂國の世の御政道、今四海泰平に草木もなびく鎌倉山。君の御威勢萬國まで雷の如く響きわたり、扶桑六十餘州の内に敵たふ者一人もなし、故に列國の諸侯が助命を願ふは、これぞ治世の御政道。

頼朝　こは重忠には異なことを申すが、善惡邪正をたゞすに、治亂によつて政道の違ふといふは心得す。

重忠　されば、亂世には勇を以て人を隨へ、又治世には仁を以て人をなづく、そもそも石橋山の御旗擧げより壽永元曆の頃までは、勇でなければ人なびかず、今文治の治世となつては仁でなければ人隨はず、亂世なれば敵の末伊東が孫の一萬箱王、死刑の御沙汰は非にあらず、御尤もに候へども今治世の時となつては、死刑になすべき罪人たりとも助命いたさせ、仁慈を以て人をなづけたま

ひなば、源家不朽の御基ゐ、それを思ひて列座の諸侯、助命の願ひは非にあらず、これ又是かと存じまする。

頼朝　さすれば治世の時故に、死刑になすべき兩人を、助命させよと申すのか。

重忠　唯今も申す如く、四海一統靜謐に治まるは是れ君の御武德、然し乍ら一天下の棟梁たるもの、權を以て脅しなば威におそれて服すとも、つひに又違ふことあり。仁慈を以て服さすれば是れに隨ひ、違ふことなし。今泰平の治世故、たゞ御仁惠の御沙汰をば願はしう存じまする。

頼朝　む〻、最前より時政始め列座の大小名、仁慈々々と申しつるが、予に不仁の心があるや、何等のことを以て申すぞ。

重忠　不仁と申すには候はねど、假令祐親の孫にもせよ、罪なき一萬箱王を死刑の御沙汰は我君の御心得違ひかと存じまする。

頼朝　心得違ひとは奇怪なり、予に敵たひし伊東が孫を助け置かば成長なし、いかなる憂ひにならんも知れず、それ故根を斷ち葉を枯らさんと死刑の沙汰に及びしを、不仁なりと申すのか。

重忠　それが亂世の御政道、惡逆無道の平家すら、仁慈ありしをお忘れありしか。

頼朝　何と申す。

ト頼朝肝にさはりし思入にてきつとなる。これにて誂への合方に小鼓のあしらひになり、重忠思入あつて、

重忠　恐れ多きことながら、君の御父義朝公保元平治の兵亂に、御身の尾張内海にて長田が爲めに御落命、その頃平家の計らひにて、君には伊豆の蛭ケ小島へ流罪の御身にならせたまひ、又御舍弟たる今若、乙若、牛若君、常磐御前もろともに、而も降り積む雪の暮伏見の里にさまよはれしを、彌平兵衛宗清が見遁せしは仁慈にして、再び平家へ捕子となり、君を始め御連枝方すでに死刑にならせたまふを、池の禪尼が助けしは、是大いなる仁慈ならずや。其の時の御悦びは、よもお忘れは遊ばすまい。

頼朝　む丶。

景時　惡逆無道の平家ですら、か丶る情はあるものを、善根慈悲の我君が死刑の御沙汰は心得ず。

重忠　池の禪尼の助けを得し過ぎし昔を思召され、助命の御沙汰を願ひ上げまする。

頼朝　今重忠が申し條、尤ものやうに聞ゆれど、その時平家で予を初め兄弟の者を助けずば、今に平家は榮えんに、情を以て助けし故二十餘年の榮華も夢、一時に平家の滅びしは我兄弟を助けたる、池の禪尼が科ならずや、（トきつといふ。重忠ぎつくり思入。）まッその如く、一萬箱王二人を助け、後

後に予を祐親の敵と狙ひ、我身の害にならうも知れず、双葉の内に苅らずんば後には苅り取ることかなはじ、こゝを以て死刑に行ふ。情をかけて仇となる例は世々に往々あること、この頼朝が害となる二人が助命を願ふよな。

ト これにて重忠むうと、俯向きゐる、頼朝偽まくしかけて、

治世といへど昨日今日、皆戰場を踏んだる者、勇氣なければ鎌倉の威勢に人は随はじ、賢者と言はるゝ重忠が、これらの事は申さずとも辨へをるべき筈なるに、まげて助命を願ふのは、後の憂ひを思はずしてか。重ねて申すな、聞く耳持たぬぞ。

ト きつといふ。重忠思入あつて、

重忠　聰明叡智の頼朝公、御諚の趣一々に恐入つてござりまする。最早御諫言は申上げぬ。こりやお話でござる、お聞き下され。（ト替つた合方になり、）我領地武藏より是へまゐる途次、夫の驛路の立場にて、暫く憩ふ門前に、或は馬追荷擔ぎなんど打ちこぞりて話すを聞けば、今度頼朝公の嚴命で、伊東が孫の一萬箱王由井ヶ濱にて死刑になるは、奥野の狩の歸るさに柏ヶ峠で遠矢にかけ、祐康を射留めたる工藤左衛門祐經が、己を敵と狙はるゝその憂ひを除かう爲めに、お伯父祐親が敵故頼朝公を狙ふなどと惡しざまに讒言なし、死刑の御沙汰は祐經が頼んだに違ひない、扨々天

下に役人なく情を知らぬ盲目ばかりと蔑なすを聞くにつけ、歎かはしきは世の人口、元より工藤祐經は文武に秀でし仁義の武士、卑怯未練に我身を庇ひ佞辯を以て我君へ讒言なさう謂なし、假令又讒言なすとても智仁兼備の我君故、讒言によつて死刑の御諚あらうやうはなけれども、當座の理を推し斯もあらんと下賤匹夫の推量に蛇足を添へて誹謗なす、世の人口は防ぎ難し。このまま二人を死刑になさば、頼朝公は四海を握る大量なりと思ひのほか、讒言を用ふるは取るに足らざる小量なり、それを留めぬ大小名は情を知らぬ盲目ばかりと、一犬吠ゆれば萬犬吠え、六十餘州に流布なさば、源家の御武徳薄くならん、君一人のお心にて萬人の譏りを受くるは北條殿初め何れも方、歎かはしき儀ではござらぬか。

ト これにて頼朝ちつと思入、時政始め皆々尤もといふこなしあつて、時政頼朝の顔を見て、

時政　重忠お止め申すのは、一萬箱王兩人の助命ばかりを願ふにあらず、世の人口を厭ふ故これに並居る列侯は譜代恩顧の者ばかり、

重忠　こゝの道理を御賢慮あつて、仁慈を以て兩人が死刑を御赦免下さるべし。

頼朝　むゝ、（ト 會得の思入。）

景時　重忠殿の言はるゝ通り、いまだ血腥き世の中なるが、勇ばかりでは隨はず、仁義でなくては歸服

いたさぬ。

重忠　和漢の書籍に明るき我君、事新しく申さずとも御合點ながら御覽あれ（ト衝立へ思入あつて、）このお衝立に書きし豫讓も、主たる智伯趙襄子に討たれ、その鬱憤を晴らさんと、炭を呑みて啞となり、漆を塗りて疹癩となり、趙襄子を附狙ひしが、襄子仁厚にして豫讓を哀れむにつけ討つこと能はず、終に襄子が衣を割いてその恨みを晴らせしとか、勇には勝つても仁には勝たれず、それを存じて座中の諸侯勇を以ての御政道、お止め申してござりまする。

賴朝　むゝ、（ト思入。）

重忠　但し日頃の御氣質に、一旦仰せありし事故、再び思ひ返したまはず、諸侯に替へて死刑にめされまするか。

賴朝　むゝ、（トぢつと思入。重忠皆々へ目配して、）

重忠　いづれも、今一度君へお願ひ下さるべし。

トこれにて皆々前に進み、

時政　この時政を始めとして、諸侯一同助命の歎願、勇を捨て仁を以て二人が死刑御免あるやう、

重忠　偏に願ひ、

皆々　奉りまする。

ト一同辭儀をなす、賴朝是非なき思入にて、

賴朝　一旦發言なしたる事後へひかざる賴朝ながら、外ならぬ重忠といひ諸士一同の願ひ故、

重忠　すりや、御聞濟み、

皆々　下さりまするか。

賴朝　むゝ、助命申附くるぞ。

皆々　はゝはツ。（ト辭儀をなし、嬉しき思入。）

重忠　いづれも、君へ御禮を、

盛綱　臣等が願ひ聞しめされ、二人の者の助命の御沙汰、

皆々　有難う存じ奉ります。（ト平伏なす、時政思入あつて）

時政　これと申すも外ならぬ、重忠殿の言葉故、

重忠　あいや〳〵拙者ばかりの計らひならず、先刻よりいづれも方の御諫言ありし故、何はともあれ此上は、死刑赦免の御教書を願はしう存じまする。

賴朝　むゝ、時政よきに、

時政　はツ、誰そあるか、料紙もて、

侍　はあゝ（ト下手より上下の侍硯箱へ紙を載せ、時政の前へ置く、頼朝思入あつて、）

頼朝　然はさりながら死刑なすその刻限は未の上刻、最早午の下刻に近し、予が赦免なすとても死刑の後では詮なきこと。

重忠　その後は御安堵遊ばしませ、先刻検使景季方へ途中より我家臣榛澤六郎成清を遣はし、重忠出仕なせし上再び御沙汰申すまで、死刑延引致すやう通達なしてござりまする。

頼朝　さすがは重忠、よくいたした。

トこの中時政赦免状を認め、

時政　いざ、御覧の上、（ト頼朝へ出す。）

頼朝　むゝ、よし〳〵、重忠に遣はせ。

時政　はツ。

重忠　恐れながら御文面を、

頼朝　むゝ、時政讀上げい。

時政　はツ、「此度曾我の太郎祐信養子一萬箱王兩人、君へ對し逆意の罪ある伊東祐親が孫たるによつて

死刑の沙汰に及びしところ、在鎌倉の大小名の愁訴によつて其の罪を宥し、助命申附くるものなり。よつて免状如件。北條時政これを承はる。

ト讀終ろ、皆々禮をなす。時政御教書を重忠へ渡す。

重忠　はッ、御仁恵のほど、列座の面々、

常胤　諸侯一同、有難き仕合せに、

皆々　存じ奉りまする。

ト辭儀をなす、頼朝思入あつて、

頼朝　あゝ、斯くまで我を諫めくれしも、

重忠　君は船、臣は水、

時政　君臣和合なすにより、

常胤　四海に滿つる源の、

盛綱　濁らぬ君の、

皆々　御政道、

重忠　萬代不易に。

頼朝　むゝ、

ト悦喜の思入にて脇息を前へなほす、重忠は中啓を構へる。これを木の頭。

重忠　ござりまする。

ト祝言の謠にて皆々よろしく、

ト浪の音にてツナギ、直に引返す。

ひやうし幕

四幕目大詰

由井ヶ濱の場

〔役名――畠山庄司重忠、梶原源太景季、海老名軍藏、番場の忠太。曾我太郎祐信。曾我の一萬丸、同箱王丸。〕

（由井ヶ濱刑罪の場）――本舞臺正面奥深に江ノ島より富士箱根邊の山々を見たる遠見、裾通り一面に海原、所々に磯馴の松、下手寄心に竹矢來、笹龍膽の幕を張り、この幕に突棒、刺股、捩を立列べ、總て鎌倉由井ヶ濱刑罪場の體。こゝに番場の忠太半素袍の露を取り、大小にて床几にかゝり、後方に袴股立の侍二人、下役四人居列び、波の音にて幕明く。

忠太　何といづれも、今日ツた曾我の養子の幼兒ども、いよ〱死刑と事極り、主人梶原景季樣並に海老名軍藏樣、撿使の役にて御出張、

侍一　取分け貴殿は太刀取のお役目、御苦勞に存じまする。

侍二　日頃手練のお腕前、見事なことゝ存じられます。

忠太　最早御兩所方の御出張には、さのみほどもござるまい。

侍一　斯く刑罪の用意萬端、

侍二　整ふ上は御兩所を、

忠太　これにて相待ち申すでござらう。

トこれをきつかけに上手淨瑠璃臺の霞幕を切つて落す。とこゝに竹本連中居列び直に淨瑠璃になる。

〽罪ならぬ身も前生の因果にや、廻る月日も地に落ちて闇き冥土の西の國、賽の河原をこの世から見るも涙の諸人が、袂もしめる由井ヶ濱、君命受けて是非なくも撿使に立ちし梶原景季後に續いて海老名の軍藏今日の助役といかめしく肩肘張つて入來れば、番場の忠太出迎ひ、

ト花道より梶原景季素袍、龍神卷。次に海老名軍藏同じ裝にて出來る、後より菖蒲革の侍　兩人床几を持ち出來り、上手へ通る、これにて忠太等は下手へ控へて、

忠太　御兩所樣には今日のお役目、御苦勞千萬に存じまする。

梶原　用意萬端整ひしか。

忠太　先刻より罷越し、死刑の用意殘る方なく整ひましてござりまする。

軍藏　いざ梶原殿、

梶原　先づお席に、

〽互に、默禮會釋して撿使の席になほりける、海老名は四邊見まはして、

軍藏　さすがは貴殿の譜代ほどあつて、行屆いたるいたし方、

梶原　海老名氏には撿使の助役、御迷惑御察し申す、某事は元よりも、君命によつて曾我へ立越え、兄弟二人を鎌倉へ召連れまゐつてござる故、不便に存じ今日まで心を碎いてござれども、終に死刑と極つてござる。これもまさしく讒者の業。

軍藏　や、(トこなし。)

梶原　いやさ、殘念ながらも兩人を、討たねばならぬ役目の表、

軍藏　いかにも貴殿の言はるゝ通り、兎にも角にも根腐つた曾我の養子の納兒ども、言はゞ地獄の餓鬼同然、

忠太　仰せを受けて太刀取りは腕に覺えの番場の忠太、曾我殿輩の素首を打つは何より易いこと。

軍藏　はて、潔よきその言葉、片時も早う小伜どもを。

忠太　はッ、(ト彼方へ向ひ、)やあ〳〵、二人の小童を引出せ。

侍　はあゝ。

〽不便や一萬箱王は母の賜ひし廣袖小袖、今は徒なる旅衣、人も哀れと言ひそめし垣に亂るゝ朝顔の日影にしぼむ露の身は、やがて血潮のもみぢ葉に啼音悲しき鹿ならで、打ちしほれてぞ引かれ來る。

ト花道より一萬箱王前幕の衣裳にて繩にかゝり、袴股立の侍一人宛繩を取りて出來り、花道よき所へ留り、兄弟顔を見合せほつと思入。

繩取　きり〳〵歩め。

〽情用捨もあらけなく、引立てゝこそ來りけれ。

ト兩人を引立て舞臺へ來る。この中舞臺の侍兩人して舞臺よき所へ敷革を敷く。

忠太　それ、敷革の上へ引据ゑい。

四人　はッ、畏つてござりまする。(ト兄弟を敷革の上へ引きすゑる。)

〽景季見るより聲をかけ、

梶原　こりや者共、兩人の縛解け。

繩取　はツ。

忠太　あいや、その切繩はそのまゝに、

梶原　だまれ忠太、武士たる者をこのまゝに、縛り首に相成らうや、口出しせずと控へをれ。

忠太　はツ。

軍藏　いや、時刻うつらぬその中に、おツ片附けてしまはねば御同然に暇が明かぬ。

忠太　海老名樣の仰せの如く、長くみじめを見せようより、

軍藏　おゝ手短に片附けるが武士の情と申すもの。な、それ忠太、用意よくば早く討て、

忠太　心得ました。（ト言ひながら刀を持ち立ちかゝるを、）

梶原　こりや忠太、待て。

忠太　何故お留めなされまする。

梶原　えゝ、待てと申すに控へをらぬか。（トきつといふ。）

軍藏　こりや源太殿には何故あつて、お留めあるのだ。

梶原　海老名殿とも覺えぬ言葉、正使に立ちし某が差圖も待たず差出し忠太、それ故にこそ留め申した。

軍藏　むゝ、いかにも貴殿は正使なるが、副使に立ちし某が差圖でござれば、この忠太が不念ではござらぬぞ。

梶原　その副使のお差圖が、某心にかなひ申さぬ。

軍藏　そりや又何故、

梶原　正使に立ちし某へ、唯一應の言葉もなく、自己の支配は海老名氏、チト御粗相かと存じ申す。殊に兄弟兩人は、この景季が即ち預り、首討つまでは心のまゝ、討つ討たざるをこの場にて見屆けらるゝが貴殿の役目、それ故唯今某が介錯なすを留めしは、よも過りではござるまいがな、

軍藏　うむ、いかにも尤も、

梶原　それにてゆるりと控へめされし。

軍藏　おゝ控へるとも〳〵。

ト言ひこめられてぶつてう顔、威儀をたゞして景季は兄弟二人に打向ひ、

ト軍藏はむつとせし思入にて控へる。梶原はこなしあつて一滿箱王の繩を解かせ、

梶原　一萬どの、箱王どの、最期の際に景季が申す事をよう聞かれよ。祖父伊東祐親殿賴朝公へ敵たひし舊罪のある子孫故、君の憎しみ一方ならず、敵の末は根を斷つて葉を枯らせよと嚴しき御諚、我人ともに大小名再三助命を願へども、更に御免のあらざるは正しくお側に佞人あつて讒言故と思へども、この景季が力に及ばず終に今日の此處に至るは、唯天命とあきらめて潔よく死を遂げられよ。

〽信義をこめし勇士の情、聞く兄弟はしとやかに、

一萬　お預かりのその中も二人か命を助けんと、厚き情のお心添へ死んでも忘れはいたしませぬが、五歳や三歳の頃よりして聞傳へたる親の仇、

箱王　たゞ悲しいはこのまゝに、寶の山にあらずして手を空しくも劍の山、

〽賽の河原で積石の重なる恨み礫にも、

討たれぬことか兄者人、思へば〳〵口をしい。（ト言ひながら口をしげに思はず立上る。）

一萬　あこれ、必ず粗相のないやうに、家を出る時母上の仰せありしを忘れしか。

〽卑怯者よと人樣に笑はれぬやう潔よく、さすがは河津が胤なりと未練殘さず最期を遂げ、後の世までも褒められよと教へたまひしお言葉を、この一萬は忘れぬぞよ。

梶原　〽幼けれども武士の魂こもる兄弟が、涙呑み込む切なさを、胸に怺へて景季が、
　　　實に栴檀は双葉よりと、成人なさば天晴なる勇士になるべき若木の二人、蕾のまゝに散りて行く
　　　譏者の嵐は是非もなし、無常の旅のはなむけに彌陀を頼みの經陀羅尼、景季よきに弔ひ得させん。
軍藏　（こなしあつて）最早日差も午の刻過ぎ未の刻に近づけば、さうべん〳〵とは致されまい、遅刻い
　　　たさば君への恐れ。
　　　〽時刻うつると急きたつれば、
梶原　時刻来れば是非に及ばぬ、天命なりとあきらめて潔よう死を遂げられよ。
一滿　豫て覺悟の、
兩人　この最期。
軍藏　兄弟二人連だつて、冥土の旅の餞別に、
忠太　刄鐵の賜物進上いたさん。
　　　〽太刀おつとつて立上れば、（ト忠太刀を持ち立ちかゝる。）
一滿　あゝこれ、暫し待つて下され。常々論語の素讀にも、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりといふ
箱王　わしも聞いて記えてゐる。幼けれども二人とも、弓矢の家に生れし者、

一滿　まことの武士の手にかゝり、討たれて死なば身の本望。
忠太　それだによつてこの忠太が、望みの通り唯今介錯、
箱王　いや、こなたはまことの武士ではない。
忠太　なに、武士でないとは、
一滿　慈悲も情も知らざる人は、まことの武士とは言ひませぬ。
箱王　陪臣の手にかゝるは厭、梶原の伯父さまなら、
一滿　嬉しう笑うて、
兩人　死にまする。
　　　ト言ふに忠太も斬兼ねて、暫時あぐみて控へゐる。
　　　ト忠太忌々しげに控へゐる。梶原感心のこなしにて、
梶原　幼けれども弓取の家に生れし大和魂、さすがは河津の胤ほどあつて、實に尤もなる其言葉。
軍藏　いや、その尤もこれまでだ、長吠えするをいつまでもべん〳〵だらりと聞いてはゐられぬ。それ忠太、討つてしまへ。
忠太　心得ました。

〽心得たりと立ちかゝれば矢來の外に祐信が樣子を窺ひゐたりしが、恢へ兼ねて走り出で、

ト この時ばた〳〵にて、下手より曾我ノ太郎祐信脊割羽織野袴にて走り出で、

祐信　いづれも、暫くお待ち下されい。

梶原　や、貴殿は太郎祐信殿、

一滿箱王　父上樣か。

祐信　こりや、必ずともに驚くまいぞ。景季殿、いづれも御免下されい。（ト下手下にゐて、）出まじき場所へ面を拭ひ推參せしは未練に似たれど、親にも增る倅が健氣さ。あまり不便に存ずる故、最期の際に唯々一言彼等二人を褒めてやりたさ。骨肉分けぬ兄弟ながら五歲や三歲の頃よりして、はごくみ育てし恩愛はまことの子よりも又一倍、矢來の外に集ひたるあかの他人の見物さへ哀れと思うて泣くものを、親と賴まれ子となつて、よそにこれが見られうぞ。

〽泣かじと思ふ武士の猛き心は猶更に、物の哀れは感ずるもの、

こりや一滿、箱王、幼き身にてけなげにもよくぞ覺悟をいたせしぞ。それでこそ武士の胤、天晴なりと思ふほど、猶更不便がいやますぞよ。未練を出すなと敎へたる親が却つて未練と言はれん。假令人々に笑はれてもこれが泣かずにをられうか。いづれも御免下されい。

〽前後忘れて歎くにぞ、景季さこそと察しやり、
五歳や三歳の頃よりして育てられたる一萬箱王、親子の情は斯くこそあらん、心置なく祐信殿、
この世の名殘いたされよ。

祐信　我心中をお察しあつて景季殿の情の言葉、忘れはいたさぬ、忝ない。

軍藏　いや、よくも／＼あつかましく、出られぬ場所へ推參して、恥面さらすは笑止千萬。いや、曾我殿には餘寒の故か見ればぐわた／＼顫へてござるが、空腹故でござるのか、これといふのも小身故、立寄らば大樹の蔭、身共が屋敷へござらつしやい、鹽鰹の頭ぐらゐはいつでもこなたへ進上申さう。かう言はれるのが悔しうござるか、いや悔しくつても齒は立たぬ、田作の齒ぎしり及ばぬことだ。あゝ見れば見るほどみじめな態。忠太を初め皆の者、あれを見て笑へ／＼。

忠太　仰せに任せ、春の吉例、大笑ひに笑ひませう。

皆々　あはゝゝゝゝ。

〽嘲り笑ふを耳にもかけず、太郎は源太に打向ひ、

祐信　申し出すも憚りあれど、この祐信が一期の願ひ、來世の導き兩人を我手にかけて遣はしたい、正使に立ちし景季殿、この太刀取を某へお讓りなされて下さりませ。

〽言ふにこなたも幸ひと、

梶原　仰せいかにも御尤も、願ひに任せこの役目貴殿へお讓り申すでござらう。

祐信　すりや、お讓りなされて下さるとな。

梶原　正使に立ちし景季がお讓り申せば、お心置きなく、

祐信　はゝ御厚情の段忝い。お許し受ける上からは御免下され。

〽下緒とくく襷にかけ、股立きりゝと引上げて、寐刃を合せ後に立ち、思へば帶せしこの刀、二人の伜の首を切る役に立つとは思はざりしに、

〽いかなる宿世の業因にて、かゝる憂目を見ることかと、暫し歎きに沈みしが、斯くては果てじと氣をはげまし、

これ一滿箱王、景季殿の讓りを受け、父が介錯するほどに潔よう死を遂げよ。

〽聞いて兩人後見返り、

一滿　すりや、父上が兄弟を、

箱王　お手にかけて下さりますとか。

一滿　それは嬉しうござります。

箱王　兄上、

一萬　弟、

兩人　南無阿彌陀佛。

〽唱名唱へ眼を閉ぢて、最期を急ぐいぢらしさ、父祐信もろともに、

祐信　南無阿彌陀佛。

〽刀を取つて振上げしが、兄を切らんは順なれど弟が見たらおどろかん、さりとて弟を切るは逆、いかゞはせんと氣もそゞろ、兄を先にと祐信が又振上は上げながら、見れば不便やこの首が何で討たれう可愛やと、思ひなやみて吐息をつき、

あゝ、この祐信も年久しく君に隨從奉り、これまで數度の戰場にもおくれをとりし事もなく、あまたの首は切つたれど、いまだ倅の首を切る手練はこの身に覺えござらぬ。今一應景季殿へ折入つて頼みがござる。外でもござらぬこの兩人一度に切つてやり度き故、豫て望みのことなれば一人は貴殿の御手にて御介錯下さらば、兄弟一つに最期を遂げ、嘸本望でござらうから、何卒御助力下されい。

〽切なる頼みに景季もさこそと心中察しやり、

梶原　御尤もなるその仰せ、二人が望みとあるからは、景季助力いたすでござらう。

祐信　すりや、お聞届け下さるか。

梶原　いかにも、

祐信　左様ござらば御苦勞ながら、

梶原　いざ、とも〴〵に、

祐信　いざ、

梶原　いざ、

兩人　いざ〳〵〳〵。

ト刄を取つて立上れば、前には兄弟座を亂さぬ覺悟に恥ぢて双方が討たんとすれど腕たゆみ思はず顏を見合せて切兼たりしが氣をはげまし、既に斬らうと見えたるところ、

トこの中兄弟二人は脇眼もふらず覺悟の體、兩人はこれを見て切兼る思入よろしくあつて、ト氣を替へきつとなり刀を振上げる。この時花道の揚幕にて、

重忠　あいや、その成敗暫く待たれよ。

トバタ〳〵カケリになり、花道より重忠馬に乗り赦免状を持ち出來る。後より馬丁附添ひ來り、花

道に止りて、
君の上意を蒙むりて、斯く早馬にて驅附けたり、暫く〳〵。
〽暫く〳〵と留むれば、こなたもほつと溜息つき、
祐信　思ひ寄らざる重忠殿、
梶原　我君よりの上意とな。
重忠　いかにも、
軍藏　はて、心得ぬことだなあ。
〽合點行かずと控ゆれば、間近く駒を乘り鎭め、威儀儼然とおり立てば、景季は禮儀を正し、
梶原　上意とあつて火急の御入來、何はともあれまづ〳〵あれへ、
重忠　許しめされい。
〽會釋をなして座になほれば、海老名を始め番場の忠太眼と眼見合せ控へしが、
軍藏　今小童めらが成敗の時刻に及んで御上意とは、某一圓合點がまゐらぬ。遲刻なしたるお咎めか、何らの儀なるか承はりたい。
〽詰寄りかゝれば動ぜぬ重忠、

重忠　いや、騒がれな海老名氏、貴殿は今日副使の役、正使は即景季殿、上意は正使へ申し渡す。よもや違背はござるまいな。

軍藏　むゝ、何の手前に違背がござらう。

重忠　いづれも、君より上意の趣き、謹しんで承はられよ。

ト小鼓の合方になり皆々はッと辭儀をなす、重忠こなしあつて、

〽面ふくらして控へれば、莞爾と笑みて懷中より、うや〳〵しく御書取出し、

「一ツ　曾我太郎祐信養子一萬箱王兩人、君へ對し逆意の罪ある伊東祐親が孫たるによつて、死刑の御沙汰に及びしところ、在鎌倉の大小名が愁訴によつて、其の罪を免し赦免申し附くるものなり、依而免狀如件。北條時政これを承はる。」斯くの通り、（ト免狀を皆々へ見せる。）

軍藏　すりや一萬箱王の罪は脫れて、赦免とな。

祐信　思ひがけなく兩人が危ふき一命助かりしは、偏に君の御仁惠、

梶原　この景季も身にとつていかばかりか、恐悅至極、

祐信　滿江始めこの祐信、御恩は忘却仕らぬ、えゝ有難う存じ奉りまする。

〽仁者の言葉に親と子が、夢に夢見し心地せり。

重忠　かゝる上意のある上は、最早罪なき曾我の養子。それ者共、一萬箱王の兩人を、粗略なきやう勞り申せ。

侍等　はあゝ。

〽はつと答へて侍が二人を伴ひいたはれば、海老名番場は思はぬ敗亡、

軍藏　一萬箱王赦免とあれば、檢使の役も最早これまで、べん〳〵としてもゐられまい。

梶原　いかにも、貴殿はお構ひなく、勝手にこの場を退出めされ。忠太其方も共々に、

忠太　かしこまつてござりまする。

軍藏　然らば忠太は身共と一緒に。

忠太　お供いたすでござりまする。

軍藏　どれ、退出いたさうか。

〽忠太を伴ひ軍藏は、砂を蹴立て立歸る。

ト海老名と番場の忠太は思入あつて花道へ入る。梶原こなしあつて、

梶原　秩父殿にはこのほどより御所勞の由承はりしが、思ひがけざる今日のお役目、御苦勞千萬にござりまする。

重忠　仰せの如く所勞によつて、暫く引籠り罷りありしが、伊東祐親が科により一萬箱王死刑の趣き承はり及びし故押して營中へ出仕なし、諸侯と共に理をせめて再三助命を願ひしところ、君も賢者にましませば早速に御許容あつて、直に賜はる赦免の御書。

祐信　秩父殿の情にて二人の命助かりしは、盲龜の浮木優曇華の花咲く思ひの此の悦び、こりや二人の者、よく御禮を申さうぞ。

一萬　危ふい命を助かりしは、お情深き重忠樣や、

箱王　景季樣の皆お蔭。

兩人　有難う存じまする。

〽拜む二人に色見えて紅葉の手先愛らしゝ、景季は眼をしばたゝき、

ト一萬と箱王は重忠、梶原を拜む、皆々愁ひの思入あつて、

梶原　天道孝子を捨てたまはず、危急にのぞんで思はずも赦免の御沙汰に不思議の再生、

重忠　これも五常を守りたまふ鎌倉殿の御仁惠。こりや曾我の兄弟、近うこれへまゐられよ。

兩人　はあゝ。

〽はッと答へてしとやかにこなたへ來り座に着けば、重忠篤と顏打眺め、

重忠　はて、親子とて爭はれぬ面差恰好、あゝ似たわ〳〵。

一滿　似たとは誰に、

兩人　似ましたな。

重忠　おゝ、河津の三郎祐康に、

祐信　その祐康ははかなくも、この世を去つて俤の、

梶原　形見に殘る兄弟兩人。

重忠　その兄弟へ重忠が盡す信義の一部始終、今物語らんよツく聞かれよ。御身達二人が實父たる河津の三郎祐康とは、元より水魚の交り深く、重忠兄弟の因みを結び、互ひに信義を盡す中、あたら勇士の祐康は赤澤山の歸るさに思ひがけなき非命の最期、敵を討たんと思ひしかど、正しき血筋一滿箱王二人の兄弟あるものを、我討つ時は成長なし親の敵を討たざる不孝を悔まんことの歎かはしく、殘念ながら期を延ばし二人が成人祈りしに、此度君の御憎しみ、すでに死刑と承はり病中ながら重忠が推參なして命に替へ、助命の歎願いたせしが、

〽天道哀れみたまひしか、不思議に赦免の御教書賜はり、草葉の蔭で祐康も嘸滿足に思はれん。

斯く助命ある上は、四海の内に憚りなし、成人の上實父の仇必ず討てよ、こりや兩人、

ト信義を盡し言聞かすれば、兄弟側へすり寄つて、

一滿　母上樣のお話に、常々聞いてはゐたけれど、重忠樣のお顏も知らず、

箱王　今日は如何なる吉日なるか、日頃逢ひたい〳〵と思ひに思つた小父樣に、

祐信　面會なしたその上に、死する命の助かりしは、未だ武運に盡きざるしるし、

梶原　智勇の小父を一人得て、二人が爲めには百倍の力を得たる果報者、

箱王　これにつけても父の仇、工藤左衞門祐經を、（トきつとなるを、）

一滿　あこれ弟、早まるまいぞ。

箱王　それぢやと言つて、

一滿　ぢつと控へてゐやいなう。（ト留める。）

重忠　ほゝお、一寸の蟲にも五分の魂、幼心に無念なるか。

箱王　父を討たれて無念なは、

一滿　忘るゝひまなきその忌日を、

重忠　思ひ出せば、おゝそれよ。（ト肥前節になり、皆々よろしく思入。）安元二年神無月十日あまりのこと

なりしが、河津は一族引連れて、奥野の狩の歸るさに、

梶原　椎の木蔭に矢聲して、主は誰とも白羽の矢、鞍の山形射けづッて、行縢の着際より、

祐信　前へすつぱと射通され、馬よりどうとおちこちに、無慘なるかな赤澤山の露と消えたる祐康が、

重忠　忘れ形見の兄弟も、

梶原　兄は五歲弟は三歲、

祐信　この祐信が養子として、

一萬　曾我の一萬、

箱王　同じく箱王、

梶原　たえて久しき兄弟が、

祐信　名乘り合ひたる伯父と甥、

重忠　はて、珍らしい、

皆々　對面ぢやなあ。

ト吉例對面の模樣よろしく。

箱王　さあ、この上は父の敵、

一滿　工藤左衛門祐經を、
兄弟　どうぞ討たせて下さりませ。
重忠　いゝや今はかなはぬ、この小父が討たす時節を告知せん。
箱王　すりや唯今は、
兩人　かなひませぬか。
祐信　殊に一旦我君より疑ひかゝりしそち達兩人、たゞこの上は穩便に、兄は曾我の家督となし、弟は實父が後世の爲め箱根へ登せ、行實阿闍梨が御弟子となして、菩提を訪はせん。
梶原　さすがは老功、祐信殿感じ入りたる其の計ひ、これにて君の御疑念晴れ、
重忠　敵も油斷なすは必定、さすればそれも一つの計略。
箱王　そんなら我々兄弟は、
一滿　はなれ〴〵に所を替へ、
重忠　それも其身の皆孝道、較ぶものなき父の恩、
梶原　仰げば高き富士ケ根や、
祐信　やがて討つべき時到らば、

重忠　名をも雲井に、
梶原　揚羽の蝶鳥、
祐信　先づそれまではこのまゝに。
重忠　互ひにこの場を、
皆々　立別れん。
〽仁あり義ある武士の譽は世々に殘りける。
ト上手に重忠、梶原、下手に祐信、箱王、一滿皆々引張りの見得よろしく、段切にて
幕

生立曾我（終り）

船打込橋間白浪

初狂言慶賀

女形振袖態

茲顯繁榮披

第二番目の

正本讀

鈍筆も憚らず

脚色は當世の

人情談話

浮世を渡る橋の上人の榮華に悟の道發心ならぬ惡事の錆付身にひゞたけの鑄かけ松闇を忍びの見越の塀慥に噂の圍者お咲もいつか轉寐の夢にも知で文藏は湯治戻りの屛風の内明て言ぬが花屋の門附袖も涙の雨舍親子を導く寺門前惡念折し線香に恩義も厚き灸するの腹切仕組も味に藤兵衛が無理な戀路に登龍くりから傳次が男氣に半七は寶詮議の緒も絡れ掛た酒の座をお梅が粋に取持て緣をお組と宗次郎義理に迫て思切たる封印の金故身をも暗夜の眠りも覺て明の春是大切の淨るりに女夫目出度三々九度時に相生高島屋料理の獻立膳部も揃てサテ新御慶の年玉

流行穿本朝通俗

「鑄掛松」は慶應二年二月、五十一歳の時守田座に於て書卸され「生立曾我」の二番目として新作されたものである。白浪物の世話狂言中でも、特色あり、巧みに時世相を攝取してある物として、特に著名である。この作の興行中に其の筋から「近年世話狂言人情を穿ち過ぎ、風俗に拘はる事なれば、以來は萬事濃くなく色氣なども薄くすべし」との注意を與へられたことも、世に知られてゐる。特に此の作のみに對しての達しではなかつたらうが、所詮は小團次等の得意とする生世話物即ち、その當時の寫實劇なるものが、如何に極度にまで達してゐたかゞ知られよう。饗庭篁村翁の追憶錄（「河竹默阿彌」傳所載）によれば、小團次は病中その事を傳へ聞いて憤死したと言つてもよいやうである。小團次は此の時興行中に病死したのであるから、種々の意味に於て、記憶せらるべき作と言はねばならぬ。

書卸しの際の役割は、市川小團次（鑄掛屋松五郎後に盜賊鑄掛松）、尾上菊次郎（文藏妻お咲後に鑄掛松女房お咲）、關三十郎（花屋佐五兵衞、島屋文藏實は梵字眞五郎）、坂東三津五郎（刀屋娘お花、藝者お組）、澤村訥升（森戸屋宗次郎）、大谷友右衞門（蔦の者くりから傳次）、坂東玉三郎（稽古所のお仙）、尾上梅幸（丁稚與之助）、嵐吉六（ぐづ八、ならずの三次）、市川小文次（刀屋五郎兵衞）、關歌助（お虎婆ア）等であつた。

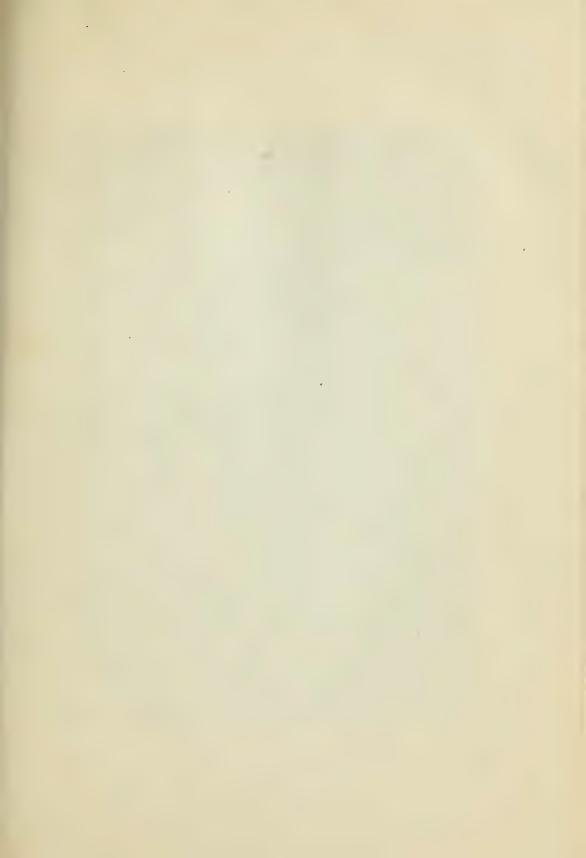
插繪にしたのは大正九年一月歌舞伎座上演の際に於ける舞臺寫眞（羽左衞門の鑄掛松）である。

大正十三年十一月　　編者誌す

船打込橋間白浪（鑄掛松――三幕）

序幕

花水橋廣小路の場
同　遊山船の場

〔役名――鑄掛屋松五郎、島屋文藏實ハ梵字ノ眞五郎、蔦ノ者くりから傳次、刀屋手代半七、六浦主膳、柴崎屋藤兵衛、森戸屋丁稚與之助、紙屑屋ぐづ八、小道具屋與市、噺家ゑん八、船頭伊之助、廿木勘藏、文藏の妻お咲、藝者おくみ、お酌おやま、其他。〕

（廣小路の場）――本舞臺三間彼方見世物小屋の横を見せたる張物、上の方に髮結床、この次に開帳千部の札などを立て、下の方に葭簀張りの出茶屋、煎じ茶の行燈、其他茶屋道具を一式飾り、よき所に床几二三脚並べ、仕出し□○△の三人腰をかけ、茶屋女お玉盆を持ち立つてゐる。上手髮結床の內には扇床の吉、髮結裝にて若い衆□の髮を結つてゐる。この模樣鳥追通り神樂にて幕明く。

お玉　も一つお茶を上げませうか。

□　いやもうお構ひでない、とんだ長居をしてお見世のお邪魔をいたします。

○　然しこりやあわたしどものせゐぢやあござりませぬ、連の者が髮を結つてゐるから、そこでこんなに手間をとるのでござります。

△　ほんに姐さんにお氣の毒だ。（ト上手へ向ひ、）こう、てえげえに待たせるがいゝぢやあねえか。何も淸正樣へ詣るに、急に思ひたつて髮を結ふには及ぶめえぢやあねえか。

◎　（床の内にて、）さうでないて事よ、淸正公樣へは女が多く詣るから、思ひ附れめえものでもねえ。ねえもし、親方。

吉　その積りで女の惚れるやうに結つておきました。へい、よろしうござります。

◎　いや、有難え〳〵。（ト言ひながら此方へ來る。）

□　何だ、むだな面へ髮なんぞを結やあがつて、止せばいゝに、

○　また手前のやうに頭を荷厄介にする者はねえぜ。

△　どうだ、其方は淸正公樣が信心だから、まるつきり剃つてしまつて、蛇の目をおいて貰ふがいゝ。

◎　さう惡く言ふな、待たした代りに深川亭を奢つてやらァ。

□　めづらしい、大そう今日は張込むな。

○　淸正公樣だけ、ぐつと大盡氣になつたのだ。

三人　いや、悪く洒落やあがる。

○　さあ〳〵出かけよう〳〵。

四人　大きにおやかましうございました。（ト四人は上手へ入る。）

吉　お玉さん、今日は大そうお忙しかつたね。

お玉　清正公様のお蔭で、有難い事でござんすわいなあ。

吉　此また清正公様のあらたかなこと〻いふものは、わたしなども信心を始めてから大そう見世が繁昌になりましたよ。

お玉　わたしども〻その通りさ。

吉　まことに有難いことさねえ。

ト流行唄になり、花道よりお組藝者の打扮にて、後よりお酌おやま箱廻し喜助附いて出來りて、

お組　お玉さん、此間は、

お玉　おやお組さん、お座敷でござりますかえ。

お組　まだお客がおいでなさらないから、其間にちよつと清正公様へお詣りに來ましたわいな。

喜助　もし、また來るとやかましうございますから、早くお詣りをなさいまし。

やま　わたしや怒られると怖くつてならぬわいな。
お玉　それでは今日のお座敷とおつしやるのは、柴崎屋の藤兵衛さんでござりませうね。
お組　お察しの通りさ。
喜助　よく誰でも知つてゐる、賣込んだ甚助さね。
吉　同じ金を遣ひながらさう人に嫌はれるのは、いやなことだなあ。
やま　あれでも外のお方にはさうでもないが、姉さんにばつかり意地の悪いことを言ひますわいな。
喜助　そこがよく芝居でも言ふ通り、戀のかなはない意趣ばらしといふのさ。
お組　ほんに芝居といへば、三丁目(守田座)が大そういゝといふから、氣晴しに行きたいものぢやわいなあ。
やま　その時は姉さん、わたしも連れて行つて下さいましよ。
お玉　わたくしもお願ひ申します。
お組　是非お誘ひ申すが、あゝいつ行かれることぢややら、(トしんきなる思入。)
喜助　もし、またお迎ひがかゝるといけませぬから、お早くなさいまし。
やま　さあ姉さん、まゐりませうわいな。

お組　あゝ、おもひでござんすな。（ト立ちかゝり、）大きにおやかましう、

お玉　左様ならおまゐりなされませ。

ト お組先におやま、喜助附いて上手へ入る、吉後を見送りて、

吉　たしかあの藝者衆は、雪の下の森戸屋の息子宗次郎とかいふ男と、大そういゝ仲だといふ噂だね。

お玉　さあお聞きよ、此頃ではその事がぱつとしたものだから、今言つた柴崎屋の藤兵衛さんといふお客が、あのお組さんに大層惚れてゐる故に、宗次郎さんとわけあることを聞いてから、二人を逢はせないやうに、お組さんを買ひきりさ。

吉　また相手の宗次郎といふのも、名にしおふ大家の息子だから、金にあかしたら逢へさうなものぢやあないか。

お玉　まだ息子株だから、お金が自由には遣へないわね。

吉　可哀さうなものだなあ。

ト此時花道揚幕の内にて、甘木勘藏、澁川栗平、唐井藤八等三人の聲にて『うしやあがれ、うしやあがれ』と呼びたてる聲して出來る、三人は馬乘袴大小にて、噺家の打扮の圓八を引きづり來り、花道にて、

圓八　どうぞ御免なすつて下さいまし〳〵。

勘藏　なに、御免なせえもよく出來た、夜でもあるか晝日中武士たるものに突當りながら、たゞ言葉の詫ばかりで濟まうと思ふか。

栗平　汝がやうな奴は、以後の見せしめ、

藤八　是非會所まで連れて行かねばならぬ。

三人　さあ、うしやあがれ〳〵。（ト詫びるを構はず引きづりて舞臺へ來る。）

圓八　あゝもし〳〵お侍樣、暫くお待ちなすつて下さいまし、お待ちなすつて下さいまし。

勘藏　何だ、待てとは詫の仕樣でもあると申すのか。

栗平　次第によつたら許してやる、

栗平
藤八　さあ〳〵、申せ〳〵。

ト兩人圓八を突放し、三人は床几へかける、圓八は起上り手を支へて、

圓八　へい、別にお詫のしやうもござりませぬが、どうか會所のところは御免なされて下さいまし、わたくしも顔を賣ります生業だけ、何だか悪いことでもいたしたやうで、人氣にも拘はりますからどうぞはやお情にお見のがしなされて下さりませ。

勘藏　なに、顏を賣る生業だ、あつかましいことを言ふ奴だ、そんな面を誰が買ふ奴があるものか。

栗平　して、いつたい汝が生業は何だ。

圓八　へい、噺家でござりまする。

勘藏　なるほど、噺家といへば、先刻から手前の顏色を見るところ、どつか間拔けたほかんとした奴だと思つたが、それぢやあこれが圓朝の弟子のほん太だな。

圓八　常談をおつしやつちやあいけませぬ。あんな者とは違ひます、これでも場末へ行けば眞を打ちます、圓八と申す噺家でござります。

栗平　嘘言を申せ、どうも手前がほん太らしい面附だ。

吉　（この時前へ出て、）いえ、その人はまつたくほん太ぢやあござりませぬ、ほんたと申すのは元わたくしの同職の者の弟子でござりましたから、よく存じてをりますが、こりやあ圓八に違ひござりませぬ。

藤八　こりや、同職と申すが、その方の職分は何だ。

吉　わたくしは未でござります。

藤八　えゝ年を聞くのではない、汝は何生業だと申すのだ。

吉　その生業がひつじで、髪結だと申すのでござります。

栗平　何のことだ、未だの噺家だのと、花鳥茶屋へでも行つたやうだ。

勘藏　花鳥茶屋といへば、見るは法樂で思ひ出したが、これなる者が噺家とあれば、我々が三人寄つてさいなみ榮えも致さぬ奴なれば、その替りに何なりと藝をいたさせ、それをきぼに唯今の無禮を許してやりませう。

兩人　なるほど、それがよろしうござらう。

圓八　あゝもし〳〵とんだことをおつしやります、豆藏ではあるまいし、往來なかで何かできますものか、それとも亦川長か青柳へでもお供を仰せ附けられますなら、隨分藝當をいたしてお目にかけませう。

栗平　押の强いことを申す奴、達てこの所に於て出來ぬとあれば、うぬ眞二つに、

ト柄に手をかけて立かゝる、圓八びつくりして、

圓八　あゝ待つて下さい〳〵、それはもう眞二つになりましても、命さへあることなら隨分寄席の掛持などには調法になるけれど、何を申すも命がなくては不自由でござります、どうかそれも願ひ下げにはなりますまいかな。

藤八　此奴我儘を申す奴だ、然らば命替りの成敗には、坊主にして助けてやらう。

圓八　えゝ、こいつも御免だ。（ト逃げにかゝるを勘藏、栗平捉へて、）

勘藏　それ髪結、此奴めをくり〳〵坊主にいたせ。

二人　早くいたせ〳〵。

吉　畏まりました。

ト床の内より剃刀を持來り圓八に立ちかゝる、圓八頭から羽織を冠り、

圓八　それはあんまりお情ない、地藏ならあたりまへ、圓八に坊主があるものか。

吉　お前の言ふのは地獄（至極）御尤もだ。（ト無理に剃らうとするを、）

圓八　あゝ致します〳〵、致しますからどうぞ御免なすつて下さい〳〵。

勘藏　藝をいたすとあらば許してやる、髪結もうよいぞ〳〵。

吉　へい〳〵、いやとんだ無駄骨を折つた。（ト控へる。）

三人　さあ〳〵、早くやれ〳〵。

圓八　左樣なら、坊主替りの藝當は、ちよいとまづこんなものでござります。（ト何なりとちよつと藝をなして、）どうかこれで御免なすつて下さいまし。

三人　いや、面白かつたく。

栗平　然し、手前は噺家が本職とあれば、これから噺を一つ聞きたいものだ。

圓八　それでも高座がござりませぬから。

吉　おつと待つたり、高座代りはこの床几、さあ、この上でやんなせえ。（ト床几を二脚合せる。）

三人　さあく、早く始めろく。

圓八　とんだ目に遭ふものだ。（ト床几の上へ上り、）高座御免、（ト工藤の見得をなし、）と言つて逃げるのだ。（ト上手へ逸散に逃げて入る。）

三人　いや、たはけた奴だ。（トこゝへお玉茶を汲み持來りて、）

お玉　はい、お茶をお上りなされませ。（ト三人捨ゼリフにて茶碗を取り、）

勘藏　どうだ、汝も何ぞ藝をいたして見せぬか。

お玉　左樣なことは存じませぬわいな。

栗平　知らずば身共等が敎へてやらうか。（トお玉の袖を捉へる。）

お玉　あれ、そのやうなことをなされまするとと、御人體がすたりますわいな。（ト振放すを藤八留めて、）

藤八　然らば一本まゐらうか。

お玉　えゝも御常談をなされまするな。（ト振切つて出茶屋の内へ逃げて入る。）

藤八　いまいましい、皆々逃してしまつた。

勘藏　何ぞ又面白い奴がまゐればよいな。

兩人　左樣でござる。

ト三人は茶を飲みゐる、と上手より森戸屋の丁稚與之助小さき風呂敷包みを持ち出來り、三人の前を通り下手へ行きかける、三人これを見て頷き合ひ、

三人　やいやい、待て待て。（ト與之助振返り見て、氣味の惡きこなしにて、）

與之　はい、何ぞ御用でござりまするか。

勘藏　知れたことよ、用があるから呼ぶのだ。

三人　こゝへ來いいい。

與之　はい。（トおどおどしてゐる。）

粟平　えゝ何をぐづぐづしやあがる、來いと言つたら來やあがれ。

ト與之助の襟上を取つて引戻す、與之助顫へながら手を突きて、

與之　はいはいお武家樣、何を御無禮いたしましたか存じませぬが、どうぞ御免なされて下さりませ。

勘藏　なに、何の無禮をしたか知らねえ、こりや、汝やアよもや明盲目ぢやアあるめえな。

栗平　見りやお商人の丁稚らしいから、ちつとは行儀も知つてる筈、

藤八　それに何だ。武士たるものがこゝに居るを、小腰もかゞめずつか〳〵と、何故素通りを、

三人　いたしたのだ。（トきつといふ、與之助手を支へて、）

與之　それはまあお武家樣へ對しまして、濟まぬことをいたしましてござりますが、わたくしも主人の用にて使にまゐり、少々戻りが遲うなり、叱られまいと急ぎ足、外見もせずにまゐりし故、あなた方が此の所においでとも存じませず、それ故無禮をいたしましてござりまするが、どうぞ御免なされて下さりませ。

勘藏　その遲くなつたのは汝が不奉公、叱られやうが追出されやうが、それをこつちで知つたことか、そりやお言譯にやあならねえぞ。

栗平　して汝は、いつたいどこの奉公人だ。

與之　はい、わたくしは雪の下森戸屋の丁稚でござりまする。

三人　なに、森戸屋だ。（ト顏を見合せて思入。）

與之　左樣にござりまする。

勘藏　こりやこの分には濟まされぬ。
與之　えゝ。
勘藏　汝が主人へ連參り、挨拶次第で打放す、さあ我々と。
三人　一緒にまゐれ。（ト立ちかゝるを與之助支へて、）
與之　あゝもし、どうぞ主人へおつしやることは御免なされて下さりませ、お慈悲でござりまする、お情でござりまする。（ト拜むを構はず、）
三人　えゝやかましい、うしやあがれ。（ト三人與之助を引立てる。）
與之　あれえ、誰ぞ詫つて下さりませ〱。

トこれにて吉、お玉見兼ねて三人を留めて、

吉　もし〱あなた方、お腹も立ちませうが相手は子供のことでござります。
お玉　御不承でもござりませうが、私どもがお願ひ申しまする。
兩人　どうぞ堪忍してやつて下さいまし〱。（ト縋つて頼む。）
勘藏　何もそち達の存じたことではない、
三人　打ちやつておけ〱。

兩人　さあ、さうでもございませうが、

三人　えゝ控へてをれ、（ト兩人を突倒し、）さあ、きり〳〵とうしやあがれ。

ト三人は與之助を引立て花道へかゝる、この中花道より鳶ノ者くりから傳次、褞袍腹掛尻端折り、盲縞の股引にて、麻裏草履、縞物の羽織を袖だゝみにして肩へかけて出來り、花道よき所にて双方行合ひながら、傳次三人を突廻し、與之助を圍ひて、

傳次　あゝもし〳〵お侍樣、何の粗相か存じませぬが、どうかまあ堪忍してやつて下さいまし。

勘藏　やい〳〵汝は何だ、仔細も知らず留立ひろぐ憎い奴、

三人　すつこんでうしやあがれ。（ト拳を擧げて打つてかゝるをよろしく留めて、）

傳次　これはしたりお前さん方も、わしやあ仲人でござえますぜ、それを打たうとしなさるのは、あんまり無法といふものだ。

勘藏　いや無法とは汝がことだ、やいよく聞け、その素丁稚めはな、身共等へ對し無禮をしたのだ。

栗平　それ故我々が召連れまゐる横合から、

藤八　何で其奴を、

三人　庇ふのだ。（トきつとなる、傳次思入あつて、）

傳次　いえ、何も庇やあしませぬが、高が相手は子供のこと、長い短い言はねえで、わしに任して兎も角も、向うの茶屋まで、

三人　むゝ、（ト息込む。）

傳次　まあ、ござえましな。

トこれにて三人も頷き合ひ思入あつて舞臺へ戻る。傳次は與之助の手を引き舞臺へ來る、吉、お玉前へ出て、

吉　これは頭、よい所へおいでなすつて、わしどもまで安堵いたしました。

お玉　ほんにどうなることかと思ひましたに、ようござんしたなあ。

トこの中皆々よろしく床几へかける。

傳次　いや、とんだ所へ來合せて、またお見世のお邪魔をいたします。

お玉　どういたしまして、（ト言ひながら茶を汲み持來り、）先づお茶一つお上りなされませ。

ト傳次と與之助とだけへ茶を出す。

傳次　もし、あなた方へもお茶を上げておくんなせえ。

勘藏　いや構やるな、呑みたくばこの方より申附け、勝手に呑む。

栗平　先づ何はさしおき、いつたいその方は、

三人　何者だ。

傳次　わたくしはこれにをりまする丁稚の主人森戸屋の抱への鳶、傳次と申す者でござりまする。

勘藏　すりや、其方は森戸屋の抱への鳶とな。

栗平　これが所謂味方身びいき、

藤八　仔細も聞かず何故に、われは此の場の、

三人　邪魔をするのだ。

傳次　決してお邪魔はいたしませぬ。また仔細と申したところが高が子供、どれほどの不調法がありますかは知りませぬが、どうかわたくしにお免じなされて、今日の所は幾重にも御了簡なすつて下さりませ。

勘藏　いゝやならぬ、譯を知らぬから左樣に申すが、じてえその丁稚めは我々がこゝに居るを存じながら、素通りいたした無禮者、それ故了簡ならぬのだ。

傳次　もし〳〵、そりやあちつと御無理かと存じますぜ。

三人　やい〳〵、無理とは何が無理だ〳〵。（トたゝきたてゝいふ。）

傳次　さればさ、假令百萬石取る大名のお通りでも、懷手をしてぼんやりと立つてゐるのが大都會、この膝下の有難さ、それにお前さん方はどれほどの御身分か知らねえが、お武家とせえ見りやあ町人は一々に挨拶をした日にやあ、諸國の武家の寄りどころ、この鎌倉は歩かれますめえ。

三人　むゝ、（ト ぎつくり詰る。）

傳次　さあ、それだから何事も言はぬが花の花水橋、水に流していゝいゝ、いざこざは御不承でもお武家樣、どうかわつちにおくんなせえ。（トこれにて三人見合せどうしようといふこなし、栗平頷きて、）

栗平　いゝや、その素丁稚の無禮といふは、まだそればかりでない、おゝさうだ、某が足へ躓きながら挨拶もいたさぬ無禮者、それ故了簡ならぬのだ。

與之　いえ〳〵、何のわしがそのやうな、（ト言ふを打消して、）

栗平　えゝ、さうだ〳〵。（ト笠にかゝつて言ふ、これにて與之助控へる。）あの通りの口强情、

藤八　あれだから身共等がよいか惡いか、めんばれに引連れまゐつて、森戸屋の主人に逢つて掛り合ひを、いやなに、きつと掛け合はねば相成らぬ。

與之　あのやうにおつしやつて、わしや連れて行かれたら、どうしませう〳〵ぞいの。（ト泣く。）

傳次　何も案じるには及ばねえ、わしが斯うやつて口を利くからにやあ、どこがどこまでもお詫をして

お前に難儀はさせないから、落着いてゐるがいゝ。
勘藏　いやさう言はれゝば此方も意地、是非とも連れて行かねばならぬ所ぢやが、それとも亦其方が武士の一分立てるなら、勘辨いたすまいものでもない。
傳次　つまらねえことをおつしやいまし、家藏ならば生業だから、隨分立てもしませうが、鳶の者のわたくし風情、何でお武家の立てやうを、
粟平　知らずば教へてやる、その武士の立てやうは、其方我々が、
三人　相手になれ。
傳次　なに、相手になれとは、
三人　眞劍の勝負をいたすのだ。（トきつといふ、傳次思入あつて）
傳次　そりやあ隨分いたしませうが、高の知れた鳶の者たつた一人を、お歷々三人がゝりで相手にして勝つたところが見得にもならず、また勝負は時の運とやら、どうかいふ間違からあなた方が負けたらば、この人だかしい花水橋、引込みがありますめえぜ。
トちやかして言ふ、三人むつとして、
勘藏　やあ、うぬ憎い雜言、勝つか負けるか我々が覺えの手の内見せてくれん。御兩所支度めされ。

兩人　心得ました。
ト三人きつとなり袴の股立を高く取り、下緒を取つて襷にかける、與之助これを見ておどろき前へ出て、
與之　あゝもし、元の起りはわたくし故、此の人は知らぬこと、お腹が立つならわたくしをお切りなされて下さりませ。
ト覺悟の思入にて三人の侍の傍へ行かうとするを、傳次留めて、
傳次　これはしたり、お前を殺す位ならこんな苦勞をするものか、あぶねえから退いてゐなせえ。
與之　それぢやといふて、
傳次　はて、いゝからそこで、（ト下の方へ突きやり、）見なせえといふに。
ト與之助是非なく控へる、この中三人支度をして、
三人　さ、支度いたさぬか。
傳次　支度をしろと言ひなすつても、わつちやあ何もねえ鳶の者、それにまた形ばかり仰山で、負けた時に極りが悪いから、逃げる時の用心に尻でもしつかり端折りませうよ。
勘藏　何のおのれを逃がすものか。

三人　覺悟いたせ。

ト三人拔連れて打つてかゝるを、傳次身を黎しちよつと立廻つてきつと見得、これより見世物の鳴物になり、床几を遣ひ傳次三人を相手に立廻りの内、與之助は傳次を氣遣ひうろ〳〵してゐる。ト、傳次一人の刀を打落し、これを取つて三人を峯打に打ちすゑる。この中上手より以前の圓八出てゐてこの時出茶屋の内より手桶を持來りて、

圓八　こゝらが意趣の返しどこだ。

ト柄杓にて侍三人の頭へ水をかける、三人は這々の體にて花道へ逃げて入る。これを見て與之助嬉しき思入にて傳次の側へ來り、

與之　あゝ有難うござりまする、どうでもわたしは連れられて行くことゝ思うてゐたに、お前のお蔭で難儀も脱れて、このやうなほんに嬉しい有難いことはない。

圓八　いやわたくしも頭のお蔭で、先刻の仕返しをしてやつたので、ちつと蟲が落着きました。

傳次　然し、今日は淸正公樣の御緣日だといふに、おらあとんだ殺生をしたよ。

吉　（前へ出て、）どうして頭、彼奴等を酷い目に遭はしてやんなすつたのは、人助けにこそなれ決して殺生にはなりませぬ。

お玉　ほんにさうでござります、毎日こゝらを荒して歩く悪漢でござりますが、もうあれに懲りて當分參りませぬわいな。

與之　ほんたうに、またこゝへまゐりはいたしますまいな。

吉　大丈夫、頭がお手の内を見せつけておやんなすつたから、もう來ることぢやあござりませぬ。

圓八　お手の内といへば、頭は撃劍の方はよつぽどいけますね。

傳次　いや、とんだ隱し藝を見られて、面目次第もねえ。

ト頭を押へる、この以前立廻りの中より、上手へ天蓋を深く冠りし立派なる虛無僧尺八を持ち、高きぽくりを穿き、始終の樣子を窺つてゐたが、

虛無　實もつて町人には惜しき武藝、失禮ながら感心仕ッた。

ト言ひながら前へ出る、圓八見てびつくりして、

圓八　おや、今度は虛無僧だ、此奴あ何だか强さうだ、險難だから逃げなせえ〳〵。

ト與之助の手を引張り下手へ逃げて入る。吉は床の内へ、お玉は出茶屋の内へ逃込む、傳次思入あつて、

傳次　これは〳〵思ひがけない梵論字樣、今わたくしが無法にやつたまぐれ當り、時の機で勝ちました

を、そのやうにお褒めにあづかりましては、實にお恥しうござります。

トこなし、この中虚無僧天蓋を取ると六浦主膳にて、傳次をよく〳〵見て、

主膳　いやなか〳〵左樣でない、若輩者と申し、且はかゝる姿の某が斯樣申さば小賢しと思召されんが、最前よりの働きをあれにて篤と見受けしところ、武士も及ばぬ身の構へ、ちよつと使ふ太刀筋といひ正しく流儀は神影にて、皆傳免許を取りたる手の內、何と左樣でござらうがな。

傳次　どういたしまして、わたくし共が何の劍術柔術のと、しん以て何にも知らぬ素人の者、そりやあちつとお前樣の、失禮ながらお目違ひかと存じます。

主膳　何さ下世話に申す如く、能ある鷹は爪を藏すとやら、左ほどの業を持ちながら、それに誇らず包まるゝは猶々もつて奥床しい、實は愚僧も未熟にはあれど、神影流を學ぶ者ぢやが、同じ流儀のその中でも、進退早速の駈引は師匠によつて差違あれども、御身が今の太刀筋は我師と同じ構へなるが、もしや御身はその以前、武士にてはあらざるか。

傳次　（これにて思入あつて、）かくまでお目立ちまする上からは、包むは却て無禮とやら、何をお隱し申しませう、以前は武家出でござりまする。

主膳　然らば尋ねんが、もしや武術の師範を受けしは、下總千葉に住居なす、神柳齋殿の門人にてはな

かりしか。

傳次　なるほどおつしやりまする通り、少しばかり先生の御指南を受けましたが、それを御存じであらせらるゝ、してあなた樣には、

主膳　不審な尤も、ちと仔細あつて斯く姿はやつせども、某事な結城の藩中六浦主膳と申す者、

傳次　えゝそれではあなた樣が、（ト言ひながら尻の端折りを下し、下にゐる。）

主膳　して、御身が以前の名は、

傳次　その六浦樣の御同家たる金澤樣に御奉公せし、傳次郎と申せしわたくし、

主膳　すりや話に聞及びし、金澤文吾が家來たる、あの傳次郎であつたるか。

傳次　六浦の旦那でござりましたか。

主膳　まことにはや、思ひがけない、

傳次　とんだところでお目にかゝりました。（ト腰の手拭を取り床几の塵を拂ひ、）さゝ旦那樣、そこは穢うござります、

主膳　もう構やるな〳〵。（ト言ひながら床几へ腰をかけ、）いや、思はぬことが縁となり、不思議な人に逢ふものぢや。

傳次　わたくしもあなたが御幼少の砌、お國を出まして御成長の後お顏を存じませぬ故、先ほどよりの無禮、まつぴら御免なされて下さりませ。

主膳　あゝ苦しうない、苦しうない。

傳次　思ひ出せばまことに面目次第もござりませぬ、若い折とは申しながら、朋輩とつまらぬことを言募り、果は相手に疵を附け、內證で濟まぬ表向、御主人樣のお耳に入り以ての外の御立腹にて、すでにお手討にもなる所、折よくあなたの親旦那樣がお扱ひ下すつて、相手の者は宿へ下られ、わたくしめは御追放、その時死ぬる命をば助かりましたは親旦那樣の皆お情、その有難さにこの以後は決して短氣を出すまいと、失禮ながら御覽下さりませ、（ト腕をまくつて見せ、）このやうに堪忍の二字を肱へ彫りましたれば、いさゝか短氣は出しませぬ。往時を思ひ出しますと、實に後悔いたしまする。（トよろしく思入。）

主膳　いや〳〵若い中の粗相は誰も皆ありうちのことぢや。おゝ若い中の粗相と申せば、ちとそちに承はりたいは、身共が弟主水と申すもの、先達お家の重寶赤木の短刀を失ひし故、それを詮議のその爲めに國元を罷り出しが、ふと承はればこの鎌倉にをるとのことぢやが、もしやその方心當りでもないかな。

傳次　その儀を最前より申上げようと、存じてをつたところでござりまする。

主膳　何と申す、然らば其方存じをるとか。

傳次　左樣でござりまする、その主水樣もこの如く、やはり途中でお見受け申し、あなたと違ひ親旦那主計樣にそのみそのまゝ、もしやと存じ承はれば、案に違はず六浦の御子息、直に家へお伴ひ申し、唯今にてはわたくしがお世話をいたしまして、この雪の下の小道具渡世鎌倉屋と申す家へ短刀詮議の爲めに、御奉公をなされてゞござりまする。

主膳　それははや何かとその方が厄介と相成り甚だ以て氣の毒千萬、某もその儀に就て等閑ならぬ寶の詮議、實は弟の身持氣遣はしく、四五日以前當地へ着なし、所口方々と尋ねしが、雲を當なる尋ね者、いかゞはせんと思ひしに、測らずも其方にめぐり逢ひ、早速弟の住所も相知れ、まづはこれにて安堵いたした。またそれに就短刀詮議の日限り近く相成りし故、追願ひはいたしたれど願はくば一日も早く尋ね出し差上ぐるやう、その方よりどうか弟へ申し傳へてくりやれ。

傳次　委細申上ぐるでござりませう。それに又ちと手がゝりもござりますれば、及ばずながらわたくしも、親旦那樣への御恩返し、假令身を紛に碎きましても、きつと寶はお手に入れますれば、必ず御心配はなされまするな。

主膳　往時を忘れず親切なるそちが言葉、祝着に存ずる。どうかその短刀の在所が知れなば早速手前が旅宿まで、太儀ながら知らしてくりやれ。

傳次　畏まりましてはござりまするが、してあなたの御旅宿はいづれでござりまするな。

主膳　我は琵琶小路の本町にて、伊勢屋佐兵衞が貸座敷を借りをるが、して又その方が宅はいづれぢやな。

傳次　わたくしは名越通り左り手にて、材木川岸に住ひをりまする。

主膳　して、何と尋ねれば相分かるな。

傳次　鳶の傳次とお尋ね下さりますれば、直わかりまする。

主膳　承知いたした、いづれ兩三日の中に改めて尋ねまゐるであらう。

ト立上る、この時上手より紺看板の中間酒に醉つたるこなしにてよろ〳〵と出來り、主膳に突當り、

中間　やい、汝アおれに何で突當りやあがつた。（ト胸倉を取る、その手を捩じあげて、）

主膳　人立多き花水橋、花なきぼろに拳の手の內、

傳次　いたゞくお身の天蓋も、人目を忍ぶその巢籠り、

主膳　鶴といふ名に目出度も、測らず聞きし詮議の歌口、

傳次　その尺八の、

主膳　節なくこゝを（ト中間を突放す、中間又うぬとかゝるをきつと引附け、）あ、産神がらとて鎌倉は、よほど氣性の、

傳次　え。（ト主膳中間を投退け、）

主膳　いや、荒い所ぢやの。

ト唄になり主膳は下手へ入る。傳次後を見送りて、

傳次　思ひがけないお方にお目にかゝるものだ。何にしても早速この事を、主水樣へお報せ申しておかう。（ト行かうとして、）いや／＼行つたところがまだお歸りぢやァあるめえ、先刻ちよつと向う川岸でお目にかゝつたから、是非こゝを通りなさるに違ひねえ、それまで奥を借りて、どれ待合してゐようか。

ト出茶屋の内へ入る。と花道より與市小道具屋の裝にて、短刀の包みを持ち、刀屋手代半七出來り、花道にて與市の袖を控へて、

半七　これさ、さう言はずとも、少し待つて下さい。

與市　えゝ止しなせえな、往來中で見つともねえ。（ト振拂ひ、兩人捨ゼリフにて爭ひながら舞臺へ來る。）

半七　まあ手間は取らせぬから、ちよつとこゝへかけて下さい。(ト與市を無理に床几へかけさせる。)

與市　かけろならかけもしようが、こう半七さんよく聞きなせえ、お前も商賣人のやうにもない、二朱でも値のいゝ方へ賣るのが、こりやあ世間一統商人の習ひでござえます。

半七　さあ〳〵さうでもあらうがその短刀は、外へ賣られてはならぬ品、是非わしが買ひまするから、どうぞ人手に渡さずにおいて下さい。

與市　そりやあ今も言ふ通り、値さへよければどちらへでも早く賣つて、儲けさへすればいゝのだから長い短い言はないで百兩、手取りに半金手附を渡しなさるなら、四日や五日は待ちませうよ。

半七　それは忝ない、そんならきつとわしに賣つて下さるな。

與市　賣りは賣るが五十兩の手附はえ。

半七　その金はあの、今といつては、

與市　出來ねえのかえ。

半七　どうかくどいやうだが、もう四五日のところを待つて下され。

與市　(半七の顏を見てせゝら笑ひ、)さりとてはお前も意氣地のねえ、家の後家か娘をだまし、借りたら直に出來ように、後家も娘も首つたけお前に惚れてゐるぢやあねえか。

半七　あゝこれはしたり、假初にも御主人樣、嘘にもそのやうな事は言うて下さるな。

與市　齒がゆいやうだ、お前のやうな腑甲斐ない人にやあ、この短刀は買へねえ、無駄なことだ、止にしねえ。（卜立上るを半七留めて、）

半七　いや〱、どうなりとしてその短刀は、きつとわしが買ひまする。

與市　えゝ働きもねえくせに、退きなせえ。

卜半七を突退け行かうとする、この中出茶屋の内より傳次出てゐて、

傳次　あゝもし道具屋さん、ちよつと待つて下せえ。（卜前へ出る、半七見て、）

半七　おゝ、こなたは傳次どの、

與市　ほんに頭、呼びなすつたのはわたしかえ。

傳次　知れたことさ。（卜床几へかける、與市傍へ來り、）

與市　もし、わたしを呼びなすつたのは、何の御用でござります。

傳次　外のことでもねえ、その短刀、仔細は聞いて知つてゐるが、長くとは言はねえ二三日の所、おれが請合ふから待つて下せえ。

與市　頭これればかりはいけませぬ、かう申すとお前さんの顏をつぶすやうだが、待たれぬといふその譯

は、外にお金も右から左、直に儲かる口がありますから、一日はおろか半時も待つことはできませぬ。

傳次　さう言はれたんぢやァあんまり物に愛嬌がねえといふものだ、おれも一旦請合ふからは、當人に其の金が都合が出來さあおれも男、口を利いたが不承だから、家を賣つてもその金はきつとこなたに渡さうぢやあねえか。

半七　またわしとてもこのやうに、頭に口を利かれたればどのやうなことをしても、才覺せねばならぬ羽目、こゝの道理を聞分けて、どうぞ後生ぢや、待つて下され。

與市　何とおつしやつても、出來さうで出來ねえものは、金でござりますからね。とても亦家を賣る思召しなら、今賣つてお買ひなせえな、一寸脫れはまつぴらでござります。

傳次　そりやあ出來ねえ曉の話よ、今賣つちやあ居所に困らあ。

與市　それぢやあ御緣のないのだから、外へ持つて行つて賣りませうよ。（ト立ちかゝるを傳次留めて、）

傳次　これさ、それを賣られてなるものか。

與市　賣るが厭なら、金を渡しなせえな。

傳次　それだといつて、今といつちやあ、

與市　出來ざあ外へ賣りませうか。
半七　あゝもし、それは。
與市　そんなら金か、
兩人　さあ、それは、
與市　さあ、
兩人　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。（ト與市床几を强くたゝきて、）
與市　えゝ、どうしなさる氣だ。
　　トきつと言ふ。この以前上手より柴崎藤兵衞羽織着流し一本差し。物持町人の打扮、後より以前の圓八、船頭伊之助附きて出來り、藤兵衞上の方の床几にかけ始終を見てゐて、思入あつてこの時手早く二十五兩包みな胴卷より出し、
藤兵　さあ、その金をおれが貸してやらう。（ト傳次藤兵衞を見て、）
傳次　や、お前は柴崎屋の藤兵衞さん。それぢやあ今の樣子をば、
藤兵　殘らず聞いてゐましたが、男をみがくこなさんが、僅な金に人中で耻をかくのが氣の毒さ、貸し

てやるのも滿更にこれか緣のないぢやあなし、末始終は汝が妹お組をおれが女房にすりやあ兄弟になるお前の難儀、勿論錢金ばかりは親子の仲でも他人だが、おれは又そんな薄情なことの出來ねえのが生得いた持前だから、それを早く道具屋さんに渡して、らちを明けなせえ。

ト金を傳次の前へおく、傳次思入あつて、

傳次　まことに藤兵衞さん、思召しは有難うござりますが、こりやあちつとお借り申し難うござりますから、御親切を無にするやうだが、どうかこりやあお納めなすつて下せえまし。

ト金を突戻す、藤兵衞少しむつとせしこなしにて、

藤兵　それぢやあこの金は入らぬといふのかえ。

傳次　なに、さういふ譯ぢやあねえ、そりやあもう唾の出るほどほしい金だが、

藤兵　さあ、そんなら遠慮せずと使ひなせえな。

傳次　どうも、こればかりは、（トぢつとなる、圓八、伊之助前へ出て、）

圓八　もし〳〵頭、旦那が折角の思召しだから、お借り申しておきなせえ。

伊之　何も見得をする場所ぢやありやせんぜ、遠慮は無沙汰だ、早くお借り申して、その短刀とやらを外へ賣られねえ用心をしなさるがいゝ。

與市　わたしだつても、さうべん〳〵と待つちやゐられませぬ、御相談が調はずば外へ賣るから、さう思ひなせえ。

半七　あゝこれ、今お前に行かれては、

與市　それだつても、のんべんぐらりぢやあ、わたしが困ります、どうぞ放しておくんなせえ。

ト振切つて行きかゝる、これまで傳次ぢつと思入あつたが、きつと頷いて、

傳次　こう、待ちねえ。

與市　それぢやあ御決着が附きましたかえ。

傳次　むゝ、（ト頷き、藤兵衛を見て間の惡きこなしにてもぢ〳〵しながら、）もし藤兵衛さん、折角あなたがそれほどまでにおつしやつて下さるもの、一旦はお氣の毒と存じまして御辭退をいたしましたが、切羽つまつたこの場の仕儀、お言葉にあまへまして、少しの間拜借いたしても、よろしうござりませうかな。

藤兵　いゝのなんのと此方は初手から貸さうといつたを、お前がよけいな遠慮をして、おれにまで心持を惡くさせ、つまらねえぢやあねえか。まあ〳〵そりやあいゝから、早く金を渡してやんなせえ。

ト件の金を傳次へ突出す。

傳次　これは有難うございます。(ト金を取り與市に向ひ、)さあ道具屋さん、手附の半金五十兩、改めて受取りなせえ。

與市　はい〳〵有難うござります、(ト金を受取り封印を改め見て、)よろしうございます、たしかに受取りました。それぢやあ短刀は後金の五十兩と引替にしますから、どうか日限を間違へぬやうにしておくんなせえ。(ト言ひながら金をしまひ、)こりやあ大きに、どなたもおやかましうございました。

ト足早に下手へ入る、半七胸を撫でおろして、

半七　あゝ嬉しや、これで安堵した。(ト思入あつて藤兵衞の前へ進み、)これと申すも皆あなた樣のお情、何とお禮の申上げやうもござりませぬ。まことに有難う存じました。

藤兵　何のお前あればかりの金を、御用立申したとて、そんなにお禮を言はれては却て此方で痛み入ります。

半七　どういたしまして、お蔭樣で安堵いたしましてござりまする。(ト傳次に向ひ、)これ傳次どの、わたしは御昨今のことなれば、お前からあなたへようお禮を申上げて下されや。

傳次　またわたくしからもよくお禮を申しますから、お前さんは早く後金の算段をなせえましな。

半七　そりやどうか都合をしようわいの。

傳次　どうかぢやあござりませぬぞ、先刻からあの一件にかゝり合つて申さずにをりましたが、お國元からお兄い樣が短刀のことに就き、お前樣のお行方をば尋ねておいでなすつたところ、測らずここでお目にかゝりましたが、それに就きましていろ〳〵お話もござりますが、それは又後でいたしますから、何でも短刀を買求め、お兄い樣に御安心をおさせ申さにやなりませぬぞ。

半七　さう聞く上は猶のこと、一日も早く手に入れてそれを土産に兄者人に早うお目にかゝりたいが、またお叱りが出るであらう。（ト思入あつて）おゝお叱りといへば、あまり又遲うなると、番頭どのがやかましい故、一足先へ行きまするぞ。

傳次　さあ〳〵、それでなくとも主人持は遲く歸つちやあ濟みませぬ。早くおいでなさいまし。

半七　また明日逢ひまする。（ト立上り藤兵衞の前へ小腰を屈め、）左樣ならばあなた樣、今日は存じがけない御厄介にあづかりまして、有難う存じました。

藤兵　いや、またお禮かえ、どれほどのことでもしたやうだ。

傳次　それぢやあ御免を蒙むつて、

半七　どれ、お暇といたしませう。（ト上手へ入る、圓八、伊之助見送りて、）

圓八　いやあの若い者も、男がいゝから女が辛抱させておくめえ。

伊之　どうも始終は引負者、請人難儀といふ野郎だ。
藤兵　さういへばあの男は、たしかお前の世話で奉公に行つたのだの。
傳次　左樣でござります、ちつとわたくしが肩を入れて、世話をいたさねばならぬ義理合がござりまして、それ故お前さんにまであんな御厄介をかけまして、まことに有難うござりました。實にお禮の申しやうがござりませぬ。
藤兵　何の、あの人にしたのではなし、お前への義理でしたことだから、さう氣の毒がるには及ばない、まだ困るなら後金の五十兩も、わしが貸して進ぜませうよ。
傳次　え、あれのみならず後金を、
藤兵　さ、それが物は相談だ、その替りおれも亦ちつとこなたに賴みがある。
傳次　なに、お賴みとはね。
藤兵　外でもねえ、汝が妹お組をばおれが女房に貰ひてえ。（トきつといふ、傳次思入あつて、）
傳次　そりやあ年季の明けた曉なら、隨分上げまいものでもないが、まだ自前にならぬ彼女の身體。
藤兵　それも合點、假令どれほど金が入るとも、そこに絲目をつけぬ藤兵衞、金を積んで藝者を引かせ女房にするから親代り兄のこなたに貰ひたい。

傳次　さ、それも一旦主人へ掛合ひ、また當人へも言聞かせ、何れお返事いたしませう。

圓八　これさ頭、一寸貺れを言ひなさらずと、兄の威光でうんと言はせ、旦那へ上げてしまひなせえ。藝者をさせておかうより、大家と言はるゝ柴崎屋の御新造樣になつたらば、お前が肩身が廣いおやないか。

伊之　その緣引でお前も亦附合の多い生業だけ、どんな金の入るめえものでもねえ、そんな時にやあ大そう强味だ、そこらこゝらを考へて、うんと言つて、

兩人　しまひなせえ。

トこれを聞き、傳次少しむつとせし思入であつたが、氣を替へて、

傳次　お前方まで御親切に、妹といひわつちのことまで、思つて言つてくんなさるのは忝ねえが、おいそれとは返事のし難いことがある。

藤兵　その返事のし難いのは、お組が情人の宗次郎、大方彼奴のことだらうが、あのまた野郎に義理を立て、厭だと言やあこつちも意地、厄病神で敵とやら、百兩のものは二百兩出しても、赤木の短刀をおれが買ひ、今の二才にも鼻を明かせる、それともに又お組に色よい返事をさせれば、後の五十兩もたゞやる氣だ。

圓八　こいつあ頭、
兩人　考へものだぜ。
藤兵　またお組をくれずばあかの他人、緣のない者に五十兩といふ金を、無證文ぢやあ貸しておけねえ、たつた今返して貰はにやあならぬ。さ、否か應か、どつちの道こゝで埒を明けてしまやれ。
　　ト言放し正面を向いて知らぬ顏をしてゐる、この中傳次ぢつと思入あつて、
傳次　よろしうござります、おつしやる通り兄の威光で得心させ、きつとお手に入れませう。
藤兵　それぢやあ色よい返事をさせるか。
傳次　うんと言はせてお目にかけませう。
圓八　それ旦那、お望み通りに行きましたぜ。
伊之　こりやあよつぽど勘定筋だ。
藤兵　いや早速の承知忝ない、それぢやあ善は急げとやら、約束通り後金の五十兩直にこゝで渡しておかう。（ト懷へ手を入れるを、）
傳次　あゝいえ、そりやお借り申さずともようござります。
藤兵　それぢやあ得心させるといつたは、當座脫れの思ひ附か。

傳次　何のつけ、わしも男、一旦斯うと言つたらば寐返りは打ちませぬから、安心しておいでなせえ。

藤兵　さう言つてくれりやあおれも安堵だ、また金のこともかういふ仲になつて見りやあ、いつでもいいといふものだ、そんなら前祝ひに藤岡へ行つて、一ぱいやらうか。

圓八　その事〳〵、もし旦那、今日ばかりはお酒が旨く上れますぜ。

伊之　何でも今夜は祝ひ酒の夜明しとやりませう。

藤兵　それぢやあ兄貴、お前も一緒に、

傳次　いえ、わたくしはその事に就き、お組に逢はにやあなりませぬから、あなたはお先へいらして下せえまし。

藤兵　ほんにそれが肝腎だ、それぢやあこれから藤岡へ、

傳次　彼女を連れていづれ後刻、

藤兵　來るのが合圖で、

圓八　日頃の本望、

伊之　首尾よくこゝまで、

藤兵　金の威光で、

傳次　え、

藤兵　いや、藤岡に待つてゐるよ。

ト三人は下手へ入る、傳次殘り思入あつて、

傳次　あゝ時の切羽とはいひながら、とんだ金を借り込んだので、上げも下げもならねえ始末、果しがないから妹に得心させると請合つたが、宗次郎樣とあゝいふ譯、なか〳〵うんと言やあしめえ、こいつあ困つたことになつたなあ。

ト當惑の思入、この中上手へ以前のお組、おやま、喜助附き出て樣子を聞いてゐて、

お組　兄さん、わたしや厭でござんすぞえ。(ト言ひながら前へ出る、傳次見て、)

傳次　おゝ手前は妹、そんなら今の樣子をば、

お組　詳しい譯は知らないが、お前が今の口振りでは、大方わたしを藤兵衞さんへお前やる氣でござんせうが、そりやあんまりでござんすわいな。

やま　ほんとにそれはあんまりでござんすぞえ。

お玉　わたくしも樣子を聞いてをりましたが、それはあんまりでござりまする。

喜助　その通り、あんまりでござります。(ト口々に言ふ。)

傳次　えゝ見つともねえ、止さねえか。（トこれにて三人控へる。）
お組　見つともないと言はしやんすが、そりやお前が惡いからぢやわいな。
傳次　何をおれが惡いのだ。
お組　さあ、惡いわいな、宗次郎さんとわたしの仲知つてゐながら藤兵衞にお前やろ氣でゐやしやんす故、惡いというたのぢやわいな。假令兄さんの威光でも、この道ばかりは別なもの、お前の自由にやなりませぬ、厭でござんす。あい、わたしや宗次郎さんの女房になるのでござんすわいなあ。

トつんとして脇を向いてゐる。

傳次　いや、手前もよつぽど分からねえものだ。
お組　わたしや何が分からぬえ、さあ、わたしや何か分かりませぬ〳〵。（ト傳次に摺寄つて言ふ。）
傳次　まあ靜にしろえ。假令汝を藤兵衞さんにやるやらねえは兎も角も、宗次郎樣には添されねえぞ、
お組　え、そりや何故でござんすえ。
傳次　何故とは言はねえでも知れたことだ、あの森戸屋はおれで二代、革羽織まで貰ふお店、昨日や今日の出入場なら捨てもしようが、知つての通り酒の上の惡い親父、幾度となく失敗つたも目をかけて下すつたそれのみならず、おれまでも勿體ねえ、御子息でも堅いお店の習ひだから、自由に

金を使はせぬを、おれがいつかの間違ひにやあすでに牢へも行くところ、大金出して穩便に事なく濟まして下すつた大恩のある旦那樣、そりやあ手前に言はしたら、そりやあわたしの知つた事ぢやあないと言ふだらうが、先づ第一によく考へて見ろ、土藏造りの居附地主、抱へ地面も十ケ所から雪の下で五本の指へ折られる家の花嫁に、鳶の者の妹を嫁だといつて披露がならうか、大概積りにも知れたものだ、よしんば先樣で眼をねむり、伜が好いたことならば何でもいゝとおつしやつても、おれが嫁にやあ上げられねえ、慾にふけつて無理無體、はぎ附でもしたやうに世間の人に思はれると、おればかりの耻でなく、大勢ある組合の名折になることだから、無理な兄だと思はうが、どうぞ言ふことを聞いて、これ妹、若旦那のことは思ひ切つてくれ、こればかりはおれが一生のお賴みだ。

ト始終思入にて賴む、お組愁ひのこなしにて、

お組　いえ〳〵假令何と言はしやんしても、わたしや若旦那のことばかりは思ひ切られぬ、思ひ切られぬわいな。（ト泣伏す、傳次無駄だといふ思入あつて氣を替へ、）

傳次　それぢやあ何か、おれがこれほど譯をいふに、どうあつても汝やァ聞かれぬといふのか。

ト わざと荒く言ふ。

お組　あい、逢つてと言はしやんすりや、わたしや死んでしまふわいな。

ト立上るをおやま、お玉、喜助を捨ゼリフにて宥める。

やま　姉さん、どうぞ堪忍して、そのやうな事言うて下さんすな、お前にもしものことがあると、わたしや頼りがござんせぬわいな。（トお組へ縋つて言ふ。）

お玉　ほんにつまらないことをおつしやりますな、このお子さんが御心配をなさいますわいな。

喜助　又頭もあゝは言ひなすつても、そこは又御兄弟仲のことだから、どうでも話は後で分かることでございますわね。（ト傳次の側へ寄り、）もし頭、お前さんもお腹も立ちませうが、今日はお座敷へお出かけのことでございますから、お叱りなされずに下さいまし。

傳次　いゝや打ちやつておいてくんねえ、死ぬなら勝手に死ぬがいゝ。

お組　死ななくつてかいな。（ト又立ちかゝるを三人にて留め、）

喜助　まあ〳〵ようございます、こりやあこゝにおいでなされちやあ果しがありませぬから、兎も角も藤岡までいらつしやいまし。

やま　ほんに藤岡の姉さんに、わたしがよくこの事を頼まうわいな。

お玉　なるほど、それがよろしうございまする。

喜助　さあ〳〵おやまさん、姉さんをお連れ申しておくんなさい。
やま　また迎ひを受けると惡うござんす、姉さん早うまゐりませう。
お組　もうお座敷を勤める元氣もござんせぬ。
喜助　そんなことをおつしやつちやあ困りますわね。
やま　さあ、まゐりませうわいな。
　ト お組の手をとる、お組元氣なく立上り、
お組　お玉さん、大きにお世話さまになりました。
お玉　御機嫌をおなほしなさいましよ。
お組　はい。（ト行きかゝるを傳次見て、）
傳次　えゝ見つともねえ、涙でも拭いて行け。
お組　お前の世話にやならぬわいな。
　ト 流行唄になり、お組足早に、おやま喜助附いて下手へ入る。
傳次　いや、困つた奴だなあ。（ト お玉を見て、）おゝお玉さん、大きに長居をした上に、とんだ御厄介になつて濟みませぬ、何れお禮はいたしますよ。

お玉　とんだことをおつしやりますわいな。

傳次　然し、もう何時だね。

お玉　先刻七つを打ちました。

傳次　それぢやあ門のしまらねえ中、どりや淸正公様へまゐつて來ようか。

ト行きかける。この時以前の惡侍三人後に窺ひゐて。

三人　うぬ、さつきの返報、

ト唐突に傳次に切つてかゝるを身を翻し、ちよつと立廻つて三人を一時に當て、

傳次　なるほど世間は、

ト肩へ手拭ひをかける、この途端三人は見事に轉る、これを木の頭、

物騒だなあ。

トこなしあつて肩で笑ふ、これをきざみ、佃にてよろしく

ひやうし幕

ト波の音のつなぎにて、直に引返す。

（花水橋の場）――本舞臺下手より上手へ斜に大いなる橋、この下より彼方百本杭の遠見の書割、上の方二重の石垣、これへ棧橋をかけ、この傍に丸物の障子船、艫の方に船頭兩人茶碗にて酒を飲みゐる、總て花水橋の模様、鳥追通り神樂にて幕明く。と、花道と橋の上より思ひ〳〵の仕出し出て、入違つて入る。と花道より、鑄掛屋松五郎縞物の木綿の半纏同じ着附、股引、尻端折りにて、手拭を米屋冠りになし、鑄掛の荷を擔ぎ、呼びながら出來り、

松五　こりやあ今日もあぶれかな、いつでもおれが生業は春先は閑なものだが、また今年のやうなことも少ねえものだ。何でも鑄掛屋と燒きつぎ屋は、主人にやあ迷惑だがそゝつかしいおさんどんが澤山なくつちやあ飯が喰えねえ。あゝ飯と言やあだいぶ腹が北山だ、ドウお馴染の小大橋へでも這入らうか。

トやはり呼びながら舞臺へ來る。この中橋の上より紙屑屋ぐづ八籠を擔ひ、やはり呼びながら出來り、舞臺よき所にて松五郎に行き逢ひ、

ぐづ　もし鑄掛屋さん、ちよつと待つておくんなせえ。

松五　何だえ、また鉛や盤陀の賣物なら要らねえよ。

ぐづ　なあに賣物ぢやあない、この鐵瓶だがね、（ト籠の中より鐵瓶を取出し、）この穴は鑄掛けられようか。

松五　どれ、見せなせえ。（ト荷を下し、鐵瓶をとつて見て、）おや〳〵、こりやあめつぽうけえ大きな穴だ、

これが鐵瓶で仕合せ、こちとらがこんな大きな穴を明けようもんなら、生涯塡るせいはありやあしねえ。

ぐづ　違えねえ。いや常談をのけ、どうだえ鑄掛が利かうか。

松五　そりやあ利かねえことはねえのさ。

ぐづ　いくらでやつてくんなさる。

松五　さうさ、お前も商賣物だらうから、まけてやらう、三百出しねえ。

ぐづ　待ちなせえよ、ゝゝゝ、どら九で見たほしたのだから。（トちよつと考へ）二朱にやあ賣れるね。

松五　あゝ代物は川口だが、極く古いだけ賣れようよ。

ぐづ　それぢやあやつておくんなせえ。

松五　承知しやした。

ト荷箱の中より鞴其外鑄掛道具を種々取出し、小さき腰掛に腰を掛け、足の指の股へ鞴の棒をはさみ、鞴を押しながら、

屑屋さん、この節は儲かりますかね。

ぐづ　どうしてお前、日に四百か五百儲けた分にやあ、わたしどもは嚊に餓鬼だから、なかなか活計が

つきませぬ。

松五　ほんにこの諸式の高いのは貧乏人殺しだ。老人ぢみたことを言ふやうだが、もう一遍どうか往時のやうな世の中にしてえものだ。

ぐづ　わつちなども餓鬼の中親父の話に聞いて、子供心にも覺えてゐますが、大そう物は安く錢も儲かつたといふことだが、その時分でも世の中はまだよかつた、その證據には往時から見ると、今の人間は大そう小さくなつたといふことだ。

松五　はつくしよ、(と嚔をする。)

ぐづ　お前風邪を引きなすつたね。

松五　風邪ぢやあねえやな、おれが前で人間が小せえといふのは、禁句だわな。

ぐづ　いや、こりやあとんだ粗相を言つた。然し、この諸式の高いにしちやあ大そう人は出るね。

松五　そりやあ今日は二十四日だ、淸正公樣に丁度庚申を持込んだもんだから、ちつたアそのせゐもあるだらうよ。

ぐづ　なるほど今日は淸正公樣だな、それぢやあ歸りにちよつとお參りをして行かう。

松五　お前お宗旨と見えるね。

ぐづ　大のかたまりさ。

松五　おれとは反が合はねえな。

ぐづ　なぜね。

松五　わつちやあ門徒だもの。

ぐづ　はあ、それぢやあ首と耳とに珠數をかけるね、然し門徒宗の者は皆工面がいゝといふから、定めしお前工面がよからう。（ト常談のやうに言ふ。）

松五　そりやあ看板に僞りなし、鞴の向うづらで、どうやらかうやら息が通つてゐるばつかり、

ト兩人顏を見合せ、

兩人　はゝゝゝ。（ト笑ふ。）

松五　ほんにかうしてお互ひに、天秤棒を肩へあてゝ日がら一日稼いでもこれでやつと喰ふのがすうすう、またさうかと思やあ年が年中懷手で金を儲け、遊んで暮す人もあり、其の身の果福とはいふものゝ、同じ人間に生れながら、思へば意氣地のねえことだ。

ト仕事をしながら、少しぢつとなる。

ぐづ　然しながらさう思ふとこちとらは、生きてゐるのはべらぼうらしい譯だが、こゝがあの心學の歌

にある通りさ、上見れば及ばぬ事の多かりき、笠着て暮せおのが心に、これを又蜀山が、下見れば及ばぬ事の多かりき、上見て通れ兩國の橋、なんと洒落たものぢやあないか。見なせえその通りだ。

トこれにて松五郎鐵瓶を手に持つたまゝ首をさしのべ、川の中を見て思入あつて、

松五　なるほど、橋から下を見りやあ、涼しくなつてもまだ川に幾艘となく屋根船で、藝者を入れてあの騷ぎ、こちとらの身にとつちやあ及ばねえことばかりだ。

ト川の中へ思入あつて、癪にさはりしこなしにて、思はず持つた鐵瓶を投り出す、ぐづ八びつくりして周章て取上げ、

ぐづ　とんだことをするぢやあねえか、鐵瓶が破れらあな。

トこれにて松五郎心附き、

松五　おゝ、ついうつかりと。鐵瓶が出來ましたよ。

ぐづ　出來たら出來たで手へ渡してくんなせえ、すんでのことに鐵瓶一つ玉なしにする所だ。

ト口小言を言ひながら、財布から天保錢を二枚出して、

投り出した箇條に、一二百でまけてくんねえ。

松五　えゝ、いくらでもようござります。

ぐづ　いや氣前のいゝ鑄掛屋さんだ。（ト言ひながら荷を擔ぎ、）屑はごぜえ〳〵。

ト呼びながら下手へ入る。松五郎思入あつて、

松五　あゝ、どう考へて見てもつまらねえ、どれ早くしまつて歸らうか。

ト荷を片附にかゝる、この時上手船の内にて島屋文藏の聲にて、

文藏　いゝ、こう、秋の日は逆上せてならねえ、ちつと障子を明けちやあどうだ。

お咲　氣晴らしに、よろしうござんせうわいな。

ト流行唄になり、船の障子を引拔く、と内に島屋文藏、羽織着流し、野暮なる田舎客の打扮、お咲派出なる姿の打扮にて、文藏に酌をしてゐる、船の中よりお咲の母お虎婆あ、下女お榮船の艫へ出て、船頭の〇□に向ひて、

お虎　船頭さん、ちつとお相手をしようかね。

〇　さあ〳〵お母さん、一つお上んなせえ。

□　それに船の中ぢやあお暑うござりませう。

お虎　いやも、たまらないよ。

お榮　それにレコの傍では、窮屈でなりませぬわいな。

ト親指を出す、この中お虎茶碗にて酒を呑んでゐる、文藏見て、

文藏　お母あ、又そつちへ附込んだの。

お虎　ちよつとお相手をしたばかりでござりますよ。

文藏　そつちにや何も肴があるまい、何ぞさういつてやればいゝ。

お虎　なあに、お肴はなくつても、御酒さへいたゞけばようござりますよ。

文藏　肴がなくて酒が飲めるものか、待ちねえ、肴をやらう。（ト紙入より金を出し、四個紙にひねりて、）これを皆々にやつてくんな。（トお咲に渡す。）

お咲　お母あ、旦那から、（ト各自へわたす。）

お虎　おやお氣の毒な、お止しなさればよいに、（トひねつて見て、）これは結構なお肴だ、櫻鯛四つづゝ、

お榮　おばあさん、旦那へお禮を申さうぢやありませぬか。

お虎　ほんになう、あんまり嬉しいので、肝腎のお禮を申すのを忘れてさ、年を取るとこれだからいけないよ。（ト船の中へ向ひ、）もし旦那、唯今は大きに、

四人　有難うござりまする。

文藏　いやお母あ、お前には又別段にどうかするから、まあそりやお座並のことだから、不承しておくんなせえ。

お虎　とんだことをおつしやりますよ、娘がお世話になつてをるので澤山でござります。お咲やお前からもよくお禮を申してくんな。

お咲　あい、そりやあ申しまするわいな。

お虎　おいらはちよつとこの間に、回向院のお開帳へおまゐりをして來るよ。

お榮　この節、回向院にお開帳はありはしませんよ。

お虎　えゝもこの女は氣の利かねえ、いやなに、昨日から始まつたとよ。

お榮　おや、さうでござりますかえ。

お咲　そんなら行つて來なさんせいな。

お虎　それぢやあおいらは行つて來るから、お前も後で、

お咲　え、

お虎　いやなに、歸りは遲くても案じなさんな。旦那ちよつとおまゐり申してまゐりますよ。

文藏　御信心だね。

お虎　年寄はこれが樂しみでござります。
船頭二人　うまく言ひなさるぜ。
お虎　えゝやかましい。さあ、皆々一緒に來なよ。

トお虎先にお榮、船頭兩人附き、棧橋より上手へ入る。この中松五郎は荷を片附け鞴の火壺を鋏にて挾み、川の傍へ來り水をすくつて火を消し、手など洗ひながら船の中の樣子を見てゐる。船の中には文藏四人の後を見送りて、

文藏　いやお母あも食へない代物だ、いゝおつウ幕を切つたな。
お咲　あなたがあんまりお眞面目だからでござんすわいな。
文藏　なに眞面目なことがあるものか、眞面目でないからおぬしにも、つい斯うやつて惚れたのよ。
お咲　そりやあなた、ほんたうでござりますか。
文藏　いや、疑深いことを言ふ女だ。然し、馴染の薄いおれのことだから、さう思ふのも尤もだ、そんならばかうしよう、おぬしがほしいものがあるなら、何なりと金には構はぬから、遠慮せずに言ふがよい、これが惚れたたしかな證據だ。
お咲　それは有難う存じまする、左樣ならば旦那、どうかわたくしは頭のものがほしいと、思うてをり

ますする。

文藏　そりやあ易いことだ、（ト胴巻より金を出してお咲にやり、）これでおぬしが好きなのを買ふがいゝ。

ト　お咲金を取つて見て、

お咲　いゝえ、旦那、このやうには、

文藏　はて、殘つたら芝居でも見やれ。

ト　お咲の手を取らうとする、この中松五郎は荷を擔ぎ、橋の上よき所まで來り、始終船の中へ思入あつて、

松五　かう見たところが江戸ぢやあねえ、上州あたりの商人體だが、横濱でゞも儲けた金か、切放れのいゝ遣ひぶり、あれぢやあ女も自由になる筈、鍋釜鑄掛をしてゐちやあ、生涯出來ねえあの榮耀、あゝあれも一生、これも一生、

ト　つまらぬといふ思入。此の時花道揚幕の内にて、題目太鼓鳴る、松五郎これへ聞耳を立て、

あの太鼓は、清正公樣か。

ト　思入。文藏思入あつて、

文藏　おゝ、二十四日はたしか庚申、

お咲　今夜は寐ると盗人の、

松五　こいつあ宗旨を、

ト思入あつて鑄掛の荷を川へ打込む。どんと水の音、これにて兩人びつくりして飛び退く。松五郎は橋の上にて高欄へ片臂かける、双方見合つて木の頭、

替へにやあならねえ。

ト下を見込む、下よりは兩人上を見上げる。この仕組よろしく、

ひやうし幕

二幕目

本町近江屋の場
同森戸屋店の場
同新道妾宅の場

〔役名＝鑄掛松、島屋文藏、花屋佐五兵衞、刀屋手代半七、番頭五郎兵衞、道具屋與市。圍ひ者お咲、刀屋娘お花、刀屋後家おくぼ、下女お桑、刀屋下女おきよ、お虎婆あ、其他。〕

（街道の場）＝本舞臺三間　後黒幕、彼方一面玉椿の垣根、上の方へ寄せて片附し葭簀張りの出茶

屋、床几など積重ねあり、下手に松の立木。こゝに茶飯屋ぬく藏下の方へ荷をおろし、盆の上へ丼を載せしを持ち、立ちかゝりなり、よき所にならずの三次頬冠りをなし、外に下馬三尺帶の悪漢の打扮の者○□の二人、何れも下にゐて茶飯を喰つてゐる、この模樣時の鐘合方にて幕明く。

ぬく　へい、お替りでございます。

○　茶飯屋さん、大そう冷てえの。

ぬく　宵に炊いたのだから、冷めましたらうよ。

□　贅澤なことを言ふなえ、年中冷飯ばかり喰つてゐるくせに。

○　よしてくれ、手前ぢやアあるめえし。（トこの中三次茶飯を喰ひながら）

三次　おい茶飯屋さん、おらあもう片替りだよ。

ぬく　畏まりました、（ト丼を取る。）

□　兄い大そういけるなう。

三次　こりやあ負けつ腹だ。

○　違えねえ、今夜のやうに外れるのも珍らしいぢやあねえか。

ぬく　（茶飯を持來りて、）へい、片替りでございます。

三次　（取って喰ひながら、）何でも虎の野郎が持つて來やあがつた賽つぶは、怪しいと思ふぜ。

□　馬鹿ァ言ひねえな、虎は勿論のこと、あの顏の中でお前を白痴にするものがあるものか。

○　そりやあこちとらのやうな白痴の言ふことだ。

三次　やつぱりおれが目の立たねえのかな。

□　ヽヽへまな時にやあかういふものよ。

三次　何ぞかう旨え仕事がなあっ。（ト兩人と顏見合せて思入、ぬく藏前へ出て、）

ぬく　有難う存じます、皆さんがそのやうにうまい／＼とおつしやつて下さります。

三次　何をいふのだ、お前の茶飯を褒めたのぢやねえやな。

ぬく　ほい、これはしたり、（ト控へる。）

三次　いや、とんだつんぼう話しだ。

ト時の鐘、花道より花屋佐五兵衞胡麻鹽鬘、穢ない手拭を意氣地なく冠り、尻端折、繼布のあたりし股引にて、草鞋を穿き出來り、花道に留り、

佐五　あゝ夜明方といふものは寒いものだ、老人の身體にはめつほうこたへる。（ト言ひながら舞臺を見て、）おや／＼六つだと思つて來て來たが、まだ夜明しの茶飯屋がゐるところを見れば、今しがた打つた

のは七つかしらぬ。物騒だといふに、こんな物を持つて、あゝとんだことをした。何にしろあそこへ行つて、何時だか聞いて見よう。（ト舞臺へ來り、）もし茶飯屋さん、今しがた打つたのは、何時でございますね。

ぬく　ありやあ七つでございます。

佐五　それぢやあ一時間違へたのか。

ぬく　はあ、時を違へなさつたのかえ。

佐五　さあ、聞いて下さいまし、朧月で薄明るいのを夜明だとばかり思つて出かけました。

ぬく　さうでございましたか、然しお年寄といふものは、お前さんには限りませんよ。斯う申すと惡うございますが、どうもこの年を取んなさると氣が短かくなるに、おまけに早く眼が覺めるといふものだから、得てこんなことはありがちでございますよ。

佐五　いえ〳〵こりやあわたしの惡いのではございませんよ、さうおつしやるなら何をお隱し申しませう、わたくしは本山へ祠堂金を持つてまゐりますのだが、それは〳〵お住持が大の性急で、いえもうこんなことは今日に限りませぬ、度々でございます、それ故唯今などもう六つだ〳〵と申しますから、うつかり出かけて來ましたが、七つとあれば歸りませうかしらぬ。（ト考へてゐる。）

ぬく　お前金を持つてゐなさるなら、この節は大そう物騒だから、夜が明けてから行きなさるがいゝぜ。

佐五　左樣でござりますな。（ト戻らうとして、思入あつて、）然し、また出なほすも面倒か。

ト又立留る、この中三次は金の事を聞き、〇□と顔を見合せうまいといふ思入あつて、この時少し前へ出て、

三次　もしおとつさん。夜は短かくなつたから、もう直に明けます、わたし共も職人だがちつと場所が遠いゝから、大概早く出かけて來るがね、あんまり今朝は早過ぎるから、もうちつと明るくなつて行かうと思つて、先刻からこゝにかうしてゐるところさ。それぢやあ丁度いゝや、少しの中の辛抱だ、お前もこゝへ來て話しなせえ。その中にやあ夜が明けらあ。

佐五　それはよいお方がおいでなされました。左樣ならお邪魔樣ながら、少しの中御厄介になりませうかな。

三次　さあ〳〵、こゝへ來なせえ〳〵。

佐五　御免下されませ。（ト言ひながら三次の傍へ來り、下にゐる。）

〇　おい棟梁、もう夜が白んで來たやうだぜ。

三次　よつほど夜はつまつたから、ぞうさねえ。

口　あんまり明るくならねえ中に、やツつけようぢやあねえか。

三次　これさ、さう急いで行つたつて、まだ材木が廻らねえよ。（トぬく藏へ顋で思入。）

口　なるほど、それぢやあもうちつと待たうかな。おい〳〵茶飯屋さん、まだ仕舞はねえのか。

ぬく　もう二三膳でしまひになります。

三次　おとつさんどうだえ、お前茶飯を一ぱいやんなさらねえか。

佐五　いえもう有難う存じますが、わたくしはまだほしうござりませぬ。

三次　御馳走と申すとお恥しいが、わたしが上げるのだから、決して遠慮をなさいますな。

佐五　なか〳〵御遠慮はいたしませぬが、實はまだお腹がすきませぬ、その替りに一服いたゞきませう。
（ト腰の煙草入を取り、煙草をつぎて、）茶飯屋さん、一つ火を貸して下さい。

ぬく　さあ、お附けなさいまし。
ト佐五兵衛行燈の灯にて煙草を吸附け、こちらへ來り三次に向ひて、

佐五　あなた一服上りませぬか。

三次　一つお借り申しませう。
ト懐より叺煙草入を出し、煙草をつぎ、兩人吸附けながら、佐五兵衛三次の裝を見て胡散な奴だと

いふ思入あつて、あわてゝ吸殼をはたき煙管をしまひ、手早く煙草入を腰に提げ、

佐五　わたくしはちとまだ外に用事もござりますから、自由ながらこれでお別れ申しまする。

ト行かうとするを三次留めて、

三次　まあ待ちなせえな、それぢやあわつち共がそこらまで送つて進ぜませう。

佐五　いえ、あなた方も御生業を抱へてゐらつしやること、それに年寄といふものは足がのろうござりますから、若いお方様にはこぢれつたいものでござりますから、どうぞお構ひなされて下さりまするな。

三次　わたし共も隨分足ののろい方だから、ようございますよ。

佐五　どうぞもうお構ひなされて下さりまするな、左樣ならお先へまゐります。

ト言ひ捨て足早に上手へ入る。三次見送りて、

三次　あの親父はよつぽど氣の短い奴だ。

○口　逃がさねえやう、後から直に、

三次　えへん、（ト兩人に目くばせなし、）茶飯屋さん、いくらになるえ。

ぬく　へい、三百二十四錢いたゞきます。

三次　剩錢は入らねえ。(ト錢を渡す)。

ぬく　それは有難う存じます。

三次　さあ、早く仕事に出かけよう。

○□　急ぎねえ〳〵。

ト三次先に○□足早に上手へ入る、ぬく藏後を見送りて、

ぬく　剩錢を貰つて惡く言つちやあ濟まねえが、何だかをかしな素振の奴等だ、盜賊ぢやあねえかしらぬ、どうも險難だ、賣溜でも取られねえ中、どれ早く仕舞つて歸りませう。(ト荷を擔ぎ)餡かけ豆腐、茶飯屋でございい。

ト呼びながら下手へ入る、これにてこの道具廻る。

(本町通り近江屋の場)――本舞臺三間上手に足場をかけし土藏、これに續き正面立派なる商人店の屋體、前側へ一面に戸をおろしあり、總て本町邊り夜の體。時の鐘にて道具留る。と上手より番太△割竹をたゝきながら出來り、

△　火の廻り〳〵。(ト呼びながら下手へ入る。と花道の揚幕にて佐五兵衞の聲にて)

佐五　誰ぞ助けて下され、泥坊だ〳〵。

ト時の鐘ばた〳〵になり、花道より以前の佐五兵衛逃げて來る、後より以前の三次、〇□兩人と共に
追ひかけ出て來り、直に舞臺へ來り、佐五兵衛を捉へる。

あゝどうぞ御免なされて下さいまし、御免なされて下さいまし。

三次　えゝやかましい、靜にしねえとたゝき殺すぞ。

佐五　はゝい。

ト顫へながら蹲まる、〇□は舞臺上下に別れ、人でも來はしないかとの思入にて窺ひゐる、三次佐五
兵衛に向ひて、

三次　さ、汝が持つてゐる祠堂金をこゝへ出せ。

佐五　いえ、何のわたしが左樣なものを、

三次　べらぼうめ、いくら不知ア切つたつていけねえや、道中筋の駕舁ぢやあねえが、こちとらが一目
睨んだら、いくら懷にあるといふなア知つてゐらあ、それに今祠堂金を持つてゐると、汝が口か
らぬかしたぢやあねえか。

佐五　え、（ト懷を押へる。）

三次　それ見やあがれ、汝達つて出しやあがらねえと、たゝツ殺してふんだくるぞ。

ト立ちかゝるを佐五兵衞居ながら留めて、

佐五　あゝもし待つて下さいまし〳〵、うつかり言うたがこつちの過り、さう御存じの上は何をお隱し申しませう、實はこゝに、はい、百兩持つてをりまする。

三次　なに、百兩。（ト思入。）

佐五　さゝ、その百兩はな、こりや本山へ屆けまする祠堂金、わたくしは使ひの者、自分の金なら是非もござりませぬが、人の物をお前樣方に持つて行かれてしまひましては、わたくしもよい年をして取られましたと言うて戾られませうか、どうも死なねば言譯が立ちませぬ、それぢやによつてお慈悲でござります、年寄一人助けると思召して、どうぞこれは見脫して下さりませ、もし、をがみまする〳〵。（ト手を合して三次を拜む。）

三次　汝が死なうがくたばらうが、それをこつちで構ふものかえ、ぐづ〳〵言はずと金を出せ。

佐五　それはあんまりお情ない。

三次　えゝ、こぢれつてえ。やい、手前達も手を貸せ。

○□　合點だ。

ト○□の兩人佐五兵衞を引附け、三次佐五兵衞の懷より金の入りし財布を引出す、佐五兵衞やろまいと焦り、

佐五　助けて下されく。（ト言ふを構はず財布を引取り）

三次　勝手にそこで怒鳴りやあがれ。

ト言ひさま佐五兵衞を蹴倒し、三次先に○□の兩人も逸散に花道へ走り入ろ、佐五兵衞直に起上りて、

佐五　泥坊々々。

ト言ひながらこけつ轉びつして、花道よき所まで追つて行き、花道を見、思入あつて、

あゝもう何處へ逃げて行きをつたか、影も形も見えなくなつた。よし又こゝらにゐたところが、年寄一人に先方は三人、なかく取戻す力もなし、とあつてこの儘家へは歸られず、あゝこりやひよんな目に遭ふものだなあ。

ト言ひながら段々舞臺へ戻つて來り、有合ふ石に腰をかけ腕組をなし、ぢつと考へてゐる。この時少し凄味の合方、時の鐘になり、頰冠りをせる鑄掛松事盜賊となりし鑄掛屋松五郞、家根傳ひに土藏の足場を賴り下へおりようとして邊りを窺ひ、佐五兵衞に眼を附け、足場の中途の段に身を潛め、有合

ふ苦をそつと被つて窺ひゐる。この時佐五兵衞顏を上げ、ほつと思入あつて、
どう考へて見ても、死ぬより外に思案はない、然しおれは死ぬのは構はぬが、可哀さうなは倅の與之助、雪の下の森戸屋へ奉公にやつてもう六年、これまで一度この親へ惡い耳を聞したことのない孝行者、年寄つた子は一倍可愛いとやら、殊にほんの一粒者、どうぞ彼兒が辛抱しあげ、お見世なと出して貰ひ、孫の顏なと見て死にたいと願うてゐたも悉皆無駄事、これもあの泥坊に御本山へ納める祠堂金の百兩を取られずば、こんな思ひはあるまいに、あゝ先行のよくない奴等ぢやなあ。
ト涙ながらに、恨めしさうに花道の方を見て、思入あつて心附き、
いや／＼、こんなこと言うてゐる隙に、夜が白んだら死におくれる、この間に早く、さうだ／＼。
トこの中どうして死なうといふ思入にてうろ／＼としてゐる中、落散りある繩足へからまる、佐五兵衞これを取上げ、土藏の足場へ思入あつて頷き足場の側へ來り、有合ふ石を臺にして足場丸太へ繩をかけ、罠にしてしつかり結ぶ。この中足場の上にて鑄掛松可哀さうにといふ思入あつて、始終の樣子を見てゐて、この時懷より白鞘の懷劍を出して拔き、刄をそつと件の繩にあて窺ひゐる、佐五兵衞はこれを知らず、
あゝこゝの家へは、お氣の毒ぢやな。

卜堪忍してくれとちよつと拜むことあつて、件の繩を首にかけ、

南無阿彌陀佛。

卜首をくゝらうとする、この途端に松五郎上より懷劍にて繩を切る。これにて佐五兵衞どつさりと落ちて尻餅をつき、びつくりしながら又立ちかゝる。こゝへ松五郎上より飛下り、あわてる佐五兵衞を留めて、

松五　いゝや死ぬにやあ及ばぬ、まあ待ちねえ〳〵。

佐五　いゝえ、どうぞ放して下さりませ。(卜焦るを留めて)

松五　はて、情の強い、待てといつたら、(卜無理に佐五兵衞を下にならせ)まあ待ちねえな。

佐五　御親切に留めて下さるのは有難うは存じまするが、どうでも死なねばならぬと申す、その譯は、

松五　あゝいや、そりやあ聞くにや及ばねえ、樣子は上で聞いてゐたが、何も金せえありやあ死なずとも濟むぢやあねえか。

佐五　あなたその金があります位なら、

松五　さあ、それだからその金を、おれが貸してやるからいゝぢやねえか。

佐五　え、そんならこなたが大まい百兩、(卜びつくりする松五郎懷より百兩包みを出し)

松五　これをやるから、決して無分別な事をしなさんなよ。

ト佐五兵衛の前へ置く、佐五兵衛これを見て呆氣に取られてゐたが暫くして兩手を突き、

佐五　これはまあどなた樣か存じませぬが、まことに思召しのほどは有難う思うてはをりまするが、これが僅な金ではなし、大まい百兩といふ金を、何の縁も由縁もない知らぬお方にお貰ひ申す、どうも謂がござりませぬ。わたくしもこんな災難に遭ひまして、非業な死狀いたしまするも定業とあきらめてをりますれば、どうぞお留めなされずと、後生に死なして下さりませ。

トちよつと立ちかゝるを松五郎留めて、

松五　又しても情の強い人ぢやあねえか。こう老爺さん、よく胸へ手をあてゝ考へて見なよ、今上でおれが聞いてゐたに、お前にやあたつた一人の息子があるぢやあねえか。そりやあ死んで行く身になつたらば後のことは知るめえが、一人の親に死別れた息子の心になつて見なせえ。それにまた疊の上で死ぬことか外聞の惡い首縊り、明日からその子が人中へ顏向けが出來やあしねえぜ。そこらこゝらを考へて決して死なうと思ひなさんな。これさ、おい、お前倅は可愛かねえのか、あんまり邪慳な人ぢやあねえか。（ト思入、佐五兵衛涙を拭ひて、）

佐五　それも考へぬではござりませぬが、何を申すも金のこと故、

松五　さあ、それだから此金を持つて行きねえ。
佐五　そのやうにまでおつしやつて下さりまするもの、左樣ならお言葉にあまへまして、お貰ひ申しは申しまするが、何と申しても大金のこと、たゞお貰ひ申すといふ譯にはまゐりませぬが、いつたいあなたのお宅は何處で、御生業は何をなされまするな。
ト、これにて松五郎ぎつくり思入あつて、
松五　なに、おれが生業かえ。
佐五　はい。
松五　おれが生業は、ヽヽレコよ。
ト人差指を曲げて見せる、佐五兵衞見て、
佐五　あなたの生業は、レコ、（ト同じやうに人差指を曲げて、ちよつと考へ）釣針屋さんでございまするか。
松五　なアにさ、假名で書きやあ、ヽヽヽヽどろばうよ。
佐五　えゝゝゝゝ、（トびつくりする。）
松五　これさ、何もそんなにびつくりすることはねえ、濱の眞砂と世の中に種の盡きねえ盜人だが、其

金を貸したつて、翌が日おれが喰え込み、海老責にかゝつてたゝかれても、とまりは知れた身の兇狀、人を抱込むなんぞといふそんなけちな根性ぢやあねえ。案じずとその金は持つて行きなせえ、おれもこんなろくでねえ根性だから、お前のやうな父さんへ苦勞をかけた佛への、こりやあ恩返しと思つてお前を助けるのだ。その替りにやあおれもお頼み、始終は斬られる身體だから、お前がおれへ恩返し、どうぞ今日を命日に一遍の回向をしてくんなせえ、そればつかりがこなたへ頼みだ。（ト少し悄れて言ふ、佐五兵衞思入あつて、）

佐五　そりやもうおつしやりませいでも、命の御恩のあなたのこと、回向はきつと怠らず朝晩にいたしまする、それにまたお住持樣へも此の事を打明けまして、

松五　あゝこう／＼、そりやあ止しなさるがいゝ。堅いお寺のことだからうつかり話したその後で、そんな不正の金ぢやあ打捨つておけねえと、また訴へるのすべつたの轉んだのと、しちむづかしいことでも言はれると、却てお前の爲にならねえから、決してそりやあ言ひなさらねえがいゝぜ。

佐五　なるほど、こりやあ大きにそこもござりまするな、左樣なら誰にも申さず此のお金はお貰ひ申しておきます、有難う存じまする。（ト金を取つていたゞきて納ひ、思入あつて、）ときにまあ、此のやうな御恩にあづかりまして、お名前も知らいでは濟みませぬ、どうかお名をお聞かせなされて下

さりませ。

松五　いや、お前の名も聞かにやあおれが名も言ふめえ、何故ならこちとらの生業はつまらねえ所から足の附くものだから、もしそんな事でもあつた日にやあ、お前も寐覺が惡からうし、第一はおれがつまらねえから、言はず語らずお互ひに、ちつとでも長生をする算段しよう。

佐五　それではどうも濟みませぬなあ。（ト思入。この時烏笛。松五郎思入あつて、）

松五　おゝもう夜明だ、老爺さんおれも行くから、お前も早く行きなせえ。

佐五　左樣ならもうおいでゞござりまするか、これは大きに有難うござりました。お蔭樣で命一つ拾ひました。（ト松五郎を見て感心の思入あつて、）あゝ同じ御生業でありながら、年寄の物を無慈悲に持つて行く奴もあり、またあなたのやうなお情深い方もあり、

松五　そりやあ世の中は、千差萬別とやらさ。

佐五　ほんに、同じお仲間でも、

松五　ぴん〳〵からきりまで高下があるのよ。（トちよつと思入あつて、）いや然し、盜人の手前味噌は見得にもならねえ。それぢやあ老爺さん、

佐五　はい、

松五　達者で暮しねえよ。

ト思入あつて松五郎は花道へ入る。佐五兵衞は伏しをがみて、

佐五　あゝ有難うござりました。この御恩は決して忘れはいたしませぬ、これからは一生懸命あなたのお捉へにならぬやう、わたくしが信心をいたしてをりまする。あゝ盗人にはをしいお方ぢやなあ。

ト感心のこなしにて花道を見ながら、ぶら／＼と上手へ行かうとして、切れたる繩が足へ絡まるのを取上げ見て、身顫ひをなし繩を下へ打附ける、これを道具替りの知せ、

死神が放れたさうな。

トこなし、烏笛早い合方にて、この道具廻る。

（刀屋「森戸屋」の場）——本舞臺三間、正面商人店頭の道具、上の方の揚戸はおろしたるまゝ、下手の潜り戸だけ明けあり、下の方黒塀、この前に用水桶、こゝに刀屋番頭五郎兵衞、着流しにて駒下駄を穿き、前へ手拭をはさみ片手に楊枝箱を持ち、楊枝を使つてゐる。丁稚長松　草箒にて表を掃いてゐる、總て雪の下刀屋の體、夜明の模樣、烏笛、合方にて道具留る。

五郎　これ長松、何故こんな無精をするのだ。これ見るがいゝ、こゝだけ眞黒に掃殘つてゐるわ。

長松　そりやあお前さんの影法師だよ、耳ばかりかと思つたら眼まで惡いなあ。

五郎　又そんな憎まれ口を利きやあがる、早く掃除をしまつて汁の實でも買つて來い。
長松　もう買つて來ましたよ。
五郎　それぢやあ早く行つて、水でも汲んでやれ。
長松　（掃いてしまつて、）おさんどんの最屓ばかりしやあがる、助兵衞め、
　　ト少し浮いた合方になり、長松は言捨てゝ下手へ入る、この中花道より前幕のお咲派出なる着附にて吾妻下駄を穿き、後より下女のお榮附き出來り、直に舞臺へ來て五郎兵衞を見て、
お咲　お早うござります。
五郎　これはお咲さん、大そうお早く、どちらへおいでのだえ。
お咲　ちよつとお詣りにさんじます。
五郎　そりやあ御信心だが、一日用もあるまいから、ゆつくりと出かけなさればいゝに、
お榮　それをいくら申しても、朝の中お詣りをせぬと、氣になるとおつしやりますわいなあ。
五郎　さう心にかけて信心をしなさるのは、旦那の身體を案じてと見える。さうして旦那は、まだお歸りなさらないのか。
お咲　まだ戻りませぬ、それにたつた一度便りのあつたぎり、その後沙汰がありませぬ故、どうなされ

たか尋ねて上げようとは思うてをりますが、もう大概戻られませうわいな。

五郎　何にしろ旦那のお歸りがなくては、夜分なぞはさぞお淋しからうね。（トいやらしく言ふ。）

お咲　いえ、夜分は近所のお方が遊びに來て下さるので、大そう賑やかでございますわいな。

五郎　はあ、張り半分だな。

お榮　皆お上さん達でございますわいな。

五郎　さう聞いて安堵した。

お咲　御常談ばかりおつしやりまするわいな。

お榮　番頭さん、ちつと夜分お遊びにいらつしやいましな。

五郎　是非行きますよ。

お咲　左樣ならば、

ト二人は上手へ入る。この以前お咲の舞臺へ來りし頃、下手より松五郎深く頬冠りをなして出來り、お咲を見ていゝ女だといふ思入あつて、下手用水桶の蔭へ身を寄せ、始終を聞いてゐる五郎兵衞はお咲の後を見送り、こなしあつて、

五郎　あゝ美い女だなあ。どうかして彼女を一晩しめたいものだが、然しこりやあ出來さうなわけだ。

今彼女が素振りを見るに、おれが顔を横目でぢろりと見ながら、にこ〳〵笑つてゐたやうだが、して見るとおれの顔も、よつぽどきれいだと見える。（トちよつと顔を撫で、）ほい、まだ顔を洗はなかつた。

ト潜戸の內へ入る。後に松五郎川水柳の影より延上り見て、誰もゐぬ故出來り上手へ思入あつて頷き、窺ひながら上手へ入る、後しらせなしにこの道具半分ほど廻る。

本舞臺三間上の方に木戸、正面欄矢來、この前に角材木一丁ねかしあり、側に犬二匹寢てゐる、この模樣合方にて道具留る。と、花道より噺家の圓八合羽尻端折り、脚絆草鞋にて、手に菅笠を持ちて出來り、花道にて、

圓八　あゝ睡い〳〵、場末の夜席はこれがいやだ、ちつと終演がおそくなると、長い田甫を越して歸るのが厭だから、昨夜も宿へ引かゝつて、あんまりおそく登樓つて氣の毒だから、女にお臺場やつたらば、その逹引で今朝の睡いつたらありやあしねえ。その上昨夜天氣がぐやだつたから席亭で菅笠を借りて草鞋がけで出かけて來たら、足は痛し、睡さはねむし、こんな苦しいことはねえ。（ト言ひながら舞臺へ來て、角材木を見て、）丁度いゝ、この材木の上で足休めながら一寢入りやつて行かう。

ト捨ゼリフにて材木の上へ寐る。替つた合方になり上手木戸の内より以前の松五郎出來り、圓八の寐てゐるを見て思入あつて頷き、そつと側へ行き寐息を考へ、よしといふ思入あつて、そつと圓八の合羽を脫がせ、脚絆草鞋を取り菅笠を持ちて此方へ來り、

松五 御ゆるりとお休みなせえ。

ト肩で笑ひ下手へ入る、この時寐てゐた二疋の犬起上り、一疋は圓八の口の邊を舐め、又一疋は踵の邊を舐める、圓八現の思入にて、

圓八 あゝこれなにをするのだ、いゝ加減にふざけておかねえか、しつッこいにも程があらあ、止しねえといふに、

ト犬を突飛す、これにて犬圓八の向臑へ嚙附く、圓八びつくりして起上り、

あゝ、痛え〳〵。

トこれにて犬は逃げて入る、圓八足を押へよく〳〵見て、

おや、脚絆も草鞋もねえ、こりやあ大變だ、損料で借りた合羽から菅笠まで持つて行かれた。然し、裸にされねえのがめつけものだ、とんだ災難に遭ふものだ。あゝ痛え〳〵。

ト向臑を手拭にて結へ、跛を引きながら上手へ入る。後やはり報せなしにこの道具廻る。

本舞臺元の店頭の道具になる。前側の戸を明け、二重正面納戸口、上手は刀、脇差などを載せし棚、この下間平戸の戸棚、下手鼠壁、これに帳面狀差しなどの書割。總て刀屋店頭の模樣、よきところに以前の番頭五郎兵衞帳面を調べてをり、若い者兩人、○□は采配にて刀の棚を拂つてをり、□は雜巾がけをしてゐる。この見得稽古唄合方にて道具留る。

五郎　これ、もう大概にするがいゝ、埃がしてならねえ。(ト袖を拂ひながら言ふ。)

○　はい、もうよろしうございます。(ト控へる。)

五郎　こう忠藏や、掃除がよけりやあ、ちよつと甚兵衞が所へ行つて、此間の鞘の塗を急いで來て下せえ。

□　畏まりました。(ト下手へ入る。)

五郎　貴樣おれが店にゐるから、早く行つて飯を食つて來るがいゝ。

○　左樣なら、お先へいたゞきます。(ト五郎兵衞へ辭儀をして奧へ入る。)

五郎　これ、また汁の實ばかりむしやうによそふなよ。あゝ世話のやけた奴等だ。

ト帳を調べてゐる。この中花道より松五郎件の脚絆草鞋を穿き菅笠を持ち出て來り、直に舞臺へ來り、

松五　はい、御免なさいまし。

五郎　いらつしやいまし、何ぞ御用でござりまするかな。
松五　安い道中差を一本お見せなすつて下さい。
五郎　左様なら、仕入物でよろしうござりませうな。
松五　ほんの犬脅しでござりますから、何でもよろしうござります。
五郎　畏まりましてござります。（ト戸棚の中より脇差を二三本持ち出來り。）大概この位なところでよろしうござりませう。
松五　これぢやあよすぎる位だ。
ト兩人捨ゼリフにて脇差を見てゐる。と上手より以前のお咲、お榮を連れて出來り、下の方へ行きながら五郎兵衞を見て、
お咲　さきほどはおやかましう、
五郎　いやお咲さん、今お歸りでござりますか、まあお話しなさいな。
お咲　有難う存じます。
お榮　まだ御飯前でござりますから、お急ぎなさいますわいな。
五郎　御飯はこちらで上げますから、まあ話しておいでなさいましな。

お咲　いえ、また上りますわいな。

ト言捨てゝ二人は花道へ入る。松五郎はお咲に目をつけてゐる。五郎兵衛は脇差を抜き持つたまゝ抜身へ顔をうつしながら、

五郎　まあいゝぢやあございませんか、お咲さん、ちよつとお話しなさいな、お咲さん〳〵。

ト夢中になつて呼びながら、段々前へ出て、持つたる抜身を松五郎の顔の前へ突出す。松五郎びつくりして、

松五　これさ、あぶねえわな。（トこれにて五郎兵衛心附き、）

五郎　へい、この位な所では如何でございますな。（ト松五郎の前へ刀をおく。）

松五　いや負けをしみな番頭さんだ。もし、そりやあさうと、今のはありやどちらのお上さんでございますね。

五郎　いえ、あれは圍ひ者でございますよ。

松五　へえさうでございますかえ。お家はこの御近所と見えますね。

五郎　直この先の横町で、角から三軒目でございますが、旦那といふのは上州の商人で、これはこの頃のことでございましたが、伊豆へ湯治に行かれまして、此間などもあちらから山葵を澤山持たし

て便りがござりましたが、何でもわたくしの思ひますには、ありやあ異見かと思ひまして、

トこれを聞き、松五郎頷き思入あつて、

松五　そりやあ何故ね、

五郎　はて、おれが留守に浮氣なことをすると、此のやうに澤山辛い目に合はせるといふ、判じ物かよ思はれます。

松五　茶番ぢやアあるめえし、(ト脇差を取り、)それぢやあ番頭さん、この方にしませうよ。

五郎　そちらなら二百疋にいたしておきまする。

松五　承知しました。(ト懐より額金を二つ出し、)金をよく御覽なさい。

五郎　(金を改め見て、)へいよろしうござります、有難う存じます、

松五　大きにおやかましうござりました。

ト件の脇差を差し、花道附際まで行き、花道揚幕の方へ思入あつて、

それぢやあ角から三軒目か。

五郎　え、

松五　いやなに、下緒はお前のところにやアあるまいね。

五郎　それは糸屋へいらつして下さいまし。

松五　知つてゐらアえ、間拔め、

　　ト少し小聲にて言ひ、思入あつて花道へかゝろ。この中花道より稽古所のお仙、粹なる打扮にて吾妻下駄を穿き、湯上り浴衣を抱へ、糠袋手拭を持ち出來り、花道にて松五郎と行合ひ、松五郎は花道を入り、お仙は舞臺へ來り上の方へ行かうとするを五郎兵衞見て、

五郎　もし〳〵お仙さん、ちよつと〳〵。

お仙　おや番頭さん、何の御用だか知りませんが、ちよつと一風呂入つて來ますから、歸りにして下さんせいなあ。

五郎　いや、手間は取らせないから、ちよつとこゝへかけておくれ。

お仙　何でござんすえ。（ト揚椽へかけろ、五郎兵衞こなしあつて、）

五郎　その用といふわな、お仙さん、今日はよいお天氣でござりますね。

お仙　常談を言つちやあいやでござりますよ。（ト立たうとするを引留めて、）

五郎　いや〳〵常談でない、大眞實、

お仙　何だか早くおつしやいなねえ。

お仙　笑ひはしないから早く言つておくんなさいよ。今の中お湯へ行つておかないと、また行けないからさ。（ト焦つたきこなし、）

五郎　そんなら言ふが、お仙さん笑つてはいけないよ。

五郎　あゝ、改まつては少し言ひ難い譯だぜ、もしお仙さん、お前の隣りのお咲さんね、

お仙　お咲さんがどうしましたえ。

五郎　どうか話は出來まいか。（トお仙の背をそつと打つ。）

お仙　なに、話とはえ、

五郎　これさ、お前も粹のやうにもない、取持つておくれといふことさ。

お仙　ほゝゝゝ。

五郎　それ〳〵、それだから笑つてはいけないと斷つておくのだわね。

お仙　笑ふまいと思うても、あんまりをかしいので、

五郎　え、

お仙　いえなに、をかぼれをしなさんしたのぢやな、

五郎　いやもをかぼれどころか深みへ入つて、首ッたけ惚れて〳〵惚れぬいたお咲さん、どうかお前の

働きで、あの子がうんと言ひさへすれば金錢には不自由させぬ。どうかお前の御工夫で得心させて下されば、無駄骨は折らせませぬ。もしお仙さん、この通りお頼み〳〵。

ト手を合してをがむ、お仙困りし思入にて、

お仙　そのやうにおつしやるなら話しては見ませうが、あゝいふ旦那のあることなれば、

五郎　さあ、旦那は旦那、わたしは間夫、蔭の者ならいゝぢやあないか。

お仙　ほんにまあ押の強い、いえなに、押手を強くわたしが行つて、どうか話して見ませうわいな。

五郎　それは忝ない。もし、お脊でも流しませうか。（トお仙の脊を洗ふ眞似をする。）

お仙　あれ、氣味の惡い、（ト立上る。）

五郎　もし、どうか何分、（トをがむ。）

お仙　とんだ仲人を頼まれたわいな。

ト唄になりお仙は上手へ入る。と花道より前幕の小道具屋與市出來り舞臺へ來て、

與市　番頭さん、今日は、

五郎　いやこれは與市さん、何ぞうぶなものでもありますかね。

與市　お前さんに向くものは何にもありません。そりやあさうと半七さんはお留守でござりますかね。

五郎　奥にゐるが、何ぞ御用かね。

與市　ちよつとお目にかゝりたいのでござります。

五郎　それぢやあ呼んで上げませう。（ト立上る。）

與市　これは憚りでござります。

ト合方になり五郎兵衛奥へ入ると、引違へて前幕の半七出來り、與市を見て、

半七　これは與市どの、ようおいでなされました、まあこちらへお上りなされませ。

與市　もうお構ひなされますな、さうしちやあなりませぬ。早速ながら半七さん、先達のお約束の短刀の後金、あまり長くなりますが、どうなさる思召しでござります。

半七　さあ、その事に就きわしもお前の所までちよつと行かうと思うてゐれど、店の事に隙がなく、大きに御無沙汰になつて濟みませぬ。

與市　そりやあ御用多でござりませうから、おいでなさらなくつてもようござりますが、何にしても後金を早くして下さいな、わたしの方も外へ賣れば直に金の取れるのを、達てとおつしやるから、わたしも達引でお前さんの方へ上げたのだ、それをかうべん〳〵と引つぱられちやあ、まことに迷惑でござりますから、手附の半金は待引けを立つてお返し申すから、どうぞ短刀は外へ賣らし

てお くんなせえ。

半七　さう言はるゝは尤もぢやが、もう長くとは言ひませぬ。わしが方にもたしかに金の出來る當があるのなれど、ちつと先方に取込があつたので、それ故延々になりましたが、それに就いて傳次の方からお前へ何も賴みはござらぬかな。

與市　話はありましたけれども、さう〳〵わたくしの方だつて待つちやあゐられないぢやあござりませぬか、またあれほどまでに言ひなすづて、今になつてもうちつと待つてくれぢやあ、あんまりわたくしを踏附にするといふものだ。

半七　いや、傳次とてもなか〳〵こなたを踏附にするといふ心ではなけれども、今も言ふ通り當にした金が少しおそうなつた故、こなたにも腹を立たして濟まぬけれど、こりやきつと出來るに違ひなければ、どうかもう一日二日のところを勘辨して下され。

與市　そりやあまあ今までさへお待ち申したものだから、一日や二日のことなら仕方もござりませぬから お待ち申しませうが、その替り今度間違ふとお斷りなしに、外へ賣りますが、そこは御承知でござりませうね。

半七　えゝも、そりや間違ひはござらぬわいの。

與市　それぢやあきつとようござりますね。
半七　よいといふ事を、
與市　今度間違ふと賣りますよ。
半七　間違ひはせぬといふに、
與市　何だか知れるものか、こんな間拔な話はありやあしねえ。（ト立上り）あまりといへば馬鹿々々しい。
ト口小言を言ひながら上手へ入る、後に半七ぢつと思入、この時奥にて、刀屋娘お花の聲にて「あれ母さま、御免なされませいな。」と聲し、ばた〳〵と足音して、島田髷、振袖娘にてお花逃げて出て來る。後より刀屋の後家おたれ、煙管を振上げ追ひかけ出來るを下女お大留めながら出來り、
お大　あゝもしお袋様、どうぞ堪忍して上げて下さりませいな。
たね　いゝや、うつちやつておくと彼女の爲めにならねえから、留めなさんな〳〵。
ト又立ちかゝるを、半七お花を圍ひ、
半七　これはしたりお袋様、店頭で見ともなうござります、まあお靜になされませ〳〵。
たね　そなたが彼女を庇やるだけ、猶々腹が立つてならぬ、うぬ、どうするか見やあがれ。

ト煙管を振上げるを留めて、

半七　わたくしだと申して、これが見てをられますものか。

お大　どうぞまあ下においでなされて下さりませいなあ。

ト兩人捨ゼリフにておたれをいろ〳〵に宥める、これにておたれ下にゐる。

半七　いつたいこれは、如何なされたのでござります。

たね　さあ半七聞いておくれ、このやうに背丈の延びた、たつた一人のこの娘、殊にわたしは生さぬ仲の義理があれば、どうぞして相應な所があつたらば、立派にして嫁入らさうと思うてゐたところ幸ひよい口があつたから、嫁にやらうといへば否の應のと我儘なことばつかり、ほんにもう此女が家にゐられては何やかやわたしの邪魔に、いえなに、邪魔にでもわたしがすると思うてどうのかうのとぬかすのであらうが、これ半七、わしが惡いか彼女が惡いか、よう考へても見やいの。

半七　へい、（ト挨拶に困る思入。）

たね　それだからわたしや腹が立つて、腹が立つてならぬのぢや。（ト又立ちかゝるをお大留めて、）

お大　あゝもしお袋樣、そのお腹立は御尤もさまではござりますれど、またお花樣のお心にも、（トちよつと半七へ思入あつて、）いえ何もお心に、あなたをお恨みなさると申すやうなことはござりませね

ば、どうぞまあ御了簡して上げて下さりませ。(トお花へ向ひ、)もしお花様、あなたが情の強いことをおつしやる故、お袋様のお腹立ち、早うお詫をなされませ、さ、早うお詫をなされませいなあ。

ト言ふ、これまでお花は半七の後にちつと泣伏してゐて、此の時少し前へ出て手を支へ、

お花　母様どうぞ御免なされて下さりませ。

たね　これ、御免なされといふのは、嫁に行くのを御免なされか、また御免なされませ嫁に行くと言やるのか。(トきつと言ふ。)

お花　さあ、それは、

たね　それでは分からぬ、どつちの道こゝで返事をしや。

お大　其のお返事もつい應と、どうも直にはおつしやられますまい、嫁入りは一生の定め事、先様へおいでなされればもう否應はならぬもの、せめてお見合ひをなされたその上のことになされて上げて下さりませ。

たね　えゝまた汝までがつべこべと、男でさへありや何でもよいぢやないか、殿御の毛並を嫌ふといふは、そりやわたしなどのいふことぢや。なう半七、さうぢやないか。(トいやらしきこなし。)

半七　まことに、御尤も千萬でござります。

たね　それ見や、誰に聞かせても大概積りにも知れたものぢや。わしも亦かう言出すからは親の高下、否と言はうが應と言はうが、なんのやらずにおくものか。

お大　（思入あつて、）左樣なればお袋樣、どうぞ斯うなされて下さりませ、わたくしがお連れ申し、御得心の行くやうにお勸め申して見ますれば、どうぞ暫くわたくしにお任せなされて下さりませ。

たね　そりや得心さへさせることなら、汝に任してやらうから、早く返事を聞かせてくりや。

お大　畏まりましてござりまする。（ト お花に向ひ、）ささお花樣、わたくしと御一緒に、ちよつと奥へおいでなされませ。（ト お花の手を取つて引つぱる。）

お花　いゝえ、わたしや、（ト 半七へ思入。）

たね　どうしたと、

お大　それまた叱られますわいな、

ト唄になり、お大捨ゼリフにてお花の手を取り引張る、お花は半七へ心の殘る思入にて、お大に引つぱられながら奥へ入る、おたね後を見送り、

たね　ほんに、あのやうな情の強い、憎らしい奴は、（ト言つたが、半七のぢつとうつむいてゐるを見て、）ま

たこゝには可愛らしい、（ト半七の側へ行き、）これ半七、何故そのやうにふさいでゐやるのぢやぞいの。

半七　へい、ちつと家業向の事に就きまして、心配がござりまする故、

たね　何も家業向の事に、そのやうに心配しやるには及ばぬ、こゝは始終は汝の家、

半七　え、

たね　いえなに、内輪のそなたぢやによつて、ちと下相談があるわいの。

半七　なに、わたくしに御相談とはな、

たね　外のことでもないが、あの娘を他家へやり、わたしが好いた戀聟取つて、この家を嗣ぐ積りぢやわいの。

半七　それはお目出度いことでござりまする。

たね　さあ、それがねつから目出度うないわいの。

半七　そりや又何故でござりまするな。

たね　何故というてその戀聟が、どうもわしを嫌ふ樣子ぢやわいの。

半七　それは了簡違ひな奴でござりまするな。

たね　汝それをば了簡違ひぢやと、思うてゐやるか。

半七　思はいで何といたしませう。

たね　そんなら言はうが、その戀聟といふわの。

半七　その戀聟様は、

たね　そなたぢやわいの、（ト顔を隱す。）

半七　え、（トびつくりなし、立上らうとするをおたね半七の裾を捉へ、いやらしきこなしにて、）

たね　これ半七、これほど思ふわたしの心、どうぞそなた推量して言ふことさへ聞くならば、有金殘らずそなたの物、それをちび〳〵小遣錢に二人手を取り連立つて、物見遊山の樂しみを夫婦仲よくして見たいわたしの願ひを、これ半七、どうぞかなへてくりやいの。

トいやらしき身振りにて半七に寄添ふ、半七術なき思入にて、

半七　その思召しは有難う存じまするが、生憎わたくしは女が斷物でござりまする。

たね　何の斷たずともよいことを、（ト半七の手を取らうとするを振拂つて、）

半七　あゝもし、店頭で外聞が惡うござりまする、まあ其の返事は何れ考へましてからいたしますればあなたはどうぞ奥へゐらしつて下さりませ。

たね　奥で待つから、色よい返事を、

半七　どうかまあ、いたす積りでござりまする。

たね　そんなら半七、（ト半七と顔見合せ、）待つてゐるぞよ。

ト唄になり、いやらしき身振りにて奥へ入る、半七思入あつて、

半七　あゝ人の心も御存じなく、お年に耻ぢぬ色好み、あゝ困つた方ぢやなあ。

ト思入。奥よりお花とお大出て、お花半七に縋りて、

お花　これ半七、わしやどうせう〳〵、どうせうぞいなあ。

お大　お前よい思案はござんせぬかいなあ。

半七　さあ、思案というてどうも外に仕樣もなければ、お袋樣の言葉に附き、嫁入りなさるがよろしう
ござりませう。

お花　そりや聞えぬ、聞えぬわいなあ。これまで深う言交し、そなた一人を夫と思ひ外の男は持つまい
と、思うてゐるを母さんのお胴慾にも今のお言葉、わしを憎んで他所ほかへ嫁入らさうとおつし
やるさへ、勿體ないが恨めしいに、そなたまでがそのやうに嫁入りしろとは、そりや聞えぬ、何
故その口で外へはやらぬ、こゝで添はれぬことなれば連れて退いて夫婦になると、何故に言うて

はくれぬのぢや、そりやあんまりぢや、あんまりぢやわいなあ。
　ト泣伏すを、お大介抱して、
お大　これほどに思うておいでなさるもの、情ないことを言はずとも、何處へなりと共々に連れて退いて上げて下さんせ。どうぞわたしもお頼みぢやわいなあ。
　ト半七へ縋つて言ふ、半七始終ぢつと思入あつて顏を上げ、
半七　そのやうにこのわしを思うて下さるお志しは忝ないが、今こゝを連れて退かれぬその譯は、國元より我兄者人主膳どのが短刀の詮議に就いてはるぐ〵と、當地へ出府なされてなれば、少しも早う後金こしらへ短刀を我手に入れ、持參せねばならぬ故、お氣の毒ぢやがあなたをば、どうも連れては退かれませぬ。
お花　そんなら後金をこしらへて、短刀さへ手に入らば、
お大　連れて退いて、
兩人　下さんすか。
半七　假令短刀手に入りても、物堅い兄者人、猥な事をいたしたと御勘氣でも蒙むらば、この艱難も水の泡、（トぢつとなる。）

お花　そのやうに言やるのは、どうでもそなたはわしを嫌ひ、あの母樣と夫婦になる心ぢやな。
半七　何のわしにそのやうな、
お花　いや、さうぢや〳〵、あの母樣と夫婦になる氣に違ひない、そりや胴慾ぢや、胴慾ぢやわいなう。
　ト ハアッと泣伏す、半七も當惑の思入。この中お大思入あって頷き、立上って棚にある刀をそっと持來り、お花の傍へ來り思入あって、
お大　もしお花樣、いくら歎きなされても半七どのがあのやうに言うてなれば、とてもお望みはかなひませぬから、もうさつぱりと思ひきつておしまひなされませ。
お花　いゝや、わしや思ひ切られぬ、切られぬわいの。
お大　これはしたり、あなたも聞分けの惡い、それ、これでな、思ひきつておしまひなされせいな。
　ト件の刀にて自害する仕方をして見せる、お花呑込みて、
お花　おゝさうぢや、南無阿彌陀佛、
　ト自害しようとする、半七見てびつくりなし、あわてゝ縋り留め、
半七　あゝこれ、早まつたことなされまするな。
お大　それなら、連れて退いて上げて下さんすか。

半七　それだというて、

お花　やつぱりわたしは、（ト自害をしようとする。）

半七　どうも、あなたを。

お大　得心して下さるか。

半七　さあ、それは、

お花　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。（トお花半七に縋りて、）

お花　どうぞ、連れて退いてたもいなう。

　ト半七當惑の思入、この時奥よりおたね出來り、この體を見て。

たね　えゝまた店で、じやらくらしやあがるか。

　トこの聲にびつくりなし、お花飛退きて、

お花　お前は母さん、

たね　母さんもないものだ、早く奥へ行かねえか。（トきつと言ふ、お花是非なく立上り、）

お花　まゐりますわいな。

ト半七へ心の殘る思入にてお大附いて奧へ入る。おたね後を見送りて、半七の傍へ寄り、

たね　これ半七、今娘とこゝで何をしてゐやつたのぢや。（ト半七に寄添ふ）

半七　またしても店頭で、ちとおたしなみなされませ。

たね　店頭ぢやとて構ふものか。

半七　御常談をおつしやりまするな。

たね　常談ではない、ほんまぢやわいの。

ト半七の逃げるのを追廻す、この時奧にて、五郎兵衛の聲にて、『お袋樣、お袋樣』と呼ぶにびつくりなし、眞面目になり、半七も下にゐる。奧より五郎兵衛出來りて、

五郎　もし最前から魚屋が待つてをりまする、早うおいでなさりませ。

たね　なに、魚屋が、えゝ折角うまい、

五郎　え、

たね　いやなに、うまいお肴でも買ひませうか。

ト半七に尻目遣ひをなし、いやらしき身振りにて奧へ入る。五郎兵衛思入あつて、

五郎　あゝ困つた婆さんだ。こう半七、貴樣も店頭で、ちつとたしなんだがいゝぜ。

半七　はい、いえ何もわたくしは、

五郎　わたくしはぢやあない、あんな猥なことがあると、店の暖簾にも拘はることだ、以來きつとたしなむがいゝ、といふのは半七嘘ぢや、はておれも粋だ野暮は言はぬから、後家の言葉に從つて、こゝの後嗣になるがいゝ。然しそこが話だ、貴様とても若いこと、後家も女のことなれば、どうしても家が猥になり勝ちなれば、貴様から後家へ言はうには、奈何にも得心いたしませうが、どうか番頭の五郎兵衛を後見にして下されと斯う言ふわ、所で後家は汝のいふことだからうんといふ、そこでおれが後見なれば、こゝの家の有金を自由にして、悉皆あのお咲がところへ、

半七　え、

五郎　いやなに、お先まつくらにたゞ得心してはいけないぞ。必ずともにそのことを忘れぬやうに頼むぞ、頼むぞ。

半七　そりやもしなる心なら申しませうが、元より何もわたくしは、

五郎　さ、好きはしまい、厭であらうが、そこを一番我慢をして得心すれば、こゝの家の有金は殘らず汝のもの、なりや其方もよし後家もよし、おれもよし。然しまだ、おれが方に返事のないのが甚だ氣遣ひ、あ、これを思へば僅一人の女に焦がるゝもあり、また二人の女に惚れられるもあり。

あ、よい男に生れた一得、あのこゝな、

ト半七の背をたゝくを、木の頭、

あやかりものめ。

ト半七へ顎でこなし、半七は顔をそむける。五郎兵衛は得心しろと頼むこなし、この模様よろしく稽古唄にて、

ひやうし幕

と道具出來次第に引返す。

(妾宅の場)――本舞臺三間常足の二重、大和葺の軒口、正面中央に茶立口、上下腰張のある茶壁、上手に障子屋體、腰通り船板の蹴込み、よき所に沓脱石、上手に石燈籠、手水鉢、上下に四つ目垣、例の所きれいなる門口、總て雪の下妾宅の模様。二重の上に長火鉢をなほし、鍋、土瓶など掛け、上の方に以前のお咲住ひ、蝶足の膳へ酒肴を載せ酒を飲みゐる、下手にお榮前に鰹節箱をおき鰹節をかいてゐる、この模様端唄の合方にて幕明く。

お咲　もうお鰹節はたいがいにして、お酌をして下さんせいなあ。

お榮　畏まりました。(ト酌をする、お咲一口飲みて)

お咲　今度つけたお酒は大そうよいねえ。
お榮　左樣でござりまするか。旦那樣などは湯治場にゐらしつては、よいお酒は上れますまいな。
お咲　さうさ、伊豆などにはこんなよいお酒はあるまいよ、どうぞこの酒のある中に、早うお歸りなされはよいがな。

ト酒を飲みゐる。始終端唄の合方にて、花道より以前の鑄掛松出來り花道にて、彼方を見てうなづき舞臺へ來り、

松五　はい、御免なさいまし。
お榮　どなたでござんすえ。
松五　お咲さんとおつしやるのは、こちら樣でござりまするかな。
お咲　はい、お咲はわたくしでござりますが、どちらからおいでなされました。
松五　左樣なら、御免下さいまし、（ト内へ入り、）わたくしは伊豆からまゐりました。
お咲　なに伊豆から、それでは旦那からのお使でござんせう、まあこちらへおかけなされませ。
松五　もうお構ひ下さいますな。（ト緣へ包をおろし、中より手紙を出し、）えゝ旦那樣が左樣おつしやりましてござります、委細は手紙にも認めてあるが、この節宿で手が顫へて書けないから、代筆だと

お斷りがござりました、それに又先達中山葵を澤山持たして便りをしたが、たしかに此方へ屆いたか、よくお聞き申してくれとおつしやりましたが、屆きましたかな。

お咲　それはたしかに屆いたと、おつしやつて下さりませ。

松五　左樣なら、いづれ晩ほど上りますから、どうかお返事をお願ひ申します。

お咲　さうでござんすか、承知しましたが、それではまだちよつくりには戻られぬと見えますな。

松五　まだちとお手間がとれませうよ。

お咲　それは困つたものでござんすなあ。

松五　わたくしは又外に頼まれた使もありますから、その用を達しまして、晩ほどお返事をいたゞきに上りまする。

お咲　大きに御苦勞樣でござりました、それはさうと、あなた御時分でござりませう、御飯を上つておいでなされませ。

松五　有難う存じまするが、唯今道で食事をいたして參じました。

お榮　もし、御遠慮をなされまするなえ。

松五　どういたしまして、（ト門口の外へ出て、）左樣なら、いづれ晩ほど上ります。おやかましうござり

ました。

ト思入あつて松五郎花道へ入る。お咲手紙を開き讀んでゐる、この中下手より前幕のお虎婆出來り直に内へ入る、お榮見て、

お榮　もし、お婆さんがおいでなさいました。

お咲　おやお母あ、よくおいでだね。

お虎　あんまりよくも來ねえのよ。（ト言ひながら上へ上り、）何だ、朝からだいぶ奢り込むの。

お咲　一つお上りな。

お虎　いや、四段目の山名のセリフぢやあねえが、酒も咽喉へは通らねえよ。

お咲　お前病氣でも惡いのかえ。

お虎　馬鹿ァ言ひなさんな、煩ふやうな耄碌をするものか。

お咲　それに又何で好きなお酒が飲めないのだえ。

お虎　借金で首が廻らねえからよ。

お咲　また負けなさんしたな。

お虎　さうよ、それだからお前の所へ、ちつと借りに來たのよ。

お咲　お前の負けるも久しいものぢやわいな、それだからわたしが言はぬことではない、もうなぐさみは止しなさんせといふに、やつぱりお前は性懲りもなく、ほんに困つたお人ぢやわいな。

お虎　困るとは何が困るのだ、そんなに又困る親なら、くびり殺してでもしまふがいゝや、あんまり御勿體ねえことをぬかしやあがるな、このお多福め、こんな時に世話にでもならうと思へばこそ、どこの牛の骨だか馬の骨だか知れもしねえ奴の餓鬼を、おれが娘にしてやつたのだ、それに何だ、うぬはいゝ子の裝をしやあがつて、この物の高いのに年が年中絹布ぐるみで、やれ圍ひ者だのお妾だのと、箸より外重いものを持たねえのは、そりやあ皆誰のお蔭だ、いやさ、誰のお蔭だよ。

トたゝきたてゝ言ふ、お榮見兼ねて留めて、

お榮　まあお袋さん、靜に言つてもお話の分かること、ちつと靜におつしやりませいなあ。

お虎　えゝ、手前達の知つたことぢやあねえ、打ちやつておきやあがれ。（トお榮を突倒し、お咲の前へ進み、）さあ、困るから金を二十兩貸してくんな、おい、貸してくんねえよ。

トお咲の顏を煙管にて突く。

お咲　何をしなさんすぞいな。假令お前がいくら貸せと言ひなさんしても、これが僅なことではなし、二十兩といふお金、それも旦那がおいでのことなら、おねだり申すといふ當もあれど、何をいふ

にもこの通り、まだちよつくりには戻られぬといふ旦那からのお手紙が、今こゝへ屆いたばかり、わたしさへどうしようとふさいでゐる所ぢやわいな。

お虎　それぢやあ何か、旦那がゐなくつちやあ、どうしても手前にやあ算段は出來ねえといふのだの。

お咲　旦那がおいでなさらねば、出來ぬのは知れたことぢやわいな。

お虎　あゝ仕方がねえ、借金で苦しむより死ぬはうが遙に優だ。お咲おさらばよ。

ト件の鰹節小刀を取り咽喉を突かうとする。

お榮　あゝもしあぶない、お待ちなされませいなあ。

お咲　これ母さん、お前氣でも違うたのかいなあ。

お虎　氣も違はなくつてよ、あつちもこつちもあしだらけで、たて催促で逆上せあがるやうだ、そんな苦しみをしようより死ぬはうがよつほど優だ、留めずとも放しねえな。

ト振放さうとするをしつかりと留めて、

お咲　どうしてこれが放されるものかいな。

お虎　留めるからにやあ金を貸す氣か。

お咲　そりやお前無理ぢやわいな。

お虎　それぢやあ、やつぱり、（ト死なうとする。）
お咲　あゝもし、待ちなさんせいな。
お虎　そんなら貸すか。
お咲　さあ、それは、
お虎　さあ、
兩人　さあ〳〵。
お虎　これさ、年寄りは氣が短いわな。（トお咲を突く、お咲是非なき思入にて。）
お咲　ようござんす、どうか都合をしようわいな。
お虎　なに、都合する、（ト小刀を投り出し、）娘、度々のことで氣の毒だなう。
お咲　今日のところは都合をするが、重ねてはならぬぞえ。
お虎　どの面下げて來られるものかな。
お咲　それでは晩に取りに來なさんせいな。
お虎　どうぞ賴むぞよ。（ト立上り。）お酒半とんだお邪魔をしたの。（ト言ひながら履物を穿き行かうとする。）
お咲　あゝもし母さん、四つ頃でなければいけぬぞえ。

お虎　それぢやあ四つには間違ひなく、

お咲　こしらへておかうわいな。（トこの中お虎門口の表へ出て、）

お虎　あ、孝行な娘だなう。（トぺろりと舌を出し、下手へ入る。）

お榮　もし、御機嫌なほしに、もう一つお上りなさりませいな。

お咲　いやもうわたしや飲みたくないから、こゝを片附けておくれ。

お榮　畏まりました。

ト稽古唄になり、お榮膳を持ち奥へ入る。これと一緒に下手より以前のお仙出來り、直に内へ入り、

お仙　お咲さん、今日は、

お咲　おやお仙さん、よくおいでなさいました。（ト元氣なく言ふ、お仙は思入あつて二重へ上り、）

お仙　お前大層今日はふさいでゐなさんすが、どこぞ氣合でも惡いかえ。

お咲　別に變ることはござんせぬが、ちつと氣の揉めることがござんす故、それでふさいでゐるのぢやわいな。

お仙　氣の揉めるとはどのやうなことか、お心安いわたしのこと故、話して聞して下さんせいな。

お咲　さあ、その氣の揉めるといふは、晩までにわたしや急にお金が二十兩入るのぢやわいな。

お仙　なに、お金が二十兩入るえ。

お咲　あいなあ、今夜四つ頃までに出來ればよいのぢやが、お前何處ぞへ賴んで見ては下さんせぬか。

お仙　それなれば丁度よいことがあるわいな。

お咲　よいことゝは何でござんすえ。

お仙　さあ、聞きなせんせ、先刻わたしがお湯へ行きがけ、あの刀屋の前を通る時番頭さんが呼びなさんしてな、お前へどうぞお賴みだが、お咲さんを取持つてはくれまいか、出來さへすればお金には不自由させぬと言うたこそ幸ひ、騙してお金をお取りなさんせいな。

お咲　それぢやといふて外聞の惡い、

お仙　お前もまあ氣の弱い、お金故には身を賣るものもござんすわいな。

お咲　（思入あつて、）さうでござんすなあ、それではお仙さん、お前よいやうにして下さんせいな。

お仙　お前得心かえ、

お咲　得心は得心ぢやが、どうも身を任せることは、

お仙　それはお前の口頭で、何とでも言はしやんせいなあ。

お咲　どういうてよいか、知れぬわいな。

お仙　おや、初心ぶつて憎らしいねえ。(ト お咲の脊を打つ。)
お咲　あれ、そんな惡婆は、わたしにはむかないものを、
お仙　旦那仕込みでやるがよいわな。(ト門口の外へ出て、)とんだわたしは提灯持だねえ。
ト唄になり下手へ入る、お咲殘り思入あつて、
お咲　お仙さんかあのやうに言うて下さんす故、お賴み申しは申したものゝ、假令嘘にも此事がもしも旦那のお耳へ入らば、どうもわたしは濟まぬもの、お世話をなさる甲斐もなく、これまでおいでなされても、枕交したこともなく、何やかやと御親切なるなされ方。今日も今日とてこのやうにわたしを案じたこのお手紙、どういふ旦那のお心か、一圓合點が、(ト 件の手紙をさらりと開くを道具替りの知せ、)行かぬわいなあ。
ト手紙を見て考へる思入、よろしく誂への合方にてこの道具廻る。

(元の刀屋の場)――本舞臺元の刀屋の道具になる。ト こゝに半七ぢつと思案してゐて、
半七　あゝ、短刀の在所知れても、後金の才覺ならぬ時は甲斐なさ、殊更こちらのお家にも長くゐては此の身の害、どうぞお暇願はうと思うてゐれど、短刀が手に入らねばそれもならず、あゝどうかして

金こしらへ、この苦艱をば脫れたいものぢやなあ。

ト ぢつと思入。この時暖簾口よりお花出て、奥を窺ひながら半七の側へ寄り、

お花 これ、半七、

半七 おゝお花樣、またこゝへおいでなされては、お袋樣がやかましうおつしやりまする、早く奥へおいでなされませ。

お花 いや／＼、今母樣は親類のお客なれば、おいでなさる氣遣ひない、その間にわしがこなたに遣らうと、そつと持つて來たこのお金、（ト金包を出し、半七の前へ置き、）さ、これで早うその短刀とやらを求めてたもいの。

半七 これはまあ御親切に、有難うは存じまするが、母御樣へ内證にて五十兩といふお金お借り申して此の事がもしも知れるとあなたの御難儀、わたくしはまたどうなりと才覺いたしますれば、早うこのお金は元の所へそつと仕舞うておいでなされませ。

お花 わしを思うてそのやうに心遣ひしてくれるのは嬉しいが、假令知れてもだいじない、愛しいそなたが困つてゐやるを、どうまあ見捨てゝおかれうぞ。もし母樣がやかましうおつしやれば、汝の難儀にもなること故、わたしが死んで言譯はするわいの。

半七　めつそうな、あなたを殺してどうなるものでござりませう。

お花　いゝや、そなた故ならわしや死んでもだいじないほどに、早うそのお金を使やいの。

半七　それぢやと申して、みす〳〵あなたの難儀になるを、

お花　えゝも、そなたも殿御のやうにもない、早う持つて、（ト金を半七の手へ持添へ、）行きやいなう。

　　トこの中奥よりおたれ出來り、これを見て、手早く金を取上げ、

たね　汝はまあめつそうな、いつの間にやらわしが眼を拔き、大それた金などを持出しをつて、うぬどうするか見やあがれ。（ト お花へかゝるを半七留めて、）

半七　あゝもし後家樣、これにはだん〳〵、

たね　さあ、そなたが金の入るわけも知つてゐる、彼女は憎いが汝に何も科はない。これ半七、この金がほしいかや。

半七　ほしいと申して、道ならぬそのお金、

たね　道ならぬ金ではない、わしがやればよいではないか。

お花　いゝえ、それはわたくしが、

たね　えゝ、何をおのれが、（トきつと言ふ、これにてお花控へる。おたれ半七の側へ寄り、）さあ、この金遣

ゐから、うんと言や。

半七 どうもそれは、(ト立ちかゝるを捉へて)

たね あこれ、情なうせずと、言ふことを聞いて、

ト半七に寄添ふを、お花見て傍へ來れ、

お花 あまりな母さん、(ト立ちかゝる。)

半七 あもし、(トお花をゐながら留める。これを道具替りの知せ)

たね くりやいの。

ト倘も半七に寄添ふ、半七は當惑のこなし、お花は泣伏す、この模樣よろしく早い合方にて、道具廻る。

(妾宅裏の場)――本舞臺三間の間中央に二軒立の惣雪隱、手水鉢、この上手掃溜、ずつと上の方黒塀、三尺の開戸、この塀の内より掃溜へかけて見越しの松、雪隱の後長家の下見、下の方路次口、黒塀、總て妾宅の裏、庭口の體。時の鐘四つの拍子木にて道具留る。と、時の鐘端唄になり、花道より松五郎うそ〳〵と出來り舞臺へ來て、こゝが裏口だなと思入あつて頷く、人音する故掃溜の蔭へ小隱れする、と花道より以前の番頭五郎兵衛出來り、花道にて、

五郎 先刻頼んだお仙さんから、お咲の話が出來た故四つを打つたら庭口へ、忍んで來いと使が來た故、

四つを打つのが待遠で、番太郎に二百やり、少し早く打つて貰ひ、裏からそつと拔けて來たが、早くお仙さんに逢ひたいものだ。

トやはり端唄にて舞臺へ來る、路次口よりお仙ぶら提灯を下げて出來り、舞臺にて、

お仙　おや、五郎兵衞さんでござんすかえ。

五郎　おゝお仙さんか、逢ひたかつた〳〵、先ほどはお使だつたが、いよ〳〵首尾はよいのかえ。

お仙　よい所ぢやござんせぬ、ものゝ出來る時といふものは、よい都合な事がござんしたわいな。

五郎　はあゝ、よい都合なことゝいふは。

お仙　先刻お前さんに頼まれてから、お咲さんに話さうと家へ行つて見たところ、大層ふさいでゐなさんす故、どうした譯と聞いたらば、繼母のお虎婆さんが二十兩貸してくれ、生きても死んでもをられぬ譯故、貸してくれずば死ぬと言はれ、脅しとは知りながら、親のこと故お咲さんも苦勞にしてゐるそこへ附込み、金を借りて上げるからお前の知つての五郎兵衞さんの言ふことを聞きなさんせと、たうとうわたしの口頭で口說きおとしましたわいな。

五郎　いやそれは有難い〳〵、日頃から仲のよいお前故出來たのだ、わしが爲めには結ぶの神・お仙大明神さま〳〵。

お仙　ほんにお前のおだてに乘つて言ふのではござんせぬが、何といつても旦那のある身、ごく内々で
することは故、わたしでなければ出來ぬわいな。
五郎　お前へお禮は、お咲と一緒に芝居へでも行きませう。
お仙　それは有難うござんすが、さうして先刻さう申して上げたお金は、持つて來て下さんしたらうな。
五郎　おゝ、そりやこゝへ持つて來た。（ト懷から財布を出して見せる。）
お仙　そんなら今お咲さんにさういつて、庭口を明けて上げるから、そこに待つてゐなさんせ。
五郎　おゝ待つてゐるとも／＼、思ひに思つた戀人に今夜いよ／＼逢はれるもお前のお蔭。（ト袂から紙
に包みし金を出し）お仙さん、少しばかりだが、（ト金をやる、お仙取つて、）
お仙　お止しなさればよいに、
五郎　そりやあほんの心祝ひだ。
お仙　ほんにお樂しみでござんすな。
トお仙は路次口へ入る。五郎兵衞後を見送り、髷をなほし衣紋をつくりて、
五郎　とんだ五郎のセリフだが、今日はいかなる吉日か、日頃戀しい／＼と思ひ思うたあのお咲に、か
うして逢へるとは有難い。

トこの中上手へ松五郎出て窺ひゐる、暗き思入にて五郎兵衛すかし見て、

そこにゐるのはお咲さんか。お咲さんぢやないかえ。

トこれにて松五郎そつと雪隠へ入る。

はあゝ、扨はこゝで、

ト五郎兵衛雪隠の側へ來て、入らうとすると内にて、

松五　えへん〳〵。（ト咳拂ひをする。）

五郎　はあゝ、お咲さんではないさうだ。

ト五郎兵衛思入、端唄にて上手の開きを明け、お咲出て五郎兵衛をすかし見て、

お咲　五郎兵衛さんかえ。

五郎　おゝお咲さんか、（ト大きく言ふを、）

お咲　あゝもし、

ト四邊へ思入あつて五郎兵衛に囁く、五郎兵衛嬉しき思入、お咲手を取つて内へ入り、後を閉る。この中雪隠の中より松五郎窺ひ出て、手水鉢にて手を洗ひ着物で拭き、開き口へ窺ひ寄り、明けようとして明かぬ思入、邊りを見て頷き、掃溜へ上り見越しの松へ手をかける。此の時犬出て來て吠え

る、松五郎思入あつて袂から菓子を出して投げてやる。これを道具替りの知せ。松五郎忍び込まうとする。この見得時の鐘にて道具廻る。

（元の妾宅の場）＝本舞臺元の妾宅の道具、上手に屏風を立廻し、内に夜具をのべあること、こゝにお唉五郎兵衞住ひ、傍に以前の酒道具火鉢などよろしく、合方にて道具留る。と五郎兵衞いやらしき思入にて、

五郎　これお唉さん、女中は何處ぞへ行きましたか。

お唉　お仙さんの所へやりましたが、何ぞ御用なら呼びませうか。

五郎　いや〳〵呼ぶには及ばぬ、差向ひが有難いが、お前ほんたうにこのわしと、情人になつてくれる氣かえ。

お唉　お前もまあ疑り深い、わたしだとて旦那のある身、嘘にこんなことが出來ようかいな。

五郎　そりやさうではあるけれど、色で暮す圍ひ者、どうも安心ならぬわいの。

お唉　そりやわたしの方でいふことでござんす、男振といひ氣性といひ、どこに一つ拔目のない好いたらしい番頭さん、そりやもう浮氣盛りの娘御には氣に入らぬかは知らぬけれど、生涯の身を任さ

うと、女も少し了簡のあるものなれば、番頭さん、誰でもお前に思ひ附かうと、わたしが安心ならぬわいな。
五郎　そのくせこれまでついに一度そんな事もないが、今もお前のいふ通り、浮氣を捨てゝ眞實に、生涯の身を任されたら、金はおろか命でも、遣る氣になるがわしが持前。
お咲　さういふことをお仙さんから、わたしも聞いて、
五郎　思ひ附いてくれたとか、それが實なら有難いが、さうして今まで世話になつた旦那どのは、どうする氣ぢや。
お咲　かうして世話にはなつてゐれど、旅商人といひながら、年中旅へばかり出て頼みにならぬお人故、斷つてしまひますが、お前世話をして下さんすかえ。
五郎　おゝ、しなくつてどうするものだ、したくつて〳〵ならぬのだ。
お咲　そんなことを言はしやんすが、外にお樂しみがござんせうな。（ト五郎兵衞を抓る。）
五郎　あいたゝゝゝ。
お咲　その逢ひたいと言はしやんすも、外のお方でござんせうな。
五郎　何の外に樂しみなぞがあらうかいの、

お咲　そりや嘘らしうござんすぞえ、

五郎　嘘でない證據はこれだ。（ト財布から包み金を出し、お咲へやる。）

お咲　このお金は、

五郎　情人になる證據にやるのぢや。

お咲　ほんたうに下さんすか。

五郎　何か少し金の入ることがあると聞いたから、實のあるところを見せようと、お前にやる氣で持つて來たのだ。

お咲　それは有難うござんすわいな。（ト金をいたゞき、煙草盆の中へ入れる。）

五郎　さあ、わしが實を見せたからは、お前の實も見たいものぢや。

お咲　わたしの實も見せませうが、まあお酒でもお上りなさんせ。

五郎　いや〳〵酒は飮みたうない、少しも早く、

お咲　はて、そのやうに急かずとも、

五郎　えゝ、こぢれつたい、

ト お咲を追廻す。その以前上手より松五郎出來り、屛風の蔭へ入る。兩人はこれを知らず、お咲は五

郎兵衞に追廻されて、屏風の内へ逃げて入るを、五郎兵衞追ひかけて屏風を明けると、内に松五郎お咲の帶際を捉へて立ち、この脇にお咲はこれを見て顫へてゐる。五郎兵衞はこれを知らず寄らうとするを突倒す、五郎兵衞起上つて又寄らうとして、松五郎と顏を見合せびつくりする。

松五　間男見つけた、動きやあがるな。

五郎　やあ。（ト下にゐる、お咲こは〳〵ながら、）

お咲　お前は、（ト言ひかけるを、）

松五　あゝこれ、おらあ亭主だぞ。

お咲　え、（ト合點の行かぬ思入。）

松五　それ、晝間伊豆から歸つて來た、それ、おらあ亭主だ、亭主でなけりやあお前の旦那え。なんでもかでもおれが亭主だ。（ト お咲にお前の爲めに惡いといふ思入をして呑込ませ、）よくおれが留守の中、こんな男を引込みやあがつたな。

お咲　何でわたしが、

松五　はて、何でもいゝから、いやさ、何でもいゝと言ひてえが、顏へ泥をぬられたからア、このまゝにやあならねえぞ。

ト始終お咲へ呑込ませろやうに言ふ。五郎兵衛は段々後退りに下にゐるを、

やい、間男め、こゝへ出ろ。

五郎　あゝもし、わしは間男ではござりませぬ。

松五　なに、ねえことがあるものか、女ばかりのこの家へ、晝でもあるか四つ過ぎに、このしだらをば何とする、これでも間男でねえといふか。

五郎　さあ、それは、

松五　亭主の留守に此の床を何でかうして取つてあるのだ。

五郎　さあ、

松五　間男に違えあるめえが、

五郎　さあ、

松五　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

松五　きり〳〵こゝへうしやあがれ。

トきつといふ、五郎兵衛おど〳〵しながら。

五郎　あゝ斯うなつたら仕方がない、こゝにゐたのがわしが過り、間男になりませう。
松五　なりませうもねえものだ、柳樽にもある通り、家にも胡麻の蠅がつきと、旅の留守を附込んで、よく間男をしやあがつたな。汝が首から先へ取るから、野郎め覺悟をしやあがれ。
ト松五郎脇差を拔き振上げろ、五郎兵衞はびつくりして、
五郎　あゝこれ〳〵、首を取らうとはそりや短氣だ、短氣は損氣、損氣は短氣、どうぞ偏に世間並の七兩二分の首代で、お濟ましなされて下さりませ。
松郎　いゝやならねえ、なんでも首を取らにやあならねえ。
五郎　えゝ情ないことになつて來たな。（ト首を押へゐろ。）
松五　そんなやくざな雁首は、あつてもなくつてもだ切らしてしまへ、（ト白刃を突出す。）
五郎　どうして〳〵やくざでもなんでも、この首を切られてたまりますものか、どうぞ偏に首代でお助けなすつて下さいまし。（ト手を合せてをがむ、松五郎思入。）
松五　それほどをしい首ならば、切らずと手前の言ふ通り、首代の金で濟ましてやらう。
五郎　それは有難うござります。これお咲さん、よう酷い目に逢はしなすつたな。
お咲　なんでわたしが知るものかいな。

五郎　えゝ知らぬといふがあるものか、このやうな陥穽へ人をぽんと嵌めてからに、その替りさつきやつた二十兩の金を返して下さい。

お咲　そんなら先刻のあの金を、

五郎　はて首代を出さねばならぬ。

松五　なんだ、お咲にやつた金を返せ、途方もねえことを言やあがる、そりやあ手前が忍んで來たので、勝手でお咲にやつた金だ、しみつたれなことをぬかしやあがると、やつぱり汝が首を取るぞ。

五郎　あゝこれ〳〵早まるまい〳〵、やつた金は取返すまいから、七兩二分の首代を堪忍五兩まけて三兩、そこらでまけて下さりませ。

松五　なに七兩二分の首代を五兩か三兩でまけてくれ、この節そんな安い物はねえ、七兩二分の首代もぐつと値上で百兩だ。

五郎　えゝ、（トびつくりなし、）そんなにふめる首ではないが、

松五　そりやあ手前が言はねえでも、値打にしたら二百か三百、二朱とふめねえ間拔な首だが、間男といふ肩書で、百兩と値が極つたのだ。

五郎　あゝ我身ながら高いものだ。（ト首を押へ思入。）

松五　さあきり／＼と早く出せ。

五郎　早く出せといつたとて、こゝには持つてゐませぬものを。

松五　持つてるざあ家へ歸つて、算段をして持つて來い。

五郎　そんならどうでも百兩取る氣か。

松五　ぐづ／＼するとたゝッきるぞ。（ト白刃を振上げる。）

五郎　あゝこれ／＼、出さぬとは言はぬから、必ず短氣なことをして下さるな。

松五　それぢやあ早く家へ歸つて、今夜の中に持つて來い、遲いと家へ取りに行くぞ。

五郎　えゝめつそうな、家へ來られてたまるものか、みす／＼お咲に二十兩とられた上に又百兩、とんだ罠にかゝつたわえ。

松五　何をぐづ／＼言つてゐるのだ、早く行つて算段しろ。

五郎　あゝ行きます／＼、今行きかゝつてゐるところだ。（ト立上り思入あつて門口へ出て、）何のことだえ馬鹿々々しい、四つを打つのを待兼ねて忍び込んで差向ひ、先づそれまではよかつたが邪魔が入つて突出されるとは、思へば此の身がおさきまつくら、さきやさほどにも思つてゐぬをのぼりつめたは不覺の至り、思ひも晴さぬその中に百兩金を取られるとは、あんまり相場が高間ヶ原だ。

松五　どうしたと、
五郎　え、なに、こつちの事だ。
　　ト唄になり五郎兵衛つまらぬといふ思入にて、腕組をして花道へ入る。松五郎後を見送り、門口へ掛
　　金をかけ、
松五　お咲さん、嘸びつくりしなすつたらう。
お咲　わたしや何だか譯が知れず、怖うて／＼ならなんだわいなあ。
松五　何も怖いことはござりませぬ、金故お前が番頭に手籠にされるが氣の毒だから、裏から忍んで間
　　男と、脅して彼奴を歸したのさ。
お咲　よく歸して下さんした。思ひがけないお前のお蔭で、今夜の難儀を脱れましたわいな。それはさ
　　うと取込みで、旦那の所へ上げる返事を、ついまだ書かずにおきましたわいな。
松五　旦那へのお返事なら、もう書きなさるにやあ及びませぬ。
お咲　なに、及ばぬとはえ、
松五　熱海の湯場から頼まれて、飛脚に來たといふのは嘘さ。
お咲　え、

松五　今朝道具屋の店頭で、お前と今の番頭との話を思はず立聞いて、ふつと浮んだ出來心、足を附けるに緣のある飛脚になつて化けて來たのさ。
お咲　さうしてお前は、
松五　わつちかえ、わつちあ人さ。
お咲　いゝえいな、何御生業でござんすえ。
松五　問はれて何の何某と長兵衞なら言ふとこだが、その鈴ケ森か小塚原へ終始はかゝる泥坊だ。
お咲　えゝ、(ト びつくりなす。合方きつぱりとなり、)
松五　そんなにびつくりしなさんな、人のしねえ事でもねえ。(ト傍にある酒道具を引寄せ、猪口を取つて、)お咲さん、一つ注いでくんな。
お咲　あい。(ト燗德利を取り、顫へながら注ぐ。)
松五　何をそんなに顫へるのだ、お前寒いか。
お咲　いゝえ。
松五　それぢやあおれが怖えのか。
お咲　あいなあ

松五　なにも泥坊だつて同じ人だ、そんなに怖がるにやあ及ばねえ。

トお咲の手を取つて引寄せる、お咲はやはり顫へながら煙草盆より五郎兵衛に貰ひし金を出して、

お咲　少しばかりでござんすが、どうぞこれを持つて歸つて下さんせ。

松五　(金を見て。)つまらねえことをしなさんな、この二十兩の金故に、今の間抜な番頭に身を任す氣になつたのだらう。こりやあお袋にやんなせえ。お前達の金を取る氣はねえ、あの番頭から百兩取つたら、おらあお前に半分やる氣だ。

お咲　お金が入らずば何なりと、こゝの家にあるものを、持つて行つて下さんせいな。

松五　金を取らねえくれえだから、何にもおらあ入らねえが、たつた一つ望みがあつて、お前の所へ忍んで來たのだ。

お咲　え、その望みといはしやんすは、

松五　お前を自由にしてえのよ。

お咲　えゝ、(トびつくりする。)

松五　二十兩の金故に、おれが來ざあ番頭にお前身を任したのだらう、どつちにしてもこりやあ五分だ番頭代りにうんと言ひねえ。

お咲　どうぞそればかりは堪忍して下さんせいな。

松五　堪忍してくれもねえものだ、これが御新造さんかお嬢さんなら、明日から世間へ顔向のならねえこともあらうけれど、藝者揚句の月圍ひ、年中人の世話になりやあ、これまで一人や二人の男を守つてゐもしめえ、どうで穢れた身體だから、盗人でもいゝぢやあねえか、客を騙してたゞ取る金は、滿更のいた仲でもねえ、さあ附合つてうんと言やな。

お咲　さあ、それは、

松五　それとも達て厭だといやあ、愛嬌こぼしておれも亦、荒つぽいことをしにやあならねえ。

ト脇差を拔き、疊へ突立てる。

松五　往生するか、

お咲　さあ、

松五　いやだといふのか。

お咲　さあ、

松五　さあ、

兩人　さあ〳〵、

松五　苦勞人のやうにもねえ、往生際の惡い女だなあ。

トお咲を引寄せ、左りの手を懷から出してお咲の手を取らうとする、お咲その手を見てびつくりし、松五郎の顏をぢつと見て、

お咲　や、お前は、

松五　なんだと、

お咲　左の腕の松の彫物、朱入の蔦が目覺えに、見れば見るほど違はぬ面相、もしやお前は五年後關宿船へ夜に入つて、乘つた記えはござんせぬか。

トこれにて松五郎思入あつて、

松五　むゝ、草津へ湯治に行つた歸り、連に別れてたゞ一人、而も九月の五日の晩、草臥足に關宿から、乘合船へ飛込んだが、そんならお前はあの晩に、

お咲　伊香保稼ぎに嬶さんと二人連にて三月越し、涼風立つて江戸へ行き、雁の啼音に氣も急かれ、生れ故鄕がなつかしく、片月見をば合點で、無理に歸つた歸り道、

松五　旅は道連夜通しに下る夜船の苫の内、筑波おろしに肌寒く、互ひに側へ寄りこぞり、

お咲　浮世話も乘合の田舍道者や旅商人、水が違つて言ふことも口に合はねばお前と二人、
松五　假令所は違つても、話が合つて百年も、馴染んだやうに一晩で打解けるのが旅の常、
お咲　それもいつしか更くる夜に、いづくの鐘か川水へ、響く數さへ九つに、
松五　睡氣がついてだん〳〵と、話も途切れて高いびき、
お咲　岸にすがれし草に啼く、蟲も哀れに寐られねば、
松五　又起返つて一服と、吸附煙草の火の影で、
お咲　互ひに見合はす顏と顏、側に寐てゐた母さんが、
松五　白川夜船に引寄せて、
お咲　嬉しい夢を見るまもなく、
松五　眼を覺したるお母あに、
お咲　そしらぬ裝でそれなりに、
松五　所も聞かず名も聞かず、
お咲　別れて丁度五年ぶり、
松五　廻り廻つて今日こゝで、

お咲　逢ふは盡きせぬ、
ト兩人よろしくセリフあつて、松五郎世話に碎け、脇差をしやんとをさめ、
松五　いや、こいつあ芝居でするやうだ。
お咲　五年この方神様や佛様へお願ひ申したその御利益で、思はずも今宵こゝへござんしたか、よう盗みに來て下さんしたなあ。
松五　それぢやあお前は盗人でも、以前のことを反故にせず、おれが女房にしようといつたら、旦那を捨てゝ女房になる氣か。
お咲　そりや言ふまでもござんせぬ、かうして人の世話になり、機嫌きづまを取つてゐるも、どうぞしたならもう一度、逢はれることがあらうと思ひ、辛い思ひをしてゐたわいな。
松五　その口先でこれまでにやあ、多くの旦那を殺したらうが、素人と違つて兇状持ち、明日をも知れねえおれが身體、
お咲　それも合點とも／＼に、どんな罪科着ようとも、命をかけて添ふ氣でござんす。
松五　そんならどこがどこまでも、と口はゞつたく言ふものゝ、居所せえもねえ始末、
お咲　そこは互ひの仲だから、お前故なら旅へ出て、宿場稼ぎも厭はぬ心。

松五　それほど肚胸がすわつたら、
お咲　鬼の女房に鬼神とは、受取りにくいが持つておくれか。
松五　持たねえでどうするものだ。
お咲　それでわたしも落附いたわいな。
松五　いや落附かれぬはおれが身體、就いちやあ汝も旦那のある身、
お咲　旦那は湯治の留守中故、氣遣ひなけれどもしひよつと、
松五　又彌次馬の來ねえ中、
お咲　五年ぶりにてゆつくりと、
松五　溜つた愚痴をこぼさうか。

ト唄、時の鐘にてお咲邊を伺ひ、屛風を立廻す。時の鐘、合方にて、花道より島屋文藏半合羽脚絆草履一本差し、菅笠を肩へ掛け小田原提灯を提げ出來る。後よりならずの三次頰冠り尻端折りにて窺ひながら出來り。文藏は花道にて、

文藏　夜が短くなつたので、四つまでには歸られようと思つてゐたが、おそくなつた。もう大方寐てしまつたらう、この位なら歸らずに何處ぞへ泊つて來りやあよかつた。

ト振返る、これにて三次は知らぬ裝をして引返して入る。

何だか胡散な今の男、荒稼ぎでゞもあるか知らぬ、いや油斷のならぬことだな。（ト思入あつて、舞臺へ來り、門口を明けようとして明かぬ思入。）案の定、寢てゐるわえ。（ト門口にて聞耳を立て、內を窺ひ思入あつて、）誰か男の聲がするが、こいつあうつかり入られない。暑さ凌ぎにこの夏から熱海へ行つて三月越し、旅の留守故閨淋しく、情人でもこしらへたか知らぬ。あゝ惡い所へ歸つて來た、知らずにゐりやあそれまでだが、眼にかゝつては捨てゝはおかれぬ。裏から忍んで樣子を見ようか。

ト思入あつて路次口へ入る。屛風の內にて、

松五　行燈か消えさうだ、かきたつてくれねえか。

お咲　暗いはうがよいぢやないかね。

松五　いや、くらやみはまつぴらだ。

お咲　どれ、それぢやあかきたつて上げようか。

ト屛風を明け、お咲出て行燈をかきたてる、この中奥より文藏出來り窺ひゐる、お咲、松五郎これを見つけて、

や、それにゐるのは、

松五　誰だえ。（トこれにて文藏前へ出て。）

文藏　誰でもない、おれだ。

松五　なに、おれだとは、

お咲　旦那さんぢやわいな。

松五　え、旦那だ、そいつあ大變だ。

ト飛起き帶をしめなほしながら逃げようとする、

文藏　あゝこれ、二人とも何も逃げるには及ばない。

松五　それだといつて、

兩人　どうしてこゝに、

文藏　間男見つけた動くな、といふ所だが言はぬのは、この美しいお咲をば一人おいて二月越し、湯治に行つてゐるからは、こんなことは覺悟の前さ。

松五　それぢやあ旦那は間男を、するのを承知でゐなさるとか。

文藏　いかにも承知はしてゐれど、知らぬ顔で内證を隱し、眼にかゝつちやあたゞはおかれぬ。

ト脇差を側へ置き、きつと言ふ。お咲びつくりして、

お咲 そんならあなたは、

文藏 顔へ泥を塗られたからは、こりやあ切らにやあならぬわえ。

ト悠々と煙草を喫みゐる、松五郎思入あつて、

松五 高金出した圍ひ者、それを人に盗まれたら、切らうといふのは尤もだ。いかにもわつちやあ間男だが因縁のあるこの女、お前は知らねえ事だけれど、五年後に關宿から乘つた夜船で色になり、夫婦にならうと約束をしたのも利根の水となり、又枝川の分れ〳〵に互ひに行衛も知らなんだが水の流と人の末思ひがけなく出會し、旦那のあるも合點でお咲と枕交したのは、深い淺いを言はずとも間男にやあ違えねえが、眞水と汐の道筋を分けて言やあお前よりわつちあ先の惡足だ、

お咲 今言ふ通り元からの情人ではあれどお世話になる、旦那の留守へ引込んで、お顔へ泥を塗つたからは、兎やかう愚痴な言譯を言つたところがつまりは間男。

松五 見附けられたら切られても、女を盗みやあ切られ損、顔が立たずば立つやうに二人をすつぱり切りなせえ。どうで切られる身體だから、惚へことをいふやうだが、女故なら死んでも花だ。

トづう〳〵しく言ふ、文藏きつとなり、

文藏　むゝ、腹のすわつた二人の言分、男は兎もあれお咲おぬしは、恩を仇にて返す氣か。

お咲　さあ、濟まぬことゝは知りながら、

松五　言つて返らぬ二人が科、

文藏　是非に及ばぬ、切つてやらう。(ト脇差を取りきつとなる。)

松五　さあ、未練は言はねえ、

兩人　すつぱりと、

文藏　むゝ。(ト拔きかけ、しやんと納め)お咲が緣を切つてやらう。

松五　何と、

文藏　さあ、女房替りの圍ひ者、間男した故命よりすつぱりお咲が緣を切り、惚れたこなたへ進ぜませう。

お咲　そんならわたしの緣を切り、

松五　この間男に下さるとか。

文藏　(思入あつて、)外でもないこのお咲、ふとした緣で去年からわしが世話をしてゐれど、いつがいつまで圍ひ者と人に指をさゝれるのも、あんまり出來たことでもないから、疾うより好いた男で

もあるなら言へと言ふけれど、まさか斯ういふ情人があるから添はしてくれとも言ひ難いは、こゝへ居抜の家を買ひ、心良からぬお袋へ手當の金から頭の物、着類も夏冬一通り着せてやつたこの文藏、算盤をとる生業ながら、無勘定でしてやりましたが、勘定したら三百兩斗り、その義理のあるわし故に言ひにくゝもあつたらうが、丁度幸ひ元からの情人とある故家財を附け、お前へこれを上げようから、どうぞ貰つて下さりませ。

ト文藏おだやかに言ふ故、兩人は顏見合せ思入あつて、

松五　切ると言つたは緣を切り、端金でもあることか、三百兩といふ金をかけ、圍つておいたこのお咲、

お咲　お顏へ泥を塗つたのも、憎いとも思はずに結構過ぎたこのお裁き、

松五　何と言つてよからうか、うつかり禮も言はれぬ仕儀、

お咲　取分けわたしは御恩のある身、どうもそれでは濟まぬわいな。

文藏　何の濟まぬことがあらう、これが女房といふではなし、當座の花の圍ひ者、知つての通り旅商人、この鎌倉へ出てゐる中旅籠屋住ひも不自由故、この新道へ圍つておけど、酒の相手をさせるばかり、ついに一晩枕をば交したことのない二人、それ故さのみ悔しいとも又憎いとも思はぬのさ。

松五　そんならお前は旅商人で、この鎌倉へ出てゐる中、寐所に拵へた妾宅は、お咲が當と思ひのほか

お咲　お世話になつてこの家を買つてお貰ひ申してから、五日とおいでのこともなく、年中旅へ出てばかり、

高金出して一晩も、伽さへさせぬはどういふ譯か。

松五　何にしろ三百兩からかゝつたお咲に家財を附け、たゞ呉れるとは大きな肚だ。

文藏　さあ、一分五厘を爭ふ身なれど、大きく商ひする日には箱で儲かるわしが生業、百や二百の端金は、塵埃故何でもない、僅な中でも緣あつて世話をしたこのお咲、他人のやうにも思はぬ故、末長く見捨てずに、添つてやつて下さりませ。

松五　何のついけに見捨てるどころか、この後どんな事があつて別れることがあらうとも、お前へ對してこのお咲は、生涯わつちが捨てやあしねえ。

お咲　わつちもあなたのお蔭故末始終添ひとげて、何ぞで今日の御恩をば、返すやうにしたいわいな。

文藏　さあ、どうぞさういふことになつて、今夜の事を雨の夜の昔話にしたいものだ。

ト文藏嬉しき思入、松五郎はふさぎたる思入にて、

松五　どんな大きな商ひだか、切放れのいゝ文藏さん、たゞ取る金でも斯うはいかねえ。折角きれいにくんなすつたが惡い生業する故に、長持のねえおれが身體、今日のお禮が出來りやあいゝが、

ト、ちつと思入、文藏もこなし、

文藏　何生業か知らぬけれど、資本にでも困るのなら、五十や百はいつ何時でも、わしが貸して進ぜませう。

松五　いえ、金はわつちも自由になるが、たゞ生業が惡いのさ。

文藏　何を生業にしなさるのだ。

松五　盜みをしますよ。

文藏　え、そんならこなたは、

松五　あい、わつちお鑄掛松といつて形より小さな盜人だが、緣といふものはおつなもので、お前故になつたのだ。

文藏　なに、わし故盜みをしなさるとは、

松五　先刻からお前の顏を、どこでか見たと思つたが、忘れもしねえ花水橋の川岸へ繋つた屋根船に乘つてゐたのはお前にお咲、石か瓦を見るやうに金を遣ふが羨しく、ふつと浮んだ惡心に鑄掛の道具を川へ打込み、榮耀かしたさに盜みを始め、今夜もこゝへ忍び込み思ひがけなくお咲に出逢ひ、かういふことにはなつたけれど、明日が日知れねえわつちが身の上、折角お前が俠氣に家財

を附けてくんなすつても、長くこゝにやゐられませぬ。
文藏　それぢやあお前は噂のある、鑄掛松といふ盜人かえ、お咲もそれを合點で、惚れた仲故夫婦になる氣か。
お咲　あい、假令一緒にどのやうな耻かしい目に逢ふとても、一旦思つた男故、
文藏　むゝ男に附くが女の情、こりやさうなければばかなふまい。
松五　何にしろこの後に御苦勞かけては濟まねえから、
お咲　後へ難儀のかゝらぬやう、
松五　禮證文を張つて行かう。
文藏　いや、禮證文を張るには及ばぬ。
松五　それでも堅氣な商人衆に、
文藏　いや、わしも名乘れば堅氣でねえのさ。
兩人　え、堅氣でねえとは、
文藏　やつぱりおれも、同じ仲間だ。
松五　なんと。（ト替つた合方になり、文藏思入あつて）

文藏　こんなセリフも度々言つたが、生れ故郷が上州に僞博多のくはせもの、堅氣と見せる商人も、糊が落ちりやお長脇差、元より地性の悪いのは氏より育の所柄、献上織の花菱を手本にこはぐ〳〵した悪事も、簇よりだん〳〵功が積み、片身替りに織分の晝夜をかけて尋ねられ、獨鈷に縁ある眞言寺に暫く隱れてゐた故に、異名に取つた梵字の眞五郎、どうで始終は紙附か板附になる身さらし、同じ符牒の仲間故、その心配にやあ及ばねえ。(ト思入にて言ふ。)

松五　そんなら疾うから聞いてゐた、梵字といふのはお前のことか。

文藏　互ひに隱す盗人と、名乘り合ふのも不思議なわけ。

お咲　ほんにかうした三人は、なんぞの縁でござんせう。

文藏　むゝ、おぬしとおれとは、切つても切れねえ。

お咲　え、

文藏　血を分けた同胞だ。

お咲　そんならお前は、

文藏　子供の時に別れた兄だ。

お咲　えゝゝゝゝ、(トびつくりする。)

文藏　五歳の時に別れたから、おぬしやあ顔を知るめえが、おらアうすうす知つてゐるから、初めて逢つたその時にはてよく似た顔と思ふ中、どうした拍子か腕守の抜けたを取つて嵌める時、ちらりと見たる二の腕の三つ並んだ黒子が目印、扨は妹とよそながら素性を聞けば上州で、佐五兵衛といふ百姓の娘で親に別れてから、藝者になつたと身の上ばなし、段々問へば父さんも不幸が續いて親子とも、別れ別れになつたと聞き、あゝ濟まねえことゝ思つたが、どこにゐるやら行衞も知れず、せめて親父へ不孝をしたその言譯におぬしを圍ひ、樂に暮しをつけさせたも、おれが親身の妹ゆゑ。

松五　それで樣子がからりと分かつた、枕交さず圍つておいたは、

お咲　妹故でござんしたか。

文藏　おゝ妹でなくて何のつけ、たゞ取る金でも枕交さず誰が圍つておくものだ。

お咲　わたしを妹と知つてゐながら、なんで今日まで知らぬ顔、何故名乘つては下さんせぬ。

文藏　さあ、名乘らねえのも盗人故、おぬしに難儀を掛けめえ爲め、惚れた男にすつぱりとやつて行かうと思つたが、相手が同じ盗人故、隱す身性を明かしたのだ。

お咲　よう名乘つて下さんした、別れ程經て十三年、積る話の數々は、

文藏　あとでゆつくり聞かうかい。

松五　(この中思入あつて、)上州邊の商人は箱で儲ける商ひ故、大きな肚だと思つたが、大きい筈だ名の高い、兄貴は梵字の眞五郎、

文藏　つながる縁の弟も、噂の高い鑄掛松、

お咲　これから親身の兄弟同樣、

松五　乞食も身祝ひ、堅めの盃、

文藏　丁度幸ひ、この酒で、(ト猪口を取る。)

お咲　あゝもし、それは冷たうござんす。

文藏　言はゞ目出度いやりとり故、冷酒のはうが本式だ。(トお咲注いで文藏飲み、)それぢやあ兄故こつちから、

松五　(取つて、)行末長く頂戴しませう。

お咲　大層堅いことだねえ。

ト松五郎飲んで文藏へさす、文藏懐から金包を出し、

文藏　こりやあ少しばかりだが、妹をやる結納替りだ。(ト松五郎の前へ出す。)

松五　こりやあ兄貴つまらねえ、こんな義理にやあ及ばねえ。

お咲　先刻貰つたお金もござんす。

文藏　ありもしやうが志し、邪魔にもなるめえ、受けてくんねえ。

松五　それだといつてお前から、この金まで貰つちやあ、（ト言ひながら金包を見て、）なんだ「一金百兩、祠堂金」こりやあちつと當りがあるが、何處でお前盗みなすつた。

文藏　こりやあ宵のばら〳〵降に、笹目ヶ谷の不動堂へ入つて止むのを待つてゐる中、こいつも雨に三人連れ斷込んで來た緣端で、この百兩の金を出し、二人が三つに分ろといふのを、四つに割つて二分はおれが取ると一人が言ひ、やるやらねえの爭ひからたうとう三人摑み合ひ、脅してやらうと堂から出て、片ツぱしから覺悟しろと引こぬいて振上げたら、根が素人にびつくりして、盗んだ金もそこへおき逃出して行つたので、思はぬ金を拾つて來たのだ。

お咲　そのまた金を、どうしてお前は、

松五　知つてゐるのは昨夜の仕事、雪の下の角近江屋へ二階の窓から忍びこみ、百兩盗んで屋根傳ひ、出て來る下に年の頃六十ばかりの爺さんが、祠堂金を百兩盗まれ、言譯なさに死ぬといつて、土藏の足場へ繩をかけ、首を縊りにかゝつたから、上からぽんと繩を切り助けてやつたは譬に言ふ

地獄で佛の祠堂金、盗んだ金を替りにやり、繩一本で死ぬとこを留めてやつたは今朝の事、僅一日經つか經たぬに、廻り廻つて爺さんが取られた金を兄貴から、貰ふと言ふなあこいつあ不思議だ。

文藏　そこが譬にいふ通り、陰徳あれば陽報ありと、善い事でも惡い事でも、廻つて來るは早いものだ。

松五　これを思ふとお互ひに、長くしちやあゐられねえ。

文藏　いゝ加減に切上げて、堅氣になるが上分別だ。

お咲　さうして兄さん、お前はこれからどつちの方へ行きなさんす。

文藏　さつきこゝへ來る後を、四五間離れて附けて來たは、何でも通常の奴ぢやあねえ、長居は恐れと思つてゐるから、今夜おそくか明日の朝、明けねえ中に出かけよう。

松五　さういふことなら猶のこと、結納替りの百兩は、お前の路用に返します。

ト文藏の前へ出す、文藏思入あつて、

文藏　こりやあおれが惡かつた、目出度え妹の結納替りに、祠堂金は縁喜が惡い。こりやあお寺に縁のある梵字のおれが路用にしよう。(ト胴卷から別の百兩包を出し、)この百兩は一昨日の晩和田の屋敷で盗んだ金、これを目出度く祝ひませう。(ト松五郎の前へ出す。)

松五　然し、これを貰つちやあ。
文藏　こりやあおれがやるのぢやあねえ、こなたがやつた親仁から返す金だ、取つておきねえ。
松五　それほどまでに事情を分け、言ひなさるならこの百兩、
お咲　わたしら二人へ、
兩人　貰ひまする。
　　ト松五郎金を取つていたゞく、この以前花道より屑屋のぐづ八先に黑四天の捕人六人附添ひ出來り、門口から内を窺ひ、明けようとして明かぬ故門口をたゝき、
ぐづ　もし〳〵、ちよつと明けて下さいまし。
　　トこれにて三人思入あつて、お咲門口へ來て、
お咲　どなたでございますか、もう臥りましたから、
ぐづ　先刻旅からお歸りなすつた、旦那に逢はして下さいまし。
　　トお咲戸の間から覗いて見てびつくりなし、文藏、松五郎に囁く。
文藏　それぢやあ表へ捕人が來たか。
松五　兄貴、お前は早く裏口から、

文藏　おらあ一人だ、二人は先へ、

松五　こゝはわつちが受込んだ。

トこの時ばら〳〵と門口を壞し捕人內へ入る。松五郎灯を消す。時の鐘。探り合ひの立廻りよろしくあつて、松五郎お咲を探り、頷いて手を取り、立廻りながら上手へ入る。後文藏六人を相手に立廻りよろしくあつて、トゞ文藏すり拔けて花道へ行く。捕人は文藏と心得ぐつ八を喰はし、折重なりて、

捕人　捕つた。

トこれにて文藏につたり笑つて、時の鐘ばた〳〵にて、逸散に花道へ走り入る。やはり時の鐘、合方にてこの道具廻る。

（初瀨小路の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、中央に黑き町木戶、上の方戶をおろしある町家の前側、下の方木戶から續いて柵矢來、この前に大八車、後方町家夜更の遠見、ずつと下手に柳の立木・總て初瀨小路夜更の體。どん〳〵（ト捕物の鳴物）にて道具留る。と、ばた〳〵になり以前の番頭五郎兵衞頰冠り尻端折りにて出來り、

五郎　何だか今夜はどん〳〵と騷々しい晚だから、辻番へ行つて聞いたらば、お咲の旦那も亦情人も、二人ながら盜人で代官所から捕人が來て、今捕られるといふことだ。まづ百兩強請られる御難を

首尾よくのがれたわえ。この拍子にお咲に逢ひ、先刻やつた二十兩を取返してやりたいものだ。

ト ばたばたになり、上手よりお咲逃げて出來り、五郎兵衛に突きあたるに顏をすかし見て、

や、お咲か。

お咲　番頭さんか。

五郎　こりやいゝ所で出ツくはした、先刻やつた金を返せ。

お咲　わたしや持つてゐぬわいな。

五郎　金がなければその替り、こゝで思ひを晴らさにやならぬ。

ト 五郎兵衛お咲の手を取るを振拂ふ、これを追廻して夢中になる思入。よきほどにお虎婆出來り、何心なくこの中へ入る、五郎兵衛これをお咲と心得、お虎婆を捉へる、これにてお咲は車の蔭へ小隱れする。どんどんになり、上手より松五郎捕人六人と立廻りながら出來り、五郎兵衛お虎十手で打たれ下手へ逃げて入る。これより松五郎車を使ひ捕物の立廻りあつて、トヾ皆々下手へ逃げて入る。この中お咲出て、

お咲　松さんか。

松五　おゝお咲か、この間に早く。

ト 手を取り行かうとする、後へ五郎兵衛出て、

五郎　うぬ、先刻の金を。

トかゝるをちよつと立廻つて、松五郎五郎兵衞の横腹を蹴る、これを木の頭。お咲を引廻し、五郎兵衞を見る。五郎兵衞は横腹を押へて苦しむをかしみのこなしよろしく、合方、どんどんにて、

ひやうし幕

三幕目

同朋町藝者屋の場

寺門前花屋の場

（淨瑠璃）　春風さそふ一節は　梅柳軒朧夜　（淸元連中）

〔役名──盗賊鑄掛松、森戸屋宗次郎、花屋佐五兵衞、森戸屋丁稚與之助、千葉の出入り杢兵衞、同九介、同十兵衞。鑄掛松女房お咲、藝者お組、其他。〕

（見附前の場）──本舞臺上の方見附の石垣、下の方町木戸、彼方柳原を見たる書割、總て鎌倉馬喰町見附前の體。こゝに〇の駕舁四つ手駕籠をおろし、呼びかけゐる。傍に千葉の出入り杢兵衞羽織尻端折りにて立つてゐる、この見得勸化の題目太鼓にて幕明く。

〇　もし旦那、御都合までまゐりませう。

李兵　明神下まで急に行くのだが、いくらでやる。

〇　へい、四百五十下さいまし。

李兵　四百五十は高いぢやあないか。

〇　いえ、辻駕籠でございますから、四百五十でまゐりますが、看板をかけた店ならば、六百より安くはまゐりませぬ。

李兵　なに、乗つてもよし乗らなくつてもよしだから、四百なら乗らう。

〇　それぢやあ一朱下さいまし。

李兵　よし〳〵、どうでもいゝから早くやつて下せえ。

〇　畏まりました。棒組が一杯飲みに行きましたから、呼んでまゐる中お待ちなすつて下さいまし。

李兵　久しく待たしてはいかねえぜ、

〇　なに、直でございます。

ト〇の駕舁は下手へ入る。上の方より同じく千葉の出入りの九介、十兵衞羽織着流し、柳屋の貸提灯と徒折とを提げて出來り、

九介　そこにゐるのは李兵衞どのぢやあねえか。

杢兵　おゝ九介どのに十兵衞どのか、いゝ所で逢ひました。

十兵　もう御奉納は濟みましたか。

杢兵　いや、濟むどころではない大間違ひ、宗次郎どのが御奉納の金を持つてござらぬ故、お役所ではお腹立、それに生憎意地惡の軍太夫樣が御當番故、目の玉の出るほど叱られました。

九介　それはまあとんだ事だ、寄金へ封印をして宗次郎どのへわたした故、お屋敷の方はよいと思ひ、柳屋で一ぱい飲み、今家へ歸るところだ。

杢兵　惡い時の行事に當り、お屋敷では思入叱られ、宗次郎どのゝ所へ行けば、まだ家へ歸らぬと言ふ故、出入頭のことなればお前方に相談しようと、今駕籠を頼んだのだ。

十兵　そりやあ無駄足にならなくてよい所で逢ひましたが、宗次郎どのはどうしましたらう。

九介　先達から聞いてゐるが、藝者に情人があるとのこと、大方澤長か染川で、飲んでゐるに違ひない。

杢兵　事と品による時は、出入中の失錯になる事も構はず、藝者狂ひをしてゐるとは、扨々若い者といふ者は考へのないものだ。

十兵　それといふのもわしらと違ひ、名におふ森戸屋の後嗣で、男がよいのにいゝほどがよいから、女の惚

手が多いからだ。
九介　道樂をするは惡いけれど、生利ッけは少しもなく、男でせえ惚れるもの、女の惚れるのは無理はねえ。
杢兵　そりやあ無理でもなからうが、宗次郎どの故お役所でどんなに叱られたかしれぬ、今夜五つの御門限までに持參せねば大失錯。
十兵　いかさま、越度は宗次郎どのだが奉納は出入中、ちつとも早く行方をたづね、お詫をして持つて行かう。
九介　何にしろちつとも早く、此の近邊をたづねて見よう。
十兵　然し、穴入りのことなれば、隱れ所が知れゝばよいが、
杢兵　いはゞ空な尋ねもの故。芳山先生に見て貰つたが、きつと知れるに違ひないと方角を書いて下さつた。（ト懷から手紙を出す。）
十兵　それぢやあ、これに方角が書いてあるか。
九介　どれ〳〵見せなせえ、（ト手紙を取つて開き見て、）「淨瑠璃名題――（ト名題、太夫連名を讀んで）こりやあ何だか違つたやうだ。（ト九介それを取つて、）

九介「相勤めまする役人――。」違つた筈だ、淨瑠璃だ。

李兵　芳山先生の所を出て、亥來さんの所へ寄つたら、今夜石町の獨吟が同朋町にあると言つたが、たしかにその淨瑠璃と取違へて持つて來たのだ。

十兵　株でこなたもそゝッかしいぜ、同朋町にあるといふのが、時に取つての辻占だ。

九介　先づ近所のことだから、梅屋へ行つて尋ねて貰はう。

李兵　それがいゝ〳〵、ちつとも早く行くとしよう。

十兵　何故そんなに急ぐのだ。

李兵　駕籠屋にあぶれをやらねえ積りだ。

九介　こなたもいゝびきをかくはうだな。

十兵　違えねえ。

ト三人上手へ入る。下手より以前の駕舁先に立ち、棒組の駕舁△附き出來り、

〇　へい、旦那大きにおそくなりました。

△　棒組、客人はどこだ。

〇　もし旦那々々、（ト邊を見て、）こりやあ來やうのおそいので、待兼ねて行つたと見える。

△そいつあ往生だ、いゝあぶれにもならねえ。これと知つたらもう一合獨吟でやつたものを、

○それぢやあ手前まだ飲むのか。

△どうして〳〵飲まにやあゐられねえ。いよ〳〵この所獨吟始まり、

○客には逃げられあぶれいゝは取れず、

△その爲往生（口上）左樣、

ト題目太鼓にて駕籠を擔ぎ、兩人上手へ入る。これにて道具廻る。

（藝者屋の場）――本舞臺平舞臺、正面暖簾口、上の方一間折廻し障子屋體、正面上手三尺壁床、細立物を掛け、この脇の三味線掛に三味線二挺掛けあり、下手押入戸棚、例の所門口、續いて黑塀、二階家の淨瑠璃臺、伊豫簾あり、總て同朋町藝者屋の模樣。こゝに以前の宗次郎着流しにて桐の長火鉢にうつむきゐる、傍にお組土瓶へ茶を入れ、鐵瓶の湯を注ぎゐる、この見得端唄の合方にて道具留る。

お組　もし宗さん、心持でも惡いのかえ。

宗次　なに、どうもしやあしない。

お組　それでもいつになくふさいでばつかり、ちつと話でもなさいましな。

宗次　何だか今日はぼんやりして、話をする力もない。

お組　ほんに染川のいさくさで心持が惡うござんせうが、何もかも濟んだれば、夕霧ではないけれど、笑ひ顏を見せておくんなさいましな。(ト湯を注がうとして手へかけ)あつゝゝ。

宗次　(びつくりして)お組、どうしたのだ。

お組　鐵瓶の湯をかけました。

宗次　そりやアあぶないことをした、(ト紙入を出し)こゝに上の字のお守りがあるから、これで撫でゝおくといゝ。

トこれをきつかけに下手二階家の伊豫簾を捲上げる、トこゝに清元延壽太夫連中住ひ獨吟の淨瑠璃になる。

〽憂き事を忘るゝ花も昨日今日、散行く風に雨氣づき、空さへもめて兎や角と思ひに暮るゝ鐘の聲、

ト此の中宗次郎紙入より火傷の守りを捜し出し、撫でゝやりながら、隣りの淨瑠璃を聞き思ひ入あつて、

お組、あの淨瑠璃は何處だ。

お組　あれは隣りのお竹さんの所へ、本町の旦那が來て、石町の太夫さんに獨吟で語らせるのでござん

す。

宗次　ついぞ聞かない淨瑠璃だが、新淨瑠璃でゞもあるかしらん。

お組　家元はいゝ聲でありますね。

宗次　嘸女が惚れるだらう。

お組　男がよくつて聲がよいから、どんなにみんなが惚れませう。

宗次　お組も惚れてゐる仲間だらう。惚け賃に中川へ甘味でも取りにやんねえな。

お組　折角のお望みだが、買ひに行き手がござんせぬ。

宗次　おつるは何處ぞへ行つたのか。

お組　あい、不動樣へ代參にやりました。

宗次　それぢやお誰もゐねえのか。（ト思入。お組茶を注ぎて出し）

お組　まあ受け賃にお茶でもお上りなさいまし。

宗次　向うの伯母さんぢやアあるまいし。

お組　何でござりますとえ、

宗次　なに、こつちのことさ。

〽月も朧に晴れやらぬ、春の習ひの曇り勝ち、

ト又宗次郎溜息をつきふさぐ思入、お組案じるこなし、宗次郎茶を喫みむせる、お組背を擦りながら、

お組　あれさ、惜しみはしませぬのに、

宗次　あゝ切ない、とんだ目に逢うた。（ト胸を擦りゐる、お組顔を見て、）

お組　もし宗さん、しつこく聞くやうでござんすが、常に替りし面附に何を言つてもふさいでばつかり何がそんなにふさぐほど、苦勞になるのござんすえ。

宗次　包むとすれど顏へ出るこの宗次郎が苦勞といふは、言ふに言はれぬ譯ある故、

お組　どういふことか知らねども、斯う〳〵いふ事があつて、苦勞になると打明けて、何故に言つては下さんせぬ。

宗次　さあ、言うたらそなたが一倍に、苦勞をするであらうと思ひ、

お組　そりや水臭い宗次郎さん、斯うして藝者はしてゐれど、お前の女房の氣でゐるに、何故に共々わたしにも、苦勞をさせて下さんせぬ。

〽眼には涙の雨持ちて、忍び音に啼く歸る雁、

ト　お組宗次郎に縋り、膝をこづき恨みを言ふ思入、宗次郎もこなしあつて、

宗次　それほど迄に思ふのに、言はぬはおれが惡かつた、何を隱さうふさぐのは、事によつたらこのおれが命を捨てねばならぬわいの。

お組　えゝ、（トびつくりなし、）そりやあまあどういふ譯あつて、

宗次　（思入あつて、）そなたの兄の切羽を見兼ね、先刻渡した五十兩、あれはおれの金ではない、千葉の屋敷の妙見樣へ出入中から奉納金、出入頭が封印してたしかに預けた金なれば、わしが手籠に使うては出入中へ濟まぬといひ、今日お屋敷へ奉納せねば失錯となる大事の金、御門限の五つまでに才覺できぬその時は、この身ばかりか第一に、親父へ難儀をかけねばならぬ、どうかかうかと考へても、まだ親がゝりに都合はできず、實に途方に暮れるわいの。

お組　さういふ譯のお金と知らず、さしつまつたる兄さんの染川での難儀をば救うてお貰ひ申しましたが、今となつては濟まぬ譯、どうか仕樣はござんせぬかいな。

宗次　さあ、しやうもやうもならぬといふは、親がゝりの身に不相應、これまで多く遣うた故、そこやかしこに借が出來、廓の金ではなけれども次第につまる春の宵、五つというても間もなければ、僅なれども時限り故、封印切つた五十兩の金ができねば言譯に、死ぬより外の思案はない。

お組　えゝ、そんなら今宵五つまでに、金が出來ずば死なしやんすとか、さういふことなら兄さんに譯を話してこの身をば、賣つても都合しませうわいな。

宗次　その志しは嬉しいが、何を言ふにも五つまで僅一時あるかなし、死んで言譯するほどに、
〽こなたは後にながらへて今日を忌日に七七日、散り行く後を訪うてたも、たゞ何事もこれまでの緣と思うてさらばやと、言捨て立つを縋り留め、

ト新內模樣の淨瑠璃になり、宗次郎よろしく思入あつて立掛るをお組引留めて、

〽今更言ふも愚痴ながら、色に成田の朝參り、お手水鉢で思はずも水にうつりし面影を、見たが柄杓の緣にて、互ひに思ひ染川の二階で逢うたその日より、一日逢はねば百日も逢はぬ辛さに生きながらへ、後に殘つてゐられうぞ、一緒に殺して下さんせと、言ふにこなたも背撫でさすり、

ト お組宗次郎を捉へ、新內模樣くどきの振よろしくあつて、

宗次　すりやそなたもとも〲に、おれと一緒に死ぬ心か。

お組　これが死なずにゐられうかいな。
〽男にひしと縋りつき、暫し淚にくれすぎて西へ傾く五日月、僅な影も世を忍ぶ、

トこの中花道より鑄掛松頬冠り尻端折り、お咲同じく手拭を冠り三味線を彈き、門附流しの打扮にて出來り、花道にて前後へ思入あつて、松五郎鼻緒を切りいめえましいといふ思入、お咲は向うへ行つてなほせといふこなしにて舞臺へ來り、門口にて松五郎半紙を撚り鼻緒を立てる、お咲は三味線の絲をかけ替る。

〽暗き其の身に片影へ佇む夫婦の門附が、語る文句にさも似たる内には二人がかこち言、

トこの中宗次郎お組よろしく思入あつて、

宗次　これお組、死なうと覺悟しながらも考へて見れば腑甲斐ない、その日暮しの者ではなし、雪の下の角屋敷一二と言はれる森戸屋の宗右衛門が伜と生れ、お乳母育ちの懐兒、何不自由のない身ながら、親がゝりの悲しさは僅五十兩の金故に、この身ばかりかそなたまで、死なねばならぬといふことは、いかなる前世の約束なるか。

お組　假令このまゝ死ぬとても、お前と一緒に死ぬこと故わたしは嬉しうござんすが、嘸や後にて親御さんが、斯ういふ事もお組故憎い奴ぢやとおつしやりませう、それが悲しうござんすわいな。

宗次　そりやわたしとても同じこと、そなたの兒の傳次どのが、たつた一人の妹をわし故捨てたと恨むであらう。

お組　それもこれも今宵の切羽、死なねばならぬことながら、
宗次　切ない譯を知らぬ人は、浮氣同志の心中と、
お組　隣りで語る清元や、
宗次　門に聞ゆる新内の、
お組　文句につゞられ明日からは、
宗次　人に唄はれ語られて、
お組　浮世の噂になる身の上、
宗次　思へばはかない、
兩人　事ぢやなあ。

〽春も暮れ行く別れ際、名殘りの寒さ身に染みて、肌に覺ゆる夜の風、

トこの中松五郎は鼻緒を立て、お咲は三味線の絲をかけ替へながらこの話を聞き、思入あつてお咲にさゝやき、お咲巾着より小判を實だけ五十兩出し、松五郎懐より半紙を出しこれを包み、思入あつて門口の上から内へ投込む。宗次郎お組この音におどろきて、

宗次　や、今の音は、

お組　大方誰か悪戯に、石を投込んだのでござんせう。

ト門口の兩人は内の樣子を窺ひゐる、お組は邊を見て、金包を取上げ、

や、投込んだのはこれかしらぬ。

宗次　すりや石でなく、包みし物を、

お組　どうやらこれはお金の樣子、

宗次　どれ、見せやれ、（ト宗次郎開き見て、）こりやこれしかも小判にて、（ト金を算へ、）その金高も五十兩、

お組　え、誰がこれを投込んだか、死ぬる二人を不便に思ひ、神か佛のお助けなるか。

宗次　但しは先刻與之助が、家へ歸つて母樣に今日の仔細をお話し申し、よそながらのお惠みなるか。

お組　何にもしろ五十兩の、お金が手に入る上からは、

宗次　封印切りしは何とか僞り、納めてしまへば死ぬには及ばぬ。

お組　主の知れざるお金ながら、

宗次　今さしあたる命の際、

お組　思ひがけなく手に入りしは、

宗次　まつたく神の御助け、

お組　こんな嬉しい、

兩人　事はない。

へ土手の蛙の啼きつれて、嬉しと雨を呼ぶ空の雲足早く門附は、軒を傳うて行過ぎる。

ト宗次郎お組は嬉しき思入、松五郎お咲はしめたといふ思入にて、雨入頷き下の方へ入る。この中宗次郎懐より金を出し、

宗次　思ひがけなく此の金が、手に入る上はこゝにある五十兩を一つになし、御門の限れぬその中に、お重役へお渡し申さん。

お組　もう暮れてからよほどの間、今に五つでござんせう、少しも早く仕度をして、これから直にお屋敷へ、

宗次　持つて行くにも遲刻といひ、金の封じを切つたる言譯、何と言うたものであらうか。

お組　よい思案はござんせぬか。（ト宗次郎思入あつて）

宗次　お重役への言譯は、途中で俄に疝氣が發り、それ故遲刻なしたる上、肌へ附けたる胴卷へ苦しむ中に汗が染み、損ぜし故に上封じを仕直せしと言うたらば、言譯になるであらう。

お組　そりやよい思案でござんすから、封じをなして少しも早く、
宗次　おゝ、合點ぢや。
〽折からこゝへ息せきと、急げば足も遲櫻、お主思ひに打ちしほれ、人目を忍ぶ葉隱の門を目當に步み來て、
ト宗次郎は金の封じをする、お組は手燭を出し、宗次郎有合ふ硯箱を取つて上書をする。この中花道より與之助前幕の裝にて、弓張提灯を持ち出來り、花道にてちよつと思入あつて舞臺へ來り、門口を開け、
與之　若旦那樣、
宗次　おゝ與之助か。（トあわてゝ金を隱す。）
お組　よい所へござんしたな。
與之　いえ〳〵よい所どころではござりませぬ、今お出入の衆が來て、御奉納がおそなはり、お屋敷から度々の催促、それに生憎御當番が意地惡の軍太夫樣故、お出入仲間も心配いたし、是非若旦那に逢ひたいと柳屋に待つてゐる故、人に知らさずこつそりとおしらせ申しにまゐりました。
宗次　それは丁度幸ひだが、出入頭も一緒にか、

與之　はい、大概おいでゞござりまする。
宗次　さういふことなら打明けて、出入頭へ話した上とも〴〵お詫をして貰はう。
與之　それは兎もあれさし當る、金子がなければお詫もならず、
宗次　おゝ案じやんな、その金も思ひがけなく手に入つた。
　　ト包みなほせし百兩包を見せる、與之助びつくりして、
與之　どうしてそれが手に入りました。
宗次　仔細は道々話さうから、
お組　五つを打たぬその中に、
與之　これから直にお屋敷へ、
宗次　少しも早く。（ト立ちかゝろ。とお組羽織を後から引かけながら、）
お組　必ず歸りに、
宗次　おゝ、おそくも來るから、
　　ト振返りにつこり思入、與之助顏をそむけ提灯の心を切る、宗次郎氣を替へ、羽織の紐を結びなが
ら、

待つてゐやれ。

〳〵死ぬる覺悟の兩人が明日の噂も川水に、流して又も兩國の長き契りぞ、

ト與之助提灯を持ちて先に立ち、宗次郎花道へ行く、お組門口にて見送り兩人思入、宗次郎後へ歸らうとする、與之助心附かず先へ行きかけ振返り見て、つか〳〵と行き宗次郎の袖を引く、これにて三重になり花道へ入る。お組はほつとして胸を撫下す。やはり三重にてこの道具廻る。これと一緒に太夫座の黒塀を張物にて消す。

（花屋の場）――本舞臺三間の間上手二間常足の二重、こけら葺古瓦を載せし屋根、竹の本緣附、中央暖簾口、上手押入戸棚、佛壇、これに黒塗りの立派な位牌、瀬戸の佛器をよろしく飾り、この傍に建久四年三月十三日と記せし白木の位牌あり、崩れたる鼠壁、よき所に居爐裏、二枚折りの屛風、古行燈、屋體に續いて下の方一間臺所、この境に障子を閉切り、一つ竈、置流し、手桶、米揚笊、臺所道具よろしく飾り、上の方黒塗り寺の門、屋體の側に角塔婆、流灌頂、小さき塔婆二本立て、樒を入れし手桶、下の方黒塀、卒塔婆を結込みし藪疊、この前に井戸、樒を入れし桶をならべ、總て寺門前花屋の體。雨車、木魚の勤にて道具留る。と、奧より佐五兵衞粗朶を抱へ出來り、空へ思入あつて、

佐五　八專中故曇り勝ち、日和ぐせかと思つたら、たうとう本降りに降り出した。枯らしておいた焚物

をすんでのことに濡すところ、まづこれを取込んだれば焚物に困らぬ、どれ、ちつとこなしておかうか。

ト鉈替りの刀の折にて枝を切り、居爐裏の傍へ持つて來て、煙草を喫みながら、

風と逢つて雨の音は、氣が落附いて寐心がよい、先刻貰うた川びたりの餅のせゐか睡くなつたがまだ五つになるかならず、今から寐るのも勿體ない、(ト思入)おゝお住持から貰つておいた王子で出來た茶があつたつけ、あれを一ぱい煮花に入れ、睡氣ざましとしようかい。(ト言ひながら居爐裏へ粗朶をくべ、焚附けながら)あゝ、年のせゐでこの頃はどうも眼がかすんでならぬ、ちつと逆上の下るやう、鑵子の湯の煮立つまで、三里へ灸でもすゑようか。(ト言ひながら足を捲り見て)久しく灸をすゑぬので、さつぱり痕が消えてしまつた、墨でしるしを附けずばなるまい。

ト佐五兵衞押入を明け硯箱を出し、抽出より線香と艾を出して、盆の上へ艾をほごし二枚折の屛風を立て、線香へ居爐裏の火をうつし、

どれ四五十丁すゑようか。

ト二枚折の蔭で灸をすゑる思入、雨車靜な木魚入りの合方になり、花道より以前の松五郎、お咲娘冠り尻端折り、お咲は三味線を袖にて覆ひ、糸立を引張り合ひて出來り、花道にて、

お咲　ちつと小降りになつて來たね。
松五　西がすつかり晴れてるから、今にこりやあ止むだらう。
お咲　さうしてお前この絲立は、何處から持つて來なすつたのだえ。
松五　こりやあ豆腐屋のいゝけ槽に干してあつたのを持つて來たのだ。
お咲　それぢやあ盗んだのかえ。
松五　あゝこれ、よけいな事を言はねえで、向うの家の軒下で、ちつと雨を止めて行かう。
お咲　どうぞお前の生業同様、早く止んでくれゝばいゝが、
松五　とんだ意見を聞くものだ。
ト兩人舞臺へ來り、下手に彳み思入あつて、
お咲　ほんに禍ひも三年と、兄さんから貰つた金をお前から預つて、もしもの時の入用にと肌身放さず持つてゐたが、とんだお役に立つたねえ。
松五　さうよ、あの五十兩が役に立てば、死んだ親父やお袋が一方ならずお世話になつた、御恩送りになるといふもの。
お咲　行末長いお二人の命をお助け申したなら、まさか惡くは報うまい、少しはお前の罪亡し、

松五　悪事はするが涙ッぽろく。人の難儀を見てゐられず、時折難儀を救ふものゝ、差引き勘定したならばやつぱり悪事が多いから、始終は命の分散だ。

お咲　二束三文その時は、わたしも小附に死ぬ心。

松五　えゝ縁喜でもねえ事を言つてくれるな。

お咲　ほんにこりやあ氣が附かなんだ、まだ素人だから堪忍しておくれ。(トこの時雨車烈しくなる。)松さん、もつとこつちへお寄り、又強く降つて來た。

松五　こいつあ軒下ぢやあ凌げねえ。

お咲　こゝの家をお頼みな。

松五　おゝ押を強くやつて見よう。

トこの中佐五兵衛は灸をすゑてゐる。松五郎手拭を取り、小腰を屈め、

はい、往來の者でござりますが、俄雨で困りますから、ちつとの中お置きなすつて下さいまし。

佐五　(兩人を見て、)そりやあ嘸困らつしやらう。ゆつくり止めて行きなさるがいゝ。

松五　そりやあ有難うござります。さあお願ひ申した、こつちへ入んな。

お咲　入つてもよいのかえ。

佐五　さあ〳〵遠慮はない、入らつしやい〳〵。

お咲　これは〳〵有難うござります。（ト内へ入ろ、松五郎佐五兵衞を見て、）

松五　こりやあお灸でござりますか。

佐五　逆上のせるか此の頃は眼がかすんでなりませぬから、引下げをするゐますが、何と言つても年の上そこら中ががたぴしして、ほんの古家の造作さ。

松五　古家どころか、斯う見たところがまだ〳〵達者な御様子だ。

佐五　六十三になりますが、年よりは達者でござりまする。

松五　なに、六十三におなりなされますえ、こりやあめつほうにお若い、

お咲　どう見ても五十代でござりまする。

佐五　一升買つて進ぜたいが、酒の替りに湯が沸いたら、粪花を入れて進ぜませう。

松五　お構ひなされて下されますな。

佐五　なに、構ひはしませぬ、わしも喫まうと思ふ所だ。

お咲　それは有難うござりまする。（トこの中松五郎は煙草をのみゐろ。）松さん、一服おくれな。

松五　つまつてゐるぜ。

ト煙管を出す、お咲三味線を下へおき、煙草を喫む、佐五兵衛これを見て、

佐五　おゝお前方は門附かえ。

松五　はい、左樣でござります。

佐五　どこから出なさるのだ。

松五　え、（トぎつくりなし、）わたしらは、（ト言兼ねる。）

佐五　あま崎町かね。

お咲　はい、その邊でござります。（トこの時湯の煮立ち思入。）

佐五　おゝいつの間にか湯が沸いた、どれ、茶を入れて進ぜませう。

ト有合ふ土瓶へ茶を入れ湯を注ぎ、佛壇の佛器を取り初穗を注いで、茶盆の茶碗を取り。

さあ〱、勝手に注いでのんで下さい。

松五　そりやあ有難うござります、左樣ならお辭儀なしに御馳走になります。

お咲　どれ、お初穗をとりませうか。

トお咲茶碗へ初穗を注ぎ佐五兵衛の前へ出す、佐五兵衛はこの中佛壇へ茶湯をする、兩人茶を喫みゐる、佐五兵衛は佛壇へ向ひ、

佐五　八月二十日の晩雪の下で逢つたお方、壽命長久、守らせたまへ〳〵。

ト手を合せながむ、松五郎これを聞き、合點の行かぬ思入、佐五兵衛は居爐裏の側へ來る、お咲茶碗を取つて、

お咲　はい、お初穗でござりまする。

佐五　そりや憚りでござりまする。（ト松五郎思入あつて）

松五　もし、ひよんなことをお聞き申しますが、今佛壇へ茶湯をして壽命長久守らせたまへと、佛へ向つて願ひなさるは、死んだ人でもない樣子、どういふ譯でござりまする。

佐五　おゝ、そりや合點の行かぬ筈、今佛壇へ茶湯して、壽命長久祈つたのは、わしが命の親でござりまする。

松五　命の親といひなさるは、込入つた譯と見えますね。

佐五　あゝ袖振合ふも他生の緣、仔細を話して聞かせませうか。

お咲　どうぞお聞かせなされて下さいまし。

佐五　（思入あつて）然し話すも面目ないが、わしが命を救はれし仔細を聞いて下さりませ。この八月の十日の事、まだ夜の明けぬ七つ過ぎ、このお寺のお住持から御本山へ納める金百兩受取り七つ

をば六つと間違へ出たのがあやまり、悪い者につけられて途中で金を盗みとられ、言譯なさに突詰めて、すでに死なうと思つたところ、思ひがけなく後から、死ぬを留めて失ひし金まで與れし若いお人、神か佛か有難いと、顏を見れども夜明前、月は隱れてしかとは見えず、いづれ何處のお方なるかとその名所を聞いたれど、禮にも及ばずその金を返すにも及ばぬから、今日をおれが忌日と思ひ回向を賴むと言捨てゝ、留むる袖を振拂ひ、後をも見ずに行かれしお人、大恩受けしお方なれば、所も知れねば名も知れず、それ故其の日を目當にして壽命長久を祈りますは、命を助けて貰うたる恩返しでござりまする。

ト佐五兵衞思入にて言ふ、松五郎これを聞き、扨はといふこなしあつて、

松五　もし、そりやあたしか宵の口に、小雨の降つたその明方、雪の下は四つ角で、屋根の修覆に足場のある、藏の前ぢやなかつたかえ。

佐五　(びつくりして)え、どうしてそれを、お前さんが、

松五　知つてゐるのはその晩に、お前の命を助けたのは、外でもねえこのおれだ。

ト佐五兵衞松五郎をつくづくと見て、

佐五　さうおつしやれば身丈恰好、くらがりながら記えてゐます、あの折助けて下すつたはお前樣でご

ざりましたか。

松五　それぢやアあの晩、首くゝりは、爺さんお前か。

佐五　いや、面目もねえお出逢ひも、

お咲　俄に降りし春雨に、

松五　軒を借りたが縁となり、

佐五　助けられたるお人とも、

お咲　又助けたは爺さんとも。

松五　知らぬが佛の寺門前、

佐五　煙りも細き線香や、

お咲　樒の花の香も失せず、

松五　朝夕茶湯をしてくれるは。

佐五　水になさゞるわしが心。

お咲　これも何ぞの約束か、

松五　不思議に廻り逢つたのも。

佐五　盡きせぬ緣の、

三人　行合ひぢやなあ。

ト三人思入あつて、佐五兵衛はた〳〵と悅び、

佐五　やれ〳〵嬉しや〳〵、どうぞ再びお目にかゝり、しみ〴〵お禮が言ひたいと、朝夕願うた念が屆き、こんな嬉しいことはない、何とお禮を言はうやら言葉でお禮は盡されませぬ。

ト手を合せてをがむ。

松五　あゝこれ父さんつまらねえ、その禮にやあ及ばねえ、此方で言はにやあならねえのだ。

佐五　なにめつさうな、お前様にお禮を言はれる覺えがござりませぬ。

松五　お前の方にはあるめえが、知つての通りのわしが世渡り、これまで危ねえ所をば、度々運よく脫れたは、まつたく壽命の長久をお前が祈つてくれたからだ。

佐五　さうおつしやつて下さりますれば、何より嬉しうござりまする。（ト表へ思入あつて、）何にしろ、まだ雨もさつぱりと止みませねば、どうか今夜はむさくとも、こゝへ泊つて下さりませぬか。

松五　そりやあ何より有難い、家へ歸るもよつぽどあれば、氣の毒だが爺さんの厄介にならうかの。

お咲　ほんに濡れて歸るも難儀なれば、今夜は泊めてお貰ひなさいな。

佐五　どうぞさうして下さりませ、幸ひ今夜は門前に義太夫の會がござりますれば、寐ながら聞くもまた一興。
松五　思ひがけねえ爺さんに逢つたばかり、樂々と、
お咲　今夜はあたりへ氣兼ねもなく、
松五　枕を高く寐られるな。（ト お咲佛壇へ思入あつて、）
お咲　もし松さんちよつとお見、ぶしつけながらこゝのお家に不釣合なお位牌だね。
松五　なるほど、こりやあ立派なものだ。爺さん、ありやあお前のかえ。
佐五　はい、先祖代々持傳へた、わしの位牌でござりまする。
松五　あの位牌がある位ぢやあ、立派な暮しと見えますね。
佐五　さあ、田舍でこそあれ苗字も名乘り、名主までした身分であつたが、不幸が續いて田畑から、家財かざいを賣盡し、胞衣をうづめた土地にもゐられず、この江戸へ來てこれほどに成下つたことなれば、以前の者は何一品手に殘つたものはなく、賣らうというても買手もなく、又賣られもせぬものの故位牌ばかしが昔の姿、實に先祖へ對しましても、濟まぬことでござりまする。
ト佐五兵衞佛壇より位牌を取つて來て見せろ、お咲これを取つてよく〳〵見て合點の行かぬ思入にて

お咲　この寺澤氏といふ苗字は、これはお前の御苗字かえ。

佐五　いかにも、以前は上州の寺澤村の草分にて、而も寺澤佐五郎と人に知られた大百姓、

お咲（びつくりして、）えゝ、そんならお前が佐五郎樣とか、もし配遇のお名をお澤と言はしやんせぬか。

佐五　やあ、どうしてそれを、（トおどろく。）

松五　さあ、それをこれが知つてゐるのは、何を隱さう、お前の娘だ。

佐五　えゝ、扨はお澤ともろ共に、十七年後別れたる、おれが娘であつたるか。

お咲　父さんでござんしたか。

佐五　あゝ、よく無事でゐてくれたなあ。

お咲　さうして父さん上州から、どうして江戸へござんしたぞいな。

佐五　話せば長いことながら、今も言ふ十七年後、夫婦別れをする時に末の伜をおれが連れ、この鎌倉の知邊を賴り、種々さまぐ〜な事をしたが、寺門番の花屋にまで成下るほどなれば、艱難苦勞を察してくりやれ。

お咲　わたしもその折母さんと里へ歸つて六七年、いかいしがない暮しをする中に貧苦に迫るを苦に病んで、賴りに思ふ母さんが三年越しの長煩らひ、藥の代に差詰り、輕井澤へ身を賣りしその甲斐もなく

母さんは二月經たず死なしやんした、後は此の身の賴りさへないしよの慾に段々と流れ渡りの旅から旅、結局の仕舞ひがこの鎌倉、

松五　世間も狹え九尺店、貧乏暮しの鑄掛松が女房になるまで長い中、これも大そう苦勞をしました。

佐五　互ひの苦勞も前の世から持つて生れた親子の因果、

お咲　身には襤褸を纏ふとも、命があればいつか又、

佐五　綺羅をかざつて此の難儀を、話す時節がありませう。

松五　そりやあなくつてどうするものだ、譬にもいふ人間は七轉び八起とやら、

佐五　何にしろこのやうな、無事な顏をば見る嬉しさ。

お咲　わたしも嬉しうござんすわいな。（ト佐五兵衞に縋りよろしく思入。）

佐五　かう名乘り合ふ上からは、緣に繫がる親子仲、當分此方に足を留め、ゆつくり話をして下され。

お咲　おゝその話で思ひ出したが、わたしや兄さんともこのやうに、不思議な事で兄弟の名乘り合ひなしたわいな。

佐五　えゝそんなら、あの眞五郎とか。

松五　さあ、こつちもその時つながる緣に、近附になりやしたが、同じ稼業はしてゐれど、今日この頃

佐五　出來星のわっちなざあ及びもねえ、なか〳〵兄貴は立派なものだ。
何のお前立派というて、あのやうなろくでなし、（ト松五郎へ思入あって、）いや、ろくな死狀しをるまいと思うたに、達者でゐるとは、まだしも運にかなうた奴、そして今ではどこにをりますな。

松五　兄貴もくれえ身の上だから、居所も言へねえ壁に耳、どうせ今夜はお世話になるから、その中ゆっくり話しませうよ。

お咲　そりやもうお前が言はずとも、わたしも積る話の數々、言うたり聞いたりしたいわいな。

松五　それぢやあ丁度幸ひだ、隣り知らずの寺門前、あたり近所へ氣兼ねがなけりやあ、四五日お世話になるがいゝ。

佐五　えゝ四五日と言はずとも、いつまでなりと遠慮なく、どうぞ逗留して下され。いや長話で馳走もせず、せめて蕎麥でも進ぜたいが、蕎麥屋までは三丁ばかり、急にこゝまで持って來ねば、何はなくとも飯を炊き、畑へ出來た菜でも摘んで、煮り菜でもして進ぜませう。

ト下手へ行き、米櫃から桶へ米を量ることなし。

松五　あゝこれ父さん、まだ二人とも腹がいゝから、明日のことにしなせえな。

佐五　明日炊くも今炊くも同じこと故、留めさつしやんな。

お咲　父さん仕掛をしなさんすなら、わたしがといで上げようわいな。

佐五　いや〳〵、人の家は勝手が知れぬ。今日は客のことなれば、足でも延ばしてゐたがよい。

ト佐五兵衛米を桶へ入れ、井戸端へ出かけようとする。ばた〳〵になり、花道より以前の與三郎森戸屋といふ弓張提灯を持ち走り出來り直に舞臺へ來て、

與之　父さん、家でござりましたか、（ト息を切つて言ふ。）

佐五　おゝ與之助か、どうしたのぢや。

與之　どうしたどころではござりませぬ、大事でござりまする。

佐五　大事とは氣遣ひな、（ト茶碗へ水を汲み、）まあ〳〵水でも呑んだがよい。

與之　えゝ有難うござります。（ト水を呑み胸を撫でおろす。）

佐五　さあ、若旦那の宗次郎様が妙見様へ奉納の預り金を百兩、餘儀ないわけでお遣ひなされ、その才覺が出來兼ねて言譯なさに死なうとせしを、思ひがけなく門口から誰とも知らず投込んだ、その金高も五十兩、天の助けと二つになし千葉樣へ納めしところ、その金故に若旦那に疑ひかゝつて代官所へ、引かれておいでなされました。

佐五　えゝゝゝゝ、そりやまあどういふ譯あつて、

トびつくりする、松五郎お咲もこれを聞き心得ぬ思入。

與之 さあ、門口から投込んだ五十兩は、一兩々々三つ鱗の極印ある北條樣の紛失金、言譯立たぬその時は、獄舍へ行かねばならぬ故、傍輩衆の親達が皆見舞に來ましたから、お前もちよつと來て下され。

佐五 それはひよんな事ができた、與之助そちが子飼から御恩になつたお主樣、おれもお見舞に行かねばならぬ。

トこの中松五郎、お咲よろしく思入あつて、松五郎與之助に向ひて、

松五 もし、今お前がお話の門から金を投込んだのは、そりやあたしか同朋町の中ほどぢやあござりませぬか。

與之 あい、しかも右側の中ほどで、お組さんといふ藝者の家、

松五 それぢやあ先刻の、

與之 え、

松五 いやさ、先刻そんな噂があつた。

ト松五郎とんだ事をしたといふ思入、この中お咲は始終與之助を見て、我弟かといふ思入。

お咲　もし父さん、この子が弟でござんすかえ。
佐五　あゝ、これがその時乳呑でゐた、末の弟の與之助ぢや。
與之　わたしを弟といふお前は、
お咲　幼い時に別れたる、わたしやそなたの姉ぢやわいの。
與之　え、そんならお前が話に聞いた、姉さんでござんしたか。
お咲　おゝ弟であつたか。
與之　おなつかしうござりまする。（トお咲の傍へ行く、お咲手を取つて、）
お咲　よう顔見せてくりやいの。（トこの中松五郎はぢつと思入。）
佐五　あゝこれ〳〵、その名乘合ひは今日せずとも、又後でしたがよい、先づ差當る御主人樣のお身の上の一大事、お見舞ひに行かねばならぬ。
松五　なるほど、こりやあ少しも早く御主人樣へ行きなせえ。わしも繫がる緣ながら、その中逢つて話しませう。
お咲　ほんにかうして同胞の名乘り合ひをするからは、どうぞ明日にもゆつくりと、
與之　お暇を貰つてまゐりませう。

佐五　さあ〳〵與之助、支度はよいか。
與之　はい、もうよろしうござりまする。（ト提灯を持ち下手へ來る。）
佐五　これ、二人は後を頼みますぞ。
松五　二人でしつかり留守をするから、後は必ず案じなさんな。
お咲　そんなら弟、
與之　姉さん、お暇いたします。（トこの時仕掛にて提灯消える。）あゝ、これはしたり。
佐五　與之助どうしたのだ。
與之　蠟燭がござりませぬ。
松五　あゝ、灯がなくちやあ、
お咲　外はくらやみ、（ト佐五兵衛思入あつて）
佐五　あゝ、そのくらやみへ若旦那が、
松五
お咲　え、
佐五　ござらぬやうにしたいものぢや。
ト時の鐘。佐五兵衛思案の思入にて與之助附き花道へ入る。お咲は粗朶の燃えさしを出し、これを灯

に門から見送ろ、松五郎はホロリと思入。この時上手にて、淨瑠璃の口上聞える。
（口上）東西々々、お染久松新版歌祭文、野崎村の段初まり左樣、
ト是より床の淨瑠璃になる。
〽後に娘は氣もいそ〳〵、こんな事なら今朝あたり髮も結うておかうもの、鐵漿の附けやう挨拶もどういうてよからうやら、覺束なます拵へも、祝ふ大根の友白髮、
ト後に松五郎お咲濟まぬことをしたといふ思入あつて、顏見合せ、
松五　これお咲、とんだ事をしたなあ。
ト時の鐘、合方、蛙の聲になり、
お咲　ほんに先刻のあのお金が、さういふ印のあるとも知らず、
松五　親が受けたる大恩を少しは報ふ了簡で、危ふい命をお助け申した金が却つて仇となり、宗次郎樣へ御難儀かけ、今となつちやあ濟まねえわけ、
お咲　言つて返らぬ事なれど、極印のあるお金をば、何故下さんしたことであらう。
松五　こりやあ兄貴も知らなんだのだ。
お咲　どうか仕樣はあるまいか。

松五　どうといつてかうなつちやあ、所詮たゞぢやあ濟まねえが、まあ父さんが歸つて來て樣子を聞いた上のことだ。

お咲　なるほどそれがようござんす、三人寄れば文珠の智惠、又よい思案がござんせう。

〽門の戸びつしやりさしもぐさ、燃ゆる思ひは娘氣の細き線香に立つ煙り、

トお咲外を見て門口を入ろ、松五郎思入あつて、

松五　今隣りで語るのは、ありやあお染の野崎村、おみつが灸をするゐる件、幸ひこゝに父さんがするゐかけた灸がある、三里でもするゐようかしらぬ。（ト死なうといふ覺悟の思入。）

お咲　ついにするゐたこともないに、何で三里をするゐなさんすのだ。

松五　これから旅へ出かけるのに、足を丈夫にしようと思つてよ。何にしろ飯が食ひてえが、冷てえのでもありやあしねえか。

トお咲下手にあるお櫃の蓋を明けて見て、

お咲　お櫃にあるのは一膳ばかり、

松五　道理で炊いて喰はせると父さんが言つたつけ、無いと思ふと猶喰ひてえ。

お咲　それほどお前喰べたくば、わたしが炊いて上げようか。

松五　然し、これまで絹布ぐるみで樂をして來た手前の身體、飯を炊かすも氣の毒だ。

お咲　何の氣の毒なことがあるものかね、あのお染の文句をお聞きよ。

〽二人一緒に添はうなら、飯も炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい活しでも、わしや嬉しい
と思ふもの、

お孃さんでも莫連でも、女の心はあの通りさ。

松五　それぢやあ、早く炊いてくんねえ。

お咲　どれ、井戸端で流して來ようか。

〽曇り勝ちなる久松も、背撫でさすり聲ひそめ、そのお恨みは聞えてあれど、十歳の時から
今日が日まで、船車にも積まれぬ御恩、仇で返す身のいたづら、

トこの中お咲は米かし桶を持ち下手へ來り、井戸端にて本水を汲み、米をとぎにかゝる。松五郎は上
手にて手を組み思案の思入、これより心々になり、

松五　積る惡事の帳消しに、死んだ親父やお袋がお世話になつた御恩送りと、善に返つてした事が却て
先方の難儀となり、

お咲　知らぬことゝはいひながら、現在弟の與之助がお主樣の若旦那、繩目をお受けなされたも、元

の起りは兄さんから貰つた金があつた故、

松五　お觸のあつた北條家の、極印金とも露知らず、お役に立つたを悦んだ、その甲斐もない今夜の仕儀、

お咲　惡い心でしはせねど、今となつては仇となり、もしものことがあつたなら、

松五　手はおろさねど二人して、宗次郎樣を殺すも同然、

お咲　これから直に名乘つて出て、

松五　科をこの身に引受けようか。

お咲　どう考へても死ぬよりほか、

松五　言譯するに思案はない。

お咲　これも定まる約束ながら、

松五　思へば金が、

兩人　敵ぢやなあ。

ト心々の思入、これより地藏經になり、松五郎懷より四つ折りの半紙を出し、これへ書置を書く。この中お咲は米をとぎ水にて流しゐる。松五郎は書き仕舞ひ、思入あつて有合ふ二枚折りの屏風を出

しよき所へ立て、以前の刀を取つてよい物があつたといふ思入にて屏風の内へ住ふ。この中お咲は障子をへだて、下手屋體にて水加減をなし、火を焚附ける思入よろしくあつて、松五郎を見て、

お咲　お前屏風を立廻して、何をしてゐなさんすえ。

松五　膝脚氣が起つたから、三里へ灸をするのだ。

お咲　今夜に限つたこともないのに、

松五　おれもすゑる氣もなかつたが、今も言ふ父さんのすゑかけた灸があつたから、そこからの思ひ附だ。

お咲　そりやァあつい思ひ附だね。

松五　これといふのも鎌倉に長く足を留められねえから、手前を連れて上州の兄貴の所へ行く積り、

お咲　して兄さんの所までは、どの位でござんすえ。

松五　その道程は十萬億土、いやさ、奧の方まで行く心だ。あツつゝゝゝ。

〽互ひに眼と眼見合する心の覺悟は白髪の親父、

ト松五郎灸をすゑる積りで腹へ突立て苦しむ。花道より佐五兵衞出來り、下手に窺ひゐる。お咲は灸をすゑると思ひ、

お咲　おやまあ、高が三里位に子供ぢやアあるまいし、何で聲をたてなさるのだ。
松五　それだといつて灸は嫌ひ、今があつい皮切りだ。あツつゝゝゝ。
お咲　そんなに三里はあついものかえ。
松五　いや、三里ぢやあねえ脇腹の左りせうもんから右へかけ、あつゝゝゝゝ。（ト苦痛を怺へる思入。）
お咲　ほんにお前も仰山な、ぢつと我慢をしてすゑさんせ。
松五　さあ、我慢はすれど、怺へられねえ、あつゝゝゝ。
お咲　そりやまあどんな灸でござんす。

ト へだての障子を明けて此方へ來る途端に、二枚折の屛風倒れ、松五郎腹へ短刀を突立て糊紅になり、苦しみゐるを見てびつくりなし、

えゝゝゝゝ、こりやまあ氣でも違うてか、何で腹を切らしやんした。
松五　なんでとは情ねえ、宗次郎樣を助けうと、おれが命を捨てたのだ。
お咲　そんならそれで死なしやんしたのか。
佐五　（內へ入りて、）樣子は門で聞いてゐたが、宗次郎樣を助けるとは、そりやまあどういふ仔細にて、
松五　おゝ父さんか、いゝ所へ歸つてくれた。宗次郎樣を助ける爲め死なにやあならねえ事情を、一通

り聞いて下せえ。（ト竹笛入りの合方になり、）おれが親父が森戸屋に若い時分勤めてゐた、その縁により地面内に長らく住つてお世話になり、忘れもしねえ七年後、おれが伊勢から上方を遊び歩いた留守の中、親父が死んでお袋一人、取り片附に困つたところ、お慈悲深い旦那様が二十五兩下すつて、それで後の仕末が出來、四十九日の餅までも世間へやつたは旦那のお蔭と、去年死んだお袋がや丶ともするとその話し、御恩送りをしてくれと、眼を瞑る時おれへの頼み、今日思はずも森戸屋の若旦那が、金故に死なうと覺悟のその所へ、丁度折よく出合つたは、こ丶で御恩を返せといふ亡き親達の導きと、極印金とも知らずして投込んだのが身の過り、その金故に若旦那へ難儀をかけては濟まねえから、一部始終を書殘し、身の言譯に死ぬ覺悟、どうで始終はこれまでの惡事に切られて死ぬ身體、千住の犬や品川の烏の餌食にならねえのが、何よりおれの身の仕合せ。さあ詳しく書いた書置を、上へさし上げ若旦那を、どうぞ助けて下さりませ。

〽思ひきつたる眼の中に浮む涙は水晶の、玉より淸き赤心に、今更何と言葉さへ涙呑込み、呑込んで、

トよろしく思入あつて言ふ、お咲は縋り泣き、佐五兵衛はこれを聞き思入あつて、

佐五　あ丶惡に强きは善にもと、あつぱれ見上げた松五郎どの、恩を知らぬは人ではない、よく覺悟を

さつしやつた。この書置を持參なし、若旦那をお助け申し、こなたに犬死させぬほどに、安堵して往生さつしやれ。

松五　えゝ忝い、それでわしも冥土へ行き、死んだ親父やお袋へ、娑婆の土産がござりまする。

トこの中お咲下手より庖丁を持つて來て、

お咲　その道連にわたしもとも〴〵、（ト死なうとするを留めて）

佐五　あゝこれ娘早まるな。

お咲　いえ〳〵放して下さんせ。わたしが爲めには弟のお主宗次郎樣へ疑ひかけ、この御難儀をかけたのも、元の起りは兄さんから貰うた金が紛失金、ぬしよりわたしが濟まぬ義理、どうぞ死なして下さんせいな。

佐五　あゝこれあぶない、待てといつたら待たぬかい。

松五　これ〳〵お咲、そりやあ惡い了簡だ。おれはこれまでした科に、長く此世にゐられぬ身體、かういふ事で命を捨てるは願つてもねえ身の仕合せ、手前は後で父さんの先途を見屆け、二つにやあ親兄弟もねえおれが間弔ひをしてくりやれ。

お咲　それぢやというてお前を先立て、どうまあ跡にゐられうぞいな。

佐五　死なうといふも尤もだが、若旦那への義理立ては松五郎どので濟んだれば、そちは存らへ後々の問弔ひが恩返し、必ずともに早まるな、それとも達て死ぬならば、おれもとも〳〵死なねばならぬ。
お咲　何でお前がとも〳〵に死ぬことがござんせう。
佐五　はて、聟や娘を先だてゝ、何で生きてゐられうぞ。親を殺すも殺さぬも、娘そなたの心一つだ。
お咲　すりや、死ぬにも死なれぬか、はあゝゝゝ。

〽言葉に否も言兼ぬる鴛鴦の片羽の片々に、
　　トお咲泣く。松五郎思入あつて、

松五　さゝ、暇どつてゐるところでねえ、ちつとも早く書置を代官所へ持參なし、若旦那をお助け申すが、何より肝要、
佐五　おゝ、いかにも、これから娘とゝもとも〳〵、事の仔細を申上げん。
お咲　そんならどうでも、
松五　達てと言はゞ是非がねえ、夫婦の縁もこれ限りだ。
お咲　えゝ。

松五　人でなしでも一旦の亭主と思はゞ生きながらへ、問弔ひをしてくりやれ。
お咲　それほどまでに言はしやんすなら、死ぬる命を存らへて、
佐五　若旦那をお助け申し、こなたの義理を立てさせませう。
松五　えゝ忝ねえ、その心なら少しも早く、
お咲　とはいへ、このまゝ、
佐五　見捨てゝ行くも、
トこれにて兩人是非なく、
松五　はて、人がましい身ぢやあなし、野末に晒す死人同然、おれに構はず代官所へ。
佐五　そんならこれから、
お咲　夜更けぬ中に、
ト兩人立上る、松五郎思入あつて。
松五　思へば深い親子の緣も、
佐五　聟や舅といふ間もなく、
お咲　緣短かき春の夜に、

松五　娑婆と冥土の別れ霜、
佐五　明日は消え行く、
お咲　この世の名殘り、（ト傍へ寄らうとするを）
佐五　あ、これ、
　〽船と堤はへだたれど、緣を引綱一筋に思ひ合うたる戀仲も、義理のしがらみ情のかせ杭、駕籠に比翼を引分けて、
　トこの中佐五兵衞お咲をへだて、兩人花道へ行く。松五郎はこれを見て安心したる思入、知せなしに道具斜に廻り、松五郎門口へ匐ひ出で、延上りて、
松五　父さん、
佐五　おゝ、
松五　お咲、
お咲　あい。
　ト松五郎ひよろ／＼と立上り、
松五　頼んだぞよ。

トにつたり笑ひ、たち〳〵と後へ下り、大卒塔婆へ打附かる、これにて流灌頂の二本の卒塔婆打違ひて十文字になり、これへ手をかけ留まる、これを見て兩人舞臺へ歸り、お咲泣伏し、佐五兵衛手を合せる。

〽心ごゝろに、

ト松五郎の腹より血流れ出で、佐五兵衛は念佛を唱へる、この仕組よろしく、三重本釣鐘にて、

幕

鑄掛松（終り）

（附錄）主なる興行年表

雪の對面

年時	座名	名題	椰の葉	十郎	五郎	朝比奈	近江	八幡	宇佐美	久須美
文久三年二月	市村座	蝶千鳥須磨組討（てふちどりすまのくみうち）	尾上菊次郎	澤村訥升	市村家橘	市川小團次	市川團藏	市川九藏	中村歌女之丞	坂東三津五郎
明治四十五年一月	明治座	吉例壽曾我（きちれいことぶきそが）	澤村源之助	坂東秀調	市川壽美藏	なし	市川左團次	市川小團次	中村明石	市川左喜之助
大正八年一月	市村座	はて珍しい雪對面（めづらしいゆきのたいめん）	尾上菊次郎	中村時藏	市川男女藏	坂東三津五郎	中村吉右衛門	尾上菊五郎	市川米藏	坂東玉之助

髪結藤次

年時	座名	名題	藤次	おむつ	竹門虎	千山	宗次郎	市兵衛	小助	神喜
文久三年二月	市村座	三題噺高座新作（さんだいばなしかうざのしんさく）	市川小團次	尾上菊次郎	市村家橘	市村家橘	澤村訥升	片岡十藏	市川九藏	市川團藏

明治三年一月	明治二十年四月	明治二十六年十月	大正十二年一月
中村座	市村座	淺草座	市村座
秀水仙海幸曾我	國性爺理髮姿見	三題噺高座新作	和國橋藤次
尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川九藏	尾上菊五郎
坂東三津五郎	岩井松之助	尾上多賀之丞	市川鬼丸
坂東簑助	坂東家橘	中村芝鶴	市川男女藏
嵐榮三郎	岩井松之助	不明	なし
尾上美雀	坂東秀調	市川紅若	尾上菊十郎
坂東龜藏	尾上松助	澤村訥子	大谷友右衞門
中村仲太郎	坂東家橘	不明	なし
大谷廣次	市川權十郎	澤村訥子	坂東彥三郎

時鳥殺し

年時	元治元年二月	明治三年三月	明治二十年二月	明治二十九年六月	明治三十三年六月	明治四十年六月	大正五年三月
座名	市村座	中村座	千歳座	春木座	東京座	市村座	帝國劇場
名題／役割	曾我綉俠御所染	往古模樣扇面縫	梅春俠客御所染	時鳥俠客御所染	曾我綉俠御所染	時鳥俠客御所染	早苗鳥淺間錦繪
時鳥	市村家橘	尾上菊五郎	中村福助	澤村訥升	市村家橘	尾上芙雀	初瀨浪子
小織之助	市村家橘	なし	中村福助	澤村訥升	市村家橘	尾上芙雀	松本高麗之助
切平	市村家橘	なし	坂東家橘	中村竹三郎	中村雀三郎	なし	なし
百合の方	市川小團次	撫子姬て演ず	尾上菊五郎	澤村訥子	市川壽美藏	中村駒助	藤間房子
撫子姬	尾上榮三郎	大谷廣次	尾上榮之助	中村銀之助	尾上榮次郎	市川英太郎	なし
巴之丞	中村福助	坂東三津五郎	坂東家橘	實川延鶴	中村雀三郎	尾上榮三郎	守田勘彌
しのぶ	坂東住女三	嵐榮三郎	岩井松之助	澤村國之丞	市川猿之丞	市川壽美藏	なし
彌惣太	市川米十郎	坂東龜藏	中村芝雀	澤村宇十郎	市川壽美藏	市川新十郎	松本小治郎
鐵玄	坂東又太郎	中村仲太郎	尾上松助	澤村宇十郎	中村勘五郎	尾上蟹十郎	松本小治郎

御所五郎藏

年時	座名	名題（役割）	五郎藏	土右衞門	おすぎ	與五郎	皐月	逢州	吾助
元治元年二月	市村座	曾我綉侠御所染（そがもやうだてしのごしよぞめ）	市川小團次	關三十郎	關三十郎	中村福助	尾上菊次郎	坂東三津五郎	市川小半次
明治三年三月	中村座	往古模樣扇重縫（これいもやうあふぎのしけぬひ）	尾上菊五郎	大谷廣次	なし	坂東龜藏	坂東三津五郎	大谷廣次	尾上梅五郎
明治二十年二月	千歳座	梅春侠客御所染（うめのはるたてしのごしよぞめ）	尾上菊五郎	中村芝翫	市川壽美藏	片岡我童	河原崎國太郎	岩井松之助	尾上松助
明治二十九年六月	春木座	時鳥侠客御所染（ほとゝぎすたてしのごしよぞめ）	澤村訥子	中村竹三郎	なし	實川延鶴	中村富十郎	中村高福	不明
明治三十二年三月	歌舞伎座	櫻時侠客御所染（さくらどきたてしのごしよぞめ）	尾上菊五郎	市川團十郎	なし	坂東秀調	中村福助	尾上榮三郎	尾上松助
明治三十三年十月	演伎座	御所五郎藏（ごしよのごろざう）	市村家橘	市川猿藏	なし	尾上菊三郎	尾上菊三郎	尾上菊次	不明
明三十三年五月	東京座	曾我綉侠御所染（そがもやうたてしのごしよぞめ）	市川猿之助	中村勘五郎	なし	市川染五郎	市川九女八	市川團吉	市川壽美五郎
明治三十八年三月	歌舞伎座	侠客御所五郎藏（をとこだてごしよのごろざう）	市村羽左衞門	市川高麗藏	なし	なし	尾上梅幸	尾上芙雀	尾上松助
明治四十年六月	市村座	時鳥侠客御所染（ほとゝぎすたてしのごしよぞめ）	守田勘彌	中村駒助	なし	坂東三津五郎	坂東秀調	尾上幸之助	市川新十郎
明治四一年十一月	市村座	御所五郎藏（ごしよのごろざう）	尾上菊五郎	尾上榮三郎	なし	片岡十藏	尾上芙雀	岩井粂三郎	市川新十郎
明治四十四年五月	明治座	御所五郎藏（ごしよのごろざう）	市村羽左衞門	市川左團次	なし	市川小團次	澤村源之助	市川門之助	市川段四郎
大正四年十二月	歌舞伎座	御所五郎藏（ごしよのごろざう）	市村羽左衞門	市川八百藏	なし	中村歌右衞門	澤村源之助	坂東秀調	片岡市藏

年時	大正六年七月	大正八年十一月	大正九年四月	大正十一年四月	大正十二年五月
座名	帝國劇場	歌舞伎座	市村座	新富座	市村座
名題	親讓御所五郎藏（おやゆづりごしよのごろざう）	侠客御所五郎藏（をとこだてごしよのごろざう）	曾我綉侠御所染（そがもやうたてしのごしよぞめ）	侠客御所五郎藏（をとこだてごしよのごろざう）	御所五郎藏（ごしよのごろざう）
	尾上菊五郎	市村羽左衛門	尾上菊五郎	市村羽左衛門	市村羽左衛門
	中村吉右衛門	市川左團次	大谷友右衛門	中村吉右衛門	尾上菊五郎
	なし	なし	大谷友右衛門	なし	なし
	坂東彦三郎	中村歌右衛門	坂東三津五郎	中村歌右衛門	坂東彦三郎
	尾上菊次郎	片岡我童	市川米藏	坂東秀調	尾上梅幸
	河原崎國太郎	中村福助	中村時藏	中村時藏	尾上榮三郎
	尾上松助	片岡市藏	中村吉右衛門	片岡市藏	大谷友右衛門

女定九郎

年時	慶應元年五月	明治七年七月	明治二十五年七月	明治三十五年六月
座名	中村座	奥田座	大坂角座	宮戸座
名題／役割	忠臣藏後日建前（ちうしんぐらごにちのたてまへ）	忠臣藏後日建前（ちうしんぐらごにちのたてまへ）	男成鳧女定九郎（をとこなりけりをんなさだくらう）	女定九郎（をんなさだくらう）
お市	市川小團次	山崎河藏	中村雁次郎	澤村源之助
庄左衛門	河原崎權十郎	奥田登美三郎	中村霞仙	坂東鶴之助
おかる	岩井紫若	市川團彌	澤村源之助	坂東勝太郎
おかや	市川米十郎	岩井粂次郎	市川家正	岩井松之助

以後小劇場に於て澤村源之助が度々演じたり

鳥目の上使

年時	座名	名題	根の井（岡部）	千壽（賤機）	小太郎（右衞門佐）	松ヶ枝（敷島）	紅梅（手越）	笹鶴姫（清見姫）
元治元年八月	市村座	一谷凱歌小謡曲（いちのたにがいかのこうたひ）	市川小團次	尾上菊次郎	中村福助	尾上榮三郎	坂東三津五郎	姉川源之助
明治六年三月	村山座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	河原崎權之助	市川門之助	中村壽藏	中村歌六	河原崎國太郎	市川女寅
明治十年十月	春木座	松三升小春蓬萊（まつさみますこはるのしまだい）	關三十郎	市川門之助	片岡我童	澤村百之助	市川女寅	中村鶴世
明治十六年九月	中村座	意中謎忠義書合（こころのなぞちうぎのかきあはせ）	市川左團次	市川團十郎	中村福助	尾上榮之助	中村鶴松	嵐珉子
明治二十一年五月	中島座	若葉實樹根井譚（わかばのみきねのゐのものがたり）	中村壽三郎	嵐大三郎	勝川又吉	市川壽	市川團之助	不明
明治二十二年六月	桐座	若葉實樹根井譚（わかばのみきねのゐのものがたり）	中村壽三郎	嵐冠十郎	勝川又吉	坂東三津之助	中村鶴松	不明
明治三十年三月	明治座	意中謎忠義書合（こころのなぞちうぎのかきあはせ）	市川左團次	坂東秀調	市川小團次	市川米藏	市川莚女	片岡龜藏
大正三年十一月	市村座	意中謎忠義書合（こころのなぞちうぎのかきあはせ）	中村吉右衞門	尾上芙雀	坂東三津五郎	河原崎國太郎	中村米吉	市川男寅
大正六年七月	帝國劇場	意中謎忠義書合（こころのなぞちうぎのかきあはせ）	中村東藏	藤間房子	澤村長十郎	水野早苗	村田美禰子 鈴木福子	草間錦糸

生立曾我

年時	座名	名題	重忠	鬼王	梶原	賴朝	満江	祐信	團三郎	時政	佐々木
慶應二年二月	守田座	富治三升扇曾我（ふじさみますすゑひろそが）	市川小團次	市川小團次	大谷友右衞門	大谷友右衞門	尾上菊次郎	關三十郎	市川左團次	關三十郎	市川左團次
明治五年一月	村山座	比翼鶴曾我千歳（ひよくのつるそがのせんざい）	坂東壽三郎	坂東太郎	澤村訥升	澤村訥升	坂東彥三郎	中村壽三郎	坂東家橘	坂東太郎	坂東家橘
明治六年十月	澤村座	幼稚裁彩猫蝶衢（をさなだちいろあのてふちざり）	中村壽三郎	中村壽三郎	大谷門藏	澤村田之助	澤村千鳥	實川延升	市川福太郎	市川左藏	市川福太郎
明治十一年一月	新富座	兒模樣曾我館染（ちごもやうそがのごしよぞめ）	市川團十郎	尾上菊五郎	中村宗十郎	中村宗十郎	岩井半四郎	中村仲藏	市川子團次	市川團右衞門	市川子團次
明治二十二年一月	市村座	扇富士蓬萊曾我（あふぎふじほうらいそが）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	坂東家橘	中村福助	中村福助	尾上松助	岩井松之助	市川壽美藏	坂東家橘
明治三十年三月	東京座	初開場曾我物語（はつかいぢやうそがものがたり）	市川團十郎	市川猿之助	市川八百藏	市川八百藏	市川女寅	市川壽美藏	市川染五郎	市川壽美藏	市川染五郎
大正三年一月	市村座	蝶千鳥蓬萊曾我（てふちどりほうらいそが）	中村吉右衞門	中村吉右衞門	坂東三津五郎	尾上菊五郎	尾上芙雀	守田勘彌	中村東藏	尾上榮三郎	中村東藏
大正八年一月	帝國劇場	扇富士蓬萊曾我（あふぎふじほうらいそが）	松本幸四郎	松本幸四郎	澤村宗十郎	澤村宗之助	初瀨浪子	尾上松助	澤村長十郎	尾上幸藏	松本錦吾

鑄掛松

年時	座名	名題	松五郎	文藏	佐五兵衞	おさき	宗次郎	おくみ	五郎兵衞	おせん
慶應二年二月	守田座	富治三升扇曾我（ふじさみますすゑひろそが）	市川小團次	關三十郎	關三十郎	尾上菊次郎	澤村訥升	坂東三津五郎	市川小文次	坂東玉三郎

明治五年九月	中村座	幸後月松影（さいはひのちのつきにまつかげ）	尾上菊五郎	中村芝翫	中村仲太郎	坂東三津五郎	尾上芙雀	岩井紫若	中村仲太郎	岩井紫若
明治三十一年四月	明治座	船打込橋間白浪（ふねへうちこむはしまのしらなみ）	市川左團次	市川權十郎	市川壽美藏	澤村源之助	市川米藏	澤村訥升	市川荒次郎	市川升若
明治四十三年五月	明治座	船打込橋間白浪（ふねへうちこむはしまのしらなみ）	市川左團次	市川高麗藏	市川小團次	澤村源之助	澤村宗之助	市川莚若	市川左升	坂東秀調
大正六年二月	市村座	船打込橋間白浪（ふねへうちこむはしまのしらなみ）	尾上菊五郎	中村吉右衞門	尾上松助	尾上菊次郎	守田勘彌	河原崎國太郎	中村東藏	尾上梅幸
大正九年一月	歌舞伎座	船打込橋間白浪（ふねへうちこむはしまのしらなみ）	市村羽左衞門	市川段四郎	中村傳九郎	片岡我童	なし	なし	中村鶴藏	中村歌右衞門

大正十三年十一月廿八日印刷
大正十三年十二月一日發行

『默阿彌全集第五卷』

非賣品

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

補修　河竹糸女

校訂
編纂者　河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者　武居菊藏

東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷所　日東印刷株式會社

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂